ネギまのたまご

凄い腹筋の蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギまのたまご

【Ｎコード】
Ｎ９３４６Ｓ

【作者名】
凄い腹筋の蛇

【あらすじ】
　未来に帰ったハズの超鈴音がたどり着いたのは、平行世界を管理するアシュタロスという魔神の部屋だった。数多くの介入者によって自分たちの世界が破壊されている事を知った超は、アシュタロスの力を借りて今一度過去に降り立つ。介入者たちから、自分の世界と大切な人達を守る為に。
※現在更新が滞っております。申し訳ありません。

宇宙の卵（前書き）

ここの超鈴音はネギま本編後です。アシュタロスはＧＳ本編の大戦を終え魂の牢獄から解放された後の、どこかの世界のアシュタロスだと思って下さい。

宇宙の卵

全てが終わって気づいてみると、超鈴音は見たことも無い部屋に倒れていた。

「ここは、何処ネ?」

見るからにおかしな部屋だった。広大な部屋いっぱいに棚が設置され、その棚には卵のような物が並んでいる。

「ようこそ、超鈴音。」

背後で突然声がした。驚いて振り向くと、そこには長身の男の姿。紫色の肌に銀色の髪、金の瞳は紛れもない魔族の姿。

「何者アルか!?」

バックステップして距離をとり臨戦態勢を取るが、魔族は笑って言葉を続けた。

「それも含めて、これから説明しよう。まあ、座りたまえ。」

魔族が腕を振るうと同時に目の前にテーブルと椅子が現れる。警戒しながらも超は席についた。

「私の名前はアシュタロス。見ての通り、魔神だ。」

そして、告げられる現実。あまりの衝撃に、超は愕然とした。

かつて超は荒廃した未来を変える為、過去に跳んだ。そこで目的を達する事は出来なかったが、精一杯の努力をし、納得いく結末を迎える事が出来た。そして、自分の世界に帰ろうとしたが…。

自分のいた世界は無くなっていた。

過去に介入したから変わったのでは無い、とアシュタロスは言う。超のせいではない、と。では何故消えたのか。

超鈴音以外にも介入する者が居たのだ。それも、何十人も。そして、その者達の手によって、世界は崩壊した。

「い、一体何者ネ、その介入者は。」

「異世界からの転生者さ。この平行世界を管理する私の目を盗んで、死者の魂を君の居た世界に送り込んだ者がいる。見たまえ。」

そう言って棚を指差す。

「この棚にある卵は宇宙の卵と言って、それぞれが一つの世界を形成している。そして、君の居た世界はあの棚だ。」

見ると、少しく離れた棚にくすんだ色をした卵が並んでいる。

「これは…皆、色が変ヨ。割れてるのもあるネ。」

「この棚は分類上『ネギま』と言われる世界だが、どうも他の世界で書籍化されているらしくてな。世界移行したがる者が多いのだ。そして、神の手によって異常な能力を得た介入者達は、それぞれ好き勝手に暴れて世界を壊滅させた。ここに並んでいるのは、そのなれの果てだよ。もう、卵はいくつも残ってないな。」

超の顔が怒りで真っ赤になる。自分が救おうとした世界を、そんな身勝手な連中に踏みにじられるなんて…。

「油断していた私も悪いのだ。神と魔の間で和平が結ばれた後、過激派神族の監視を怠っていたのだからな。そこで、私はこれから介入する予定の者を探し出し、一つの世界に誘導してまとめて無力化する事に決めた。」

「無力化…殺すのカ？」

「いや、まず能力を封じてしまうのが優先だ。殺す必要が無ければ殺さなくてもいい。
幸い、首謀者である神々はすでに神魔の最高指導者たちによって拘束されているから、これ以上介入者が増える事は無いだろう。」

そこまで聞いて、超はアシュタロスの言いたい事を察した。

「私に、その手伝いをしろ、ト？」

「そうだ。介入者の中には世界と共存できている者もいる。問題となっている者を選別し、能力を封じるのだ。難しい仕事だが、やってくれるか？」

「断っても帰る世界が無いしネ。それに私の故郷を潰した連中には報復もしたいシ…。勿論、手伝うヨ。」

その目は復讐に燃えている。あらたな目標が出来て、超は精気を取り戻した。

「結構。では、これから私の依頼を伝える。

一つ、危険な介入者の能力の封印。これに必要な能力として、相手の能力を見破る心眼を授けよう。封印した能力は君にも使えるようにする。つまりは、奪うのだ。

二つ、クラスメート達の強化。君のクラスメート達は多くが介入者たちによって慰み者になったり殺されたりしている。それに対抗するためだ。そこで、君には介入者から奪い取った能力や自分の能力を他者にも宿す力を与えよう。

以上だ。」

クラスメート達が…。親友のクーが…。超は一瞬、目の前が真っ暗になった。

「分かったヨ。私からも、お願いがあるけど聞いてもらえるかナ？」

「勿論。何だね？」

「私はネギ坊主との戦いで身体がボロボロになってるヨ。せめて、また魔法を使えるくらいには身体を元に戻して欲しいネ。」

「それは当たり前だ。安心したまえ、君に簡単に死なれては困るからな。充分な力を与える。あと、私も君と同じように世界を渡る。分身も君と同じクラスに置くつもりだ。アドバイザーとして、な。」

「分身？」

そう言って首を傾げると、アシュタロスの傍らに美しい女性が現れた。

「イシュタルと申します。宜しくお願いします。」

アシュタロスと同様に銀の髪をした背の高い女性。顔立ちは神々しささえ漂わせる。

「石田留美という名前で同じクラスに置く。私も教師の一人として学園に居る。すぐに助けが出来る体制は整えておくよ。」

「分かったヨ。私も、期待に応えられるように頑張るネ。」

世界を救う。何よりも、クラスの皆を救いたい。自分の戦いはまだ終わっていなかった。超は決意を新たに、まだ壊れていない宇宙の卵を見つめるのだった。

【能力解説】

超鈴音（ちゃおりんいん）

川神ボディ

『真剣で私に恋しなさい！』における川神百代の身体能力。瞬間

回復に加え格闘と気の扱いにおいて最高の素質を持つ。使いこなすにはかなりの鍛錬が必要。

心眼

周囲の状況を多角的に分析したり、介入者の能力を見抜く事が出来る。大まかな心理も読み取る事が出来るが、それにはかなりの修行が必要。

十二の試練

『ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』におけるバーサーカーの宝具。強力な抗魔力、物理防御の他、十二回の死からの自動蘇生。また、同じ攻撃で死ぬ事がなくなる。

封印

視界に入った介入者の能力を完全に封印する。封印した能力は自分に宿す事が出来るし、他の者に宿す事も出来る。

石田留美（いしだるみ）

原初への回帰

魔力を、その元となる原初の力に変換して、世界に帰す。自身に向けられたら魔法を分解する事も可能。

テレパス

念話の他に動植物ともコミュニケーションがとれる。

心眼・封印

前述の通り。石田のみ、魔法使いの魔法も封じ込める事ができる。

第一話　アシュタロスの仕事

【アシュタロス】

私がまず行ったのは、実体を持たない神の視点で介入者を探索する事だった。介入によって起きる時空震の中で一番古い物を特定し、それからずっと世界を監視し続けるのだ。神である状態では宇宙意志、世界の修正力に逆らえないので、歴史を変えるような大きな修正は出来ない。そういった大きな変革は現代で受肉して、神の器を捨ててからにする予定だ。

この世界に介入する者は、どうやら大まかに分けて三つのタイミングでやってくるようだ。一つは６００年前。吸血鬼エヴァンジェリンが吸血鬼化されて間もない頃だ。まずはここをチェックする事にした。

エヴァンジェリン吸血鬼化は変える事の出来ない歴史だ。これを変えると確実に世界の修正力がかかるだろう。そこで、この時代にやって来た介入者の能力を封印してエヴァンジェリンと接触させないようにした。ここに来る連中は不老不死を設定している者が多い。人の精神で長すぎる生を体験して狂う者が出るのだ。私は彼らの不死性を消し、人として死なせる事を選んだ。多くの介入者は世界に適応していたが、何人かは不用意に現代の知識をさらけ出し、魔女狩りの犠牲になって死んでいった。

次に、大戦時代。魔法世界において重要な、英雄ナギ・スプリングフィールドを生んだ時代である。ここに介入する者は攻撃に特化した物騒な能力を持った者が多い。だから、目立つ活躍をして自分から居場所をアピールしてくれる。単騎で敵陣に突入する者を無力

化し、そのまま的になってもらった。マトモな神経している者ならこの時代は選ばない。私が見逃した介入者は、医療面で多くの人命を救った者や戦争難民を助ける為に尽力した者のみ。戦争を楽しんでいた連中にはさっさと死んでもらった。

そして、現代である。

まず驚いたのは、この世界の中心人物であるネギ・スプリングフィールドに異常な数の兄弟が居た事である。それも、皆一緒の年齢だ。いくらなんでも１０人は無いだろう。魔族でも一度にそこまでは生まん。彼らは物語を知っている為に、村の襲撃以前に子供とは思えない行動をとる者が多い。多くは過剰な修行。それは別にいいのだが、村襲撃時に村に居ない者がほとんどなのだ。ネギを置いて。強い力があるのなら、悪魔と戦うくらいはしても良さそうだが。まあ、保身の為なのだろう。

村襲撃の際に森に逃げていた者の能力は封印し、介入前の超鈴音にストックさせた。

襲撃後、ネギと共に村に居た少女、アリア・スプリングフィールドだけは、ネギや従姉妹であるネカネを庇い石化された。どうやら彼女の目的は、多くの世界で殺されるネギを救う事らしい。彼女には先の介入者の一人が持っていた能力、『魔法無効化体質』を与えた。それにより石化は解除され、復活。全く、こんな能力あるなら戦えただろうに。

魔法学校卒業後、それぞれ卒業生は試験の為に世界各地に送られる。封印された者たちも、ネギと同じ才能を持っていたのか飛び級で卒業する事となった。ネギ以外の男七人は分かりやすい目的を持っている。エロだ。日本で誰を嫁にするかで喧嘩していた。

彼らには頭を冷やしてもらう意味で、南極の観測隊に入ってもらう事にした。周囲に反対する人間がいなかったは意外だった。

アリア・スプリングフィールドは予定通り日本でネギのサポート。彼女は村襲撃後、他の兄弟達から仲間外れにされていたネギの傍に尽きっきりだった。ネギの心が折れないように、ネカネと共に支えてきたのだ。彼女の願いは叶えてやりたい。

問題は、もう一人の女性、マリ・スプリングフィールドだ。彼女はどうやら幼なじみであるアーニャという人物に入れ込んでいるらしい。はっきり言えばレズだ。そして、アーニャ自身はそれを嫌がっている。

とりあえず、アマゾンで観光ガイドをしてもらう事にした。獰猛な生き物たちと触れ合って、立派なアマゾネスになってもらいたいものだ。

さて、次は麻帆良である。

後々2―Aに集まるメンバーに、確認できただけでも5人、不審な兄弟がいる事が分かった。その中で近衛木乃香の姉妹二人に関しては扱いに困ったが、力を弱体化するに留めておいた。彼女たちは、その置かれた環境上自己防衛の為に力を欲しているのかもしれないからだ。

その代わりと言ってはなんだが、近衛木乃香にそれ以上の能力を与えた。十二の試練と、剣術における天武の才能である。それと、介入者姉妹は京都に残した。後々修学旅行で京都に行くようだから、その時に敵対するか否か反応を見たいからだ。

他には長瀬楓の従兄弟。麻帆良大学の生徒だが、穏行術や透視など明らかに性的な目的を持った能力設定だった為、これらを封印。加えて異性に嫌われる呪いをかけた。

明石祐奈の兄も同様。催眠術で妹のファザコン気質をブラコンに変えようとしていた。そこで同じように能力を封印して異性に嫌われる呪いをかけた所、妹から強烈に嫌われ、何故か父親からも嫌われ、男子学生寮に引きこもる事となった。

最悪だったのは椎名桜子の兄だ。ヤツが介入した直後に能力を見た所、『身体を重ねた相手から能力を奪う』『触れた者の心を操る』という外道極まりないものだった。それも、介入直後に妹を襲おうとしたのだ。

不能にして、無能にして、なおかつ考えてる事が顔に出るようにした。結果、周囲の人間から軽蔑され麻帆良学園外の全寮制男子校に送られる事となった。

教師では現時点で介入者は見受けられない。が、途中採用で入るものもいるだろう。その者たちを見極めるのは、超鈴音と分身に任せるつもりだ。

さあ、これで準備は整った。

私も人間となって世界に介入しようではないか。

【超鈴音】

もう、呆れたネ。

見慣れた女子寮の部屋で目を覚まして能力ストックを確認したラ…。介入者って馬鹿ネ？自分で努力しないで他人の能力使う事ばかり考えてるヨ。直死の魔眼？そんなに人殺ししたいカ。幻想具現化？妄想の間違いかナ？あげくの果てには楽をする為他人から何かを盗む能力が山ほど。こんな連中、絶対にクラスの皆に近づけないネ！

私も確かに能力の恩恵を受けていル。十二の試練なんていらなかったけど、これから馬鹿共の相手をしないといけないから、仕方ないと受け入れタ。けど本当は自分自身の努力で身につけた力じゃないと意味ないヨ。

ただ、この川神ボディは私だけでなく皆の為にありがたかっタ。危険な目にあう人達には強い力になル。努力して鍛えないと、ただの丈夫な身体だから日常を滅茶苦茶に壊す事もないネ。早くクーや葉加瀬、五月に宿してあげたいヨ。葉加瀬、きっと喜ぶネ。研究時間倍増カナ？

【石田留美】

マスターから授かったテレパス能力。世界樹と協力関係を築いて来い、という事なのでしょう。この学園は世界樹に依存しすぎです。ここさえ抑えたら学園を掌握できる、そんな危なっかしい体制をよく続けていられますね。

早速世界樹さんと交信してみた所、色よい返事をいただきました。どうも世界樹さんも無理やり自分の力を吸い上げられ続けて頭にきていたようです。魔法使いたちの能力を封じたり、無駄使いされている魔力を分解して世界樹さんに戻すかわりに、こちらの指示したタイミングで学園への魔力供給を増減してほしいと頼みました。い

つか、世界樹が私のコントロール下にあると学園側に思わせて交渉材料にする為です。

ふふふ、超さんは以前魔法を世界にバラそうとして失敗したそうですが、学園への魔力供給カットすればそれだけで成功しそうです。認識阻害結界さえ消せば世界中に知れ渡りますからね。まあ世界樹さんの迷惑になりそうなのでやりませんが。今の所は…。

第二話　ネギ先生とアリア先生

「ねえ、見て見て！凄く速いわよ！」

電車の中、窓の向こうを指差してはしゃぐ赤毛の少女。その隣で、少年は不安な顔をしていた。

「何？まだ暗い顔してるの？ほら、元気出して！教師として頑張らないといけないんだから。」

「だって、兄さん達の事を考えたら心配で…。」

赤毛の少年、ネギ・スプリングフィールドはそう言って姉のアリアに弱々しく抗議する。アリアは少しきつい表情で言い放った。

「いい気味よ。ネギを仲間外れにしたバチが当たったんだわ。」

「なんでネカネお姉ちゃんは止めなかったんだろう。僕の事は心配してくれたのに…。」

「そりゃ、会う度に胸とかお尻揉まれちゃ庇う気になれないわよ。あんな奴ら、ペンギンにでも欲情してればいいんだわ。」

欲情の意味が分からないネギは、ペンギンと遊ぶ兄たちを思い浮かべた。凄く、楽しそうだった。

「いいなぁ…。」

「いいの！？」

そんな馬鹿な話をしていると、車内アナウンスが聞こえてきた。

『次は麻帆良学園中央駅、麻帆良学園中央駅です。お降りの際はお足下にご注意下さい』

そして、停車と共に開く扉。沢山乗っていた学生たちが我先にと車両を降りて行く。

「ほら、行こうネギ！競争するわよ！」

「わ、わ、待ってよお姉ちゃん！」

二人も急いで車両を降りて、改札を抜ける。そして、駅を出て広がる世界。目の前には、ヨーロッパ風の街並みと情緒あふれる路面電車、そしてそれを台無しにする…

人、人、人。時折バイク。

「な、何よコレ！実際見ると迫力違うわね！？」

「うわー、日本って凄いや…。」

登校する生徒が皆、ありえないスピードで走り抜けて行く。アリアとネギも遅れないように身体強化の魔法を使って人の波に紛れて行った。

二人とも、兄たちほどの成績は残せなかったものの優秀な魔法生徒である。基本的な魔法はほとんど覚えていた。身体強化も、一般人のレベルからかけ離れないように調整してある。しかし…。

「ちょっと遅刻気味かも…。スピード上げる？」

「だ、ダメだよ、これ以上は変に見られちゃうよ。」

アリアの教育によって、ネギは魔法の秘匿意識が高くなっていた。もっとも、兄たちが所構わず魔法を使って大人に怒られていたのを見たから、というのもある。

ちょうど、そんな会話をしていた時の事だ。前方を走る女子生徒二人のうちの一人が、大声で叫んでいた。

「高畑先生高畑先生高畑先生高畑先生……ワンッ！」

「あはは、アスナ、高畑先生の為なら何でもするわ。」

「殺すわよ！」

ツインテールの女子の横顔がチラッと見えた。それは、どことなくネカネを思わせる顔立ちだった。

「えーと、次は逆立ちして開脚のうえ、グルグル回って空を飛ぶ…。」

「できねえ！」

一緒にいる女子は黒髪の日本美人。おっとりした表情が、やはりネカネを思わせ…どうもネギはホームシック気味なのかネカネを連想しがちなようだ。

「ね、ねえ、お姉ちゃん。あの左の人…、失恋の相が出てるよ。どうしよう…。」

「いい？間違っても教えちゃダメよ。」

「え、なんで？」

「恋は、女を成長させるの。失恋なんて、凄い成長するわ。だから、せっかくのチャンスを駄目にしないように、黙ってるの。」

「成長？背、高くなるかな？」

「もう、グングン伸びるわ。２メートルとか。」

「ふわー、凄いや。」

そう言いながら走っていたら、前を行く二人にぶつかった。いや、立ちふさがっていたようだ。

「あ、ん、た、た、ち～！」

「「ひぃぃ！」」

思わず抱き合う二人。鬼だ、鬼がいる。

「あかんえ、二人とも。アスナ、地獄耳やから。」

「ちょっと、そこ？指摘するとこ、そこ！？私、ひどい事言われたのに！」

アスナと呼ばれた女子が、こちらを睨みつける。アリアはすぐさま姿勢をただし、頭を下げた。

「いきなり失礼な事を言ってすみませんでした！ほら、ネギも謝って！」

「あ、あの、ごめんなさい！」

二人が勢いよく謝ると、アスナは少し戸惑った後に一つため息をついて言った。

「まあ謝ってくれたから許すけど。私、そういうの気にする方だから冗談でもそういうの止めてね？」

「はい、すみませんでした。」

ちゃんと謝ったからだろう、アスナの態度は柔らかく、機嫌も直ったようだった。

「あ、もしかして二人ってスプリングフィールド姉弟？私たち噴水前まで迎えに行く予定だったんだけど。」

「はい！アリアです、アリア・スプリングフィールドです！」

「ネギ・スプリングフィールドです！よろしくお願いします！」

揃ってお辞儀すると、アスナたちはニッコリ笑って自己紹介する。

「うちは、近衛木乃香。このかって呼んでや。」

「私は、神楽坂明日菜。アスナでいいわ。」

原作では、ケンカが起きるハズのシーン。アリアは、友好的な出会いが出来てホッと胸をなで下ろした。

しかし…一つ気になる事があった。

木乃香が、ローラーブレードを履いてないのだ。

あのスピードを、普通に走って？

なんとも言えない違和感を覚えながらも、アリアは二人に案内されるままについていった。

【アシュタロス】

芦優太郎、教師。中々に感慨深い響きだ。世界に介入するにあたって、スプリングフィールド姉弟が来る五年前から大学生としてスタート、普通に教職課程をとってみたが。

ははは、面倒くさかったぞ！

麻帆良学園に普通の教師として採用されるのは中々に骨が折れた。実家を財閥に設定していたので、そこらへんをチラつかせて何とか採用された形だ。これで、私は一般人として振る舞う事が出来る。

我が分身、石田留美もまた、一般人の家庭の出として設定している。成績を常にトップにせよと命じた所、超鈴音と共に全科目１０

0点という結果を残し2－Aに配属された。どうもこのクラス、何かに突出して初めて配属されるようだ。

教師として、私は2－Cを担当。科目は世界史と日本史だ。2－Aはあの姉弟が担当する。私の立場は、一般人の常識で彼らにアドバイスする他、介入者とここの魔法先生達が一般人を巻き込まないように目を光らせる監視役だ。どうにもここの連中は理念狂いの危なっかしい者が多い。目的の為なら手段を選ばない姿勢は嫌いではないが、超鈴音のクラスメートたちが被害を受けるのは避けたい所だ。

今の所、教師陣で介入者は三名確認している。ここからは、超鈴音たちの判断を優先しよう。はたして、彼らは危険な介入者だろうか？

【超鈴音】

とうとう、この日が来たヨ。この世界のネギ坊主との初顔合わせ…。今回は姉もいるとか。まともな介入者らしいが、油断は出来ないネ。

結局、この日までに川神ボディを与えたのはクーと葉加瀬だけ。五月は、疲れ方や身体感覚が狂うと味覚や料理の感覚に支障が出るという理由で断ったネ。全く、本当に真面目だヨ。葉加瀬にしても、研究所に入ってきた泥棒やスパイに対処できればそれでいいと、鍛錬には見向きもしない。クーも、私と同じ風景を見たい、一人異常な体質を抱えて寂しい思いをさせたくない、という理由。自分勝手な欲望は無いのかナ？ちょっと、眩しすぎて涙出たヨ。

それはともかク。

今日の顔合わせ、介入者もトラップがあるの、知ってるハズ。その後の展開で、アスナとネギ坊主の仲がこじれる事もネ。その展開が変わっていたラ？ふふふ、これは、私たちオリジナルからの挑戦状ヨ？さあ、ゲームの始まりネ！

【石田留美】

全く、マスターも抜けています。芦優太郎なんてストレートな名前で教師なんてやってたら、介入者に警戒されかねません。私たちの事が平行世界で書籍化されてる可能性に気づいてないのですから。そんなんだから、横島などにおくれをとるのです。まあ、面白いから放っておきますが。

私は超鈴音のアドバイザーですが、普段はなるべく無関係を装っています。協力関係にあると知れると、学園側から警戒されかねませんからね。連絡は念話でとってます。

交友関係は広くないんですが、強いて言えば長谷川千雨さんでしょうか。長谷川さんはこの学園の非常識さにイライラしているらしく、それを逐一指摘しては一人でブツブツ言っていました。そこで私が、

「異常なのは知ってます、いちいち突っ込まないで黙ってて下さい。不気味ですよ。」

…と言った所、ケンカになりました。それ以来、何故か懐かれてし

まったのです。人間って変ですね。

まあ、非常識の塊のような真帆良です。彼女との口ゲンカの火種には事欠かないでしょう。今日も朝からブツブツ言うことになるんでしょうね。さぁて、どうやってからかってあげようかしら。

朝のＳＨＲ。新任の教師が入ってくるのを心待ちにしているクラスの生徒たち、仕掛けられた罠。扉に挟まれた黒板消しは今か今かと来訪者を待ち構えていた。

「きた、きた…。」

罠を仕掛けたちびっ子の鳴滝姉妹がほくそ笑む。そして、ガラッと開けられた扉、落ちる黒板消し。

瞬間、ピタッと止まって…。

ポフッ！

入ってきた子供の頭に落ちた。

「わっ！？」

子供はそのまま足元のロープに引っかかってよろける。バケツに足を突っ込み、オモチャの矢を尻に受け、教卓に頭から突っ込んだ。

「「「あはははははは！！」」」

クラスに爆笑が巻き起こる。しかしここで原作と違う動きをする者が一人。アスナだ。「ちょ、ちょっと、やりすぎよ！相手、子供なのよ！？」

その言葉にハッとする皆。見ると、そこには頭をチョークの粉で真っ白にしたアリアの姿が。

「う、うえぇぇぇん！」

「わーっ！ごめんね、ごめんね！！」

慌てる一同。ネギも姉に駆け寄って慰める。そんな騒動の中、超はアリアの表情を見てほくそ笑んだ。

混乱している。泣き真似もロクに出来ないほどに。きっと、彼女は魔法障壁を消してネギの代わりに黒板消しを受けようとしたのだろう。しかし、黒板消しは止まった。超が止めたのだ。そして、混乱要素がもう一つ。本来疑ってかかるハズのアスナが気づかないで、アリアの心配をした。原作からかけ離れている。

（留美、この騒動で想定外のリアクションをとった者はいたカ？）

（いえ、皆予想通りですね。）

念話で確認をとる。介入の仕方で一番分かりにくいのが憑依タイプ。これはどのタイミングで入ってくるか分からないので絶えず注意が必要だ。全員を視界に入れやすい後ろの席にいる石田が、毎朝クラスメートに異常な能力が発現していないかチェックしている。もっとも、本編の始まった今から憑依してくる者など居ないだろう

が。

教室の皆に落ち着きが戻ると、子供二人は教卓の横に並び自己紹介を始める。そして始まる質問攻撃、喧騒。カオスに包まれた教室で必死に受け答えをするアリアを、超と石田は注意深く見つめるのだった。

その日の昼休み。いつものように午後の授業をサボろうと家路につくエヴァンジェリンの前に、一人の男が立ちふさがった。

「なんだ、貴様？」

「俺か？俺は、お前を救いに来たのさ。お前の封印を解いてやる。」

自信満々に答える男。その態度に、エヴァはイラついた。今日は従者の茶々丸が買い物で居ない。自分で排除しなくてはいけなかった。

「消えろ。今の私は機嫌が悪い。」

「おいおい、封印解いてやるって言ってんの。分かってるのか？」

余りのしつこさに我慢の限界がきた。エヴァは右手に魔力を集中させ、威嚇する。

「これで最後だ。消えろ。」

「おー、怖い怖い。封印でそれしか魔力が使えないなんて可哀想に。解いてやるからさ、俺のものにならねぇか？」

エヴァの手から、衝撃波が放たれる。男は何やら気のようなものを纏い、迎えうつが…。

ドガァァン！

突然纏っていたものが消えて、衝撃波をマトモに受け昏倒した。

「な、なんだ？コイツ、こんなに弱いくせに大口叩いてたのか？…とりあえず、記憶を消しておくか。」

その光景を遠くで見つめていた超と石田は、ため息をついていた。

「介入者の男たちは、モテずに死んだ悪霊か何かカ？あまりに行動が低俗で悪質ヨ。女の事ばかりネ。」

「悪霊退治はゴーストスイーパーの仕事なんですけどねえ。」

道に置き去りにされた男から奪い取った能力は、皮肉にも『文珠』だった。

第三話　ほのぼの吸血鬼

怒涛の1日が終わり、ネギとアリアは職員寮に帰りついた。アリアがメルディナ魔法学校を出る際、校長をしている祖父に頼んで早めに取ってもらった部屋だ。日本に慣れるために、予定より前倒しで来日したいと無理を言った。結果、麻帆良学園長の目論見の一つ、生徒と同居という事態を免れる事が出来たのだ。

「ふー、やっと寝れるわね。歓迎会は嬉しかったけど、私たちが子供って事忘れてるでしょ、アレ。」

「うん…そうだね…。」

見ると、ネギは頭を揺らしながら目をシパシパさせている。

「ネギ、もう寝なさいよ。明日は早めの電車に乗るからね。」

「うん。おやすみ、お姉ちゃん…。」

パジャマに着替えて、ネギはベッドに入る。アリアは毛布を肩までかけてあげると、ネギを起こさないように寝室を出る。キッチンのテーブルの上に荷物を並べ、明日の用意を始めた。

「しかし、予想外もいい所だわ。生徒が一人多いし、原作と展開違うし。あの石田って子も、転生者なのかしら?」

頭を抱える。自分は、ネギに立派な大人に育って欲しい。その邪魔をする者がこの世界には多すぎた。出自の不明な謎の兄弟たち、英雄を押しつける大人たち。

自分がネギを守るんだ!

そんな意気込みで日本にやってきた。しかし、朝のＳＨＲで新たな敵が現れたのだ。あの黒板消しの一件。あれは明らかに自分に対する挑発だ。

「石田さん…要注意ね。」

今一番怪しいのは彼女。アリアは明日の準備をしながら、計画を修正する事にした。

「早めに接触して、協力を仰がないと。」

開かれた生徒名簿のコピー。そこには、小さな顔写真と高畑先生が残したメモ書きが。

『困った時に相談しなさい』

アリアは祈るような気持ちで、不機嫌そうな少女の顔写真を見つめるのだった。

【石田留美】

朝。同居人のザジ・レイニーデイさんと共にシリアルを食べて登校し、教室でクラスメートのチェックを行います。うん、今日も憑依者は無し。平和って素晴らしいです。

しかし、なんでしょうね。朝からアリア先生の熱視線を感じます。私、何かヘマしましたか？いやそれは無いハズです。では…恋？いや、まさか。しかしこの私の美貌ならばあり得ない話では……そ

こまで考えて気がつきましたよ。歴史に登場しない人物といえば私も同様でした。もう、これではマスターを笑えないじゃないですか。仕方無いから自分で自分を笑いますよ。

あはははははははははは！

【超鈴音】

何やら留美が壊れてるネ。念話を通そうとしたら爆笑が聞こえてきたカラ慌てて切ったヨ。

今日は朝から日課にしているクーとの組み手を終え、介入者探しをしながら登校しタ。生徒には今の所不審者はいないっぽいヨ。ただ、教師にはアシュタロスの言った通り怪しい奴がいたネ。昨日無能にした男の他に二人。

一人は他者の能力をコピーする怠け者。どんな魔法具でも作れるという狸ロボット真っ青な能力も持っていタ。勿論、封印したヨ。

もう一人は、お馴染みの十二の試練に投影魔術、直死の魔眼。ただの人殺しネ。身体能力もよくわからないＥＸというランクにされていたヨ。仕方ないから全ての能力を封じ込めてから身体能力を最低に設定しなおしタ。

二人とも、教師としてここにいるんじゃないのかナ。初心を取り戻して勉学に励むといいヨ。

さて、ここまで回想していたラやっと留美から念話が。

（すみません、私、どうやらアリア先生からマークされているようです。）

（心配ないヨ。予想通りネ。）

…今更マークされてる事に気づくあたり一抹の不安はあるけド…まあ大丈夫ヨ。

（直接動くのは私の仕事ネ。留美はのんびりしてるといいヨ。）

（ありがとうございます）

【エヴァンジェリン】

私はとても不愉快だった。

どうも最近、周囲の人間の視線が気になる。この間の阿呆もそうだが、自称正義の魔法使いたちの動きが活発なのだ。監視体制も強化された。やはり、英雄の息子たちがやってきて興奮しているのだろうな。

平穏は長くは続かない。

いつも誰かに狙われる。

この学園にやってきてからはいいように利用されるだけ。

これの、どこが最強の魔法使いなんだか。

いつものようにサボりたかったが、襲われる危険があったので今日は普通に授業を受けた。自分だけなら平気だが、今日は従者の茶々丸がいる。結構な人数の視線を感じるから、茶々丸では対応しきれん可能性がある。確かに茶々丸は人形かもしれんが、私の家族なのだ。傷ついて欲しくはない。

下校の時刻。殺気すら感じる。これは一戦覚悟しなければならないか。そう思って校舎玄関を出ると、見慣れない先生が声をかけてきた。新任か。

「すまない、この店に行きたいんだが道が分からないんだ。教えてくれないか？」

長い髪を後ろに束ねた、長身の男。掘りの深い顔つきはギリシャの彫刻を思わせた。

その男の差し出したチラシには、うちの近所の雑貨屋が記載されていた。

「ああ、ここなら知っている。この手前の道を南…右手の方へ道なりに進めば、森林公園のエリアに入る。この店はそのエリアの中心地にあるぞ。」

「そうか、ありがとう。助かったよ。それじゃ、また！」

シュタッと手を上げ、爽やかに去って行く。…左手の方向に。

「ちょ、ちょっと待て！方向が違う！」

「マスター、これは方向音痴というモノではないでしょうか。」

「アホか、ちゃんと行き先を手で案内したのに逆行くのは方向音痴ってレベルじゃないだろう！あ、コラ待たないか！」

慌てて呼び止める。仕方ない、ここは私が一緒に行ってやろう。どうやら魔力も持たない一般人らしい。コイツが一緒なら、さすがにアイツらでも手出しはしないだろう。

【アシュタロス】

ふむ、やはり彼女は人がいい。道案内を買って出てくれた。隣にいるのは例のガイノイドか。

「すまないね。ここは広すぎて、いまいち把握できないんだ。」

「貴様なら地図を逆さまに持てばたどり着けそうだけどな。」

はっはっは、殺してやろうか。

大人げない事を考えていると、何やら視線が。視界の端に、小さな影。あれは、アリアではないか。こちらを見ながら、戸惑っているようだ。エヴァとの接触をはかってるのだろうか。

「おや、アリア先生ではないですか。どうしました？」

私から声をかけると、彼女はビクッと肩を震わせる。

「あの、楽しそうにお話されてるのでどうしたのかなって…」

「ああ、これから雑貨屋に案内してもらうんです。良かったらご一緒しませんか？」

「いいんですか？」

彼女は私とエヴァ、茶々丸を見て言った。ああ、エヴァは面倒くさがるかもしれない。

「別に構わないぞ。帰り道だしな。」

意外だな。いや、弾よけとしては最適か。英雄の娘なのだから。

「じゃあ、お願いします。ちょうど、買い物しなきゃいけなかったので。」

アリアはそう言って、私たち　の後についてきた。

周囲の殺気が、困惑と諦めに変わる。残念だったな、正義の使徒よ。そんな事をしている暇があるなら明日の授業の準備でもしていたらどうだ。

【アリア】

誰ですか、芦優太郎って！あんなキャラ居ましたっけ？転生者？

でも魔力はみじんも感じないし、魔法先生リストにも載ってないし。ここまでイレギュラー続きだと、誰が転生者か分からなくなってきますね。

成り行きで同行する事になりましたが、おかげでエヴァさんと接触出来たので良しとしましょう。エヴァさんも何故か機嫌良さそうですし。

道すがら、いろいろお話させてもらいましたが、芦先生は本当に関係者ではないようです。エヴァさんが、「闇の福音を知ってるか？」と聞いた時は焦りました。が、芦先生は困ったような顔をして「すまない、サブカルチャーには疎いんだ。少女漫画のタイトルかい？」と答えたので安心したみたいです。「いや、なんでもない。忘れてくれ。」と言った横顔は、満足そうに微笑んでいました。

芦先生の目的地、雑貨屋『ほのぼの』は森林公園の中心にありました。大きさはコンビニ二つ分くらい。食品から日用品、ファンシーグッズまで様々なジャンルの商品が所狭しと並べてあります。芦先生は「マグネットやクリップが欲しくてね。学校にあるやつは使い勝手が悪いんだ。」と文具コーナーを覗いていました。エヴァさんも一緒に店に入りましたが、ずっとぬいぐるみコーナーにいます。「意外と可愛いの置いてあるな。」と言ってましたが、可愛いのはアナタです。私ですか？タオル類をいくつか。ネギが飲み物よくこぼすんですよね。

芦先生は、私の分も一緒に買ってくれました。「君たちはまだ子供だからね。甘えられるうちに甘えておきなさい。」ですって。うわぁ、私の中で芦先生の株はうなぎ登りですよ。その言葉を聞いてエヴァさんがぬいぐるみを沢山抱えてきたのにはビックリしましたが。アナタ、６００歳のいい大人でしょ！苦笑いしながら買ってあ

げる芦先生が、眩しいです。

買い物を終えると、芦先生は私たちに礼を言って、そのまま去っていきました。何だか、空気読めすぎてませんか？エヴァさんは茶々丸さんに、「ちゃんと帰れるか心配だな。」と言ってました。キャラ違いすぎです。ちなみに茶々丸さんはオモチャの指輪を買ってもらってました。…私はタオルですが、何かに負けた気がしてなりません。そんな事を考えていたら、エヴァさんが私の方を向いてこう言いました。

「では、今度はお前の用件を聞こうか。英雄の娘、アリア・スプリングフィールド。家が近いからな。話はそこで聞こう。」

さあ、これからが本番です。気を引き締めていきましょう！

森の中、人気のない場所にエヴァンジェリンの家はある。パッと見、ログハウスだが、電気関係の設備に関してはかなり整えてある近代的な家だ。木造の、何でもないような扉の木目の隙間に、茶々丸がカードを差し込む。ピッという音がして、ロックが外れた。

「入れ。この中なら外部から覗かれる事も盗聴の心配もない。」

エヴァンジェリンはそう言ってアリアを招き入れる。アリアは緊

張しながら、家の中に足を踏み入れた。

リビングに通されたアリアは、まず自己紹介をした上で、エヴァンジェリンに頭を下げた。

「私の父が、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。」

意外な展開にエヴァンジェリンも焦る。まさかいきなり謝られるとは思わなかったのだ。

「封印の件か？それならお前自身のせいではないだろう。頭を上げろ。」

「はい…。」

「しかし最近多いな。私の封印をネタに取引きするのが、流行ってるのか？」

「は？」アリアが固まった。

「いや、この間も私の封印を解く代わりに自分のモノになれと言って来た奴が居たのだ。まあ、余りにしつこかったからぶちのめして記憶を消してやったがな。」

アリアは慌てる。転生者だ。確かに学園での後ろ立てとしてはエヴァンジェリンは持ってこいの存在。皆、考える事は一緒なのだ。

「いえ、私は見返りなどいりません。三年という約束を破った父の代わりに封印を解きに来ただけですから。」

アリアは、まず信頼を得る事を優先した。

「それは確かに有り難いが…。出来るのか？言ってはなんだが、この登校地獄は異常な力でかけられたから普通の魔法使いには解除できないぞ？力を封印されているとはいえ私ですら解けないんだ。」

「ちょっと、見せてもらっていいですか？」

アリアはエヴァンジェリンの身体をじっと見つめる。

「言いにくいのですが、封印は二つかかってますね。登校地獄、そして封魔結界の変則型です。外に出れないだけでなく学園内でほとんど魔力を行使できない状態にする物です。これは私の父がかけたと思えないくらい丁寧にかけてありますね。」

「クッ…やはりか。あのクソジジイ、やってくれるじゃないか！」

殺気が膨れ上がる。これまでの穏やかな表情が嘘のように禍々しく目元を歪めた。アリアも、剥き出しの殺気なんて今まで体験した事はない。怖かったが、必死でこらえてエヴァンジェリンを抱きしめた。

「な…！？」

「落ち着いて下さい！私が、解きます！私が絶対解きますから！！」

呆気にとられる。エヴァンジェリンはいきなり抱きしめられ戸惑い、怒りを忘れた。そして、アリアの身体の震えに気づくと冷静さを取り戻した。自分は、こんな子供を怖がらせて何をやっているんだ…。エヴァンジェリンは、アリアに抱きつかれるままにした。そして、忘れていた感覚を思い出す。最後に抱きしめられたのは何百

年前だろう？エヴァンジェリンの目元に何かが滲んだ。

「わ、分かった。だから、落ち着け。」

それはもしかしたら自分に向けた言葉だったのかもしれない。アリアも、その言葉を聞いて落ち着きを取り戻す。ゆっくり離れると、深呼吸してエヴァンジェリンに向き合った。

「興奮しすぎだ、お前も。」

「すみません」

お互いに笑いあった。それまでオロオロしていた茶々丸も、ホッと胸をなで下ろす。

「で、どうなんだ？解けそうなのか？」

「登校地獄の方はすぐにでも解けます。学園のかけた方は少し時間がかかりますが、それも2日くらい時間を貰えれば解けます。」

「ふむ…。」

エヴァンジェリンは考え込む。学園がかけた方の封印を解いたら、おそらくすぐジジイ共にバレる。ただでさえ周囲が慌ただしいのに、今まで以上に厄介事が増えそうだ。

「とりあえず、今は登校地獄だけでいい。余計なトラブルを招きかねんからな。もう一つの方は、ジジイと交渉してからだ。」

アリアは頷くと、早速魔法陣を展開する。

「世の理を紡ぐ精霊よ、この者を縛る楔を砕き、解き放て　封印解除」

エヴァンジェリンの身体の周りを真っ白な光が包み込む。そして、ガラスが割れたような音を立てて光が砕け散る。光の欠片は、そのまま空気に溶けて行った。

「ふ、ふはははは！解けた、解けたぞ！あの忌々しい身体の重みが消えた！」

エヴァンジェリンが喜び高笑いを始めると、茶々丸は感慨深げに呟いた。

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに…」

アリアも、満足そうに頷いて…。

倒れた。

「ははは！これでリアルタイムで花丸マーケッ…って、おい！大丈夫か、　アリア！？茶々丸、アリアをベッドに運べ！」

「はい、マスター！」

薄れゆく意識の中、アリアはネギの事を考えていた。これで、エヴァンジェリンがネギの血を狙う動機がなくなった。駆け引きなんて必要なかったのだ。

これで、いい。それにしても…

（クソ親父、なんて魔力で封印したのよ！もし会ったら、半殺しじゃすまさないんだから！）

第四話　石田留美の憂鬱

アリアがエヴァンジェリンの家を訪れていた頃。ネギは自分の仕事を終えて帰宅するところだった。

「今日はお姉ちゃん、買い物で遅くなるんだよね。夕飯は何時になるのかな？」

そう思って携帯電話を取り出そうとすると、視界に奇妙な光景が飛び込んできた。

広場に続く大階段、その端を、めいっぱい本を抱えた女子生徒がふらつきながら降りてくる。そして、突風で煽られて…

「危ない！」

咄嗟に持っていた杖を使い、魔法を発動させる。風の魔法は、落下する女子生徒を優しく包み込んだ。そして、急いで落下地点に走り込んだネギが、その女子生徒をしっかりと受け止めた。

「大丈夫でしたか？」

「は、はい、ありがとうございます～。」

見ると、それは自分のクラスの宮崎のどかであった。

魔法を発動させてしまったネギは慌てて今の現象を誤魔化す。宮崎のどかはパニックになっていたようで、今何が起きていたのか分からなかったようだ。ネギの説明に、なんとなく頷く。ネギは安心

して、周囲に目を向けた。すると、視界の中に見知った顔があり、ジッとこちらに視線を向けている。

階段の上からこちらを見下ろす、黒髪の女子生徒。近衛木乃香であった。

「あ、あ、のどかさん、用事が出来たので失礼します！」

「あ、ネギせんせ～！？」

見られた！魔法を見られてしまった！ネギは急いで階段を駆け上がる。木乃香はキョトンとした表情でネギを迎えた。

「どうしたん？ネギ君、顔真っ赤やん。」

「あ、あの、今の見ました？」

「今の？ああ、凄い風吹いて本屋ちゃん落ちたやつ？ネギ君、よお間に合ったな？」

その言葉に、ネギは安心した。良かった、バレてないようだ。

「ええ、のどかさんに怪我がなくて良かったです！」

「けど、ネギ君足速すぎやろ。５０メートルくらい離れてたんちゃう？」

「ええ！？えーと、それは…。」

ネギは失念していた。急がなくては、と身体強化の魔法を使ってい

たのだ。そちらの方が不自然だった。ネギは悩んだ挙げ句、ある言葉にたどり着く。

「ＣＧです！（これしかない！）」

「ＣＧ？（何言い出すん、この子）」

「はい、映画とかで使うＣＧです！（日本は技術大国だし、信じるよね？）」

「そか、ＣＧかぁ。（無理くりすぎるわ）」

「ＣＧなんですよ～。（お願い信じて！）」

「なら納得や！（もうええわ、アホらし）」

笑いあう二人。しかしそれを遠くから見つめる人物は気が気ではなかった。

（このちゃん、怖い…）

黒いオーラをまとって笑う木乃香を見ながら、サイドボニーの少女はカタカタと震えていた。

ネギと木乃香が別れた後。階段下で本を拾っていた宮崎のどかは、自分を見つめる視線に気付いていた。

「だ、誰～？」

胸に本を抱き、身体を縮込ませる。カツッカツッと乾いた靴音を立てて近寄ってきたのは、温和な雰囲気で人気のある先生。瀬流彦先生だった。

「ネギ君も迂闊だなあ。ちゃんと記憶の処理もしなきゃ、後々になって思い出してバレるって事もあるのに。」

「えっ？えっ？」瀬流彦先生が何を言ってるのか分からない。ただ、いつもと同じ優しい表情なのに、目だけが笑っていなかった。それが、恐怖を誘う。

宮崎のどかは、走って逃げた。しかし、運動音痴な彼女はすぐに追いつかれ…。

パシンッ

「なっ！？」　まさに捕まる、という瞬間。

瀬流彦先生の腕を払う人物が現れる。そして、倒れている宮崎のどかを庇うように立ちふさがるもう一人の人物。石田留美と長谷川千雨だった。

【石田留美】

最近、長谷川さんと帰る事が多いです。原因は不明。以前の口ゲ

ンカに加え、先日早乙女ハルナさんとアニメの話で盛り上がったのを聞かれたのが、原因でしょうか。

「だからさ、第二期は作監が第一期担当したやつと仲悪かったから滅茶苦茶になったんだよ。」

「第一期も原作レイプでしたけどねぇ。」

「分かってねー！あれはワンクールで収めなきゃなんねー制約がある中での最高の結果で…」

マニアックな会話に花を咲かせていると、目の前に何やら不思議な光景が。同じクラスの宮崎さんが、本を抱えて走っていました。

「あれ、本屋じゃねーか。何やってんだ？」

「…っ！追いかけられてます！」すぐさま走り出します。あれは魔法先生ですね。なにがあったかは分かりませんが、か弱い女性、それも教え子に手を出すとは言語道断です。

「あ、おい、待てよ！」長谷川さんも走り出しました。ええ、これから起こる事の目撃者になってくれるなら助かります。

宮崎さんが足をもつれさせ地面に倒れると、先生は拘束するつもりなのか腕を伸ばします。私は間に入って、その腕を払いました。

「なっ！？」

「一体どういうつもりですか、先生。」

軽蔑の眼差しを向けて抗議します。長谷川さんは、宮崎さんを庇うようにしていました。

「いや、これは君たちには関係なくて…。」

「は？クラスメートが乱暴されるのが関係ない？」

「乱暴なんてしてない！」

大きな声で怒鳴りつける先生。宮崎さんは身体を震わせ泣き出してしまいました。そうやって大きな声を出せば女は黙るとでも思ってるのでしょうか？

「どう見たって乱暴だろ。宮崎、膝すりむいてるぜ。」長谷川さんの言うとおり、宮崎さんは膝をすりむいていました。

「だって、それは宮崎さんが逃げるから…。」

「何故逃げたのでしょうね？あなたが原因なのではないですか？」

そうこうしている間に、何やら人だかりが。ああ、この先生は人払いの魔法も使わずに追いかけてたんですね。しどろもどろになる先生。こうなっては、魔法でどうにか出来る問題ではなくなります。

しばらくにらみ合いが続きました。すると人だかりの中から、私たちと違う制服の年上らしい人物が出てきて声をかけて来ました。あれは…ウルスラの生徒さんですね。

「これは何の騒ぎですか、瀬流彦先生？」

確か、魔法生徒の一人で高音・D・グッドマンと言いましたか。やたらと正義感の強い女性だと聞きました。

「あ、ああ、良い所に来てくれたね！誤解されて大変なんだよ。」

「何が誤解だテメー！」長谷川さんはエキサイトしますが、今は冷静にしてほしいです。高音さんは私たちと先生を見比べながら、困惑したように言います。

「とりあえず、説明していただけますか？」

「ええと…」

出来るハズありませんよね？これだけギャラリーがいたら。高音さんは魔法関係の事とは思ってないようです。ちょっと察しの悪い人なのでしょうか。

「この先生が、私たちのクラスメートを追いかけて怪我をさせたのです。私たちは、それを止めるために間に入りました。」

「なっ…デタラメだ！」

何がデタラメですか、事実しか言ってないでしょう。

「それは…本当なのですか？」高音さんの目が怒りを帯びて来ました。私が宮崎さんの怪我を見せると、それは怒りというより殺意に近い色に変わりました。

「先生、見損ないました。この件は学園長に報告させていただきます。とりあえず、今はこの場から去ってもらえますか？」

素晴らしい、ミス・ジャスティス。向こうの言い分を聞く気もなくなったようです。先生は、何かを言おうとして諦め、去っていきました。

「ありがとうございました。正直、怖くて仕方なかったんです。」

私が礼を言うと、高音さんは優しく微笑んで頭を撫でてくれました。少し足を震わせて見せたので、慰めてくれたのでしょう。

「大人の男性を相手に、よく頑張りましたね。」そう言ってから、次に倒れている宮崎さんをゆっくりとおこしました。

「保健室に行きましょうか。怪我、早く手当てしてしまいましょう。」

宮崎さんも、泣き止んで頷きます。私と長谷川さんも安心して、二人の後をついて行きました。

寮に戻ると、石田留美は隣の部屋にいる超に念話を繋げる。

（すみません、今日、魔法先生と接触してしまいました。）

隣の部屋からガタッという音と共に「あいたたた」という声が聞こえてきた。

（どういう事ネ！？身体は大丈夫カ！？）

（はい、大丈夫です。実は…）

石田留美が事情を説明すると、超はひとまず安心する。

（皆が無事で安心したヨ。しかし、瀬流彦先生も強引ネ。今回の件は魔法先生たちに対する良い牽制になるかもしれないヨ。）

（ええ、魔法で何でも解決出来ると思っている人達も、今回の件で不用意に一般人を巻き込む事は無くなるでしょう。しかし、これで私は完全にマークされました。今まで以上に接触は控えた方が良さそうです。）

高音の心象を良くしたのはプラスだったが、魔法先生からは警戒されるだろう。それは、間違いなかった。

（今はまだ大丈夫ヨ。しばらく、身体を休めるといイ。）

（ありがとうございます。）

そう言って、石田留美は念話を切る。

今日の事が、後々悪い影響を与えなければ良いが。そんな事を考えながら、ベッドに身体を投げ出すのだった。

さて、その日の夜。中々帰ってこない姉を心配したネギは、姉の携帯に電話をかけた。しかし、何故か出たのは受け持ちのクラスの

絡繰茶々丸であった。何でも、姉が倒れたという。慌てたネギに、茶々丸はすぐに迎えに行くと言葉を残し通話を切った。そして、十分後…。

ゴオオオオ、という音が窓の外からしてきたので、ネギはまさかと思いながら窓を開ける。そこには、宙に浮く茶々丸の姿が。

「茶々丸さん!?」

「マスターがお待ちです。失礼します。」茶々丸はネギを抱えると足からのジェット噴射の勢いを増し、空を駆ける。

「わー!?」

ネギがエヴァンジェリンの家についたのは、それから十分後の午後六時の事である。

エヴァンジェリンの家について急いで姉のもとに駆け寄るネギ。姉はちょうど起きた所で、ネギがいる事に少し混乱したようだった。

「私が茶々丸に言って連れて来させたんだ。その調子じゃろくに料理も出来ないだろう。家で食べていけ。」

その言葉に感動するアリア。ネギも、お腹がすいていたので素直に喜んだ。

料理は、非常に豪華なものであった。これは封印が解けた祝いと、姉弟に対する歓迎の意味もあった。

「そうですかー、エヴァンジェリンさんはお父さんとお知り合いだ

ったんですねー。」食事中、互いの身の上話で盛り上がる。

「まあな。しかしアイツも頑張りすぎだな。子供１０人とか有り得ないだろ。」

「まったく、確実に母親は複数いますよねー。女の数がサウザンドって冗談が、冗談に聞こえませんよ。」

憮然として言うアリアに、ネギが言った。

「お母さんがたくさんいたら、楽しいよね。」

その言葉に、吹き出すエヴァンジェリン。

「ははははは！コイツは父親似だな！将来が楽しみだ！」

「ネギ～！」

何を怒られているのか分からないネギは、キョトンとしている。

エヴァンジェリンは久しぶりに客を招いての食事に機嫌を良くしていた。こんなに楽しい食事はいつ以来だろうか。

「しかし、ぼーや達は怖くないのか？私は闇の福音と呼ばれて恐れられてる悪の魔法使いだぞ？」

その言葉にアリアが笑って答える。

「だって、ぬいぐるみ沢山抱えてるの見たもの」

エヴァンジェリンの顔が真っ赤になる。

「僕はお姉ちゃんに、自分で見たものを信じなさいって言われてます。周りの人が悪く言っても、その人にどんな過去があっても。僕の見た、今目の前にいるエヴァンジェリンさんは優しいお姉ちゃんです。」

その言葉は強烈だった。

この姉弟は、自分の涙腺を決壊させる気だろうか。お姉ちゃん、だと？家族を失い、もう作る事も出来ない私が？

フンッとそっぽを向くエヴァンジェリン。そして、茶々丸に指示を出す。

「デザートに、ケーキを出してやれ。」

「「やったー！！」」

喜ぶ二人と、見えないように涙を拭うエヴァンジェリンを眺めながら、茶々丸は穏やかに応えるのだった。

「はい、マスター。（録画中…録画中…）」

第五話　高音の花

次の日。ネギとアリアは早めに学園に赴き、学園長に昨日の騒動の報告を行った。ネギの、魔法バレの件である。

「ふむ。この件は別からも報告が上がっておるが、バレてはいないようじゃの。危なかったとは聞いておる。」

頭のひょろ長い、仙人のような外見の老人が髭を撫でながら言う。学園長の、近衛近右衛門である。

「でも、近衛木乃香さんにバレそうになって…。」

「ああ、あの子は大丈夫じゃ。一応、関係者でな。魔法の事も知っとるよ。」

「「えっ！？」」

これにはアリアも驚いた。確か知らせない方針だったのでは？

「じゃが、これ以降はバレないように注意するんじゃぞ？バレたらオコジョじゃし、卒業試験もパァじゃからのう。」

「「はい！」」

今回は何もお咎め無し。実際、ネギは人助けをしただけだ。問題となってるのは、その後の瀬流彦の行動である。

二人が学園長室を後にすると、隣の部屋で待機していた人達が姿をあらわした。高畑、ガンドルフィーニ、瀬流彦。高音もいる。

「さて、今回の件じゃが。どういうワケか、認識阻害の結界がうまく働いてくれなくてのう。瀬流彦君の悪い噂が女子校を中心に広まっておる。」

「はい…。」顔色を悪くして瀬流彦が頷く。

「実際の行為だけを見たら、そうなっても仕方ないがのう。高音君も、瀬流彦君の事情も聞いてから対応すべきじゃったな。」

「申し訳ありません…。」頭を下げるものの、こちらは納得出来ない。宮崎のどかを傷つけ、怖がらせてた事実は変わらないのだ。女性として、今回の瀬流彦の行いは許せなかった。

「さて、今後のことじゃが瀬流彦君には男子中等部の校舎の用務員に移ってもらう。さすがに、しばらく教師の仕事は出来んじゃろう。」

「はい…。」

「高音君には、今回接触した三名の監視をしてもらおうかの。２－Ａには春日美空君もおるから彼女にも協力してもらったらいいじゃろう。」

「な、何故ですか！？彼女たちはただ自分たちの安全を守ろうとしただけではないですか！」これには黙っていられなかった。否があるのは瀬流彦だけだろう、と。

抗議する高音を止めたのは、高畑だった。

「これは魔法の秘匿に関する事で、当事者たちだけの問題じゃないんだ。宮崎さんが魔法をバラす可能性がゼロじゃない以上、様子を見るのは仕方ない事なんだよ。」

「まあ、そんなに長く監視する必要はないからの。一週間見て、何もないならそれでお終いじゃ。」

納得はいかない。保健室で彼女の怪我を治療した時、詳しい経緯を聞いていた。宮崎さんは、確かに瀬流彦の目や伸ばしてきた手を恐れて逃げていた。被害者なのだ。

「分かりました…。」そう言うしかない自分が、情けなかった。高音は最後に瀬流彦を睨みつけると、学園長室を出て行った。

「…これで分かったじゃろう。軽はずみな行動は組織全体に悪影響を及ぼしかねん。何より、教師としてここにおるのを忘れるでないぞ。ワシらは人を育てる為におる。傷つけたり不安がらせるのは言語道断じゃ。」

「はい…。」もはや、うなだれる他ない。この言葉には、高畑やガンドルフィーニも複雑な表情をさせていた。

（（お前が言うか））

それから学園では、誰が流したのか今回の事件が脚色を加えて広まっていた。実は石田と超が広めたのだが、具体的な内容は以下の通りである。

一、瀬流彦が宮崎に迫った。

二、逃げる宮崎を見かけた石田と長谷川が庇うものの、瀬流彦はしつこく迫る。

三、もう駄目かと思われたその時、颯爽とあらわれた高音が、瀬流彦を追い払う。

四、相手が教師でも毅然と立ち向かう勇気、宮崎たちを気遣う優しさに、聖母マリアの姿を見た。

四つ目が、意外と重要だったりする。ただ単に瀬流彦が宮崎に迫っただけで終わると、最悪、宮崎がレイブされたという噂に変質してしまう恐れがあった。だからこそ、高音に焦点を当てて美談にする必要があったのだ。

石田はこの噂を広めるに当たって、世界樹に頼んで認識阻害結界に向けられた魔力を極力減らしてもらっていた。そして、強制的に魔力を吸い上げる学園の魔術システムに干渉して機能不全を起こさせていた。

加えて、もう一つ。これは悪ノリだが、植物たちに頼んで高音がいる場所で花を咲かせてもらった。高音があらわれると、花が咲くのだ。これにより、周囲の女子生徒たちは高音をまるで女神のように扱い始めた。そして、これが高音自身の考えに変化をもたらす事になる。

作られた虚像、『正義の女神』の恐ろしさを実感したのだ。

自分の成す事が注目され、まるでそれが全て正しい事のように捉えられる。また、面倒事やトラブルに引っ張りだされ善悪の判断を迫られる。今まで意識していなかった、立場によって変わる正義。それを何度も目の当たりにした。

教師たちの態度が変わったのも、衝撃的だった。一部の魔法先生に、危険視されるようになったのだ。教師相手でも立ち向かう、というエピソードだけが一人歩きした結果だった。

高音は、ノイローゼ気味になっていた。

事件からしばらく経って、噂が充分に広まった頃。超たちのクラスとウルスラの女子との間にちょっとしたトラブルが発生した。

問題は、校舎屋上の広場で起きた。簡単に言うと、場所の取り合いである。超たちの通う麻帆良女子中等部のある校舎は、ミッション系のウルスラ女学院と隣接しており、行き来が可能になっている。自習時間中、麻帆良の校舎の屋上で超のクラスがバレーボールをしようとした所、ウルスラの高校ドッヂボール部の面子が場所を横取りしようとしたのだ。

何故か、高音が引っ張りだされた。

本来であればネギ、アリアが解決すべき所である。

高音が登場するや否や、沸き立つ女子たち。舞い上がる風、どこからともなくやってくる花吹雪。…うんざりする高音。

高音は言った。

「今は授業中でしょう?あなた達、自分の校舎に戻りなさい。年上なら年上らしく、模範となるよう振る舞うべきでしょう。」

ごもっともだった。

ドッヂボール部の面子はバツの悪そうな顔で戻って行く。そして、また中学校での評判が上がるのだった。

その日の昼休み、中庭のオープンテラスで高音は後輩の佐倉愛衣と協力者の春日美空から報告を受けていた。

「みんな、魔法とか全然噂してないッスよ。高音先輩の事ばかりッスね。」

「お姉様はとても輝いてますから、当然ですよ!」

それを聞いて、高音はため息をつく。

周囲で薔薇が咲いた。人が倒れた。

そんな三人を見かけて、近づいてくる人が。石田と長谷川だった。

「先輩、お久しぶりです。」
「お食事ですか？」

監視対象からの思わぬコンタクトに戸惑う三人だったが、気を取り直して対応する。
「ええ、今日は日差しが柔らかくて気持ちがいいから。良かったら一緒にどうですか？」

「はい、喜んで。」石田も長谷川も、笑顔で席につく。しばらく、和やかに食事が進んだ。

「ところで、あれから宮崎さんはどうですか？一度お礼に来てくれた時はまだ辛そうだったけど、落ち着いてるかしら。」高音から話を切り出した。

「ええ、今は落ち着いてます。周りも、なるべく登下校は一人にしないようにしてますし、宮崎さんも笑顔を見せてくれるようになりました。」

「それを聞いて安心しました。」石田の言葉にホッとする。

「あの男の姿が見えないってのもデカイですよ。まぁあれだけヤバい事しでかしたら出て行くのは当然ですよね。」長谷川の言葉に冷や汗をかく春日と佐倉。言えない、まだ学園にいるなんて。

結局、その後は当たり障りのない会話に終始した。そして、高音は確信する。この人たちは関係者ではないし、魔法にも気づいてはいない。

後日、高音の報告によって石田たちは監視対象からはずされる事となった。

第六話　小動物、来たる

南極に火柱が上がった。

それを見ていたペンギンが頭を抱えて呟く。あの馬鹿者共が、と。

ペンギンは手に携帯電話を出現させると魔法世界へと報告する。

魔法の秘匿を守れなかった、と。

ネギの兄たちはすぐさまペンギンの集団に取り押さえられ、強制送還される事となった。

今回の騒動の原因は、スプリングフィールド兄弟たちにある。彼ら介入者たちは、転生の際に容姿を事細かに設定していたのだが、何故か皆、女性の顔を望んでいた。それが、男所帯だった観測隊の大人たちには我慢出来なかったらしい。女に飢えている上に兄弟たちの日頃の態度の悪さも相まって、大人たちの暴走を招いた。

反撃に出た兄弟たちは、使える魔法を全て使って大人たちを攻撃。死者こそ出さなかったものの、重傷者が出る騒ぎとなった。

正当防衛では、ある。

そんな場所へ送り込んだ学校側の落ち度もある。

しかし、やりすぎたのだ。その上、魔法をバラしてしまった。なおかつ、兄弟たちは攻撃魔法ばかり覚えて記憶を修正する術を覚えてなかったのだ。

当たり前の技術を学ばずに、ただ攻撃に執着する兄弟たちは危険

視され、オコジョにされた。

そして、この事は魔法世界で大きな話題となる。英雄の息子たちが、オコジョにされた。ブランド価値はがた落ちだ。元老院をはじめとする政治好きの人間たちの間でも同様で、英雄の子供を利用しようとしていた連中は認識を改めざるを得なかった。ネギ、アリアは奇妙な形で政争から遠ざけられたのである。

そんな中、魔法世界のとある宮殿の一室に居る黒いロープを着た男だけは、違う意味で認識を改めていた。

「しょせん、モルモットはモルモットという事か。」

ペンギンから送られてきた画像を眺めながら、呟く。

「上質な素体、英雄の毛髪と異世界の魂。高いコストの割には出来上がったのは粗末な魔力タンクか。頭が痛くなるな。」

傍らに控えていた者から資料を受け取ると、パラパラとめくり始める。手を止めた用紙には、アリアの顔写真とデータがあった。

「一番出来の悪いモルモットが残る、と。せめてあの娘がアマゾンでワニに食べられなければ計画は進められたのだが。こんな出来損ないでは使い物にならん。」

ため息をついて、男は資料を眺めた。備考欄には、こう書いてあった。

『素体の劣化早し、魔力耐性標準以下』

【桜咲刹那】

お嬢様が夜間警備の任について一年になる。はじめは反対する者が多数だったが、今では表立って反対する者はいない。それほどまでにお嬢様は強くなった。

まだ京都にいた頃。お嬢様は姉の木乃葉様、妹の木乃実様から仲間はずれにされ、いつも一人で泣いていた。長の命で私がお嬢様の護衛を任されてからは、私と一緒に遊ぶ事が多かった。しかし、私にはお嬢様の心の隙間を埋める事は出来なかった。

木乃葉様と木乃実様は、よく見稽古と称し私の師事する剣術の師匠の元へ通っていた。未だに理解出来ないが、お二人は師匠の技を見ただけで再現出来るようになっていた。そして、いつもお二人だけで竹刀を手に中庭で打ち合っていたのだ。

お嬢様は、自分もやってみたいとお二人に近づくものの、いつも拒否されていた。見かねた私は、長の許可を得てお嬢様に剣の基礎を教える事にした。そして、驚愕したのだ。

お二人と違い、お嬢様の才能は私にも分かりやすかった。とにかく、目が良い。動体視力が並外れている。そして向上心が強く、上達が異様に早い。すぐに私に近いレベルに至り、私と一緒に道場に通う事となった。

お嬢様が、神鳴流を破門される事になるのは、その数日後の事だった。

道場で木乃葉様たちと鉢合わせしたお嬢様は、例によって出ていけと脅されてしまう。正式な門下生である事を師匠はお二人に伝えたが、聞く耳を持たない。逆上したお二人が竹刀でお嬢様に襲いかかったその時、事件は起きた。

お嬢様がその時何をしたのかは、未だに私には分からない。

ただそこには、血塗れになったお二人の姿があった。

お嬢様は無手だった。それは私もはっきり覚えている。しかし、師匠が言うには真剣で切ったと言う。そして、その技は神鳴流ではなく別の流派の技である、と。お嬢様は誰に教わるでもなく、咄嗟にその技に至ったという。

お嬢様の身辺は激変した。詳しい経緯は分からないが道場を破門され、姉妹を傷つけたとして勘当に近い形で関東へ出される事となった。私は護衛として一緒に行く事となったが、お嬢様は私が同行する事になったと知ると何度も頭を下げて涙を流した。

「ごめんな、せっちゃんに迷惑かけて。」

私が見た、最後の涙。

麻帆良に移ってからは、お嬢様が涙を見せる事はなくなった。例え魔法生徒にいじめられても、魔法先生から睨まれても、反撃する事なく耐え続けた。私が抗議しようとすると、お嬢様は決まって言うのだ。

「ええんよ、せっちゃんが怒らんでも。うちのせいで、せっちゃんが嫌な目にあうのはもう嫌や。」

そんな事ない、気にしないでと言っても聞いてくれず、お嬢様は私から距離をおくようになってしまった。私も、これ以上悲しい笑顔をさせたくなかったので離れる事を選んでしまった。

そして一年前、お嬢様が夜間警備について初めての日。私はその選択が間違いだったと悟る。

西のスパイと揶揄されたお嬢様の初仕事の日に、あろうことか関西呪術協会の手の者が侵入してきたのだ。狙いはお嬢様。西の不穏分子によるクーデターの旗印として狙われたのだろう。

お嬢様は、１０人ほどの侵入者のほとんどを切り捨てた。生きていた者は１人だけ。その者も、二度と剣の振るえない身体となっていた。

私にもお嬢様の太刀筋は見えなかった。それどころか刀を振るっているようにも見えなかった。ただ、背筋が凍るような笑みを浮かべて、身体を揺らしたようにしか見えなかった。しかし私は直感的に悟った。あれは、あの時の技。その、たどり着いた先なのだ。

お嬢様は、ただ１人あの辛い思い出を反芻し続けた。　闇の中で、孤独にその先を求めて走り続けたのだ。そして、私の知らない所まで行ってしまった。そうさせたのは、私ではなかったか。

結局その一件以来、お嬢様を西のスパイと言う者はいなくなった。それと同時に、近づく者もいなくなった。

今日も、お嬢様は1人で警備にあたる。私は、遠くでそれを見守る事しか出来ない。

暗い森を、小さな動物が走り抜ける。

七匹のオコジョたちは時折木の根に引っかかりながらも下卑た笑い声を上げて疾走していた。

「カモの位置には俺が座る！」
「俺、千鶴に飼ってもらうもんね！」
「あ、ずりーゾ！俺の嫁だ！」
「俺はハルナだな！」

そのオコジョたちは人の言葉を話していた。明らかに普通ではない。

バキバキと枝を折りながら走る。そして、前方に女性の姿を発見した。

「「「「「「「「「このかちゃーん！」」」」」」」」」

飛びかかるオコジョ。かつてネカネに行った集団セクハラを再現しようとしていた。

この時、誰か一人でも違和感を抱けば悲劇は起こらなかったのかも知れない。何故、こんな夜に女子中学生が一人で歩いているのか。何故、こちらを見ても驚いた表情をしないのか。何故、その手が白い光沢を放っているのか…。

オコジョたちは空中で粉みじんになった。

ボトボト、と地面に落ちる肉片。

それを見て、木乃香は不思議そうな顔をする。

「何なん、これ?てっきり式鬼かと思ったら…。でっかいネズミやなあ。」

西の人間の使う式かと思っていたが違うようだ。木乃香は他に敵がいない事を確認すると、持っていた携帯電話で肉片を撮影し、メールに添付して学園長へ送る。そして、電話をかけた。

「あ、おじーちゃん?侵入者始末したえ。ん?あ~、殺したけど人やあらへんよ。何やようわからんから写真撮って送っといた。後で見たって。…うん、これでうちの仕事は終わりやんね?ほな、切るわ。」

ピッと通話を切る。思ったほど時間は掛からなかった。同居人のアスナはまだ寝ていない時間だ。コンビニにでも寄っておやつを買って行ってあげようか。

木乃香は上機嫌で家路につくのだった。

その頃、学園長は頭を抱えていた。孫娘から送られてきた画像には、パラパラになったオコジョの死体。その画像が送られてきた直後に、魔法世界のメガロメセンブリアからスプリングフィールド兄弟脱走の知らせが届いたのだ。行き先は、日本。彼らの思考を読み取っていた魔法使いからの連絡で、オコジョ化された兄弟の確保を依頼する内容だった。

「むむぅ…これはもう蘇生は無理じゃな。見なかった事にするしかないのう。」

英雄の息子たちと孫娘。どちらが大切かと言えば決まっている。

「しかし、木乃香ちゃんも仕事が早すぎるわい。婿殿もえらい才能を生んだもんじゃ。」

画像のオコジョの切断面を見てうなる。木乃香には刀など持たせていない。拳銃とスタンガンしか持っていないハズなのだが…。

近右衛門は、自分の孫娘の実力をはかりかねていた。

同時刻、教員寮にて。

ネギとアリアの元に一匹の小動物がたどり着いていた。

「兄貴！」

「カモ君！」

感動の再開。駆け寄る小動物を、ネギは両手で…

ギュッ

しっかりと握りしめた。

「ぐ、ぐぇ！兄貴、何を！？」

「カモ君、悪いことして逃げて来たんだよね？僕知ってるよ。」

「よくやったわ、ネギ！逃がさないでね。」

アリアはすぐに学園長に電話をかける。ワンコールで出た学園長に、アリアは得意気に報告した。

「今、オコジョ妖精のカモミール・アルベールを確保しました。下着ドロの罪で服役していたのに、脱走したんです。これから、そちらに送り届けますね。」

これを聞いたカモミールが絶叫する。

「そりゃないぜ姐さん！オレはネギの兄貴の力に…。」

「カモ君、悪いことしたらちゃんと償わないと。気持ちは嬉しいけど僕も先生なんだ。悪いことして逃げた人を放ってはおけないよ。」

「んな殺生な～！！」

ジタバタ暴れるカモミール。報告を終えたアリアは笑顔で言う。

「強制送還だって。前もってネカネお姉ちゃんから知らせがあったおかげで、こっちでの被害が出なくてすんだわ。」

「違うんだ、俺は本当に…。」

哀願するカモミールを問答無用で魔法処理したカゴに入れるネギ。アリアから「よくやった」と褒められて、えへへと笑う。

「でも変なのよね。」

「何が？」ネギが聞くと、アリアも良く分からないという表情をする。

「学園長がね、『身代わりが出来た』とか『これで誤魔化せる』とか言ってたの。まぁ私たちには関係ないでしょうけど。」

そう言って、二人は部屋を出て学園長のもとへと向かった。

その後二人が学園長室で見たのは、妙に機嫌を良くして小躍りする老人だった。

第七話　超の決断

「甘いアル！」

超の蹴りがクー・フェイの腹部にめり込む。本来であれば内臓が破裂してもおかしくない威力の蹴り。それをクーは軽くうめく程度ですぐに回復してみせる。だが、それを見た超は手を振って手合わせを止めた。

「し、師匠？」

「何故、避けなイ？さっきから、不用意に受けてばかりヨ。」

「う…そうだったアル。最近、自分でも変だと思ってたヨ。」

二人の会話は、周囲の人間には理解出来ない。ここは、超が特別顧問として所属している中国武術研究会の仮練習場。その中で超鈴音とクー・フェイは明らかに浮いていた。実力が違いすぎるのだ。

超の言っている事は、急に強い身体を得てしまった事による弊害である。多少の攻撃にはビクともしなくなったクーは、避ける事を忘れて攻撃にばかり意識が行くようになってしまっていた。同じ異常な攻撃力を持つ超と手合わせをして、初めて自分が防御をおろそかにしていた事を知ったのだ。

「さあ、もう一度行くヨ！今度はもっと守りを意識するネ！」

「はいアル、師匠！」

気を取り直してクーが返事をする。二人が手合わせを再開すると、周囲の人たちは次第にふたりの動きを目で追えなくなってきた。まるで、某龍玉漫画の世界。ギャラリーは呆然とそれを眺めていた。

超がクーを厳しく指導するようになったのには理由がある。つい先日、介入者との直接戦闘を経験したのだ。そして、超は一度死んでいる。それはあまりに卑劣な攻撃だった。

それは、超が茶々丸の定期検査をする為にロボット工学研究所の研究室にいる時だった。ちょうど、葉加瀬が用事で休みの日で超が一人の時だった。

突然、周囲から鎖が現れ、身体に絡みついたのだ。

「な、何アルか!?」

周りには、誰もいない。…茶々丸以外には。

「悪いな、今、頭の中を覗かれちゃマズいんだ。」

茶々丸の口から、およそ彼女が口にしないような言葉が。介入者だ。

「ははは、何が起きてんのか分かってねえって感じだな。分かる必要ないさ、お前はここで死ぬ。いろいろ企んでるみたいだけどさ、まあサヨナラだ。」

そして、次の瞬間超の胸を真っ赤な槍が貫いた。

「グハッ…。」

おびただしい血を吐き、超は超は身体の力を抜く。茶々丸が指を鳴らすと、鎖は消えて超の身体が血だまりの上に倒れ込む。

「さーて、そろそろネギに奇襲されるイベントが発生する頃だよな。まずはここでネギぶち殺して原作ブレイクしてやるか。」

茶々丸が、研究室の椅子に腰をかけて足を組む。その後ろで、超はゆっくりと意識を回復させてゆく。十二の試練が、超を蘇生させたのだ。うっすらと聞き取れる茶々丸のつぶやきに、超はぞっとする。

憑依者。このタイミングで憑依してくるとは。

超は、この頃の茶々丸の記憶を知らない。プロテクトがかかってる記憶があり、何度も再生されているのは知っていた。超は茶々丸の大切な思い出に足を踏み入れる事を避けたのだ。

この憑依者によれば、ネギによる茶々丸襲撃があったという。しかし大きな破損は経験していないハズだ。そして茶々丸が大切にしているとすれば。きっとネギが襲撃を止めて、茶々丸との心理的な距離を縮めるような出来事が起こったのだろう。

この憑依者は、茶々丸の大切な思い出を汚そうとしている。

「フざけるナ…。」

「ハ？」

血反吐を吐きながら、超がゆっくりと立ち上がる。憑依者は驚いて振り向いた。

「な、何でだよ！何でゲイ・ボルグ食らって生きてるんだよ！」

パキッと超の頭を蹴り飛ばし、憑依者は距離をとる。その表情は恐怖に歪んでいた。

超は茶々丸の身体を視界にしっかりととらえて能力封印を行う。憑依者の能力はゲイ・ボルグ、王の財宝、十二の試練だった。そのすべてを、封印した。

「くそっ、話が違うじゃねーか！神様見てるんだろ！なんとかしろよ！」

「黙レ…。」

「コイツ、なんなんだよ！ゲ、ゲイ・ボルグ！ゲイ・ボルグ！」

「黙レと言っていル…。」

「何で出ねーんだよ！チクショウ、ゲイ・ボル…」

超の拳が、茶々丸の右胸を素早く打つ。緊急停止ボタン。茶々丸はゆっくりと動きを止めてゆく。

「クソ…オレの為の、世界なの…に……。」そう呟いて、茶々丸の身体は動かなくなった。

超の瞳が、涙で滲む。

守れなかった。自分の、大切な娘だった。自分だけではない。エヴァンジェリン、葉加瀬、研究所の皆と一緒に生み出した一つの命だった。葉加瀬は否定していたが、きっと彼女は生きていた。魂だってあったのだ。

そんな彼女を、介入者は殺してしまった。この世界を、自分に用意された世界だとほざいて。許せなかった。

（超、聞こえるか。）

不意に聞こえて来る声。

（アシュタロス…聞こえるヨ。）

（直死の魔眼を使え。あれなら憑依している者だけ殺す事が出来る。）

その手があった。

超が使うまいと決めていた、人殺しの能力。しかし、今はそんな事を言っていられない。茶々丸を救う為、超は己のポリシーを捨てて能力を解放した。

超の瞳の色が、澄んだ蒼に変わる。

茶々丸の身体にある憑依者の気配を探ると、ぼんやりとしたシルエットの中心に、ひときわ大きな黒点を見つけた。

「消えロ、外道！」

超が、机の上にあった極細ドライバーを黒点に突き立てると、シルエットはじたばたと暴れながら消えて行った。

（よくやった。これで茶々丸は無事なハズだ。）

（ありがとう、アシュタロス…。）

念話を終え、超は茶々丸を抱えてメンテナンス装置に運ぶ。超は蘇生して間もない為、胸に激痛が走るものの我慢して作業を始めた。この身体ならすぐに回復するのだ。

茶々丸にコードをつなぎ、外部から起動させる。システム面には何も異常なし、通常通りに動き出し…

「おはようございます、超鈴音さん。」

茶々丸が目を覚ました。

「茶々丸、お前のマスターは私カ？」

「いえ、マスターはエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルです。」

「それでは、セカンドマスターは私カ？」

「いえ、セカンドマスターという項目に該当者は居ません。超鈴音は開発者としてマスターに準じた権利を有していると設定されています。」

超はようやく表情を崩し、茶々丸に抱きついて泣き出した。憑依者ではない。本物の茶々丸だ。

「茶々丸、お帰り…よく、戻ったヨ！」

「…？」

訳も分からず、ただ超の背中を撫でる茶々丸。超はしばらく泣き続けた。そして、茶々丸の腕の中で決意する。

もう、力を使う事をためらわない。

仲間を救う為なら、ためらってはいけない。失ってからでは、後悔しても遅いのだから。

【エヴァンジェリン】

私が我慢出来ない事、その一つが食事の邪魔をされる事だ。特にそれが従者の作った最高のグラタンともなると私の機嫌は斜めどころか垂直となり、思わず何かを発射したくなってきたりする。

そして、今、私は機嫌が悪い。最悪だ。ちょうど目の前にはジジイ。

「ヒョッ!?なんじゃ、殺気が漲っとるぞい!?」

「フン、早く用件を言え。食事中だったんだぞ!」
発射するぞ?何かを。

「わ、分かった。実は、ネギ君の事なんじゃがのう。そろそろ実戦を経験させたいのじゃよ。」

「ん?勝手にさせればいいだろう。」

「そこで、お主に相手をお願いしたいんじゃが…。」

ははぁん、読めたぞ。
元賞金首の悪の魔法使いである私を倒させて自信をつけさせる気か。そして、正義の魔法使いどもの不満を解消させると。いいように使ってくれるじゃないか。

「無理だな。」

「な、何故じゃ!?」

おそらく私がネギの血を欲しているとでも踏んだのだろうな。封印を解く為に。

「実戦なら下級悪魔を召喚してやればいいだろう。第一、私とあの姉弟は既に会って馬鹿話をする程度にはなっている。今更互いに傷つけようなんて思うか。」

「ヒョッ!?そ、そうじゃったのか?」

驚いてるな。当たり前か、今までの私からは想像できまい。

「実戦じゃなくて、普通に指導するくらいなら構わんぞ。無論、等価交換になるがな。」

ニヤリと笑うと、ジジイは探るように聞いてきた。

「なんじゃ？」

「封印を解くから、許可を出せ。」

今度こそ、ジジイは唖然として目を見開いた。

「解く、じゃと!?解け、ではなくてか!?」

「ああ。もう手段は見つけた。だが勝手に解いては正義の魔法使いとやらがうるさいからな。ネギの指導をする名目で許可を下ろせば、納得は無理でも黙らせるくらいは出来るだろう。」

「むむぅ…。少し、考える時間をくれんかのぅ…。」

「いいぞ?こちらはいざとなったら勝手にするだけだ。その際にどんなトラブルが起きるか分からんが、こちらに否は無いからな。元々、三年の約束だったんだ。まぁ、よく考える事だ。じゃあな。」

ふふふ、いい気味だ。こいつは私を甘く見すぎだな。そして、あの姉弟の事も。あの二人なら、途中で黒幕が誰か気づくだろう。

まぁ、いい。返事がくるまで気長に待つさ。今は取りあえず夕食の続きだ。待っていろ、シーフードグラタン!異様に熱かったが、きっと今なら丁度いい温度になっているだろう。茶々丸の奴め、私

が熱くて必死に冷ましていると嬉々として録画モードに入るからな。何が楽しいんだ。

ん？電話がかかってきたな。茶々丸か、どうしたんだ？

『お帰りが遅いようなので、料理の方は温めなおしておきます。』

貴様ぁあああああ！

芦優太郎は、人気の少なくなった職員室で仕事をしていた。時計はもうすぐ８時。他の先生たちは大抵帰宅している。

「頑張ってますな、芦先生。」

「あ、新田先生。お疲れ様です。もう終わりますよ。」

明日使うプリントの作成が思いのほか時間がかかってしまっていたのだ。

「そうですか。どうですか、帰りに、一杯。」

「喜んで！すぐ終わらせます！」

「ははは、急がなくてもいいですよ。」

こうしたやりとりは、初めてではない。芦は魔神だけあって異様に酒が強い。新田先生も、年配だけあって非常に強い。互いに、遠慮しないで楽しく飲めるのだ。芦としては、一般人で学年主任という立場にある新田先生と親しくできるなら願ったり叶ったりである。

早々に切り上げて、二人は『超包子』に向かう。ここでは酒も扱っており、教師たちもよく利用しているのだ。…法律的にいろいろ引っかかりそうだが。

二人は、いつものようにビールと餃子、シュウマイを頼む。やってきた店員は、チャイナドレス風の少しきわどい衣装に身を包んだ超だった。

「やあ、お久しぶりネ、芦先生。」
「お、超さんじゃないか。君もここの店員だったのかい?」

白々しい挨拶。二人は周囲の監視を受けないために今まで直接会うような事はしていなかった。

「おや、芦先生は知らなかったんですか?若いのにここのチーフをやっているんですよ。」

「将来は世界中にウチの味を広めるネ!」自信満々に言う超を、芦はにこやかに眺める。

「まぁ、頑張るのはいいけど、ほどほどにな?」
「心配性ネ?でも気持ちは嬉しいヨ。」
そう言って、超は仕事に戻って行った。

…最後のやりとりには別の意味があったのだが、新田先生には分からない。

「しかし、新田先生。風営法や労働基準法に違反していないんですかね?」

「君もそう思うのか。私も前から疑問だったのだが、周りが取り合ってくれなくてねぇ。」

新田先生には認識阻害結界が効きにくいのかもしれない。そこからはこの学園の異常性について大いに話が盛り上がり、今まで以上に二人は仲良くなるのだった。

それを遠くで眺めながら超は笑う。

「そう言いつつ胸元とか、見るところはしっかり見てるくせ二！」

【葉加瀬聡美】

超鈴音さんがオーバーワークなのはいつもの事ですが、最近はちょっと度が過ぎているように思えます。彼女は自分をいたわるという事をしません。私のように好きな事に没頭するなら分かりますが、あれは何か質が違うような気がするのです。

しかし、先日の監視カメラの映像を見て納得がいきました。茶々丸の異常行動。未知の能力。聞き取れた会話から察するに、超さんの様に未来からやってきたか別世界からやってきた存在。ファンタジーは苦手なのですが、実際に超さんが殺されかけている映像を見て認識を改めました。

超さんは、何も話してくれません。

きっと、監視カメラの映像を残したのは彼女からのメッセージで

しょう。これを見て、それでも一緒に居てくれるか…。有能ですが実は臆病な彼女らしいやり方です。けど、もう少し周りを信頼してくれてもいいような気もします。

超さん、あなたは気づいていないようですけど、私も結構鍛えているんですよ?あなたやクーさんみたいなレベルではありませんが、科学的なトレーニングと四葉さんの特製スポーツドリンクのおかげで、今ではスクーターを走って追い抜くくらいは出来るようになりました。

そして、何よりこの身体のスペックにあった最高の武器の開発。ドリル。ドリルですよ!うふ、うふふふふ!茶々丸に持たせようと思っていましたが、ヤメです!あのフォルムは私にこそ相応しい!こうなったら総重量１００キロくらいには耐えられるくらいには身体を鍛えておいた方がいいですね!いっそ自分の身体にジェットでも…。

第八話　暗闇の襲撃者と魔法の本　前編

ギリギリ、と爪を噛みながら、少女は机の上の書類を睨みつける。近衛木乃香と瓜二つの外見をした、姉の木乃葉である。傍らには、同じくよく似た外見だが髪の短い、妹の木乃実。ここは京都にある関西呪術協会総本山にある近衛邸。木乃葉の自室である。そして先ほどから彼女たちが睨みつけているのは、神鳴流奥義の書かれた奥義書…らしい。

「なんで現代語訳無いねん！こんなん読めへんわ！アホか！」

怒りをあらわに、奥義書を叩きつける。妹の木乃実は、内心姉をバカにしつつも何も言えないでいる。自分だって読めないのだ。

「神さん、適当な能力設定しよるからうちらが余計に苦労せなあかん。こんなん、話違うわ。」

それもこれも神が悪い、と木乃葉は言う。実際、能力コピーの技術は中途半端だった。確かに、技はコピーできる。しかし、威力は自分の肉体で出せる分しか出せない。当たり前なのだが、これが二人には許せなかった。

「姉さま、確か麻帆良の図書館にメルキセデクの書がありましたよね。」

「それや！」パッと明るくなるが、すぐに苦々しい表情に変わる。

「アイツ、おるやん。どないしょう。」

「いくら刺客向けても返り討ちにされますからね。どうでしょう、

ここらで直接しばきに行くのは。」

「アホ、勝てるわけないわ！」

しかし、木乃実は食い下がる。

「私たちもあれから強くなりました。今まで送りつけた連中は、私たちでも殺せる程度の強さだったでしょう。もっと強い刺客を用意すればいいだけです。それに、あの助っ人も用意できるではありませんか。」

「アレ、なぁ…。」

助っ人。いるには、いる。最凶の助っ人が。

「下手したらうちらも食われかねんえ？あの戦闘狂は…。」

「ふふふ。彼女相手なら、木乃香も本気を出すでしょう。きっと、あの技も使うハズです。それを私たちでコピーして二人がかりで攻めれば…。」

「なるほどな！頭ええなぁ、木乃実は！」

にわかに元気づく姉を見て、木乃実は心の中で呟いた。バカめ、その次はお前だ。そんな事を考えている事などおくびにも出さず、木乃実は穏やかに微笑むのだった。

「ネギ先生、並びにアリア先生。君たちに最終課題を与える。」

学園長質に、近右衛門の声が響きわたる。その手から渡された紙には、期末試験で２－Ａを最下位から脱出させよ、と書いてあった。

「高畑先生が半年以上頑張って無理だった事を、私たちにやれと？」

「う、うむ。無理かの？」

アリアはウンザリして言った。

「常識的に考えれば無理ですね。」

「ふーむ、しかしこれが出来ねば卒業は認められんぞ？」

その言葉に爆発しそうになるアリア。それを、ネギが止める。

「お姉ちゃん、やるだけやってみようよ！下位クラスの点差はあんまり無かったし、大丈夫だよ！」

「え？」

「じゃあ、ぼくらは失礼します！」

礼をして、ネギはアリアの腕をとり強引に部屋を出た。近右衛門はその姿を見送ると、ホッとため息をついた。魔法使いのくせに一般人の常識でものを語るアリアは、彼にとって扱い辛い相手だった。

「ね、ねえ、さっきの本当なの？」

「え？うん、最下位争いしてたクラスの平均点の差は2点だったから。この間、ちょうどタカミチと話してたんだ。」

学園長室を出て、アリアが聞くとネギは平然と答える。その言葉が、アリアには信じられなかった。

「あ、あのバカレンジャーって呼ばれている人たちは？」

「んーとね、皆、基本問題が出来ないみたいだから、そこを頑張れば点数は一気に上がると思うよ。」

意外にしっかり生徒を見ているネギに、アリアは感心する。自分は授業の進め方にばかり気が行って、ちゃんと皆を見ていなかったようだ。

「元々超さんと石田さんみたいな学年トップが二人がいるクラスだし、最下位なのが不思議なクラスなんだ。明日菜さんみたいに平均点９０以上の人もいるし。」

ピシッと固まった。

「ね、ネギ、今なんて？」

「え？だから明日菜さんみたいに平均点９０以上って…」

アリアが崩れ落ちる。バカレッド、どうしちゃったの！？転生者？ああもう、分からない！

「どうしたの、お姉ちゃん！？」

「ううん、何でもないの、何でも…。」

ヨロヨロと力なく歩き出すアリアを、ネギは心配そうに支えた。

【石田留美】

また下らない噂話が広まっているようですね。頭の良くなる魔法の本？何ですかその頭の悪そうな噂は。あはははは！笑えません。笑いましたが。

朝、その話をしていたのは図書館探検部のメンバーでした。綾瀬夕絵さんと早乙女ハルナさん、宮崎のどかさんです。目を輝かせているのは綾瀬さんくらいで、他の二人は冗談のネタくらいにしか思ってなさそうでした。

「なあ、あんな事言ってるけどどう思うよ、学年トップの石田さん？」

私の机の上に腰掛けて、長谷川さんが嫌みったらしく聞いてきます。お尻が近いです。オナラしないでくださいね？

「多分、順番がアベコベになってるだけではないですか？逆なんですよ。」

「はい。ここの図書館は地下に貴重な文献を貯蔵しているらしいですし、学年が上がると閲覧出来るフロアが増えるのでしょう？頭が良くないと地下の書物は読めない、そのフロアに行くような人は頭が良い。それが逆になって、地下に行けば頭が良くなる、そういう本がある、という噂になったのではないですか？」

そう言うと、長谷川さんは呆れたような顔で私を見ます。

「夢がねえな、相変わらず。」

「私らしくて、いいでしょう?」

そう言って笑いあうと、隣の席のエヴァンジェリンさんが珍しく声をかけてきました。

「もし本当にあるとしたら、お前ならどうする?」

いきなり話しに入ってこられて驚きましたが、私は平然と答えます。

「もし本当なら、実験したいですよね。頭が良くなるというのがどういった現象なのか、脳を調べたいです。被検体に本を読ませる前と後で、脳内シナプスとかの反応の違いとかデータとって。…あ、なんだか夢が広がってきましたよ!?」

うふふ、と恍惚の表情で笑うと、エヴァンジェリンさんだけでなく長谷川さんまでひきました。

「コイツには、夢を見せん方がいいのかもな。葉加瀬と同じニオイがする。」

「同感だ。気づいたらロボトミーにされかねねー。」

失礼な、ちゃんと許可をとってからに決まってるじゃないですか。

その日の夜。女子寮のロビーに、バカレンジャーのメンバー、綾瀬夕絵と長瀬楓、佐々木まき絵にクー・フェイ、桜咲刹那に加え図書館探検部の近衛木乃香、宮崎のどか、早乙女ハルナが集まっていた。

「今夜集まっていただいたのは、他でもありません。図書館島に眠るという魔法の本を見つけだし、皆で期末試験を高得点で乗り切ろうという…」

「ちょっと待った！」

綾瀬の演説に横やりを入れたのは、通りがかった神楽坂明日菜である。

「なんですか。」

「なんですか、じゃないわよ。夜中に不法侵入して本を無断でとってくるなんて犯罪でしょ。門限も破るとか、アンタの欲望の為に周りを巻き込まないでくれる？」

「ゆえ～、危ない事はやめようよ～。」

宮崎のどかも止める。しかし、それは火に油だったようだ。

「明日菜さんには関係ないです。」

「大有りよ、ルームメイトが巻き込まれてるんだから。」

むむむ、と顔をしかめる綾瀬。

「木乃香さんは図書館探検部のメンバーです。アナタは違うでしょう。」

「バカじゃないの？」

一触即発の雰囲気。近衛木乃香はそれを無視して桜咲刹那に声をかける。

「せっちゃん、最近物騒なの分かっとるやろ？どういうつもりなん？」

「い、いえ、私は何も説明を受けてないまま連れてこられたをです…。」

どうも、桜咲刹那は長瀬楓に連れてこられたらしい。後ろについていた長瀬が、木乃香に声をかけた。

「まあまあ、木乃香殿。どうせちょっと行って帰ってくるだけでござるよ。危なくなったら拙者が守るでござる。」

この言葉に、木乃香はしらけて説得する気を無くす。

「そーか、それなら安心や。」

にこやかに笑う木乃香。それ以上何も言わず、自分の部屋に戻って行く。

「お、お嬢様！？」

刹那が呼び止めようとするが、無視して行った。怒っている、あれはもの凄く怒っている！顔面蒼白になる刹那を、事情を知らない宮崎や早乙女が慰める。

そんな中、クー・フェイは迷っていた。

もし魔法の本が本当にあって、いきなり頭が良くなるとしたら。強い身体を手に入れただけで気が大きくなり、いつもの自分でいられなくなった経験がある。頭なんていきなり良くなったら、心までおかしくなるのではないか。

「私は、超に教えてもらうヨ。そっちの方が、確実アル。」

そう言ってクーも部屋に戻る。

二人がいなくなり、場にしらけた空気が漂い始める。明日菜は綾瀬を一瞥して言い放った。

「木乃香が戻ったから私も戻るわ。じゃあ、お勉強頑張ってね。」

冷たい一言を残し、明日菜は去って行く。綾瀬はその後ろ姿を睨みつけてから、佐々木まき絵の方を向いて言った。

「まき絵さんはどうするですか？」

「う、うーん、点数悪いとネギ先生たちがクビになっちゃうんだよね。だったら行くかなー。」

今回のテストでクラス順位が最下位となると、ネギ先生とアリア先生がクビになるらしい。そんな噂が立っていた。ネギの事が気に入っていたまき絵は、今回だけは良い点を取りたかった。

「拙者も、ネギ先生の為にもいい点を取りたいでござる。」

長瀬の言葉に満足そうな綾瀬。それを見ながら、宮崎は暗い顔をした。

「あのさ、夕絵。のどかはこの間の件があるから夜道を歩かせたくないんだ。代わりにアタシが行くからのどかは休みにしてくんない？」

早乙女の言葉にハッとなる綾瀬。

「そうでした。すみません、のどか。」

「ううん、こっちこそ付き合えなくてごめんぬ。」

綾瀬の見えない位置から、早乙女が親指を立てるサインを送る。宮崎はそれに礼をして応えた。

結局、図書館島へ行くのは綾瀬、佐々木、長瀬、早乙女、桜咲の五人。刹那は侵入者と遭遇した時の事を考えて同行する事に決めていた。心の中で、木乃香に謝りながら…。

第九話　暗闇の襲撃者と魔法の本　中編

携帯電話を閉じると、木乃香は普段は見せないような険しい表情を見せる。これは、ルームメイトである明日菜にしか見せない顔だ。

「また厄介事？私も手伝う？」明日菜が声をかけるが、木乃香は首を横に振った。

「ううん、アスナはここにおって。その方が嬉しい。」

「…分かった。無茶しないでね。」

「うん。ほな、行ってくるわ。」

部屋を出て行く木乃香を見送りながら、明日菜は自分の力の無さを悔しく思う。自分には木乃香のような強さは無い。強いて言えば、気と魔力を練って身体能力を上げるくらいだ。

結局、私は誰かに守られて生きていくしかないのかな。そう呟いた明日菜の顔は、今にも泣き出しそうだった。

その頃、木乃香のクラスメートであり仕事仲間、褐色のスナイパー龍宮真名は、木乃香の突然の来訪に驚いていた。

「どうしたんだ？直接現場に向かわないのか？」

部屋で装備を整えていた龍宮。学園長から侵入者排除の命令をうけていた。

「せっちゃんは？おらんの？」

「ああ、アイツは図書館島へ行った。」

はぁ、とため息をつく木乃香。

「あんな、多分うち関係やと思うんよ、今回の。」

「…洒落にならないな。」

実は、木乃香には西関係の侵入者の時は出動要請が来ない。これは学園長の指示で、理由は侵入者の命を守る為である。木乃香が西の関係者に容赦ないからだ。では、先ほどの携帯電話は何か。

葉加瀬の開発したセキュリティーシステムからの通信である。

以前、木乃香はロボット工学部に頼んで警備用に飛行型監視カメラを作ってもらっていた。そして、異常が見つかった場合は自分の携帯に画像を送信してくれるように頼んでいた。

携帯の画面に、自分と良く似た二人の姿が映っていた。怒りに気がふれそうになった。

「とりあえずうちは西地区へ行く。」

「図書館組はいいのか?」

「せっちゃんが何とかするやろ。信じとるから。」

そう言って、木乃香は部屋を出る。まず、図書館組と彼女たちを接触させてはならない。一般人を巻きこまないのを前提に動くのだ。

「怖いね、お嬢様は。」

龍宮はそう笑って暗視スコープを装着した。

【ネギ】

夜中、学園長から僕あてに電話がありました。なんでも、僕の受け持つクラスの生徒が夜中に寮を抜け出して図書館島に向かったそうです。そして、何故か僕だけが捜索に行けと言われました。…どうしてお姉ちゃんは行けないんだろう?その事を聞くと、「ア…アリア君は女の子じゃろう?」と言ってきました。横で聞いていたお姉ちゃんは僕から受話器を奪い取ると大きな声で怒ります。

「ネギだって子供で危ないでしょう!何で警備員や大人の先生に向かわせないんですか!」

「う、うむ、しかしのぅ。君らの生徒じゃから…。」

「保護監督責任はこの場合、寮の管理人さんにあるんじゃないんですか?何故私たちをかり出すのか不思議でなりません。十歳の子供に夜中まで働かせるなんて、この国はどうなってるんですか?」

「む、むむぅ…。」

その後もお姉ちゃんは怒り続け、最後に受話器を叩きつけて電話を切りました。

「行かなくていいから。高畑先生に行ってもらうから。まったく、メルディナのお祖父ちゃんに言いつけてやるわ！」

お姉ちゃんはそう言うけど、心配です。こんな夜中に図書館なんて行って、明日の授業大丈夫なのかな。

「なんか、図書館に頭の良くなる本があるって噂になってたわ。それを取りに行ったんでしょ。」

そんな！じゃあ僕らのせいじゃないか！

「…なんでそうなるの？」

だって、僕らの教え方が悪かったから、そんな怪しい噂に飛びついたんじゃないの？ああ、もっと時間かけて進めた方が良かったのかなぁ…。

そう言ったら、お姉ちゃんはため息をつきました。

「ネギ、あんたは充分頑張ってるわ。そうね、明日から成績悪い子には補習授業してあげよ。成績優秀な子にも手伝ってもらって。」

うん、そうしよう！

僕らは早速、明日からの授業の進め方を話し合いました。心配なのは変わらないけど…タカミチが行くなら大丈夫だよね？

暗い森を駆けるのは三人。
先頭を行くのは小柄な少女である。

「月詠、そろそろ来るえ。」

「分かってますぅ、ゾクゾクする気配が前から来てはるもん…。」

ニタァ、と笑う月詠と呼ばれた少女。眼鏡をかけ、少女趣味な服に身を包んだ彼女こそ、木乃葉が戦闘狂と呼んだ最凶の助っ人である。死合いのスリルを追い求めてばかりいるので、神鳴流でも異端視されている天才剣士。その異様な雰囲気は木乃葉たちでさえ怯んでしまう程だ。

「来はった！お二人さん隠れとき！」

月詠はそう言って刀を抜く。二刀流。向かう闇の中に白い光を捉えると、その刃で迎え撃った。

ガキィィン！

交差する光。その影は目にも留まらぬ動きで月詠の背後に回り込む。

「速っ！？」

後方に刀を振るうが、それを難なくはじかれる。月詠の上体のバランスが崩れた所に白い光が迫った。

「クッ…！」

強引に身を翻して避けるが、地面に倒れ込む。そこへ容赦なく降り注ぐ光の雨を、紙一重でかわし続けた。

「な、なんやアレ…。」

「化け物…。」

木の陰に隠れた近衛姉妹が愕然とする。目の前の光景が理解出来ないのだ。そもそも、速すぎて木乃香かどうかすら判断つかない。

「斬岩剣！」

月詠は地面に向けて技を放つ。土煙が上がって周囲を吹き飛ばした。影は真上に跳ぶと、木々の中に紛れて姿を消す。

「ふ、ふふふ、こんな無様なん初めてや…愉しいなぁ…。」

そう呟く月詠。木の上の影はジッとそれを見つめた。

「あんさん、木乃香さんやろ？つれない事せんと姿見せてくれません？」

「…。」

ガサッと音がして、影が舞い降りる。

それは間違いなく、近衛木乃香その人であった。しかし、そこには普段の温和な表情は無い。冷たい笑みが貼りついてるだけだ。

「お初です、神鳴流剣士の月詠と申します、よろしゅう。」

神鳴流、という言葉にピクッと反応する木乃香。

「近衛木乃香。流派は自己流や。」

短く答える。月詠はその佇まいを見て困惑した。

無手。構えもしない。なのに、踏み込めない。

「来んのやったらこっちから行くえ?」

木乃香の身体が揺れる。その瞬間、月詠は空中に白い光の網を見た気かした。それは、例えるならメロンの皮の筋。奇妙な模様だった。

ブシャァァッ!

「……!?」

月詠の胸から腹にかけて、その表面に網の目が現れたかと思うと、そこから血飛沫が舞った。

今、何をされた!?

わからない、全くわからない!!

なす統べなく斬られ、月詠は力無く地面に倒れこんだ。それを遠くで見ていた二人は、満面の笑みを浮かべていた。

「見た?」

「ええ、見ました！」

二人はあの不可視の技をコピーしていた。そして、その技の恐ろしさを実感する。

あれは、気を物質化する技だ。故に、高速で振るわれるとよほど訓練した人間でないと目で追えない。そして、あの技は十本の指先から出された針金のような細さの気の剣を交差するように放たれていた。これはもう、剣術では無い。

恐ろしい。確かにあの頃の自分たちには避けることも出来なかった。しかし、今は違う。体力的な下地は充分につけてあるのだ。二人がかりなら、勝てる！

「行きますよ、姉さま！」

木乃実が、月詠の身体を見ている木乃香に向かって走り出す。しかし、次の瞬間木乃実は思いもよらない方向からの攻撃に地面へと叩きつけられた。

「ね、ねえ…さま…？」

「ふふふ。今までありがとうな、木乃実。感謝しとるえ。」

「何故…。」

背中が、熱い。きっと、あの技を使われたのだ。

「最強は二人もいらんねん。ただ、それだけや。」

そう言い残して、木乃葉はその場を後にする。向かうのは木乃香

ではない。図書館島だ。木乃香の命なんてどうでもいい。目的はあくまでメルキセデクの書、ただ一つなのだから。

図書館島。世界でも有数の、湖に浮かんだ巨大図書館。そこに至る橋を、綾瀬たちが歩いていた。登山でもするのかという重装備は、図書館内に仕掛けられた数々のトラップを攻略する為に必要な物らしい。オデコにつけた電灯が夜道を照らしていた。

そんな一行を、追いかけてくる人影が一つ。振り向いた刹那は驚きの表情を浮かべる。

「お嬢様!?」

「はぁ、はぁ、おいついたー!」

息をきらせてやってきたのは、見知った顔だった。

「木乃香さんは残るのではなかったのですか?」綾瀬も驚いていた。

「ううん、やっぱり気になって。せっちゃん行くならうちも行こうかなって。」

「お嬢様…。」

怒っていなかったのか、と刹那は安堵する。

「まぁ、旅は道連れというでござる。一緒に行くでござるよ。」

長瀬も、参加メンバーが増えて嬉しいようだ。やはり、仲違いに近い雰囲気だったから気にしていた。

「では、木乃香さんを含めた六人で図書館島攻略です！」

「「「「おー！」」」」

元気に歩いて行く皆を見ながら、木乃葉は笑う。

（桜咲刹那、他愛もない。あんたの忠義も底が知れとるわ。）

その頃。学園北部では関西呪術師の侵入者たちと高畑、高音、ガンドルフィーニと龍宮が死闘を繰り広げていた。今回の侵入者はかなり強い。本来図書館島に向かうはずだった高畑までが駆り出されるも、状況が好転しないのだ。

「くたばれ、西洋魔法使い！」侵入者が札を撒き散らすと、次々と鬼が現れる。それを、高畑とガンドルフィーニが接近戦で叩く。高音は影をまとい中距離攻撃、龍宮は銃による遠距離射撃だ。

このメンバーの中では、高音は実力でかなり劣っていた。影操術を駆使するものの、呪術師たちの生み出す式鬼たちには通用しない。

しかし…

『グッ…ナンダ、コレハ？』

高音に攻撃しようとすると、植物が腕や足に絡みつく。そして、どこからともなく猪、熊、鹿、狸といった動物たちが参戦してくるのだ。

これは、石田の依頼でやっているのではなく、彼らの自発的な行為である。身の周りで植物が花を咲かせるようになってから、高音はよく草木や動物たちに話しかけたり優しくするようになっていた。それによって、どうやら高音は麻帆良の動植物たちから異様に好かれるようになったのだ。

高音は、自分より遥かに強い鬼達を撹乱させ動きを封じていた。しかし、それだけでは戦況は変わらない。

「クッ…キリがないな！」ガンドルフィーニが忌々しく鬼たちを睨みつける。すでに二十体は仕留めたが、呪術師まで攻撃が届かない。さすがに限界が近づいてきた。

そこに、式鬼が飛び出してきて爪を振るう。

「伏せろ！」

ガンドルフィーニの顔面を爪が切り裂こうという瞬間、氷の刃が鬼の身体を貫く。

パキィィィン！

氷が砕けると同時に、鬼の身体も砕け散る。伏せて難を逃れたガンドルフィーニは、声の主の方へ振り返る。呪術師たちは、最悪な敵の出現に固まっていた。

「エヴァ！」高畑が声を上げる。

「苦戦してるじゃないか、お前らしくもない。」

そこに現れたのは、エヴァンジェリン。麻帆良の誇る、最強の魔法使いである。

「エヴァンジェリンさん!?」

「私に助けられるのは気に食わないか？今は我慢しておけ。すぐに終わらせるぞ。」

高音に声をかけてから、エヴァンジェリンは呪文の詠唱に入る。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　来たれ氷の精　闇の精　闇を従え吹雪け常夜の氷雪…」

呪術師たちが、慌ててエヴァンジェリンに鬼を向かわせる。しかし、ことごとく高畑の居合い拳、龍宮の銃弾に遮られた。

「闇の吹雪！（ニウイス・テンペスタース・オブスクランス）」

ズオオォォォッ！

エヴァンジェリンの手から黒い吹雪が渦巻状に放射され、式鬼たちを飲み込む。鬼たちは一人残らず吹き飛ばされ、紙くずへと姿を

かえた。

「クッ…闇の福音、封印されていたのではないのか！？」

その問いは、その場に居合わせた者全ての疑問だったのかもしれない。エヴァンジェリンはつまらなさそうに答えた。

「フン、少ない魔力でも効率よく使えばこの程度は出来る。頭を使え、頭を。」

そう言ってから、無詠唱で『氷の射手』を放つ。盾を失った呪術師たちはなすすべなくその場に倒れ伏した。

その強さに、高音とガンドルフィーニは圧倒された。封印されているのに、ここまで強いとは。そして、同時に疑問に思うのだ。彼女が本当に悪の魔法使いなら、何故今まで大人しくしていたのか。エヴァンジェリン憎しの魔法先生たちが何度彼女を襲った事か。しかし、彼女はここで一人も死者を出していない。

「さて、ここはお終いだな。タカミチ、お前は図書館島へ急げ。木乃香が二人確保したらしいが、まだ一人残っているようだ。」

「…！わかった！！」

走り去る高畑の背中を見送ってから、エヴァンジェリンは少しフラついて片膝をつく。

「エヴァンジェリンさん！？」すぐに高音が身体をささえた。

「すまない、少し無理をしたようだ。」

「いいんです、今はこうしていて下さい。」

華奢な肩を抱くと、エヴァンジェリンは力を抜いて身体を預ける。

月明かりが照らす道。熊や鹿達が見守る中、季節はずれの夜桜が二人を包んで行った。

第十話　暗闇の襲撃者と魔法の本　後編

月詠が目を意識を取り戻すと、そこは先ほど戦っていた森の中だった。傍らには、近衛木乃香とその妹木乃実の姿。

「あれ～？なんでうち生きとるん？」

見ると、身体にあるハズの傷が一つも無い。あれは幻なんかではなかったハズだ。

「うちが治しといた。この子もな。」

事もなげに言う木乃香。申し訳なさそうに佇む木乃実。月詠は、自分たちが完膚なきまでに敗れた事を悟った。

「あんな、うち、殺し合いとか嫌なんよ。もうここに来んと西でおとなしうしてくれへん？」

その言葉に、頷く木乃実。月詠は内心残念に思ったが、ここまでやられては頷くしかない。渋々承諾する月詠を見て、木乃香は仕方なく月詠の持っていた刀を手に取った。

「ええ？よく見といてな？」

そう言うと、木乃香はおもむろに刀を自分の胸に突き立てる。

「ひぃっ！？」

木乃実は青ざめて飛び退く。しかし、吹き出るハズの血は一滴も

出ず、ただ胸に少し刀がめり込んだだけだった。

「うちな、死なへんねん。刀で殺され、毒で殺され、魔法で殺され、銃で殺され。それでも、生き返ってしまう。同じ方法ではもう傷すらつかん。」

そう言って刀を抜くと、確かに傷一つ付いてなかった。

「気持ち悪いやろ？だからな、もう、うちと関わらん方がええよ。せっかく普通に暮らせるんやったら、それでええやん。木乃実、あんたはまだ引き返せるん違う？」

悲しそうに言う木乃香に、木乃実は自分の小ささを実感した。勝てる訳ない。何より、内面的に。こんな異常な身体を抱えて、何度も殺され、それでも他人を気遣える理性が信じられなかった。

月詠も、木乃香がここまで規格外な存在だとは思わなかった。しかし、それならなおの事このまま縁を切るのは惜しい。

「あの～、稽古でええからまたいつかつきおうてくれまへん？」

そう言うと、木乃香は少し考えてからにっこりと笑った。

「うん、ええよ。今度は普通に訪ねてきてや？」

良かった、と月詠は思う。この約束を取り付けただけでも、今日ここへ来た価値があった。

「あっ、そうです！木乃香姉さま、木乃葉姉さまが図書館島へ向かってるんです！早く止めないと！」

思い出したように、木乃実が叫ぶ。しかし木乃香はのんびりと答えた。

「一応行くには行くけど、せっちゃんおるから大丈夫やと思うえ？あの子もな、強うなったんよ。」

不安を拭えないまま木乃実は図書館島の方を見る。あの技をコピーした木乃葉姉さまに勝てる？信じられなかった。

「フォッフォッフォッ！この魔法の本が欲しければクイズに答えるのじゃー！」

石像が大きな声で言うと、綾瀬、長瀬、佐々木、早乙女の目に炎が宿る。それに反比例するかのようにテンションが下がったのは、木乃香のフリをする木乃葉と刹那。

「おじいちゃん、何してるん？」

「いつもの悪ふざけではないかと…。」

特徴的な口調、どう考えても近衛近右衛門その人である。どうも遠隔操作をしているようだ。

気がつくと、綾瀬たちは既にゲームを始めている。これは…ツイスターゲームだ。皆、あられもない姿でクイズに答えていた。

「せっちゃん参加しないん？」

「遠慮します。あんな目にあってまで頭良くなろうとは思いません。」

「そらそーやんな。しかし、コレおじいちゃんの趣味なんかなぁ？そやったら軽蔑するわ…。」

「同感です。」

そんな話をしていると、石像の楽しそうな声が聞こえて来た。

「お・さ・る…ハズレじゃー！」

「「「わー！」」」

石像がハンマーを叩きつけると地面が割れて、四人が下の階へと落ちて行く。それだけでなく、勢い余って石像までも落ちて行った。

「…なんなん？何がしたかったん？」

「さあ…。しかし、好都合ですね。」

「何が？」

周囲の温度が、一気にさがる。

「もう演技は結構ですよ、木乃葉お嬢様。」

刹那が、名刀夕凪を振るう。木乃葉は軽く身を反らしてそれを避

けた。前髪が数本、ハラハラと落ちる。

「…ご挨拶やなあ。久方ぶりの対面なんやから、も少し愛想良くしてくれてもええやん。」

「生憎、無愛想は生まれつきです。」

「そらかわいそーに。」

そう言いながら木乃葉も懐に忍ばせていた小太刀を手にする。殺気を漲らせた目で刹那を見た。

…しばらく、にらみ合いが続く。そして、次の瞬間。

ギィンッ！

空中に火花が走った。

「やるやん、刹那！よう反応した！」

そう言いながら、次々に斬撃を繰り出す。その全てを、刹那は難なくはじいて行く。

（やけに軽い…何かを仕掛ける為のフェイクか。）

冷静に敵を見据える刹那。先ほどから、木乃葉の指先から気が膨らんでいた。刹那自身が気の使い手だから気づける変化だった。

キィンッ！ギィンッ！

段々と火花が大きくなって行く。タイミングを読んでいた木乃葉

も、まったく隙を見せない刹那に段々と苛立ちを募らせていた。

（チッ、隙が無いなら作ればええんや。）

木乃葉は、唯一の得物であるハズの小太刀を、刹那に投げる。それを当然のごとくはじく刹那。だが、はじいたハズの小太刀は空中で方向を変えて刹那の首筋狙って飛びかかった。

「斬空閃！」

刹那は小太刀と、それをまとっている気を斬りとばす。…その瞬間を、木乃葉は狙っていた。

技を放ち、逆身となった刹那の脇腹目掛けて、木乃葉の指先から気の針金が伸びる。当たれば確実に殺せる、と確信したが…

「奥義、百烈桜花斬！」

「なんやて！？」

ありえない動作。刹那はそのまま身体を回転させて連続で技を放ったのだ。気の針金は叩き切られ、木乃葉も吹き飛ばされた。まるで格闘ゲームのコンボのように理不尽な連続攻撃だった。

木乃葉は、立ち上がろうとしてよろける。

「なんで、ここまで強いんや…。」

「分かりませんか、木乃葉様。剣技はそこに至るまでの努力と弛まぬ鍛錬よって磨かれます。表面的になぞっただけの剣技に私の剣が負けるわけがない。」

「グッ…」悔しさで表情が歪む。

「それに、私は神鳴流剣士であなたはそうでは無い。」　そうなのだ。木乃葉と木乃実は神鳴流の技をコピーした後、入門を勧められ断っている。自分たちには必要ない、と。

「負けたわ…。勝てるわけない……。」床にへたり込む木乃葉。実際に戦ってみて、自分たちの間違いに気づいたのだった。戦意を喪失した事を確認した刹那も、夕凪を鞘におさめる。そんな刹那に、木乃葉は尋ねた。

「刹那は、いつからうちが偽物やと気づいたん?」

その質問に、刹那はあっさりと答えた。

「初めからですね。」

「初めから!?」

もの真似だけは自信があったのだが。

「息を切らせていた辺りで違和感に気づき、私が行くなら自分も行くと言った時点で確信しました。そこからは、類似点を見つける方が難しかったかも知れません。」

「な、なんで!?」

わけも分からず、ただ愕然とする。何処が間違っていたのだろう?

「確かに…あれはお嬢様そっくりでした。あの頃の、このちゃんに。」

悲しそうに呟いてから、一呼吸置く。

「…今のお嬢様はあんなに優しくありません。あなたは先ほど学園

長を軽蔑すると言いましたが、お嬢様はすでに軽蔑し尽くしてます。お嬢様なら、ツイスターゲームの様子をビデオに撮って警察や教育委員会に渡すぞと脅迫するでしょう。」

「えっ…!?」

「そもそも、心配で見にくるわけが無い。表面上心配して、面倒事から遠ざかって行くのがいつものお嬢様です。」

もう、言葉が出ない。しばらく会わないうちに変わりすぎだ。原作とかけ離れた木乃香の実態に、混乱もピークに達する。そして…。

「そーなん?」

「ええ、そうです。素直で小動物的なお嬢様はもういないと思って下さい。」

「そら悪い事したなー。」

なにやらおかしい。声が後ろから聞こえてくる。そして、目の前の木乃葉は自分の後方を見てガクガクと震えていた。…あれ?

「まさかせっちゃんがうちの事そう思ってるとは思わなかった。ひとつ、ベンキョーになった。うん。」

刹那は悟った。今日が自分の命日になる、と。

「あ、あ、あの、お嬢様?」「ええんよ?うち、気にせんよ?でもな、このやるせない気持ちどないしたらええんやろ…。」

ヤバイ。これはヤバイ。刹那は覚悟を決めた。恐怖を堪えて振り

向くと、すぐさま地面に土下座した。

「申し訳ありませんお嬢様ぁぁあああああ！」

へたり込んでいた木乃葉まで揃って土下座する。それから３０分あまり、フロアに二人の謝罪の絶叫がコダマするのだった。

結局、木乃葉と木乃実、月詠と呪術師たちは皆関西呪術協会の下で裁かれる事となった。今回は死者が出なかったし、木乃香の口添えもあって多少刑も軽くなるようだ。姉妹は木乃香に今回と過去の行いを詫び、木乃香も姉妹を傷つけた事を詫びて決着となった。

刹那と木乃香に関しては、以前より多少言葉を交わすようになったようだ。力関係は相変わらずだが、刹那も何だかんだで楽しそうである。月詠は反省の為に独房に入っているが、すぐに出て木乃香のもとに遊びに来るようになるだろう。

さて、そんな中綾瀬たちはどうなったかと言うと。高畑先生に寮へ連れ戻され、寮母をはじめいろんな人たちのお叱りを受けた。それだけで済んだのは、事の発端が学園長の流した噂だと発覚したからだったりする。

本来ならばネギと共に図書館島に向かわせ、あわよくば魔法バレを起こしネギの従者とする予定だった。２－Ａはネギの為に用意されたクラスなのだ。

しかし、その企みは脆くも崩れ去った。

運の悪い事に西の襲撃と重なり、一部の良識ある魔法先生から「何故一般生徒を危険にさらしたのだ」と抗議の声が上がったのだ。奇しくも、先日瀬流彦に向けて放った言葉が自分に帰ってきた形となった。

「ままならんのぅ…。」

そう呟くものの後の祭りである。近右衛門はうなだれながら次の一手を考えるのだった。

【ネギ】

図書館島へ向かった人たちはタカミチが無事に連れ帰ってくれました。さすがタカミチです。頼りになるなぁ。

僕らも負けてはいられません。お姉ちゃんと一緒に補習授業の計画を立てました。成績優秀で時間の空いてる人にも講師を頼んで、僕、お姉ちゃん、石田さん、あやかさん、宮崎さん、那波さんというメンバーで補習を行う事になりました。葉加瀬さんは部活動が忙しいみたいですが、授業を分かりやすくまとめたプリントを作ってくれました。超さんも、クーさんの抜けた穴を埋める為にアルバイトで忙しいみたいですが、時間を作って様子を見にきてくれました。皆、凄く協力的で嬉しかったです。

実は明日菜さんもいろいろ手伝ってくれたんですが、なにやらバカレンジャーの皆さんとケンカしたらしく表立って補習には参加しませんでした。何があったのかは分からないけど、仲直り出きるといいなあ。

結局、期末テストは学年トップという最高の結果を残す事が出来ました。これには僕やお姉ちゃんよりも周りの人たちがビックリしていたみたい。タカミチは、落ち込んでました。ごめんね、タカミチ。そんなつもりじゃなかったんだ。

何はともあれ、これで僕の試験は終わりです。やっと、魔法使いとしての修行を…と思ったら、学園長が不思議な事を言いました。

「これで、ネギ君とアリア君も正式な先生になれたのう。」

あれ？先生？あれ？

「これからが本格的な課題だと言いたいんじゃない？きっと、私たちを手放したくないのよ。」

冷や汗を流す学園長を睨みつけながら、お姉ちゃんが吐き捨てるように言いました。

んー、でも僕はこれでいいかも。せっかく皆と仲良くなれたのに、お別れなんて寂しいもの。

外伝1　転生者ジュマル

神界のとある宮殿の一室で、一人の女性が忙しそうにパソコンのキーボードを叩いている。身体中に目のような模様のある女性は、神界の調査官、ヒャクメであった。

捕らえられた過激派神族の過去を読み取り、何人の介入者を送り込んだのかを調べていたのだ。今回の宇宙の卵を狙った犯行は神界、魔界に大きな影響を与えた。危険な介入者の排除と宇宙の卵の蘇生、という今回の作戦は神魔合同での作戦となっている。

「よ、よくもまあここまで送り込んだのね～。」

その異常な人数に驚くヒャクメ。その隣で作業を続ける土偶の形をした魔族、土偶羅が頷きながら言う。

「七割はすでに我が主に無力化されているが、確かに多い。ワシでも把握しきれん。」

「あー、もうサボって人間界に遊びに行きたいのねー！海ー！！」

そこへ、激しい突っ込みが入る。

パコーンッ！

「あ痛ーっ！？」

「何を言ってるんですか、ヒャクメ？」

「しょ、小竜姫…ひどいのねー…。」

竜神族の女性、小竜姫の突っ込みだった。よりにもよって神剣の平面部分でどつかれて涙目になるヒャクメ。日に日に威力を増す突っ込みは、小竜姫もストレスが溜まっている証拠である。

「これが、生存確認がとれている転生者たちですか？」

小竜姫が画面にリストアップされた名前を見る。横には保有する能力と危険レベルの表示があるが…。そこに、なんの能力も持たず危険レベルもマイナスというよく分からない人物がいた。

「彼は…どうしたんですか？」

「あー、この子は可哀想なのねー。」

不思議な顔をする小竜姫に、ヒャクメが説明をする。段々とつらい表情になり、最後には怒りの炎を放っていた。

「今からあの馬鹿者共を拷問して来ましょうか。」

「お、抑えるのね、小竜姫ー！ちゃんと、アシュタロスが保護対象にしてるから大丈夫なのねー！！」

その言葉に落ち着きを取り戻す小竜姫。土偶羅は部屋の隅で震えていた。

ヒャクメによって開かれた転生者のファイルの備考欄には、こう書かれてあった。

『首謀者達に全てを奪われる。能力無し。』

ジュマル・ベネディクトは転生者である。しかし、彼には前世の記憶も特殊な能力もなかった。彼が覚えているのは、転生直前の神とのやりとりである。

彼は、神に何も望まなかった。それどころか、異世界で生きたいとも思わなかったのだ。

神はどうにかして世界破壊をさせようと促したが聞く耳を持たない。頭にきた神は、彼に怒鳴り散らした。

『ならば貴様からは才能を奪ってやる！力が必要な世界の中で、無能のまま虐げられ続けろ！そして、神に逆らった事を悔やみ続けるがいい！』

こうして彼は、介入者としてのアドバンテージどころか神からの呪いを受けてこの世界に転生してしまったのだ。

彼が生まれたのは、ネギたちが過ごした魔法学校のある町のはずれだった。

生まれながらに魔法が使えない彼は周囲から差別された。両親は離婚し、母は身を粉にして働きジュマルを育てる。ジュマルも読み書き、運動、共に苦手だったが周りの子供達に遅れないように必死で頑張っていた。それは辛いながらも暖かい日々だった。

そんな日々が、最悪な形で終わりを告げたのはジュマルが十歳の頃だった。

ある日学校から帰ると、母が知らない女性に殺されていた。ジュマルも襲われたが、通りかかった男に助けられ無事だった。

この事件をきっかけに、ジュマルは自分の母の仕事を知る事になる。母は魔法薬の販売の他に、娼婦をしていたのだ。あの女は、常連客の妻だった。そしてその事が知れ渡ると、ジュマルへの周囲のイジメはエスカレートして行った。

それは、しだいに子供だけではなく大人まで加わる事となった。ジュマルの母は町有数の美人であったが、マズい事にジュマルは母の生き写しのような外見だったのだ。

生き地獄が、始まった。

しかし、そんな不幸に突き落とした神を持ってしても、彼の心の強さまでは奪い取る事は出来なかった。ジュマルは虐待を受けながらも必死で勉強し続けて、成績優秀者として学校を卒業するまでに至った。

そして、そんな彼に唯一味方する者が現れる。魔法学校の校長である。ジュマルが先生から虐待を受けていると知った校長は、極秘裏に日本の知人、近衛近右衛門と連絡を取りあいジュマルの卒業試験の地を日本とした。試験という名目で彼を逃がすのだ。

卒業の日、ジュマルは校長室へ呼び出され、そこから超遠距離転移魔法で日本へ飛ばされた。彼を捕まえて売り飛ばそうとしていた連中が、学校の外で待ち構えていたからだ。校長と近右衛門の連携で、ジュマルは救われたのである。

こうして、ジュマルは麻帆良にやってきた。ネギがやってくる、

丁度一年前の事だった。

ジュマルの卒業試験。それは、『雑貨屋で店員をする事』であった。学園長室でその事を聞いて、少し困惑する。

「雑貨屋…ですか？」

「うむ。先日オープンしたばかりなんじゃが、店長が関係者でのう。店員として雇うなら同じ関係者の方がいいらしいんじゃ。それで、君にお願いしたいんじゃよ。」

その言葉に、少し気後れする。

「あの…僕は魔法が使えません。そういう意味での関係者なら条件に合わないと思うんですが…。」

「いやいや、単に裏で魔法道具も扱うから関係者の方がいいというだけじゃよ。それに、ここには魔法が使えないというだけで差別されたりする事はないぞ。」

ジュマルは安心した。それならば、今度こそ平穏な生活が送れるかもしてない。

「分かりました。精一杯頑張ります。」

「フォッフォッフォッ、ほどほどにのう。」

礼儀正しくお辞儀をして出て行くジュマルを見送った後、近右衛門はため息まじりに呟いた。
「悲惨な目に遭いながら、何故あそこまで真っ直ぐに育つのかのう…。」

件の店は、森林公園地区の中心にあった。ジョギングに向きそうな綺麗な景色を歩いて行くと、開けた場所に出る。そこにはこの近くの寮に住む人たちのために複数の店が立ち並んでいるが、ジュマルの働く店もその一角にあった。

「『ほのぼの』？…どういう店なのかな。」
恐る恐る店に近づく。見た目は木造のおしゃれな店。ドアには準備中という札が掛けられていた。

カランッと鈴が鳴る。ドアを開けて入ると、恰幅のいいおばちゃんが商品棚のチェックをしていた。ジュマルに気づくとニッコリ笑って声をかけてくる。

「早かったじゃないか。ちょっと待っておくれ。今、済ませるよ。」
「は、はい。」

パワフルな声だった。あの声なら店の中何処にいても届きそうだ。

しばらくすると、おばちゃんが作業を終えてやってくる。
「お待たせ、アンタがジュマルだね。あたしは小和田和枝っていうんだ。まぁカズエって呼んでおくれ。所で、いきなりだけど裁縫とかできるかい？」

「え？あ、はい。出来ます。服を繕うくらいは普段からやってますから。」

「ちょうど良かった！これからここでぬいぐるみを扱おうと思ってるんだけどね。商品補充の他にぬいぐるみ作りもやってもらおうかと思ってるのさ。出来るかい？」

「ええ、作った事ありますから…」ジュマルは母を亡くした後、残された服や布切れを使って自分の服、小物を作っていた。ぬいぐるみも作った経験がある。

「良かった、市販品だけじゃもの足りないからね。動物関係でいくつか作ってもらうよ。」

「はい。」
何がなんだかわからないが、カズエのまくし立てるままに仕事が決まってゆく。ジュマルは困惑しながらも、これからの生活に少しワクワクとしていた。この人は、いい人だ。きっと、悪いようにはしないだろう、と思うのだった。

…こうして、ジュマルの雑貨屋『ほのぼの』での生活は始まりを告げた。そしてここから、彼の幸せに満ちた第二の人生がスタートするのである。

【石田留美】

我がマスターは～馬鹿な人～♪

そりゃ歌いますよ。歌わずにいられますか、授業を一つとり忘れて卒業出来なかったから麻帆良に来れないとか！アナタ本当に魔神ですか！？

結局麻帆良内の介入者のチェックは私と超さんの仕事ですよ。まったく、先生として赴任してきたら思いっきりたかってやりましょうかね。

という事で介入者チェックですよ。森の木々が、妙な気配を感じたらしいです。大きな気配を背負って…と言っていたので加護を受けていたのでしょうか。

…えー、結論から言うと呪いでした。

何したら神族にこんなに恨まれるんでしょうかね？雑貨屋の店内で必死に補充やら掃除やら動き回ってる女性。…いや、あれは男性ですか。彼は、五感全ての機能を弱体化された上で不幸体質付与、才能の封印、老化促進の呪いを受けていました。

…あれでよく生きていますね？１３歳のようですが身体年齢は１８行ってますし、身体も魔法薬で変質されてます。きっと、そっち方向に虐待を受けていたのでしょうね。うーん、真面目そうですし呪いは全て解除してあげましょう。神族は敵。敵の敵は友達。その理屈で言えば彼は友達です。救う理由としては充分過ぎるでしょう。

ついでに、今まで苦労した分何か能力を与えましょうか。えーと…ああ、幸運スキルＥＸとかいうのがありました。取りあえずこれと。あと物作りスキルＥＸなんてのもありました。これも与えましょう。ふふふ、これでこの店にはいずれ彼の作るよくわからない物を売るようになるでしょう。いつかマスターが来たら、何も言わずにこの店を紹介してあげますよ。

マスターの驚く顔を想像すると笑えますね。それだけが私の楽しみだったりします。早くマスター来ないかなぁ。

ジュマルが雑貨屋に勤め始めると、不思議な変化が訪れた。

この店にはぬいぐるみを作る為のバックルームがあり、そこからジュマルの寝泊まりする部屋に繋がっている。住み込みで働いているのだが、ここ数日、寝起きが異常に良い。低血圧で朝は弱いハズなのだが。

また、食欲が出てきて動きも機敏になった。いつも感じていた身体の重さを感じないのだ。そして、一番の変化と言えば。

「すみませーん、この犬のぬいぐるみください！」

ジュマルのぬいぐるみが、どんどん売れるようになったのだ。

元々得意だったが、ここに来て一気に才能を開花させたかのように次々と出来の良いぬいぐるみを作り上げていった。今ではぬいぐるみの修繕や注文された品を作る作業に追われバックルームから出て来れなくなっていた。

「アンタ、凄い子だったんだねえ。向こうじゃいろいろ言われてたみたいだけど、アタシにとっちゃアンタは福の神さ。」

カズエの言葉が、何より嬉しかった。更に張り切るジュマル。結果、最初はレジ横の編みカゴの中で売られていたぬいぐるみは、数を増やし店の五分の一を占めるまでになった。インターネットでも有名となり、オークションで高値で取り引きされるまでになったのだ。

そんな、順風満帆な雑貨屋『ほのぼの』に、一人の少女が現れる。ジュマルが勤め始めてから、一年がすぎた頃であった。

「ん？店員がいないな。おーい、誰かいないか！」

店先から声がする。カズエさんは席を外しているらしい。

「はい、ただいま参ります！」

ミシンを止め、小走りにレジへと向かう。そこには、金髪の小柄な少女の姿。

「お待たせしました！どのようなご用件ですか？」

「あ、ああ。実は…この店で、ぬいぐるみを特注で作ってくれると聞いてな。以前まとめ買いしてから気に入ってしまったんだ。」

そう言われて、ジュマルは満面の笑みを浮かべる。

「ありがとうございます、そう言ってもらえると励みになります。注文でしたらこちらで伺いますよ。」

「ん？……あっ！貴様があのぬいぐるみを作ったのか！？」

「はい。ジュマルと申します。よろしくお願いします。」

少女は驚くと共に、目を輝かせた。自分も人形使いと言われた存在。そんな自分でも作り上げられない、愛らしいぬいぐるみを作った天才が目の前にいるのだ。

「あ、あの、仕事場を見せてもらっていいか？あの子たちを作った部屋を、見てみたいんだ。」

「んー…普段は見せないんですけど、お得意様ですから特別にご案内しますね。こちらです。」

ジュマルはそう言って、少女を案内した。レジの奥、カーテンに仕切られた先に、ジュマルの作業部屋がある。そこには、完成間近の物や既に出来上がって店に並ぶのを待っている物で溢れ返っていた。

「うわぁ…。」少女が感嘆の声を上げる。

「この棚にある分は明日から店頭に並ぶものです。こちらは、注文して作った品ですね。お客様は、どのようなぬいぐるみをお求めですか？」

店を見渡してうっとりとしていた少女は、ジュマルの声にハッと我に返った。

「う、うむ。この絵本にある二匹の兎を作って欲しいのだ。」

そう言って少女が取り出した絵本は、白い兎と黒い兎が花を手に

踊っている表紙の絵本だった。

「ちょっとお借りしますね？」

少し傷んだその絵本を手に取ると、丁寧にページを捲って行く。

「この花も付けますか？タンポポを手にしている絵と、白詰草の冠をしている絵がありますが。」

「作れるのか！？」

「ええ、多少時間はかかりますが。幸い、今ある材料で出来ますから、兎ふたつで１０日もらえたら完成させてお引き渡しできますが。」

フラフラと倒れそうになる少女。尊敬の眼差しをジュマルに向ける。

「なら、頼む。…それと、名前を入れて欲しいんだ。足の裏にでも。」

「構いませんよ。」

ジュマルは、注文用紙を少女に渡すと、最終的な注文内容をチェックしてもらった。少女は上機嫌に用紙を記入する。合計金額の見積もりをだしたら「安すぎだろう！？自分の才能を安売りするな！」と怒られたが、ジュマルは頑なに最初の値段設定を変えなかった。神にも逆らう頑固さなのだ。変える訳がない。

少女は最後には諦め、ジュマルに用紙を渡して帰って行った。帰り際、「こんな安値に設定してたら、みんな私が買ってしまうからな！覚悟しておけよ！」という脅しなのか何なのか分からないセリ

フを残していたのが印象的だった。

それから、ちょうど１０日後。少女の腕の中には、注文通り白と黒の花を持った兎がいた。

それぞれ足の裏には銀の刺繍で名前が入れられている。そこにあった名前は、勿論。

『ナギ』と『エヴァ』であった。

これが、天才ぬいぐるみ師ジュマルと稀代の人形使いエヴァンジェリンの出会いのエピソードである。

この出会いが今後、どのような物語を紡いで行くのかは、分からない。しかしきっと、幸せに彩られるのだろう。

そうであって欲しいと、私は願っている。

外伝2　転生者ボブカット・レイ

「いいいいやっほおぉぉう！」

荒れ果てた大地を、走り大トカゲに乗った少女が走り抜ける。細身の身体に似合わない長剣を片手に、狙うのは前を行く巨大な猪だった。

さすらいのハンター、ボブカット・レイ。彼女もまた、転生者である。

彼女は不老不死と言う能力を持ちながら、アシュタロスに封印されなかった珍しい存在だった。彼女は他にも、外見を自由に変える能力と、幾千もの武器を保有する『ゲート・オブ・バビロン』という宝具をその身に宿していた。

彼女は大戦時代にこの世界にやってきた。別に彼女は戦争に参加したくてこの時代を選んだのではなく、モンスターが一番多い時代をリクエストしていただけだった。転生後しばらく、彼女はハンター業に精を出す。

…彼女はネギまの話を知らなかった。死ぬ前にハマっていた、モンスターハンターの世界だと思っていたらしい。

しかしハンターとして名を上げ始めると、当然のように戦争への参加を要請される。面倒事の嫌いな彼女は、姿形を変えて世界を点々とし始めた。その先々で目にしたのは、戦争によって破壊された

町や親を亡くして路頭に迷う子供たちの姿。気楽に生きていきたかった彼女の気持ちは、段々と変わって行った。

彼女は、戦争に直接参加せず、各地の戦争難民たちを助けたり奴隷とされた人たちを解放する活動を始めた。最初こそ狭い範囲でしか活動出来なかったが、徐々に協力者は増え、大戦終了後には多くの荒廃した町を復興させる大きな力を持つ団体になっていた。

そんな彼女が、この世界の外に別の世界があると知ったのはほんの偶然だった。慈善団体の会長職を退いた彼女は、また姿を変えて世界を旅し始めたのだが、その先で奇妙な物を見つけたのだ。

「あ、コレ知ってるー。なんかのセーブポイントだろ？」

そう言って適当に触りはじめると、その奇妙な装置はいきなり大きな音を立てて動き出す。戸惑う彼女の身体は、不思議な光に包まれて行った。

「うはっ、これ何てスタオーセカンド！？」　意味不明な言葉を残して、彼女は魔法世界から姿を消した。

気づくとそこは、またしても戦火。銃弾飛び交う中、彼女は必死で弾丸を剣で弾きながら戦場から逃げ出す。なんとか追手をまいて逃げ込んだ廃屋で目にしたのは、白骨化した死体と荒らされた部屋、床に落ちている新聞紙。

１９１８年…？

「ここ、過去の世界かよ！」

ゲートは魔法世界と旧世界を繋ぐだけでなく、時間さえ飛び越える物だった。実は他の転生者が作ったものだったのだが、完成した後に魔女の疑いをかけられ殺されていた。そのまま放置されていた物を、彼女は起動してしまったのだった。

彼女は、この世界でも戦争難民を助ける活動を行った。時として、戦争を止めるために自ら戦う事もあった。姿形を変えながら世界中で活動を行ったのは、染み付いた彼女の生き方。それに加え、自分の知っている歴史を変えられるのではないか、という期待もあった。

しかし、結局彼女には歴史を変えるような事は出来なかった。大きな歴史の波は、彼女を問答無用で飲み込み翻弄した。第二次世界大戦終結までに変わった事と言えば、死者の数が歴史よりも幾分少なかった、というぐらい。それでも素晴らしい事なのだが、彼女の失望は大きかったようだ。その後彼女は日本を中心に活動を続けたが、偶然旅先でゲートを見つけて魔法世界へと帰って行った。もう、誰かを救う旅に疲れたのだ。彼女は、また気楽なハンター業に復帰する事にした。

どれくらいの年月が経っただろうか。魔法世界の交易都市グラニクスにある闘技場に、一人の少女の姿があった。

『挑戦者、ボブカット・レイ！』

会場にどよめきが起こる。

短くまとめられた青い髪、赤い瞳、純白の肌。そして手には真っ赤な槍を携えている。その愛らしいワンピース姿は、かつて闘技場荒らしとして恐れられた伝説のハンターであった。

「でもなんで年取ってねーんだよ！別人だろ！！」

「いや、あれは本人だ！」

「娘じゃないか？」

騒然とする会場の反応を満足そうに眺めながら、レイは呟く。

「だって私、三人目だもの。」　内心でガッツポーズをとるレイ。いつか言ってやろうと思っていたセリフだった。

『迎え撃つは最強の英雄、伝説の傭兵剣士ジャック・ラカーンッ！！』

「おろ？」

レイは嫌な予感がして相手の姿を凝視する。全身無駄に鍛えあげられた筋肉、腕の縫い目、品のないにやけ面、いやらしそうな顔、スケベそうな容姿。

「後半、顔の事ばっかじゃねーか。」

「うわ、フランケン・シュケベ！？」

凄く嫌そうな顔をするレイにラカンは笑いかける。

「オマエが戻ってきたって噂になってたからな。ここに居りゃ会えると思ってたぜ。」

「勘弁してほしーなー。男にゃ興味ねーんだよ…。」

二人が構えると、客席のざわめきがヒートアップする。その興奮がピークに達したと思われた瞬間。

『試合、開始！』

ウオォォォォォ！！

会場は轟音に包まれた。

「さあ来い、オマエの実力…へブッ！？」

レイの放った朱雀煉獄掌がラカンの顔面に炸裂する。

「てめえ卑怯だぞ！！」

「ブレスケアしとけ、クセーぞお前。」

ズガガガガッ！

両者の攻撃が空中でぶつかり合う。ラカンは大剣、レイは槍。パワーとスピードの戦いは次第にラカンが押し始める。

「どうしたパイプカット・レイ！」

「変なあだ名つけんな裸漢！」
「うおお、発音が嫌すぎる！」　打ち合いが激しさを増す。そこにラカンが渾身の一撃を放つが、レイは全力で槍を振るい剣をはじいた。

「やるじゃねえ…グハッ！？」

「ほれほれほれほれ！」
レイの槍がラカンに喋る隙を与えない。その姿は全身青タイツのアイルランドの英雄を思わせた。

「うおらあぁ！」
ラカンが全身で魔力を爆発させると、レイは空中に吹き飛ばされた。レイは重力を無視した動きで宙を舞い、ラカンから離れた場所に降り立つ。

「ちいっと本気出させてもらうぜ！」
ラカンの周囲に、いくつもの大剣が現れた。

「んじゃ、こっちも。」

レイも、宝具『ゲート・オブ・バビロン』を展開する。周囲に数々の伝説級の武器が現れた。
「オイ、ズルいだろそりゃ。」
「褒め言葉にしか聞こえない。」

ガガガガガガガガッ！！

互いの武器の雨が所狭しとぶつかり合う。その間も二人は動き続け、武器の嵐は時に観客席近くにも及んだ。そのたびに、悲鳴があ

がる。

「おい、ラカン！」

「なんだ！」

「……チラッ（純白）」

「うおお！？」

ズガアァァン！

レイの無詠唱『千の雷』が炸裂する。ラカンは思わずのけぞった。

…しかし、ここまで攻撃してもラカンには大したダメージを与えられない。逃げ続け体力を消耗してきたレイは、手に持った槍を消して奇妙な形の武器を取り出した。

「これで終わりにしようや、ラカン。いい加減飽きた。」

「なんだそりゃ？」

急速に、周囲の空気が流れを変える。その奇妙な形の剣の先端部分に、異常な魔力が収束していった。

あれは、ヤバい。

ラカンは、本能的に感じ取っていた。あれは、シャレにならない。

「乖離剣！（エア）」

ズガガガガアァァァァン！
「うおあぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

全身に魔力を漲らせ防壁を張るラカン。恐るべきはその頑丈さであろう。全身に乖離剣の一撃をまともに食らいながら、四肢は千切れ飛ぶことなく、最後まで耐えきって…

「ゲフッ…やるじゃねえか。」

全身血まみれになりながらも、そこに立っていた。

「なっ…！？」

そして、驚愕するレイに猛ダッシュする。どこにそんな力が残っているというのか。その右手には、先ほどの乖離剣のような空気の渦が現れる。

「羅漢破裏剣掌！！」

ドゴォォォンッ！
「ぐあぁぁぁッ！？」

レイの身体が、掌を受けた場所を中心に回転しながら会場端まで吹っ飛ばされた。壁に激突して、ズルズルと崩れ落ちる。

「へっ…俺も、やべえな。」

片膝をつく。さすがに、身体はもう動かない。しかし、なんとか気力を振り絞るとラカンは立ち上がった。

『…7！……8！……9！』

会場も固唾を飲んで見つめる。そして。

『10！　勝者、ジャック・ラカン選手！！』

大歓声が沸き起こった。

倒れるラカン。満足そうに笑う。いい戦いだった。特にパンチラが。

そこへ、嘘みたいにピンピンとしたレイがやってきた。

「チッ、負けちまったか。久しぶりに致命傷受けたから再生に時間かかっちまった。ほれ、肩かすぜ。」

「オマエ……そうか、そういう事かよ。そりゃ変わんねえ訳だ。」

「そういう事。」

ラカンを支えながら、レイは笑う。ラカンはレイに聞いた。

「所でオマエ、何歳なんだ？」

「体感で100は超えてるな。」

その言葉を聞いて、ラカンは大声で笑う。レイの胸を揉みしだきながら。

「その割にいい張りしてるじゃねーか、ロリババア！」

ラカンが星になったのは、言うまでもない。

その日、近くのホテルに泊まっていたレイは思わぬ来客に驚いていた。ホテルのロビーで待っていたのは、かつて一度だけ言葉を交わしただけの人物。

「久しぶりだね、レイ。」

「そっちもな、ちびカヲル。」

白髪の少年、フェイト・アーウェルンクスであった。

「相変わらず、よく分からない事を言うね。カヲルって、誰だい？」

「気にすんな。それより飯食ったか？」

「いや…」

レイはそれを聞いて、ニヤリと笑う。

「じゃあ、これから一緒に行こう。ここのレストラン、かなり美味いんだよ。」

「…分かったよ。前も思ったけど、君は強引だね。」

「行動力があるだけさ♪」

レイに腕を引かれ、フェイトはやれやれと首をふりながらも歩きだした。

ホテルの最上階にあるレストランで、二人は軽めの夕食を取っていた。レイはパスタを美味しそうに食べていて、フェイトはパニーニをもそもそと食べながらそれを見ていた。

「所で、さっきは残念だったね。もう少し真面目にやってたら、勝てたと思うよ。」

「モグモグ…まふぁか。ングッ…ん。アイツはバケモンだよ、多分まだ隠し技沢山あるだろうね。」

水を飲んで落ち着くと、レイは悔しそうに言った。きっと、別のやり方をしていても結果は同じだっただろう。戦闘経験が違いすぎる。

「僕としては、君に勝って欲しかったよ。」

「その分じゃまだ勧誘諦めてねえみたいだな。」口元を拭いて、フェイトを見る。以前会った時も、いきなり勧誘されたのだ。

「僕の気持ちは変わらないよ。君の力が必要なんだ。たった一人でも、全ての人を救おうと走り回った君の強い行動力が。」

レイは、苦笑いで答えた。

「お前は勘違いしている。俺は自己満足の為に走り回っただけだし、

結果に失望してハンター稼業に戻ったちっぽけな人間だよ。世界を救うなんておこがましい事言えねえって。俺は、さ。」

フォークでパスタをぐるぐると絡めて言った。

「人助けは、廃業したワケ。……モグモグ。」

フェイトはその言葉に若干の失望を覚える。

「可能性を、信じないのかい？」

「信じさせてくれる何かを探して、旅をした。その結果が、今の俺だよ。」

「……残念だよ。」

「悪いな。」

その後は、和やかに食事が進んだ。レイも楽しかったし、フェイトもきっと楽しかったのだろう。別腹と称してパフェを頼むレイに太るよ、と注意するフェイト。美少女は太らないと言い放つも食べきれないと泣きつくレイ、やれやれと一緒に食べるフェイト。きっと、周りの人間は姉弟か恋人同士かと思った事だろう。

そんな楽しい時間もあっという間に終わりを告げて…。

ホテルの外、見送るレイにフェイトは一礼をして背を向ける。

「俺を殺さないのか？」

その背中に声をかけると、フェイトはこちらを振り向かずに答えた。

「君が、敵に回らない限りは。」

「悪いな、フェイト。」

「……やっと、名前で読んでくれたね。」少し微笑んだ彼の瞳には、何故か涙が浮かんでいたような気がした。

フェイトはそのまま、街の雑踏の中に消えてゆく。レイはその姿が消えるまで、見送り続けた。

ボブカット・レイ。
さすらいのハンター。

世界を旅して多くの人命を救ったが、歴史を変えようとして失敗し、己の小ささに失望した少女。

しかし彼女は、このネギまという世界において、ささやかではあるが歴史を塗り替えていた。麻帆良女子中等部３－Ａの名簿を見ると、そこに、本来であればあるはずの名前が見当たらない。

『相坂さよ』、である。

彼女は戦時中に爆撃を受けた際の傷が原因で死ぬハズであった。しかしそれを、偶々居合わせたレイが救っていたのである。

相坂さよは幽霊になる事なく、平凡だけど幸せな人生を送った。
家族に看取られながら臨終を迎える事が出来たのだ。

レイにとっては、数多く救った命の一つ。しかしこの物語にとっては重大な意味を持っていた。しかし彼女には、そんな事は分からない。

「いいいいやっほおぉぉうい！」

今日も、ボブカット・レイは走り大トカゲに乗って世界を駆け抜ける。

自分が変えた運命など知る事もなく。

ただ、ひたすらに獲物を追いかけて行く。

第十一話　魔法先生の乱　前編

麻帆良学園には職員会議が二つある。一つは一般的な意味での職員会議であり、もう一つは魔法先生たちによる会合だ。そして、今現在行われているのは後者であり、それは会議というより言葉の銃弾が飛び交う戦場の様相を呈している。

「何故西の刺客や侵入者の多い今、闇の福音の封印を解くのですか！学園長は先日の一件をどうお考えなのです！」
「我々の危機を救ったのは彼女だろう！」
「それは一部の人間が言っているだけで信用できる情報ではない！」
「そもそも悪の魔法使いを野放しにしていいわけがないだろう！」
「スプリングフィールド姉弟の修行と一般人の安全と、どちらをとるおつもりですか？」

会議は明らかに反対派が優勢だった。これはスプリングフィールドという名前のブランド価値ね低下も原因の一つだが、それ以前にエヴァンジェリンを嫌う人間が多過ぎたせいでもある。皆、彼女が人を傷つけるという前提で議論していた。

その場をまとめるべき学園長は、先日の図書館島での騒動で信頼を失い始めている。高畑の擁護も無視され、反対派の意見はエスカレートするばかりだ。

「やはり完全に封印してしまう他ないだろう。」

冷静さを失うと、結局はその意見に至る。しかし、今まで黙っていた色黒の教師がそれに反対した。ガンドルフィーニである。

「現時点で、今の彼女が危険であるという証拠はどこにもないでしょう。今は封印を解くか否かの話をしているのであって、彼女を攻撃するかどうかの話ではないハズだ。」

その言葉に、周囲がどよめいた。

これまで、ガンドルフィーニは正義狂いの魔法使いに近い人間だった。今回のように、反対派と距離を置くような発言は極めて珍しい。

「ガンドルフィーニ君の言う通りじゃ。ネギ君とアリア君の魔法修行は本国からの正式な依頼じゃし、エヴァンジェリン以上にこの麻帆良で魔法に通じとる者はおらんじゃろう。彼女は元々三年の約束でここにおる。賞金も取り下げられとる以上、彼女を一方的に非難する事は出来ん。ここに縛り続ける事も、のう。」

「エヴァンジェリン以上の魔法知識がある人間がいるのなら、今ここで名乗り出てくれませんか。その人にネギ君たちを任せれば、エヴァンジェリンと交渉する必要もなくなります。彼女以上に本国を納得させる事が出来る人間がいるなら、是非名乗り出てくれませんか。」

学園長に続き高畑も発言する。特に、高畑の言葉に反対派は苦々しい顔をした。小声で、「魔法の使えないヤツが偉そうに…。」という声が聞こえてきた。

結局、名乗り出る者はいなかった。

「ならば、このままエヴァンジェリンとの交渉を、封印を解く方向で進める。以上じゃ。」

最後は強引に締めくくった。

いつもの、職員会議。結局は学園長の言うがままになる。

しかし、今回はさすがにこのまま終わるわけがないと、その場にいた誰しもが思っていた。

会議が終わった後、学園長はすぐさまエヴァンジェリンに電話を入れる。時間は夜の七時半、エヴァンジェリンは食事中だった。

「何だ、ジジイ！また邪魔をするつもりか！？」

「ちょ、ちょっと落ち着くんじゃ！真面目な、緊急を要する話じゃ！」

その言葉に、エヴァンジェリンは面白くなさそうに応えた。

「なんだ？厄介事か？」

「ある意味、そうかもしれん。さっきの会議で封印の件を話したんじゃがのう。やはり一部の人間が拒絶反応を起こしおったんじゃ。」

「フンッ。で、どうするんだ。中止するのか？」これは前々から予想していた展開だ。

「いや、早急に封印を解くのじゃ。どうも、反対しとる者たちが過

激な行動に出かねん状況なんじゃよ。高畑君達に警戒してもらっておるが、抑えきれんかもしれん。」

ここで、予想が外れた。ここまで事態は深刻だったのか。

「久しぶりだな。今までここにいて、こうまで連中がヒステリックになった事なんて初めの年以来だろう。」

「ワシも驚いておるよ。これも皆、ワシの力不足のせいじゃ。」

「殊勝な事を言うな、気持ち悪い。言っておくが、登校地獄の方はすでに解いた。あとはお前の仕掛けた封印だけだ。」

ギクッとする。バレていた。

「す、すまんのう。ワシは今うかつにお主の所に会いにいけんのじゃよ。解く手だてはあるんじゃろ?」

「あるにはあるがな。アリアの手を借りないと無理だ。それも、二日は掛かるらしい。あいつにも仕事があるし、時間を作るのは大変だろう。」

そう、確かにアリアは二日時間をくれと言っていた。多くの封印術をパズルのように組み合わせた学園長の封印を解くには、純粋に魔力が続かないらしい。

「それなら、大停電の日を利用すればええじゃろ。お主の封印は学園の結界と連動しておってな。電気も利用した変則型じゃから停電の日は効果がほとんどなくなる。解除も楽なハズじゃ。」

「なるほどな。どうりで停電の時に体調が良くなるわけだ。」

実は花粉症のエヴァンジェリン。停電の日、その花粉症の症状がなくなるのだ。杉、ヒノキ、ブタクサ、ヨモギ、稲、白樺に加え最近ではタンポポにも反応するエヴァンジェリンにとって、大停電の日は心休まる日だったりする。

「登校地獄が解除されとるなら、無理に登校する必要もないじゃろ。」

「そうだな。この家の中なら安全だから、登校は封印を解くまで控えよう。」

エヴァンジェリンはそう言った後、二言三言交わして通話を切った。

「マスター。私はどうしたらいいでしょう。」

「ん？ああ、そうだな…。明日だけ登校して、先生たちに事情を説明しろ。それから、超鈴音に停電までの間の出前を頼もう。買い物もロクに出来なくなるだろうからな。明後日以降は、ここにいてくれ。」

「了解です、マスター。」

面倒な事になった、とエヴァンジェリンはため息をついた。平穏なんて手に入らないと知っていた。けど最近は楽しく、もしかしたら手には入るのでは、と思ってしまっていたのだ。

食事を続ける気にはなれず、エヴァンジェリンは悲しい表情で窓

から月を眺めるのだった。

【アシュタロス】

朝からピリピリとした空気を感じる。特に、魔法先生リストに載っている連中の目つきといったら異常者そのものだ。そんな顔で生徒の前に出るつもりだろうか。通報されかねんぞ？昨日の会議の様子は盗聴していたから彼らの心情は分かるが、教師という立場を忘れてはいないか。

彼らの行動は非常に問題だった。おそらくエヴァンジェリンの監視の為だろうが、授業を自習にしてまで監視に行っていたので新田先生に報告した。彼らも、もっとニュースを見たほうがいい。授業を投げ出して政治活動に参加していた教師が処分を受けた、というニュースがあったばかりなのだ。ましてやこの場合は女子生徒のストーキングだ。常識的に考えてまずいだろう。

それに引き換え、生徒たちは平和そのものだ。四日後の学園メンテナンスによる大停電を前に、ロウソクなどの停電対策用品を買いまくったり、ちょっとしたお祭り騒ぎだ。寝てしまえば余計な費用を出さずにすむと思うのだが、それは黙っていた方がいいのだろう。

心配なのは超だ。どうもエヴァンジェリンに出前を頼まれているらしい。彼女の家へ行くのは危険だろう。超は学園側から純粋な一般人とは見られていない。出自を追うと、どうしても不自然な点が出てくるからだ。自ら偽名を使って会社を設立し、巨額の資金を動

かしている点も既にバレているだろう。魔法先生たちは構わず襲撃して来る可能性が高い。　我が分身にも、そろそろ表舞台に立ってもらおうか。

ネギ・スプリングフィールドは非常に真面目な少年だ。常に生徒の為を思い、向き合っている。特に、正式な教師と認められ３－Ａを任されている今はその意識が非常に強い。そんな彼が、エヴァンジェリンの欠席を気にしないわけが無いし、その理由を聞いて心を痛めないわけがない。

「僕らのせいでエヴァンジェリンさんが辛い思いをしているんだよね…。」

どうしても、自分に責任があると思ってしまう。これは性分らしい。

「何言ってんのよ。悪いのは生徒を攻撃しようとしてる一部の先生で、ネギじゃないわ。私たちがいなくても何かしら理由を見つけて攻撃するような連中なのよ。」

アリアはそう言ってネギの肩を叩いた。

「ほら、シャンとしなさい！次の授業に行くわよ！」

「あ、待ってよお姉ちゃん！」

慌てて後を追う。そうだ、今ここで落ち込んでも何も変わらない。しっかりしなきゃ。ネギはすぐに気持ちを切り替えて次の授業へと向かった。すぐ悩んで落ち込むネギの手綱を、アリアは上手く操っていた。

その日の授業は、何も問題なく行われた。バカレンジャーたちも、この間の件以来真面目にノートを取るようになっていた。あれだけクラスメートに助けられては、態度を改めざるを得ない。すぐに馬鹿騒ぎになるのは変わらなかったが、授業の進行を邪魔するレベルではなかった。クラスの雰囲気は良くなっていたし、ネギも暗い気持ちを引きずらずに済んでいた。

しかし、そんな中。

神楽坂明日菜だけはネギの内心の不安を敏感に察していた。

「ねえ、アンタ大丈夫？なんか無理してない？」

ホームルームを終え、職員室へと向かうネギに声をかける明日菜。ネギは「大丈夫ですよ」と笑って誤魔化すが、隣にいるアリアが耳元で囁く。

（ある程度教えてあげた方が、納得して引いてくれるわよ。何も教えなかったら余計気を遣わせるわ。）

そう言われて悩むネギ。明日菜は先日の補習準備の際に一生懸命手伝ってくれた。無碍にしたくはなかった。

「えっと、エヴァンジェリンさんが欠席してるじゃないですか。」

「エヴァちゃん？ああ、風邪なんだってね。」

「実は、その…それだけじゃないんです。」

そこで、ネギは深刻そうな顔を作る。ゴクリ、と唾を飲む明日菜。

妙な顔のアリア。

「エヴァンジェリンさん、女の子の日らしいんです！」

「「…は？」」

パコーンッ！

しばらく止まった後、アリアがファイルでネギの頭を叩く。

「バカ、そんなんで休んでたまるかー！！アンタ意味分かってないでしょ！」

「だって、ネカネお姉ちゃんが前アーニャが休んだ時に…」

「もしそれが本当だとして、それで1日悩むアンタって何よ？」明日菜もしらける。

仕方なく、アリアが答えた。

「余り知らせたくないんですけど、エヴァンジェリンさんは最近ストーカーの被害を受けているらしいんです。ストレスで体調も悪いようですから、少し休みが続きそうなんですよ。」

アリアが言うと、明日菜も真剣な顔になる。ネギは、そこまで言っていいのかと不安になった。

「…そうだったの。それなら、隠そうとも思うわよね。ごめん、ネギ。無理に聞いちゃって。」

「いいんです。僕も、明日菜さんに心配かけるような素振りをしちゃいましたから。」

そこまで言うと、明日菜が何かを思いついたような顔をした。

「心配なら、お見舞いに行けばいいじゃない。」

「あ、そうですね！…でも僕仕事あるし、エヴァンジェリンさんの家もよく知らないんです。」

困った顔のネギ。アリアは仕方ないな、という顔をした。

「いいわ、今日は私が全部やっといてあげるからネギはお見舞いに行ってきて。」

「でも…。」

「いい？生徒のお見舞いも立派な先生の仕事よ。しっかりやんなさい。」

そう言うと、ネギは明るい顔をして頷いた。それを、少し遠くから眺めていた人物が近づいて来る。

絡繰茶々丸だった。

「ネギ先生。マスターの家に向かわれるのでしたら、ご案内しますが。」

「あ、茶々丸さん！ありがとうございます、凄く助かります！」

「あの…私も行っていいかな。エヴァちゃんの具合、私も気になるから。」

意外な申し出にも、茶々丸は頷いて答える。

「マスターも、きっと喜ぶと思います。」

こうして、三人はエヴァンジェリンの家に向かう事となった。アリアはその後ろ姿を見送りながら、違和感の原因である明日菜の事を考える。あんなキャラだっただろうか。転生者ではないようだが…。

まぁ、ネギに害を成すわけではなさそうだからいいか。そう言って、アリアは職員室へと向かった。

第十二話　魔法先生の乱　中編

放課後、茶々丸とネギ、明日菜はショッピングモールで買い物をしていた。ネギと明日菜はお見舞いの果物を、茶々丸は向こう四日間の食料を買う為だ。出前を頼めるのは夕食のみ、朝、昼はこちらで用意するしかない。

数十分の滞在後、少し開けた広場で待ち合わせる。ネギたちが来る頃には茶々丸は既に広場に来ていて、猫に餌を与えていた。この近所に住む子猫たちで、買い物の際に餌を与えるのが習慣となっていた。

茶々丸の姿を見たネギたちは、手を振って茶々丸の方へ歩いてゆく。餌をやり終えて立ち上がる茶々丸。その後方に、ネギは何か光るものを見た。

「危ない！！」

とっさに魔法障壁を展開して走り出すネギ。振り返った茶々丸を庇うように飛ぶと、魔法の矢がネギの身体を空中で捕らえる。

ズガガガガッ！

「ぐあっ…！」そのうち数本が障壁を突破し、ネギの肩と腕をかすめる。深手は負わなかったものの、血が流れ出す。

「ネギ！！」

「ダメです、来ちゃいけません！！」

走りよる明日菜を止める。ネギは攻撃のあった方向を見据えた。魔法使いからの攻撃。周囲に人影が無くなっていることから、人払いの魔法が掛けられている事が分かる。

しばらくして、屋根の上から数人の魔法使いがネギたちの前に降り立った。

「やあネギ先生。買い物ですか？」

ニヤリと笑う男は、職員室で見たことのある人間だった。

「アナタは…！何故生徒を傷つけようとしたんですか！？」

「生徒？…ふふふ、生徒ねぇ…。そこのロボットは闇の福音の従者だ。理由なら充分すぎるほどあるだろう。」

その言葉に激怒するネギ。コイツらが、エヴァンジェリンさんを狙っているのか！

「で、どうしますか？この人数相手に、生徒を庇いながら戦うおつもりですか？」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる男たち。ネギは後ろの二人に、小声で話しかける。

（大丈夫、僕が守ります。だって僕は…）

持っていた杖の封を解く。魔法発動体。英雄である父、ナギ・スプリングフィールドから受け継いだ杖であり、意志である。今、ここで諦めるなんて選択肢は自分には無かった。何故なら自分は。

「僕は、正義の魔法使いですから！！」

ズガアァァン！！

ネギの杖から雷と風の矢が魔法使いたちに放たれ、その全てが命中、全員を吹き飛ばす。目映い光が周囲を照らした。

これは、ネギが自分で考えた魔法であった。かつてウェールズにいたころ、兄たちの修行を遠くで見ていた日々。どうしても仲間に入れて欲しくて必死に魔法を勉強した。しかし、どうしても兄たちに届かない。どうしたら良いか、村一番の魔法使いであるスタンおじいちゃんに聞いた所、「ネギは小難しく考えるのが好きじゃなぁ。どうせなら自分だけの必殺技でも考えたらどうじゃ。こう、ビビビーッと。」というアドバイスを貰った。明らかに酔った上での発言だったが、ネギは真剣に捉えていたのだ。

ネギが作り出した、『風雷の射手』。自分の得意属性と、父の得意属性を組み合わせた魔法。この魔法を練習している時は、隣に父を感じる事が出来た。練習に練習を重ね、今では無詠唱で放てるまでになっていた。

「グッ…グウゥ…そんなバカな…。」地面に倒れ呻く男たち。ネギはそれを見据えて言い放つ。

「帰ってください。そして、二度と僕の生徒たちを傷つけようとしないでください。」

「畜生…やはりお前は英雄の子なんかじゃ無かったな…災厄の王女

の子だ…。」

「え…？」男の言葉に、ネギが反応した。その瞬間、ネギの右方向の物陰に隠れていた男がネギに向かって矢を放つ。それは、魔法の矢ではなくボウガンの矢だった。

「…っ！！」

放たれた矢に、反応できる人間はいない。矢は真っ直ぐにネギの肩に迫り。

バキィッ！

飛び出した茶々丸の腹部に食らいついた。

「茶々丸さん！！」

「ははは っ！仕留めたぞ！」

ゆっくりと崩れ落ちる茶々丸。困惑するネギと明日菜に次いで、視界に子猫たちの姿が。

「ネギ…先生…子…猫たち…を…」そこまで言って、茶々丸の瞳から光が消える。そこにあるのは、くすんだガラス玉であった。

「ぅあああああぁぁ！！」

その叫びは、ネギのものでは無い。それまで後ろで立ち尽くしていた、明日菜の叫びだった。

「明日菜さん！ダメです、戻って！！」

ネギが声をあげるものの、明日菜は止まらない。魔法使いたちは構わず明日菜に向かって魔法の矢を放つ。それを…。

キィィンッ！

「何！？」

明日菜は全てはじく。そのまま男たちに突っ込むと、気をまとった拳を腹にめり込ませた。

「ぐへぇっ……ゴフッ！」

血を吐き出す男。明日菜はそれを蹴り飛ばすと次の男につかみ掛かる。その時、横から現れた男が明日菜の腕を掴んで止めた。

「そこまでだ、明日菜君。」

「タ…高畑先生…？」

倒れている茶々丸の傍らにはガンドルフィーニ。茶々丸を抱き起こしながら、男たちに言い放つ。

「一般人を巻き込んでの戦闘行為は禁じられている。先日の会議でも彼女たちへの攻撃は禁止されたハズだ。相応の処分を覚悟してください。」

「な、何が一般人だ！この女も魔法をはじきやがったぞ！」

明日菜を指差す男に向かって、ネギは睨みつける。

「女性に向かって指を指さないで下さい。失礼ですよ。」

「なんだとクソガ…」
言いかけた瞬間、高畑の居合い拳が男の顔面をとらえる。男は後方の店の壁に叩きつけられた。
「今の僕は機嫌が悪い。次は無いと思った方がいいよ。」
静かに言う高畑の言葉を聞いて抵抗をあきらめた男たちは、悔しそうな表情を浮かべて去って行った。
「タカミチ…。」
「よく頑張ったね、ネギ君、明日菜君。」
「とりあえず、この子を修復してもらいに行きましょう。ロボット工学部ですよね?」
ガンドルフィーニの言葉に高畑が頷く。ネギが葉加瀬に連絡を取ってから、一行は茶々丸を修復しにロボット工学部研究所へと向かった。
一方その頃、超鈴音は石田留美とエヴァンジェリン宅へと足を向けていた。
「一緒はマズいんじゃないカ?」

「それが、マスターの指示なのです。」

超の疑問に石田も困った顔で答える。アシュタロスからは、超の護衛をしろと言われている。が、自分より超の方が明らかに強いのだ。一般人という立場を利用した虫よけだろうか。

「ところでそれ何ですか？やけに大きい入れ物で出前するんですね。」

「エヴァンジェリンは鬼ネ。コースの出前とかイジメに近いヨ。」

電話口でエヴァンジェリンは、とりあえず何が美味いんだ？と聞いてきた。皆美味いと答えると、なら少しずつ全部の種類を持って来いと言う。

「満願全席ですか？」

「無理だと言ったら、オススメでコースを作れと言ってきタ。まあその分儲かるからいいけどネ。」

エヴァンジェリンの我が儘には慣れているし、茶々丸制作時に魔法の知識を教えてくれた。嫌な感情は持っていなかった。

「これを機に、うちの店のトリコにするヨ。」

そう言って笑う超。石田も苦笑いを浮かべた。そして…。

（気づいてますか？）

（もちろん。まさか本気で仕掛けて来るとは思わなかったヨ。）

周囲を囲まれている。エヴァンジェリン宅へと続く道、左右に広がる森に、１０人ほどの気配。

超たちの前方を塞ぐように、三人の男たちが現れた。

「君たち、どこ行くの？」

ビクッとした表情を作って、超と石田は怯えるふりをする。

「え、ええ。この先の家に出前に行くんですが。」

「すみません通してくれませんカ？」

薄ら笑いを浮かべた男たちは一向に退こうとしない。無理に通ろうとしたら、肩を掴まれた。

「や、やめて下さい！」

石田が振り払うと、男が大げさに痛がる素振りをする。他の二人はニヤリと笑ってから石田を睨みつけた。

「ちょっと声かけただけでソレは無いんじゃない？」

「ちょっとこれ、どうしてくれんの？歯、折れてるかもしんないよ？」

…いつの時代のチンピラか。しかしよく見ると、必死に若作りしているのが分かる。目尻のシワや首、手の甲のシワを見るに、四十近いだろう。そういう時代に生きていたのかもしれない。

（どうするネ。このまま潰すカ？）

（今、周囲の魔法使いを補足し終わりました。魔法を封印しますから、超さんは悲鳴を上げて下さい。）

（は、恥ずかしいヨ…。）

石田は、怯えながらも植物たちとリンクする。本来なら視界に入れないと魔法封印はできないが、植物とリンクすれば広範囲の封印が可能になる。

「きゃあああああ！助けてアルヨぉおおおお！！」

そんな時までアルよ口調ですか…。少し脱力しながらも、石田は魔法使いたちの魔法を封じ込めた。

男たちは、笑っている。助けなんて、来るわけないと。人払いの結界が張り巡らされているのだから、と。

しかし、それなら何故。

遠くから地響きが聞こえてくるのか。

どうして、木々がざわめくのか。

何故突然、花が咲き乱れるのか。

「お・ま・ち・な・さーい！！」

「「お姉さまー！！」」

…この二人、ノリノリである。

その場に現れたのは、麗しの女神、高音・D・グッドマン。漆黒のドレスに身を包み、パピヨンなメガネをかけていた。

「ガゥッ！」…それを乗せたクマ。

「ウキッ！」そばに控えた猿。

「「「キューン！」」」鹿の方々。

「ウホッ」ホモ…ではなくゴリラ。

その他、多数の動物の皆さんだった。

「「「なんだー！？」」」驚く男たち。このリアクションは、正しい。

「この私の目が黒いうちは、この麻帆良での狼藉は許しませんよ！」

そしてクマの背から跳躍すると、空中で一回転して影操術で男たちに攻撃を仕掛ける。伸びた影の刃が超たちに絡んでいた男たちをはじきとばした。

それを合図に、動物たちの攻撃が始まった。繁みに隠れていた男たちは悲鳴を上げて逃げ出す。魔法を唱えた者もいたが、何故か魔法は発動しなかった。

ある者はモグラの掘った穴に足をとられ、バランスを崩した所に鹿の後ろ蹴りが炸裂する。ある者は高音を攻撃しようとしてゴリラのラリアットをくらい吹っ飛び、飛ばされた先でクマのローリン

グソバットを受け昏倒した。
そしてある者は超と石田を攻撃しようと走り出した瞬間に猪の突進を受けてよろめいた所にサルによる奥義、猿飛三連脚をまともに食らって意識を失った。

「観念なさい！」

「ガァウ！グアォォ！」

「ウキィィッ！」

「キューン、キューン！」

「ウホッ、いいウホホッ！」

…何かおかしかったけど、気にしない。

超と石田が呆然と見守る中、怪獣大決戦のような戦いは一方的な展開を見せて行った。

全てが終わり、高音が動物たちに礼を言うと、動物たちは手を振ってから去って行った。

「危ない所をありがとうございます、高音先輩。」

「本当に、助かったアルヨ。」
その言葉を聞いて、焦る高音。仕切りにメガネを気にしている。
「な、な、なんの事ですか?私は通りすがりの正義の魔法使いですわ!」
…どうしちゃったんだろう。
二人は顔を見合わせる。
(気づかないフリした方がいいのかナ。)
(いえ、ここらで現実と向き合ってもらった方がいいと思います。)
「先輩、それは何かの仮装ですカ?」
「だから先輩ではないと…。」
「今度宮崎さんがお礼にクッキー作って行くみたいですよ?」
「あら、そんなの気にしなくていいのに……ハッ!?」
ニッコリと微笑む石田。その時ばかりは、この美しい笑顔が悪魔の微笑みに見えたと、後に高音は語る。
高音は…泣き出した。
「うぅっ、バレてしまいましたわあああああ!オコジョ、オコジョなんてイヤぁあああ!」

「ちょっと、高音先輩!?」

「よく分からないけど、すまなかったアル！泣き止むネ！」

結局、高音が落ち着きを取り戻したのはそれから３０分後の事であった。そして、その頃。泣き出したい気持ちの人間がもう一人いた。

「遅い…お腹すいた……。」

エヴァンジェリンだった。

第十三話　魔法先生の乱　後編

学園長室に緊張が走っている。原因は、この部屋に呼び出された二人、超鈴音と石田留美である。エヴァンジェリンへの出前とクレーム対応を済ませた二人は、高音と、その上司にあたるシスターシャークティに連れられこの場に来ている。強制連行という言い方が正しいだろう。

本来なら、ここ一時間ほどの記憶を改ざんすれば済む話である。しかし話はそう単純ではなかった。

超を襲った魔法使いたちが、魔法を使えなくなってしまったのだ。

魔法使いの魔法を封じる。それも完全に、永久に。それは、魔法を寄りどころにしている人間にとっては致命的な損害だ。もしそんな事ができる人間がいたら、それは魔法社会全体の敵である。超と石田は、危険人物として警戒されていた。

「ふむ…では、君たちは出前を届けただけ、と。他には何もしていないんじゃな？」

「ただ驚いてただけネ。クマを間近で見たのは初めてだったヨ。」

高音が少しうなだれる。別に高音の責任ではないのだが。

「そういえば、世界樹さんがやけに怒ってましたね。アレは関係あるのかな…。」

その言葉に、近右衛門の目が光る。

「世界樹が怒っている？どういう事じゃ？」

石田は、うまく食いついて来た近右衛門を見て内心ほくそ笑んだ。

「ええ。実は、私は植物と意志を通じさせる事が出来るんです。死んだお婆ちゃんも出来たから、多分そういう家系だと思うんですが。」

「ほう…。」近右衛門はヒゲを撫でながら驚く。そうした能力者の存在がいる事は知っていたが、珍しいのだ。

「もしかして、私の周りで花が咲いたりしたのは…。」高音の言葉に、申し訳なさそうに頷く石田。

「高音先輩に助けてもらった事を、桜並木の皆に自慢げに話しちゃったんです。あの子たち、だいぶお喋りだったみたいで…。たぶん、花達の間で先輩のファンクラブでも出来たんだと思います。」

ガックリとする高音。石田は心の中で謝った。これも、嘘なんです。

「それで、先ほど襲われた時、とっても大きな声が聞こえて来て…何を言ってるかは分からなかったんですが、怒ってる事だけは分かりました。」

「う、ううむ。それが、世界樹だと？」

近右衛門の言葉に、シスターシャークティが異議を唱える。

「まさか、今の戯言を信じるのですか！？」

「少なくとも、嘘はついてなさそうじゃのう。」

そのやり取りを見ていた超が、石田に聞く。

「今、世界樹と話す事、出来るカ？」

「多分、大丈夫です。ここから近いですし、姿も見れますからね。」

窓の外に見える世界樹。雲に届かんばかりにそびえ立っていた。

「あの、何があったのですか？私たちが呼ばれたのは事情聴取だけなのでしょうか？」

「明らかに敵意を向けて来る人間がいるかラ、何か別の目的が有りそうだヨ。」

二人が視線を送るのはシスターシャークティ。近右衛門は冷や汗をかきながらも説明を始める。

「いや…君らを助けた高音君をはじめ、ここにいるワシやシスターシャークティ君も魔法使いなのじゃよ…」

そこから、魔法と魔法使い、麻帆良学園の説明がなされる。超と石田は知らなかったフリをして聞いていた。勿論、その間シスターシャークティが魔法で心を読んでいたのは知っている。超と石田は、強烈な自己暗示をかけて対策していた。

学園長の説明が終わる。超と石田は半信半疑な顔をしていた。

「まあ、私の能力も知らない人には魔法みたいな物ですから信じますが。それで、魔法を封印したのが私達だと思ってこんな時間まで

拘束したんですか…。」
暗くなった窓の外を見て呆れる石田に、怒りに満ちた声でシスターシャークティが怒鳴る。

「アナタにとってはどうでもいい事でしょうが、彼らにとっては死活問題なんです！」
「シスター、落ち着いて下さい！」
高音に宥められ、何とか抑える。心を読んだ事で石田達の疑いは晴れていたが、犯人が定かでないという事で苛立ちが募っていた。

「じゃあ、世界樹に聞いてみましょうか？」

「出きるのかね？」

石田が目を閉じて窓の外の世界樹に向き合う。そこで世界樹に向かってテレパスで合図すると、世界樹は全身を輝かせはじめた。
「おぉ…。」近右衛門は思わず感嘆の声を上げる。それは他の者も同じで、前もって聞いていた超でさえ、実際に目の当たりにして感動していた。

「あー、どうも世界樹さんの仕業みたいです。アイツラ・ミンナ・マルカジリ・アオーンとか言ってます。」

「凄く、バカっぽいヨ。」

「まあ、マルカジリは嘘ですが。でも、確かに世界樹さんのやった事で間違いないでしょうね。ひたすら、許さないと言い続けてますよ、念仏みたいに。」

もう、石田の能力を疑う者は居なかった。今では畏怖の念さえ抱

いている。

「な、何とか許してもらえんじゃろうか。彼らも、反省しとるじゃろうし…。」

「私に言われても困りますよ…。世界樹さんは存在自体が大きすぎて、声を聞き取るだけで体力が保たなくなってきますから。」

そう言ってから、石田は糸が切れたように倒れ込む。超がとっさに抱きとめると、窓の外の世界樹が光を失って行った。

「留美、しっかりするネ！」

「ちょっと、疲れました…。」

近右衛門は、その姿を見てこれ以上の追求を諦めた。彼女たちは嘘は言ってない。魔法先生たちの魔法も、封印されたままだろう。世界樹に感情があるなら、日頃いいように使っている自分たちに良い感情を持ってるわけはないのだ。それに…。

（植物と通じている彼女と敵対するのは、世界樹と敵対するのと同義じゃろうな。今回は、その警告なのかもしれん。）

結局、超と石田は記憶を操作される事なく解放された。操作した所で植物達と交信していたらまたすぐ魔法の存在を知るだろうからだ。周囲の人間にバラさないように頼むくらいしか出来なかった。

こうして、学園側に関係者として認識される事となった。これが後々歴史にどのような影響を与える事になるのか、まだこの頃は誰にも分からなかった。

【アリア】

茶々丸さんが襲撃を受けたと知らせがあったのは、仕事を終えてこれから買い物、というタイミングだった。これって…単行本の三巻にあった事件よね？カモも居ないのになんで起きるのよ！

急いでロボット工学研究所に行くと、すでに葉加瀬さんによって茶々丸さんは修復されていました。ネギはボロボロ泣いていて、明日菜さんも茶々丸さんに抱きついて「良かった、良かったよー！」と言って涙を浮かべてました。葉加瀬さんは、「緊急停止しただけなのに」と言ってましたが、やはり心配だったのかホッとした表情をしていました。

ネギに聞いた所、茶々丸さんを襲ったのは魔法先生との事。最悪ですね、自分の生徒を襲うバカなんて…ああ、よくニュースに出て来ますね。どの世界でもロクでもない先生は居るものです。それにしても。

「エヴァンジェリンさんには連絡とった？お見舞いに行く途中だったのよね？」

「「あっ…！」」

明日菜さんまで…。あのね、今頃帰りが遅くて心配してるわよ？

ただでさえ病人は不安な気持ちになってるんだから、早く知らせてあげなきゃ。

「う、うん！今から電話するね！」

そうそう、連絡は早めにね。茶々丸さんは、今日買った物が全部あるかチェックしていました。明日菜さんは…高畑先生と何やら真面目な話をしてますね。邪魔しないでおきましょう。馬に蹴られたくありませんし。

「あ、エヴァンジェリンさんですか？担任のネギです。」

ん？電話繋がりましたね。さあ、ちゃんと伝えられるかしら？

「えっと…茶々丸さんが死んじゃいました！」

…っ！！

「でも、生き返ったんです！…え？あれ、どうしたんですか？」

困惑するネギ。聞いてた明日菜さんや高畑先生、ガンドルフィーニ先生までずっこけてるじゃないですか。ガンドルフィーニ先生ってこんな軽い人でしたっけ？

ネギが、すまなさそうに携帯電話を渡してきました。

「お姉ちゃんに代わってって…。」

うん、そうなるでしょうね。まったく、私は又聞きで当事者じゃないんだからね？

「もしもし。あぁ、ハイハイ。そうでしょうね。一応結論から言いますが、茶々丸さんは無事です。記憶もしっかりしてるみたいですし、みんなの知ってる茶々丸さんですよ。魔法先生が先走ったみたいですが、高畑先生たちが止めてくれました。あ、今茶々丸さん来ましたから代わりますね。」

携帯電話を茶々丸さんに渡します。…これでおしまい。

ネギ、これくらい出来るようになりなさいね？お姉ちゃん凄いやって…。段々この子の将来が心配になってきました。

麻帆良学園のはずれにある、とある建物の一室で、苦々しくモニターを見つめる男がいた。

「大停電の日までに闇の福音を仕留めなければ、完全に復活してしまうと言うのに…使えない奴らだ。」

男は、あの職員会議でエヴァンジェリンを完全に封印しろと言った男だった。これまでにも、正義の魔法使いを自称する人間を焚き付けてエヴァンジェリン討伐に向かわせていた。今回は今までになく賛同者が多かったから、成功すると思っていたのだ。しかし、結果は散々である。唯一仕留めたと思っていた相手はロボットで、修理すれば元通りである。

男がエヴァンジェリン討伐に執着する理由。それは、賞金である。魔法世界で一般的に知られている賞金首制度ではエヴァンジェリン

の賞金は取り下げられている。が、一部の団体が独自に行っている賞金首リストではエヴァンジェリンは相変わらずトップクラスの賞金が掛かっているのだ。その団体は、亜人や魔族の存在を許さない人間至上主義者の集まり。吸血鬼などは、分かりやすい敵であった。

「しかし、収穫もあったか。」

そう言って男が見つめるのは一人の女子生徒が魔法をはじく姿だった。

「魔法無効化体質…。いい値段で売れそうだな。」

その目は、およそ人を見る目ではない。

薄暗い部屋で男は一人、タバコをくゆらせながら、モニターにうつる女子生徒を無機質な瞳で見続けるのだった。

第十四話　魔女狩りの夜　前編

大停電。巨大な麻帆良学園全体のシステムメンテナンスに伴う、大規模な停電。この日は学校も早く終わり、生徒だけなく先生たちも早めに帰宅をしなければならない。…一部の例外を除いて。

夕方、学園の大広場に集まったのは魔法先生や生徒たちである。停電に伴う結界の消失、それに伴う侵入者の排除。ここに集められたのは皆、警備を担当する者ばかりであった。

「…以上が、今回の警備割り当てじゃ。皆、よろしく頼むぞい。」

近右衛門の話が終わると、集められたメンバーはそれぞれの持ち場へと向かう。それを近右衛門は見送りながら、携帯電話をかけた。かけた先は…。

「もしもし、超君かの。」　超鈴音であった。

本来の歴史との一番の相違点はここかもしれない。超鈴音と学園長が手を組んでいる…しかしそれは、両者にとって何の不思議もない選択であった。

超は、もう魔法を世界にバラそうなんて気は無い。今の目的は、クラスメートを守り、世界の崩壊を招く危険な介入者を排除する事。

近右衛門の目的も、ネギとアリアを利用して３－Ａに集められた一部の魔法関係者を外敵から守る事と、学園の安全を守る事。

角度は違えど、目的は共通しているのだ。超と近右衛門は協力し

て、今回の大停電を乗り切ろうとしていた。そして、差し当たっての問題は…。

「既にエヴァンジェリン邸には護衛ロボットを配置しているヨ。監視カメラも飛ばしてるシ、留美の植物ネットワークで直ぐに異常は感知できるから大丈夫ヨ。」

エヴァンジェリンたちを狙う輩をこの家に近づけないようにしなければならない。

ここで言う護衛ロボットとは、田中さんに改良を加えた新型、佐藤さんである。外見は細身の男で、新開発された特殊な金属で出来ていた。

「フォッフォッフォッ、頼りになるのぅ…。」

「その代わり、今度の学園祭の出店場所の件、頼むヨ？」

「勿論、報酬には色をつけさせてもらうぞい。」

「「フォッフォッフォッ！」」

超も一緒に可愛らしく笑った。

所変わって、エヴァンジェリン邸。ここにはネギとアリア、明日菜が居る。アリアは停電と同時にエヴァンジェリンの封印を解く作業に入る。ネギはその護衛だ。では、明日菜は何故ここにいるのか。

これは、近右衛門と高畑の依頼であった。

先日、明日菜が魔法をはじいた事が何故か魔法世界の方で話題になっている、という事を近右衛門は知人伝いに聞いていた。恐らく魔法先生の誰かが情報を流したのだろう。そして、恐るべき事に。闇の市場で明日菜に賞金がかけられていたのだ。

近右衛門と高畑は、大停電の日に明日菜が狙われると予想して、エヴァンジェリンに保護を頼んだ。エヴァンジェリン自身も狙われている。狙われるなら同じ場所の方が守りやすいという理由もあった。しかしそれ以上に、封印の解けたエヴァンジェリンに勝てる者は誰一人として居ないという事実がある。明日菜を守るとしたら、これ以上の保護者はいないのだ。

「任せろ。ぼうやもそれなりに戦えるらしいし、茶々丸もバージョンアップした。こちらの守りは固いぞ。万一封印が解ける前に危なくなっても、もう一人の従者に起きてもらえばいい。」

快い返事をもらえて安心した二人だが、もう一人の従者というのが誰なのかは、分からなかった。根拠の無い事は言わない彼女の事だ、きっと大丈夫だろう。二人は詳しくは聞かなかった。

「そろそろですね。ロウソクを灯しておきます。」

茶々丸の言葉に頷くエヴァンジェリン。近所の雑貨屋で買ったアロマキャンドルである。

「これ、蜂蜜？甘い匂いがする。」

「蜜蝋に薔薇を加えたものだな。結構気に入っている。」

明日菜の問いに答えるエヴァンジェリン。ロウソクの揺れる灯りに照らされた明日菜を見ていると、ネギは故郷のネカネを思い出した。

「お姉ちゃん、明日菜さんてネカネお姉ちゃんに似てるね。」

「んー、落ち着いて見たら確かにそうね。どうしたの？ホームシック？」

ネギは首を振った。

「ううん、何となく。」

「そう。」

それ以上は、聞かない事にした。自分だって、もう原作の事を忘れかけている。うろ覚えで適当な事は言えない。

夕闇が、漆黒のベールを纏う。どこかで、犬の遠吠えが響いた。

…夜が、やってくる。

【高音・D・グッドマン】

何が悪で、何が善か。

ここ何週間か、その事ばかり考えている自分がいます。

つい先日の事件は私の価値観を揺るがせるに充分な衝撃を与えてくれました。正義を標榜する人間が、悪行をなしていたのですから。

思えば私は、考える事を他の何かに委ねすぎていたのかも知れません。それは師であるシスターシャークティであったり、正義という理念だったり、神様であったり…。迷うという事を恐れていたのでしょう。そんな気がします。

そんな私に、一筋の光を差し込んでくれたのは、あの子供先生でした。事件当日、別の場所で同じように魔法先生の襲撃を受けて怪我を負っていたネギ先生。彼は身をていしてエヴァンジェリンさんの従者、茶々丸さんを守ったといいます。私は、学園長に経緯を説明し終えた彼に質問しました。あなたは、悪と言われた人の仲間を何故助けたのか、と。彼はキッパリと言いました。

「エヴァンジェリンさんは悪人ではありませんよ。実際に話をしたら、誰でも気づくハズです。」

そして、彼は言った。自分で見たものだけを信じれば、惑わせられる事はない、と。もし騙されても、もっと目を良くすればいい、と。

アナタは正義を信条とする魔法先生と対立した。正義の魔法使いを目指していないのか、と聞くとこれにも彼は迷わず答える。

「僕は、父のような正義の魔法使いを目指してます。立場とか関係無く、目の前の困っている人を助ける。それが僕の目指す正義の魔法使いです。」

きっと、彼の考え方にも足りない所や危うい所はあるのでしょう。けれど、私にはそれが眩しく見えました。理由は、単純です。それは彼が自分で考え抜いて見いだした答えだから。だから、それを信じぬく事が出来るのでしょう。借り物の価値観で揺らいでいる自分が、情けなくなりました。

私も、彼のようになりたい。

彼のような信念を持った、立派な魔法使いに。

超鈴音の放った監視カメラが異常を知らせる。各地に配置された警備員の何割かが、持ち場を離れ始めたのだ。

「やはり動き出したネ。」

警備員一人一人に対応した飛行型監視カメラのＧＰＳから得られた情報が、パソコンの画面に映し出される。全体の三分の一の警備員が、エヴァンジェリン邸へと向かって動き出していた。

（西地区はずれからの侵入者確認。以前やって来た関西呪術師です。）

石田留美からの報告。それらをそのまま近右衛門へと電話で伝える。

「タイミングが良すぎるのう。やはり…か。」

「露骨に繋がってるヨ。囲い込むつもりネ。東から陽動目的の侵入者も確認したヨ。」

「そっちは神多羅木君と葛葉君が対処するから大丈夫じゃよ。」

「オオウ、行き遅れコンビ…新しい恋が始まるネ。」

「殺されるゾイ?」

「「フォッフォッフォッ!」」

どうにも緊張感の無い二人であった。

学園から、明かりが消える。

エヴァンジェリン邸では、アリアによる封印の解除が始まっていた。床に魔法陣を出現させ、その中央で二人は向かい合って儀式を行っている。それを、ネギと明日菜は少し離れた場所で見つめていた。

「ネギ、あのさ…。」

「何ですか?」

薄暗い部屋の隅、外を吹く風の音を聞きながら明日菜が口を開く。

「お母さんの事、覚えてる？」

「お母さん、ですか…。」

先日、あの男に言われた言葉。災厄の女王の子。ネギもそれを聞いて、母の事を考える事が多くなっていた。

「僕の物心つく前に、亡くなったと聞きました。…それ以外には、何も。みんな、お母さんの事になると黙り込んじゃうんです。」

「あ、ゴメン…無神経だったね。」

「いえ、いいんです。お母さんの事、聞いてくれて嬉しかったです。…明日菜さんは何で、僕のお母さんの事を？」

「うん……。」

揺れるロウソクの炎に照らされた明日菜の顔は、なんだか泣きそうな表情をしていた。しばらく、言葉を選ぶように思案し続ける。その時。

外で、金属音が響いた。

「…っ！」ネギの顔に緊張が走る。明日菜も、外の音に意識を集中し始めた。

…しだいに、人の叫び声が混じり始める。銃声、獣の雄叫び、悲鳴。

吹きすさぶ風に乗って、まるですぐ近くで聞こえるような錯覚をもたらした。

身を固く強ばらせる明日菜の肩を、ネギは優しく撫でた。

「大丈夫です。何があっても、僕が守ります。」

まだ子供なのに、その声は妙に力強く。かつて自分を守り死んでいった男を思い出させた。彼になら、話してもいいのではないか。

「ネギ。私ね、もしかしたらアンタの…」

その時、入り口付近にいた茶々丸が動き出した。いつの間にか、兵装バージョンになっている。右腕に刃物を備えた手甲をつけ、左手には巨大なバルカン砲を携えていた。

「北西方面の佐藤さんが突破されました。救援に向かいます。」

「茶々丸さん、行っては駄目です！」一度、目の前で茶々丸が止まるのを見たネギは悲痛な声を上げる。しかし茶々丸は微笑むと、ネギに背を向けた。

「葉加瀬さんに改良してもらいました。私は負けません。マスターを、お願いします。」

そう言い残して、茶々丸は外へと飛び出して行った。

麻帆良北西部を守っていた佐藤さんタイプは、式鬼たちの攻撃に一人で対抗して互角以上の戦いを繰り広げていた。しかし魔法先生達が氷結魔法を重ねがけすると動きは止まり、その後は鬼の金棒の一撃で粉々に砕け散ってしまった。

「他愛も無いな。」

魔法先生はそう言うが、式鬼三十体を一人で食い止めていた彼は充分強かった。

「ここで陣をひいて式鬼を作り続ける。貴様らは好きに攻めろ。」

呪術師の言葉に少しイラつきながらも、魔法先生たちは我慢して従う。これも悪を排除するため。毒を持って毒を、である。

その魔法先生たちの足元に、何かが飛んできた。そして次の瞬間。

ドガアァァァン！！

爆発が起きて魔法先生たちが吹っ飛んだ。ミサイルである。

「な、なんだ一体！？」

慌てふためく呪術師。木の上から声がしてきた。

「茶々丸兵装モードA、リミッター解除。これより侵入者の排除を行います。」

茶々丸はそう言って跳躍すると、左手のバルカン砲を乱射する。
式鬼達は次々とやられ、紙切れに戻って行った。

「ち、ちくしょう！コイツは仕留めたんじゃなかったのか！」
忌々しげに口走る呪術師の背後に、何やらうごめく人影が。

ポンポン、と呪術師の肩をたたく。振り向くとそこには先ほど粉々になったハズの佐藤さんタイプがいた。

「うわあああぁぁ！？」

バコッと腹部に蹴りを受けて、呪術師は気絶した。

佐藤さんタイプ。新開発の形状記憶型液体金属で作られた、最新型のターミ…警備ロボットである。凍らされ粉々になったが、茶々丸の放ったミサイルの熱風のおかげで解凍され、復活したのだった。

呪術師が倒され式鬼たちは皆紙切れに戻る。佐藤さんが茶々丸に礼をすると、茶々丸は少し照れながら言葉を発した。

「ルックス５％低下、洗浄願います。」

佐藤さんはどこに隠し持っていたのかタオルを持ちだすと、茶々丸の身体を丁寧に拭き始める。何気に紳士だった。

（こういうのも、いいかも…）

茶々丸が内心ちょっとときめいたのは、内緒である。

第十五話　魔女狩りの夜　後編

麻帆良学園の大停電は、始まってから既に二時間近く経過していた。エヴァンジェリンの封印はその大部分を解除されており、後は残り五分の一程度である。

ネギと明日菜は帰りの遅い茶々丸を心配しながら、周囲の音に耳を済ませていた。幾つかの爆発音と銃声が響いた後、音はやけに小さくなっていた。

その頃麻帆良北部には、かなりの数の関西呪術師が攻め込んでいた。もはや、戦争レベルである。西洋魔法使いと手を組んだフリをして、初めから麻帆良の崩壊を目論んでいた。

その呪術師たちも、高音と動物たちの抵抗を受けて混乱を極めている。今や高音動物王国は麻帆良最強のガーディアン部隊となっていた。

「一気に畳みかけますわよ、皆さん！」

「ガアアァッ！」

「ウキャキャーッ！」

「ぐるっぽー！」

「パオォーン！！」

「……おー。」

小さな声で追従するのは佐倉愛衣。お姉さまはどうしちゃったんだろう、と嘆いていた。何気に、鳩より順位が低い。新人に象とか…。頭が痛くなった。

高音達が呪術師や鬼を食い止めていた頃、その鬼たちの群れを離れた場所から攻撃していた龍宮真名は、スコープから目を放しため息をついた。

「これじゃ私が出る必要ないな。」

龍宮は、鬼たちの群れを縦横無尽に切り裂いて行く白い光を見ていた。もう、ここは大丈夫だろう。銃弾が勿体無いので、龍宮は別の場所へと移動を始める。

「いい顔するようになったじゃないか、木乃香、刹那。」

最後に振り返ってニヤリと笑うと、そのまま闇の中へと溶けて行った。

【桜咲刹那】

こうしてお嬢様と並んで戦う日が来るとは思いませんでした。いつか一緒に稽古した記憶が甦ってきます。

「せっちゃん、そっち行ったえ！」

「はい、お嬢様！」

次々と鬼たちを斬り伏せて行きます。お嬢様は相変わらず手を凝縮した気で覆って武器とされています。神鳴流にも同様の技はあるんですが、それをお一人で編み出すとは天才ですね。いつもは優しいお嬢様の指先が、この時ばかりは……って、何言ってるんでしょうね、私は。

麻帆良で警備の任について何年か経ちましたが、つくづく関西は西洋魔法使いが嫌いなのだな、と実感します。歴史も古いだけあって派閥意識も強く、排他的なのはこれからも変わらないのでしょう…。

そんな事を考えていたら、式鬼の爪が私の胴を掠めます。いけません、余りに温い攻めだったので油断しました。私は少し本気を出して百烈桜華斬を放ちます。

「グアア、何デ、コンナ扱イ…。」

セリフがあるだけマシだと思ってください。

ほとんどの鬼を退治すると、私のもとにお嬢様が駆け寄って来ました。

「せっちゃん、さっき危なかったけど大丈夫?」

はい、大丈夫です。

「そっかぁ、せっちゃんペッタンコやもんな。そら掠りもせんわ。」

ちょっと待って下さい。

何故そこに持っていくのですか。大体胸なんて飾りではありませんか。イヤらしい人にはそれがわからないんですね。

「せやな。ペチャパイは正義や。」

ハッキリ言わないで下さい！

「ペッタンペッタンツルペッ…」

お嬢様あぁぁぁあぁ！

麻帆良にやってきた呪術師たちと、エヴァンジェリン討伐を目論んでいた魔法先生たちは、この数時間で殆ど駆逐された。これで、大停電は乗り切った。学園長の指示で侵入者と反逆者を次々と拘束してゆく警備員たち。誰もが、ホッと安堵していた。

エヴァンジェリン邸でも、ちょうど封印が完全に解ける頃だった。パキィィン、という音ともに光が飛び散り、封印が解ける。

「すみません、遅くなっちゃって…。」全身汗だくになってアリアは言う。

「構わん。お前に無理をさせたのは私だ。すまなかったな。」

本来であれば全盛期の力を取り戻して有頂天になる所だが、さすがに疲れきったアリアの前ではそんな真似は出来なかった。

「明日菜、アリアを風呂に入れてやってくれないか。」

「え?うん、いいわよ。」

言われた通りにアリアを抱えて浴室へと向かう明日菜。エヴァンジェリンはそれを見送ってからネギに声をかける。

「気づいているか?」

「足音、ですよね。さっきから、家の前で止まってます。」

「こっちから出て行ってやろう。」

エヴァンジェリンが扉を開ける。一歩外に踏み出すと、無数の矢がエヴァンジェリンの身体を貫いた。

「エヴァンジェリンさん!?」

外から、数人の男たちの歓声が聞こえた。

「ふむ。やはり少しは痛いな。」

エヴァンジェリンは少し顔をしかめて身体に刺さった矢を全て抜く。その様子を見て、喜んでいた男たちは固まった。

「先に言っておくが、既に私は完全復活を遂げている。死にたかったらかかってくるがいい。」

男たちの顔に動揺が走った。もしそれが本当なら、自分たちに勝ち目は無い。しかしエヴァンジェリンはまだ魔法を使っていない。嘘である可能性もあるのだ。彼女にかけられた賞金を諦める気にも

なれなかった。

「ん？どうした、何とか言ってみたらどうだ？」

「チッ…！」男の一人が魔力を集中しはじめる。とにかく一発お見舞いしてやる…そう思って魔法を発動させるが。

シーン……

「あれ？」

他の男たちも魔法を唱えるが、何も起こらない。

「あ、あれ、なんで！？」

「てめえ、何しやがった！」

ポカーンとするエヴァンジェリン。いや、何もしてないのだが。

しばらく両手を突き出して喚きたてる男たち。いい加減飽きてきたな、とエヴァンジェリンが手をかざそうとすると、男たちが全員地面に叩きつけられる。…いや、だから何もしてないのに。

「凄いです、エヴァンジェリンさん！」後ろで尊敬の眼差しを向けるネギ。焦るエヴァ。

「う、うむ。そうだろう、なんせ私は最強の魔法使いなのだからな！」…言えない、今更自分の仕業じゃないなんて！

そんな様子を、楽しそうに眺める二人。超と石田であった。二人は、研究所で開発した光学迷彩のマントを着て姿を隠していたのだ。石田が魔法を封印し、超が男たちを無力化した。

（これは黙っておいた方がいいネ。）

（エヴァさんて結構いい人ですよね。）

困った顔で男を拘束しているエヴァンジェリンを見ながら、二人は妙に和んでいた。

超の仕掛けた飛行型監視カメラのうち、警備区域と関係ない場所で稼働している物が一つある。本来警備する必要の無い場所での反応が、超のパソコンの画面に映し出されていた。もう、だいぶ前からの事だ。

その場所は、今回の騒動の首謀者がアジトとしているアパートだった。

「全員やられるとか…ここまで学園の警備は優秀だったか？」

自ら動かず安全地帯から指示を出す彼のスタイルは今回裏目に出たようだ。もっと日頃から警備の人間を近くで観察していたら、彼

らがどれほどの強さか分かっただろうに。そして、今回だけでも現場に残っていれば場所を特定されずに済んだかもしれないのに。

ガチャ…と、入り口のドアが開く。男は気づかない。ただモニターの中のエヴァンジェリンを憎々しげに見つめるだけだ。

そして足音が後ろに迫っているというのに、男は致命的なセリフを口にしてしまう。

「神楽坂明日菜なら明日以降も狙えるからいいか。」

「…っ！！」

ドガッ…と、高畑の拳が男の後頭部を殴りつける。男は何がなんだか分からないまま、昏倒した。

「反吐が出る。何故こんな人間が教師をやってるんだ…」そう言うのは、隣にいるガンドルフィーニである。二人は学園長の命令で男を捕らえに来たのだった。

「仕方ないさ。コイツは本国の推薦で来ている。あそこの人間で、こちらの世界でまともに教師をする気のあるヤツなんて滅多にいないだろう。」

高畑は苛立ち紛れに言って、男を担ぎ上げた。

「行こう。」

「ああ。」

ガンドルフィーニは、暗い面持ちで後に続く。部屋を出ると学園には明かりが戻っていて、闇になれた二人の目には少し痛いくらい

だった。

「この学園に、闇は似合わないというのに。」　人気のない道を歩きながら、ガンドルフィーニは言いようのない苛立ちを感じて、慣れないタバコに火をつける。

タバコはなんの味もしなかった。

こうして、麻帆良学園の大停電は終わりを告げた。西と通じていた教師たちは軒並み処分され、本国の更正機関へと送られる事となった。関西呪術協会側も大々的な処分を敢行し、壮絶な内紛の末に過激派勢力を壊滅させる事に成功したらしい。

因みに超のネット工作により、神楽坂明日菜の魔法無効化体質はデマだったという事で魔法世界は落ち着いている。問題の動画も、投げつけられたパンツを振り払うという謎の合成動画を作り上げ、これを『元になった動画』だと公開した。明日菜を攻撃した男は『パンツ投げ名人』として有名になり、動画は再生ランクの上位に。今回の首謀者もデマを流した男として周囲から白い目で見られるようになった。賞金も取り下げられたようだ。

一連の騒動で麻帆良を後にした魔法先生はかなりの人数に登った。その穴を埋める為に、一般人の教師を多く雇い入れる事になったの

は、仕方のない事かもしれない。ただでさえ魔法使いで教師をやる人間は少ない。いたとしても今回出て行ったような人間ばかりなのだ。近右衛門は頭を抱えていた。

学園の警備の補充は、超たちの開発した田中さんや佐藤さんが採用される事となった。また、石田留美も植物ネットワークを使った侵入者感知で学園に協力する事に。皮肉な事に、この体制にした所以前より遥かに無駄の無い警備体制を敷く事が出来るようになった。

一般人の教師の増加。

超と石田による学園警備の掌握。

全ては、アシュタロスの思い描いていた通りに事が進んで行く。さすがは三界を震撼させた魔神アシュタロスと言った所である。

さて、大停電の最中、当のアシュタロスが何をしていたかと言うと。

「ぐぅ…。」

寝ていた。

第十六話　仲良き事はヨキコトキク

大停電の騒動から一週間近く経ち、ようやく学園にも平穏が戻ってきた。教師の大幅な入れ替えには多少の混乱があったものの、大きな問題にはならなかった。

そんな、ある日の昼休み。高音とエヴァンジェリン、茶々丸は、中庭で優雅に紅茶を楽しんでいた。

「そうですか、花粉症で…。」

「ああ。だから封印が解けて嬉しいよ。気兼ねなく花の香りを楽しめるし、こうして…。」

足下に寄ってきた猫を撫でる。

「猫にも触る事が出来る。」

エヴァンジェリンは、動物アレルギーも患っていた。思わず涙ぐむ高音。これまで何度か話す事があったが、話す度に驚く事ばかり。自分がいかに間違った情報に踊らされていたのかを知った。ネギ先生の言うとおりだった。確かに目の前の彼女は悪という言葉で括られるべき人ではない。

「もしよろしかったらまたジョセフィーヌにお会いしますか？夜なら彼女も森に帰っていますし。」

「ジョセ……あ、あのクマか！メスだったのか！？やたらと私に甘えてきたからオスだと思ったんだが。」

「マスター、恐らくそれはアロマキャンドルのせいだと思われます。

」

ポン、と手を叩く。

「ああ、蜜蝋だからか。匂いに惹かれていたんだな。」

「はい、先日五本ほど食べられましたから、確かだと。」

「「食べた！？」」

そんな他愛もない会話をしていると、昼休みの終わりを告げる予鈴が聞こえてきた。それまで少し離れた所で食事をしていた佐倉愛衣と女子数名が、チラチラと高音に視線を向ける。

「もう終わりか。何だか早く感じるな。」

「ええ、本当に。また明日、ご一緒できますか？」

「勿論。」

「茶々丸さん。紅茶、ご馳走さまでした。美味しかったですわ。」

「喜んでいただけて、何よりです。」

そんなやりとりをした後、三人はそれぞれの教室へと向かう。佐倉は高音について行きながら、エヴァンジェリンへの認識を改めていた。確かに悪ではないし、優しい人かもしれない。しかし…

（お姉さまは、渡しません…！）

妙なライバル心が芽生えていた。

【超鈴音】

今日も朝から学園長からの相談を受けたヨ。最近多くて困るネ。クーが拗ね始めてるヨ。

相談事は、修学旅行の事だっタ。あー、そんな事もあったネ。クーが部屋を抜け出して朝帰りしたから肉まん地獄の刑に処したアレ。一体何だったアルカ？結局聞き出せなかったけド…。

「実はのう、修学旅行先は京都・奈良なんじゃよ。超君のように留学生が多いから、日本を知ってもらうのに丁度良いかと思ったんじゃが…。ほら、いろいろあったじゃろ？」

「あー…確かに今行くのは刺激が強いかもしれないネ。」

「そうなんじゃよ。西の長は大丈夫と言っておるんじゃが、どうにも心配でのう。そこで、超君に相談なんじゃが…。」

「ネギ先生の護衛カナ？」

「というより、一般生徒の護衛じゃ。超君、かなーり強いじゃろ？中国武術研究会でかなり有名になっとるようじゃし。」

まあ、あれだけ派手にやればバレるカ。

「構わないヨ。でも、班別行動の時間は難しいヨ。」

「それは、各班に一人戦闘経験のある者をおくようにネギ君達に頼むつもりじゃ。超君の他にも、龍宮君、桜咲君、春日君、エヴァンジェリン君、そして孫娘にも頼んでおる。」

ふむ……って、美空が戦える？一番先に逃げそうヨ。

「引率の先生には高畑君もつくから大丈夫じゃと思うんじゃが、念には念をいれときたいんじゃよ。頼めるかのう？」その戦力は過剰すぎて誤解を与えそうだけド…。まあ何があっても私が守るから同じカ。

「分かったアル。ただ、行った先で肉まん売る許可欲しいヨ。」

「商売熱心じゃのう…良かろう、旅行中の販売活動を認める！……酒はイカンぞ？」

「分かってるヨ。先生相手だけにしとくネ。」

「「フォッフォッフォッ！」」

さーて許可も下りたし、一儲けするヨ！！

3年生に進級した所で急に大人しくなることは無く、むしろパワーアップしたかのようなA組のテンションは、修学旅行の知らせを聞いて爆発寸前だったりする。しかし今回の場合、一番はしゃいでいたのは…

「京都、京都ですよ皆さん！楽しみだなー、早く行きたいなー！！」

ネギだった。

本来まとめ役である委員長の雪広あやかは、はしゃぐネギに見とれて使い物にならない。鳴滝姉妹もネギと手を取り合ってはしゃぐし、まるで学級崩壊の危機だった。

「ちょっと、皆静かにしなさい！」アリアの注意も届かない。それを見ながら、ちょっと不味かったかな、と呟いたのはエヴァンジェリンだ。

修学旅行の行き先が京都になると知った時、京都に、ネギの父ナギ・スプリングフィールドの隠れ家があることを教えていたのだ。喜ぶネギの顔が見たくてつい教えてしまったが、ここまではしゃぐとは思わなかった。

「ぅう…っ……グスッ…。」

アリアの目に涙がたまって行く。ヤバい！クラスの何人かが気づいて慌てだす。その時。

ガラッ
一人の先生が扉を開ける。
「君たち、今は授業中だから静かにしようね。」
芦優太郎だった。
優しいが、有無を言わせない迫力がある声。それまで騒々しかった教室が一気に静まり返った。
「「「すみませんでしたー！」」」
はしゃいでいた生徒が頭を下げる。芦は、「ほどほどに、ね。」といって帰って行く。…最後に、アリアに微笑みかけて。
「芦先生やばい」
「カッコイイよねー。」
そんな声が聞こえる中、一人、エヴァンジェリンだけはニヤリと笑っていた。
「言霊、か。面白い。」
あちゃー、と顔を覆う石田。だから、普通に新田先生に任せておけば良かったのに！マスターの馬鹿、爽やかヤクザー！！…意味不明な言葉を心の中で叫んでいた。

修学旅行の行き先が告げられたその日の夜。神楽坂明日菜は自室でルームメイトの木乃香と話をしていた。話題はやはり、京都の事である。

「行きづらいなら、休んでもいいんじゃない？事情が事情だし…。」

「ううん、大丈夫や。確かにいろいろ思い出すけど、全部割り切っとるから。ありがとな、アスナ。」

「木乃香…。」

近衛木乃香は、家を勘当されている。いくら当事者同士が和解した所で、他の家族や一族の人間の許しが得られなければ、近衛の土地に足を踏み入れる事はかなわない。

「うちはそれよりアスナの方が心配や。こないだ高畑先生が言うてたやろ、アスナも狙われとるって。」

「うん…魔法無効化体質。うちの家系の能力みたい。」

暗い顔をする明日菜。無理もない、先日の侵入者の狙いの一つが、自分の拉致だったのだから。

「アスナ、自分の事自分で守れるようにした方がええな。いつもうちが一緒におれるとも限らんし。……そや！」

木乃香の顔が、にま～っとする。明日菜は身構えた。

「…なに？」

「アスナ、ちゅーしよか？」

「は？」

今、なんて言った？

「だ・か・ら、ちゅー、しよか？」

「な、な、何言ってんの！？」

その時、ドドドドっという音が聞こえてきた。音はそのまま部屋の前まで来て止まると…

バアァンッ！

「このちゃん、あかーんッッ！！」

扉が開き、桜咲刹那が飛び込んで来た。

「どーしたん、せっちゃん。えらい勢いや。」抱き付く刹那の頭を撫でながら木乃香が言う。明日菜は呆然としていた。

「だって、だって、このちゃんが明日菜さんとちゅーする言うもん！」

「…えらい地獄耳やな。盗聴器でも仕掛けとるみたいや。」

「うち、嫌やもん！このちゃんが他の人とちゅーするのいややってんもん！！」

泣きじゃくる刹那を見て、明日菜はようやく理解する。二人は、そう言う関係だったのかー！？

「…仮契約の事やえ？」

「……ふぇ？」

木乃香の言葉に、時が止まる。しばらく、キョトンとする刹那。誰も声を出さないでいると…

ババッ！

慌てて飛び退き服装を整え正座をする刹那。

「私はお嬢様を信じていました。」

「「嘘つけーっ！！」」

落ち着いた刹那を交えて、木乃香は明日菜に仮契約の説明をする。仮契約とは、魔法使いとラインを繋いで魔力供給を受けられるようにするというもの。その際、契約の証として魔法道具…アーティファクトを使えるようになるというものだ。

「護身用の道具を手に入れられるってコトね？」

「そうや。明日菜は運動神経ええし、気も使える。きっと攻撃型の

アーティファクトが出る思うえ。」

ふーむ、と考える。確かに、手っ取り早く強くなるには武器を手に入れるのが一番だ。しかし…。

「～～～～っ！」

涙を滲ませながらこちらを睨みつける刹那を見たら、そんな気も失せる。

「ごめん、木乃香。やっぱクーあたりに護身術教えてもらうわ。」

「ん、分かった。せっちゃんも、そんな睨まんとにこにこしいや？」

「は、はい、お嬢様！失礼しました！」

謝る刹那の頭を撫でながら頬にキスをする木乃香を見て、明日菜は微妙な表情を浮かべながら自分のベッドに避難する。

（ちょっと、本物じゃないの！）

さっきまでの不安は消し飛んでいた。

その頃。エヴァンジェリン邸のとある一室にて。今まさに、一つの儀式が終わろうとしていた。

揺れる燭台の火、黒い祭壇の上に横たわる人形。それはまるで黒魔術の生け贄の儀式。暗がりの中、禍々しい笑みを浮かべたエヴァンジェリンが、魔導書を片手に呪文を唱える。

「目覚めよ、我がしもべ。煉獄の鎖を解き放ち、今一度我の呼びかけに応えよ！」

黒い炎が立ち上り、人形の身を包む。閉じられた目蓋がゆっくりと開かれ…。

「イイ加減アチーヨ。楽シイカヨ、コレ。」

人形が怒った。

「な、なんでだ！オマエこういうノリ好きだっただろう！」

「贄ニサレテ燃ヤサレルノ好キナ奴ナンテ、イネーダロ！」

人形の名前は、チャチャゼロ。エヴァンジェリンと最も長く共に在った相棒である。エヴァンジェリンが魔力を封印されてからは眠っている事が多かったが、封印が解けた今は自由に動き回る事ができるようになった。

…しかし、今のチャチャゼロは以前の人形然とした身体と比べると、幾分大きくなりファンシーになっている。耐熱性で分厚くはあるが、フリルなどをあしらった可憐なドレスを着ており、頭にも愛らしい帽子が被せられていた。それはどことなく、ローゼンなメイデンの赤い方を思わせる容姿だった。

「オイ、ゴ主人、コリャナンダ？」

「ああ、知り合いに頼んで作ってもらったんだ。最近買った漫画に出て来たヤツでな。」

そこまで言うと、チャチャゼロが爆発した。

「テメー、俺デ着セ替エ楽シンデンジャネーヨ！」

「何だと！口の聞き方に気をつけろ！そしてこのぬいぐるみを持て！！」

「ナンダヨ、コノ不気味ナ犬ハ！頭ワイテンジャネーノカ！？」

「うるさいチャチャゼロ！いや、違う。今は赤いドレスを着ているから、チャチャ紅だな！我ながらいいセンスだ！」

「茶色カ赤カ、ワカンネーヨ！センス無サスギダロ！」

「なんだと！？じゃあお前は字をひっくり返して『紅茶』だ！『紅茶』って呼んでやる！」

「ドンナ切レ方ダヨ！根性ババ色ダナ、ゴ主人！！」

ドタバタと走り回る二人を見ながら、茶々丸は幸せそうに呟いた。

「ああ、マスターも姉さんもあんなに楽しそうに…（録画中…録画中…）」

第十七話　寄り添う二人に祝福を

学生にとって、恐らく最大のイベントと言えるであろう修学旅行。それは教師にとっても同様である。だが、この二人の先生にとっては別な意味で重要なイベントになりそうだ。ネギ・スプリングフィールドと高畑・T・タカミチは、学園長室にて、正式に特使としての任を与えられていた。

「今回の京都への修学旅行の時間を使って、特使として関西呪術協会の長へ親書を渡してきて欲しい。」

「…承りました。」

「はい、頑張ります！」

ネギは、先日の襲撃を知っているだけに真剣な表情を作っている。…が、まだ甘い。真剣さはあまり伝わって来なかった。

高畑は内心で今回の訪問を反対していた。あの襲撃から時間を置かずに、この戦力で敵地に乗り込むのだ。挑発以外の何物でもない。何を目的としているのか分からないが、一般生徒を巻き込む可能性が高い以上、賛成なんてできるわけが無い。

ネギ君は、置かれた現状を理解しているのか?そんな気持ちがわいてくるが、すぐに打ち消した。まだ子供なのだ、分からなくて当たり前。大人の自分がしっかりしていればいいだけだ。

「基本的に、この親書には東西の友好を深めようという内容の文章が書かれておる…が、実はあぶり出しになっておってのう。先日の侵入者から聞き出した西の不穏分子のリストと、一部元老院メンバ

ーの名前が書かれておる。」

「……っ！」高畑の顔が強張る。

「余り公に出来る内容では無いうえに、確実に西の長へ届けてもらわんと困るのじゃ。郵送や電波を使って知らせるのは、危険すぎるのでのう。確実に奪われない、と任せられるのは高畑先生くらいじゃし、ネギ君も無関係じゃないからのう。」

「僕……ですか？」

「うむ。この事は、直接長に聞いてきてもらいたい。高畑先生、頼んだぞい。」

「了解しました！」

先程までの疑問は、置いておこう。今は任務の達成を第一に考えなければ。高畑は気持ちを切り替えて親書を受け取った。

【超鈴音】

来るべき京都出張販売に向けて、五月、葉加瀬と私の三人で毎日のように会議を開いていル。前回の修学旅行ではクラスメート以外には余り売れず、在庫が余ってしまったヨ。今回の営業は是非とも成功させル！決意を新たに頑張るネ。

今回は、前回の反省を踏まえて何処でも直ぐに肉まんを蒸かす事の出来る装置を開発しタ！前回は、旅館の部屋で作って移動式肉まん販売機『肉まん君Ｘ』に詰めて販売しタ。これでは量も沢山用意出来ないし、遠くへ販売にも行けない。でも今回は違ウ！移動式肉まん蒸かし機『肉まん君β』で何処でも肉まんを作れるようにしたのダ！肉まんを特殊な技術で真空パック保存出来るようにもしたし、これで何時でも何処でも出来立ての味を楽しむ事が出来るようになったヨ！！

…ハァ、ハァ、ちょっと興奮し過ぎたネ。とにかく、京都出張販売の準備は万全だヨ。

それとは別に今朝、休日を久しぶりに中国武術研究会で過ごそうと練習場に顔を出した時に、神楽坂明日菜がいたのには意表をつかれたネ。…クー、拗ねて私と一緒がイヤになったカ？半端じゃなく悲しいヨ？

話を聞いたラ、明日菜は単純に強く成りたいらしイ。うーん、理由はネギ坊主かナ？確か坊主の為に強くなるという流れがあったようナ。試しにそう聞いてみると、明日菜は不思議な顔をして違うと言ったヨ。…アラ？

とにもかくにも、クーが明日菜に付きっきりで悲しかったから独りで泣きながらイメージトレーニングしてタ。頭の中でヤムチャ百回殺した辺りでクーが構ってくれたから思わず抱きついたヨ。明日菜が「こっちはこっちで……そんなに良いのかしら？」って言ってたけどよく分からないネ。

最近、平和で嬉しイ。

それが素直な今の気持ちだヨ。

神楽坂明日菜は、一人自室のベッドの上で悩んでいた。

強くなりたい。しかし、どんなに武術を習おうとも、そんなに早く強くなるわけは無い。修学旅行までにある程度強くならなくては…。気持ちが焦り、どうしてもあの言葉が脳裏によぎってしまう。

仮契約。契りのキス。

「うわっ、うわっ！！」

あの二人を思い出して顔を真っ赤にした。

（女の子同士って無いでしょ、普通…！！）

しかし、さっきの超鈴音とクーの甘い抱擁を見てしまうと、有りなのかなと思ってしまう。

（ヤバい、私、毒されてる…。）

顔の火照りが収まらない。明日菜は気を紛らわせようと部屋を出た。誰も居ない寮の談話室のテーブルについて、自販機で買ったジュースを飲む。

久しぶり飲んだ、はちみつレモン。

レモン…

檸檬…

ファーストキスは…

ボッ！

顔に火がついた。

そして、まずい事にそんな明日菜の様子を目撃してしまった人が。

「あら、明日菜さん？今日は出かけませんの？」

「い、い、委員長！？」

クラス委員長の、雪広あやかだった。

「ふふっ、何ですの、その声は。いつもの明日菜さんらしくありませんね。」

「な、何でも無いわよ！いいいいつも通りなんだから！」

全然いつも通りじゃない明日菜を、眉をひそめて見つめるあやか。

どうも、無理をしている。付き合いの長いあやかは、すぐにそう思って真面目な口調に変わる。そして明日菜の向かいの席に座って、両手をとった。

「明日菜さん、何か悩み事があるならお聞きしますわ。」

「えっ、いや、違っ…。」

いきなり手を取られて、顔は益々紅潮する。今、手をとられたら意識しちゃうのに！明日菜はあやかの手の温もりに戸惑い、とっさに手を退こうとする。が、あやかは思いの他強く握っていて動かない。

「明日菜さん、私達に遠慮なんて要らないでしょう？いつも明け透けに言い合ってきた仲なんだから、気兼ねなんてしないで下さい。」

「ぅう…っ、委員長……。」

ヤバい。何がヤバいって、真剣な目が、握った手が、優しくて暖かくて嬉しくて、どうしていいか判らなくなる！明日菜は自分の気持ちに戸惑った。何故あやかに、こんなにドキドキさせられるのか。

ただの友達…ではない。麻帆良に来て初めての友達であり、腐れ縁で今までずっと一緒のクラスだった。時に反発しあうけれど、いつの間にか、そばに居て当たり前の存在になっていて…こんな気持ちを抱いても仕方ないくらい、大切になっていたのかもしれない。

…気づくと明日菜は、目に涙を浮かべていた。

「あの、ね…。その…。」怒られるのを怖がる子供のように、上目づかいで口を開く明日菜。

「なんですか？」それを優しく見つめるあやか。

「…女の子同士って、変なのかな……。」

「……は？」言った意味が分からず固まるあやか。

「だから、その…。女の子同士で、好きって……駄目なのかな…？」

「……っ！」

言葉の意味に気づいて、ハッとするあやか。それは、つまり……あやかも顔が真っ赤になった。目の前で、泣きそうな顔で聞いてくる明日菜。つまり、彼女の悩み事とは。私への恋？

あやかは、明日菜と過ごした時間を思い出す。初めて会ってケンカしてから、ずっと長く付き合ってきた。互いの事は嫌になるくらい分かり合っていた。

…けど、それが自分の勘違いだったら？

私が気づかなかっただけで、知らない所で悩み続けていたとしたら…？

私は親友なのに、その気持ちを分かってあげられず、苦しめていたのだとしたら…。

親友失格じゃないか。

あやかは今までの自分の無神経さを悔いた。悔いながら、壊れてしまいそうになるくらい自分の事で悩み、思いつめている明日菜を愛おしく感じていた。しばらく、気持ちを落ち着かせる為に目を瞑る。

二人は、黙り込む。その沈黙が、明日菜にはつらい。嫌われた…。やっぱり、変じゃない。やっぱり、こんなのおかしかったんだ…っ！

沈黙に耐えきれず、明日菜はあやかの手を振り切って席を離れようとする。それを、あやかは後ろから抱きしめた。

「…っ、やだ、離して、離してよ！」

「明日菜さん、落ち着いて！」

「もういい、もういいから！」

力は明日菜の方がはるかに強い。が、小さい頃から柔術を仕込まれたあやかはしっかりと明日菜の身体を抱きしめ離さなかった。

しばらくして、明日菜が落ち着くと。あやかはゆっくりと腕を離し、明日菜と向き合う。

「明日菜さん。私は、変だなんて思いません。だから、心配なんてしなくていいんです。」

「……本当に？」

「ええ。だから、証拠を見せて差し上げますね。」

そう言って、あやかは明日菜を優しく抱き寄せる。指先で瞳からこぼれ落ちる涙をそっとすくってから、その手を明日菜の頬に添えた。そして、明日菜の震える唇に自分の唇を重ねる。

「ん……。」

ただ重ねるだけの、優しいキス。

それが、信じられないくらい胸を震わせた。

二人は、その感動が消えるのを惜しむように、互いの唇を何度も合わせる。

そして、どのくらい時間がたっただろうか。ゆっくりと唇を離すと、二人は額をくっつけて笑いあった。

「あは、本当にレモン味だった。」

「だって明日菜さん、はちみつレモン飲んでたでしょう?」

「「あはははは!」」

身体の緊張が解けて、二人はふにゃふにゃになって椅子に腰掛ける。しばらくさっきより優しい眼差しで見つめ合ってから、明日菜は声をかけた。

「ね、あやか。」

「なんですか、明日菜さん?」

「大好き。」

「ええ、私も。」

この日、アシュタロスの知らない所で原作ブレイクが行われた。
神楽坂明日菜と雪広あやか。この二人の無邪気な恋が、世界にどのような影響を与えるのかはまだ分からない。

ただ、はっきりと言える事が一つ。

このキスで問題が解決する事はない、という事だ。

「…あれ？」

外伝3　悪霊の見た夢

夜中、トイレから自分の部屋に戻ろうとしたら、姉の部屋から明かりがもれていた。こんな夜中まで何を…？少年がドアの隙間から中を覗く。そこで見たものは…。

「綺麗ですわ、明日菜さん…。」

「恥ずかしいよ、あやか…。」

仲良くなりすぎた二人の姿。

（なにやってんだねーちゃん！！）

ガックリと肩を落とす少年。彼こそが、アシュタロスが見逃したイレギュラー、雪広あやかの弟、『雪広ともき』である。

本来、生まれる事なく消える運命だった、雪広あやかの弟。しかし彼は、転生者の手によって命を救われた。アシュタロスは「雪広あやかに弟がいた」という事実にしか目がいってなく、生きてるか死んでいるかという事にまで気を回していなかった。だからこそ、見逃していたのだ。

彼の存在にいち早く気づいたのは、超鈴音だった。ネギ先生に見とれていたあやかの「うちの弟とは偉い違いですわ」という言葉を聞いたのだ。

慌てて石田留美に知らせ、調査を始める超。丁度心眼を鍛えていた石田は、面白半分で少年の能力、そして彼自身の人生を霊視する。

垣間見たのは、少年を救った悲しい転生者の物語だった。

少年を救った男は、前の世界でトラックの運転手をしていた。
妻と子供二人を養う身で、長距離中心に走って必死に稼いでいた。
それなりに稼ぎはあったが、育ち盛りの子供たちの為にもと休みを惜しんで働く。そんな彼が不幸に見舞われるのは、丁度連続勤務も終えて明日から休み、という日の夜だった。

首都高を走っていた彼のトラックの横を、突然、何かの影が追い抜いて行ったのだ。そして、次の瞬間。

ドガァァァンッ！

コントロールを失ったトラックは、カーブを曲がり切れずに壁に激突する。爆発炎上するトラック。彼は即死だった。

この事故は当初単純な居眠り運転による事故と処理されていたが、後に一人のはぐれ神族による犯行だという事が明らかになった。

韋駄天九兵衛。速さに執着した首都高荒らしである。

あるゴーストスイーパーによって解決されたこの事件は霊障と認定され、被害者には多額の補償金が降りる事となった。しかし、そんな事は死んでしまった彼には分からない。

事故後しばらくして、家族の事が心配で成仏できなかった彼は、霊となって家族のもとへと向かった。そこで目にしたのは、知らない男の隣で微笑む妻の姿。その男を、まだ事故から1ヶ月も経って居ないにも関わらず、なんの抵抗もなくパパと呼ぶ子供たち。

全てを理解した彼は、悪霊となった。

それからはまさに怨念をぶつけるだけの復讐の日々。愛していたハズの子供たちにも牙をむいた。幾度となくゴーストスイーパーに退治されたが、彼は恐ろしい執念で復活した。霊体を封印しても、破壊しても、そこに霊気の残滓があるかぎり何度も復活を遂げる。裏切った家族たちが死ぬまで絶対に諦めまい、と。

そんな彼を見ていたのが、過激派神族であった。この恨み、この執着心。こいつなら宇宙の卵を汚染させる大きな力となるだろう。

悪霊の彼を無理矢理転生させた神は、彼に凶悪な能力を勝手につけた。既にコミュニケーションがとれない位人格崩壊を起こしていたのだ。とりあえず殺傷能力のありそうな能力を目一杯与えた。

彼は、ネギまの世界へと、転生する。亡くなる運命にある、雪広あやかの弟の身体に憑依する…ハズだった。しかし、彼は憑依する前に、見てしまった。

苦しむ妊婦の枕元に立つ、死神の姿を。

どうして彼がそのような行動に出たのかは分からない。ただ恨み、呪うだけの存在になり果てていたハズだった。ましてや、今から自分の物になる肉体の魂である。勝手に刈り取られるのを眺めていればいい話だった。

しかし、彼は立ち向かった。

神から与えられた力の全てを使って、生まれようとする魂を守ろうとした。

相手は死神、霊体の彼に勝てるワケはない。攻撃は全て無効化されたが、それでも彼は攻撃を止めない。それを、死神はただ見つめ続けた。

本来、死神とは善良な魂や無垢な魂を刈り取って輪廻の輪に戻す存在。この死神が来たのも、今まさに死に瀕している子供を迎えに来ただけだった。

死神は、目の前の悪霊を見ながら考えを巡らせた。そしてしばらく思案した後、手に持った鎌を振るう。

ザシュッ

斬りとばしたのは、悪霊と胎児を結ぼうとしていた霊ライン。そして、その切れ端の胎児側の切り口に、子供の魂を繋げる。子供の魂はすぐに順応して、胎児の身体の中に溶け込んで行った。

悪霊は、攻撃をやめる。その邪悪に歪んだ顔が、少しだけ優しい色を見せた。死神はそれを見て、悪霊へ声をかける。

『行くぞ。』

悪意と怨念に満ちているハズの彼を、死神は送ることに決めた。それはほんの気紛れだったのかもしれない。ただ、こうして彼の長い旅は終わりを告げたのだった。

雪広ともきは、無事に生まれる事が出来た。身体はそんなに強くは無かったが、誰に似たのか異常に頑張り屋で、勉学全てにおいて優秀な成績を収め、雪広家の誇る天才児と呼ばれるまでになってい

た。

霊視した石田は、彼を問題無しとして見逃した。転生者ではない。能力皆無、一般人だったからだ。石田は彼の事を、偶々起きたイレギュラーで問題無し、とアシュタロスに報告した。

さて、その雪広ともきであるが、彼は姉のあやかに余り可愛がられていない。どうにも彼は大人びていて、ショタコンのあやかの琴線に触れないようだ。ともきも、ベタベタされるのがキライなので構わないのだが…。

「とうとう女に走ったか…。」

姉の友人が泊まりに来ているとは聞いていたのだが、こんな事になるとは…。もう少し自分が子供っぽく振る舞って、姉の欲望の捌け口になってやれたら、あの友人も姉の毒牙にかからずに済んだかもしれない。そう考えながらも、ともきは衝撃的な光景に見入ってしまった。部屋に戻った後も、その光景はなかなか脳裏から離れなかった。

その時、何故だかともきは先程の光景を絵に描いておこうとした。どういうわけか、描けるような気がしたのだ。手にシャーペンをとり、一心不乱に動かし始めるともき。その速さは尋常ではなく、時折残像を残すほどであった。そして…。

「うそだろ、何でこんな事が出来るんだよ!?」

そこには、ノートの上に描写された二人の姿があった。写真と見

紛うばかりの、精巧さで。

それは、『ジョジョの奇妙な冒険』と呼ばれる作品に出てくる能力だった。スター・プラチナ。精巧な動きと目にも止まらぬ速さを誇る幽波霊。しかしその姿はジョジョに出てくる姿とは少し違っていた。

あの、トラック運転手の姿だった。

彼の残滓は、恨み呪うものではなく『守りたい』という想いで復活し、彼の守護霊となっていたのだ。

次の日。ともきは自分の描いた絵を見て昨日の事が夢で無かった事を知る。通りかかった姉に興奮しながら自慢した。

「ねーちゃん凄いだろ！これ俺が描いたんだぜ！」

「あら、これは……っ！？」

爆発するあやか。案の定、殴られた。しかし、ボコボコにされながらも、ともきは笑っていた。

（俺、すげえ！絵の道、進めるんじゃねーか？）

ともきにはスター・プラチナを悪用する考えは毛頭無かった。

その後、ともきは類い希な力を持ちながらも、ネギまの物語に関

わる事無く人生を送った。

絵の道に進んだ彼だったが、最初はかなり苦労した。ただ、詳細な描写が出来るだけでは中々評価はされない。写真で事足りるからだ。そこで、彼は逆転の発想をする。空想上の存在を、しつこいくらいリアルに描き出す事にしたのだ。

彼の絵は、主に海外で高い評価を得た。そして、アメリカに渡って映画撮影用の背景等を描く仕事を請けるようになってからはそれがメインとなった。

無機質、だけど圧倒的な画力で見るものを黙らせる。様々な批判はあったものの、彼は一流のアーティストとして世界で認められるまでになっていた。そんな彼だが、実は一枚だけ、見た者に優しい感動を与える絵を残している。

その絵は、夫婦とその子供たちが笑いあう姿。幸せそうな、どこかの世界の家族を描いたものだった。

第十八話　修学旅行の朝

カチッ…カチッ…カチッ…

目覚まし時計を見つめるネギ。その長針が１２を指すと同時に時計のボタンを叩きつける。仕事をさせてもらえないまま、アラームは沈黙した。

「お姉ちゃん、朝だよ！お姉ちゃん、朝ー！！」二段ベッドの上で寝ている姉を、大きな声で起こす。

「ウガーッ！！！！」

バシッ！

反射的にネギの頭を叩きつけた。アリアは寝起きが悪い。ネギは頭を押さえて沈黙した。

「もう、昨日あれだけ眠れないって言うから魔法で眠らせたのに…どうしてこうも寝起きがいいのかしら。」

「だって、楽しみだったんだもん…。」

涙目で言うネギ。仕方なく頭を撫でてやると、ネギはエヘヘと笑って明るい顔になった。

「じゃあ着替えようか。昨日サンドイッチ作って冷蔵庫の中に入れておいたから、それ食べようね。」

「うん！」

急いで着替えるネギ。いつの間にか自分でネクタイを締めれるようになっていた。アリアの教育の賜物である。

着替えた二人はサンドイッチを手早く食べて支度を整えると、戸締まりをチェックしてから部屋を出た。

今日は、待ちに待った修学旅行初日。いつもは遅刻ギリギリに登校する者も、この時ばかりは早起きをする。教員寮を出たネギたちが集合場所へ向かう途中、何人か遅刻の常習犯を見かけて苦笑いを浮かべた。生徒にはまだ早い時間だった。

「こういうの、浮き足立ってるって言うんだよね。」

「アンタには、『お前が言うな』という言葉を贈るわ。」

「あうぅ…」

そんな会話をしながら麻帆良学園中央駅に入ると、前方に見知った姿を発見する。

「おはようございます、芦先生！！」

「おはようございまーす！」

「おお、ネギ先生にアリア先生！おはようございます！」

芦優太郎だった。３－Ｃは京都行きのクラスではない。では、何故彼がここにいるのか。

彼は、京都行きクラスであるＳ組の担任に移っていたのだ。

芦優太郎はそのルックスと優しい性格で人気があったが、何よりも教え方の上手さで評価を上げていた。そこで、最近平均点を下げ続けているS組の担任へ移らされたのだ。何せ、このS組は成績優秀者を集めたハズなのにF組はおろかバカレンジャーを要するA組にすら負けているのだ。「生徒の自信を取り戻させる為に、芦先生を担任に」という声が何度か上がって、新田先生が学園長に掛け合う事になったのだった。

本音を言うと、芦は京都へは行きたく無かった。

学園を見張っていたかったし、京都でのトラブルに巻き込まれて関係者になるのも嫌だった。それに…

(我が分身の小言を聞くのはウンザリだ。店に行かないと拗ねる超もどうにかしてほしい…)

最後の呟きが、本音の本音だったりする。…それはともかく。今は二人への対応に集中しよう。

「ネギ先生たちは、電車の乗り換え大丈夫ですか?」

「はい、昨日ネットで調べました!」

なんとも不安にさせる発言だった。それをフォローするようにアリアが続ける。

「私、買い物で大宮駅に寄る事あるから、大丈夫ですよ。」

「そうか、良かった。実は私は方向音痴でね。たどり着けるか不安

だったんだ。」

それを聞いてアリアが微妙な顔をする。そうだ、そう言えばこの人、学園都市内の雑貨屋にも付き添いが必要な人だったんだ！

「お前は、相変わらずだな。」

不意に後ろから声がかかる。振り返るとそこにはエヴァンジェリンと茶々丸の姿があった。

「おはようございます、エヴァンジェリンさん！」

「おはようございます。エヴァさん。」

ネギとアリアの挨拶に、二人が挨拶をかえす。芦は、うーん、と唸ってから急に思い出したように声を出した。

「ああ、ぬいぐるみをおねだりしてた子じゃないか。久しぶりだね。」

「妙な覚え方するなー！普通に道案内してくれた、で良いだろう！？」

「ははは。ゴメンゴメン、ゴメンついでにまた道案内頼めるかな。」

「厚かましいぞ貴様！」

エヴァンジェリンがヒートアップし始めたのを見て、アリアは少し焦る。

「まぁまぁエヴァさん、これもいい機会だから一緒に行きましょう

？」

「むむむ…。」

アリアの言葉に何とか抑えるエヴァンジェリン。視界の端でにこやかな表情でいる芦が腹立たしいが、せっかくの修学旅行を怒って過ごすのは勿体無い。

「分かった。おい貴様、一緒に行ってやるからはぐれるなよ。」

「ありがとう、エヴァンジェリン君。今度お礼にぬいぐるみを贈るよ。」

「う……可愛いのにしろ。」

そのやり取りに驚くネギ。エヴァンジェリンがからかわれている姿なんて、初めて見たのだ。芦とは余り話した事の無いネギだったが、少し興味がわいてきていた。

集合場所となっている大宮駅につくまで、ネギは芦と日本の文化について話をしていた。その話を横で聞きながら、エヴァンジェリンは芦を観察する。

（無自覚な能力者…というやつか）

以前、彼が見せた言霊の力。言葉に念を乗せて対象の心に直接響

かせる技。時には言葉そのものに魔力を宿す東洋の魔術。どうやらこの男は、無自覚にそれを使っているらしい。今も、ネギと話しながら時折言霊を発している。

（もしコイツが悪人だったら、恐ろしいな）

エヴァンジェリンの脳裏に、かつて大衆を言霊で煽動した権力者の姿が浮かぶ。エヴァンジェリンの中で、芦は要注意人物となっていた。

「存外に、上手くやってるみたいじゃないか。」

エヴァンジェリンが、試すように言葉をかける。すると、ネギはビックリして芦を見た。何故か芦は慌てている。

「な、何を言うんだエヴァンジェリン君。僕は芸者遊びなんてやってないぞ！？」

「なんの話をしとるんだ貴様らー！！」

アリアは脱力しながらそれを見ていた。

大宮駅に着くと、そこには既に新田先生を始めとした教員たちの姿があった。生徒の姿はまだチラホラとしか見えない。何人かの生徒が「始発で来ちゃった」などと言っている。

芦は新田先生の所へ。ネギもアリアに連れられて教員たちの中へ

行く。それを見送ってから、エヴァンジェリンは駅構内にいる知り合いを探し…

「ん？早いな…。」

神楽坂明日菜の姿を見つけた。

「あ、お早うエヴァちゃん。」

「おはよう、アスナ。しかし本当に早いな。楽しみで仕方が無かった…なんて柄じゃないだろう？」

「ま…まあね。いつも新聞配達のバイトで早起きしてるから自然と起きちゃって。そう言うエヴァちゃんこそ早いじゃない。楽しみだったんでしょ。」

うっ…　顔を赤らめるエヴァンジェリン。図星だった。

「まぁ、否定はしない。実際、この所眠りが浅いからな。」

「寝言から推測した結果、この所マスターは夢の中で鹿に乗り大仏と戦っていたようです。」

「それは流石に嘘だろう！？」

最近、茶々丸にすら弄られるほど、エヴァンジェリンは丸くなっている。明日菜はそんなエヴァンジェリンを微笑ましく思っていた。

「…まあ、それは良いとして。アスナ、班が離れてしまったからお前の護衛は私には出来ない。同じ班の木乃香は強いが、狙われてい

る意味ではお前と一緒だ。」

「うん…。」

表情が曇る。結局、稽古はしたものの魔法関係者に襲われた時に対処出来るレベルには達する事は出来なかった。

「桜咲刹那も居るが、ヤツは木乃香最優先だからな。やはりお前はお前で身を守る術が必要だ。そこで……おい、茶々丸。」

「はい、マスター。」

茶々丸が、大きなバッグから一体の人形を取り出した。

「わ、凄い可愛い！どうしたの、このお人形！？」

驚く明日菜。明るい顔をして近づくと、その鼻先にいきなり光る物が突き出される。人形の手には、サバイバルナイフが握られていた。

「舐メルンジャネーゾ？」

ポカッ！

「怖がらせてどうする、このバカ人形！」

エヴァンジェリンが慌てて突っ込みを入れる。

「コイツはチャチャゼロと言って、私の従者だ。単純な戦闘力なら茶々丸を凌ぐ力を持っている。コイツに、お前の警護を任せようと

思ってるんだが…。」

見ると、明日菜は固まっていた。よほどショックだったのだろう。

「悪カッタ。ゴ主人、悪カッタカラ、カバンニシマウノハヤメロ。」

「余計な事をするからだ、タワケが！」

バッグに入れられもがくチャチャゼロ。それを見て、我に返った明日菜が止めに入る。どんな存在であれ、力になってくれるならありがたい。

「あ、エヴァちゃん、この子について来てもらっていいかな。」

「いいのか？怖がってたみたいだが。」

「驚いただけだから大丈夫。チャチャゼロさんだっけ？よろしくね。」

「ケケケ、物分カリガイイジャネーカ。ヨロシクナ、アスナ。」

勝手に話を進められ釈然としないものの、アスナが良いと言うならいいか、とエヴァンジェリンは納得した。

「旅行中は、なるべくカバンの中に入れて絶えず一緒に居ろ。」

「分かった、ありがとうね、エヴァちゃん。」

ニッコリと笑う明日菜。とりあえずこれで心配事の一つは無くなったか。エヴァンジェリンはそう思って安堵していた。

【高畑・T・タカミチ】

大宮駅に集合し、ネギ君たちと出会って確信した。だいぶ緊張感に欠けている。仕方のない事だけれど、特使としてもう少し緊張感を持ってもらいたい所だ。

事前に西の勢力を調べてみたけど、殆どの鷹派勢力は確かに潰れた。けど、以前から執拗に麻帆良に攻めてきている連中の処分がまだ成されていない以上、今回の旅行で何か仕掛けて来るのは目に見えている。…はぁ、個人的にはハワイで普通に旅行を楽しみたかったね。

現地に先に入って貰ってる瀬流彦君の話では近衛姉妹が行方不明になってるという話だし、特使として詠春さんの所に言ったら、この件でも動く事になりそうだ。

明日菜君は……もう殆ど記憶が戻ってるのだろう。僕を見る目が、変わっている。ごめんね、明日菜君。すみません、ガトーさん。僕は結局、彼女を危険から遠ざける事は出来なかったみたいです。でも、絶対に守り抜いて見せます。その為に、強くなったのだから…。

時刻は集合時間の９時となり、駅の一角で点呼が行われる。楽しみに胸を膨らませる生徒たち。トラブルが起きないように気を引き締める教師たち。そして、この先起こるであろうトラブルに思いを馳せる魔法関係者。それぞれの思いが交錯する中、駅の構内アナウンスが響き渡る。

『ＪＲ新幹線あさま５０６号、まもなくホームに到着します。』

第十九話　ケロケロ特急

魔法世界のとある宮殿にて。

黒いローブに身を包んだ男が、傍らに控えている少女に指示を出していた。少女は丁寧にお辞儀をした後、持っている魔法道具で空間に映像を映し出す。

「高畑・T・タカミチ。ネギ・スプリングフィールド。マナ・タツミヤ。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。そして…」

「アスナ姫、か。よくもまとめて麻帆良の外へ出したものだ。」

クックック、と肩を揺らして笑う。男は映し出される映像を見ながら、今はこの場に居ない部下の事を思い出していた。

（これを機に高畑とネギ・スプリングフィールドを殺害させるか、それとも…）

そこまで考えていた男は、目に入った一人の人物の姿に目を細める。

（ああ、コイツがいたな。接触させても面白いかもしれん。）

それは、アリア・スプリングフィールドだった。

京都へ向かう新幹線の中。神楽坂明日菜はちょっとしたピンチに立たされていた。

「だから、エヴァちゃんが貸してくれたんだってば！」

「借りる理由が分かりません。別に少女趣味を馬鹿にしている訳ではないのですから、白状してもいいと思うのです。」

新幹線の席で近くになった綾瀬夕絵に、チャチャゼロを見られてしまっていた。

図書館島での一件以来、二人の関係は悪くなっている。明日菜は相手にしていないのだが、綾瀬の方が何かと弱みを見つけては絡んでくるようになっていた。馬鹿にされたのが気にくわない上に、いつも正論を言う明日菜が気にくわないようだ。

「マイ枕を持ってくる人間を馬鹿にする割にやってる事は子供なのです。」

「だから馬鹿になんてしてないでしょ！」

しばらく綾瀬の言い掛かりに付き合ってると…

「黙レヨ、デコチビ」

「「！」」

あらぬ方向から声が聞こえて来た。そして、怒りに顔を赤くする綾瀬。

「なるほど。腹話術で人を罵倒するとは中々やるです。」

「ち、違うわよ！そんなんじゃ…「話キケヨ、カス」わー！？」

おおー！…という声。気づくと二人の周りにクラスメートが集まってきていた。

「明日菜が面白い事やってるよー！」

「腹話術だってー！」

それまでカードゲームをしていた連中まで集まってきた。もはや、退くに退けない。仕方なく、明日菜は綾瀬との口喧嘩を再開した。

「枕が変わると眠れないのは分かるけど、わざわざマイ枕持って自慢するのもどうかと思うわ。」

「ム、また蒸し返しますか。自慢などしていません、ただ聞かれたから答えただけです。」

「ソリャ聞クダロ、枕抱イテ歩イテル奴ハ夢遊病患者カ只ノ阿呆ダ」

「いや、ちょっとそこまで言う事ないでしょ！？」

どっ…と笑いが起こる。明日菜は心の中で謝った。

……その後、綾瀬と明日菜とチャチャゼロの口喧嘩のような漫才のようなやり取りがしばらく続いて周りも盛り上がって来た時。

「キャー！」

離れた席から、悲鳴が聞こえて来た。

【石田留美】

京都、奈良。神社や仏閣を見て回るなんて何故そんな悪趣味な事をしなくちゃならないのか…。そんな事を考えていると、隣の席の長谷川さんが話かけて来ました。

「詰まんなさそうな顔してるじゃねーか。そんなに京都イヤか？」

「麻帆良を出た所で、あのうるさい人たちが居たらいつもと同じですからね。」

「まーな。」

後ろの席では、明日菜さんが腹話術で遊んでました。あの人、普段は常識人なのに旅行ではじけちゃうタイプなんですかね。意外です。

「ウチらの班はまだマトモだろ。」

私は、修学旅行のしおりの後ろに記載されたメンバー表を確認します。

一班
鳴滝史伽　鳴滝風香
釘宮　円　柿崎美砂
椎名桜子　春日美空

二班
超　鈴音　クー・フェイ
葉加瀬聡美　四葉　五月
ザジ・レイニーデイ
朝倉　和美

三班
雪広　あやか　那波　千鶴
村上　夏美　石田　留美
長谷川　千雨　龍宮　真名

四班
エヴァンジェリン　絡繰　茶々丸
大河内　アキラ　和泉　亜子
明石　裕奈　佐々木　まき絵

五班　近衛　木乃香　綾瀬　夕映
早乙女　ハルナ　宮崎　のどか
桜咲　刹那　神楽坂　明日菜

…確かに、私のいる三班が一番静かでストレスが無いかも。

「また難しそうな顔してるね。」

ふと、前の座席から声が聞こえて来ました。これは…龍宮さん？

「顔の造形という事でしたら、良い意味で受け取っておきますね。」

「難解な美は万人には理解されないものだよ？」

このやりとりは、仕事で一緒した時によくする軽口。私がナビで彼女が現場に出ている時のノリなのですが、長谷川さんには分からないみたいです。

「えーと…なんだそりゃ？ピカソの事か？」

！

「クッ……プハハハハ！！」

長谷川さん…それはないんじゃないですか？龍宮さんも笑いすぎです。

「まあまあ、留美もこれを食べて落ち着いたらどうだ？」

怒りに身を震わせる私に、少し焦って箱を差し出す龍宮さん。む、お団子ですか…。まぁいいでしょ。貢ぎ物を受け取らない道理はありません。

受け取った箱を開けます。すると。

ケロッ

ネギがトイレから車両に戻ってくると、そこには大量のカエルにパニックとなる生徒たちの姿があった。

「ど、どうしたんですか！？お姉ちゃん、これは！？」

「か、か、カエル！式よ、式！でも、ああ、リアルで見たら気持ち悪いいぃぃぃ！！」

アリアだって原作を知っている。こうくるとは予想していた。しかし、ここで見たのは漫画のように可愛いカエルではなく、徹底的にリアルなトノサマガエルだった。

動けないアリアのかわりに、ネギはカエルを捕まえ始める。隣の車両にいた高畑も異変に気づいて加勢してきた。

「ネギ君、親書は無事かい！？」

「え…あ、はい、ここに！」

胸ポケットから取り出して見せる。そこに、猛スピードで一匹のツバメが迫ってきた。

「フンッ！」

それを高畑が、片手で捕まえる。

「刹那君、今だ！」

「ハイッ！」

駆けつけた刹那が、一瞬で印を組んで呪言を唱える。

「怨」

高畑の手のツバメの身体が黒い炎に包まれ、燃え尽きた。

「い、今のは何を…？」

「式に呪詛を乗せて返したんです。それよりネギ先生、カエルをお願いします！」

「は、はい！」

カエル取りを再開するネギ。刹那は高畑に指示を仰ぐ。

「君もカエルとパニックになってる生徒を頼む。僕は術師を捕まえるよ。」

「はい！」

高畑は隣の車両に移ると、目つきを変える。その目は教師の目ではなかった。

カエル騒動の起きている車両からかなり離れた車両の連結フロアで、一人の女が苦しんでいた。腕に黒い痣が広がっている。呪詛だ。

「聞いてへんえ、呪術使えるもんがおるなんて…」

カエルやツバメを送りこんだ張本人であった。刹那の呪詛が身体を蝕んでいたのだ。

「き、清めんと！あかん…」

発熱まで始まり、頭がうまく働かなくなってきた。

しばらくフラついていると、視界に誰かが入ってきた気がした。が、視界がぼやけて分からない。

「こっぴどくやられたようだね。呪いは解いておくから、後は病院でみてもらうといい。」

…あかん、誰かに見られたら…。しかし、身体はろくに動かない。バタバタと誰かが駆けつけるのを意識の端で感じながら、女は気を失った。

高畑は混乱した。犯人らしき人間は確認した。しかし、既にＪＲ

関係者に保護されていた。おそらくモグリである事はバレ、警察に引き渡される事になるだろう。…対応が早すぎる。

（他に共犯者がいるのか？いや、もし居るなら脱出させているだろう…。）

釈然としないまま、自身の座席へと戻ってゆく。言いようのない焦りが高畑を支配していた。

…その背中を眺めているのは、芦優太郎である。

「一般人の乗っている場所で何をするつもりだったのやら。危ないのは彼も一緒だな。」

ため息をついた。

「やれやれ、他の乗客に迷惑をかける真似だけはしてくれるなよ？」

駅で買った饅頭や団子を台無しにされ怒り狂った龍宮をなだめ、心身ともに疲れきった石田は、隣の車両にいる芦優太郎に念話を繋げた。一言文句を言ってやらないと気がすまなかったのだ。

（マスター仕事しろ）

（ブハッ…！？）

隣の車両でのんびりジュースを飲んでいた芦は、思わず少し噴き

出した。横の席に座っている源しずな先生が、心配そうにハンカチを差し出してくれた。

「あ、大丈夫です。自分の持ってますから。」

「そうですか？お気分が優れないようなら言って下さいね？」

やんわりとハンカチを断り、気持ちを落ち着けてから念話を繋げた。

（いきなりなんだね。ドクターペッパー噴いたじゃないか。）

（そんな不気味な物捨ててしまいなさい。それより、マスターは教師でしょう。カエル騒動でパニックになっていた私たちの様子くらい見に来てもいいんじゃないですか？）

（君は私に何を期待してるんだ。カエルだと？食べてしまえば済む話だろう。）

（ＯＫ今から一匹持って行きます）

（まてまて、今私から愛の詩を送る。）

（…なんですか、それ。）

（いいか？……いつまでも　いると思うな　アシュタロス）

（……辞世の句として聞いておきます。では。）

念話が途切れた。

第二十話　京の都に日は落ちて

新幹線が京都駅に着く。

一足、車両の外へ踏み出すと、むあっとした熱気。関東と比べると、少し浮遊感を感じる独特な空気。京都の空気だ。

（帰ってきたんやなあ…）

木乃香は感慨深げに空気を吸う。駅の空気だから綺麗ではないのだが、木乃香にはどこか甘く感じた。

「木乃香、大丈夫？」

「うん、平気やえ。ありがとな、明日菜。」

気を使う明日菜に、にこやかに返す。本当は、胸の奥がキュッと詰まるような感じがしていたが、明日菜の言葉に救われる。

「お嬢様、清水寺に行くのは小学校の遠足以来ですね！」

「せやなぁ。せっちゃんが修学旅行生とケンカしたり、せっちゃんがのら犬を追いかけたり、せっちゃんが清水の舞台から飛び降りようとしたり…」

「お、お嬢様！忘れてください！」

「……刹那さんて、結構やんちゃ？」

少し沈みかけていた空気が明るくなる。そうだ、私が暗くさせてどうするんだ。刹那さんみたいにわざと馬鹿みたいに明るく振る舞わなければ！

「笑ってトコロテン鼻から出したもんな？」

「このちゃんやめてー！」

……わざと、だよね？

駅を出て、観光バスに乗り換えると一行は今日の観光場所、清水寺へ。この日は比較的人が少なかったが、このメンツである。普段の倍以上の騒がしさ。風光明媚な景観も騒音で台無しとなっていた。

「うわー、これが有名なワイヤレスバンジー！誰か飛び下りれー！」

「一番、長瀬楓、逝くでござる！」

「おやめなさい！！」

そんな騒がしいクラスメートをよそに、エヴァンジェリンはしみじみと舞台から京の都を眺めていた。

「これが…京都。E旅、夢心地…。」

「知らない街を歩いてみたい気分ですね、マスター。まさに今歩いてきましたが。」

それを聞いて悲しくなるアリア。よほど、旅番組を見続けたんだなあ…。

ネギは、一応引率としてクラスの皆を見ていたが、神社仏閣マニアの綾瀬夕絵の解説に聞き入って仕事を忘れていた。もはや見張りは高畑任せである。

清水寺の見物以降は、自由行動である。集合場所は観光バスのある駐車場で、時間まで付近の見学が出来る。土産物を買う事も出来る。

「この近くに、恋占いの神社があるんだってー！」

誰かが、言った。

途端に盛り上がるクラスメートたち。委員長は皆に落ち着くように声をかけるが…

「ま、まぁせっかく京都に来たんですから、今日は大目に見ますわ。」少し顔を赤らめながら言う。視線の先には、同じく顔を赤らめる明日菜がいた。

「ラヴ臭がする！」キュピーン！早乙女ハルナの目が光る！

「な、な、何言ってんのよ！ほら、行くならさっさと行きなさいよ！私はこっちの音羽の滝に行くから！」

「音羽の滝には、縁結びに効果のある滝があるのです。」綾瀬の解説にキッと睨みつける明日菜。フフン、と鼻で笑う綾瀬。

「えー、えー？」

奇妙な緊張感を醸し出す二人に、宮崎のどかは困惑するのだった。

そんな賑やかなメンバーから少し離れた所で、木乃香は辺りの様子をうかがっていた。隣の刹那も同様だ。

「仕掛けて来ぃへんな。」

「強引な彼ららしくありませんね。」

顔を見合わせる。その時、木々の間から木乃香に向かって一筋の光が放たれた。

キィン！

咄嗟に刹那が刀ではじく。抜刀したのは一瞬で、直ぐに鞘に納め布袋に包む。はじいたのは、かんざしであった。

「手紙…やね。」

木乃香が拾って、かんざしに括りつけられた紙を開く。そこには、次のようなメッセージが。

『近衛木乃葉、木乃実両名の身を預かっている。二人の命が惜しくば、今夜零時に指定の場所に一人で来い。もし仲間の姿を確認したら、二人の命は無いと思え。』

「くっ…卑怯な！」

「あの子ら、も少ししっかりせなアカンなぁ…。」
指定の場所は、今日宿泊する嵐山旅館から少し離れた松尾大社の近くの山中。
「ま、なるようになるやろ。今は修学旅行楽しもうな、せっちゃん。」

「う…は、はい、お嬢様。」

仕方なく、頷く刹那。しかし、心は散々に乱れていた。関西呪術師の卑怯さや、近衛姉妹の身の安全、考える事はたくさんあるが、何より…

（なんで、そないに平然として居られるん？このちゃん…）

それが理解できない刹那の胸に、恐怖心が湧き起こっていた。

【超鈴音】

旅館に入って皆くつろいでいる中、私は五月と在庫のチェックと売り上げの計算をしていタ。

いやー、売った売った、売りまくったネ！朝の大宮駅、新幹線内、清水寺！前回に比べて１．５倍は売ったネ！これも、意外な戦力ザ

ジ・レイニーデイのおかげだヨ。彼女、まるでハーメルンの笛吹きみたいに人を呼び寄せたヨ。一体、何者ネ？…とにかく、クーも頑張ってくれたし初日は大成功！後は学園長権限振りかざし夜の街に繰り出せば…

そんな野望も、一人のオッサンによって阻止されたヨ。高畑先生…。私をロビーに呼び出して一体私に何させる気カ？何気に留美まで…。厄介事ネ？

「すまない。実は夜、京都の街で捜索活動をするんだけど、君たちの力を借りたいんだ。」

そして語られる依頼内容は…まあ、またその手のトラブルかと頭を抱えタ。拉致された近衛姉妹の捜索。私の飛行カメラと留美の植物ネットワークが狙いネ？

「超鈴音は班員の護衛を頼まれていますが、いつ任務が追加されたのです？私に至っては荒事に関わらないのが条件で学園に協力しているのですが。」

オオウ、留美怖いネ。面倒くさいと思ったら頑固になるのはマスター譲りみたいだヨ。

「これは…僕の勝手な依頼だよ。学園長は、知らない。」

「なら、お断り…どうしたんですか、超。まさか請けるんじゃないでしょうね？」

片手で留美の言葉を遮った私に、容赦ない口撃。まあまあ、留美、落ち着くネ。短気は損気ヨ。

「取引をしよウ、高畑先生。」

「取引？…僕に支払える対価でなら…」

「何、簡単な事ヨ。私と留美の、修学旅行中の夜間の自由行動を認めて欲しイ。近衛姉妹の捜索は、私達のやり方に従って欲しイ。失礼だガ、高畑先生に人捜しは向いて無いと思うヨ」

「う…。確かに、手詰まりではあったけどね。分かった、従うよ。」

そのやり取りを見ていた留美が、不満そうな顔をしていタ。

「留美、留美は学園と一緒でナビに徹して宿から出なくていいヨ。たまに携帯で連絡するくらいで、そんなに面倒はかけないネ。」

「まあ、それなら構いませんが。」

渋々了承する留美。基本的に魔法使いが嫌いなのかナ？高畑先生に対しては初めの頃から距離を置こうとしていたようナ。まあいいけド。

「じゃあ、今夜から探索開始ネ？」

「ああ、１０時から、頼むよ。」

そう言って、高畑先生は部屋に戻って行っタ。留美も、面白く無さそうに部屋へ。

さて、これで夜の街へ出られるヨ。商売は出来ないけれど、前回京都で何が起こっていたのか…クーから聞き出せなかった事を、突き止めてみせるネ。

清水寺の見学を終え、嵐山旅館にチェックインした３－Ａ一行。皆、まったく疲れた様子も無く、夕食を終えた後は各部屋で馬鹿騒ぎをしていた。そんな中、旅館のとある人気の無い一角で木乃香と刹那、そして木乃香そっくりな少女が話をしていた。

「ほな、ウチの身代わり頼むな。」

「はい、お嬢様。お嬢様もお気をつけて。」

「いってらっしゃーい。」

呑気に返事をする身代わりに笑いかけてから、木乃香は近くの窓を開け、そこから外へと飛び出して行った。

「お嬢様…。」

心配するのは、木乃香の身か、それとも心か。刹那の瞳が不安に揺れていた。

「せっちゃん、泣いたらアカンえ?ウチ、なでなでしてあげるわ。」

身代わりが、刹那の頭を撫でる。その感触に、無邪気でいられた日々を思い出して、少し泣けた。

近衛木乃香。類い希な剣の才能を持ち、最高の治癒魔術の使い手でもある。実家を勘当されて東に移り住んでからも、関西の派閥争いに巻き込まれ何度も命を狙われ続けた。近衛に生まれた宿命とは言え、何故お嬢様ばかりがこんなに苦しまなければ…。刹那には、世界の全てが敵に思えた。

自分も、烏族とのハーフ。純粋な人間では無い。それも、アルビノ。忌み児として同族からも嫌われ、人間からもいじめられた。髪を染め、アイコンタクトをつけ、普通の人を演じなければならない身。周囲の人間を恨んだのは一度や二度ではない。

刹那は流れる涙を拭って、身代わりの木乃香を抱きしめた。少しでも、自分の温もりが本人に伝わればいい、と。

「せっちゃんは、甘えたさんやなぁ。」

ぽややんとした身代わり木乃香は、そう言って優しく刹那の背中を撫でてあげるのだった。

修学旅行、1日目が終わろうとしていた、そんな夜中。アリアはネギを寝かしつけると、明日の予定表を眺めて思案していた。

(目立ったトラブルがカエルだけ、というのはだいぶ原作と違うわよね。高畑先生やエヴァさんが居るおかげかしら?)

確か、原作では音羽の滝に酒が混入されたり、色々トラブルが起

きたはずだ。それが、今回は起きていない。ネギの苦労が増えなくて良かったと、安堵していた。ただでさえ子供に先生をやらせてストレスを与えてしまっている。少しでもネギに普通の子供でいられる時間を与えたかった。

（明日は、何があったかしら？よく覚えてないのよね……ん？）

その時、アリアは胸の奥が震えたような気がした。なんだろう。そう思って、不思議そうに胸を押さえる。そして、何とは無しに窓の外を眺めた。

夜の京都。街の明かりと木々のシルエットが心を落ち着ける。久しぶりの旅行で気が高ぶっているのかしら、と思っていると…

！？

旅館の前の通りに、一人の女の子の姿があった。それは、見慣れた姿。赤毛の髪を風になびかせた…

自分と同じ姿をした女の子だった。

第二十一話　心の在り方

真夜中。松尾大社の裏手、愛宕の山の一角に、白い光に囲まれた場所がある。普通の人間には視認出来ないそれは、関西呪術師の作った人払いの結界である。うっそうと木が生い茂る中、ぽっかりと何も生えてない広間があり、そこに十人ほどの呪術師と、木に縛り付けられた近衛姉妹の姿があった。

「来たか、近衛木乃香。」

リーダー格の男が言う。木々の影から浮かび上がるかのように現れたのは、近衛木乃香その人であった。

「何の用なん？あの子ら使ってまで何がしたいん？」

木乃香の質問に薄ら笑いを浮かべる男たち。

「あんた、父親が憎くないか？自分を勘当した、近衛詠春が。」

「全然？むしろ羽虫の少ない関東に引っ越せて嬉しいくらいや。まあ、はるばる飛んでくるけったいな虫も居るみたいやけれど。」

男たちの顔色が変わる。

「どうも、自分の立場が分かってねえみたいだな？」

ニコッと笑う木乃香。

次の瞬間、木乃香の手が光り、木に縛り付けられている近衛姉妹の首が斬り跳ばされた。

……姉妹の姿が紙に変わる。

「て……てめぇ！？」

「あんな、アンタらがマトモに交渉せんのは散々見てきてるから分かってるんよ。いつまでも馬鹿の一つ覚えみたいに…ええ加減、学習しよな？まぁ、ここで死ぬから学習しようもないけど。」

そして、木乃香の姿が消える。いや、瞬間的に移動したのだ。狙ったのは、結界を張っている男。

ザシュッ

「ぎゃあぁぁぁ！？」

男の腕が斬られる。しかし、血は一滴も出なかった。

「……って、治ってる？…あれ、動かねえ…何で動かねえんだよ！？」

これは、木乃香の生み出した最凶の剣。男の腕の筋を断ち、一瞬でヒーリング能力で治したのだ。筋が切れた状態で。

…男の腕を治す方法は、なくなった。少なくとも、魔法では絶対治せない。身体は、治ったと勝手に判断してしまっている。

「ち、ちくしょう！なんとかしてくれ！」

「ばか、落ち着け！精神を集中しろ！でないと…」

でないと、どうなるか。この男の張っていた結界は、人払いの他に場を明るく照らす術も重ねがけしていた。つまり…

フッと明かりが消え…

「くそっ、どこにいやがる！」

周囲は闇に包まれる。

ザシュッ！　　ビシュッ

「ひあぁぁ！？」

ザクッ　　「ぎゃああ！」

ズバッ　　「ぐあぁぁ！」

男たちの悲鳴だけが、夜の闇にこだまする。木乃香は一人残さず斬りつけ、治し、全員を刀の振るえない身体にした。

実はこれは、祖父である近右衛門に言われて編み出した技である。余りに木乃香が容赦なく殺しまくるので、峰打ちで済ませられないか、と頼んだが断られてしまった。そこで、せめて少しは治して致命傷に至らないようにしてくれとお願いしたのだ。結果、死ぬより残酷な剣技となった。

「さて。」

「ひぃっ！？」

リーダー格の男の耳元で、声がした。姿は見えない。抵抗しようにも、マトモに動くのは片手と片足のみ。どうしようも無い。

「木乃葉と木乃実は何処におるん?返答次第で治してやらん事もないえ。」

「ほ、本当か!?……え、映画村だ!」

「ふぅん…。」

「ほ、本当だ!信じてくれ!」

木乃香はニコッと笑った。

「おおきに。」

男の身体に、無数の手刀が放たれる。激痛にのた打ち回り、回復され、またのた打ち回って…。

心が壊れた所で、身体を完全に治した。

「どの道、今頃移動させられとるやろ。最後までウチを騙すつもりやったんね…」

木乃香は、姉妹が既に死んでいるのでは、と考えていた。関西呪術協会の過激派はヤクザ以上に残忍だ。何度か殺された経験のある木乃香は、それを良く知っていた。

「戻ろうか…せっちゃん待っとるし。」

独り言を口にする。戦った後は、誰かのそばに居たい。一人で闇の中に居るのは、戻ってこれなくなりそうで怖かった。

ただ、刹那のそばに居たかった。

その頃、嵐山旅館の中庭で、アリアと一人の少女が対峙していた。付近には人払いがかけられている。

「初めまして、と言ったほうがいいのかしらね。アリア・スプリングフィールドさん？」

「…何者よ、アナタ。」

動悸が激しさを増す。聞いてはいけない、と本能が囁く。しかし、逃げる事は出来ない。

「私？ふふふ、私はねえ…」

ニンマリと笑みを浮かべ、此方を見る。アリアはその視線に怯んだ。

「近藤美沙子。離婚したから…本条美沙子になるのかしら。」

アリアは、足元から崩れ落ちそうになった。

本条美沙子…それは、転生前の自分の名前だ。

「そんな…それは、私の名前……」

「あら、違うでしょ？アナタはアリア。結構楽しく暮らしてるみたいじゃない？……息子の事も忘れて。」

「……っ！わ、忘れてなんか…」

「そう、忘れてなんか無いわよね！だって、今度こそ子育て、成功したいもんねえ。自分について来なかった裕也なんて…」

「やめて！」

アリアの身体が震える。

この女は、自分だ。間違いなく…自分の記憶を持っている。

「ここはいいわよねぇ。ボケた親の介護もしなくていいし。自分を馬鹿にするご近所さんも居ないし。イヤらしい目で見てくる隣の旦那さんも居ないしねえ。」

「やめて…やめて……。」

震えが止まらない。何故？何故こんな奴が出てくるの！？

「でも、安心して。アナタは、つらくて自殺した美沙子じゃないわ。」

「え…？」

その言葉は、不気味なくらい優しかった。その優しい響きが、自分の心を完全に壊そうとしているなんて、アリアには分からない。

「だって、本条美沙子は、私。アナタは、私の魂を複製して造られた…劣化コピーでしかないもの。」

「……ぁ、…ぅぁ……。」

アリアの脳裏に、封印されていた記憶が蘇ってくる。並べられた人形、巨大な水槽のような物に入れられた、人の形をしたナニカ。目を覚ました自分に初めて声をかけてきた、仮面を被った男の声。

『おはよう、Ｎｏ．９』

「ィヤアァァァァ！！」

絶叫するアリア。今度こそ、壊れた。自分は…自分はただの人形……

崩れ落ちる。…しかし、その身体を、支える者が居た。

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。」

「ネ…ネギ？」

ネギ・スプリングフィールドだった。

「あ…あら？人払い、失敗しちゃったかしら？」

「たわけ。私の居る所で結界なんて発動してみろ。一発で分かるわ。」

「……っ！？」

振り向くとそこには、エヴァンジェリン。屋根の上に立っていた。傍らに控える茶々丸と共に。

「そ…そんな！学園の外には出れないハズじゃあ…」

「情報が遅いな。そんな物、とっくにアリアが解いたわ。これからは情報化社会だぞ？アイティーカクメイだぞ？」

「マスター、無理しないで下さい。お身体に障ります。特に頭に。」

「ど、どういう意味だ！？」

緊張感の無い会話だ。

しかし、その会話の中から美沙子は素早く状況を把握する。そして、すぐに平静に戻ってネギを見た。

「動じないのね。まぁ、当然か。知ってたもんね？」

「…！……ネギ？知ってたって……」

ネギはアリアを見つめてから、美沙子に視線を向ける。

「兄さんたちが違う存在である事には、気づいてました。お姉ちゃんの事は…ひょっとして、と思った事があるくらいです。」

ネギが兄達に追いつきたい一心で、勉強に打ち込んでいた頃。魔法薬の勉強の最中に手にとった遺伝学の本。それを読んだネギは、大人たちが教えてくれなかった真実を知る事になる。

兄達は、父の子供ではない。赤毛の父と、金髪の母との間に、青や緑の髪の毛の子供は産まれない。子供の頃から疑問に思ってきた事だったが、誰も取り合ってくれなかった疑問。その真実に触れてから、ネギは密かに兄達の秘密を知ろうとしていた。しかしそれは、単純に兄達のように強くなりたかっただけだった。

しかし兄達の態度がキツくなってきて、ネギが孤独に苛まされるようになると、その気持ちに変化が訪れる。それは、幼いネギには分からなかった感情。とても暗く、黒い炎のような感情。

敵意。殺意にも似た…

ネギは知らず知らず、図書館の禁書区域に足を踏み入れてしまう。そこで目の当たりにする禁断の知識の数々。そして、気づいたのだ。

「兄さんたちは、魔法生物。人工的に造られた存在である、と。」

「ふ…ふはははは！傑作ねえ、アリア！気づいてなかったのアナタだけよ！キャハハハハ！」

「ぅ…ぅう……っ！」顔を両手で覆う。もう、死にたい。誰も居ない所に行きたい…。

しかし、アリアの身体を抱きしめる力は強かった。しっかりとアリアを支えている。普段のあどけないネギからは想像出来ない逞しさ。

「だから、何だと言うんです？」

「ははははは……は？」

笑いが止まる。ネギの言葉が、理解出来ない。コイツハ今、何ト言ッタ？

「お姉ちゃんは、お姉ちゃんです。アナタが何と言おうと、それは変わりません。」

「ネギ……。」

アリアには、今のネギの言葉こそ、信じられなかった。自分の正体を知ってなお、自分を姉と呼ぶ。それは…奇跡に思えた。

「くっ……言っておくけどね。ソイツは私のレプリカなの。それも、出来損ないよ。魔力適性マイナス、魔力を使えば使うほど劣化するの。エヴァンジェリンの封印を解いたんでしょ？そろそろ壊れるわよ、ソイツ。」

ネギの表情が変わる。驚愕。アリア自身も、驚いていた。

「ふふふ。その点、私なら壊れないわ。オリジナルですもの。どう？そんなスグ壊れる人形なんて捨てて私の弟になりなさいよ。」

アリアの心に絶望が宿る。この図式は、まるで自分が捨てられた時のままじゃないか。夫に、子供に、出ていかれた時の…『母さんヒス起こすから怖いんだよ。』『お前は少し、田舎に帰って落ち着いた方がいい』そう言って、他の女の所へ行った。思い出したくない言葉が蘇ってくる。ネギだって、こんな壊れた姉なんてイヤだろう…私は、私は……

「お断りします。」

キッパリと言い切る。

「どうして？私ならたくさん甘えさせてあげるわよ。壊れないし。ヒスだって起こさないわ。」

ネギは、しっかりと美沙子を見据えて言った。

「お姉ちゃんが言ってました。自分の目で見たものを信じなさいって。だから、僕は自分の見てきたお姉ちゃんを信じます。今日あったばかりのアナタの言う事なんて、信じません！それに…」

ネギは特上の笑顔で言った。

「アナタと毎日顔合わせてたら、気が滅入りそうですし。」

場の空気が、固まる。

そして…

「プハハハハハハ！いいぞ、坊や！よく言った！」

沈黙を破ったのは、それまで黙っていたエヴァンジェリンだった。

「美沙子とやら。お前は何も分かってないな。アリアは独立した魂を持つ一つの命だ。一人の人間として麻帆良にやってきて、力は無くとも人柄と心の在り方が素晴らしかったからこそ、周りに人が集まった。この私も、な。お前には、誰も集まらんだろう。」

ギギッと歯ぎしりする美沙子。額には青筋がたっている。

「それに、私を誰だと思ってる?世界最高の人形使いだぞ?どうとでも出来るに決まっているだろう。……お前も人形なのだから、分かってると思ったがな?」

「……っ!?」

次は、美沙子が固まる番だった。自分が…人形?そんな馬鹿な…あの方は、確かに自分をオリジナルだと言っていたのに…!

「デタラメ言ってんじゃねーわよ!私はオリジナルだ!こんな作り物なんかじゃない!!」

アリアを見る。そして…

「何見てんだクソガキャアァ!!」

アリアを庇うようにしていたネギ目掛けて、至近距離から無詠唱で魔法を放った。それは、雷撃系の中位魔法、『白い雷』。

ズガァアァァン!

爆風が巻き起こり、砂埃がもうもうと上がる。エヴァンジェリンが軽く指を鳴らし風を起こして、その砂埃を吹き飛ばした。

そこには、無傷のネギ。その前に身体を投げ出していたアリアも

……無傷だった。

「な…『魔法無効化体質』!?私が神に望んだのは『解析』と『理解』のハズ!何故そんな…」

しかし、言葉を発する事が出来たのはそこまでだった。いつの間にかすぐ隣に立っていた茶々丸が、美沙子の側頭部に銃口をつき付けていた。…馬鹿でかいショットガンの。

「次は地獄で会いましょう。ベイビー。」

ガァァァァンッ!!

強烈な音を立てて、美沙子の頭部が吹っ飛ぶ。真っ青な液体を撒き散らして…。残った身体も、力無く地面に崩れ落ちる。エヴァンジェリンはそれを見て、呆れたように言った。

「随分安い素体だ。これを作った奴、予算不足だったのか?」

ネギは、未だに呆然とするアリアの身体を抱きしめる。

「お姉ちゃん、もう大丈夫だよ。何があっても、お姉ちゃんは僕が守るよ。」

アリアの瞳に、何かが溢れ出す。そして、こぼれ落ちた。

「ネギ…ネギ……、ぅわあぁぁぁぁん!」

アリアは、泣いた。

この世界に来て、初めての涙だった。

大きな声をあげ…

顔をくしゃくしゃにして…

子供のように泣いた。

それは、まるで赤ちゃんの産声にも似ていた。もはや、自らの素性を隠す必要も無い。ありのままのアリアが生まれた瞬間、だったのかもしれない。

エヴァンジェリンは、アリアが泣き止むまで防音と人払いの結界を張り続けた。少しもらい泣きしていたのは、内緒だ。

さて、いつもならそんなマスターを嬉々として録画しているハズの茶々丸であるが…

中庭の掃除をしていた。

第二十二話　二日目の朝

朝。旅館の大広間に麻帆良の生徒たちが集まって来ている。あと少ししたら朝食の時間。昨日中々眠れなかった生徒が多かったのか、彼女たちにしては比較的静かな朝を迎えていた。

ネギは、アリアのそばに付いていた。昨日の今日で、まだ不安定なのだ。体調も崩しているらしく、ネギは高畑に今日の見回りでアリアを休ませてくれ、と頼んでいた。

「うん、無理はいけないからね。アリア君の分は僕が回ろう。」

「すみません、ご迷惑かけます…。」

少し青い顔で言う。その様子を心配そうに眺めるのは、エヴァンジェリン。昨日、あの後アリアの身体を調べていたから、アリアの状態は理解している。関係者である高畑にもアリアの許可をとってから伝えてあった。

…アリアは、いつ止まってしまってもおかしくない状態だった。多少の不調は我慢して気力で乗り切るアリアだから、最近になるまで身体の異変に気づけないでいたのだ。彼女の身体を動かす体内のマナは、ほとんど枯渇していた。魔力に適さない身体…そのかわりに使われていた力は、大気中のマナ。それを貯蓄する器官が、魔力を使う度に劣化していたのだ。

「タカミチ。私は今日はアリアに付いていようと思う。」

「エヴァ…。」

「エヴァさん、それは駄目です。貴女は学生なんだから、ちゃんと修学旅行しなきゃ。」
アリアが、気丈に振る舞って言った。
「私は、寝ていれば大丈夫だから。それに、貴女やネギに昨日いっぱい元気をもらったわ。」
「お姉ちゃん…。」
ネギは、小さい頃から姉に母の姿を求める事があった。今見ているアリアの笑顔は、ネギが思い描いた強く優しい母の笑顔だった。
広間に、ぞくぞくと生徒たちが集まってくる。アリアは、この話はお終いとばかりに生徒たちの誘導に向かった。ネギは慌ててついて行き、高畑は心配そうな目でその背中を見つめている。エヴァンジェリンは…少し怒っているかもしれない。
(もっと、自分を大切にしろ…。見ている方の身にもなれ…)
諦めて自分の席につくエヴァンジェリン。そして、アリアの今後を思い悩んでいた。
(素体が魔力に耐えられない…器を変えるなら簡単だが、出来ればあの身体自体を直してやりたい…)
「マスター、もうそろそろ朝食が始まります。」
「ん?ああ、すまない。考え事をしていた。」
やめよう。エヴァンジェリンは考えるのをやめた。今ここで思い悩んでいる姿をアリアに見せたら、きっと気にしてくるだろう。面

倒な事は、後で考えればいい。今は無事に旅行を終える事だけを考えていよう…。

疲れを見せまいと振る舞うアリアを見ながら、そう思った。

「お嬢様、眠れましたか？」

「うん、大丈夫や。だいぶグッスリ寝れた。せっちゃんのおかげや。」

気遣う刹那の言葉に、にこやかに答える木乃香。もう木乃香の顔に、昨日までの暗い影はない。刹那はそんな木乃香の笑顔にひとまず安心した。

昨日、帰ってきた木乃香は、どこかおかしかった。幸運にも昨日は明日菜と綾瀬が枕投げ合戦を引き起こし、班の面子の殆どが新田先生に捕まり廊下で正坐させられていた。身代わりを消して入れ替わるのは簡単だった。刹那は無事に帰ってきた木乃香を喜んで迎えたのだが…

木乃香は、笑顔を貼り付けて、しかし泣いているような表情をしていた。

…一緒に寝て欲しい。

初めて聞く弱音に困惑しながらも、一緒に寝る刹那。握られた手は痛いくらいに力んでいた。

（何があったんだろう…）

喉元まで出掛かった言葉を、無理やり飲み込む。今は、ただ黙ってそばにいよう。そう思って、刹那は優しく手を握り返した。

「昨日は、ちょっと恥ずかしい所見せてもーたな。今日からは、いつも通りやから安心してな？」

「私は昨日のお嬢様でも構いませんよ。雷の音に怖がっていた頃のこのちゃんを思い出して懐かしかったですし。」

「あーん、せっちゃんのいけずー！」

少し澄ましたように答える刹那と、困った表情の木乃香。いつもと逆の二人の姿に周囲のクラスメートは驚く。

（あんな木乃香さん初めて見た…）

（刹那さんてあんなにくだけた表情できるんだ。）

（うぅ…私が寝てる間に絶対楽しい事があったんだよ！よーし、今夜は夜更かししてやるー！）

皆が思いを巡らせている中、少し違った視線を送っているのは明日菜とあやかである。

「ごめんね、あやか。昨日は遊びに行くって言ってたのに捕まっちゃった。」

「仕方ありませんわ。私も一緒に寝たかったけど…。明日の自由行動は一緒なんです。それまでは、我慢しますよ。」

視線は、羨望の眼差しだった。自分たちも、あの二人のように一緒に夜を過ごしたかったのだ。

（コラ重症ダナ。テオクレカ…。）

バッグの中でチャチャゼロが呟いていた。

【宮崎のどか】

せっかくの朝ご飯なのに、味がしないです。それと言うのも…

「のどか、食事が終わり次第すぐにネギ先生を誘うです。この機会を逃してはなりません。」

「まあ気楽に誘っちゃいなよ。ネギ先生、奈良で一緒にお茶しない？とか言って。」

ぅえぇん！ゆえ、ハルナ、二人とも怖いよぅ…。お茶なら京都じゃないのかなぁ？

ネギ先生の事は、一度危ない所を助けてもらった時から憧れてて…たまに見せる凛々しい表情にもドキッとしたり…気になってたけど、だからって誘ったりなんか…。

「甘いです。この玉子焼きのように。もぐもぐ。」

食べながらお話しない方がいいよ?

「ゆえの言う通り!結構ライバル多いみたいよ?痛っ、小骨が歯茎に刺さった!?」

もう、行儀悪いよハルナ…。

でも、確かに食事中にネギ先生に視線を送ってる人が結構いました、佐々木さんや、鳴滝さんたち…あれ、委員長さんは見てません。なんでだろー…わっ、隣の明日菜さんと見つめあって…あれっ、あれっ、まさか…

「のどか、落ち着くです。落ち着いて箸を下ろすです。それ以上鮭は細かくならないです。」

え?　手元を見たら…

わあっ、焼き鮭の身がこれ以上無いくらいにほぐれてる!骨は粉々に…どうしよう!?

…仕方ないのでご飯に乗っけて食べました。これはこれで美味しいです。カルシウムもとれます。くすん。

それはそれとして…ネギ先生と一緒に奈良を回れたら、凄く楽しいだろうな、と考えるとゆえたちの言うとおりにしてみてもいいかも…。

うん、そうしよう。

ちょっと勇気がいるけど…誘ってみよう。一緒に奈良を回りませんか、って。

「「「ご馳走さまでしたー！」」」

皆が、声をそろえて言う。食事が終わり、これからは班別の自由行動に入る事になる。各班の班長と記録係はパンフレット片手に出発前の打ち合わせに入るが…

「ネギ先生、一緒にまわろーよ！」

「わー、まき絵抜け駆けズルい！」

「ネギ先生、こっちに来なよ！」

それ以外のメンツはネギの争奪戦を始めた。揉みくちゃにされ、あぶぶ、と情けない声を出すネギ。昨日の力強さはどこに行ったのか。

「アリア先生、少しいいですか？」

そんな騒動の中、少し離れた場所で休んでいるアリアに声をかける人間が一人。

…石田留美であった。

「あら、どうしました？」

「もしよろしかったら、私達の班とご一緒していただけませんか？」

そこに、エヴァンジェリンが口を挟む。

「アリアは体調が悪い。諦めるんだな。」

「ちょっとエヴァさん、言い方がキツいわよ。…でも、ごめんなさい。体調が悪いのは本当なの。だから、見回りとかは今日はできないから…」

石田は、視界の端にいる芦に意識を向ける。芦は僅かに頷いた。

「体内のマナが枯渇しているのですね？」

…！！

アリアの目が見開かれる。エヴァンジェリンは殺気混じりの目で石田を睨みつけた。

「何者だ、貴様…。」

「植物と話せる、ちょっとオシャマな女の子です。…アリア先生。私達の班は今日、嵯峨野を中心に散歩をするんですが、その際に植物たちに力を分けてもらいましょう。」

「力を…？」

「ええ。この周辺の木々とはもう友達になりましたから。嵯峨野の方は素敵な竹林があります。そちらを散歩しながら、力を分けても

らいましょう。少なくとも、修学旅行の日程を乗り切れるくらいには回復するハズです。」

アリアは圧倒される。今まで色々あって忘れていたが、あのクラスの中で一番得体のしれないのが石田留美だった。大停電の際に学園と協力関係になったと聞いてからは警戒を解いていたのだが…自分の状態を見ただけで理解した石田に、少し怯える。しかし、アリアはその申し出を受ける事にした。今更何を恐れる事があるというのだ。それに、本当に体調が戻るならありがたい。

「じゃあ、お願いしようかしら。」

「お、おいアリア！？信用する気か！？」

ニコッと笑うアリア。

「勿論よ。自分の生徒だもの。」

くうぅっ、と怒りをこらえるエヴァンジェリン。アリアめ、どこまでお人好しなんだ！

キッと石田を睨み、エヴァンジェリンは言い放つ。

「いいか、アリアに傷一つでもつけてみろ…想像しうる中で最も陰惨な方法で殺してやる！」

「分かりました。殺されるのは嫌ですからね。」

それを涼しい顔で受け流す石田。そんなに強くないとは言え、神の分身。滅多にやられる事は無い。

石田は、「それでは後ほどお呼びします」と言って去って行った。

「本当に…何者だ、あいつは…。」

「それも含めて、聞いてくるわ。でもきっと、大丈夫。悪い人じゃないわ、彼女。」

「フンッ…。」

まあ、いい。何にせよ、敵に回るなら潰すだけだ。エヴァンジェリンは面白く無さそうに呟くと、自分の班に帰って行った。

ふう…　ホッとため息をつくアリア。エヴァンジェリンの殺気は、いつ見ても慣れない。そう思って胸をなで下ろしていると、少し離れた所から大きな声が聞こえて来た。

「よ、よろしければ今日の自由行動…私達と一緒に回りませんかー!?」

ああ、こんな事もあったっけ。アリアは微笑む。ネギ。昨日の事はひとまず忘れて、今日は楽しんできてね。そして、一生懸命悩むの。アナタらしさを、無くさないで…。昨日のアナタは素敵だったけど、今はまだ子供で居ていいと思うわ。

ニコニコと笑って承諾するネギを、アリアは優しく見つめていた。

その頃、とある一室にて。

「ところで茶々丸。お前、朝食は普通に食べてたが大丈夫か？」

「普通でない食べ方があるなら気になる所ですが…ハイ、葉加瀬に食事の出来る身体にしてもらいました。味覚も人と同じです。」

「そうか！つまり京都の味付けを覚えたら、麻帆良でも京料理の味が楽しめるわけだな！」

テンションの上がるエヴァンジェリン。茶々丸は少し微笑んだ。

「ですが、今日行くのは奈良です。」

「ム…奈良か。奈良で美味い物ってなんだ？あまり聞かないが…。」

「無論、奈良漬けでしょう。」

「奈良漬け？おお、漬け物か！日本的でいいじゃないか！だったら今日は奈良漬けを買って、味を再現出来るようにしろ！」

「ハイ、マスター。ふふふ…。」

「ん？どうした？」

「いえ、何も。……クスッ」

上機嫌な茶々丸に眉をひそめながらも、エヴァンジェリンは奈良に思いを馳せるのだった。

第二十三話　愛と鹿、その刹那

修学旅行二日目、この日は班別での自由行動となっている。最低三つ、神社や仏閣などの名所を巡れば後は何処へ行ってもよいので、大抵の生徒が近場の神社等を見てから大阪に遊びに行くようだ。中には私服を持参している者もいる。これはＵＳＪのアトラクションで濡れてもいいように、らしい。

そんな遊び感覚でいる生徒と違って、ネギの同行する５班は至って生真面目であった。近鉄電車に乗って向かう先は、奈良。近鉄奈良駅を出た一行は、まず駅前の光景を見てテンションが上がっていた。

「あはははは！さすが奈良、噴水の中に坊さんがいるー！」

「行基像なのです。日本で初めて大僧正になった偉いお坊さんなのです。そうやって笑い飛ばしたら罰が当たるです。」

綾瀬のウンチクも、早乙女ハルナにとってはお笑いネタにしかならないようだ。ゲラゲラ笑っている。

「えーと、どういう人なのでしょうか…」

ネギが不思議そうに聞く。

「一般的には、奈良の大仏を作る際に資金集めをした人として知られています。時の権力者から弾圧を受けても仏教を広め続けた人で、仏教界の四聖の一人とされています。」

「へえぇ…これから行く大仏の…」

感心している横で、ハルナが「水も滴るナイス・ボーズ」とか言って笑っている。流石に明日菜が叩いて突っ込みを入れていた。

そんな騒がしいメンバーの中で、ただネギに視線を向けるのは宮崎のどか。彼女は今、幸せの絶頂にいる。

（ネギ先生と一緒…嬉しいです…）

今朝の自分を誉めてあげたい、と思っていた。あんなに勇気を出したのは初めてだった。もう一度やれと言われて出来る事ではない。

「のどか、もう一度行こうか。」

「ふえええぇっ!?」

ラブ臭を嗅ぎつけたハルナがのどかの耳元で囁く。幸い、今の奇声はネギには聞かれていないようだ。ハルナは、奈良公園へ向けて歩きだしたネギの背中を見ながら続ける。

「好きなら告白しちゃいなよ! 大丈夫、修学旅行中の告白は８７％の確率で成功するってデータが出てるからさっ! やっちゃえやっちゃえ!」

「今日ののどかには神が降りています。きっと上手くいくですよ。」

いつの間にか隣に移動してきた綾瀬がのどかの背中を押すような事を言った。

「あうぅ…」８７％? そんなに確率が高いなら…

「これから大仏見るでしょ? そこらへんでネギ先生と二人にしてあ

げるからさ。そん時に告っちゃいなよ。」

「ネギ先生なら、ちゃんと向き合って答えてくれると思うです。伝えないより、伝えた方が絶対良いです。」

「あうあぅ…いいのかなー…」　潤んだ瞳でネギを見つめるのどか。そんな横顔を見ながら、ハルナはスケッチブックを開いてデッサンを始めていた。

（うひゃーかわええ！こりゃいい表情だよのどかー！）

（台無しです、はやくしまうですよハルナ！）

二人の声は、のどかの耳には入らなかった。

【桜咲刹那】

奈良には随分久しぶりに来ました。小学生の頃以来でしょうか。ＪＲ奈良駅と近鉄奈良駅を間違えて迷子になったのが昨日の事のように思い出されます。

奈良の大仏を見学した後、私とお嬢様と明日菜さんは、ハルナさん達に頼まれてネギ先生から離れる事になりました。宮崎さんが告白するとの事ですが、教師と生徒という関係以前に１０歳の子供と中学三年生…いえ、愛に形など関係ないですよね。性別さえも愛の

前には…そんな妄想をしつつ私達が向かったのは近鉄奈良駅近くの商店街でした。お土産物を買う時間にあてたのです。

私の隣にいるお嬢様は、実は本人ではありません。身代わりのお嬢様です。今朝、朝食を終えてからお嬢様は木乃葉様達の探索に向かわれました。私も同行したかったのですが、私は学園長から明日菜さんの護衛も任されているので班を離れる事は出来ません。お嬢様には、代わりに私の式をお供につけてもらう事にしました。実はお嬢様が木乃葉様達の事を心配していると知った時、私はホッとしたのですが、だからこそ少し冷静さを欠いているような今のお嬢様を想うと気が気ではありません…。

「せっちゃん、難しい顔せんとコレ見てー。」

ハッ！いけません、私は私で自分の任務を果たさねば！えーと、なんでしょうかお嬢様。いいお土産でも見つけましたか？

「あんな、これどう思う？」

店先の、指差した先に並べてあった物は……鹿のふんチョコ…？

「ちっちゃい餅をチョコでくるんであるんやて。見た目それっぽいえ。」

…むぅ。これは…食べたくない。

「つまらないですね。冗談商品としても程度は低いです。」

「そーやんな。これやったら本物つかませた方が冗談としては高等や。」

「……。」

確信しました。やはり身代わりといえどお嬢様はお嬢様です。無駄に容赦がない。

ところで…明日菜さんはどこに？まさか、西の者に狙われて…そんな事を考えていると、商店街を抜けた先で鹿に絡まれている明日菜さんを発見しました。何やってるんですか、明日菜さん。

「だって、私何も持ってないのに鹿が何かよこせって…」

ここの鹿は甘やかされ増長しまくってますからね。…しかしこんなに商店街付近まで来るのは珍しい。よほどお腹がすいていたのでしょうか、一頭の鹿が明日菜さんのカバンを突っつきました。すると…

ビリッ！

「舐メルンジャネーゼ？」

「「わーっ！？」」

な、な、何ですか！？何故カバンからナイフが！？鹿めちゃくちゃビビッてるじゃないですか、リアルでチャッ〇ー見る事になるとは思いませんでしたよ！ちなみに明日菜さんは切り裂かれたカバンを見て声をあげたみたいです。いや、今はこの人形の所業と銃刀法を意識しましょう。…まあ私も人のこと言えませんが。

「わあ、お人形さんや。ナイフ持ってて怖いな？」

「ケケケ、マア俺ハ悪ダカラナ。」

「ほな、代わりにコレ持とな。」

「ン？オイ、コリャアヤバイ」

ナイフを取り上げられ代わりに持たされたものは…どんぐり？お嬢様、何故どんぐりを？そして…

プァーッ！

どこからともなく取り出したラッパを吹きました。は？何を？ポカンとする私を無視して人形が明日菜さんに声をかけます。

「オイ明日菜ヤバイ、逃ゲルゾ」

「わ、わ、ちょっと！？」

ワケも分からず人形を抱えて駆け出す明日菜さん。その後ろを…

「「「キューン！！」」」

鹿たちが追いかけて行きます！何故！？

「鹿さん、ホンマは鹿せんべいよりどんぐりの方が好きみたいや。さっきおっちゃん撒いとったのいくつか拾って来たんよ。ラッパは本体に渡されたやつや。前もって買ってたんやて。」

さっき鹿と遊んでたと思ったらどんぐりが目当てだったんですか。ラッパ買ったって、何やってるんですかお嬢様…。

「一度自分で鹿呼べるか試したかったんやて。…ところでええんかな、せっちゃん。」

なんでしょうか？

「明日菜の護衛、どうするん？」

ああーっ！？

奈良公園の一角、少し開けた場所でネギとのどかが向かい合っている。膝を震わせるのどか。そして、意を決して口にする。

「私、ネギ先生の事出会った日からずっと好きでした！私…私、ネギ先生の事大好きです！！」

「のどかさん…」

物陰から見守るハルナと綾瀬も緊張する。けしかけたのは自分たちだが、まさか本当に告白するとは…。

それも、これはだいぶ真剣だ。

ネギ先生はどう答えるのだろう？固唾を飲んで見守る。もし断ったら…ネギ先生は悪くないけど、悪いのは自分たちだけど、もう彼に対して良い感情は持てないだろう。二人は今更ながらに後悔し始めていた。

「のどかさん、ありがとうございます。」

皆が緊張する中、ネギはにこやかな表情をして言った。

「僕は今まで、家族以外の人に好きって言われた事がありませんでした。だから、凄く嬉しいです。」

「ネギせんせー…」

「僕、まだ子供だけど…僕なりに、のどかさんの気持ちに応えていきたいと思います。のどかさん、僕ものどかさんの事、大好きですよ。」

！！

のどかの瞳に、涙が溢れだした。信じられない言葉。これは夢ではないだろうか？

「うおおぉぉぉ！ネギ先生最高ー！」

余韻を台無しにしたのはハルナだ。物陰から飛び出してネギを抱き上げる。

「あわわわわっ！？」

「良かったですね、のどか。やっぱり、気持ちを伝えて正解だったです。」

「ゆ、ゆえ～……グスッ」

感動するのどかの肩を優しく撫でる綾瀬。うまくいって一番安心したのは、綾瀬かもしれない。

「私…まだ夢見てるかもー…夢だったら、怖い…」

その言葉に素早く反応するハルナ。抱き上げていたネギを乱暴に

芝生の上に投げると、ハルナの得意技、音だけビンタを炸裂させた。

パシーンッ！

「あうぅっ！？いたー…くない？なんでー！？」

混乱するのどか。本当に夢なのだろうか。

「もいっちょ行くよ、それっ！」

パシーンッ！

「あうーっ！…って、また痛くないよー！ハルナ、もっとぶってー！」

「はいよっ！」

パシーンッ、パシーンッ！

「もっと、もっと！痛くしてー！！」

「やめるです、ハルナ！のどかが目覚め始めてるです！！」

それを呆然と見つめるネギ。あれ、なんでこんな事に？…そんな理解できずにいるネギの耳に、遠くから知ってる声が聞こえてきた。

「ネ～ギ～！逃～げ～て～！！」

声の主は明日菜。ハルナたちも一緒に振り返ってみると…

「「「「わーーーっ！？」」」」

人形を抱えた明日菜の後ろを、鹿の群れが追ってきていた。

「何やってるですか明日菜さん！」

「ヤバイねコリャ。のどか、逃げるよ！」

「えっ、えっ、あうぅ！？」

あまりの急展開に困惑するのどか。その手を、ネギがしっかりと握って笑いかけた。

「行きましょう、のどかさん！」

「……あ、ハイッ！ネギ先生！」

固く手を繋いで走り出す二人。ハルナと綾瀬も目を合わせ笑う。うまくいったね、と。そして、二人の後を追うように走り始めた。

ドドドドドド…

鹿たちに追われて走るネギたちは、皆何故か笑顔だった。

「ゲラゲラゲラ、コレハコレデ楽シイジャネーカ！」

「全っっっ然楽しくないわよ！助けて刹那さーん！」

…若干一名、笑顔でない者もいるようだが。道行く人たちもあまりの光景に驚きつつも、頑張れー、という呑気な声援を送っていた。

そんな、騒がしくも楽しい時間を過ごしている最中。件の刹那はと言うと…

「ここは…何処ですか？」

「手水とる所やえ、おっきい鹿がヨダレ垂れ流しとるやん。汚物で手ぇ洗えとか、この神社舐めとるな？」

「このちゃん、発言ヤバいから！？」

身代わり木乃香と一緒に春日大社にまで迷い込んでいた。

第二十四話　魔都

ネギ達が奈良観光に向かっていた頃。アリアは石田のいる三班に同行して京都の嵯峨野を探索していた。嵯峨野は宿泊している嵐山旅館のすぐそばにあり、徒歩とバスで事足りる。竹林で有名な場所であり、名所も集中していてノルマの三カ所達成が楽に出来るのだ。

「まさか、明日遊ぶ為にこの周辺を選んだわけじゃないでしょうね？」

アリアが担任の顔で言う。もっとも、この班にそんな不真面目な人間はいないので本気ではない。

「それこそまさかですよ。那波さんや長谷川さんが風景写真を撮りたいと言ってたのでここを選んだのです。」

「ブログに載せる写真なら、綺麗なやつがいいからな。まあ那波はどういうつもりか知らねーけど。…普通に趣味ならオバ「長谷川さん？」ヒッ！？」

いつの間にか背後を取っていた那波に声をかけられ固まる長谷川。それを見てやれやれ、と石田は首を振った。

今、三班は件の竹林を歩いている所だ。この道をずっと歩いて行けば、野宮神社につく。有名な観光スポットらしく、散歩している人がちらほら見受けられる。アリアは中々石田に話を切り出せずにいた。…その時、不意に頭の中に声が響いてきた。

（アリア先生、聞こえますか？）

（え…石田さん！？）

それは、隣を歩く石田の声だった。長谷川と話している最中なのだが…

（テレパスが私の特異能力なのです。二人きりになれそうにないので、このような形で話をさせてもらいました。）

（石田さん…あなた、一体何者？）

アリアは、ストレートに聞いた。敵でないのは分かるのだが、得体がしれないうえに頭がいい。駆け引きをしたら確実に手玉に取られると思い、直球勝負に出た。

（先生と同じ転生者です。目的は…そうですね。超鈴音のお手伝いという所でしょうか。）

（……っ！魔法を世界にバラすと言うの！？）

アリアの覚えている歴史では、超は魔法を世界にバラすのが目的でこの世界に逆行してきた。故にその反応は至って普通だ。しかし石田は少し笑いながら否定する。

（この世界の超さんは、二回目の逆行を行ってきた超さんです。もうとっくにそんな目的は持ってません。）

そして、語り出す真実。目的地につくまで、石田はアリアに自分たちの素性をある程度話した。超鈴音が元々の原作キャラである事、介入者によって壊された世界を守る為に逆行した事、これまで、多

くの介入者を無力化してきた事…。石田は嫌がらせでアシュタロスの事も言おうとしたが、何とか言い留まった。

対するアリアの困惑は凄まじいものであった。昨日、自分がコピーであると言われて、今日は自分たちのような介入者が世界を壊していたと言われたのだ。無理もない。石田が植物を通じてアリアの身体にマナ…原初の力を送っていたので体力は回復していたが、精神的にはかなりのショックを受けていた。

「あら、アリア先生、具合がよろしくないのでは？」

アリアの顔色が悪いのを見た班長のあやかが声をかける。

「もう野宮神社につきますから、そこで休憩しましょう。」

石田がそう言うと、アリアは青い顔で頷いた。

野宮神社は、その景観の美しさの他に縁結びの神社として知られている。撫でると御利益を得られる亀石というものもあり、班のメンバーはこぞって石に群がっていた。石田はそんな姿を見ながらそばにいるアリアに声をかける。

「すみません。体調の優れないアリア先生に言うべき内容では無かったですね。」

「いえ、いいのよ。話してくれて嬉しかったわ。石田さんも、打ち

明けるのには勇気が要ったでしょうから。」

別に勇気も何もないのだが、こんな時にまで相手を気遣うアリアに、石田は素直に感心していた。マスターが気に入る理由も、分かる。

「先生。身体の事ですが、魔力さえ使わなかったら問題無いのですね？」

「ええ、多分そうだと思うわ。本能的に、使うの避けてたみたいだし。使った後は、気分悪くなったから…」

ふむ、と石田は考え込む。これなら別に自分でもなんとか出来るかもしれない。石田は、アリアに向き合って真剣な目つきで言った。

「先生。今後、魔法を使わないのなら私でも何とか問題を解決できそうですよ。」

「え…本当ですか！？」

「はい。これは誰にも話してませんが、私は魔法を分解して元々の無形な力に戻す能力も持ってます。これによって作られた力が、先生の身体を動かすマナと同じ物なんです。マナのやりとりを通じて、私は植物と交渉したりしてきました。もしこの能力をアリア先生に分け与えたら、先生は自分で魔力をマナに変換させて生きて行く事が出来るようになります。」

「分け与える…そんな事まで出来るのですか。」

アリアは昨日今日と驚き続けて感覚が麻痺しているのかもしれな

い。段々驚かなくなってきていた。
今なら何を言われても受け入れられそうだ。

「まあ、仮契約しないと無理ですが。」

「…!?」

まだ驚く余地があったようだ。

「流石にこれは私のオリジナル能力なので、パスを繋げないと共有出来ないのですよ。…まあ、抵抗があるでしょうからゆっくり考えてみてください。少なくとも、修学旅行中に必要な体力は回復したでしょう?麻帆良に帰ってからでも結構ですから。」

「わ、分かったわ…。」

真っ赤な顔で頷くアリア。帰ってきたあやか達は、血色の良くなったアリアを見て回復したと勘違いして安心していた。いや、確かに回復はしていた。その後立ち寄った甘味所では先程の事を忘れようとしたのか勢い良く餡蜜を食べて周囲を驚かせた。石田と目が合う度に挙動不審になって慌てる様は、知らない者が見たら確かに元気になったように見えるだろう。しかし、一人だけその異変に気付く者が。

「石田さん、もしかしてアリア先生に何かしました?」

「いえ、何も。強いて言えばちょっとしたお誘いをしたくらいです。」

その言葉にアリア同様顔を赤くするあやか。そして、ギュッと石田の手を取った。

「ワタクシ、応援させていただきますわ！」

目を爛々とさせて言うあやかに、流石の石田も戸惑っていた。

（えーと、確か原作では木乃香さんと刹那さんが応援対象でしたよね？私、また面倒な事に巻き込まれたりしてます？）

修学旅行二日目の夜。この日は生徒の多くが明日の自由行動の為にノルマ達成に必死に移動しまくった為、皆一様に疲れきっていた。先生たちは苦笑いしながらも、大人しくしてくれるならいいか、と安心していた。普段なら騒がしい３－Ａも例外では無く、お風呂に入った後は前日の騒動が嘘のように静かだった。疲れきって早く寝る者、大人しくトランプで遊ぶ者…もっとも、脱衣勝負になりまた騒がしくなったのだが、それ以外は皆早く寝たようだ。

そんな中、一人の少年と一人の少女が旅館の庭先でひっそりと話をしていた。ネギと、のどかである。

「せんせーが、魔法使い？」

「はい。僕は立派な魔法使いになる為の試験で日本に来ました。のどかさんを助けたあの日も、実は魔法を使ってたんですよ。」

ネギはそう言いながら、指を鳴らした。優しい風がのどかの頬を

撫でる。それは確かに、あの時自分の身体を包んだ風。優しい匂いがしていた。

「本当は秘密にしなきゃ駄目なんですが、信頼出来る大切な人には教えてもいいってお姉ちゃんも言っていたので。のどかさんには、伝えておきたかったんです。」

ポーッとなるのどか。その言葉は、どう聞いても愛の告白にしか聞こえなかった。自分の考えていたより、もっと大人な恋みたい…。のどかの胸が、喜びに震えた。

「あの、私、秘密にしますー！誰にも言いません！」

「ありがとうございます。のどかさんには、隠し事したくなかったんです。」

ネギもホッとしていた。素性をバラして嫌われる可能性はゼロではなかった。魔女狩りの歴史は勉強していたし、実際麻帆良での戦いを体験している。のどかが拒絶する事も覚悟していたし、もし拒絶されたら記憶を消さずに自分が麻帆良を出るつもりだった。

「あの…それで、のどかさんにお願いしたい事があるんですが、いいですか？」

「はいー。私で出来る事でしたら…。」

「僕、明日高畑先生と仕事があって、皆さんと一緒に観光が出来ないんです。魔法関係で、もしかしたら危険があるかもしれません。」

その言葉に、とろけきっていたのどかの顔にも緊張が走った。

「僕と高畑先生だけなら大丈夫なんですが、一般の生徒が巻き込まれたら危険なんです。のどかさん、クラスの皆が不用意に巻き込まれないように、見てあげてくれませんか？」

ネギの言ってる事は、難しい事ではない。要は、ネギが用事で出て行く時に付いてくる人間がいたら止めて欲しい、という事だ。

「は、はい！ちゃんと、止めます！」

「あ、でも無理に止めなくても知らせてくれたら僕らで撒きますから。携帯電話の番号、教えておきますね。」

「わー…。嬉しいですー。」

頬を染めて喜ぶのどか。実はネギにしても携帯アドレスを交換したかった。仕事にかこつけて言い出すあたりが、妙に小賢しいのは天性のものなのだろうか。

「のどかさん。麻帆良に戻ったら、いっぱい遊びましょうね！」

「はい、ネギせんせー！」

そんな会話をしている二人を、物陰からこっそり覗いている者が一人。イヤホンから流れてくる言葉を聞いて興奮を隠せないでいた。

「く〜っ！ここに来て最大のスクープ来たーっ！先生と生徒の淫行現場かと思ったら魔法使いとはね！」　それは、麻帆良のパパラッチこと朝倉和美だった。彼女は超鈴音と同じ班だったが、昼間超の手伝いで売り子をする代わりに取材用の機材を改良するように頼んでいたのだ。彼女の仕掛けた集音マイクはしっかりと二人の会話を拾っていた。しかし…

「言葉だけじゃ何の証拠にもならないし、風起こしてたけど映像にはとらえにくいし…。もっと分かりやすい証拠が必要だよねー。」

ニンマリと笑う。

「明日のお仕事とやらを、調べないとね。」

夜の京都は魔都の色合いを帯びる。

超鈴音率いる探索チームは初日の聞き込みや植物ネットワークからの情報から、京都は三年坂にあるとある美術館に近衛姉妹が捕らえられている事を突き止めていた。

「何故こんな所に…。」

瀬流彦がつぶやく。昼間、なんどか通った所だった。

「何気にセキュリティーが固いうえに周囲の建物が近いから異変があれば察知しやすいヨ。警備員詰め所も近くにあるから侵入者対策

にはいい場所ネ。」

「悪知恵だけは働くみたいだね。」

超の解説に忌々しげに言う高畑。彼は、かつての仲間である近衛詠春の為にも姉妹をいち早く救出したかった。

「うちら、姿見えてへんのやろ？このままセキュリティー突破してもええんかな？」

これは、近衛木乃香本人だ。昼間は瀬流彦と。夜は皆と京都を探索している。

「ふむ。光学迷彩で姿は消せるけどセンサーはかわせないヨ。まず先に私がセンサーを無力化するからそこで待ってるネ。」

そう言って超は美術館の中へ入って行く。高畑、瀬流彦、木乃香の三人は美術館前でしばらく時間を潰していた。端から見たら何も無い空間。しかし確かに三人はそこに居る。

どれくらい待っただろうか。美術館の方からカチャッという音が聞こえ、玄関の扉が開く。木乃香たちは周囲に注意を払いながら建物の中へと足を踏み入れた。暗い美術館は異様な雰囲気を醸し出している。超たちは足音一つ立てる事なく建物奥へと進んで行った。

そして、管理人室と書かれた部屋に入り、見つけた。

床に転がり、ただ暗闇を見つめる近衛木乃実の姿を。

「…！」

皆の顔に緊張が走る。死んでいる？いや、違う。まさか、心が壊れて…？

そう思って固まる三人をよそに、木乃香が迷彩を脱いで姿を表した。

「木乃実、迎えに来たえ。」

「……ぇ、木乃香姉様？」

木乃実の瞳に光が宿る。

その様子を見て、高畑たちも迷彩を脱いで姿を表した。どうやら、コミュニケーションをとれるくらいには無事らしい。

「何故、来てしまったんですか木乃香姉様。私達なんてただの政治の道具でしかないのに。」

「そう自分を卑下するもんやないよ、木乃実。うちら姉妹やもん。そら助けるよ。」

ニコッと笑う木乃香。木乃実は堪えてきた涙を零す。

「なあ木乃実、辛くて話も出来んかもしらんけど、教えて欲しい。木乃葉はどこなん？誰にさらわれたん？」

えぐっ、えぐっ、と泣く木乃実。必死で呼吸を整えて何とか言葉にする。

「グスッ…木乃葉姉様は、本部の裏にある使用人の離れに連れてかれました。攫ったんは、勝敏様です。」

木乃香は記憶を辿る。田崎勝敏。確か関西呪術協会の幹部の一人だ。父と敵対する勢力のリーダーだったハズだ。

「なんで木乃葉だけなんやろな。ここに木乃実一人だけとか不自然や。罠？」

「いえ…私は、勝敏様に力を消されました。元々魔力の無い私は用済みらしいです。木乃葉姉様は魔力があったので生け贄にされるとか…。」

この言葉に反応したのは高畑だ。生け贄。本部近くに連れて行かれ、生け贄にされるとなれば目的は一つ。最悪だ。

「木乃香姉様、勝敏様は危険です！何をされたか分かりませんが、私は持っていた能力を消されてしまいました！木乃香姉様も、一人で立ち向かったら負けてしまいます！」

涙まじりで訴える木乃実。そんな木乃実を優しく抱きしめる木乃香。木乃香はその背中を撫でながら高畑に声をかける。

「明日の本部出向、うちも一緒に行ってええかな？一人で戦うんは、やめときたいから。」

「ああ、勿論だよ。こちらからお願いしたいくらいさ。」

そして、次に超へと振り向く。

「木乃実を旅館の方に匿ってあげれんかな。普通の病院やと、かえって危ないかもしらんから。」

「分かったネ。桜咲刹那にも事情を話しておくヨ。」

「うん。頼むわ。」

その言葉を聞いて、木乃実はやっと自分が助かったのを悟った。
やっと、安心できる…そう思ったら身体の力が抜けた。意識も、そのまま遠のいて行く。

「ええよ、そのまま眠り。よう頑張ったな、木乃実。」

最後に聞こえたのは、そんな優しい姉の声だった。

第二十五話　目覚めの気配

修学旅行三日目。前日にノルマを達成した生徒たちは、いよいよ待ちに待った自由行動に顔を輝かせていた。その大半がＵＳＪ行きが目的らしい。ネギはクラスのメンバーから沢山誘いを受けたものの、高畑に助けてもらって何とか断る事ができた。今日の昼に、特使としての仕事が待っているのだ。捕まってはいけない。

朝食を終えた生徒たちは、ひとまず自分たちの部屋へ行き支度を整える。のどかや明日菜たちのいる５班も、部屋に戻っていた。

「それにしても、木乃香どうしたの？今日はやけに静かだったけど、調子悪いの？」

「え、ううん、そんな事あらへんよ。ちょっと食事の量が多かっただけや。」

「そう？何時もならもっと食べられたと思ったけど…。」

心配して話しかけてくる明日菜に、冷や汗をかきながら答えるのは…長髪のカツラを付けた木乃実である。

「お嬢様は昨日の夜、色々と激しかったから疲れているのです。詮索は無用ですよ、明日菜さん。」

刹那のフォローに、明日菜と木乃実の顔が真っ赤になる。

（なんという説明をするんですか刹那さん！誤解されるでしょう！）

（この場合、相手を黙らせるには最良の手だと思うんですけどね。）

「あ、ああ…だったら今日は、ふ、二人っきりにした方がいいのかな？」

困った顔で言う明日菜。少し離れて聞いていた綾瀬たちも恐るこちらを見ていた。

「ちゃうねん、これは…」

「お気遣いは無用です。続きは麻帆良に戻ってからと決めていますから。」

がっくりとうなだれる木乃実。誤解されてるのは木乃香であって自分ではないのだが、周囲の視線がつらかった。

昨日、夜中に救出された木乃実は嵐山旅館の身代わり木乃香と入れ替わり、木乃香の影武者として動く事になった。刹那は、その護衛である。

（長くても2日の辛抱です。耐えて下さい）

（いいですけどね。捕まって監禁されてるよりずっとマシですから。）

今の木乃実には、身体能力以上の事は出来ない一般人みたいなもの。西では弱者は誰かの庇護下にないと生きていけない。だから、この環境は最適だったりする。

木乃香姉様は大丈夫だろうか…。木乃葉様も、無事で居てくれるといいけど…。部屋の窓から遠くを眺めながら、木乃実は姉たちの身を案じていた。

対してこちらはエヴァンジェリンの居る４班。ＵＳＪに行きたい佐々木や明石たちに仕方なくついて行く事になったエヴァンジェリンは、出発前にアリアのもとに顔を出していた。

「お前は今日は大人しくしているんだな？絶対だな？」

「大丈夫ですよ。そんなに心配しなくても外には出ません。そんなに信用ないですかね。」

「ないな。お前の無茶は見てきたからな。」

容赦ないエヴァンジェリンの言葉に苦笑いするアリア。いつからこの人は私の保護者になったんだろう。逆なのになあ、と思っていた。

エヴァンジェリンには昨日の石田の話を伝えてある。隠そうとしても無理矢理聞いてくるだろうから、こちらから話したのだった。石田の能力に驚いたエヴァンジェリンだったが、「だから魔法を使えない奴が出てきたのか。とんだ食わせ物だったな。」と笑っていた。多分、石田とはそんなに険悪な仲にならないだろうな、と直感した。

「しかし、回復したからと言って油断はするなよ。お前は変わらず、危険な状態なんだ。」

「はいはい、分かってます。ほら、行ってらっしゃい。向こうで皆が待ってるわ。」

「全然分かってないだろ、お前！くっ…、仕方ない、続きは帰ってからだ！土産を期待しておけよ！」

そう言って肩を怒らせ皆のもとへ歩いて行くエヴァンジェリンを、アリアはニコニコしながら見送った。その姿は担任というより、母親の姿にも似ていた。きっとエヴァンジェリンも、それを感じていたのだろう。振り返って手を振る彼女の表情は、いつもより少し幼かった。

三日目の自由行動の大きな特徴は、他の班との合同でコースを回る事が許されている点だろう。あやかのいる3班と明日菜のいる5班は今日、一緒に京都を回る事になっていた。そして、もう一つ重要な点が一つ。

「石田と朝倉のトレード、成立ネ。」

「あ、てめえ逃げる気だな！」

教師たちの監視が行き届かない完全自由行動では、メンバーの入れ替えが出来るのだ。超鈴音の申し出をあやかが了承し、朝倉と石田のトレードが成立していた。文句を言っていたのは長谷川だ。自分だけこのカオスから逃げやがって、と憤っていた。

「どうせ、私は売り子ですよ。長谷川さんもコスプレしてやってみますか？あ、その時は『ちう』さんとお呼びしましょうか。」

「わ、分かった。分かったから黙れ。」

焦って周囲をキョロキョロと見る長谷川。気づいている人間なんて居ないだろうが、一応気にしている。

今回のトレードは超というより朝倉の強い希望である。ネギと強い繋がりのあるのどか、明日菜、刹那、木乃実がいる5班についていけば、きっとネギの秘密に近づける。上手くいけばネギの仕事とやらにも関われるかもしれない。

（くふふふふ、絶対尻尾を掴んでやるからね！まずはのどかから聞き出してみようかなー？）

邪悪な笑顔である。スクープゲットしてボロ儲け。そんな単純思考を本当にしている人間だからこその行動力であった。

【芦優太郎】

京都はいい。私にとって京都とは数々の思い出のある土地ではあるが、基本的に嫌な思い出なので気が滅入る所ではあるのだが。この景色には罪は無い。過去は忘れてこれから良い思い出を作っていけばいいだけなのだ。今日やって来たのは映画村。先ほどまで受け持ちのクラスの生徒を見ていた。

「どうしました？」

隣を歩く源しずな先生の声に我に返る。言っておくが私から誘っ

たのではないぞ？たまたまだ、たまたま。…一体私は誰に言い訳しているのだ。

「いえ、京都は思い出深い土地なんです。少し、昔を思い出していました。」

「あら、芦先生は京都、初めてではなかったんですね。てっきり私、初めてかと…。」

「すみません、迷子になった所を助けていただいて…。京都と言ってもだいぶ前ですから…。」

意味不明な言い訳にも嫌な表情一つ見せないしずな先生は、女神にしか見えない。石田…イシュタルなんかよりずっと女神だろう。

（すみませんねえ、マスター。女神というより魔女ですから。）

「ブフッ！？」

「あ、芦先生！？大丈夫ですか？」

噴き出す私は何も悪くない。私の視線を追ったしずな先生も固まった。…一体お前は何をしているのだ！？

映画村の一角に、うさみみを付けたわが分身がメイド姿で肉まんを売っていた。

一体何故こんな事に！気づけば明日菜は一人、誰も居ない映画村を逃げ続けていた。追いかけてくるのは謎の忍者軍団！？いや、明日菜は彼らの視線を知っている。あれは麻帆良にいた時度々自分に向けられていた視線。魔法先生？いや、彼らは皆本国へ帰されたハズだ。という事は…自分を王家の人間と知って狙う魔法世界の人間？逃げながら、思考を巡らせた。

「イイ加減迎エ討トウジャネーカ。ココナラ暴レ放題ダゼ？」

「わ、私弱いから無理よ！アンタの足手まといにしかならないもの…。」

「ヤレヤレ、何ノ為ノ護衛ダヨ。ソレニナ、明日菜。オ前、充分強イゼ。自信持チナ。」

「え…？」

背中のリュックの中から聞こえてきた、チャチャゼロの言葉に驚く明日菜。チャチャゼロは明日菜の許可を得る事無くリュックから飛び出した。

手には、前日エヴァンジェリンを通して超鈴音が渡したナイフが。それは、茶々丸の新装備に使われた武器の更に改良型である。魔力をエネルギーに伸縮自在なナイフ…アーティカル・ブレイドである。

「明日菜ハ俺ノ後デ見テナ。」

光を放つナイフを片手に、可憐な人形が追っ手に向かって駆け出

した。

追っ手の忍者たちは戸惑う。なんだ、この人形は?自分たちを舐めているのか?しかしそんな思いも次の瞬間消し飛んでいた。

「ぎゃあっ！」
「ぐあっ！?」
「うわあぁぁぁぁ！」

総勢二十人はいるハズの仲間たちが、次々に斬り飛ばされてゆく。小さな人形は、まるで重力を無視するかのごとく空中で回転して光るナイフを振り回す。それはまるでネズミ花火のように高速回転。彼らの誰一人として視認しきれなかった。

…残ったのは、一番後ろで指示を出していた男一人だけ。

「ケケケ。ドウスルヨ。オ前モ死ヌカ?」

「ひ、ひいぃぃっ！」

ガクガクと腰が抜ける忍者。それをつまらなさそうに見るチャチャゼロ。明日菜の方を振り向いて言う。

「見タダロ。コンナヤツラ敵ジャネー。」

「す…凄いんだね、チャチャゼロさん。」

明日菜が言うと、チャチャゼロはニヤリと笑って意外な事を口にした。

「コノ武器ハ魔力ヲエネルギー二シテルンダガナ。実ハ俺、今ノ戦イジャ微塵モ自分ノ魔力ヲ使ッテネーノヨ。」

「え…？」

「ダカラナ、明日菜。俺ハ今、オ前ノ魔力ヲ使ッタンダ。魔法使イ、神楽坂明日菜ノ魔力ヲ、ナ。」

【天ヶ崎千草】

もう嫌や…何でウチがこんな奴らにこき使われなアカンのや…。それも、無関係の一般人まで巻き込んで…

「早くしろ！また殴り飛ばされたいか！」

くっ…入院してるウチを拉致ってまでさせる仕事かいな、こんな事！でも、従うしかない。逆らったらフェイトはんに石にされてまう。月詠のように…

最初は、ただ単に復讐が目的やった。リョウメンスクナを復活させて本部の人間を慌てさせ…西洋寄りの人間を失脚させればそれで良かった。どこからやろうな、計画が狂ったんわ。ああ…勝敏様に計画を知られた頃やな。そこから、計画は狂い出した。いつの間にかフェイトはんまで勝敏様の手下になって…。知らん人間が周りに溢れ出してから、やっと気づいた。これは、戦争や。ウチの計画は、奴らに乗っ取られたんやね。ウチは表向きの首謀者。失敗したら切り捨てられる。

新幹線の中で捕まった時は…もう計画からハズされると思ってたんやけど甘かったわ。当たり前やな、ウチに罪を被せなアカンのに手放すハズない。まさか、入院中の病院襲撃するとは思わんかったけどな。

もう、ウチは何処へ行くんやろうな。分からんわ。でも行きつく先は見えとる。きっと地獄や。間違いない。

…ごめんな、嬢ちゃん。こんな事に巻き込んでしもて…。いくらでも、恨んでくれて構わんからな。

チャチャゼロが腰砕けになった男に歩み寄ろうとした時。数本のクナイがチャチャゼロに向けて放たれる。

キィンッ！キィンッ！

それを難なくアーティカル・ブレイドではじくチャチャゼロ。飛んで来た方向に目をやると、そこには呪術師の男。その横にメガネをかけた女と…薬で眠らされた麻帆良の生徒の姿。…朝倉和美だった。

明日菜はそれを見て目を見開く。まさか、全く無関係な彼女を巻き込むのか！？信じられなかった。ここまでなりふり構わないなんて…。

「動くなよ。この娘の命が惜しかったら、な。」

男が、朝倉の首筋に刃物を当てる。明日菜の目が怒りに燃える。…が、どうする事も出来ない。チャチャゼロも、迷う。もし人質無視して暴れたらご主人が怒るだろうな、と。さて、どうするか。

勝ち誇った男が、笑う。その時、明日菜は奇妙な気配を感じた。これ、魔力なのかな?男の背後に、目に見えない力の渦を感じた。なんだか、凄く知ってるような気配。なんだろう?

(オイオイ、コリャア…強制召喚魔法カ?マサカ仮契約シテタノカヨ?)

さすがに男も気づいて後ろを振り返る。そこには光の渦があった。

「な…なんだこれは!?」

混乱も、もっともだ。その問いに答えられる者は、ここにはいない。近い答えにはチャチャゼロが至っているが…。

シュアアァァン…

光は膨らみ、はじけた。そして、その者は現れる。結界をぶち破り、男の思惑をも破壊する、何も知らない女生徒。眩い光の粒を纏い、現れたのは…

「あら、明日菜さん!?どこにいらしたんですか、探したんですよ!」

「あ…あやか!?」

雪広あやか、その人であった。

第二十六話　白百合の騎士

その日、せっかく一緒になれたのに姿を消してしまった明日菜を心配して、雪広あやかは映画村を走り回っていた。他のメンバーには心配かけまいとして、「お昼の１２時まで自由行動にしましょう」と班をバラけさせていた。それまでの時間に、明日菜を探し出せば皆に余計な心配をさせなくて済む。

「いつも品行方正で規則正しい明日菜さんが無断で単独行動とるハズありませんわ。何かトラブルに巻き込まれたのでは…」

不安を押し殺して、あやかは駆ける。途中、映画村のスタッフや観光客に聞き込みをするものの、目撃情報は全くない。不自然なくらいに…。

（どこですの、明日菜さん！）

会いたい、と強く願った。

すると、不思議な事が起こる。身体が、光りに包まれているのだ。

（え、え、何ですの！？）

驚くあやか。周りを見ると、皆気づいてないのか自分に目を向ける者はいない。一人くらい、こちらに気づいてもいいだろうに。

周囲が、次第に光りで見えなくなって行く。怖い…と一瞬思ったが、次の瞬間、身体の周りを暖かな温もりが包んだ。仄かに香る柔らかな匂い。これは…明日菜さん？あやかは混乱しながらも、心を落ち着けようと胸に手を当てた。そして…

気付くと目の前に奇妙な格好の男と女、抱えられたクラスメートと…明日菜がいた。

「あら、明日菜さん!?どこにいらしたんですか、探したんですよ!」

「あやか!?」

驚く明日菜。いや、彼女だけでは無い。そこにいた全員が、突然の珍入者に固まっていた。そんな中、あやかだけはすぐに状況を察していた。

「あら、スタッフの方ですね。明日菜さんを探してくれていたのですか。麻帆良学園の生徒を代表してお礼を申し上げますわ。」

…間違った方向に。

「チッ、このアマァ!」

男は、馬鹿にされたと勘違いして襲いかかってきた!明日菜は声にならない声であやかに「逃げて」と言おうとする。しかしここでも予想を裏切るのはあやかである。

「ちょ、紳士的ではありませんわ!」

言いつつ、男を迎え討つ。何故だか、今日はいつもより身体が動く。男の攻撃を軽くかわし、隙だらけの身体に目掛け放たれる奥義。

「雪広あやか流合気柔術、『雪中花』!」

瞬間、男の身体が空中で縦回転する。足払いと上体への腕払いを

複合させた技だった。そして…

「同じく雪広あやか流合気柔術、『雪月花一閃掌』！」

回転した男の鳩尾目掛け、音速の掌が繰り出される。男の身体にめり込んだ瞬間、爆発する…魔力？

「ぎゃぴいぃぃぃっ！？」

奇妙な叫び声をあげながら、男は吹っ飛ばされる。そして、先ほどまで明日菜を追いかけていた忍者軍団のリーダーを巻き込んで長屋に激突する。勢いは衰えず、長屋を仕切る壁を破壊しながら建物を貫き、反対側から飛び出してなんとか止まった。男たちは…見るも無惨な状態だ。

「え…えーと…。やり過ぎました…。」

あやかは余りの威力に驚いて固まっていた。そんなあやかに、明日菜が飛びつく。

「あやかー！」

「わ、明日菜さん、どうなさったんです！？」

「馬鹿、あやか馬鹿ぁ！ぅわあぁぁん！」

「いきなり罵倒されたり泣かれたりワケ分かりませんわ！？」

言いながらも抱きしめるあやか。きっと怖い目に遭って、混乱しているのだろう。

「しかし…これはどういう状況ですの？忍者が沢山倒れてたり、スタッフが襲ってきたり…。あら、貴女は新幹線で働いていた方ですね。今日はお休みですか？」

声をかけられた天ヶ崎は、ビクッと震える。この子、なんも分かってへん！また一般人巻き込んでもうた…。どうしていいか迷ってると、いつの間にか足元に居たチャチャゼロが口を開いた。

「モウ手遅レダナ。バラスシカネーヨ。」

「あら？」

固まる。明日菜さんは泣いている。しゃべれる状態では無い。ではこの人形は…

「きゃあああぁぁぁぁぁぁ！？」

パキッ

「ナンダーーーー！？」

またも音速を超える動きで放たれたあやかの蹴りを受けて、チャチャゼロは大空を舞った。

「刹那さん、ここにも有りましたよ。」

「承知しました。離れていて下さい。」

木乃実に言われた場所…映画村の外れ、茶屋らしき建物の裏におかれた木箱に向かって刹那が刀を振るう。

ザンッ！

音を立てて、結界を発動させていた呪符が木箱もろとも切り落とされる。周囲に漂う違和感が無くなった。

「このエリアには明日菜さんは居ないようですね。後は…三カ所です。」

「いったん石田さんの所に戻って、情報を集めてもらいましょう。闇雲に走り回っても時間を無駄にするだけですから。」

木乃実と刹那は、明日菜が隔離された空間を探して映画村を探索していた。どうやら、かなりの数の結界が張られているようだ。実は、最初関西呪術師は近衛木乃香をさらう為にこの結界をはっていたのだが、木乃香が誘いに乗らなかったのでターゲットを明日菜に変えていた。その経緯と大まかな発動場所を、監禁されていた木乃実が盗み聞いていたので、こうして探索していたのだ。しかし、映画村は意外と広い。偶々出張販売に来ていた石田留美の力を借りて、映画村全域の情報を集めてもらっていた。

「さて、石田さんはどこに……あ。」

「どうしました、刹那さん。……あ。」

石田留美が、二人の一般人と話をしている。源しずな先生と、芦優太郎先生。刹那は苦虫を噛みしめたような顔をした。これでは話しかけられない！どうしたものか、と迷う刹那。すると、なんと向こうの方から声をかけてきた。

「あ、刹那さん！結界は見つかりましたか？」

わー！公衆の面前でなんて事を！？

しかし慌てているのは刹那だけでは無い。後ろの木乃実は勿論、芦優太郎も青い顔をする。源しずなは不思議そうな顔をするのみ。石田は…邪悪な笑みを浮かべていた。

「マスター、私はこれから刹那さん達のお手伝いをしたいと思うのですが、宜しいでしょうか？」

「え、あ、マスター？なんの事かね？よくわからないが、好きにしたまえ。」

「ハイ、人前では控えます。旦那様、それでは行って参ります。」

「ちょ、ちょっと待ちたまえ！何の事…」

ガシッ！肩を誰かが掴む。

芦が後ろを振り向くと、そこにはにこやかな笑顔が素敵に怖い源しずな先生。

「説明、していただきますか？」

「ヒッ…！」

勢い良く何度も頷く芦。そして念話を使って石田に抗議する。

（どういうつもりだ！？何が目的なんだ、お前は！）

（別に？ただなんとなく、マスターの慌てる顔が見たかっただけです。良かったですね、綺麗な女神様と二人っきりですよ？）

（くっ…分かった、要求を言え。そして何とか上手い言い訳を考えろ！）

（いいでしょう。では、私はマスターの家の分家の人間で、卒業後にマスターの家に嫁ぐ事になっているという事にして下さい。）

（なっ…それは…）

（そして、要求ですが…。そこにある肉まん、全部買って下さい。）

（ノオォォォォ！？）

ズリズリと引きずられて行く芦優太郎ににこやかな笑顔を向けてから、石田は刹那たちのもとへ歩いて行くのだった。

朝倉和美は目の前の光景に唖然としていた。誰も居ない映画村。自分をさらった男たちは皆倒れていて、薬を飲ませた女は観念したのか大人しくなっている。いや、自分と同じく唖然としているのかもしれない。喋る人形も呆れている。

見ている方が恥ずかしくなるような深く激しく情熱的なキスの果てに、明日菜とあやかは正式な契約を結んだ。結んでしまっていた。

「オイオイ、コレ洒落ニナンネーゾ？」

仮契約なら、解除も可能だ。しかし、正式な本契約となると話は違ってくる。結婚よりも意味としては重いのだ。解除は可能だが、それをすると今後一切出会う事が出来なくなる。その代わり主従よりも深い繋がりを持つ事が出来、互いに契約カードを手にする事が出来る。手に入る魔法道具も強力だ。心から求めあい、共に生きる覚悟があって初めて可能になるハズなのだが…。

「あやか…これで、契約出来たんだね。」

「ええ。愛してますわ、明日菜さん。」

朝倉は…頭を抱える。今日はどれだけスクープだらけなんだ。魔法、リアル忍者、喋る人形、クラスメートのレズ判明。昨日のネギとのどかなんか消し飛んでしまうじゃないか。しかし、それをバラす事なんて出来ない。

チラッと見る。目が合う人形。分かってるんだろうな、と目線で脅してくる。力無く頷く朝倉。そりゃ言う事を聞かないと殺されるから聞くが…。勿体無い、と残念がった。

呪術師撃退後、困惑するあやかと、起きたばかりで良く分かってない朝倉へチャチャゼロから説明がなされた。魔法の存在、関西と関東の確執、明日菜が狙われている事。一緒にいる天ヶ崎という女が、無理矢理参加させられた人間である事…。

初めのうち面白がっていた朝倉だったが、そこに転がっているのが死体かもしれないと思うと怖くなってきていた。一般人を巻き込まないというルールを破って殺し合いをする連中。そんな奴らに自分はさらわれたのだ。こうして生きているのも奇跡である。

そこで出たのが、仮契約の話だった。実は魔力を持つ明日菜。明日菜の魔力を分け与え身体強化すれば雪広あやかも強くなる。実際、既にキスしまくって仮契約に近い状態だった。だからこそ、あの時あやかは明日菜のもとへ来れた。あやかの強制召喚は仮契約をして初めて出来る芸当だ。よって契約が成功するのは当たり前だったのが…。

（いつの間にこんなに仲良くなったんだろう。この朝倉様としたことが、全く気づかなかったよ。悔しいなー。）

そして目の毒になるくらい濃厚なキスをして結ばれた契約が、本契約だった。これには皆が驚いた。

「あ、何か出てきた。カード？」

「あら、本当ですわ。綺麗なイラストつきですわね。」

出てきたのは契約の証であるカード。そこには美しい鎧を身にまとった女性の姿。

明日菜とあやかは、共に同じような鎧を着ていた。

「発動スル時ハ、『アデアット』解除ハ『アベアット』ダ。試シニ、ヤッテミロ。」

二人が顔を見合わせ、頷く。

「「アデアット！」」

光に包まれる二人。そして出てきたのは…真っ白な鎧を身につけた二人。絵と同じだ。明日菜は剣を。あやかは槍を持っている。

「ナンダカ見覚エアルナ。」

「んー…ああ、エヴァちゃんの持ってるゲームにあったやつじゃない？格闘ゲームの…」

「アア、アレカヨ。ナンデ、リリィナンダヨ。」

「百合…だからかなあ？」

そう、何故か、二人の着ている鎧は某格闘ゲームに出てくる百合の名のつく騎士王ソックリであった。

「シカシ、コリャア反則ダゼ。魔法無効化ノ鎧、剣、槍カヨ。魔法使イ二対スル嫌ガラセダナ、完全二。」

そう呟いてから、チャチャゼロは朝倉の方を向いた。

「悪ィナ。本契約シチマウト他ノ奴トハ契約デキネエンダヨ。オ前ハ隠レテルカ強イ奴二守ッテモラエ。」

「え、うん。さすがにファーストキスは男にあげたいからね。」
言いながら少し虚しくなったが、朝倉は首を振った。私はちゃんと男を見つける！レズには走らないぞ！
見つめ合う二人を睨むようにして、朝倉は心に誓うのだった。

時を同じくして、こちらは刹那たち。結界を破壊して回っていた。
「石田さん、芦先生とはどういう関係なんですか？あの方も能力者なんですか？」
刹那が聞く。自分や木乃香にとって危険な人物かどうか確認したかった事に加えて、純粋に興味があった。石田からして得体の知れない人物だが、芦は更に輪をかけて謎多き人物だ。
「私は芦先生の遠い親戚です。将来的に嫁ぐ事になってますから、婚約者というのが一番適当かと。」
「こっ…！？」
刹那だけでなく、木乃実も驚く。なんというシチュエーション。少女漫画でも古臭すぎる。
「でも、学校でバレたら危険じゃないですか。色々面倒くさそうですし。秘密にしておいて下さいね？」

「は、はい。分かりました。」

なるほど、先ほどの奇妙なやり取りはそういう意味があったのか。だとしたら芦先生は…尻に敷かれるんだろうな、と刹那は少し笑った。芦優太郎という人物が能力者かどうかは、どうでもよくなっていた。

「…ここが、最後です。」

石田が、見上げる。そこには、城を模した建物。そして、三人が到着すると共に屋根の上に現れた一人の少年。

「待ちくたびれとったわ、ねーちゃん達。」

黒髪をなびかせ現れたその少年は、まるで品定めするかのように刹那たちを見る。そして、つまらなさそうに言った。

「なんや、西洋魔法使いと違うんかい。ただの、裏切り者やないか。」

ぶちっ

「あ、あのちょっと、刹那さん?」

石田が焦る。木乃実も、キレかかっていた。

「よく言った、狗畜生が。自分のやっている事が長に対する裏切りだとも知らずに…。」

刹那の目が細く鋭くなって行く。ハッキリ言って、こちらの方が

見た目悪っぽい。石田はそう感じていた。

「はんっ、西洋魔法使いの回しモンやないか。奴らが西に何して来たか忘れたんか？さすが烏頭は忘れんの早いな！」

「ははは、言うこと聞くしか能が無い狗畜生が言えた言葉か！尻尾を降ってヨダレを垂れ流して、今までさぞ媚びを売って生きて来たのだろうな！はたから見たら気のふれた阿呆にしか見えなかったろう。気をつけないと保健所が迎えに来るぞ？」

「なんやとー！」

…これは、子供のケンカだろうか。そう石田が呆れて隣を見ると…ん？木乃実はどこだ？

「どうした、何故降りて来ない？馬鹿と煙は高い所が好きらしいが、そんな事を体現せずとも貴様が馬鹿なのは分かっている。早く降りてきて戦ったらどうだ？ああ、降りて来れないのか。すまなかった、謝ろう。わんわん。通じたか？」

ぶちっ

「もうキレたわクソがあぁぁ！」

激高した少年が、屋根から飛び降りる。すると、建物の反対側から木乃実が屋根の上に飛びのった。

「石田さん、このシャチホコですか！？」

「そうです、破壊して下さい！」

「な、しまっ…！」

飛び降りてすぐ自分のミスに気づいた少年。しかし気を散らせたのは致命的だった。すぐ目の前には、抜刀した刹那の姿。

「半端な実力で粋がるな、餓鬼が！」

ガスッ！

峰打ちで、難なく仕留める刹那。屋根の上でも、木乃実がシャチホコを破壊していた。

「ガッ…なんや、この強さ……。」

薄れゆく意識の中、刹那の重すぎる一撃に困惑する少年。仰向けに倒れ見上げた空…張られた結界が解けてゆくのを見ながら、少年は目蓋を閉じた。

第二十七話　その道の先にあるもの

空に亀裂が入る。それを見ながらチャチャゼロは、結界が破壊された事を皆に知らせた。そろそろ、周辺に人がチラついてくるだろう。

「オマエ、ドウスルンダ？コノママ逃ゲテモ、ドコカデ捕マッチマウダロ。」

声をかけたのは天ヶ崎だ。彼女が敵対関係にあったのは確かだが、戦意を喪失した今、命のやりとりをするつもりはチャチャゼロには無かった。

「どうしてええのか、ウチにも分からへん。どこに居っても狙われるし…」

「ジャア、イッソノ事捕マッチマエヨ。」

「「チャチャゼロさん！？」」

あやかと明日菜がハモって抗議する。

「イヤ、落チ着ケ本部ノ方ダ。自首ッテカタチデ出テイッテ保護サレリャアイイジャネエカ。」

「本部って…木乃香の実家のある所でしょ？ネギや高畑先生達が行ってるけど、あそこも危ないから近づくなって言われてるけど。」

明日菜は朝、高畑からそう告げられていた。

「今更ドコ行ッテモ同ジダゼ。ダッタラ強ェ奴ガ居テ、カタギ二迷惑カケネエ所ノ方ガイイダロ。」

その会話に敏感に反応したのは朝倉和美である。おお、ビンゴ！ネギ先生の仕事とやらに近づけた！そう思っていると…

ギロッ！

「ひっ！」

チャチャゼロが朝倉に殺気まじりに睨みつける。諦めるしかないようだ。

「あの、チャチャゼロさん。話は変わりますが、彼らは大丈夫なのでしょうか。」

そう言って会話に入ってくるのは雪広あやか。視線の先には、チャチャゼロに切り捨てられた忍者たちがいた。

「アア、死ンジャイネーヨ。全身麻痺二近イ状態ダカラ、スグ保護サレテ病院イキダナ。ココノスタッフジャネェトバレテ、警察ノ御用ッテ流レダロ。」

その言葉を聞いて、ホッとする一同。やはり、殺人は恐ろしいし抵抗があった。

「オ…連レガ来ヤガッタナ。俺ハ眠ルゼ。後ハオマエラデ上手クヤリナ。」

そう言って、明日菜のリュックの中に入って行くチャチャゼロ。明日菜は、チャチャゼロを護衛に付けてくれたエヴァンジェリンに感謝していた。確かに、護衛としては素晴らしく頼りになる。…カバンはダメにされたけど。

気づくと、辺りに人気が戻って来ていた。通りの向こうからは、宮崎のどかを始めとした3班と5班のメンバーが。時計を見ると丁度、集合時間であった。

「天ヶ崎さん。とりあえず、今は私たちについて来てください。大丈夫、きっと貴女を本部まで無事に送り届けてみせますわ。」

「あやかはん…。」

さっきまで何も知らなかった一般人とは思えない堂々とした態度に驚きながらも、天ヶ崎は頷くのだった。

関西呪術協会。陰陽道などの古代呪術を軸として形成された日本の一大勢力であり、魔法協会と敵対関係にある事でも有名な団体である。現在はトップの人間が血縁関係にあるという事で、日本での関係は表向き友好であるという事になっているが、実際の関係は知っての通りである。

その本部へと続く石階段を上りながら、木乃香は憂鬱な表情を隠せないでいた。木乃実の保護を知らせる事や木乃葉の救出は、わざわざ破門され勘当された自分が行かなくても良いのでは、という考えが頭をよぎったりもした。だが、姉妹を助けるのはやはり自分でないといけないとも思うし、何より勝敏という男が許せない。父に反対されても、戦うつもりではあった。

「木乃香さん、大丈夫ですか?」

「ん？大丈夫や。ネギ君心配症やなあ。そんなんやったら、将来ハゲるえ？」

「え、え、あわわわわっ！？」

慌てて頭を押さえるネギ。少し笑って、木乃香は心が軽くなるのを感じた。隣では高畑が苦笑いをしている。今ここにいるのは、この三人だけ。ムードメーカーはネギであり、彼のおかげで暗い気持ちに浸り続けなくて済んでいた。

しかし、そんな和やかな雰囲気も、すぐに終わりを告げる。

ザッ…

「そこまでや、木乃香はん。」

来た…。

木乃香は、頭を切り替えて階段の上に視線を移す。そこには、かつて自分を破門した神鳴流師範代の姿があった。

「貴女は？…木乃香さんのお知り合いですか？」

突然の登場に驚くネギ。高畑はそんなネギの前に出て、その女性に話しかける。

「鶴子さん、今は通してくれませんか。」

「そこの子供とアンさんは構わへんのやけどな。…この子はアカン。破門された上に勘当された人間やからな。」

鶴子と呼ばれた女性は冷たい目で木乃香を睨む。

「まあ、どうしても通りたいんやったらウチを倒して行ったらええ

わ。」

「そんな！木乃香さんが何をしたと言うんです！」

事情を知らないネギは憤って鶴子に抗議する。そんなネギの姿に、後ろめたさを感じる木乃香。確かに、勘当されて当然の事を自分はしている。鶴子の言う通りなのだ。

「ネギ君、先に行っといて。ウチ、少し遅れて行くから。高畑先生、後よろしくな？」

「木乃香君…。」

「ほぅ。」

木乃香の発言に目を細める鶴子。口元に邪悪な笑みを浮かべる。

「ネギ君、行こう。」

「タカミチ！？そんな、木乃香さんを置いて行くなんて…」

「これは近衛家と神鳴流の問題だよ。僕らの今優先すべきは任務だ。」

そう言って、高畑は強引にネギの手を引いて階段を上って行く。いつもと違う険しい表情に、ネギは少し恐怖を感じながら仕方なくついて行く。

階段を上り鶴子の横を通りすぎる際、高畑は鶴子を一瞥してから言った。

「あなたが今成すべき事がこんな事であるなら、神鳴流も地に落ちた物だ。」

「どうとでも言いなはれ。よそモンには分からん事や。」

深い失望を感じながら、高畑は階段を上る。世界中で活動する高畑には、彼女たち西の人間の排他的な考えが疎ましく思えてならなかった。こんな所に引きこもっているから、視野狭錯に陥るのではないか、と。そして、鶴子に木乃香は倒せないとも思っていた。思考停止気味に拒絶するしかない人間より、批判覚悟で乗り込んで来る人間の方が手強い。高畑は経験上それを良く知っていた。

心配そうなネギに、「木乃香君を信じよう。」と声をかけてなだめる。少なくとも僕は信じている。木乃香君は、誰よりも心が強いのだから、と。

「ウチを倒すつもりか？あんましおもろない冗談言いますなあ。東京行ってセンス落ちたんちゃいますか？」

「東京と埼玉の違いも分からん耄碌婆さんに余りキツい事したくないんやけど、これも効きの良いお灸やと思って大人しく据えられといてな。」

木乃香はそう言うと、両手に気を集中させる。鶴子も腰の刀に手をかけた。

「言ってくれますなぁ、木乃香お嬢様。篭の鳥も舐めた事言ってると舌を切られますえ？」

「せやな。意地悪婆さんにはさっさと退場してもらいたい所や。おあつらえ向きにここ山やし、乳母捨て山に丁度ええかもしらん。まぁ、もっとも…」

スッと、手刀を構える。

「野生化してヤマンバになりそうやけどな。」

「ええ加減にし！」

キィンッ！

木乃香と鶴子の間に火花が飛び散る。

鶴子は階段の上、木乃香は下。鶴子の方が圧倒的に有利である。

しかし木乃香はそんなハンデをものともせず、鶴子の居合い抜きを簡単にはじいてみせる。

「こんな剣を真似るから、木乃実達も負けるんやろな。」

「な、神鳴流を馬鹿にするつもりおすか！」

「まさか。ウチが馬鹿にしとるんはアンタや。」

キィンッ　キィンッ！

見えないくらいの速さで攻撃を繰り出す木乃香に、鶴子は焦る。

ただ速いだけではない。こちらの死角をついてくるような動き、そして途中で異様な軌道を描く手刀。腕の関節を外してるのでは、と勘違いしてしまう攻撃だった。

「フンッ、でも腕以外の動きは素人同然や。鍛錬不足やな、木乃香はん！」

ザシュッ！

鶴子の刀が、正確に木乃香の足を切り裂く。もう、これで動けまい。なんと他愛もない…と思った瞬間、その木乃香の足によって鶴子の顔面が蹴り飛ばされる。

ガスッ！

「ぐあっ…！？」

階段脇の草村に倒れ込む鶴子。おかしい、確実に斬ったハズだ。手応えだってあったハズなのに！

「あんな、ウチ、刀じゃ傷つかんねん。もしついたとしても、自分で回復できるし。」

コイツは化け物か、と鶴子は驚愕した。…が、すぐに頭を切り替える。コイツはもはや人ではない。なら、何を遠慮する必要がある？

「ほんなら、真面目にやりましょか。『斬岩剣』！」

ズガァァンッ！

木乃香のいた石階段が破壊される。さすが師範代だけあって、その威力は刹那のものと比べて大きかった。だが…

「遅い上に迫力だけのスッカラカンや。」

「偉そうに！」
カチンと来た鶴子が、木乃香の身体目掛け無数の剣撃を繰り出す。妖魔を相手にする時の、気を漲らせた攻撃。木乃香を殺すつもりなのだろう。
木乃香は、その攻撃に向かって走り出す！剣撃を紙一重でかわし続け、一瞬の隙を突いて鶴子の懐に飛び込んだ。
「なっ…」
ドカッ！
真上に吹っ飛ぶ鶴子。これはアッパーカットだった。手にまとった気によって凄まじい硬度を得た拳によるアッパー。女性にする攻撃ではないし、女性がする攻撃でもない。
「カハッ…。」
地面に倒れ、血を吐く鶴子。
「よりにもよって、浦島流を…」
「何言うてるん？…なんや、まだやるんか。」
立ち上がり刀を構える鶴子。
「当たり前や。神鳴流師範代として…断じてこの先の土は踏ませません。」
「……。」
木乃香は、悲しくなる。

確かに姉妹を傷つけたのは自分だ。しかし、あれは自分の身を守る為にやった事である。それなのに…。

しかし、それは既に過去の事だ。今では姉妹と仲直りしている。木乃香は被害者意識に捕らわれそうになる気持ちをグッと抑えつける。今は目の前の敵だ。

「なら、ウチも本気出させて貰うわ。こっからは、文字通り真剣勝負やえ。」

木乃香の手に、一振りの刀が現れる。気の物質化。かつて、子供の頃に木乃実たちを斬ってしまった忌まわしき技。まるで夜露を帯びたかのように光り冷気を放つ刀。それを、木乃香は正眼に構えた。

「近衛木乃香、参ります。」

「青山鶴子、受けて立つ！」

ギィィィィンッ！

並みの刀なら折れているであろう威力の剣撃が空中でぶつかり合う。正攻法で戦うならば、やはり鶴子は強い。体捌きの基本からして木乃香の遥か上を行っている。しかし、それなのに、木乃香は互角以上に戦えている。それは、アシュタロスの与えた才能によるものかもしれない。しかし、才能はあくまで才能。それを伸ばすのは努力だ。

木乃香は麻帆良に追いやられた後、ただ一人で剣の練習に打ち込んでいた。刹那という友達がいたが、一緒にいるとまた自分のせい

で迷惑をかけてしまうかもしれない。だから、いつも一人でいた。
一人、誰も居ない森の中で剣を振るった。剣を手に、昔、刹那に教わった事を思い出しながら練習する。その時だけは、刹那の事を近くに感じる事が出来た。それ以上は…望んではいけない事だと自分に言い聞かせていた。

剣の道を行くならば。

きっと、この先どこかで道が交わる事もあるだろう。

陽向を行こうと、日陰を行こうと。その先にあるものは同じだと信じたかった。

ギィィンッ！　ギィィンッ！

「ぐっ…！なんでこないに…」

「ウチには、これしか無かった！」

激しさを増す剣戟、飛び散る火花。鶴子はそんな中、木乃香の目に光るものを見た。

キィンッ　キィンッ　キィィンッ！

「何で、こないに強くなろうと思った！」

「せっちゃんの為や！せっちゃんと一緒にいたいからや！それ以外理由なんてないっ！」

木乃香が叫ぶ。その激情に反応したのか手にした刀が目映い光を放った。

「つぁあぁぁぁぁぁっ！」
「うわあぁぁぁぁぁっ！」

そして、二人の刀が激突する。

キィィィィンッ！！

双方、渾身の一撃。空気さえ震わせてぶつかり合った剣撃は、周囲に金属とは思えない音を響かせた。

止まる、時間。

訪れる静寂。

……パキィンッ

そこに響いたのは、鶴子の手にしていた刀の折れる音だった。

第二十八話　神楽殿での謁見

そこは、薄暗い部屋。外の光りは全く入って来ず、蝋燭の灯りだけが部屋を照らしていた。

（今、何時やろか…。木乃実、生きとるんかなあ…。）

足枷をされ、身体を束縛の魔法で固められ身動き取れない状態でベッドに寝かせられている。近衛木乃葉は天井を眺めた。こんなハズじゃなかった。こんな転生を望んでいたわけじゃなかった。もっと、面白おかしく好き勝手な人生を送れると思っていたのに…。

涙が一滴、頬を伝う。

神は一体何をしてるんだ。何故、姿を見せない？何故…こんな転生者だらけの世界に自分を転生させたんだ…。今更ながらに憤る。

そんな思いで横になっていると、部屋の扉が乱暴に開け放たれる。そこにいたのは、マリと名乗る小柄な女性だった。

「なんだ、まだ睨む元気あるんだ。さっさと勝敏様に従うと約束すれば楽になれるのに。」

「なんであんなガマガエルみたいなオッサンに…。」

そういうと、マリは楽しそうに笑った。

「アハハハハ、似てるよ確かに。私だって外見で選ぶならパスしてるさ。」

そこで、ニタァ…と笑って木乃葉を見つめる。
「私はアンタみたいなのが好みだよ。生け贄に使った後はさ、マスターに頼んでアンタも人形にしてもらうんだ。そして、一生私のペットにする。」

その言葉に、悪寒を感じ後ずさる。コイツは、良く見たら人間じゃない。人形だ。人形なのに、そこらの変態なんか目じゃないくらい気味の悪い表情で自分を見つめていた。

「こらこら、そんなに怖がらせるもんじゃないぞ。」

固まる木乃葉は、不意に聞こえて来た声にもビクッと反応して振り向く。いつの間に入ってきたのか、自分をさらったガマガエルがすぐそばに立っていた。

「な…なんの用や。」

「ん？お前が呼んだのではないか。」

「はあ？」

戸惑う木乃葉に対して、勝敏はニヤニヤと笑みを浮かべた。隣のマリは、「勝敏様のイケズゥ～」と媚びた声を出して勝敏にすり寄っている。

『忘れたか、この声を。』

「！！」

この声を忘れるハズがない。

『お前が仲間になるなら、また力を授けても構わんのだぞ？』

「あ…ぁあ…、そんな…。」

その声は、自分がこの世界に渡る時に力を授けてくれた、あの神のものだった。

近衛木乃香が手を差し伸べると、青山鶴子は苦々しい顔をしながらその手を取った。

「ムチャクチャや。一人でそこまで強うなるなんて、道場やってるモンからしたら迷惑極まりない存在や。」

「ははは、済まんなぁ。これでも何度か殺されかけたから、必死やってん。」

ニコニコ笑う木乃香を見て、鶴子は適わない、と苦笑いを返す。完全に負けた。何より、意志の強さが半端ではない。

「なあ木乃香はん。木乃香はんの目は、何でそないに穏やかなんやろか。」

「え…？せっちゃんには、目が笑ってない言うて怖がられとるけど…。」

キョトンとする木乃香に鶴子は思わず吹き出す。

「プハハハハッ、そうやない、人斬りの目やないから不思議やったんよ。」

ひとしきり笑った後、鶴子は続ける。

「昔…木乃香はんがあの二人を斬った時な。木乃香はん、カタギの目ぇしとらんかったんよ。もう、何年も人斬りしとったみたいな、自然な目ぇしとった。破門したのはな、それが他の門下生に悪影響出すかもしれんかったからや。」

「目…あの時、そんな目してたんや。ウチ、何が起きたか分からんかっただけやのに…」

「せやろな。木乃香はん、詠春と同じでな、条件反射で動けるだけなんや。今の戦いで、それがよう分かった。やっぱり、そこは親子なんやろうな。」

「お父様が…」

思わぬ所で父の名を聞いて驚く木乃香。自分が父に?

「木乃香はん、麻帆良に行ってから、呪術師相手に大立ち回りしとったやろ。人づたいに、殺人狂になっとると聞いて、ウチが引導わたさなアカンかと思ってたけど…どうも違うみたいやな?」

「……殺したんは、確かや。ウチの手は、汚れとる。それは、変えようのない事実や。けど、こんなん、したくなかったよ…。ウチ、せっちゃんと一緒におれたらそれで幸せやったのに……皆、ウチらの事放っておいてくれん。」

思わず涙ぐむ木乃香。鶴子はそんな木乃香を抱きしめた。結局、木乃香は殺人狂などではなかった。そんなレッテルを貼りつけたのは大人たちであり、そのキッカケを作ったのは自分ではなかったか。

「堪忍な、木乃香はん。これから、ウチも長の所に行って勘当の件何とかしてもらうように頼みに行くわ。破門なんて、もう無しや。」

鶴子が言うと、木乃香はゆっくり首を振った。

「ええんよ。今ウチが行ったら、ややこしい事になるもん。内輪でゴタゴタしとる中、お父様に迷惑かけるワケにもいかんし。だからな、鶴子さんはこれから、長の所に行って伝えて欲しい。」

「ええよ、何て伝えるんや?」

木乃香はゆっくりと鶴子から離れると、先ほどの刀を手にした

「これから、木乃実が参ります…って。」

「こ…木乃香はん…?」

そして、木乃香はおもむろに刀を後頭部に当てた。片手でまとめた髪の毛を…

ザッ

音を立てて、切り落とす。

「…っ!?」

「初めから、こうするつもりやった。これから行くんは、木乃実。お父様には、迷惑かけへんよ。」

「こ…木乃香はん！！」

涙ぐむ。何故ここまで出来るのだ、この子は！命に等しい御髪を捨ててまで、なんで…

「ほな、よろしゅうな。ウチの事、許してくれてありがとう。」

そう言うと、木乃香は階段を上って行く。鶴子も、小走りに本部へと向かった。木乃実が参ります…本当にこれでいいのか、と迷ったが木乃香の思いを無駄にしてはいけない。鶴子はかつての自分の愚かさを悔やみながら、足早に駆けて行くのだった。

関西呪術協会の本部についたネギは、まずその佇まいに驚かされていた。昨日まで観光してきた神社や仏閣に引けをとらないくらいの立派な建物だったのだ。

「この奥の建物が、長のいる神楽殿だよ。」

「は、はい！」

キョロキョロと辺りを見回しながら、ネギは高畑の後をついて行く。神楽殿と呼ばれた建物の受付に行くと、高畑が挨拶をかわす。

受付の女性はすぐに内線で連絡を取った。そして、待つ事数分。まるで巫女のような格好をした女性がやってきて二人を案内した。

「こちらになります。」

案内されるがままにやってきた所は、広々とした板間の部屋。数人の巫女装束に身を包んだ人間が、弓や薙刀を持って佇んでいた。少し、物々しい。

「ね、ねえタカミチ。僕たち、どうなるの？」

「ははは。大丈夫だよ、そんなに怯えなくて。」

笑う高畑。ゴタゴタ続きで歓迎の準備もままならないような状況なのだ。これだけの人数で出迎えてくれるだけでも大した歓迎だと、高畑は思っていた。

そんな会話をしていると、部屋の奥の階段を降りてくる人物が。にこやかな表情をするその人物こそ、関西呪術協会の長にして近衛木乃香の父、近衛詠春であった。

「遅れてすみません。ようこそ、ネギ・スプリングフィールド君。関西呪術協会会長の近衛詠春です。高畑君、久しぶりだね。」

「は、はい！ネギ・スプリングフィールドです！よろしくお願いします！」

「お久しぶりです、詠春さん。」

細面の穏やかな顔つきとは裏腹に、その迫力あるオーラは別格だった。思わず緊張に身を固めるネギ。全く気圧された様子の無い高

畑が信じられなかった。

「早速ですが、詠春さん。麻帆良学園長、近衛近右衛門より親書をお預かりしています。」

高畑は、親書を詠春に手渡した。それを受け取り、すぐに中身を確認する詠春。その表情は…険しい。

「…なる程。確かに、親書を受け取りました。ネギ君、高畑君、ご苦労でした。」

礼をする高畑。ネギもそれに習う。

「ところで…高畑君はこの親書の内容は知ってますか？」

「いえ。ただ、見当はついてます。」

「そうですか…。」

複雑な顔で思案する詠春。ネギはどうしていいか分からず、困惑する。木乃香の事を聞ける雰囲気ではない。

「分かりました。ネギ君、高畑君。今日はこちらに泊まっていけますか？相談したい事があります。」

しばらく考えこんでから、詠春はネギたちにそう提案した。高畑はすぐさま頷く。ネギは突然の外泊要請に戸惑う。

「大丈夫だよネギ君。学園長の許可はすぐにおりるから。」

「わ、分かりました。それでしたら今から姉に連絡をとってもいいですか？僕の代わりにクラスの皆を見て貰わないといけないですか

ら。」

ネギの言葉に、詠春はにこやかに頷く。ネギはホッとした表情を浮かべて、「失礼します」と携帯電話片手に部屋の外へと出て行った。

「高畑君、君も一応引率の先生なんだから、生徒の事を忘れてはいけないよ。」

「す、すみません…。」

恐縮する高畑。確かに、自分は教師という立場を忘れがちだ。ネギ君に気づかされるとは、まだまだ自分は未熟だな、と反省していた。

神楽殿を出て、ネギは携帯電話を取り出す。アドレス帳から姉の欄を出して、音声発信のボタンを押した。

プルル…とコールが始まる。その時、ネギの視界に近衛木乃香らしき人物の姿が入ってきた。

(あ、木乃香さん!……あれ、違う。もしかして姉妹の人かな、凄く似てるや…)

『ハイ、アリアです。ネギ?どうしたの?』

「え、あっ…お姉ちゃん。実は今日の夜なんだけど…」

姉の声に我に返るネギ。もう一度視線を向けると、既にそこには誰もいなかった。

第二十九話　夢みるアリア

修学旅行三日目の自由活動も終わり、生徒は皆疲れながらも充実した表情で旅館に戻って来ていた。やはり神社や寺よりＵＳＪの方が盛り上がるのだろう、大阪方面に出ていた生徒が多かったようだ。

「それがさ、シュワちゃんそっくりなのが出てきたんだよ！本物かと思ったね！」

「飛行機がザッパーン、てなってね、水がドーンって！」

「擬音じゃわからないから。聞いただけなら事故現場じゃん。」

土産話に花が咲く。

そんな賑やかな生徒たちの中で、近衛木乃実だけはすぐに部屋へ戻って式神作りに没頭していた。

作るのは、先ほど出て行った刹那の分身。等身大の、精巧な式神である。

現在、刹那は天ヶ崎千草を本部まで護衛している。雪広あやかや神楽坂明日菜は同行したがっていたが、戦闘経験の不足を理由に刹那が断った。どんなに力をつけようと、経験不足の人間と一緒に居ては護衛の邪魔にしかならないからだ。

刹那は旅館を出る際、木乃実に自分の分身を作るように頼んでいた。刹那はまだ、等身大の精巧な分身を作る事が出来ない。これに関しては魔力や気よりも知識に左右される部分が大きいのだ。木乃

実は読書家で呪術に詳しい上に、気に関してはそれなりに扱えるので分身をつくるだけなら容易かった。

用意していた人形（ひとがた）に文言を乗せ、念を込める。みるみるうちに、刹那の姿へとその形を変化させた。

「…うまくいったかな？」

近づいて、顔を覗き込む。ゆっくりと目蓋を開く偽刹那。木乃実の顔をぼんやりと見ると、次第に目の焦点が合って来て…。

「このちゃんやー！」

！？

パッと顔を輝かせる。そして、元気良く飛びついてきた！

「な、な、何を！？」

「わぁん、このちゃんや！撫で撫でしてぇ！」

「何を言ってるのです、私が木乃実だって知ってるでしょう！ええい、離しなさい！や、ダメ、すりすりしないでぇ！？」

「だって寂しかってんもん、だから撫で撫でしてぇ！ふにふにして、はむはむしてぇ！」

「後半部分が余りに不穏な響きを放ちましたが詳細は聞きません！御希望には添えられませんから離…ふにゃあ！？」

その時、襖が動いた。

時が止まる。

入って来たのは、神楽坂明日菜だった。

「あ…あ…、アンタたちはぁああ！」

額に青筋を立ててプルプルと震える明日菜。その姿に木乃実と偽刹那も震えあがる。

「ちょっと、明日菜さん！？事情、知ってるハズですよね！なんで怒ってるんですか！？」

「部屋に戻ってきたら真っ最中なんだもん、怒るに決まってるでしょ！学園戻るまで我慢するんじゃなかったの！？こっちだって我慢してるのにいぃいぃいぃ！！」

酷い八つ当たりだった。ちなみに学園に戻る云々にしたって、本物の刹那が言った事である。木乃実は何も悪くない。

結局その後、木乃実と偽刹那は正座をさせられ一時間近く説教を受ける事になった。

（な、なんでこんな目に…）

木乃実の目から、光る物が流れ落ちた。

その同時刻、こちらは旅館のロビーで超、石田、そして芦優太郎が念話で情報交換をしていた。勿論、芦は隅の席で一人で新聞を広げている。超と石田から距離を取って、表向き無関係を貫いていた。

（で、その力を消すというのはどういう事ネ？私たちと同じ存在カ？）

話題は、やはり能力を消されたという木乃実の言葉である。木乃実救出の際に聞いたこの話は、超にとって衝撃的だった。

（うむ。どうやら、この世界に転生者を送りこんでいた神が直接介入してきたらしいな。その、近衛姉が生け贄にされるという話から、大体狙いが読めて来た。）

（……リョウメンスクナのエネルギーですか。）

超鈴音には、なんの事やら分からない。リョウメンスクナ？神様っぽい名前だが…そんな超鈴音の様子を見て、芦は最初から説明する事に決めた。

転生者に与えられる、特殊能力。これは、何も無尽蔵に与えられるものではない。それぞれの能力は神の力を分け与えた結果であり、能力を授ければ授けるほど神は弱体化する。力の単位はマイトといい、例えば十二の試練を授けるには２０００マイトが必要、という具合に。

今回京都に現れた神は、アリアの偽物等を従えていたが大した能力を授けていなかった。それどころか、木乃実から能力を消し…恐

らく力を奪ったのだろう。加えて京都に封印されている神、リョウメンスクナを復活させようとしているという事は…

（力が無くなってきていテ…補給しようとしていル？）

（簡単に考えれば、な。自分の姿を晒すリスクを考えれば、まずやらない方法だが…自分が狙われていると知らないのか、ただの馬鹿なのかは分からん。よほど、自信があるのかも知れんな。）

（マスター、油断は出来ません。すでに彼らは一般人を巻き込んでいます。この旅館にも襲撃をかけてくる可能性は高いでしょう。）

この旅館には、偽アリアと接触したアリアとエヴァ、茶々丸がいる。さらに、今日巻き込まれた雪広あやか。ターゲットにされた明日菜もいるのだ。連中に関わってしまった事から、この修学旅行中に狙われる危険性は高まった。

（…超鈴音、悪いが戦闘を覚悟しておいて欲しい。事情を知っている仲間と共に、襲撃にそなえてくれ。私はリョウメンスクナの封印を当たってみよう。イシュタル、一般人の保護に関しては手段を選ばなくていい。好きにやれ。）

その言葉に、石田がニヤリと笑う。その表情は邪悪な女神。超は思わず退いてしまう。忘れがちだが、彼女も芦優太郎も元魔族。この世界から離れたら、また魔族に戻る存在なのだ。

（…ところでマスター。話は変わりますが。）

（ん？なんだね？）

もう話は終わったのではないか、と眉をひそめる。こういう時の石田には要注意だ。

（涙の跡、拭いたほうがいいですよ。）

！！

慌てて目元を手で触る芦。手鏡を取り出し、素早くチェックする。……跡なんて無いのだが。……あっ！

（ふふふ、引っかかりましたね？マスターが泣きそうな顔して帰って来たのを少し前に目撃したのですが、一体しずな先生と何があったんですか？婚約者としては気になる所です。）

（婚約者！？ちょっと留美、どういう事ネ！？）

慌てて念話を切る芦。またもや泣きそうな顔で逃げるように走り去って行った。

（女なんて、女なんてっ！！）

そんな心の叫びを、石田だけはとらえていた。そして、また邪悪な笑みを浮かべるのだった。

それから暫くたった頃、旅館の一室ではアリアが不安な面持ちで新田先生ら引率の教員たちに報告をしていた。ネギと高畑が、学園長の指示で近衛邸に泊まる事になったという事である。

「まったく、こういう事は事前に報告してもらわないと困りますな！…いや、アリア先生の事を言ってるわけじゃ無いんです。学園長の事で…なあ、芦君。」　ビクッとして涙ぐんだアリアに躊躇して、新田先生が芦に声をかける。芦は、優しい声でフォローを入れた。

「アリア先生、悪いのは学園長ですから。僕ら教員が団体行動を乱してたら生徒に示しがつかないでしょう?そうならないように学園長はネギ先生たちへの指示を他の教員にも伝えるべきだったんです。それだけの話ですよ。」

「はい…そうですね。でもネギからそれっぽい話を聞かされてたのに、もう皆さん承知の事だと勝手に判断して報告を怠ったのは、私の落ち度ですから。すみませんでした。」

　困った表情をする教員たち。１０歳の子供の発言や態度ではない。しっかりしすぎだ。

「わ、分かりました。ではアリア先生、次からはちゃんと報告してください。」

　こう言わないと引き下がらないだろうな、と感じた新田先生が優しく言う。アリアはハイ、と言って頭を下げた。

　その光景を見ていた芦は、今日起こるであろう襲撃を思って憂鬱になった。身体の弱っているアリアに、また戦闘を経験させたくは無い。しかしこの性格だ、異変を察知したら皆を守る為に戦おうとするだろう。どうにかならないものか…。

　芦は、現在付与出来る能力で、アリアの身体に悪影響を与えない物は無いか探す。すると、自分にとって最悪な思い出しかない嫌な能力を見つけてしまった。

（これは…いやしかし、魔力を使わずに生き抜くには有効か。くっ……二度と見たくはなかったがな。）

そして、しばらく煩悶した後に、アリアに力を分け与えた。その力とは、文珠。かつて自分を唯一出し抜いた奇人変人の必殺技。凝縮した霊気に漢字を入れて、その力の方向性を自在に変化させる最凶最悪の技である。芦は、アリアがこの技を悪用しないと信じて力と知識を授けた。ちょっとした解説を添えて…

【アリア・スプリングフィールド】

先生達に報告を済ませてから、私は自分の部屋に戻ります。なんだか凄く眠くて、今にも倒れそうなので。なんでこんなに眠いんだろ…身体の劣化が進んでいるから？

一応、同室の源しずな先生には体調不良で寝ると伝えました。夕飯の時に生徒を見ないといけないので心苦しいですけど…。源先生はにこやかに笑って「ちゃんと私が見ておきますよ」と言ってくれました。優しいです。素敵です。そういえば今日はなんだかツヤツヤしてますね。気のせいかもしれませんが。

だいぶ疲れてたのでしょうか、布団に入った瞬間に意識がなくなりました。本当に、カクン、という感じに。そして、夢を見たのですが…何なんでしょうね。悪夢、かもしれません。

私は、バラエティ番組の撮影でも始まるのかと勘違いしてしまうようなスタジオの観客席に、一人座っていました。辺りを見回しても、誰もいません。少し不安になっていると…

チャラララララ～♪

!?

いきなり流れ出す音楽！何ですかこれ!?私、なんて夢見てるのよ！

アーシュタロス、アシュタロス

夢のアシュタロス高田～♪

ヤバい！これは危険です、いろんな意味で！ていうか高田って！いや、好きで見てましたしデジカメ買いましたし、こっちの世界に無いから寂しかったけども！夢にまで見なくたって！

しかし次の瞬間、更なる衝撃が私を襲いました。出てきた司会が…芦優太郎先生ではありませんか！芦先生…ごめんなさい、私の無意識では芦先生ってこんなイメージみたいです！

「さて皆さん今日は非常に珍しい物を御用意致しましたよ。これなんですよ、見えますか?そう、文珠なんですよコレは特にイチ押しの商品ですからね、皆さんにジックリこの商品の素晴らしさ、お伝えして行きたいと思いますよ。」

皆さんて私一人ですしモンジュとか知らないし、何より何て口調

してるんですか！何故微妙に声高いんですか！？ごめんなさい、芦先生。私のバカ！私のバカ！

「では一目で分かるように実演してみますよ。イシュタル君お願いします！」

「ハイ、社長。」

い、石田さん！？何故石田さんが…ていうか社長って！社長って！

「これは霊気…魂の力を凝縮したものです。これに漢字一文字入れればどんな事でも可能になる優れものです。では試してみましょう。」

良かった、石田さんは普通の口調です。彼女のイメージは、淑女という感じでしたから壊れたら困ります。壊れたら…あれ？あれ？刀？

「マスター、ぶったギル！」

壊れたー！！

って、うわあ！腕、腕斬ってます！ゴロンて、ゴロンて、ガマの油売りも真っ青じゃないですか！え、例えが古い？悪いわね、元主婦で！三十路越えてて！

「心配しないで下さいね、大丈夫ですよ。文珠さえあればこんな傷！」

いえ、全然大丈夫に見えないです。顔青いし。血まみれだし。

「さあイシュタル、文珠に字を込めてくださいよ。…イシュタル？イシュタル？」

「つーん。」

「イシュタルゥゥゥウ！？」

ああもう見てられません！私は客席から飛び出して、石田さんから珠を奪い取ります。えっと、字を入れるんですね？治癒だから…『治』って入れればいいんですよね。

頭の中でそう思った瞬間、珠の中に『治』の文字が入りました。これで良し！私は急いで芦先生の腕に向かって珠をかざします。すると、珠はまばゆい光を放ちました。そして…

シュウウゥゥゥ…

腕が元に戻りました。

ホッと一息ついた私に向かって、芦先生と石田さんが声を揃えて言います。

「「グッジョブ！」」

アーシュタロス、アシュタロス

え、ちょっと待って、終わるつもり！？

夢のアシュタロス高田～♪

ワケわかんないー！

起きると、辺りはすっかり暗くなっていました。なんて夢を見るんだろう…。そう自己嫌悪して、ふと手をみると…

小さな珠が、しっかりと握られていました。

第三十話　強き力を持てる者

近衛邸の一室で、木乃香は鏡を見ながら髪を整える。隣にいるのは青山鶴子。ハサミで木乃香の髪を揃えてあげていた。

「思い切った事しはる割にアバウトやな、木乃香はんは。」

「いわんといて…まさかあないバランバランになるとは思わへんかったもん…。」

適当に刀で切った髪の毛は、やはり木乃実のように綺麗にはならなかった。父と会う前に、鶴子に呼び止められて急遽揃えてもらっていた。

「これで終わり。別嬪さんの出来上がりや。」

鶴子の手によって、木乃香は可愛らしいボブカットの女の子になっていた。これなら、木乃実が美容院に行って髪を揃えてもらったように見える。

「おおきに、鶴子さん。…あの、お父様には伝えてもろたやろか。」

「…勿論や。詠春は木乃実と木乃葉がさらわれた事を知っとる。だいぶ心配しとったから、姿見たら安心するやろ。木乃香はん、本物の木乃実はもう助け出したんやろ?」

「うん。旅館で、ウチの振りしとるよ。おかしいやろ?内緒で入れ替わってるんよ。」

ニコニコと笑うが、こんな事しなくてもいいようにしてあげたい鶴子には、笑う事が出来なかった。

（木乃香はん、すまんなあ。後で怒らんといてな？）

鶴子は、木乃香の頼みを確かに守った。確かに、詠春に木乃実が来ると伝えたのだ。…木乃香の髪の毛の束を、手渡しながら。

木乃香が階段を上って行った後、鶴子は切り落とされた髪の毛を集めていた。これは、地面にバラ撒かれたままではあんまりだという気持ちの他に、何者かに悪用されないようにという呪術的な意味合いもある。鶴子は詠春に伝言を伝える際に、暗に木乃香の物である事を匂わせながら手渡していた。

…こんな事をしてまで、木乃香は姉妹を助けようとしているのだ、と。

知らせを受けた詠春は、夕食の席で木乃実に会うと鶴子に告げる。あくまで、木乃実に会う。どこで誰が見ているか分からないのだ。今もし勘当を解いて迎え入れてしまったら、また外部の人間が騒ぎ出すだろう。まだ、木乃香として迎え入れるワケにはいかなかった。…木乃香の為にも。

時計の針が六時を回るまで、木乃香は部屋でくつろいでいた。鶴子と共に、懐かしい話に花を咲かせていた。そして…

コンッコンッ…

「木乃実お嬢様、お食事の時間です。」

鶴子と目を合わせ、頷く。

「分かりました。すぐに向かいます。」
少しなまりのある標準語…木乃実独特の話し方を完全に再現して、木乃香は答えた。

夕食は、神楽殿に隣接する斎館という建物でとる事になった。異様に広い座敷、という感じの部屋で、高級そうなお膳が用意されている。ネギは初めて見る豪華な日本料理に感動し、姉にも食べさせてあげたかったと残念に思っていた。

「失礼します。」

ネギと高畑が声に反応して振り返る。部屋に入って来たのは、木乃香を足止めした女性。そして…ネギが見かけた、木乃香そっくりな女性だ。

「木乃実、よく戻りましたね。心配していました。怪我はありませんか？」
詠春がそう言うと、木乃香はにこやかに答えた。

「高畑先生たちに助けていただきました。怪我は、ありません。高畑先生、その節はありがとうございました。」
丁寧にお辞儀する木乃香に、高畑は戸惑いながら笑う。…気配から、声まで確かに木乃実だ。しかし直感で違うと判断出来る。第一、本物には刹那がついているハズだし、拉致された後に美容院で髪を切ってもらう精神的な余裕などあるわけがない。刃物等で脅された人間は、髪を切る為のハサミにさえ怯えるようになるのだ。どう考えても木乃香なのだが…。

ネギは、そもそも木乃実と会った事が無い。だから、単純に木乃香さんに似てるなぁと考えていた。しかし。

（木乃香さんと同じ匂いがする？木乃香さんの使ってる匂い袋って刹那さんのハンドメイドだったよね…）

妙な所で鋭いネギ。しかし、似た香水使ってるのかも、と結論づけて流していた。

「体調が良いなら、しっかり食べて元気を出しなさい。鶴子さん、貴女も今日は木乃実と一緒に居てくれますか。」

「了解や。」

二人は、自分たちの席につく。上座の詠春。高畑、ネギは木乃実、鶴子と対面する形で席が用意されていた。

詠春が食前の詩を詠んでから、食事が始まった。伊勢海老や鯛の造りを前に戸惑うネギに、高畑が食べ方を教える。それを微笑ましそうに見守る詠春。しかしその目の端で、不憫な想いをさせた娘の姿を見ていた。

大きくなった。

時折、義父から写真を送ってもらっていたが、実際に見るとつくづくそう思う。

…そして、強くなった。いや、なってしまった。

未熟な技術で、ただ直感と反射神経だけで神鳴流師範代さえ手玉にとる実力を持つ天才。まるで詠春の生き写しのようだと鶴子は言っていた。

そこに至るまでの苦労は、並大抵のものでは無かっただろう。剣は、才能があるだけでは上達しない。それを一番分かっているのが、大戦の英雄であり孤高の天才と呼ばれた詠春である。目の奥に熱い物を感じながら、詠春は表向きにこやかに食事を続けていた。

食事の時間は、終始和やかに進んで行った。いくらネギだって、こんな席で深刻な問題の事を聞くような事はしない。それくらいのＴＰＯはわきまえていた。

一時間程で、食事は終わった。木乃香は、早めに休みたいと鶴子と自室へと戻る。ネギと高畑は詠春に呼ばれて書斎へと向かった。

「高畑君。強硬派の人間が誰と繋がっているか…君なら既に気づいているだろうね。」

書斎に通されてから、まず高畑に詠春は語りかける。これは、親書に書かれていた内容に関する話だ。

「アイツが何故、こんな事に手を貸してるのかは分かりません。ただ…最近の元老院の動きが不穏であるのは僕自身も調べているので分かります。今回の件にも…何らかの形で関わっているのでしょう。」

詠春は静かに頷いた。

「それに加えて、『完全なる世界』の動きも活発化している。君の聞いた名前、田崎勝敏と言う男はそのメンバーの一人だ。今奴らが仕掛けて来ている戦いは、西の実権を握り日本での活動拠点を作るのが目的だろう。既に穏健派の人間の何人かは殺されている。」

恐ろしい話だ。ネギもよく分からないが、危険な状況にある事は肌で感じていた。

「あの…。二日前、お姉ちゃんそっくりの人形が襲って来たんです。また旅館の方に悪い人たちが来るような事があったら…。」

ネギが心配していたのは姉だ。一度狙われている以上、また襲われる可能性は高い。

「ネギ君、その件はエヴァに頼んであるから大丈夫だ。旅館の方では、超君とエヴァが中心となって防衛体制を敷いてるらしいよ。ハッキリ言って、そこら辺の軍隊よりも強い。心配いらないよ。」

「それに先ほど連絡があって、反乱を起こしていた首謀者の一人が投降したらしい。今刹那君が連れてこちらに向かっているようだから、残党自体は少ないハズです。その人形の事も、今部下に調べさせている所です。」

その言葉に、ホッとするネギ。なら、姉も大丈夫だろう。

「それで…ネギ君。君にも話したい事があります。そうですね…お風呂に入ってサッパリしてからにしましょうか。ネギ君も私に聞きたい事があるでしょうから、その時までに頭の中を整理しておいて下さい。」

「あ、ハイ。分かりました。」

正直、風呂は嫌いなのだが仕方ない。ネギは高畑に連れられ書斎を後にするのだった。

その頃。件の刹那と天ヶ崎千草は立ち寄った食事処から出て来て、本部への移動を再開していた。

「アンさん…よう食べれますなぁ。これだけ狙われ続けて、よう大胆に普通の店に入れるわ…。」

天ヶ崎の驚くのも無理は無い。嵐山旅館からここまで、計四回襲撃を受けた。勿論天ヶ崎も式を使って戦ったが、その殆どを刹那一人で退けていた。

「大胆にさせるだけ相手が弱いというのもありますが、何より平常心を保ち冷静でいる事が大切です。食事中も警戒は怠っていませんでしたし。むしろ最大の敵は空腹でしょう。心に余裕が無くなりますから。」

自信満々に言う刹那。頼りになる。経験豊富な人間は頼りになる…のだが、だからと言ってざるうどん三人前は食べ過ぎだと思った。無論、言えないが。

本部への石階段の所につく頃には、辺りはとっぷりと日が暮れていた。階段脇の灯籠の明かりが、どことなく不気味である。

「すっかり遅くなりましたね。もう一戦あるかと思いましたが、なんとも拍子抜け……いや、来ましたね。」

刹那が灯籠の一つに目を向ける。その影から現れたのは…

「小太郎!?」

映画村で、刹那に一撃の下に敗れさった少年、犬上小太郎であった。

「ここで待っとったら絶対来る言うてたからな。やっぱしおっちゃんの言う事は正しかったわ。」

ニヤニヤと笑いながら歩いてくる小太郎。挑戦的な目で刹那を見る。

「今度は勝ったる!その為に力をもらったからな!」

その言葉に反応する二人。天ヶ崎は、おっちゃんという言葉に。刹那は、力をもらった、という言葉に。

「アンタまだそんな事言っとるんか!強くなろうと、あのガマガエルについてたって使い捨てられるだけやぞ!」

「やかましい!俺ら半端モンは強くないと馬鹿にされて生きていけんのや!なあ烏姉ちゃん、力さえあれば認められる。だからアンタもお嬢様の護衛を任されたんやろ。」

「フンッ…。」

つまらなさそうに言う。

「否定はしない。弱い護衛なんて必要ないからな。だが、私とお嬢様の間の絆は強さで結ばれたものではない。まぁ…借り物の力で偉そうに言う奴には分からんだろうな。」

「な、なんやと!?借りようが何しようが力は力やないか!」

「なら掛かって来い。虎の衣を借る狐は聞いた事があるが、蛙の力

を借りる犬なんて聞いた事が無いからな。試してみたくなった。」

「うぬぬぬぬ…。」

顔を紅潮させる小太郎。しかし、直情的な性格をしている割に攻撃して来ない。これは…何かを狙っている？

「まず、試してやろう。

『斬岩剣』！」

ドカアァァンッ！

「うわあぁぁっ！？」

吹っ飛ぶ小太郎。おかしい。何も強化されてないようだが。

…しかし次の瞬間。刹那は天ヶ崎を抱え上げ跳躍した。

「『斬岩剣』！」

吹っ飛んだ小太郎が、起き上がった瞬間に技を繰り出す。長く伸びた爪を使った斬岩剣は、先ほどまで刹那がいた地面をえぐり飛ばしていた。

「なるほど。木乃実お嬢様が言っていた能力と同じか…。」

「ははははは、どうや！自分の技をコピーされるんわ！悔しいやろう！」

頭が悪いのも程があるだろう…。刹那は白ける。天ヶ崎を下ろしてから刹那は刀を鞘に収めた。

「なんや、降参か？」

「どこまで阿呆なのだ、狗畜生。お前なぞに刀はいらん。素手でいい。」

「なんやとー！？あったま来た、後悔すんなや！」

刹那に向かって走り出す。刹那は目配せすると指をパチンと鳴らした。

ザクッ！

小太郎の影に、太い針のような物が。途端に、動けなくなる小太郎。針を投げたのは…天ヶ崎だった。

「ふぬぬぬぬ！クソ、動けへん！姉ちゃん裏切ったな！？このヒキョーもんがぁ！」

「…もう阿呆過ぎて言葉も出んわ。あのな、小太郎。針抜きゃええやろ？腕だけなら動くハズや。」

呆れながら天ヶ崎が言う。その言葉に刹那は吹き出しそうになるが、必死にこらえた。

「せ…せやな！気づかんかった！ありがと、姉ちゃん！」

跪いた瞬間、跳躍した刹那の手刀が小太郎の首筋に叩き込まれる！

ビシッ！

「ガッ……そん、な……。」

倒れる小太郎を見ながら、天ヶ崎は力無くつぶやく。
「夜中に影縫いして引っかかるとか…初めてや…。」

「灯籠の火を消せばいいものを…。よくここまで愚かでいられるものだ。」

刹那は、意識を失った少年を担いで階段を上って行った。残党一匹確保。戦いが終わるまでは、檻の中で飼われた方が幸せだろうと考えていた。

「ダメだな、あの犬は。」

刹那たちの戦いを、遥か上空に浮かびながら見ていた男が言った。田崎勝敏である。その横には、マリと呼ばれた女と…青や緑、銀色といったカラフルな頭の少年たちがいる。

「なー、俺らはどうすんだよ。」

「そうそう、力が戻るのはまだ先なんだろ?それまで何してろってんだよ。」

そんな言葉を勝敏に投げかける。勝敏はイヤらしい笑みを浮かべた。

「旅館に行けばいいだろう。お前らの好きな女がわんさかいるぞ？奴ら相手に勝てる程度には力を与えたハズだ。儀式が終わるまで、思う存分楽しんで来るといい。」

少年たちは一斉に口笛を吹いて興奮する。やっと、自分たちの目的が達成される！女、女、女！我慢出来ない少年たちは、我先にと旅館へ向けて飛んで行った。

「…バッカみたい。」

それを、冷たい目で見送るマリ。

「お前は行かないのか？」

「えー、私はぁ…勝敏様の物ですからぁ、一緒がいいですぅ。」

しなだれ掛かって、勝敏の胸にのの字を書くマリ。その言葉に気を良くした勝敏は、マリの頭を撫で回しながら大声で笑った。

「ははははは！それでこそ俺の女だ、マリ！」

そんな勝敏に抱き寄せられながら、マリは遠く兄弟達が消えた空を眺めてほくそ笑んだ。

（アリア…あなたの目の前で大切な人たちが汚されて行くわ。あなたはその時、どんな絶望の表情を見せるのかしらね？想像するだけで…ゾクゾクして来ちゃうわ。うふふふふ…）

第三十一話　結成！麻帆良ガーディアンエンジェルズ

麻帆良学園の生徒達が泊まっている嵐山旅館は、宿泊以外にも企業の研修にも使われる事がある。超鈴音とエヴァンジェリンが借りた部屋は、そうした研修に使われる部屋の一つ。そこには、魔法に関わっているクラスの人間や超の友人が集められていた。

「つまり、だ。京都は完全アウェーで今夜この旅館は確実に襲撃を受ける。」

エヴァンジェリンの説明に、戦闘経験の少ない春日美空や、そもそも戦闘の出来ない宮崎のどかと朝倉和美は青ざめていた。特に朝倉は実際さらわれたりしているので尚更だ。魔法なんかに関わるんじゃなかったと後悔していた。

対して義憤に駆られ闘志を燃やすのは、クラス委員長である雪広あやかと神楽坂明日菜、クー・フェイである。あやかは特に委員長として皆を守るという強い意識を持っていた。明日菜は無関係な人間を平気で巻き込む連中は許せなかったし、クーはやっと超に頼って貰えたという喜びに胸を踊らせていた。

そして…無表情に話を聞いているのは龍宮真名。エヴァンジェリンの説明を聞いてから、隣にいる石田に小さな声で尋ねる。

（これって報酬出るのか？）

（使用した銃弾等の経費は学園に請求出来ますし、交渉次第では出るでしょうね。それとは別に、私から龍宮さんに報酬を出します。）

（なんだろうね？）

（麻帆良に帰ったら、甘味処『ささら』で一週間奢り続けましょう。金銭的な上限無しで。）

（……っ！）

龍宮の顔色が変わる！

「エヴァ、具体的な作戦の話に移ろう。時間が惜しい。」

「ぅおっ！？あ、ああ…やる気満々だな。分かった、これから具体的にそれぞれの役割を決めようと思う。」

龍宮の気迫に圧されながらも、説明に入るエヴァンジェリン。石田はニコニコしながらそれを見ている。別に自分の懐が痛むワケではないからだ。頑張れ、マスター！心の中でエールを送る。私も御相伴に預かりますから！

エヴァンジェリンの考えた布陣は、至ってオーソドックスであった。この中で最強の力を持つエヴァンジェリンと、膨大な量のマナを操れる石田が旅館に防護結界と認識阻害の結界を張る。これで旅館の守りを固め、一般生徒を巻き込む事も防ぐのだ。石田はマナをエヴァンジェリンに送り続ける他にも、植物とリンクして仲間の補助にも当たる。

あやかと明日菜は、魔法無効化を利用して前線で壁役となる。一緒に茶々丸、チャチャゼロが出撃して二人をリードする事になった。龍宮は、木々に混じりながら援護射撃。勿論石田のサポートつきだ。

前線で暴れる連中が取りこぼした敵を潰すのは、クーと葉加瀬。なんと葉加瀬は自分専用のパワードスーツを持参して来ていた。生身でも垂直飛び3メートルを跳べるようになっているのだが、このパワードスーツを着れば１０メートルの跳躍が可能となる。他の能力も軒並み上がっているし、戦力としては充分合格ラインにあった。

そして、現場を指揮するのは超鈴音。エヴァンジェリンは、超を高く評価していた。格闘、魔法、共に優れ頭もいい。状況判断も的確だし、メカニックとしての知識も豊富。茶々丸にトラブルが起きても対処出来るし、得体の知れない石田との信頼関係も厚いという。現場を指揮するには最適な人物だと言えるだろう。

朝倉はエヴァンジェリンのそばで待機。勿論遊ばせておくワケではない。旅館に仕掛けまくったカメラやマイクを使って、異常が無いかチェックするのだ。朝倉にうってつけの仕事だろう。朝倉も、それなら出来るかな、と頷いた。

宮崎のどかは、ネギに頼まれた事と殆ど一緒。しかしこれが意外と重要だったりする。３－Ａは、何故か異様に勘の鋭い人物が多い。自分から危険に巻き込まれる者が出る可能性が高いのだ。そういった者を出さない為に、旅館内でクラスメートを見ていて欲しい、とエヴァンジェリンはのどかに頼む。のどかも快く引き受けた。

春日美空は基本的に戦えないが、状況判断と逃走に秀でている。のどか同様旅館内を見ていてもらうが、万一侵入された場合に避難誘導をしてもらう事になった。

ちなみに、偽刹那と木乃実は戦闘に参加しない。今は部屋で寝ているようだ。用心深いエヴァンジェリンは、木乃実の事を信用していなかった。まだ捕まっているという姉を餌に使われたら、寝返るかも知れないと思っているのだ。偽刹那も、木乃実の作った式である。同様に信用出来ない。

「フム…こんな所か。何か質問のあるヤツはいるか？」

説明を終えたエヴァンジェリンが皆を見渡す。質問は特に無さそうだが…

その時、スッと手を挙げる者が。

「拙者は何をすればいいでゴザルか？」

「ん？長瀬か。長瀬は……何っ！？」

皆が、バッと一斉に振り向く！そこには何故か、なんちゃって忍者の長瀬楓がいた。

「いや～、皆がゾロゾロと移動するから何事かと思ってついて来たでゴザルが…まずかったでゴザルか？」

皆、一様に脱力してしまっていた。何故、気づかなかったのだろう。石田でさえ気づかなかったのだから凄い。

「超鈴音、どうする？」

意見を求めるエヴァンジェリンに超は答える。

「全部聞かれてるカラ、今更無関係とは言えないネ。長瀬は強いカラ、戦力に加えて問題ないヨ。」

確か、クーがよく手合わせの相手に選んでいたハズだ。クーの相手がつとまるなら、自分の身を守るくらいは出来るだろう。

「楓、相手は本物の悪党ネ。怪我だけじゃ済まない可能性もあル。それでも行ける力？」

「皆を守る為なら何でもないでゴザルよ。」

即答する長瀬に、超は覚悟を決めた。楓にも、心身のバランスを崩さない程度の力を与えよう。クーと同じように、川神の力を…

長瀬は、クーや葉加瀬同様に、明日菜たちの取りこぼしを潰す事になった。指示は超鈴音が出す。確か長瀬は飛び道具を使う。レンジを気にせず戦えたハズだ。もしかしたら、かなりの戦力になるかもしれない。

超はエヴァンジェリンに視線を送る。エヴァンジェリンは一つ頷いてから、皆に向かって話し始めた。

「今回の戦いは、自分たちの身を守る為の戦いだ。向こうはもはや一般人だろうと平気で巻き込んで攻撃してくる。負けたら最後、殺されるか慰みものになって売られるか、だ。」

皆の表情が厳しくなる。

「しかし、私たちは絶対に負けない。負ける理由が無いからだ。最強の魔法使いである私に、超鈴音のような天才が参謀として付いている。そして集まった人間は皆、一芸に秀でたヤツばかりだ。不思議なくらい、な。何故か分かるか？」

その言葉に、少し戸惑う。確かに個性的すぎる面子が集まっている。それは前々から感じていた事だった。

「これは秘密だったんだがな。あのクソジジイ、才能のある人間だ

け集めたクラスを作って、覚醒した奴を将来魔法使いの世界にスカウトするつもりだったらしい。分かるか？今ここに集まっている、既に魔法を使える者も、そうでない者も。あのバカデカい麻帆良学園全生徒の中から集められた選りすぐりのエリートだという事だ。」

皆が戸惑いながら顔を見合わせる。超と石田は笑った。芦優太郎の言霊を見て自分もやってみたくなったんだな、と。さっきから声に魔力が乗りまくっている。

「そのエリートたちに、最強の魔法使いがつくのだ。負けるワケがないだろう？必ず勝つ。要は、その戦い方の問題だ。」

エヴァンジェリンはそこで少し間を置いて言った。

「華麗に、容赦なく、徹底的に叩き潰すぞ。二度と刃向かう気が起きなくなるくらいに、な。」

皆の胸が、震えた。

心のどこかにあった不安が、消し飛んで行く。この人について行けば、間違いないと思わせた。

「麻帆良ガーディアンエンジェルズ、今より嵐山旅館防衛作戦に入る！命知らずの馬鹿どもに自分たちの力を見せつけてやれ！」

「「「「おおぉぉぉぉっ！」」」」

なんというアジテーション。いつの間にか皆、異様な闘争心を燃やしていた。冷静なのは超、石田、龍宮くらいか。効き目ありすぎである。見ると、エヴァンジェリンは満足そうに頷いていた。そり

ゃ気持ち良いだろう。

こうして、後に魔法世界でも最強と謳われる麻帆良ガーディアンエンジェルズが誕生した。後世の歴史学者たちは、この日をこう呼んでいる。…戦の女神が地上に舞い降りた日、と。

エヴァンジェリンたちが旅館の周りに陣を敷いた、ちょうどその頃。色欲に目の色を変えた七体の人形は、旅館近くに待機していた勝敏の私兵と合流していた。

「だからよ、俺らが旅館の中に突っ込んで女にも突っ込んでる間、オメーラは警察来ないように見張ってりゃ良いんだって！」

「し、しかし敵の戦力は桁違いです！女の剣士一人に三十人やられましたし…」

「だあぁー！だからそれはオメーラが弱いからだろうが！いいから旅館の周りを囲んでろ！」

「はぁ…」

もはや会話は通じない、と諦める私兵たち。人形たちは、全員ギラついた目で旅館の方へと向き直し…

「俺、一番のりーっ！」

「あ、ずりぃぞ！」
「抜け駆けすんなや！」
「まき絵は俺んだ、手ぇ出すな！」
「那波は俺の嫁ーっ！」

我先に、と飛び出した。旅館は約２００メートル先、ダッシュすれば直ぐにでも到着するハズだが…

パアァンッ！

「「「「…っ！？」」」」

先頭を走っていた人形の頭が弾け飛んだ。…龍宮の狙撃だ。それを合図に、人形たちの目の前に茶々丸が現れる。肩にはチャチャゼロが乗っていた。

「これより敵対勢力の殲滅に入ります。」

「ケケケケッ！久シブリノ殺シダゼ！」

ガガガガガガガガッ！
茶々丸のガトリングが火を噴く。

「ち、ちくしょう！なんで茶々丸がいんだよ、話が違うだろ！」
慌てて防壁を張る青毛人形。単行本の内容との違いに焦る。

「オレヲ忘レンジャネーゾ？」
気づくと、すぐそばにはチャチャゼロ。手にした剣の柄を人形の身体に当てていた。そして次の瞬間、抜けて行く魔力！

「う、うわぁあああっ！？ま、魔力が、防壁が…！は、離れろぉ！」

「ワカッタ、離レテヤルヨ。」

チャチャゼロが離れる。人形はホッとして防壁を張り直そうとして前を向き直すと…

目の前に、ミサイルが迫って来ていた。

「ち、チクショーーーッ！！」

ドガアァァァンッ！

人形は木っ端微塵に砕け散った。

あっという間に、二体の人形が破壊される。その結果に、人形たちは焦った。しかし、その中の一人が声を張り上げる。

「馬鹿、魔法使えばこんな奴ら屁でもねえだろ！」

「「「「あ、そーか！」」」」

すぐさま詠唱に入る人形たち。高速詠唱スキルによって、巨大な稲妻が放たれる。

「「「「千の雷！！」」」」

それは、凄まじい規模の雷撃魔法。単純なエネルギーだけなら、エヴァンジェリンの中級魔法に匹敵するレベルだ。しかし…

ズカアァァァンッ！！

「やったか！？」
「やったっしょ！」
「ロボット雷に弱い、これ常識。」
「もったいねえなぁ貴重なセクサロイドが…」

好き勝手言っている人形たち。次の瞬間、その表情が固まる。

「…うまくいきましたわね、明日菜さん。」

「タイミングばっちり、ナイスあやか！」

そこには、巨大な一輪の百合の花。魔法無効化の鎧のパーツである、百合の花を模したスカート部分。それを分離させて二人分を円形につなぎ合わせると、大きな花びらの盾となる。どんな威力の魔法だろうが、はじき飛ばしてしまう最強の盾だ。まあ、難点と言えば…

「あ、あやか、早く戻さないと！」

「ま、待って下さい、明日菜さん！」

…展開中は下着が丸見えだという事だろうか。

「な、何だよそれ！何で明日菜がこっちに居るんだよ、おかしーだろ！？」

「つーか、あやかまで戦うとか無いだろ！」

「まあパンツ見れたからいいけど！」

混乱しながらもちょっと嬉しそうな人形たち。何とも間抜けな顔だ。

その戦いを、結界を張りながらモニターで見ているエヴァンジェリン。

「ククククク…そうだ、もっと魔法を使え。石田、今の魔力は確保出来たか？」

「ええ、勿論です。ちゃんとマナに変換してアリア先生に流していますよ。」

「うむ、それでいい。そのまま、作業を続けてくれ。」

エヴァンジェリンは、今回の戦いを利用してアリアの活動エネルギーを確保しようとしていた。そして、思っていた以上の魔力を確保出来てホクホク顔であった。さあ、もっと魔法を使え！お前らが必死になるほどアリアの寿命が延びるのだ！

…さて、その頃アリアはどうしているか、というと。

「ど、どうしよう…なんか分かんないけど、無性に走り回りたい！ダメ、先生なのに、そんな事しちゃ…ぅううう～！」

部屋で一人、ワケもわからず悶えていた。

第三十二話　初陣と人形

その日、宮崎のどかは燃えていた。何だかよく分からないが、燃えていた。皆を、危険に近づけないぞ！そんな風に思いながら部屋に戻る。特に要注意なのは、面白い物好きな愉快犯、早乙女ハルナと知的好奇心の塊、綾瀬夕映である。

「ゆえ～、何してるの～？」

「む？のどかですか。良いところに来ました。今、ハルナとこの旅館の見取り図を作っていたのです。」

「見取り図…？」

なにやら不穏な響きである。

「そー、見取り図！この旅館さー、妙な位置にダストシュートあったり排気口あったり面白いんだよね！」

「今夜、少し冒険してみようと思っていたのです。」

いきなりピンチきたー！

ヤバい、これはヤバい！二人が万一外に出たら殺されちゃう！こういう時は…そうだ！

「ね、ねえゆえ～、トランプしよーよ～。その方が楽しいよー？」

「そ、それは…トランプしながら排気口に潜り込むのはシュール過ぎるですよ、のどか。」

違うのに！全然違うのに！ハルナまで微妙な顔しないで！のどかは必死に引き止めるネタを考えるが思い浮かばない。綾瀬は思いっきり懐中電灯を取り出してやる気満々だ。

と、その時。

「ふにゃあっ！？」

木乃香…いや、木乃実が飛び起きた。見ると、偽刹那が幸せそうに胸元に顔をうずめている。

「とりあえずそこのレズっ娘は時と場所をわきまえろです。」

「うひゃー、ナイス光景！ちょっとデッサンさせて！」

ハルナは早速デッサンノートを取り出してスケッチを始める。それを見て、綾瀬はため息をついた。こうなると、長いのだ。のどかも一安心である。

「いや、何で助けてくれんの？おかしいやろ、この子？」

「何でと言われても…いつも似たような事してるではありませんか。」

うそやん。木乃実は固まる。

「あー、この間凄かったよね。ちゃんとスケッチしといたから。見る？」

ブンブンと首を振る。さすがに見たら、心が折れそうだ。自分の事じゃないのに…。

仕方なく、寝ぼけながら抱きついてくる刹那を何とか大人しくさ

せる木乃実。赤ちゃんをあやすように背中を撫でたりしていると、不意に窓がビリビリと音を立てた。

「あれ、今の何なん?」

木乃実の声に反応してハルナたちも窓を見る。すると、窓の外に光がはじけるのが見えた。

「わ、花火やってる!スゲー!」

「これは…今日花火をやるイベントなんてあったですか?なんにせよラッキーなのです。」

綾瀬とハルナはそう言って喜ぶ。二人には、あれが花火に見えるらしい。認識阻害の魔法とは恐ろしい物だ、とのどかと木乃実は実感した。何故なら…

窓の外では、ちょうど人の形をした物が木っ端微塵になっていたからだ。

「なんで…なんでこんな強ぇんだよ!お前ら、転生者だろ!なに憑依してんだよ!」

銀色の髪の人形がわめきたてる。七人で挑んだが、一瞬で二人やられた。そして今、また一人。あやかと明日菜が魔法を無効化し、

茶々丸とチャチャゼロが攻撃。バランスを崩した所に龍宮の銃弾が撃ち込まれ、茶々丸のガトリング砲でバラバラにされた。異様に連携がとれているのだ。

「兄貴、分散しようぜ。バラけさせないと勝てねえ。」

「分かってる、チクショウ…フィクションの癖しやがって…。」

悔しそうにする人形たち。残り四人となった彼らは、バラバラに展開して旅館内への侵入を試みた。

「出番ネ、クー。葉加瀬。楓。楓は自分の能力に振り回されないように注意するよう二。」

「分かったでゴザル。」

「行ってきます。」

「師匠に良いところ見せるアルよ！」

超鈴音は、長瀬楓に川神ボディを与えていた。アシュタロスからもらったこの能力のストックはこれで最後。本当は身体の弱いクラスメートにあげたかったが、仕方ない。今回の戦いに関しては、彼女が一番耐久力に問題ありそうだったからだ。

「まだ、この連中相手なら大丈夫だけド…」

超の心配は、この人形ではない。呪術師だ。彼らは弱いが狡猾だ。全方向から一斉に侵入してこようとしたら、流石に危険だった。万一侵入されて一般人を人質にとられたらマズい。

まだ、超は動かない。自分が動くのは、今ではない。そう思いな

がら、戦闘に出た三人を目で追っていた。

「は…？お前、何？」

旅館の西へ回った人形は、ポカンとする。目の前には、首から下をゴムのようなもので覆ったメガネ少女。葉加瀬聡美であった。少し武骨なラバースーツは、可愛らしい顔とあまりにミスマッチだった。

「何、という言い方は余りに曖昧ですね。エレガントではありません。」

「はあ…？お、お前にゃ用はねえよ。弱い奴がでしゃばんなよ。」

馬鹿にするのも、原作のイメージしか持ってない彼なら当然の事なのかもしれない。確かに原作では葉加瀬に戦闘能力は無いのだ。原作では。

「その言葉、そっくりお返しします。」

そう言った葉加瀬は、思いっきり地面を蹴る。一瞬で１０メートル以上ジャンプすると、真下に向けて手榴弾を投げつけた！

ドガンッ！ドガアァンッ！

「う、うわあぁぁぁあ゛！？」

防壁を張るタイミングを逃し、マトモに爆発に巻き込まれる人形。煙が風に流され姿を見せると、両手を噴き飛ばされ焼けただれた奇

妙なオブジェが立っていた。

「あ…あぢぃ…クソ…なんで、こんな雑魚に……」

ズズッ、ズズッと身体を無理やり引きずりながらつぶやく。葉加瀬はそのあまりのお粗末な身体の造りに唖然とした。これならスクーターの方が上等じゃないか？むしろこんな身体で魔法を使いこなしている方が信じられない。

「どちらにせよ醜い。次の生があるなら、もう少しまともなメカニックにつく事です。」

葉加瀬は素早く近づくと、人形を真上に蹴り上げた。そして、自分も真上に跳躍して茶々丸に合図を送る。

「茶々丸、Ｄ装備お願い！」

「ハイ、葉加瀬。」

少し離れた所から、茶々丸が葉加瀬に向かって鉄の塊を投げ渡す。総重量１００キロを超えるそれを空中で難なく受け取り、右腕に装着する葉加瀬。スイッチを入れると、鉄の塊が高速回転を始めた。

「科学の力に平伏すがいい！」

ギュィィィィィンッ！

それは、ドリル。葉加瀬の夢だった、自分専用のドリルアームだった。

「ぎゃあぁぁぁぁぁあ！？」

三体目同様、木っ端微塵となる人形。いや、こちらの方が酷いだろう。もはや、それが何だったのか判別不能なまでに粉々にされた人形は、月明かりを反射させ鈍色の光を放ちながらバラバラと落ち

て行った。

恨むなら、ヘタクソな制作者を恨んでください、と葉加瀬はつぶやく。地面に着地すると、見上げた旅館の一室から呑気な声が聞こえた。

「「たーまやー！」」

汚い花火でゴメンね、と葉加瀬は苦笑いする。そして、旅館の屋根の上で戦況を見守る超に手を振って合図を送った。

『こちらは撃破しました。指示通り、この場に待機します。』

旅館東側では、緑の髪をなびかせた人形が必死に逃げ惑っている。追ってくる忍者の攻撃は、何とか避ける事が出来る。しかし…

バシュッ！

「ぎゃあっ！？」

先ほどから、的確に自分の身体を撃ち抜いてくるスナイパーの存在が、煩わしかった。龍宮真名だ。

「くそぉ、真っ先に犯してやろうと思ってたのによお…。出てきやがれ、くそビッチ！」

バシュッ！バシュッバシュッ！

「ぎゃあっ、うわあぁっ！？くそ、物陰に隠れ…」

慌てて、近くの物置らしき建物へと駆け寄るが。

「そこまででゴザル。」

長瀬楓が、立ちふさがった。

「やっと、身体の感覚に慣れたでゴザルよ。これはこれで、中々難しいでゴザルな。」

「な、何言ってんだよ。身体？発情期か？敏感で困ってんなら触診でもしてやろうか？」

下品な冗談を言いながら、人形は必死に考える。確か長瀬は抗魔法力の無い普通の人間だ。なら、魅了の魔眼で虜にしてしまえば…

「俺の目を見ろぉぉぉお！」

バキィッ！

その瞬間、長瀬の拳が人形の顔面を殴りつけた。吹っ飛ぶ人形。地面に叩きつけられると…

ダダダダダダダダッ！

木の上から、おびただしい量の銃弾が襲いかかる。その場で痙攣しているかのように、跳ねて踊る人形。銃撃が止むと、そこにはボロ雑巾のようになった人形の姿があった。

「楓、まだ動きが固いな。相手がもう少し魔眼を使うのが早かったら、魅了されていたぞ。」

木の上から降り立って長瀬に声をかける龍宮。長瀬は罰が悪そうに頭を掻いた。確かに、今のは危なかった。超が初めに「能力に振り回されるな」と言った意味が理解出来た。強いが、感覚が伴わないうちはマイナス面もデカい。

「もう、大丈夫でゴザル。」

「まあ、フォロー出来るうちはフォローするさ。」

そう言って、龍宮はまた木々に紛れていった。

フォロー出来るうち…その言葉が、長瀬は気に掛かった。フォロー出来なくなるかもしれないという事だろうか?

旅館の裏手に回ろうとした黒髪の人形は、思わぬ敵の出現に焦る。クー・フェイ。原作では本部へ向かうキャラである。振り返ると銀髪の人形は未だに明日菜たちに追いかけられており、敵を分散出来ていない。むしろ、これは…こちらが分散させられた?

「へっ、つってもコイツはまだ仮契約してない雑魚じゃねえか。先にコイツいただいちまうか。」

「余裕ネ?後悔するアルよ!」　クーが、人形に跳び蹴りを放つ。しかし、人形は素早くかわして空へと逃げる。クーは飛べないので、

こうすればまともに攻撃を食らう事はない…と思ったのだが…。

クーは、旅館の壁を真上に駆け上がる！

「に、人間かよ！？」

壁を蹴り、猛スピードで人形に迫る。しかし、人形は笑みを浮かべた。得意の無詠唱魔法で撃退するチャンス。飛んで火に入る夏の虫、である。

「食らえや、『ガイザーフェニックス』！」

組まれた両腕から、巨大な炎の鳥が放たれる！それは、もの凄い勢いで…分解された。

「な、なにぃぃいっ！？ポップかてめぇは！」

「なんの事か分からないネ！」

眼前まで迫っていたクーが、そのままの勢いで人形の顔面に蹴りをいれる。

バキィッ！

首が折れ、頭が宙を舞った。

「くっ…パンチラ、き、いろ……」

謎の言葉を残して、地面へと叩きつけられた。クーも着地すると、ちょっと怒って頭を踏み砕く。

「最低アル。万死に値するネ！」

そう言って、砕けた人形の破片を蹴り飛ばしてから、満足そうに

その場を後にするクー。その背後、頭の無い人形がゆっくりと立ち上がり…

ガアァンッ！

大きな音を立てて砕け散った。

「し、師匠！？」

驚くクー。屋根の上には、こちらを見て厳しい顔をする超の姿があった。

「油断しすぎネ。二回は殺されてたヨ。」

「済まないアル…。」

しゅんとなるクー。そんなクーに、超は優しく声をかけた。

「でも、動きは良かっタ。次からは、もっと相手の動きを読んで戦うといいヨ。」

そう言うと、クーはパッと顔を明るくした。超の言葉に一喜一憂するのは、今でも変わらないようだ。クーはニコニコしながら、超の指示を受けて旅館東へと走って行った。

「さテ…そろそろ本命がくるかナ？」

超の目には、油断の色は無い。こんな奴らは敵では無い。本当に怖いのは、慎重に様子をうかがっている…呪術師たちだ。超は、最後の人形が破壊されるのを待つ。あれが壊された時が、本当の戦いの始まりだと思っていた。

【アリア・スプリングフィールド】

夜の十時…普通なら就寝時間です。しかし、眠れません。何故か、さっきから身体がカッカして眠れないんです。しずな先生は、大人になったら静め方を教えてあげますと言ってましたが…妖しい響きに聞こえましたが気のせいでしょうか。多少身の危険を感じたので睡眠薬飲ませて寝てもらいました。私ですか?身体の異変が気になって薬を飲む気にはなれません。

私は、旅館内を少し散歩する事にしました。少し歩いて疲れたら、眠気も来るでしょう。夜、部屋を出て悪い事する子がいないか見張ってないといけませんしね。しかし…

静かです。…妙ですね。

皆、疲れちゃったのかな?そんな事を考えながら、一階ロビーまで降りてくると…。

出入り口付近の暗がりで、男の人が電話をしていました。あやしい。受付に誰も居ないのも変です。私はさっそく、あの文珠という物に『聞』と入れて通話を盗み聞きました。

「…ぁの馬鹿共はガキ共に消させておけばいい。お前らはその後で適当に鬼でも使って引きつけてろ。俺は計画通りアリア・スプリングフィールドを始末したら離脱する。」

ふむ。これは、ピンチなのでしょうか。不自然に人が居ないという事は人払いの結界が張られてるという事ですよね。助けを呼んでも来ない…という事は自分でなんとかするしかありません。

その時、私は背後に気配を感じてパッと振り返ります。そこに居たのは…あれ？春日さん？

（シーッ！バレるから少し我慢するっスよ！）

ひょい、と担ぎ上げられる私。結構力あるんですね？

『アリア先生確保完了。後はそっちで頼むッスよ。』

インカムで何やら話してます。むう…一体何が起きてるんでしょうか。春日さんは私を担いでロビーを離れて行きます。聞ける雰囲気では無かったので聞きませんでしたが、仲間ハズレみたいで寂しいですね。

私は小脇に抱えられながら、旅館の知らない部屋に運ばれました。春日さんがガラッと戸を開けると、そこには朝倉さんと石田さん。それと、なんだか怒った顔をしたエヴァさんがいました。

「アリア…お前は何回心配させれば気が済むんだ！」

あれ、怒られました。いや、何がなんだか分からないんですが。そう言おうとした私に、春日さんが小声で囁きます。

（本気で泣きそうなくらい心配してたんス。大人な所、見せるッスよ！）

う…そうですね。保護者ですし。私は素直にごめんなさいと謝りました。エヴァさんは、フンッて言ってから私の手を取って抱き寄せます。

「もう私のそばを離れるな、馬鹿が！」

むう…

結局、その後しばらく私はエヴァさんをなだめる羽目に。隣の石田さんは、何やら魔力のような物を外に向けて放ちながら、ブツブツ言っていました。なんて言ってたんだろう？

「い、いいから早く結界張るのに戻って、エヴァンジェリンさん！」

第三十三話　燃える空

嵐山旅館北部では、相変わらず銀髪の人形が逃げ惑っていた。布陣を崩そうにも、他の兄弟たちが皆やられてしまった。もはや勝つ見込みはゼロだろう。

「クソ！何が勝てる能力を与えた、だ！適当な事ばかり言いやがって！」

銀髪人形は知らない。与えられた力は確かに凶悪であり、使いようによっては本当に勝てたかもしれないと言う事を。

だが、もう遅い。

「姉さん、お願いします。」

「ケケケケケ、任セロ。」

茶々丸が、銀髪人形目掛けてチャチャゼロを投げる。空中で高速回転しながらチャチャゼロは、持っていた剣の柄を人形の額に突き立てた。

「吸イ取レ、アーティカルブレイド！」

チャチャゼロの言葉に反応して、剣の柄が光る。人形の身体から、魔力を吸い取り始めた。

「うあぁぁぁぁ！？クソ、離れろクソチビ！あ、あ、抜けるっ…！」

「ケケケ、ジャンク二ナッチマイナ。」

暴れる銀髪人形。しかし、身体を動かすエネルギーを吸い取られてしだいに動きが鈍って行く…。
チャチャゼロは魔力を吸いきると人形から離れて明日菜たちに声をかけた。

「オラ、トドメダ。ヤッチマエ。」

「いくよ、あやか！」
「はい、明日菜さん！」

二人は手にした武器を重ね合わせる。すると、光を放ちながら剣と槍は一つになって行き、巨大な光の剣に姿を変えた。

「「約束された勝利の剣ー！！」」

グオオォォォォッ！

真名をエクスカリバーと呼ばれるその剣は、信じられない高密度のエネルギー波を銀髪人形に向けて放つ。薄れゆく意識の中、人形はつぶやいた。

「この…チート野郎……。」

光に飲まれながら、銀髪人形はこの世界から消え去った。

「つまり、悪い人が攻めて来てるワケですか。」

司令室となっている旅館の一室で、アリアは石田の説明を聞いていた。エヴァンジェリンは、現在結界を張る作業に戻っている。

「アリア先生の目撃したのはホテルの従業員ですね。前もって潜伏されているとは思いませんでしたが、今無力化したと連絡がありましたから大丈夫でしょう。」

無力化…。その言葉に一般人の朝倉などは怯えてしまう。監視カメラや窓の外の光景は、日常からかけ離れた戦場だ。

「朝倉さん、大丈夫ですよ。もし怖くて辛いなら、魔法に関する記憶を消してもらう事も出来ます。この戦いが終わって落ち着いたら、どうするか決めましょうか。」

アリアに言われて、朝倉は頷いた。知的好奇心はあるけど、こんな戦いに巻き込まれるのは嫌だ。芸能レポートには興味あるけど、戦場カメラマンにはなろうとは思わない。

「私、今日の光景を夢にまで見るようだったら記憶を消してもらいます。そのほうが……あれ？」

「え……？」

モニターを見て、固まる朝倉。それは、旅館の外の風景を映したモニター。そこには、明日菜や茶々丸たちの姿が。そして、それを遠巻きに囲む…

おびただしい数の、鬼。

「石田、物量作戦で来たぞ。さっき明日菜たちが放った魔力、確保したか？」

「はい。雑魚一匹に消費するには勿体無い量でしたからね。」

「悪いが、それを明日菜たちに返してやってくれ。本当はマナに変えてアリアに入れたかったが、仕方ない。」

その言葉に反応するアリア。もしかして、さっきから急に元気になったり熱くなっていたのは…

「ん？ああ、私の指示で石田に入れさせた。」

パコーンッ！

アリアのスリッパがエヴァンジェリンの頭に炸裂した。

超鈴音は、突然現れた鬼たちの姿を見ても全く動じなかった。相手の立場で考えたら、この方法しか勝利する方法が無いからだ。その為、戦力を東西南北に分散させた。が、遊撃として動いていた龍宮が旅館内に潜んでいた呪術師の処理に向かった今、その布陣に若干の綻びが出来てしまっている。

「さあ、楓。正念場ネ。」
超はそう言って、インカムから石田にメッセージを送る。
『これかラ、私も前線に出るヨ。ナビ、頼むネ。』
『了解です。』
超の身体に、光を帯びた幾何学模様が浮かび上がる。自分の居た未来で、ただ戦う為だけに身体に刻み込まれた魔術刻印。沢山の失われた笑顔を思い出し、超の目はかつての鋭さを取り戻す。
「覚悟しろゴミ共。今の私に甘さは無イ。」
そして紡がれる、彼女の呪文。
『ラスト・テイル　マイ・マジック・スキル・マギステル　火精召喚　槍の火蜥蜴２９柱』
召喚された２９体のサラマンダーと共に、超は鬼たちの群れに飛び込んだ。
「退くでゴザル、二人とも！」
鬼たちの攻撃に苦戦する明日菜とあやかに声をかける長瀬。彼女は今、龍宮の代わりに遊撃を行っている。明日菜たちに退却の指示を出したのはエヴァンジェリンだ。
「な、なんで！？まだ戦えるのに！」
「そうですわ、今ここで退いたら…」
そう言いながらも、疲労の影が見え隠れする。魔法無効化能力は

魔法使い相手なら絶大な力を発揮するものの、物理攻撃主体の相手には意味が無い。気や霊力を主に使う呪術にもそれほど耐性を持たない為、この鬼たち相手には苦戦していた。

「大丈夫、拙者にはこれがあるでゴザル。」

そう言うと、長瀬は分身の術を使って周囲に自分そっくりな分身を作った。…３０人も。

「旅館内に一人侵入者が居たらしいでゴザル。二人には、これ以上侵入者が入らないように旅館のそばに陣取って欲しいでゴザルよ。」

「そ、そうね。分かったわ。」

「長瀬さんも気を付けて。」

「あいあい。」

初めて見る分身の術に驚きながら、二人は指示通りに旅館へと後退する。確かに限界に近かったから、助かっていた。

分身の術を使った長瀬は、最前線で暴れまくる茶々丸とチャチャゼロをサポートするのに１０人、自ら戦うのに１０人、クーと葉加瀬のサポートに５人ずつ割り当てていた。これは通常の分身の術ではない。実体を伴う高度な魔法のような術である。以前は出来なかったが、超から貰った力によって可能になっていた。

旅館を取り囲むように現れた鬼たちは、次々とやられて行く。しかし、呪術師たちもありったけの符を使って鬼を呼び続ける。戦争を起こす勢いでやっているのだ、必死である。ただでさえ麻帆良襲撃を大失敗させて後が無い。これに敗れたら死ぬ、そんな覚悟で戦っていた。

地上を中心に戦う長瀬やチャチャゼロ、クーの上空では、超とサラマンダーたちが飛び回って援護をしている。

『魔法の射手　連弾・火の５９矢！』

超の放つ強力な火の矢が、鬼たちを次々と紙屑にかえる。呪術師たちは対抗して、式で作った無数の鷲を向かわせるがそれも撃ち落とされた。

「いい加減、ここらでデカいの撃っテ数を一気に減らすカ。」

超は三体のサラマンダーを護衛に付けて詠唱に入る。それは、彼女の使用出来る最強の魔法だ。

『ラスト・テイル　マイ・マジック・スキル・マギステル　契約に従い我に従え炎の覇王！来たれ浄化の炎、燃え盛る大剣！ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄！罪ありし者を死の塵に…』

キッと式達を睨みつけた。

『燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）！！』

ドオオォォォォンッ！

夜空が、一瞬で赤く燃え盛る。鷲たちは一瞬で消え失せ、呪術師たちは呆気にとられて空を見上げていた。

「ぐっ…！」

超は、身体を襲う痛みに耐える。　いくら身体を強くしても、この刻印を使う時は痛みを伴う。最強クラスの呪文なら、仕方ない。

…しかし、超はすぐに身体に魔力が戻ってくるのを感じた。
（留美…ありがとうネ。）

すぐにフォローに入ってくれる石田に、超は感謝する。これなら、まだまだ魔法を使える。

その時、旅館の方から歓声が聞こえて来た。しまった、やり過ぎたか…と焦ったが…。

「すっげー、何尺玉よ！？」
「十連発だったよね、今の！」
「最後のナイアガラみたいだったね！」

ど、どんな花火ネ…

脱力しながらも、超はニヤリと笑った。そんなに喜んでくれるなら、もっと花火を打ち上げてやろう、と。

「超鈴音、か…。凄まじいな。まさか奴がこれほどの使い手だとは知らなかった。」

窓の外、燃える空を見ながらエヴァンジェリンは感嘆の声をあげる。封印の解けた自分の上位魔法と同等の威力だったのだ。人間の身体でそこまでたどり着ける者など、サウザンドマスターくらいしか思いつかない。

「凄まじい威力だったな。結界が無かったら旅館まで吹っ飛ぶ所だが…石田、今のも確保できたか？」

「勿論、大丈夫です。すぐに超鈴音に戻しましたよ。まあ、もっとも…。」
悪戯っぽく笑う。
「三分の一ほど貰いましたけどね。」
二人の視線の先には、アリア。椅子に座って大人しくしてると思ったら…
「うわぁぁん、またムズムズしてきたあぁぁ!?」
足をパタパタ動かして悶えていた。

【龍宮真名】

盲点といえば盲点だった。旅館に、前もってスパイを送り込んでいるとは、何とも用意周到だ。きっと、だいぶ前から計画されていたのだろう。麻帆良の教師と繋がっていたらしいし、敵は思いのほか頭が回るようだ。
私が仕留めた男は極めて弱かった。少し痛い目にあって貰ったら、色々吐いてくれた。余りに簡単にいくので調べてみたら、暗示をか

けられていた。…最初から捕まえさせ、嘘の情報を流させ攪乱するつもりだったのだろう。これは、危険な相手だ。確か勝敏とか言ったか…完全なる世界のメンバーらしい非道さだな。

私はすぐにエヴァの居る部屋へと向かい、薬で眠らせた男を引き渡した。エヴァは外に捨てておけばいいのに、と言っていたがそれは流石にマズいだろう。目の届く範囲に置いておけ。私は用事が済んだのですぐに部屋を出ようとした。その時、目の端に不思議な生き物が。

「ぅうう〜…」

パタパタパタパタ…

何してるんですか、先生。

「あ、龍宮さん。いえ、なんだか身体がムズムズしてもどかしいんです。」

!!　…そうか、それは…大変だな。しかし、それは誰にでも訪れるものなんだ。あまり気にしてはいけない。

「え、いえ、何か勘違いしてませんか?そんなんじゃないんです!」

ああ、分かっている。私も初めは戸惑ったものさ。あの人に相談して困らせた思い出があるよ。大丈夫だ、寝てしまえばすぐに収まる。

「うわぁぁん、違うのにぃぃい!」

パタパタパタパタパタパタ!

ああ、そうやって運動で発散させるのも一つの手だな。

クラスのマスコットが大人になって行く姿を少し切なく思いながら、私は部屋を後にした。

第三十四話　フルムーン・ライジング

言ってみれば、それは長瀬サーカス。木々や建物を足場に縦横無尽に飛び回り、巨大な手裏剣やクナイを投げて敵を倒して行く。互いに腕をクロスさせ空中で方向転換したり、空中ブランコのように分身同士で協力して滅茶苦茶な動きを可能にする。今また、鬼が数体紙切れに変わった。

「カ、カエデ、順応早すぎるアルよ！私でも二週間はかかったのニ！」

「慣れてくれれば中々快適でゴザルよ。」

「にんにん」

「にゃんにゃん」

「にゅにゅにゅにゅにゅ」

そろそろ分身の現界時間もお終いのようだ。ほぼ全ての鬼や呪術師を倒し、分身たちは一人また一人と霞のように消えていった。

時間にして約一時間。あれだけ居た鬼は皆紙切れへと戻り、呪術師たちも呪符を失い戦意を喪失していた。それはそうだろう、呪符は一枚でも結構な値段である。全財産投じても到底買えない量の呪符を湯水のように使って、全て無駄になったのだ。強硬派の派閥にはそれだけで壊滅しかねない損失となった。

「さテ、言い残す事は無いカ？せめて勝敏には伝言を伝えておくヨ。」

超鈴音の言葉に、呪術師たちは一斉にうなだれた。もう、向こう

は全て知っている。お終いだ。

「お、俺達はただ命令されただけだ、助けてくれ！」

「ふむ…。」

考えるそぶりをする超に、あやかや明日菜は驚いた顔をする。まさか、ここまで滅茶苦茶やる人間を許すのか、と。しかし超はにこやかに言うのだ。

「許そウ。罪を憎んで人を憎まずと言うしネ。」

呪術師たちの顔が、明るくなる。やはり所詮女子中学生、甘すぎる、と。

超の言葉は、その場にいた仲間たちをうろたえさせる。しかし、クーと葉加瀬だけは平然としていた。

「ちゃんと警察行って、罪を償うネ。」

「あ、ああ、約束するよ。」

両手を上げ、戦闘意志が無い事をアピールしながら去って行く呪術師たち。その姿を見ながら、超は手を上げて司令室に居るエヴァンジェリンに合図を送った。

旅館に張られた認識阻害の結界が解ける。数分前に通報を受け駆けつけていた警官たちが、呪術師たちの姿を見つけ出した。

「居たぞ、確保しろ！」

超たちの攻撃によって服をボロボロにされた呪術師たちは、見た目からして変質者である。超はわざとらしく悲鳴をあげた。

「きゃあぁぁぁぁっ！」

同時に、龍宮が遠距離から呪術師たちに銃弾を打ち込む。これは、先ほど司令室に行った時に石田から渡された酩酊弾という魔力で作られた弾。着弾と共に酩酊する魔法が作用し、銃弾自体は消滅してしまうのだ。呪術師たちは皆、千鳥足で逃げる事も出来ずに警察たちに取り押さえられた。

呪術師たちは、集団で覗きをしようとした変質者として逮捕された。嵐山旅館の戦いは、こうして麻帆良ガーディアンエンジェルスの完全勝利で幕を下ろす事となったのである。

「皆、ご苦労様ネ。これで旅館はもう安全に……ん？」

気づくと、皆の目が怒っている。

「超さん、こういう事でしたら最初から言っておいて下さい！」
「そうよ、本気で許しちゃうと思ったじゃない！」

明日菜とあやかがムスッとした顔で言う。

「師匠、流石にこれは師匠が悪いアル。」
「何でも一人で進め過ぎです。もっと周りを信頼して下さい。」

クーと葉加瀬まで。茶々丸とチャチャゼロは、さっさと旅館の中へと帰って行った。
…これは、旗色が悪い。

「わ、分かったアル。私が悪かったヨ、許して欲しイ！」

その時、長瀬のお腹がグゥ…という音を立てた。

「超包子の肉まん、ご馳走するヨ。」

「「「「やったーっ！」」」」

これが狙いだったのか、と苦笑いする超。ついこの間まで戦った事もなかった人間が、初めて実戦を経験して尚この元気である。逞しいにも程がある、と思っていた。

その時、超のすぐ後ろに人影が。

「超、餡蜜は無いのか？」

龍宮だった。

「流石に無いヨ…。」

「クッ…仕方ないな。肉まん3つで我慢しよう。」

「……太るヨ？」

「ウッ……2つでいい。」

なんだかなあ、と脱力して、超は皆の後を追って旅館の中へと帰って行った。

【桜咲刹那】

かつてこの石階段を初めて上った時、私は不安に押しつぶされそうでした。同族から嫌悪され、人の間でも煙たがられていた私は、この地に最後の希望を託していました。そして、木乃香お嬢様と出会い…私は掛け替えのない存在を得て、そしてそれを傷つけられる辛さを味わいました。この階段を失意と共に下りたあの日。私は世界の全てを憎み、木乃香お嬢様の為だけに生きようと決意したのを良く覚えています。

こうして、またこの階段を上る事になるとは、何とも不思議な気持ちです。私は、未だにあの日の自分と長たちを許せないでいる。この非常事態に、こんな事を考えてしまうなんて…未熟なのは相変わらずなようです。

階段を上りきり、やっと本部が見えました。今日はとりあえず、天ヶ崎さんと犬を預けてしまいましょう。私は神楽殿の受付に入っている女性に声をかけると、天ヶ崎さんたちを引き渡します。

「おおきに、刹那さん。ホンマに、迷惑かけてすいません。」

頭を下げて、謝る天ヶ崎さん。私は、彼女を責める気にはなりませんでした。ここに来る途中で、彼女の悲しい生い立ちを聞いてしまったからかもしれません。私は一言、応援してます、と告げました。彼女には、頑張って生きて欲しかった。天ヶ崎さんは優しく微笑むと、やってきた協会の人間に連れられて行きました。少しでも、今の言葉が力になれば良いのですが。

「桜咲さん、今日はこちらでお泊まりですか?長の命で部屋は用意

させていただきましたが。」

そうですね…。そうしましょうか。長への報告の時間を考えたら旅館へ戻るのはだいぶ遅くなってしまいそうですから。

そう受け付けの女性に伝えようとした時…階段の方からたくさんの足音が聞こえてきました。

バタバタバタバタ…！

「て、敵襲ー！斎館北に魔法使いが…！」

！！

反射的に駆け出します！ここにはネギ先生と高畑先生、そして…木乃香お嬢様が居る！

待ってて下さい、お嬢様！

すぐに駆けつけます！

ネギは、大浴場を出ると詠春の待つ書斎へと向かっていた。質問したい事は山ほどあった。父の事？母の事？攻めてくる敵の事？…いや、違う。近衛木乃香の事だ。受け持ちの生徒の問題を放っておいて、自分の事を聞けるワケがない。高畑に止められていても、これだけは聞かなきゃならない事だと決めていた。

書斎の前へとやって来るネギ。詠春と高畑はこの中にいる。大きく深呼吸して、戸を開けた。すると…

「ネギ君、来るんじゃない！」

「タ…タカミチ！？」

そこには、石になった詠春と全身傷だらけの高畑の姿。そして…

「彼が、ネギ・スプリングフィールドかい？」

「ええ、私の可愛い弟よ。」

白髪の少年と、姉、マリ・スプリングフィールドの姿があった。

「マ、マリお姉ちゃん…？何で…」

唖然とするネギ。そこに、白髪の少年が手をかざした。

「危ない、ネギ君！」

『石の息吹』

ボウゥッ！

しろい煙が、ネギを庇った高畑を襲う。高畑は直撃を受け、徐々に身体を石に変えていった。

「タカミチ！？」

「ネギ君…何とか、逃げろ……学園長、に…」

そこまで言って、高畑は完全に石となってしまった。

「なんだ、他愛も無い。大戦の英雄も所詮はただの人か。」

つまらなさそうに言う少年。ため息を一つついて、影の中に沈んで行く。

「後は任せたよ。危険だった人間はもう居ない。後は好きにすればいい。僕は近衛木乃香の方へ行くよ。」

最後に、ネギを一瞥する。

「何故皆、こんな子供に憧れるのかな。理解出来ないね。」

そう言って、完全に影の中に消えた。

「ま、待て！マリお姉ちゃん、何でこんな事するの！？」

困惑するネギを、マリは楽しそうに眺める。これだ、これが見たかった。主人公だからってチヤホヤされるネギが、泣きそうになっている姿。胸くそ悪かった。羨ましく妬ましかった。何もしてない癖に、弱い癖に皆から無条件で好かれるネギ。だからこんな世界なんて壊してしまいたかった。

「アンタさぁ、まぁだ私が姉だなんて思ってるのぉ？馬っ鹿じゃない？」

「何を…何を言ってるの、マリお姉ちゃん…」

ネギの脳裏に、あのアリアの偽物の姿がよぎる。今目の前にいるマリは、もしかして…

「ウフフ、ウフフフフ…フフフフフフフフハハハハハハハハハハハハ！」

それは、狂った人形だった。

瞳孔の無いガラス玉の瞳がくるくると回り、長い舌を出して笑い続けた。その異常な光景に、ネギは恐怖の悲鳴をあげた。

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

両手から、魔法の射手が放たれる。恐怖にかられて加減を忘れたフルパワーの射手は、しかし、マリの張った防壁に全てはじかれた。

「まったく、感謝してよねぇ。こんな狭い部屋でそんなの撃ったらこのオジサンたち粉々よ？」

ネギはその言葉を聞いて、やっと気づいた。石化した高畑たちを殺してしまう所だったのだ。マリは、わざわざネギの攻撃を何も無い壁の方へとはじいていたのだ。

「マ、マリお姉ちゃん、やっぱり…」
「でも、どの道壊すんですけどー♪」

そう言って、その手を高畑にかざす。目を見開くネギ、その顔を見て恍惚の表情を浮かべるマリ。かざされた手がまばゆい光を発し…

ズバッ！

一瞬で斬り落とされた。

「え…？あ、え……？」

何が起きたのか理解出来ないマリ。何故、床に腕が落ちているのか。あれは、誰の腕…か…

「キァアァァァァ！？」

「ネギ先生、下がっていて下さい！」

現れたのは、刹那。すぐさまネギの前に立ち、マリの横の壁向けて技を放つ。

『斬岩剣！』

ドガァァァン！

先ほどネギの壊しかけた書斎の壁を、完全に吹き飛ばした。

「ここは狭い。外で戦います。ネギ先生、今から戦う私の姿、出来れば忘れて下さい。」

刹那はそう言うと動揺するマリを、ぶち抜いた壁の向こうへと蹴りとばす。

「ギャアッ！」

ここは三階。マリはまともに頭が回らないながらも必死に魔法を使って空を飛ぶ。そんなマリを追いかけ、刹那も壁穴から外へと踏み出した。

「刹那さん！？」

慌てて駆け寄るネギ。見上げると…

大きな満月の中に、翼を広げた刹那の姿があった。

第三十五話　さよならの魔法

嵐山旅館の司令室となった部屋には、本来であれば長いテーブルがつなぎ合わされ、椅子がたくさん並んでいる。が、今はそれも端に追いやられており、二人用の大きな布団がしかれている。中には二人、エヴァンジェリンとアリアが同衾していた。

「…どうして、こうなった。」

「お前が危なっかしくて見ていられんから、目の届く所に置いたんだ。とりあえず眠れなくても大人しくしていろ！」

「むう…」

しっかりと腕まで組まれては逃げる事も出来ず、アリアは諦めて天井を見つめた。

何だかこの数日間、まるでジェットコースターのように乗っていたかのような目まぐるしさで自身の環境が変わってきている。

人形だった。

生きる為のエネルギーが不足していた。

呪術師に狙われていた。

おかしな力に目覚めた。

…やけに元気にされた。

「な、なんだその目は。そんなに一緒に寝るのが嫌か？」

上目づかいでこちらを見るエヴァンジェリンに、アリアは微笑みかける。

「いいえ。たまにはこういうのも、良いかもしれないって思いまし

た。」

そう言うと、エヴァンジェリンも安心したような顔をして笑った。

そうだろう、そうだろう。何せ闇の福音と同衾できるのだからな、

と満足そうにつぶやく。そんなエヴァンジェリンを眺めていると…

『プルルルルル…』

アリアの携帯電話が鳴った。

「なんだ、一体。何時だと思ってる…」

「待って、ネギからだわ。」

普段なら寝ている時間帯。緊急の用に違いない、と通話ボタンを押す。スピーカーの向こうから、切羽詰まったネギの声が聞こえてきた。

『お姉ちゃん!?あの、今本部が大変なんです!』

「ど、どうしたの、ネギ!落ち着いて話しなさい!」

「えっと、あの、マリお姉ちゃんの腕が落ちて、長とタカミチが石になって、刹那さんが空を飛んでます!」

これで全てを理解出来るアリアは優秀である。原作知識を持っている事を差し引いても、頭の回転は非常に早いと言える。

「分かった、すぐ行くわ。ネギは自分を守る事だけを考えなさい!」

通話を切る。すぐさまエヴァンジェリンの方へ向いて言った。

「ネギ達が襲われました。高畑先生がやられたそうです。」

「何!?」
信じられない、という表情のエヴァンジェリン。高畑は世界でも有数の実力者だ。呪術師程度に後れをとる事はないハズだが…
「本部を知ってるのは木乃実さんですよね。寝てたら可哀想ですけど、道案内して貰いましょうか。」
「お、おいまさかアリア、本部へ行くつもりか!?」
「ええ。高畑先生は石にされたようですから、解呪に向かいます。」
その言葉に思わずカッとなるエヴァンジェリンだが、アリアの真剣な目を見て諦めた。この目は、もう決意してしまっている。止めても、無駄だろう。ならば、どうするか。…決まっている。
「ええい、私も行く!いいか、絶対無茶はさせないからな!戦うのは私だ!」
「はい、そう言ってくれると思ってました。」
ニコッと笑うアリア。
エヴァンジェリンは、黒い外套を身に纏いながら心の中でつぶやいた。
(アリアの家族に手を出す奴は、私の敵だ。タカミチも弟子だからな…。私のものに手を出すという事がどういう事なのか、その身に教えてやろうじゃないか。)

「『斬空閃』！」

刹那の放つ剣撃を、マリは必死にかわし続ける。勝敏の寵愛を受けていたマリは、他の人形たちよりも高い能力を得ていた。高い抗魔力に俊敏性、無限に近いスタミナ、相手の精神を攻撃できる魔眼。全ての道具を使いこなす事の出来る能力まで持っていた。しかし、そうした能力を持ちながらもマリは刹那に圧倒されている。

「あ、あんた何者よ！こんなに強いなんて、おかしいじゃない！」

「私が強いのではなく、貴様が弱いのだろう。」

言いながら、空中を旋回し無数の真空波を繰り出す。その一つが、まりの足を直撃した。

バキッ！

「キァアァ！？」

膝下のパーツが破壊され、地上に落下する。

「あ、ああ、私の足が…。あの足で、アーニャを踏みつけてあげる予定だったのに…。」

「安心しろ、この場でお前はバラバラになる。予定とやらは未定で終わるのだからな。」

「この、クソアマァッ！」

キレたマリは無詠唱の魔法の射手を連発する。魔力量だけならネ

ギを上回るマリ。さすがに後退を余儀なくされた刹那は、迫り来る矢を刀ではじきながら避け続けた。

「ほらほらほらほらあっ！さっさと墜ちなさいよ、デコチビがぁ！」

「くっ…」

益々勢いを増す魔法。放たれた矢は既に百本を超えていた。このままでは、さすがにヤバい。高速で刀を振るいながら、刹那は必死に打開策を考える。その時、一筋の光が目の端に映った。

ズガアァァンッ！

「ギャアァァッ！？」

マリが叫ぶ。脇腹が抉れ、青い液体がこぼれ落ちた。悔しそうに、魔法の放たれた方向を睨みつける。

「ネェギイィィ…！」

そこには杖に跨がるネギの姿があった。

「刹那さん、僕はもう大丈夫です。ここは任せて木乃香さんのもとへ向かって下さい！」

「ネ、ネギ先生？」

先ほどの姿を見ていたら任せられないのだが…

「お願いします、僕を信じて木乃香さんのもとへ！タカミチや詠春さんを石にした人の目的は木乃香さんのようです！」

「……っ！」

刹那の顔色が変わる。

「分かりました、無理なさらないで下さい。」

ネギが頷くと、刹那はそのまま飛び去って行った。

「フ、フフフフ、あんた、私を倒す気?さっき惨めに喚いてたあんたが?アハハハハハハ!」

「はい。あなたがマリお姉ちゃんじゃないと確信できたからです。マリお姉ちゃんは意地悪で悪戯好きで何度もからかわれてたけど…あなたみたいな酷い事はしませんでした。」

マリは笑う。コイツは何も分かってないんだな。確かに自分はコイツの知ってるマリではない。だが、私は私だ。何度死のうと、何度身体が代わろうと、私がマリである事に変わりはない。

「で、どうする訳?」

「退いてはくれないんですね?」

「勿論。当然でしょ?」

クスクスと笑う。

ネギは、覚悟を決めて詠唱に入る。マリはそれを楽しそうに眺めた。どんな魔法を使おうが、自分には中級以下の魔法は通じない。そして、ネギのこの時点の最強の魔法は中級魔法の『白い雷』のハズだ。

「幻想より出でし偽りの御霊、生命の樹に寄りてあるべき姿に還れ…」

マリの顔に、戸惑いの色が。なんだ、この呪文は…？

「紡がれし言葉に従い、虚無は虚無に、夢は夢に…」

「ちょっ…」

マリが止めようとするが、もう遅い。ネギは左手をマリへと突き出すと、目を見開いて叫んだ。

『幻想への帰還』

光が、マリを照らす。

まばゆく、全てをかき消すような強い光。その中で、マリは身体から力が抜けてゆくのを感じた。

「な、なによコレ！？ちょっと、ネギ、やめなさい！」

腕が、足が、頭が…次第に動かなくなってゆく。マリは、その感覚を知っている。これは…死ぬ時の感覚だ。

（い、いや、いや、いやあぁぁぁぁぁっ！）

もはや動かない口を震わせながら、目で救いを求めるマリ。そんなマリを、ネギは悲しそうに見つめていた。

「さよなら、マリお姉ちゃんに似た誰か。今度は、普通に生まれてきて下さい。」

人形は、最後に一筋の涙を流して光の中へと消えて行った。

「兄さん達を憎んだ時に覚えた古代魔法…一生使いたくはなかった

です。」

そう言ってから、ネギは刹那の飛んでいった方向へと目を向ける。まだ、敵はいる。自分を庇って石になってしまった高畑や、詠春を救うためにも、こんな所で立ち止まってはいられない。ネギは杖に魔力を込めると、夜の空を猛スピードで飛んで行った。

白髪の少年、フェイト・アーウェルンクスは今回の作戦に乗り気ではなかった。自分の目的に、関係の無い戦い。協力関係にある、異世界の神の頼みとは言えつまらない仕事はしたくなかった。

『ここでリョウメンスクナのエネルギーが手に入れられれば、お前の主人を救い出してやれるかも知れんぞ?』

そんな戯れ言を信じたわけでは無かったが、行き詰まっていたのも確かだった。が、実際それに賭けてみたらコレだ。生け贄は魔力が足りない、実際封印されているリョウメンスクナも、それほど高い霊力を持っているわけでは無い。そして…今は屋敷のはずれで、こんな奴らと遊んでいる。

『斬岩剣!』

鶴子の攻撃が、フェイトの頬をかすめる。しかし、傷は少しもついていない。

「つぁあああああっ!」

木乃香の攻撃も、空を飛んでかわす。飛べない二人は、遠距離攻撃に頼らざるを得ない。しかし、それでは軽々とかわされてしまう。

「木乃香…と言ったね。君には、その能力は勿体無いようだ。無駄に死を重ね過ぎた。」

「なっ…!?」

木乃香が驚愕の表情を浮かべる。コイツは、自分の体質を知っている。何者だ?

「君は知らないようだけど…。その能力は十二回、死からの再生を可能にするようだ。そして既に君は十二回死んでいる。もう少し、自分を大切にした方がいい。まぁもっとも、君がここで死ぬのは変わらないけどね。」

フェイトはそう言うと、周囲に霧のような物を発生させる。

「な、なんや、これは!?木乃香はん、気を…つ……け……」

ドサッと、その場に倒れる鶴子。眠っている。

「グッ……睡眠の魔法……?」

朦朧とする意識。ヤバい。

「君は睡眠薬には耐性あるけど睡眠魔法は初めてだろう。そして…石化も経験した事無いハズだ。」 もはや、その言葉は木乃香には届いていなかった。倒れまい、と必死に踏ん張って…立ったまま、意識を失っていた。強力な、睡眠魔法。一度かかってしまえば、まる1日は眠ったままになる。どんな大きな音を立てようが、聞こえるわけがない。

しかし…木乃香は、誰かの声を聞いたような気がした。重い目蓋を、必死に開けようとする。何度も意識を失いかけながら、その声に応えようとした。

だが、それまでだった。

『石の息吹』

白い煙に包まれる。固まって行く身体、また薄れ行く意識。

「このちゃあぁぁぁぁぁんっ！」

一番聞きたかった人の声を聞きながら、木乃香は意識を失っていった。ごめんな、せっちゃん。また、悲しませてしもた…。そんな言葉を、最後につぶやいて。

【石田留美】

打ち上げの肉まんパーティーも終わり、やっと皆も寝静まってくれた深夜一時。超さんと二人で後片付けをしていると、超さんが不思議な事を言っていました。

「あー、あの能力も強化に使えたのカ。勿体無い事したかナ。」

は?なんの事か分からず聞いてみると、超さんは妙な事を考えていました。

先の戦いで、マスターからもらった能力のうち、強靭な肉体を得

る『川神ボディ』という能力はストックが無くなってしまったそうです。よって、今まで介入者から奪い取った能力で味方を強化するしかないらしいのですが…。いや、なんですか、その『目覚めスッキリ』って。

「いや、初めの頃に奪った能力ネ。寝起きが良くなる能力ヨ。」

ふざけた能力ですね。朝くらいチート能力に頼らずに起きたらどうですか。

「いやいや、それだけじゃ無いネ。魔法や薬で強制的に眠らされた後に誰かに起こされるト、ランダムでパラメーターの一つがマックスになる能力だヨ。」

うーん…。眠らされたらその時点でアウトな気もしますが。

「だからラ、使い道が無くテ放っておいたんだガ…戦闘前なら充分強化になるかナ、と。まぁ、スポーツの技だから大した効果は期待出来ないけどネ。」

スポーツ？一体どういうスポーツですか、眠らせるって。しかし、その能力は今ありますか？試しにストック覗いてみたらありませんでしたが。

「ああ、修学旅行前に木乃香にあげたヨ。旅行先が京都に決まってからラ、寝不足続きみたいだったからラ。」

あー…そうでしょうね。彼女、根は繊細っぽいですし。私も、その能力欲しかったですよ。少なくとも、朝寝起きが良くなるならそれだけでいいです。

「ム？朝、弱いのカ？」

いいえ。ただ、何処かの誰かさんが口ばかり動かして手を動かさないので片付けが遅れて睡眠時間が確保出来ないかもしれないので。

「わ、悪かったネ。急いでやるヨ！」

フフフ、慌てる超さんはチャーミングですね。私はそんな超さんを見て楽しみながら、ここには居ない木乃香さんの事を思いました。頑張って下さい、木乃香さん。あんなヤツらに負けるアナタではないハズです。

第三十六話　天翔ける乙女たち

刹那は、目の前の光景を信じたくなかった。現実のものとして受け止めたくなかった。
木乃香お嬢様が、石にされている。隣で倒れているのは師範代だ。師範代も、石に。

「遅かったね。あの程度の出来損ないに時間をかけるようじゃ僕は倒せない。」

「貴様…」
仲間に出来損ないという言葉をかけるその態度に怒りを感じる。しかし、それ以上に冷たく乾いた視線に反吐が出そうだった。

「まあ、安心するといい。僕の仕事はこれまでだからね。いや、違うか…。近衛木乃香は石化じゃ駄目なんだ。…殺さないと。」

「なっ…貴様ぁああ！」
刹那は翼を広げて、フェイトに向かって飛行する。急げ、急げ、奴がお嬢様を傷つける前に！

その時、刹那とフェイトの目が合った。無表情な、死んだ魚のような目が…少し喜びの色を帯びたような気がした。

「やめろおぉおぉおぉっ！」

ガシャアァアンッ…

かざされた手が、光った。

木乃香の石像が、くだけた。

周囲に破片と粉塵を撒き散らして、木乃香の姿は無くなった。

刹那の顔が絶望に彩られる。このちゃんが…このちゃんが…

しかしその時、フェイトでさえ予想だにしなかった奇跡が起こる。

一陣の風に煽られ、舞い散った塵が吹き飛ばされると…

そこには、下着姿の木乃香が立っていた。

「な、何だと!?」

初めて焦りの表情を見せるフェイト。すでに命のストックはゼロのハズなのに…。急いで、神から授かった解析能力で木乃香の能力を解析すると…

十二の試練…９９９９／１２

「な…なんだコレは!?」

バグっていた。

当の木乃香も、突然身体に力が漲ってきて混乱している。何故こんなに身体に力が充満しているのか。そして、何故…

「いやーん、なんやのコレェ！？」
何故下着姿なのか。
「このちゃあぁぁぁん！」
そこに飛んできたのは刹那だ。木乃香が生きていた！良かった、失わずにすんだ。また笑顔が見れる！また一緒にいられる！
「お嬢様、下がっていて下さい。今この変質者を撃退してみせます！」
そう言うと、刹那は翼で木乃香の姿を隠す。
「お嬢様の素肌は見せません！嫁入り前の女性に恥をかかせた事、後悔するがいい！」
微妙にズレている。
「滅茶苦茶だな。」
やれやれ、と呆れるフェイト。それは刹那のリアクションと木乃香の復活の両方だ。石化は服だけだった。そんなワケがないのだ。確実に全身を石化したハズだった。それなのに、まるで何事もなかったかのように立っている。
「まあ、いいさ。どの道君たちには僕に決定打は当てられない。」
自信満々に言うフェイトに憤る刹那。木乃香は、そんな刹那に声をかける。
「せっちゃん、羽生えとるけど、飛べるん？」
「ハッ…お嬢様、これは…」
今更気づく刹那。今まで秘密にしていた自分の正体をさらしてし

まっていた。一族の掟では、正体がバレたなら姿を消さなければならない。自分はなんて事を…そう思って青ざめていると、木乃香は意外な事を言った。

「せっちゃん。飛べるんやったら、ウチの翼になってくれるか。」

…は？

刹那は固まる。

「ええか、あの白髪のお化け、なんや知らんけどウチの攻撃を嫌がって空に逃げるんよ。せっちゃんがウチの事抱えて飛べたら、攻撃が届くかもしらん。」

抱えて飛ぶ？あれ、怖がってない…。それどころか、なんか凄い事言われたような。

せっちゃん、ウチの翼になって…

私が、お嬢様の、翼に？

お嬢様のそばに…

お嬢様の一部に…

「お嬢様と一つにぃいいいっ！？」

「そこまでは言うてない。」

笑う木乃香。そして、気を物質化した刀を手にフェイトへ切っ先を向ける。

「今度は、こっちの番や。覚悟しいや？」

「いいだろう、付き合ってあげるよ。」

冷たい火花が散る。
木乃香の手にした刀がまばゆい光を放った。そして…

「つぁあああぁぁっ！」
光の刃を放つ。

ガアァァァンッ！
フェイトのいた場所に大きな穴が空く。フェイト自身は空へと舞って難を逃れていた。

「せっちゃん、いけるか？」

「任せて下さい！」
後ろから木乃香のお腹に手を回し、しっかりと抱きしめる。翼を力強く羽ばたかせると、二人は夜空へと飛び立っていった。

その頃。近衛邸裏手にある湖の一角にある施設の地下室で、今回の騒動を引き起こした男、田崎勝敏は怒りにうち震えていた。

「何故、未だにフェイトが戻らないんだ！封印を解くにはあの娘の魂も必要だというのに！」

そう言ってから、勝敏は生贄の儀式に使う台の上を見る。そこには、石化した月詠と、全身に打撲を負った木乃葉が縛り付けられて

いた。

「お前が協力すればこんな面倒な事にはならなかったんだ！実力も魔力も頭も中途半端な出来損ないが！」

その言葉を聞いて、木乃葉は笑った。

「何がおかしい！」

パキッと木乃葉の顔を殴りつける。青黒く変色した木乃葉の顔から、血が流れる。

「は…ははは、笑えるよ…。神様言うて、こんな小娘相手に、ムキになっとるんやから…ははははは…」

木乃葉は、勝敏の言いなりにはならなかった。木乃香の足を引っ張りたくなかったのだ。自分は確かに転生者だ。物語には登場しない余所者。けど、こんな最悪な人間だけど、自分は木乃香の姉なのだ。姉として、妹の為に頑張るのは、当たり前じゃないか。

「アンタは、神様なんかやない。こんなんが神様なら、ウチは悪魔を信じるわ。」

「なんだと、このガキがぁぁっ！」

繰り出される拳は、加減などしていない。迫り来る拳を見つめながら、木乃葉は死を覚悟した。姉らしい事、少しくらいしてあげたかったな。それだけが、心残りだった。

ガシッ

拳が、止まる。手首を、誰かに掴まれた。

「だ、誰だ！」

驚いて振り向く勝敏。ガマガエルのような奇妙な顔から、油汗を流す。

男は、掴んでいた腕を握りつぶした。

バキバキバキ…ッ

「ぎゃあああぁぁぁぁっ！？」

手を放すと、勝敏は床に転がって叫ぶ。潰された腕は、グニャグニャになっている。男はつまらなさそうにそれを壁に蹴り飛ばした。

「よくここまで我慢したな。さっきの台詞、なかなか素晴らしかった。一編の詩のようだ。」

木乃葉は、男を見上げる。どこかで見た事があるような気がする。何かの漫画だったような…。

「近衛木乃葉。君は、悪魔を信じると言ったな。その言葉…偽りはないか？」

男は、木乃葉を縛り付けていた縄や足枷を外しながら言った。その言葉に、異様な神々しさを感じながら木乃葉は頷く。

「うちは、本気や。あんなけったくそ悪い神様なんて願い下げや。悪魔の方がありがたく思えてくるやろ。」

男は、嬉しそうに頷くと満面の笑みで言った。

「私の名は、芦優太郎。近衛木乃葉、君を助けに来た。」

芦優太郎？芦？
あしゆうたろう…

！！

「アシュタロスーーーッ！？」

地下室に、木乃葉の絶叫が響き渡った。

夜空を飛ぶ三つの影は、尋常ではない速さを保ちながら近衛邸へと向かっていた。飛んでいるのは、エヴァンジェリン。木乃実を抱えた茶々丸。そしてアリアである。

「まったく、何なんだそのビー玉は。そんな物で空を飛ぶなんて、ムチャクチャだな。」

呆れるエヴァンジェリンを後目に、アリアはご機嫌で空を飛ぶ。ピーターパンに憧れて、何度ウェンディになって連れ去って貰いたいと思った事か。その夢が、今叶っているのだ。

「エヴァさんが信じてくれたら、空だって飛べるさぁー…なんて。」

「まるで信じられないから言ってるんだがな。」

むむ、ルパンを知らないな、とアリアは眉をひそめる。すぐに分かれというのも無茶な話だ。

「この先です。おそらく向かって右手の斎館が襲撃を受けたと思われます。」
木乃実が、上空から建物を指差した。眼下に見えてきた建物、そして、正に今戦っている真っ最中の白髪の少年と翼を持った少女たちを見つける。

「む、なんだアイツは！」

「刹那さんに…木乃香さん！エヴァさん、救援に向かって下さい！私達は高畑先生たちの解呪に向かいます！」

「お、おい！くっ…仕方ない、言う通りにしてやる！」
真剣なアリアの頼みである。断れなかった。
エヴァンジェリンはターゲットの白髪の白髪に向かって急降下する。アリアと茶々丸、木乃実は斎館へと向かった。

刹那は木乃香の身体を抱えながら、何て軽いんだろうと戸惑っていた。
無駄な贅肉を削ぎ落としたかのような細身の身体。高速の剣撃を放つ度に躍動する筋肉。けして太くないのに、不思議であった。
刹那は、知らない。木乃香が、魔力と気を同時に操り身体強化をしているという事を。そして、何よりフェイトが魔力を帯びた攻撃を嫌がっているという事を…。

相手の石化魔法を全て無効化し、木乃香は凶悪なまでに巨大なカマイタチを発生させて攻撃をする。フェイトは露骨に嫌がって、必死に飛び回っていた。

「あたらん…ごめん、このちゃん。ウチがグズやから…」

「何言うてん、完全にこっちのペースやえ。当たらんのはウチも悪いし。」

そんな会話をしていると、どこかからキーン、という奇妙な音が聞こえて来た。これは、何の音だろう？

「退け、木乃香、刹那！」

はじかれたように飛び退く二人。二人がいた空間を貫くように、一人の吸血鬼が闇を切り裂いた。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　魔法の射手　連弾・闇の２９矢！！」

繰り出される魔法の矢は、まるでホーミング・レーザーのようにフェイトを追い立てる。刹那たちとの戦いでかなりスタミナを失っていたフェイトは、なりふり構わず逃げ惑っていた。

「フハハハハハッ！逃げろ逃げろ、惨めな羽虫のようになあっ！」

「クッ、ハイ・デイライト・ウォーカーか…。分が悪いな…。」

次々と繰り出される矢を避けながら、考える。どうにも勝てる要素が見つからない。ここは、ひとまず退却するか、と。

その時、フェイトにとって予想外の人物が現れる。
矢を避けきって一息ついた瞬間、恐ろしい速さで接近してきた一人の少年。その手から放たれた光が、フェイトの腕をかすめる。

『幻想への帰還』

バシュウゥゥ…！
フェイトの腕から、煙のようなものが立ち上った。

「ゥワアァァア！？」
初めて見せる、恐怖の表情。エヴァンジェリンや刹那、木乃香も驚いていた。

そこにいたのは、ネギ。奇襲とはいえ、今まで誰も攻撃を当てられなかった相手に、初めて有効打を与える事が出来たのだ。

「行きます、『風雷の射手１５矢』！！」

間髪入れずに、ネギは魔法を放つ。奇襲に、全力攻撃。きっと、さっきまでの空中戦を隠れて見ていたのだろう。タイミングを見計らい、奇襲攻撃を仕掛けるつもりだったのだ。

エヴァンジェリンは、ネギの姿にゾクゾクとした何かを感じた。コイツは、弱い。弱い事を知っている。そして、弱いなりに力を最大限に発揮する方法を知っている。使い魔を消滅させる古代魔法を使えるくらいに、魔法知識にも貪欲だ。そして…何より、卑怯。それを、恥じる素振りも見せない。

（おいアリア、お前はどういう教育をしたんだ。何故、弱い癖にこうまで奴の面影を感じる？）

ネギを見つめるその瞳に、熱っぽいものが宿っていた。

「ぐっ、ネギ・スプリングフィールド…そんなに死にたいのかい？」

「いえ。ですから、一旦逃げます。」

「…は？」

言ってる事が分からず、混乱するフェイト。迷わず離脱するネギに呆気にとられていると、頭上から誰かの声が聞こえてきた。

「こっからは、ウチらや！」

「このちゃん、行くえっ！」

次の瞬間、刹那が木乃香をフェイトに向かって投げつけた。

「なっ！？」

木乃香は空中で回転しながら、両手を光らせる。網の目のような剣撃がフェイトに放たれた。

「くっ…食らわないよ！」

ギリギリ避けるフェイト。落下する木乃香は、いつの間にか下で待機していたネギに拾われ無事だった。

「次は私です！『斬空閃』！」

ガァンッ！

「ぐっ、ぐうぅ…っ！」

木乃香に気をとられたフェイトに、この日二回目の有効打が入る。

「ネギ君、踏ん張ってや！」

「はいっ！」

空中で、魔力全開でホバリングするネギ。ネギの杖を足場にして木乃香はフェイトに向かって跳躍する。先ほどからフェイトが攻撃出来ないのは、元々殆どの魔法が効かない木乃香が、石化耐性をも身につけてしまったからだ。ネギと刹那の間を行き来する木乃香。木乃香が、両者の盾代わりにもなっていた。

「つぁあああぁっ！」

今度は、気の刀による攻撃。バランスを崩しながら避ける。そこへ…

ニコッと笑ったネギが迫っていた。

「じゃあ、僕らも試合再開です。」

手には、先ほどの古代魔法の光が。

「き…君だけは殺すっ！」

柄にもなく、フェイトは叫んだ。

第三十七話　芦優太郎は戻れない

アリアの文珠が、光を放つ。
文珠は、込められた力の他に、イメージによってその威力と効果を変化させる。アリアは元々授かっていた『解析』能力で石化の状態とかけられた魔法を特定して、『理解』スキルによってその仕組みを理解した。後は具体的な回復の手順をイメージしながら文珠を発動させれば、石化状態は治療できる。今やアリアは病や呪いに関する事なら何でも解決出来るエキスパートとなっていた。

「文珠…。アリア先生も、転生者だったんですか。」

「ええ。こう見えて三十路よ？お酒だって飲めるんだから。」
木乃実の言葉に、冗談で返すアリア。もう、吹っ切れたようだ。
自分が人形である事も、もしかしたらコピーかもしれないという事も。悩んだって、どうにかなるものではない、なら悩むのはやめよう。そう考えていた。

ニコニコ笑うアリアに、木乃実もつられて笑う。この状況で冗談を言える精神的な強さが、羨ましかった。

文珠によって石化状態から回復した二人は、硬直する身体を揉みほぐしながらアリアたちを見た。

「君はネギ君の姉、ですか…。助けてくれてありがとうございます。木乃実も、無事で良かった。」

語りかける詠春。その言葉を聞いて、高畑は詠春が木乃香の変装を見破っていた事を知る。やはり、親子なのだ。すぐに分かったの

だろう。

「父様、姉はリョウメンスクナの封印を解く生け贄にされようとしています。早く救出に行きましょう！」

木乃実がそう言うと詠春も頷いた。

「木乃実はここに居なさい。高畑君、済まないが木乃実を頼みます。」

「え、詠春さん！僕も行きます！」

高畑が言うが、詠春は首を振った。

「私の居ない時にここを狙われたらお終いです。しばらく私の代わりにここをお願いします。」

その言葉に、引き下がるしかない高畑。これでは、なんの為に強くなったのか分からない！憤りを覚えるも、なんとか堪えた。

「…君は……。」

「アリア・スプリングフィールドと申します。私はここにいましょうか？」

詠春は悩む。石化を回復させる能力は心強いが、まだ子供。やはり戦場に立たせたくはない。

「そうですね。ここで、待っていて下さい。」

「分かりました。」

アリアが答えると、詠春は満足そうに頷いてから部屋を出て行った。

部屋には心配そうな木乃実と、何やら暗い顔の高畑。なんだか空気が重い。アリアは仕方ないなぁ、と思いながら辺りを見回した。

…汚い。壁も壊れて、ぐしゃぐしゃだった。

ふむ。

「では皆さん、これから掃除をしましょう！」

「「は？」」

ポカンとする二人。

「だって、汚いじゃないですか。三人もいてここでボーっとしてるのもバカみたいですし、やる事無いなら掃除でもしましょう。」

「いや、別に今やらなくても…」

高畑の言葉にアリアが怒った。

「簡単に襲撃を許して石にされた人が文句を言うんじゃありません！グチグチ言ってるなら石に戻しますよ！」

「す、すまない！」

あまりの気迫に驚く高畑。何故か、逆らえないオーラを発していた。

結局、その後木乃実と高畑はアリアの指導のもと、部屋掃除に勤しむ事となった。

「クッ…来るな！」

「待って下さい！話は終わっていません！」

身体中に、『幻想への帰還』の魔法を纏ったネギがフェイトを追い立てている。刹那と木乃香の二人も、フェイトに攻撃を加えて反撃の機会を与えない。ではエヴァンジェリンはどうしているかと言うと。

「あの…なんでそんなにくっ付いてるんですか？」

「別にいいだろう？なんとなくだ、なんとなく。」

ネギの杖に一緒に乗っていた。後ろから、ピッタリくっつきながら。

「私が杖に魔力を送って制御しているから、お前も魔法を展開し続けられるんだ。少しくらい堪能させろ。」

「はぁ…。」

胸やら腹をまさぐられながらも、ネギはフェイトを睨みつける。耳元でエヴァンジェリンの息が荒くなって行くのが何とも怖かった。

「う…このちゃん見て。あれ、うらやましい…。」

「いや、せっちゃん、敵に集中して。あんなんやったら帰ってから

いくらでも出来るやん。」

「ハッ！分かりました、速攻で滅殺してやりましょう！」

「……。」

何故か知らないが、刹那のパワーが異様に上がってゆく。彼女は何も強化されていない、原作キャラのハズなのだが、膨れ上がった気がまるで太陽のような輝きを放った。

「先生どいて！そいつ殺せない！」

「「はいぃいい！？」」

慌てて回避するネギとエヴァンジェリン。そりゃビカビカ光る鳥人間コンテスト二人羽織りが突っ込んで来たら怖いのだ。

「愛の為に死ねえぇえぇえっ！」

「せっちゃん怖いいぃいぃっ！？」

半泣きになりながらも、木乃香は刀を振るった。斬撃はフェイトの足に直撃し、フェイトは空中で錐揉み回転をしながら落ちて行く。

「い、いけない！エヴァンジェリンさん、彼の所へ！」

「は？まさか助ける気か！？」

「彼に石化を解除させないと！僕らではタカミチ達を助けられません！」

「ちっ！仕方ない、行くぞ！」

エヴァンジェリンの制御のもと、ネギは猛スピードでフェイトへと接近する。見ると、フェイトは湖に墜落しようとしていた。

「捕まって！」

ネギの差し出した手を、反射的に掴むフェイト。すると…

バシュウウウウッ！

手から煙が。

「「あ…」」

「こ…殺す！」

フェイトはそのまま湖へと叩きつけられ、沈んで行った…。

「あ、あ、あほがあぁぁぁっ！」

「ごめんなさぁいっっっ！」

「先生、見事です。そこまで卑劣な攻撃、見たことありません。」

「せっちゃん、誉めるとこちゃうよ？」

あんまりな展開。ネギは泣きそうになりながらフェイトの落ちた水面を見る。上がってくる気配はなかった。

「どうしよう、死んじゃったよね…」

「ん？いや、アレでは死なないだろう。その魔法が効いたという事は奴は人形だ。沈んで行く時、転移するのも見えたから逃げたんだろう。」

エヴァンジェリンには、フェイトが水中で転移するのが見えていた。最後の捨てセリフの事を考えると、奴は必ず復讐に来るだろう…それまでに、ネギを鍛えなければ。エヴァンジェリンはネギの身体に指を這わせながら、そう考えていた。

四人が湖の上で困惑していた、その時。湖のほとりに駆けつけた一人の人物があった。

「木乃…実！ネギ君！大丈夫ですか！？」

それは、詠春だった。

「お、長！」

反射的に刹那は長のもとへ飛んで行く。ネギ達も、その後に続いた。

詠春の無事に喜ぶネギ。石化はアリアが解除したという。

「お姉ちゃんが？」

「はい。今は、高畑君と一緒に斎館にいますよ。」

ネギの顔が明るくなった。石化が解けた…お姉ちゃんもいる！これで心配事は無くなった。…いや、まだだ。

「後は、木乃葉さんの救出ですね。」

ネギの言葉に頷く詠春。相手は田崎勝敏。危険な男だ。今まで、数々の穏健派を脅して配下につけたり殺してきた人間。さらわれた木乃実が無事だったのは奇跡に近い。木乃葉は…殺されているだろう。行方不明となっている月詠も、恐らく…。

「あの…お父様。石化を解除する術はあるのですね？それでしたら、別館の方に鶴子さんが石にされてます。助けてあげられないでしょうか。」

声をかけたのは木乃香だ。自分と一緒に戦って石にされた鶴子を、助けてあげたかった。

「分かりました、すぐにアリアさんに頼んで来ましょう。」

「あ、それなら僕が知らせに行きます！」

ネギが手をあげる。早く姉に会いたいのだ。それを察した詠春は、

「お願いします」とネギに頼む。喜びいさんで飛んで行くネギ。その姿は、年相応の子供の姿だった。

「エヴァ…わざわざ助けに来てくれてありがとう。」

「気にするな。お前とタカミチがやられるなど、滅多にない事だからな。面白半分、冷やかし半分で来ただけだ。」

つまり嘲け笑いに来ただけとエヴァンジェリンは笑う。参ったな、と頭を掻く詠春。場の空気が和んできたその時、それは起きた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

地震のような揺れが、突然襲ってきた。湖の水面が揺れ、波立っ

て行く。眠っていた鳥たちも、驚いて逃げ惑う。

「これは、まさか！」　詠春は細い目を見開いて、湖対岸にある建物を睨みつけた。光の柱が、天へと伸びている。

「おい、何だと言うんだ！？」

「リョウメンスクナです！リョウメンスクナの封印が、解けたんです！」

遅かった…

勝敏め、貴様、なんて事を…

唇を噛み締めながら、詠春は刀に手をかける。今回はナギがいない。自分が、なんとかせねば。闘気を剥き出しにして、詠春はスクナを迎え撃つ態勢に入った。

施設の地下では、芦優太郎が木乃葉と月詠の治療に当たっていた。石化の解けた月詠は、身体の筋肉を揉みほぐしている。木乃葉の怪我は思いのほか酷く、芦優太郎は丁寧に怪我を治していた。

「顔はこれで元通りだ。いや、前より美しいかもしれんな。」

「な、なんなん、それ。こんな美容整形嫌や。殴って治しますとか。」

「ははは、そうではない。誘惑に打ち勝つ心の美しさが、表に現れているだけだろう。」

さらりと凄い事を言う芦に、木乃葉はくらりと来る。顔を真っ赤にして、照れていた。

「ホンマに…アシュタロスなん？どこかのホストクラブの兄さんちゃうの？」

「私は私を信じて敬う者を、大切にしているだけだ。さあ、お嬢さん。次は背中の傷を治そう。服に手をかけるのを、許してくれるか？」

ああ、もう全部治して欲しい…。熱っぽい眼差しで芦を見つめる木乃葉。その視界の端で、不穏な動きをする影を見た。

「あんた、何する気や！」

慌てて声をかける木乃葉。そこには、身体中に出来たヒビから光を漏らす勝敏がいた。

『ク…クハハハハ！まさかアシュタロス本人がたまごの中に入ってくるとはな！』

その声は、木乃葉の知るあの神の声だった。

『さすがあの女、何百年と孤独に狂っただけある！転生者だけでなく魔神まで呼び寄せるとはな！』

「…何を言っている？」

芦の声に殺気が宿る。下級の神族ごときが何を偉そうに…。いい所を邪魔しやがって、と思っていた。

『分からんだろうなあ、アシュタロス！お前は転生者を集めたつもりかもしれんが、そう仕向けたのは我々よ！お前も、あの人形共も、手のひらの上で踊っているに過ぎんのだ！』

ふむ…。

アシュタロスは少し考えてから、おもむろに勝敏の頭をつかんだ。

『なっ…何を！？』

「いや、中を見せてもらおうかと思ってな。ふむふむ…」

『ぎゃあああ！？やめろ、やめろ！手がめり込んで…』

グシャアッ！

次の瞬間、勝敏の頭が握りつぶされた。

「この外道が…。理由をつけてやってる事は魔族より残虐とはな。」

その表情は憤怒に彩られていた。

石化の解けた月詠は、ただ混乱していた。自分は、ただ西洋魔法使いの撃退の仕事を頼まれただけ。直前になって敵が木乃香だと分かって、断ったら石にされた。石から戻ってみたら、これである。わけが分からない。

しかし、月詠は分からないながらも目の前の出来事を必死で観察して理解しようとしていた。その時。

勝敏の身体から、光の帯が奥の部屋へと伸びてゆくのが見えた。

「な、なんなんですか、木乃葉さん。アレ、もしかして封印の部屋

と違うやろか…」

「え…。あ、アカン！アシュタロス様、ガマガエルの霊気で封印解けてまう！」

「何！？…そうか、自分の魂を使って蘇らせる気だな！そのまま乗っ取るつもりか！」

舌打ちをする芦。マズい。リョウメンスクナは力だけなら中級神族に近いレベルにある。融合されたら、この世界で勝てる存在は自分だけになる。今ここで表舞台に出てしまっては、奴らの思うツボだ。

「仕方ない！近衛木乃葉、月詠。今から私の力を分け与える。この世界に私がいる間、お前たちは私の眷族となってもらうぞ！」

芦はそう言うと、そばにいた木乃葉を抱き寄せる。なんの事か分からない木乃葉は戸惑うが、次の瞬間、その表情が歓喜に彩られた。

「んっ、んんー！ん……ちゅ…」

桜色に頬を染める、木乃葉。身体の傷はみるみるうちに回復して行き、全身に力がみなぎってきた。そして…

「え、え、なんですのん？」

同じように抱き寄せられる月詠。え…嘘やろ？あかん、うち男の人と手ぇ繋いだ事ないのに…！いや、あかん、そんな男前なん反則…

その日、芦優太郎は二人の眷族を得た。同時にそれは、後々語り継がれる愛憎劇の始まりでもあった。どこかで誰かがつぶやく…

「マスター…覚悟して下さいね？」

背筋に何か冷たい物を感じながら、芦は腕の中で幸せそうな笑顔を向ける二人を抱きしめた。

（横島君…だんだん君の気持ちが理解出来るようになってきたよ。私は…もう駄目かもしれない…。）

涙を流す芦の後ろで、今まさにリョウメンスクナの封印が解けようとしていた…。

第三十八話　神鳴流とセクハラババア

湖上に、光り輝く巨大な鬼が現れる。その雄叫びは大気を震わせ、湖面に何重もの波紋を生み出した。

『フハハハハハッ！乗っ取ってやったぞ！素晴らしい、最高の気分だ！』

石化していた青山鶴子の治療に当たっていたアリアは、響いてきた声に反応した。

「もしかして、これＪＯＪＯネタかしら。」

「ディオですか？まさか…。外見は巨神兵っぽいですよね。」　木乃実が答える。呑気だ。

「あー、早すぎて腐ってたヤツね。あれ、前から不思議だったの。何で早いと腐るのかしら？」

「…ナマモノだから、足が早いとか？」

後ろで聞いていたネギには、何が何だか分からない。元ネタを知らないのだ。しかし、何だか寂しいので頑張って会話に入ろうとする。

「あれは、足の早いナマケモノなの？」

は？　アリア達は固まる。そして…

「「プハハハハハハッ！」」

吹き出した。想像したのだ。

「ネ、ネギ、あんた何言って…アハハハハ！」
「ナマケモノ、ナマケモノが、シャカシャカって…アハハハハハハ！」
良く分からないけど、喜んでくれたからいいや。ネギも一緒になって笑う。
文珠の力で石化の解けた鶴子が、まず初めに見たのは大笑いする三人の姿であった。

一方その頃、湖のほとりに立つ詠春たちは険しい表情でリョウメンスクナを見上げていた。かつて、英雄ナギ・スプリングフィールドの助けを得て何とか封じる事ができた『荒ぶる神』である。それが復活してしまった。エヴァンジェリンがいるとは言え、苦戦は必死だと考えていた。
「詠春。コイツが封印されていたヤツか？あの馬鹿でも倒せなかったとかいう…」
「はい。リョウメンスクナが、神界へと上った際に捨てたとされる闘争本能、『アラミタマ』が実体化したものです。しかし…無いはずの知性があるようです。厄介ですね。」
刹那と木乃香も、焦っていた。湖の真ん中にそびえ立つリョウメンスクナに、直接斬りつけるには空を飛ばなければならない。自分たち以外では、飛べて有効打を当てられるのはエヴァンジェリンく

らいだ。果たして、それであの化け物を倒す事が出来るのか…。

その時、リョウメンスクナに異変が起きた。

ザシュッ！

天にも届けとばかりに大きく広げられたリョウメンスクナの四本の腕…そのうちの一本が、いきなり切断されたのだ。

『ガアァァァッ！？』

混乱する。切り落とされた腕は霊気と水しぶきを撒き散らしながら、湖の底へと沈んでいった。

詠春たちは、戸惑いながらもリョウメンスクナの遥か上空に、見知った人物の姿を確認する。

「木乃葉！？月詠も…！」

それは、もう殺されていると覚悟していた娘と、神鳴流の誇る天才剣士の月詠だった。

木乃香と刹那も、顔を見合わせる。生きていた…！そして、なんだか分からないけどやたらと強くなっている！二人には、先ほどの木乃葉たちの攻撃が見えていた。手にしていたのは、小太刀だ。それが、異常に高密度の気で覆われていた。木乃香の得意技にかなり近い方法で、気の物質化を行っているようだ。

「お父様、私たちも向かいます！」

「長、お先に失礼します！」

二人は口々に言うと、詠春の返事を待たずに飛び立って行く。焦る詠春に、エヴァンジェリンは笑いかけた。

「ハハハハハ！詠春、お前も老けたな！あんなデク相手に呆けてるような体たらくだから、ガキの襲撃を受けて石になどされるのだ！」

「クッ…、そうですね。まず私が率先して攻撃に出るべきでした。」

その時、後方からこちらへ駆け寄ってくる人が。ネギと、鶴子であった。

「詠春はん、ウチも戦うわ！」

「エヴァンジェリンさん、僕も戦います！あのナマケモノを倒しましょう！」

ナマケモノ…？

エヴァンジェリンは少し疑問に思ったが、無視する事にした。

「アリアたちはどうした？」

「タカミチと一緒に、調べる事があると言って何処かへ行きました。僕は、エヴァンジェリンさんに指導してもらって、ナマケモノ相手に魔法の練習してなさいって…」

調べる…？この期に及んで何を調べるというのだ、アイツは…。しかし、あのデカブツを魔法の練習台にするのか。全く、アイツは大物なのか馬鹿なのか…

エヴァンジェリンは呆れながらネギに言った。

「授業料は、坊やとの濃厚なスキンシップだ。拒否は許さん。」

「え…？はい、仲良く遊べばいいんですね？もちろんＯＫです！」

エヴァンジェリンが鼻血を吹き出した。

「よよよよ、よし、イクぞ！また坊やの後ろに乗せるんだ！」

「いいですよ。しっかり捕まってて下さい！」

エヴァンジェリンを後ろに乗せて、ネギは杖に魔力を流し込む。

小さなつむじ風が起こると、空へと舞い上がった。

「ああ、ちゃんと掴んでおいてやる！」

ムギュッ

「うわあぁんっ！？」

奇声を発したかと思うと、ネギたちは明後日の方向へとぶっ飛んで行った。

「……詠春はん、あれは犯罪と違います？」

「気にしたら、負けだよ…。

それより、君はどうする？相手までの距離はかなりあるが…」

「ああ、ウチにはこの子がおりますから平気どす。」

今までどこに居たのか、首の長い鳥が鶴子の頭の上に現れる。一旦鶴子の身体から離れると、人一人簡単に乗せられるくらい巨大な鳥へと変化した。

「詠春はんは、どないします？この子の上のりますか？」

「いや、私は走って行くよ。君は君で動いてくれ。」

そう言うと、詠春は波紋を立てながら水面を疾走していった。しぶきを上げる事無く、真っ直ぐにリョウメンスクナへと向かって行く。

「あれ、人か…？」

木乃香といい詠春といい、近衛の家系は妖怪の血でも混じっているのだろうか。鶴子は、今まさにリョウメンスクナに攻撃を加えようとしている詠春を見ながら、そう思っていた。

「ざーんがーんけーん♪」

ドガアァンッ！

月詠は、空中を可憐に舞いながら攻撃を繰り出す。スクナの肩に、また一つ大きな穴が穿たれた。

「斬空閃！」

木乃葉も、暴れるスクナの腕を軽々とかわして技を放つ。今度は、スクナの耳にヒットした。

ガアァァンッ！

『ぐあぁぁぁぁぁっ！地味に痛い！？』

悶えるスクナ。そのスキに木乃葉は一旦月詠のそばに駆け寄って

相手から距離を置く。

「月詠、ごめんな。刀一本やと調子でんやろ？」

「ええんよ、一本には一本のええ所がありますもん。」

武器を持っていなかった木乃葉は、月詠に小太刀を借りていた。本来二刀流の月詠が一本しか持ってないのはその為である。確かに、本調子ではない。

二人が、次の攻撃へ移ろうとしたその時。視界に、一羽の鳥が入ってきた。

「木乃葉ーっ！」

「え…木乃実？…いや、木乃香か！あんたどないしたん、その髪！？」

驚く木乃葉。長かった髪が、木乃実よりも短くなっているのだ。しかし、そんな疑問を無視して木乃香は木乃葉に向かって声をかける。

「これ、せっちゃんの刀！あんたはこれ使い！」

木乃香は刹那の腰から銘刀夕凪を鞘ごと引き抜いて、木乃葉に投げ渡す。それを受け取った木乃葉は、困惑しながら刹那を見た。

「木乃葉様、構いません。それは元々、近衛家の刀ですから。私は、木乃香お嬢様の刀ではなく翼です。夕凪は、あなたが持っていて下さい。」

「刹那…。」

木乃葉は、小太刀を月詠に返して夕凪を鞘から抜く。それは、不思議と手に馴染んだ。

「分かった。有り難く使わせてもらうわ。」

木乃葉は、夕凪を構えながら、内心では胸の震えるような感動を覚えていた。転生者。余所者。そんな自分が、原作のキャラクターに仲間と認められる…。好き勝手に世界を壊すより、遥かに得られる喜びは大きい。そうか、自分はこの世界が好きだったんだ…。今更ながらに、木乃葉はその事に気づいていた。

「ほな、ちゃっちゃと終わらせよか。月詠、あんたもこれで全力でイケるな?」

「はいー♪」

その場にいる全員がスクナに向かって構える。一瞬目配せをした後、一斉に技を繰り出した。

「「「斬岩剣!!」」」

ズガアァァンッ!

『ぎゃあぁぁぁっ!?』

三人の剣撃がまたもやスクナの腕に直撃する。腕は根元から切り離され、湖へと落ちていった。

『こ、この羽虫ども…!ぶっ潰してやる!』

スクナはわめきたてながら、残った腕を振り回す。しかし、その腕も真下から放たれる真空涙に寄って斬り飛ばされた。

「破ーっ！」

ザシュッ…

『ぐあぁぁぁっ！？こ、今度は誰……え、詠春か！？』

スクナが足元に目をやると、そこには忌々しい詠春の姿があった。

「やけに脆いと思ったら勝敏か…。どういうつもりかは知らないが、退治される覚悟はあるんだな？」

『ぐぬぬぬぬ、この虫けらが！ひねり潰してくれる！』

残った最後の腕を振るうスクナ。しかしその腕さえも、飛び込んできた何者かに止められてしまう。

「神鳴流秘奥義、雷華一閃！」

ズバアァァァンッ！

『ぎゃあぁぁぁっ！』

凶悪な大きさの稲妻に貫かれて、スクナの腕が炭化する。それを、詠春が素早く切り落とした。

「鶴子さん、助かりました。」

「詠春はんなら軽く撃退できたやろうけどな。」

現れたのは、大鳥に乗った鶴子だった。…これで今ここに居る、木乃実以外の神鳴流剣士がすべて集まった事になる。これは…あま

りに一方的だ。

腕をすべて切り落とされたスクナは、最後の手段に出た。口を大きく開け、エネルギーを口内に集め始める。

「ぬ、これはいけない！みんな、一旦離れるんです！」

詠春が叫ぶ。この攻撃は、前回戦った時に見たスクナの最強の攻撃手段。山一つ吹き飛ばす威力があったはずだ。いくら勝敏が乗り移って弱体化してるとは言え、それなりに威力はあるだろう。

木乃香たちは、詠春の指示に従い一時退却する。スクナの口には、今や小さな恒星と言っていいくらいのエネルギーが集まっていた。しかし…結局それは放たれないまま爆発する事になる。

スクナの後方…はるか遠くから、尋常では無い大きさの氷柱が飛んできた。それは音速に近いスピードでスクナの後頭部へと迫り…

ドガアアァァァンッ！！

直撃し、大爆発を引き起こした。呆気にとられる神鳴流剣士たち。見ると、氷柱の飛んできた空に何かの影が。

「ほぉら、ネギ…。お前のエキスを吸ったから、あんなに大きいの出ちゃったじゃないかぁ…」

「うわぁん！エヴァンジェリンさん、もう、もう吸っちゃだめですー！」

上気した顔で腕にキバを突き立てるエヴァンジェリンと、潤んだ瞳で哀願するネギの姿がそこにあった。

第三十九話　怒りのダンボール

崩れゆく巨体、分離してゆく勝敏の魂。霊基崩壊を起こしながら薄れて行く意識の中、勝敏は納得出来ずに叫んでいた。

『何故だ！何故、リョウメンスクナの力が使いこなせなかったんだ！』

ナギ・スプリングフィールドさえ苦戦したと言う神とは思えない弱さだった。本来の力を引き出せなかったのは、何か間違っていたからなのだろうか…

（ふふふふふ…混乱してるね？）

『な、誰だ！？』

直接脳裏に響く声。それは水の中で揺らめくフェイトの幻から送られてきた念話だった。

（リョウメンスクナの霊核は、復活と同時に僕が貰ったよ。君は、残りカスを纏っていただけなのさ。）

『き、貴様！裏切る気か！？』

（どうだろうね。僕個人は君と手を組んだ覚えはないけどね。デュナミスが勝手にやってる事さ。僕は僕の思うようにやるだけだよ。）

『ぐっ…。私が居れば、あの小娘もまともな身体に戻せるのだぞ！第一、麻帆良の守りをお前一人で突破出来る訳がない！』

勝敏は焦った。コイツは、ただ自分を利用していただけなのだ。使えないと思ったら容易に切り捨てようとする。自分の価値を認めさせなければ、あの霊核を持ち去られ、自分は消えてしまう！

（もう、遅いんだよ。）

『何…？』

（彼女に、もう心は無い。ただ不滅であり続けて…何度も病に蝕まれるうちに、彼女の心は死んでしまったんだ。僕の目的は、彼女を完全に死なせてやる事だよ。そして…）

念に、殺気が混じる。

（彼女をあんな身体にしたお前ら異世界の神を皆殺しにしてやることさ。）

『な…、何を、言ってる…。魔法世界を救うんだろう?私の力が必要なハズだ…』

もう、勝敏にも分かっている。コイツの本心は、世界を救うのが目的なんかではないのだ。

（彼女が夢見た世界…彼女が居なければ、虚ろな幻でしかない。この、僕のようにね。）

その時、勝敏とスクナの霊体が巨大な氷に包まれる。どこかで、誰かがつぶやいた。

『終わる世界』

バキィィィィン…

粉々に砕け散る氷の雨を水中から見上げながら、フェイトは想い人に誓いを立てる。

（そう、世界は終わる。君を救って、二人で世界にサヨナラを告げよう。）

氷の欠片が水中へ次々と落ち、真っ白な泡が周囲を埋め尽くす。その泡に溶けて行くように、フェイトは姿を消していった。

その頃、リョウメンスクナの封印のあった地下施設にアリア、高畑、木乃実の三人の姿があった。

「不衛生ね。こんな所に監禁してたなんて信じられない！」

憤るアリア。そんなアリアに、木乃実は恐る恐る声をかける。

「あの…私たちも戦わなくてよいのですか？私も一応神鳴流剣士ですし…」

「ダメよ。」

即答だ。

「高畑先生が言ってたでしょ？今は木乃香さんがあなたに成りすまして戦ってるんだから。」

シュンとする木乃実。失った能力はコピー能力だけで、普通の実力だけなら神鳴流剣士の中でもかなり上位に入るのだ。役に立てないのが、辛い。

それは高畑も同様だった。ここに来てからやった事は、親書渡して食事して掃除をしただけ。これではただの使用人である。

「アリア君、僕にも彼女の気持ちが分かる。今ここに来る理由は何なんだい？」

「理由ですか？それはすぐに分かります。」

テクテク、と奥へと歩いて行く。封印の部屋まで行くと、扉を開けた。

そこには大きな石櫃が一つ。他には何もない殺風景な部屋…ではなかった。部屋の隅に、ちょこんと、ダンボールの箱が置いてある。

アリアは、ゆっくりとダンボールに向かって歩いて行く。すると…

ススス…

ダンボールが、移動する。アリアが近づいた分だけ、ダンボールも離れようと動くのだ。

テクテク…　ススス…

テクテクテクテク…

スススススス…

「むう…」
アリアの目が本気モードに変わる。
「高畑先生、木乃実さん、あの箱を捕まえて下さい！」

「わ、分かった！」「はい！」
何が何だか分からないまま、二人は走り出す。そんなに広い部屋ではない。すぐ捕まえられるハズだ。だが…

「Ｕｒｙｙｙｙｙｙｙｙ！」
ダンボールは壁を上り、天井に張り付いて走り出した！

「きゃあ、キモい！？」
「ディ、ディオですか！今度こそディオですか！？」
「とりあえず下がるんだ、二人とも！」

高畑の居合い拳が放たれる！しかし、その全てをダンボールは魔法障壁で弾き飛ばした。

「なっ！魔法使いか！？」
高畑の目が真剣になった。しかし、遅い！
ダンボールは、猛スピードで高畑たちの後ろの扉を突破して、施設の外へと飛び出して行った。

「ダメ、追いかけなきゃ！」
アリアが、すぐに後を追う。高畑たちも後に続いた。

湖面を、ダンボールが疾走する。芦優太郎は、ダンボールの中でもの凄い姿勢で小刻みに足をバタつかせながら叫ぶ。

「なぜバレる!?ダンボールかぶっていれば気づかれないのでは無かったのか!応答しろ、スネェェェクッ!」

何というゲーム脳。

それはともかく、その異様な姿には空を行く神鳴流剣士たちも唖然としていた。リョウメンスクナを砕いた氷の欠片が降り注ぐ中、ダンボールは凄い速さで次々と氷を避けて疾走していたのだ。

「捕まえて下さーい!」

湖畔を走るアリアが、上空の剣士たちへ声をかける。え、アレを?戸惑う剣士たちに、高畑は叫んだ。

「リョウメンスクナの封印の部屋にいた、魔法使いです!」

ギラリと目つきが変わる。

「斬岩剣!」
「斬空閃!」
「斬鉄閃!」
「百烈桜華斬!」
「このちゃん頑張れー!」

不思議な掛け声を混ぜながら、次々と放たれる攻撃。それを、必死にかわすダンボール。

「こ、コイツら鬼か！？」

芦優太郎は仕方なく最後の手段に出る。足の裏に魔力を込めて、ジェット噴射した。

ズオォォォォッ！

もの凄い勢いで、ダンボールが火を放つ。まるでロケットのように飛び立った。これなら、もう追いつけまい…徐々に加速するダンボール。そこに、後ろにエヴァンジェリンを乗せたネギが猛スピードで迫っていた。

「分かるか？恥ずかしければ恥ずかしい程、お前のモノ（魔力）が膨らんでいってる事…。はじけそうだぞ？」

「うわあぁぁん、脱がさないで下さいー！」

ネギは、半裸だった。

半裸で、夜空を滑空していた。

それは、きっととても寒かったのだろう。ネギはおもわず、やってしまう。

「ハックション！」

ピカアァァッ！

ネギの身体の魔力がはじけ、ダンボールに向かって放射される。武装解除の魔法だった。ダンボールは破れ分解し、中から現れたの

は…

「芦先生ーっ！？」

…不思議な格好で足からジェット噴射をしている、芦優太郎の姿だった。

近衛邸の大きな応接室に、不思議な光景が広がっている。近衛詠春と対面する形で座る芦優太郎。その両隣にニコニコしながら控える木乃葉と月詠。木乃香と刹那、そして木乃実は困惑しながらそれを見ていた。エヴァンジェリンはアリアとネギの腕を掴んでご満悦である。

まず、詠春が口を開いた。

「木乃葉と月詠を助けてくれた事、感謝します。貴方がいなかったら、二人は殺されていました。」

そう言って頭を下げる詠春。高畑などは今にも殺さんばかりの殺気を向けているが、こちらは大人だ。

「礼には及びません。夜中に抜け出した生徒を追いかけていたら迷いこんでしまっただけですから。」

にこやかに笑う芦優太郎。さすがに高畑は我慢出来なくなった。

「しらばっくれるのもいい加減にしろ！あの部屋で何をしていた！

何が目的なんだ！」
憤る高畑。そんな彼のもとに、アリアが近寄ってきた。手にした文珠を、高畑に見せる。
そこには、『石』と書かれていた。
「静かにしましょうね？」
「わ、分かったよ、アリア君…。」
部屋に静寂が戻る。今度は芦優太郎が話し出した。
「説明に入る前に聞きたい。アリア先生、何故私の存在に気づいた？君には、私にたどり着く材料はないハズだ。」
「いえ、ありますよ？これ。」
手にした文珠を見せる。
「私には、解析と理解に秀でた能力があります。偶然見つけたこのマジックアイテムを解析したら、あなたのモノだと分かりました。」
この言葉には、様々な意味が込められている。芦優太郎はそれを素早く察した。
アリアは、全て分かっている。文珠が異世界の能力である事、それを授けたのが芦であるという事。そして何より、芦がそれを隠したがっている事。だからこそ、能力ではなくマジックアイテムと言い、授けたという表現は使わなかった。まったく、賢い子だ。
「なるほど。私が護身用に持たせたアイテムが仇となったわけか。君の安全を気にする私が、今回の戦いの現場に来ないハズがない、と。」
力無くかぶりをふる。そして、ここから芦優太郎のウソが始まった。

「私は、芦優太郎という。麻帆良学園で教鞭を取っているのは知っての通りだ。私は魔力を行使し、アリア先生の持っているような文珠といったマジックアイテムを作る事が出来る。これは芦家の先祖に魔族がいたからしい。私は、先祖返りを起こして能力に目覚めている。」

「魔族の先祖返りか…。」

エヴァンジェリンがつぶやいた。

「貴様、何故隠していた？麻帆良の教師どもが知らないという事は、貴様は一般人として採用されたのだろう？」

「…魔族との混血が嫌われる理由は、君が一番知っているハズだが。」

「ム…。そうだったな。すまない。」

芦優太郎は、仕切り直して続ける。

「私が麻帆良に来たのは教師としての生活以外に、魔力の異常を調査するという目的があった。能力に目覚め魔力を感知できるようになると、麻帆良という土地の異常性に気づくようになったのだが、麻帆良には、私の婚約者である石田留美がいる。彼女の身が、まず心配だった。」

その時、そばの二人の空気が急激に冷えてきているのを感じた。無視して続ける。ビビりながら。

「原因は、学園が世界樹の力を無理やり魔力に変換している事と、魔法先生たちが何かと魔法を乱用している事だった。私はまず留美と、その親友である超鈴音に学園の警備システムを魔力を使わない

ものに変えるように頼んだ。超鈴音にも利益になる話だったから、快く協力してくれたよ。

次に、魔法先生たちによる無駄な魔法の使用を抑える事だが…私が赴任してきた時は何かと物騒だったからね。一般人に危害が加えられないように気を使う事で精一杯だった。一般人である私がうろついていたら、過激な事を控えるだろう？魔法先生たちの動きを調べて監視するのは中々骨が折れたよ。危険な連中が動いている時は、ターゲットとなった生徒のそばに付いていたりしたな。」

エヴァンジェリンとアリアは、ハッとして顔を見合わせた。あの時か！

「京都に来たのは偶然だった。本来ならば私はハワイに行くハズだったのだが、その前にクラスの受け持ちを変えられてしまってね。ただ、今では良かったと思っているよ。…高畑先生。」

「…何だ？」

「あなたは新幹線の中で天ヶ崎千草を捕まえ尋問しようとしただろう。あの時ＪＲ職員を呼んだのは私だ。他にも、一般人のいる所で君はよく暴力行為に近い行動を取る。私は君のような人間から一般人を守る為に京都で行動していた。」

高畑の顔が怒りで真っ赤になる。しかし、確かに今回は周囲の迷惑や常識を気にしなさすぎた。ここは麻帆良ではない。それを忘れていた。言い返せないのだ。

「先ほどの戦い…私が結界を張っていたから、外部には知られていないハズだ。最低限、一般人を巻き込まないという約束事だけは守ってほしいな。私に言わせれば、正義だろうが悪だろうが、関係な

い人間を巻き込む奴らは排除すべき敵だ。」

そこで、芦優太郎は一息つく。出されたお茶で喉を潤すと、詠春に言った。

「以上が、私がここにいる理由と経緯だ。質問があるなら、聞こう。」

芦優太郎の言葉が、室内に響く。言霊。今、確かに芦優太郎は怒っているのだ。そこに居る者たちは、その怒りを肌で感じていた。

次に詠春が口を開くまで、重苦しい空気が辺りを包んでいた。

第四十話　星屑少女

芦優太郎の声の威圧感に、その場にいた者の多くが身を硬直させる中。近衛詠春だけは動じる事なく芦の言葉を受け止めていた。今回の騒動では、対応が最初から後手後手に回っていたのだ。彼のフォローがあったからこそ一般人に知られる事を防げた。言わば、恩人である。だが、一つだけ失礼を承知で確認を取らなければならない事があった。

「あなたは今回襲撃を仕掛けた連中とは、繋がりは無いのですね？彼らが何者か、知っている事はありませんか？」

芦優太郎の眉が少しつり上がる。

「知るワケが無いだろう。私には魔法使いの知り合いは居ないし、作ろうとも思わないね。」

その言葉には、魔法使いに対する明確な嫌悪感が込められていた。

「もう、いいかね？いい加減、旅館に戻りたいのだが。深夜二時からは私が見回りをしなければならないので、それまでには帰してくれ。」

「失礼しました。お引き留めして申し訳ありません。」

詠春は頭を下げた。

「旅館へはタクシーでお送りします。」

「ああ、そうしてくれ。」

芦はそう言って席を立つ。周囲の人間は、困惑しながらそれを見送った。高畑などは殺意をぶつけていたが、詠春にいさめられる。アリアは複雑な表情をし、ネギはただ怯えていた。

「お姉ちゃん…。芦先生は、魔法使いが嫌いなの？」

「…多分、違うわ。魔法を使えるだけで嫌いになるなら、芦先生だって特別な力を持ってるし石田さんと結婚しようだなんて思わないでしょ。嫌いなのは、周りに迷惑かける人よ。」

「…それだけでは無いな。」

その会話を聞いていたエヴァンジェリンが言った。

「奴は麻帆良…というより、魔法社会全般に対して不信感を抱いているのだろう。奴がこれまで魔法関係者ではなく一般人として振る舞い続けてきたのは、一緒にされたく無いという気持ちの現れかもしれん。」

…そこで、エヴァンジェリンは少し間を置いて言う。

「私には、奴の気持ちが少し分かるよ。ここにも、麻帆良にも…不用意に無関係の者を巻き込む奴が多い。何も知らずに巻き込まれた奴がどうなろうと、奴らには些末な問題なのだろう。」

その目は、どこか悲しそうだった。アリアは思い出す。確かエヴァンジェリンは元々普通の少女だったハズだ。そんな彼女が吸血鬼となったのは、ある魔法使いの研究材料にされたせいである。彼女も、巻き込まれた存在の一人だった。

アリアがエヴァンジェリンの手を握ると、少し表情を緩めてエヴァンジェリンは握りかえした。

部屋を出て建物の外へと出ると、芦優太郎の後方から二人の少女が駆けつけてきた。木乃葉と月詠である。

「アシュタロス様、行ってしまうん？」

「今日くらい泊まって行ってくれてもええのに…。」

悲しむ二人に、芦は笑いかけた。

「二人とも。あのカードは持っているか？」

その問いに、二人は頷いて懐からカードを取り出す。それは仮契約の証であった。

アシュタロスという魔神との仮契約は、当然普通の人間との契約とは全く異なる。魔力パスを繋げれば魔神の力をある程度借りる事が出来るし、空を飛んだりする事も可能だ。そして、一番大きな違いは…

「このカードを額につけて念じたら、何処にいようと念話をする事が出来る。話の出来る時間は念が通じるようにしておくから、寂しくなったら繋いでみるといい。携帯電話と違って、こちらはタダだからな。」

途端に二人の顔が明るくなる。用が済んだからサヨナラという展開を覚悟していたので、関係が続く事を知って喜んだのだ。

「ほ、ホンマにええの！？うち、毎晩念話したくなるかもしれん…」

「うちは…恥ずかしくてよう話さへんけど…。二人の会話盗み聞き

してまうかもしれん…」
何気に月詠の方も悪質なのだが、芦は笑って頷いた。
「夜の１０時以降なら仕事も終わって自宅に戻っているだろう。大体その時間なら大丈夫だ。」
そこまで言った所で、ここの従業員らしき人物がこちらにやってくるのが見えた。
「…どうやら車の手配が済んだようだな。二人とも、今日は本当に助かった。ありがとう。まとまった休みが取れたらまた京都に遊びにくるから、その時また会おう。京都の街を案内してくれると、助かる。」
「うん、その時は地元の人間しか知らんような面白い所たくさん紹介するわ。」
「ウチは、休憩所を調べときます～。」
やっぱりどこか危ない雰囲気を醸し出す月詠。芦は背中に冷や汗を感じながら、従業員に案内されその場を後にするのだった。

【桜咲刹那】

先ほど、芦先生が去ってからその場にいた人達は皆一様に困惑していました。私はそんな皆を無視して、戦闘で服を失った木乃香お嬢様の為に、木乃実様と一緒に装束室に行きました。

「せっちゃん、芦先生って何者なんやろうな。」

分かりません…。あの説明が本当かどうかも分かりませんからね。ただ、何者であろうと木乃香お嬢様に危害を加えようとするならば斬り捨てるまでです。

「刹那さん、物騒ですよ。…彼は木乃葉姉様を助けてくれたし、敵対する事は無いと思いますが。」

そうだといいんですけどね。

そんな会話をしながら、木乃香お嬢様は浅葱色の着物を身に着けていきます。美しい…。もしこれで髪が長かったら、と思わずにはいられません。

「姉様、その着物は差し上げます。今までのお詫びにはなりませんが、お受け取り下さい。」

「…ありがとう。お詫びとかは、ええんよ。木乃実からの贈り物やもん、何よりも嬉しいよ。」

木乃香お嬢様は、優しい。私は、未だにここの連中を許せそうにないと言うのに…。

「ほな、行こかせっちゃん。早よう戻らんと、芦先生に怒られるえ。」

え?…あの、戻るって旅館へですか!?

「うん。お父様には迷惑かけたくないし。うちの事嫌っとるの、まだまだ沢山おるから…まだうちはここに居ったらあかんねん。」

このちゃん…

木乃実様も、悲しい顔をします。けど、何も言えませんでした。今回は表立って敵対していた人間を排除する事に成功しましたが、やはり関西は血筋や家柄を巡る問題がまだまだ多い。勘当された立場の木乃香お嬢様が、政争の道具に利用される恐れがある以上。あまりこの地に長居出来ないのは仕方ない事だと言えます。

「木乃実、元気でな。木乃葉にも、よろしゅう伝えといて。」

「本当にこのまま行ってしまうのですか？せめて最後に一言…」

ゆっくりと、首を横に振りました。

「あかんねん。うち、多分泣いてしまうから。」

そう言って、木乃香お嬢様は私の手を取って部屋を後にします。木乃実様は今にも泣きそうな顔をして、私達を見送っていました。

建物を出て、石階段の前まで来ました。私と木乃香お嬢様は、もう一度振り返ってその風景を目に焼き付けます。多分…もう戻ってこないであろう風景。私は心の中で別れを告げました。…その時、向こうから走ってくる一人の男性の姿が。

「木乃香！待って下さい！」

長でした。お嬢様は…長に背を向けています。
ハァ、ハァと軽く息をきらせて、長は私達のもとへと駆け寄って来ました。

「私は、木乃実です。」
いや、お嬢様。今更無理じゃないですか？本物の木乃実様も一緒にいたじゃないですか。
「あれは、式神ですから。」
うわ、そう来ましたか。

長は、少し困った表情をしながら言いました。
「それでは…あなたが木乃香に会ったら伝えて欲しい事があります。頼まれてくれますか？」
お嬢様は…コクン、と頷きました。

「早急に、この地のゴタゴタを収めて…あなたが帰ってこられるようにします。約束します、また家族で暮らせるようにしてみせます！…そして、謝罪したい。あなたを勘当という名目で東へ送ったのは私の間違いでした。辛い思いをさせて…そばに居てやれなくて、すまなかったと。
そう、伝えてくれますか？」

お嬢様は、うつむいていました。肩を震わせながら、微かにコクリと頷きます。

「最後に…私はあなたを愛しています。あの日、あなたを東へ送ってから…あなたの事を思わない日は無かった。木乃香にあったら、そう伝えて下さい。」

「…ぅん、ちゃんと、伝える、わ…。ほな、せっちゃん、行こか…。」

ええ、行きましょう。

石階段を、二人手を繋いで下りて行きます。長は、私たちの姿が見えなくなるまで見送っていました。

思えば、この階段を下りる時はいつも悲しい事や辛い事があった時だったような気がします。長には悪いですが…私は、お嬢様にとってこの地は足枷にしかならない様な気がします。お嬢様には、もっと明るく自由な世界で生きていて欲しい。そう思うのです。

気づくと、お嬢様は目元を拭いながら私を見つめていました。

「せっちゃん、せっちゃんは良かったん？」

何がですか？

「夕凪、木乃葉に預けっ放しや。あない大事にしとったのに、返して貰わんとうちと一緒に来て良かったんかな、て…」

ああ、その事ですか。なら、心配要りません。神鳴流は得物を選ばず。いざとなればお嬢様のように無手でも戦えますから。それに…私にはもう、しがらみや生まれを気にする必要もありません。近衛家の銘刀に頼る必要もありませんから。

「頼る？何を頼っとったん？」

…おかしな話です。私は、あの刀を持っていれば、お嬢様との繋が

りが切れないと信じていたのです。近衛家の銘刀を持っていれば、最悪半妖である事がバレてもどこかで絆が繋がっていると…そんなバカな事を考えていた時期があったのですよ。

「うち、せっちゃんが妖怪のハーフやと知ったからって、嫌ったりせんよ。」

ええ。今の私なら信じる事が出来ます。以前の私には無理でしたが…でも、それをお嬢様は変えてくれたのです。

「うちが…。なんかしたかな…？」

ええ。言ってくれたでしょう？私の翼になって、と。あの言葉のおかげで、私はありのままの自分でいられるようになれましたし、勇気を持って誰かを信じる事が出来るようになったんです。お嬢様…本当にありがとうございました。

私はそう言うと、お嬢様を後ろから抱きしめます。驚いて戸惑うお嬢様。私は素早く体勢を変え、お嬢様をお姫様抱っこしました。

「え、え、何？せっちゃん、どないしたん？」

ちょっとしたお礼です。この方が、旅館へ早くつきますから。

翼を広げて、私は勢いよく夜空へと飛び立ちます。一気に高度を上げ、まるで手を伸ばせば触れる事のできそうなくらい月に近づいて。私は腕の中にお嬢様の温もりを感じながら、星空を翔けてゆくのでした。

第四十一話　さようなら京都

修学旅行も最終日となる四日目。嵐山旅館は前日の襲撃など無かったかのように穏やかな朝を迎えていた。

この日、京都で戦っていたエヴァンジェリンとアリア、木乃香と刹那も戻ってきていたが、ネギと高畑だけは近衛邸に泊まって旅館に戻ってきては居なかった。

「旅館へは連絡を入れておいたから迷惑はかからなかったが…せめて二日前に連絡を入れておいて欲しいですな。」

カリカリしている新田先生を、芦優太郎がなだめる。

「まぁまぁ、それも今日で終わりですし、帰ってから学園長に抗議すればいいじゃないですか。今は最後の京都を楽しみましょう。」

「う、うむ…。確かに、ここで言っていても始まりませんな。すまない、芦君。どうも最近私は君にグチを言ってしまいがちなようだ。」

新田先生がストレスを溜めているのは仕方ない事なのだ。今回の修学旅行は、魔法使いや呪術師の勝手に振り回され過ぎた。こうして一般人に被害が殆ど出なかったのは奇跡に近い。ただ、一部魔法先生たちが規律を乱し周囲に迷惑をかける姿は目に余った。

今回新田が怒っていたのは朝食の人数やチェックアウトの手続き。ネギと高畑の不在を旅館に知らせたり、要らない手間がかかっていた。本来であれば昨日か今朝に謝罪の電話の一本でも入れておくべき所だ。しかし、高畑からは何の連絡も無い。

魔法使いの事情を優先する連中は、確実に周囲の人間からの評価を下げていた。

「僕で良かったら幾らでも聞きますよ。帰ったらまた、飲みに行きましょう。」

「う、うむ。次は私の行きつけのショットバーを紹介しましょう。いいバーボンを置いてるんですよ。」

遠くで石田が笑っていた。いい大人が朝から飲む話かよ、と。

旅館で皆が朝食を取っていた頃。ネギと高畑は近衛邸の詠春の書斎で話を聞いていた。昨日の件についてだ。

「あの芦優太郎という人物ですが、お義父さんも関係者だとは知らなかったようでしたね。」

「すみません…僕達も全くノーマークでした。」

頭を下げる高畑に対して、ネギは不思議そうな顔をする。

「タカミチ、なんで芦先生を嫌がるの？あの人は僕らを助けてくれた人でしょ？」

「いや、ネギ君…。正体が分からない上に、魔法使いに対して敵対心を持っている人間だよ。警戒するに越した事はない。」

ネギには、その理屈が全く分からなかった。あの人はあくまで一般人を巻き込む人や、そうした魔法使いの社会を嫌ってるだけなのだ。エヴァンジェリンやアリアに対しては変わらず優しくしている。悪い人なわけがない。

しかし、ネギは黙っていた。今ここで高畑とケンカしても仕方ないからだ。気を取り直して詠春の方へ向くと、詠春はネギに尋ねる。

「ところでネギ君。昨日は話が出来なかったけど…何か聞きたい事はありますか？父の事や、麻帆良学園の事など…」

「え…そうですね…」

本来担任として木乃香の待遇を問いただしたかったが、それは昨日解決してしまったようだ。なら、聞くべき事は一つしかないだろう。

「昨日、襲撃をしてきた人たちは何者何でしょう。今分かっている事だけで結構ですから、教えて下さい。」

高畑と詠春は顔を見合わせる。てっきり父の事を聞いてくると思っていたのだが…

「ネギ君、お父さんの事はいいのかい？」

思わず高畑が尋ねる。父の跡を継いで立派な魔法使いになると言っていたかつてのネギからは考えられない返答だった。

「父さんに関しては、いろんな人が勝手な事を言ってるので今更聞きたいと思いません。僕は六年前に父さんに会ってます。それで充分ですよ。それに…」

ネギの顔に暗い影が落ちる。

「父さんの事は皆頼んでもないのに話すくせに、母さんの事を聞くと途端に黙り込むんです。陰口で災厄の女王と言ってるのを、何度か聞きました。」

「ネギ君、それは…！」

高畑が口を挟むが、ネギはそれを手で制した。

「いいんです。お姉ちゃんが言ってました。自分で見た物を信じなさいって。僕は父さんに会ってるし、母さんにだっていつか探し出して会ってみせます。赤の他人が勝手に作り上げた虚像になんて興味ありません。」

もう、二人は圧倒されるしかない。時折、子供とは思えない聡明さを発揮するとは聞いていた。しかし、今のネギはまるで別人だ。

「タカミチ、今僕が知りたいのは、お姉ちゃんや生徒たちを襲った人たちの事だよ。今回はたくさんの人たちが協力して切り抜けられたけど、次また同じようにうまく行くなんて限らないでしょ。僕たちは先生なんだから、次は生徒をしっかり守れるようにしなきゃ。」

「あ、ああ。そうだね。でも、麻帆良学園は結界で守られているし優秀な魔法先生たちもいる。君がそこまで必死になる必要は…」

「高畑君。もうネギ君は知ってもいい時期に来ている。誤魔化すのは、もう止めましょう。」

詠春は、そう言うと真っ直ぐネギの目を見据えた。

「今から話す事は、極秘事項とされています。相手がお姉さんでも、口外してはいけません。君は誰にも言わないと誓えますか？」

「はい、誓います。」

ネギは即答する。高畑は、うなだれた。聞かせたくは無かった。ネギは魔法世界に失望してしまうのではないか…。立派な魔法使いになる事をあきらめるのではないか…。もしそうなったら、ナギ達に何と言って謝ればいいのか。

高畑が複雑な表情で見つめる中、詠春は口を開く。そして、明かされてゆく真実。ネギはただ、真剣な表情でそれを聞いていた。

【アリア・スプリングフィールド】

最近、前の世界の事が思い出せないんですよね。今、何巻でしたっけ?確か四日目って馬鹿親父殿のアジト見に行くんですよね?エヴァさんとか思いっきりこっちに居るけどいいのかしら。ああ、ちなみに木乃香さんは木乃実さんの持っていた変装用カツラを使って元の髪の長さに戻してます。変に注目を集めたくないからしいですが、朝から刹那さんとラブラブして凄い注目を浴びていました。こういうの、注意した方が良いのでしょうか?とりあえず、捕まらないようにね、とだけ言っておきましたが…大丈夫かなぁ。

今日は、最終日。3時まで自由に買い物ですって。この修学旅行ってやたらと自由行動多いけど、最近の修学旅行って何処もこんなのかしら。遊び過ぎでしょう。まあハワイとか行ってるクラスもいるし…いいのかな。

今日はまずエヴァさんの班と回って、それから超鈴音さんの班と回ってお終い。出来れば芦先生とお話したかったけど無理みたい。仕方ないですよね、あの人も見回りしなきゃいけないし…。

「おい、アリア。何を考えているかは知らんが今は買い物に集中しろ。八つ橋を買うならどちらがいいか迷ってるんだが…アリアはどう思う？」

…八つ橋って、またベタな。

えーと…ああ、皮だけのとアンコ入りですか。私は皮だけですね。飽きっぽいので色々挟んで楽しんでます。

「なるほどな…。確かに、それなら楽しめそうだ。茶々丸、皮だけの方を買おう。中に何を挟むのがいいか、悩むな。」

普通の生地ならシナモンが効いてますから、意外とリンゴジャムとかと合うんですよ。ヨモギ生地なら、私は薩摩芋をスイートポテトみたいにして挟んで食べた事があります。かなり美味しかったです。

「なるほど…確かにそれは美味そうだ。……ん？茶々丸、あれはどうなんだ？奈良で買ったあれは。」

「…マスター、正気ですか。」

奈良？奈良で買ったもので食べ物…柿の葉寿司？三笠焼きとか？

「ああ、奈良漬けだ。」

！？

「マスター、流石ですね。京都と奈良の、華麗なるコラボレーションが今誕生しました。」

いやいやいや、待って下さい！それは…

「ははは、そうだろう！我ながらいいアイデアだと思ったんだ。創作料理なら私だっていいセン行くんだぞ。アリア、特別にお前には真っ先にご馳走してやる。」

いりません、いりませんよそんな兵器！普通に粒餡入り買いましょう！ね？

「アリア先生、無駄な抵抗は止めて下さい。我がマスターの望むがままにしてください。」

無茶言わないで！？死んじゃうでしょ、私！

そこまで言うと…エヴァさんが少し涙ぐんでいました。こちらを見て、悲しそうにうつむきます。

「悪かった、アリア。私は、やっぱり駄目だな…。お前に喜んでもらいたかっただけなんだが、そんなに嫌がるなら…やめよう。…すまなかった。」

いえ、あの…。そんなに落ち込まなくても…。別に駄目とかそう言うんじゃないから…。ああ、もうどうすれば！茶々丸さん…は銃口向けないで！？分かった、分かりました！ありがたく頂きます！だから、元気になって下さい！

「本当か？…本当に、食べてくれるか？」

ええ、頂きますよ！ガッツリ食べさせて頂きます！

「そうか…。良かった、奈良に行ったのは無駄にはならなかったな…。」

心底安堵したような表情しちゃって…。私は不安でいっぱいですよ、まったく。

「茶々丸。なら、アレも付けてやろう。甘い物だから、合うだろう。」

ん？まだ何か？

「分かりました。さすがマスターです。」

そう言ってカバンから取り出したのは…えーと？

『鹿のふんチョコ』

うぉおぉぉいっ！？

時計の短針が１２を回る頃。近衛邸では一つの長い物語が語り終えられる所だった。

「…以上が、私の知っている情報です。」

詠春がそう締めくくると、ネギは大きくため息をついた。衝撃的では、あった。詠春の口から説明されたのは世界で暗躍する『完全なる世界』という組織の事。その説明過程で自然と大戦時代のナギ達の活躍の話となり、母の話にも及んだ。大戦の責任をとらされたスケープゴート…それを助け出した英雄ナギ。二人の子供が、ネギだった。

「簡単に言ってしまえば、襲撃していた連中は私達が壊滅させた組織の残党です。ただ…その殆どが高畑君の所属する組織によって捕らえられたハズなんですが…。」

「元老院の人間が繋がっているという話もあってね。今は調査中なんだ。僕が学園を離れる事が多いのは、その調査に出ているからなんだよ。」

二人の説明を聞いて、ネギは納得いった顔をする。まだ、秘密にしている事はありそうだが…今は、この情報だけで充分だ。

「教えてくれて、ありがとうございます。何となく、見えて来ました。」

「見えて来た？何がだい？」

「兄さん達…魔法人形を作ったのは『完全なる世界』の人間だと思います。母さんを嫌う元老院が村を襲撃した時…兄さん達は示し合わせたように村から消えたんです。明らかに、これから何が起きるか知ってるような素振りで。そして今回、姉さんそっくりな人形が出て来ました。繋がっているからこそ、複製体が作れたのではないでしょうか。」

詠春と高畑の顔に緊張が走る。もし今のネギの言った事が真実なら…やはり、元老院のあの男が関わっているのではないか。ナギのそばにいて、彼の頭髪を採取出来た人物。袂を分かち、自分の理想を実現しようと去って行った、あの男…クルト・ゲーデルが…。

「ただ…証拠ないですから。僕の勝手な推測ですから気にしないで下さい。僕は、とりあえずこれから魔法使いとしての実力をつける為に自分を鍛えたいと思います。エヴァンジェリンさんが、色々教えてくれると言ってくれましたから。」

色々…

高畑は魔法の事と理解し、詠春はいけない事だと理解した。

「では、タカミチ、行きましょう。早くしないと、帰りの電車に間に合わないかもしれないです。」

「え…ネギ君、お父さんの隠れ家はいいのかい?」

ネギは、京都にあるナギの隠れ家に行きたいと旅行前に言っていたのだ。

「夏休みに、自分のお金で京都に来た時に寄りたいと思います。今は、生徒たちのそばに居たいですから。」

「分かりました。ネギ君、その時は連絡を下さい。私が、案内しますから。」

詠春はそう言うと、内線で従業員に連絡をする。ネギたちを送る車を手配したのだ。高畑は相変わらず残念そうな表情をしていた。

京都駅。

東京行きの新幹線が発車するホームで、アリアは心配そうにネギの到着を待っていた。携帯電話で連絡はとったものの、実際に姿を見ない事には安心出来ない。集合時間まであと三十分、その場にいる他の先生たちも心配そうにしていた。

そんな中、ぼんやりとエスカレーターを眺めていた芦が声をあげる。

「あれ、ネギ先生じゃないですか？」

その声に反応したアリアがエスカレーターの方を見ると、確かに杖のような棒が見えた。徐々にその持ち主の姿も見えてくる。そこには、お土産物を沢山抱えたネギと高畑の姿があった。

「ネ、ネギ君！お父さんの家は見ないのにお土産物には時間を割くって酷くないか！？」

「でも、ネカネお姉ちゃんとアーニャに約束したんです！京都に行ったらお土産買ってくるって！」

ドタバタとやってくる二人に、堪忍袋の緒が切れそうなアリアと新田先生。二人を必死になだめながら、芦は心の中で涙を流していた。

（ここの所、誰かのフォローばかりだな。こんな目に遭うなら、ハ

ワイでのんびり過ごしたかった…）

視界の端に熱視線を送ってくるしずな先生を見て恐怖しながら、芦は一人ごちるのだった。

こうして、麻帆良学園中等部の修学旅行は幕を閉じた。数々の苦難を乗り越え、強くなって行った生徒達とアリア。しかしこの旅行で一番大きく成長したのは、ネギかもしれない。

帰りの電車の中。

隣で疲れて眠るアリアに肩を貸しながら、ネギは窓の外を眺め物思いに耽っていた。

（僕は…本当に弱い。クラスの生徒たちにもかなわない。強くならないと…アイツらから、生徒を守れない。強く、ならなくちゃ…。）

どこか悲壮感すら漂わせながら、ネギは静かに目蓋を閉じるのだった。

第四十二話　踏み出す者、踏み外す者

朝。二段ベッドの上で眠い目をこすりながら、アリアは目を覚ました。時計は6時ジャスト、あと三十分は眠っていられるのだが…

（あれ、ネギったら布団に潜り込んでないの？）

いつもなら朝は抱きついているネギを起こす作業をしなければいけないのだが、この日はネギの姿が無かった。少し拍子抜けするアリア。あれはあれで、結構嬉しかったりしていたのだが…

ベッドの上から下の段を覗きこむとネギは既に起きていて、何やらうんうんと唸っていた。

「おはよう、ネギ。早いのね。」

「あ、おはようお姉ちゃん。」

ネギはいつものように人懐っこい笑顔で挨拶をする。変わらないあどけなさ。それを見て一安心するが、やはりどことなくいつもと違うような気がする。

「ねえ、ネギ。今日は旅行明けでお休みなのよ？何でこんなに早いの？」

「え？うーん…ちょっと、考え事しちゃって…」

そこまで言うと、アリアもやっとネギの様子に気づいた。目の下に、クマが出来ている。

「馬鹿ネギ！あなた寝てないでしょ！何でちゃんと寝ないのよ！」
慌ててベッドを降りてネギの肩を掴む。問いただすようにゆすると、ネギは「あぶぶぶぶ」と言って目を回した。

「ごめんなさい、お姉ちゃん！でも、僕どうしたら良いか分かんなくて…」
目に涙をためるネギ。それを見て、アリアも力を緩める。

「仕方ないわね…。何を悩んでるのか分からないけど、それはお姉ちゃんに話せる事？おねえちゃん、相談に乗っていい？」

アリアは、強引に聞き出すような事はしない。一人で解決出来る事なら一人でやらせる。そういう風に、ネギと接して来たのだ。ネギは、しばらく考えて…姉に相談する事に決めた。

「僕…修学旅行で、皆を守れなかった。修学旅行だけじゃない、前に茶々丸さんが襲われた時だって結局茶々丸さんが僕を庇って壊されちゃったし…。お姉ちゃんのそっくりさんの攻撃も、お姉ちゃんが庇ってくれた。僕は、先生なのに生徒を守れなくて、お姉ちゃんも危険に晒してしまったんだ…」

アリアは、それを聞いて複雑な表情をする。考え込まないように教育してきたつもりだった。しかし、やはり根っこのネガティブ思考は消せないらしい。あの戦いを生き残れただけでも凄いという事を、この子は理解してないのだろうか。

「ネギ。あんた１０歳なんだから弱くて当たり前なの。いや、１０歳にしては強すぎるくらいよ。ちゃんと生き残って生徒たちも無事

だったんだから、担任としては充分頑張ったわ。」

アリアがそう言っても、ネギの顔は暗いままだ。アリアはため息をついた。寝不足もあって、今のネギは思考力が落ちている。この状態では明日からの授業に関わるだろう。仕方なく、アリアはある人物に電話をかけた。

「もしもし、アリアですが…あ、茶々丸さんですか。おはようございます。すみませんが、エヴァさんに取り次いでもらえますか？…はい、お願いします。」

「…お姉ちゃん、エヴァンジェリンさんに電話？」

ちいさな声でネギが聞くと、アリアは受話器を持ったまま頷いた。

「…あ、エヴァさんですか。おはようございます、アリアです。実は相談したい事がありまして、突然で申し訳ないんですがそちらにお伺いさせてもらいたいんですが…え？はい、ネギも一緒に…って、エヴァさん！？なんですか今の『はぶぁっ』って！え、いや、気にするなって言われても！…はぁ、まあ、そこまで言うなら聞きませんが…。とりあえずＯＫなんですね？では、二時間くらい後にそちらにつくようにしますのでよろしくお願いしますね。」

その後、二言三言交わしてアリアは通話ボタンを切った。少し疲れた表情をする。受話器の向こうのエヴァンジェリンは、なんだか怖かった。

「ねえお姉ちゃん、これから何しに行くの？」

「え？ああ、ちょっとした相談よ。ネギの事もそうだけど、私もお話ししたいことあったし。朝ご飯食べたら出かけるから、着替えと

きなさいね。」

「はーい。」

徹夜明けで眠いのか、呆っとした顔で答えるネギ。そこまでして悩むなんて、生真面目なのも考えものね、とアリアはため息をついた。

朝食を済ませた二人は、約束していた時刻ぴったりにエヴァンジェリン邸についた。入り口の木のドアについている呼び鈴を鳴らすと、中から女性の声が聞こえて来た。

「アリア先生ですね。今こちらもモニターで確認しました。ドアを開けますので少し下がって下さい。」

おや、この声は茶々丸さんとは違うぞ、とアリアとネギは顔を見合わせる。しばらくして登場したのは…石田留美だった。

「おはようございます。どうぞ、中にお入り下さい。」

「「石田さん!?」」

驚く二人。何故、彼女がここに!?特にアリアは戸惑いが大きい。以前仮契約を勧められてから、どうにも彼女を意識してしまっているのだ。

石田に促され、ついて行く二人。アリアの顔は照れて少し赤くなっていた。しかし、そこにもっと赤くなっている人が現れる。

「良く来たな、アリア。ネギ。」

階段を下りて来たのは、金髪をなびかせた一人の女性。背が高く、グラマラスな肉体は繊細な装飾を施された下着に包まれている。その上に、うっすらと透けるローブを着て現れたのは幻術を使って大人の外見となったエヴァンジェリンだった。

「丁度、石田と話をしていてな。…ん？アリア、どうした？」

プルプルと震えながら、アリアはエヴァンジェリンに近づいて行く。そして、履いていたスリッパをとると…

パコーン！

「はぶぁっ！？」

力一杯叩いた。

「なんて格好してるのーっ！そんな格好で客迎えるとか娼婦ですかあなたは！！」

「い、痛いじゃないか！突っ込むのは構わないが、当たり前のように魔法障壁を突き破るんじゃない！」

ギャーギャーと言い合う二人。ネギは恥ずかしそうに両手で顔を隠している。石田は呆れながらそれを見ていて、茶々丸は着替えを用意していた。

…結局、まともに話が出来たのはその十分ほど後の事だった。

「で？とりあえずネギはどうしたいんだ？」

子供の姿に戻ったエヴァンジェリンは、ネギの話を聞いてつまらなさそうに言った。

「え？それは、強くなって生徒たちを守りたいと…」

ネギが答えると、エヴァンジェリンはため息をついた。

「石田。ネギはこう言ってるが、お前はこんな子供に守って欲しいか？」

「まさか。自分の身は自分で守ります。いざとなれば超さんが居ますし、芦先生だって助けてくれますし。ネギ先生は普通に先生をしていれば良いのでは？」

石田は冷たく言い放つ。実際、ネギより石田は強い。クラスで能力に目覚めた生徒たちも、大半はネギより強いだろう。

「そういう事だ。わざわざお前に守って貰わなくても、お前の受け持つクラスはとんでもない能力者ばかりだ。守ってもらう必要などないだろう。」

「ぅう…。」

ネギは泣きそうになる。

「確かに、今の僕は弱いです。だから、強くなりたいんです。修学旅行の時みたいに、皆に守ってもらってばかりなのは嫌なんです。」

「ふむ…」

エヴァンジェリンは考える。年齢を考えれば今のネギは充分に強い。ただ、これから麻帆良に攻めて来るであろう敵を考えれば実力不足であるのは確かだ。元々鍛えてやろうとは思っていた。だが、その前にハッキリさせておかなければならない事があった。

「いいか、ネギ。あくまで、自分を守る為の強さを求めるなら私が鍛えてやろう。だが、クラスの人間を守る為なら断る。」

「え…それは、何故ですか？」

「そんな考えでいたら、お前の事だ、いつも生徒たちの前に立って一人で戦って守ろうとするだろう。戦える人間すら前に出さず、一人で何でも背負い込む。それは、ハッキリ言ってありがた迷惑だ。」

エヴァンジェリンがそう言うと、ネギは暗い顔でうなだれる。確かに、そう考えていた。自分が強くなれば皆を戦わせなくて済む。けどそれは、戦える人の事を考えていなかった。

「だがな、お前がまず自分を守る力を得て…皆と協力しあって戦うと言うなら私もお前を鍛えてやる。いいか、ネギ。一人で背負うのなら背負えるだけのものにしておけ。一人で無理なものなら周りの人と協力して背負え。お前は一人じゃないだろう？」

その言葉は、ネギの胸に強く響いた。そうだ、何故自分は一人で強くなる事ばかり考えていたのだろう。いくら強くなったって、一人ではどうしたって限界がくる。父にだって、たくさんの仲間と共にいたのだ。

「そうですね…。僕はまず、自分を守る為に鍛えたいと思います。そして、皆と一緒に、頑張って行きたいです。」

そうネギが言うと、アリアとエヴァンジェリンは満足そうに頷いた。原作のネギはこのタイミングで明日菜と喧嘩していたが、一人で背負い込む性格は変わらなかった。きっとこのネギの違いが、原作と一番変わっている所かもしれない。

「…で、エヴァさん。実はネギ、悩みすぎて寝てないんです。明日から学校ですし、熟睡できる魔法とかで寝かせてあげれませんか？」

アリアがエヴァンジェリンに尋ねる。アリアは魔法を使うなとエヴァンジェリンに言われているので、代わりに使ってもらおうと思っていたのだ。しかしエヴァンジェリンの返答は期待していたものとは違っていた。

「ん？いや、魔法で眠らせても体内時計が狂うだろう。丁度いい、これから皆で別荘に行くぞ。あそこならゆっくり身体を休める事が出来る。」

別荘…。

アリアは原作を思い出した。ああ、あの時間の流れの変わる世界か。外での一時間が中での一日、というとんでもない別荘だ。

「ダライラマ魔法球ですね。聞いた事あります。」

「うむ、危険なジョークありがとうアリア。因みにそれの改良版だ。あそこならネギもゆっくり出来るしお前の身体の事も解決してやれる。」

ん？私の身体？そう言えば何故石田さんがここに…

ガシッと、アリアの肩が掴まれた。
「アリア先生…私、心待ちにしていました。」
「いや、ちょ、石田さん！？」
問答無用でアリアを抱え上げる石田。アリアはバタバタ暴れるが、ガッチリと固められ逃げられない。
「いいぞ、石田。そのまま奥の部屋まで連れてこい。ネギ、お前は私と一緒に来るんだ。」
眠くて少しフラフラしているネギの手をとり、指を絡めるエヴァンジェリン。茶々丸は録画用のメモリの増築に余念がない。
「僕、どこ行くんですか…？」
「ふふふ。いい所だ、いいト・コ・ロ♪」
「うわあぁぁん、離して下さい石田さん！婚約者はどうしたんですかぁ！？」
「私だって浮気してやるんです。ええ、前々からそっちも興味ありましたし。」
「録画には４００G…いえ、５００Gは必要ですね…。」
騒がしく話しながら、皆はエヴァンジェリンの別荘へと向かう。アリアとネギ以外は皆欲望に目を輝かせている。判断を間違えたか、とアリアは嘆くも後の祭り。強引に奥の部屋へと連れて行かれると、透明なクリスタル球へと近づいて…

光と共にアリア達の身体はその場から掻き消えるのだった。

その頃。学園長室には殺伐とした空気が流れていた。近衛近右衛門は探るような目で芦優太郎を見つめており、芦も涼しげな目でそれを受け止めていた。

「つまり…ただの異能者で魔法使いでは無い、と。」

「うむ。そう言っても中々信じて貰えなかったがね。」

この部屋には現在、二人以外に誰も居ない。高畑は仕事で麻帆良を離れているし、しずなも今日は普通に休日だ。そうでなければ、こうしてのんびり話など出来ないだろう。

「私の目的は、ただ婚約者とその友人の身の安全を確保する事だが…どうも二人はここの警備に携わっているらしいから心配でね。修学旅行ではやたらと物騒な事にも巻き込まれるし…」

「う、うむ。その件は本当にスマンと思うておる。まさか『完全なる世界』が関わってくるとは思わなんだでのう。」

近右衛門が警戒していたのはメガロメセンブリアの元老院である。麻帆良に影響力を持つ元老院が何やら不穏な動きを見せており、い

ざという時の為に西との関係改善を進めようと考えていたのだ。結局、東に対する敵対心を利用され西の過激派を暴れさせてしまった。狙っていた事とは真逆の結果である。

「それは構わないが、一般人に迷惑をかけるのはやめるように部下に言い聞かせて欲しいな。特にあの高畑という男は酷い。教師としても問題視されているらしいし、あれではチンピラと変わらないぞ？」

「高畑君は…ワシの仕事で出張が続いててのう。彼も真面目に頑張っておるんじゃよ。」

「事情を知らない人間には、学園長に贔屓にされていて風紀指導では暴力を振るう危険人物。実際、彼に好意的なのは一部の女子生徒と格闘好きな男子生徒くらいだ。何にせよ、今の状況が続くようなら新田先生も爆発だろうね。」

「む、むぅ…。」

言葉に詰まる。芦の言う事は正しい。あくまで、一般人からしたら。そして、ここは一般人の世界。本来魔法使いが大きな顔を出来る世界ではない。しかし…

「話を変えよう。近衛近右衛門、あなたは田崎勝敏という男が何を狙っていたのか分かるか？」

「む…？いや、リョウメンスクナの力を手に入れようとしたとしか聞いとらんのう。」

詠春の報告では、リョウメンスクナの力を得て詠春の殺害を狙ったという。関西呪術協会を掌握して『完全なる世界』の日本での活

動拠点を作るのが目的だったハズだ。

「確かにそれもあるが、問題はその後だ。私は奴の記憶を覗き見たんだがね。」

そこまで言うと、芦は鋭い目で近右衛門を見た。

「彼らの狙いは、この麻帆良の地下に眠る存在だ。そこに至る力を、彼らは欲している。」

「……！？」

目を見開く。この男は、この麻帆良の秘密を知っている！

「君たちがどういうつもりで彼女を封じ込めているのかは知らないが…。危険を招いている自覚があるなら、早めに何とかしたまえ。」

そう言うと、芦は席を立つ。予定していた時間を、だいぶオーバーしていた。部屋を出ようとすると、近右衛門は慌てて声をかける。

「芦君、お主は協力してくれんのか？」

「石田と超の協力はする。が、私はあくまで一般の教師としてここにいる。君たち魔法使いの争い事には興味ないのでね。」

そう言葉を残し、芦は学園長室を出て行った。残された近右衛門は、ただ頭を抱えてうめくばかりだった。

さて、学園長室を出た芦は早速念話を繋げる。石田と連絡をとるつもり、だったのだが…

（繋がらない…？何故だ、麻帆良に居ないのか？）

現在石田はエヴァンジェリンの別荘。さすがにそこまでは繋がらない。その代わりに繋がったのは、木乃葉だった。

（あ、アシュ様やん。どうしたん？うち、今鳥しばいとるんよ。）

（あ、いやすまない。特別な用など無かったのだが…。ん？鳥をしばく？）

（うん。茶ぁしばくのと一緒。ケンチキや。ケンタッキー。鳥しばくん。）

（さすがにその言い方は京都でもしないだろう。初めて聞いたぞ？）

（そらそうや、うちが流行らせよう思うてん。アシュ様も、今度一緒に鳥しばこうな？）

（ははは、分かった。思いっきりしばこうか。）

その時、どこからともなく不思議な声が聞こえてきた。

（はぁ…はぁ…鳥、ぅぅん…）

（（…？））

（うちも…うちもしばいてぇ……はぁはぁ…ァアッ！）

（（月詠ーーーっ！？））

凄い遠距離でハァハァ言われて、二人は固まった。今この瞬間、芦と木乃葉の心は一つになっていた。

…恐怖で。

第四十三話　アリアが元気になりました

ここは、超包子。
超鈴音はそのバックルームで、緩む頬をふにふにと摘んでいた。
大して痛くないのは夢だからだろうか。それなら覚めてくれるなと、目の前のお金を数えながら悦に入っていた。

「師匠、これ本当に売り上げ金アルか？なんかこんなに売った記憶ないヨ。」

「それだけ、皆頑張って売ったんだヨ。今回はその場で蒸かす事が出来たおかげで熱々の物をたくさん提供出来たネ。」

今ここには五月、葉加瀬、クー、超の四人がいる。全員、予想外の売り上げに驚いていた。特に、臨時で頼んだ石田とザジが全て売り尽くしたのには驚愕した。石田に関しては芦に買い取ってもらったのを超は知っている。が、ザジはあの無口な態度で完売して見せたのだ。

「とりあえず運営費に当てる分はのけといテ…一人あたりこれだけの金額をは出せるヨ。」

提示された金額は、中学生なら目が回る金額だった。実際クーは目を回している。たった４日…実質３日のバイトとは思えない額だったのだ。

「超さん、ザジさんには寮に帰ってから渡しましょう。彼女、今日は麻帆良サーカスの方で働いてますから昼間は捕まりません。」
葉加瀬が言うと、超は少し驚いた。旅行明けで疲れてないのだろ

うか。彼女だけはキャラが掴めないが、とりあえず勤勉で努力家なのだろうと超は理解した。

「なら、仕方ないネ。じゃあ今居る人間だけ先に渡すヨ。」

そう言って、茶封筒にお金を入れて皆に渡す。クーは小躍りして喜び、葉加瀬も冷静な振りして嬉しそうだった。五月はいつも通り礼儀正しく受け取る。そんな皆の表情に超も嬉しそうに微笑んでいた。

しかし、その表情も次に口を開いた時は真剣なものとなっていた。

「さテ、これからは仕事の話ネ。葉加瀬、盗聴はされてないかナ？」

「はい、大丈夫です。」

葉加瀬も真面目な顔で答える。クーは何も聞かされてないので不思議な表情をしていた。

「まず…修学旅行で襲って来た連中の狙いを突き止めたヨ。それハ、この学園の地下に封印されていル魔法使いネ。」

「魔法使い…アルか？」

魔法使いというと、クーにはあの間抜けな人形たちが頭に浮かぶ。あんなものを封印？

「問題は、その存在をこの学園が隠していル事。その魔法使いが何者かは知らないけド、皆の安全を確保する為にモ、確認して出来るなら正体を確かめたイ。もっと言うなラ…この麻帆良から別の場所に移って貰いたいネ。明らかにコイツのせいで皆が危険に晒されているヨ。」

超は、学園と協力関係にはあるものの、信用はしていない。特にこの地下の魔法使いの存在を知ってからは尚更だ。前の世界でも全ては把握出来なかったが…おそらくライフメイカーと呼ばれる存在が封印されていたのだ。しかしこの世界では違う。アシュタロスの話では、地下に封印されているのは転生者の可能性が高いという。

麻帆良の地下に眠る転生者。

彼女こそが、この世界（たまご）の命運を握る人物らしい。

そんな存在を封印し続けている麻帆良の事など信用出来ないし、もしその正体を知っているなら尚更である。学園側がどこまで知っているのか…まずはそこから調べなければいけない。

「とにかク、この麻帆良の地下に眠る存在の事や麻帆良の秘密を調べていきたイ。私は石田と世界樹や学園のシステムを調べるかラ、葉加瀬は大学の方で情報収集を頼むヨ。」

「了解です。」

葉加瀬が頷く後ろでソワソワしているのはクー。目を丸くして輝かせている。これは…指示が来るのを期待しているのだ。

「クーは、基本的にはいつもと同じだけド…どこかに侵入したりする時は一瞬に来てもらうかラ、普段からちゃんと鍛えておいて欲しイ。」

「分かったアル！」

元気よく敬礼するクー。その可愛らしい仕草に和んだ。超は最後に五月に向き合って言う。

「五月は、いつも通りここで働いていて欲しイ。超包子はいつも通りデ、私達も何もしていないと学園に思わせたいからネ。」

超の言葉に、コクリと頷く五月。彼女はこの超包子の料理人であると同時に平和の象徴である。彼女の人柄と人望のおかげで、超や葉加瀬は裏で暗躍してもマークされたりしていなかった。

全員に指示を出し終えた超は、満足したように笑顔を見せる。これで今後の方針は固まった。学園内に危険な転生者はもう居ないし、警戒すべきはあくまで学園の一部の魔法使いと外部からの襲撃だけとなった。しばらくは京都みたいな騒動も無いし、文化祭まではのんびりできるな、と超は楽観していた。

そう、超は知らない。

原作における上位悪魔、ヘルマンの襲撃事件を。

そして今回は更に凶悪な敵が現れるという事を…。

【アリア・スプリングフィールド】

私は今、エヴァさんの別荘にいます。漫画で見た時も滅茶苦茶だなと思いましたけど、実際見ると違いますね。大きな宮殿みたいな建物と、嘘みたいに広いお風呂とか…

ええ、私さっきまでお風呂に入ってました。ネギと一瞬に。…というか皆で。

別荘に来た途端、エヴァさんが言ったんです。ネギ、少し臭うぞって。あの子やっぱり昨日お風呂入らなかったのね…と呆れていたら、エヴァさんが凄い顔してネギをお風呂に連れて行くんです。慌てて私も一緒に入りましたよ。何故か石田さんも一緒に入りました。こちらも凄い顔して。

とりあえず最初はネギの身体を私とエヴァさんで洗いました。ネギは…半分寝てましたね。私が頭を洗ってる最中、エヴァさんは身体を洗っていました。詳しくは言いませんよ?ただ、私のチョップが何度かエヴァさんにヒットしたとだけ言っておきましょう。

ネギの頭を洗い終えた頃…何だか体調がおかしくなったので、早々に私も身体を洗ってお風呂を出ました。ネギをエヴァさんに預けるのは心配でしたが仕方ありません。石田さんに抱っこされて、私は寝室に連れて行ってもらいました。

「アリア先生。ここの空気は魔力が濃いようです。先生は魔法無効化体質ですが、体内に取り込むと無効化出来ないみたいですね。」

なるほど、それなら納得です。そう言えば明日菜さんも惚れ薬入りのチョコレート食べて効果出てましたもんね。つまり、ここの空気は私には毒、と。……ヤバいじゃないですか、私!

「アリア先生。それも、私と仮契約をすれば解消しますよ。自動的に、魔力をマナに変換出来るようになります。」

え…あの、それはそうなんでしょうけど…。

「私の事、お嫌いですか？」

少し悲しそうな目で見てくる石田さん。ああ、そんな目で見ないで！罪悪感わいてきちゃうから！私は何とか言い訳を考えてあたふたします。が、ゆっくりと近づいてくる石田さんを拒みきれずに…

はい、キスしちゃいました。

すんごいのを。

本当にね、最近の子は進み過ぎです。私なんて初キスは大学生の頃よ？それも触れるだけの優しいやつしかした事なかったのに…。石田さん、ちょっと生活指導した方がいいかも。あ、芦先生の婚約者でしたね。なら芦先生が悪いんでしょう。あんな、あんなキス教えちゃうなんて…！

それはともかく。

確かに、仮契約をすると身体の重みや疲れは取れました。いえ、むしろ逆で、どんどん元気になって来ます。これは…京都の時みたいな事になってます？

「はい。アリア先生は今、空気中の魔力をマナに変換して取り込んでいます。この能力は魔法と違うので、私とのパスが切れてもアリア先生は変換能力を持ち続けられます。これで、アリア先生は魔法が完全に効かない体質となりました。」

…それは、凄いですね。これで私はもう魔法を怖がらずに済む、と。ありがとうございます、石田さん。凄く嬉しいです。感謝してます。

感謝してますから、そろそろ耳を舐めるの止めてもらえませんか！ついでにくすぐるのも止めて下さい！

そんなふうに私と石田さんが柔道の寝技に近い格闘をしていると、不意にガチャ、と音が聞こえてきました。開いたドアから入って来たのはエヴァさん。そして、寝ているネギを担いだ茶々丸さんでした。

「ああ、石田どうだった？上手くいったか？」

「問題ないですよ。体質は完全に変わりました。」

あれ、なにコレ。石田さんとエヴァさん、二人で私の体を治すつもりだったの？そう思って動きを止めた途端…

「なら、次は私だな。」

「え？……んんーっ！？」

塞がれる唇。絡みあう舌…って、何でまたエヴァさんまで！ちょっと皆マセ過ぎよ！エヴァさんも６００歳だかなんだか知らないけれど、外見は私と変わらないんだからね！？

混乱する私を、まるで獲物を仕留める獣のようなワイルドな目つきで貪るエヴァさん。ええ、もうどうにでもして下さい。私、今ならライオンに食べられるシマウマの気持ちが分かります。諦めるしかないですもん。

事が済んで一息つくと、私は身体の変化に気づきました。これは…エヴァさんの魔力？どんどん魔力が身体に流れ込んで来て、マナに変換されていきます。これは…凄く元気になってきましたよ？

「私とパスを繋いだからな。これでお前がマナ不足に悩まされる事もないし、そのうち私の魔力に適応して魔力耐性もつくようになる。身体を劣化させずに魔法を使えるようにもなるだろう。それに、な。」

ニヤリと笑うエヴァさん。いえ、もう充分ですよ？これ以上特典つけなくても構わないんですよ？

「私が魔力を提供し続ける限り、お前は生き続ける。擬似的な不死を手に入れたようなもんだ。」

わーーーっ！？

何ですかそれ！さっきまで虚弱体質だったのに、いきなり無敵になってるじゃないですかー！

「物理攻撃には弱いんだがな。それも、文珠とやらがあれば大丈夫なんだそうだ。」

「アリア先生の文珠はマスターの与えた能力ですから通常の文珠とは違います。マナで生成できますし、効果は絶大ですよ。もし『防』という文字を入れたら、戦車の砲弾くらい簡単にはじいてしまいますから。」

なにそれ…。私、いきなりとんでもなく強くなっちゃったの？余りの展開に、愕然とする私。そんな私に、エヴァさんが泣きそうな目で声をかけてきました。

「やはり…不死は化け物みたいで嫌か？でもこれは、あくまで擬似

的なものだ。私が魔力を止めればちゃんと死ねる。」

え？いや、その事は別にいいんですが…

「アリア先生、エヴァさんは共に長い時間を生きる友人を欲していました。勿論アリア先生の命はアリア先生のものですからその人生を終わらせたい時はアリア先生の意志を尊重します。ですが…その時まで、エヴァさんの友人であってもらえませんか？」

石田さん…。そうですね、身体が強くなるのはいい事ですし。エヴァさんとお友達になるのだって、全然構いません。良く考えたら、私が損する事なんて何も無いんですよね。

「アリア…いいのか？私と一緒にいて、一緒の時を過ごして…嫌じゃないか？」

もう、さっきまでの強引さはどうしたんですか。嫌なんかじゃないですよ。これから、よろしくお願いしますね、エヴァさん。

「ぅうう…アリア、アリア！」

抱きついてくるエヴァさん。その背中を撫でながら、私は昔を思い出していました。そう言えば、子供が小さかった頃、こうしてなだめてあげてたなー、なんて。エヴァさんって、たまに外見相応な女の子に戻るから卑怯ですよね。

石田さんは、優しい顔で私達を見ています。茶々丸さんはネギをベッドに寝かせながら、こちらを見て…いや、あれは録画してますね、確実に。ネギは…あれ？なんだか前よりやつれてるような。そう言えば、さっきエヴァさんにキスされた時変な味しましたね。ま

さか…

「エヴァさん。さっき口の中変な味したんですけど、ネギに何かしました？」

聞くと、泣いていたエヴァさんがビクッとしました。私の腕の中で、固まっています。これは、間違いないですね。

「怒らないから、話してくれませんか？」

そう言うと、エヴァさんは恐る恐る顔を上げて小さな声で言いました。

「…吸った。」

ギリギリギリギリ…

「いたたたたっ！アリア、痛い！怒らないって言ったのに！」

「あら、これは愛情のハグですよー！ほらほら、大好きー♪」

「ギャァァァッ！愛が痛い！？」

私の後ろで茶々丸さんと石田さんが何やら話していましたが、知りません。とりあえず今は目の前の敵…いや友人を仕留め…いや、愛してあげましょう！エヴァさん、覚悟して下さいね？

「ふにゃあぁぁぁぁっ！？」

腕の中で可愛らしい悲鳴をあげるエヴァさんを見ながら、私はな

んだか新しい感覚に目覚めそうな…そんな気持ちに身を奮わせるのでした。

アリアがエヴァンジェリンを抱きしめている後ろでは、茶々丸と石田がヒソヒソと話をしている。

「ところで、エヴァさんが吸ったのはどちらですか?赤いのと、白いのを思い浮かべたんですが。」

「そうですね。赤、と答えた方が、無難なのでしょう。一応、事細かに記録しているので後でご覧になりますか?」

「是非お願いします。」

二人は、ぐっすりと眠るネギを見ながら微笑んだ。その目は、どことなく…妖しい光をたたえている。

そんな風に見られているなんて露知らず、ネギは平和そうな顔で枕を抱きしめ、むにゃむにゃとつぶやくのだった。

第四十四話　その世界に憧れて

美容院で髪を綺麗に揃えてもらうと、木乃香は刹那と共に街を歩く。途中、姿見代わりに建物のガラス窓に自分を写してクルリと回ってみせる木乃香。その姿は、なんとも楽しそうだった。

「なあなあせっちゃん。短いのってやっぱり楽やな。頭軽くなった気するえ。」

「とっても似合ってますよ。印象がだいぶ変わりましたね。」

髪を短くした木乃香は、実年齢よりも幼く見える。活発で、無垢な印象を与えるのだ。何だか、小さい頃のお嬢様みたいだ、と刹那は思った。

京都から帰って来てから、二人は何だかとてもハイだった。それは、木乃香の勘当や破門が取り消しになったというのもあるが、それ以上に。今朝の祖父からの電話が原因だったりする。

『木乃香はもう好きに生きて構わんぞい。ワシも、もう見合いなぞ勧めんからのう。』

この急な心変わりは謎だが、木乃香はもう学園にも近衛家にも縛られずに自由に生きていける。刹那も、詠春から木乃香に仕える事を最優先して欲しいと頼まれた。つまり、他のしがらみを無視して木乃香と一緒にいる事ができるのだ。

二人は喜んだ。それはもう、はしゃいでいた。寮の中では小躍りして周囲を驚かせ、道を行けば飛び跳ねたりして散歩中の犬を困惑

させた。何もかもが輝いて見えて仕方がなかったのだ。

「なあせっちゃん、気づいとる？」

不意に、木乃香が聞いてくる。

「うちら、つけられとる。」

ちょっと深刻な顔で、刹那の耳元で囁く。それにあわせて、刹那もつぶやいた。

「ええ、勿論です。無力化しますか？」

そこまで言うと…

「「プッ……アハハハハハハ！」」

揃って笑いあう。

「あかんえ、せっちゃん。物騒やわぁ。」

「お嬢様だって雰囲気だしてたくせに～。」

なんだか緊張感が無い。それもそのハズ、つけて来ているのはクラスメート。朝倉和美だったからだ。余りにも下手な尾行に、さっきから吹き出しそうだった。

「京都では怖い目にあったらしいのに、懲りてないようですね。」

「ほんまに、アホやなぁ。聞きたい事あるなら、直接聞きにくればええのにな。」

そう言いながら、二人は曲がり角を曲がる。後方で、走り出す音

が聞こえた。タッタッタ…と革靴の音が響いて、一人の女子生徒が走ってくる。急いで曲がり角を曲がると…

「あれ、居ない！？」

朝倉が驚いた声をあげた。いくら何でも、この短時間に姿を消すなんて…

ガシッ！

「ひゃあぁっ！？」

不意に両腕をガッチリと組まれる。そこには、朝倉を挟むように木乃香と刹那がいた。

「容疑者確保や、せっちゃん！」

「はい、お嬢様。速やかに連行しましょう！」

「え、何々、どういう事！？つけてたの謝るから、乱暴しな…わあぁぁぁぁっ！？」

混乱する朝倉をしっかり二人で抱えながら、街を爆走する。もう、朝倉は失神寸前だ。何せ、途中から屋根の上やトラックの荷台、どうやったのか分からないが川の上を走っていた。そこら辺のジェットコースターより怖い。

結局朝倉が解放されたのは、隣街の喫茶店だった。今は、皆でケーキセットを頼んでのんびりくつろいでいる。

「うあ～、ひどい目にあった…」

朝倉が、ティースプーンをくるくると回しながらつぶやいた。カップの中のアールグレイに落とされた角砂糖が、サラサラと溶ける。

「自業自得です。あんな物騒な目にあったのに、何故尾行なんてしたんですか。」

「そうやえ。そんなんせんでも、聞きたい事あったら聞いてくれて構わんのに。」

二人の言葉に、渋い顔をする朝倉。

「あのねえ、朝からあんなテンションでいたら誰だって不思議に思うでしょ！皆が真相を調べて来てって言うから調べようとしたんだけどさ、あのテンションの二人に話しかけるのは至難の業だって。」

「「あぅ……。」」

確かに、ちょっとハシャぎ過ぎてたかもしれない。少し反省する。

「まあ…こっちも尾行したのは謝るけど。で、一体どうしちゃったっての？二人とも、あんなにハシャぎまくる質じゃないでしょ。それに…」

チラッと木乃香の髪を見る。

「失恋って言うには明るすぎるし…そこら辺の真相を教えてもらえたら嬉しいかな。」

木乃香と刹那は顔を見合わせる。確か、朝倉はこちらの事情を知っているハズだ。なら、話しても問題ないだろう。

木乃香は、ダージリンで軽く喉を潤すと語り出した。自分の事、

刹那の事、近衛家の事…。朝倉も、いつの間にかお茶請けのモンブランを食べる事も忘れ聞き入っていた。気づくと、昼下がりに店に入ったのに、もう辺りは夕日でオレンジ色に染まっていた。

「…で、うちとせっちゃんは自由になりました。めでたしめでたし。」

木乃香が語り終えると、朝倉はどっと疲れた顔をする。これは…書けない。書いたら、学園の怖い人に消される。

「なんか、聞かなきゃ良かったかも…。でもまあ、おめでとう。あんな物騒なのに巻き込まれるなんて、御免だよね。」

朝倉の言葉は、実感がこもっていた。だからこそ、二人はそう言ってもらえて嬉しかったのだ。誰かに祝福されるなんて経験、二人には殆ど無かった。

「ありがとう、朝倉さん。」

「うん、ほんまに嬉しい。」

そう言って、二人は笑顔になった。そして、三人はやっとケーキを食べ始める。ケーキは何だか、特別に美味しく感じられた。

店を出ると、木乃香は朝倉を近くの公園に誘った。たくさんの噴水がある事で有名な公園で、そこにはたくさんの子供やペット連れの人がいた。

「せっかく来たんやもん、みんなで写真とろか。朝倉さんも、何かの記事に使えるかもしらんよ。」

「そーだね。空も綺麗だし、いい写真撮れるかも。」

にこやかに了承する朝倉。それを見て刹那は苦笑いする。お嬢様、さっきの今でもうですか…と。

公園の中でも、真っ黒なタイルが敷き詰められた場所の一番中央に立つ木乃香と刹那。カメラを三脚に立てた朝倉が、タイマーをセットして二人のそばに行く。

「朝倉さんは真ん中や。」

「え、私は端っこでいいよ。」

「いえいえ、朝倉さんのおかげで楽しかったですから。今日の主役は、朝倉さんですよ。」

何だかんだ言って、刹那だってノリノリだ。そして、三人が姿勢を正した次の瞬間。公園のスピーカーからクラシックの曲が流れ出し…

シュワアアアアッ！

「きゃあぁぁぁぁぁぁっ！？」

朝倉たちの足元から凄い勢いで水が噴き出した！朝倉のスカートは水に巻き上げられマリリンモンローも真っ青な下着ショーが始まった。

カシャッ

そんな朝倉のベストショットを捕らえるカメラ。木乃香と刹那も、朝倉と一緒になって噴水の中ではしゃいでいた。

きっと、この写真に写った光景はとても綺麗に違いない。煌めく水しぶきの中、もっと輝いてる三人が写っているのだから。

その頃、エヴァンジェリンの別荘ではネギが目を覚ましていた。凄く、ぐっすり寝たような気がする。寝過ぎて頭がボーっとしているくらいだ。

（あれ、お姉ちゃんは？…今、何時なんだろう…）

ベッドから出て、周りを見渡す。ベッドは他にもたくさんあったが、寝ている人は居なかった。仕方なくネギは寝室を出ると、皆の姿を探して廊下を歩いて行く。

知らない建物。暗い廊下。それは、とても怖かった。早くお姉ちゃん見つからないかな…。ネギは顔を強ばらせながら、廊下を歩く。パタパタと、スリッパの音が奇妙なくらい大きく響いた。

しばらくして…。

ネギの前方に、何やら白い人影が現れる。背は普通の大人くらい。石田か、茶々丸だろうか。ネギはその影に声をかけようとして…固まった。

それは、見たことの無い人だった。痩せこけた頬、落ちくぼんだ目元。長い髪は白く、老婆のようだ。それはまるで…幽霊そのものだ。ネギは恐怖に悲鳴をあげそうになるが、あまりに怖くて声すら出ない。その見知らぬ人物はゆっくりとネギに近寄ると…

「ああ、貴方がネギなのね…」

優しく、ネギの名前を呼んだ。

ネギは驚く。何故、自分の名前を…？

「少しだけ、繋いでいるの。ここは、夢の中。私の夢と、貴方の夢が重なっている所。」

その声は、今にも消えてしまいそうなくらい弱かった。ネギにはそれこそ幽霊の声に聞こえて怖いのだが、我慢して聞いた。

「あなたは？何故僕の名前を…？」

その女性は、力無く微笑む。

「さあ、忘れちゃった。けど、ずっとあなたに会いたかった気がする…。あなたに会って…私も、お友達に…」

そこまで言って、女性の表情が激変する。穏やかだった顔は苦悶の色に染まり、身体は土気色になってゆく…

「ぐ、ぅあぁ…！イヤ、イヤァァァッ！もう、やめて！殺して、私を殺してえぇぇぇ！」

それは、まるで別人のような声。大人の女性のようだった声は、癇癪を起こしたような少女のような声に変わっていた。自分の身体

を抱きしめるようにして、女性はうずくまってガタガタ震えている。

ネギは、混乱する。

混乱するが、すぐに行動を起こした。

「落ち着いてください。今、ヒーリングをかけますから。」

うずくまる女性を優しく抱きしめ、ネギは使える回復の魔法を必死で唱える。額には大粒の汗。意識が朦朧とするが、そうは言っていられない。目の前で苦しんでいる人がいるなら、何としてでも助ける。それが、ネギの知っている立派な魔法使いの姿なのだ。

どれくらい、時間が経過しただろうか。ネギの腕の中で、女性は穏やかな寝息をたて始めた。安心するネギ。ああ、これでひとまず安心かな。そう思って、立ち上がろうとして…

フラッ…

よろけるネギ。魔力を使いすぎたのだ。

ガシッ！

その時、フラついて倒れかけたネギの腕を掴む手が。

「よくやったな、ネギ。」

その声は…どこかで聞いた事のある声。いや、忘れるわけがない。

六年前…村で自分を助けてくれた英雄。

「お父…さん？」

「おう。夢の中だけどな。」

父、ナギ・スプリングフィールドだった。

「お…お父さん…お父さん！」

思わず泣き出して飛びつくネギ。ナギは少し驚いたが、しっかりとネギを抱いてやった。そして、空いた手を女性に向けると、光を放つ。

…女性は、ゆっくりと光の中に消えて行った。

「お父さん…？あのひとは？」

「ん？ああ、ムチャしやがったからな。身体に戻してやったんだ。…ネギ、よくやったな。お前の魔法のおかげで、少し持ち直したみたいだぜ。」

頭をくしゃくしゃと撫でるナギ。ネギは誉められて嬉しいのか、幸せそうな顔をした。

「お父さん、これは夢なの？お父さんも、夢なの？」

ネギが、少し悲しそうな声で聞く。やっと会えたと思ったら、夢だなんて。そんなの、イヤだった。

「まあ、夢と言えば夢だがなぁ。言ってみりゃお前の夢に俺がお邪

魔してんのさ。現実に俺は今ここにいる。あー…説明がめんどくせえ！いる！それでいいだろ！？」

キレた。なんだ、この親。

「お父さん、僕嬉しいです。夢でもこうしてお話できるなんて…夢みたいです。」

「ははは、お前も段々言ってる事滅茶苦茶になってきたな。まあいいさ、夢があって。」

そう言って、二人は笑いあった。何という中身の無い会話。せっかく会えたのに、この二人にはこれで充分らしい。

「なあ、ネギ。」

しばらく笑ってから、ナギは言った。

「俺は、世界樹の中にいる。さっきの女もな。次、世界樹が光る時にゃまた出て来てやるからよ、そん時はゆっくり話でもしようや。」

「世界樹…の中？」

「ああ。まあ、なんつーかな…。世界を守る為に、頑張ってんだよ。驚けネギ！お前のとーちゃんはスーパーヒーローだ！」

「ふわー、凄いや…」

ネギは素直に感動している。よく分からないが、とにかく凄いという事は、分かった。

「という事でだな。俺は忙しくて外に出れねえ。でも、近くにいるから寂しがるなよ。お前の事は、いつも見ていたぜ。」

ポロポロと涙がこぼれ落ちる。何よりも、嬉しい言葉だった。自分には姉がいる。ネカネがいる。アーニャもいる。けど…やはり、寂しかったのだ。夢でも…いつも見ていると言ってくれて、ネギは嬉しかった。

「あー…泣くなって。仕方ねぇな。じゃあ、もしあんまり寂しいようならあの背の高い女に頼めよ。えーと…石田とか言ったかな。」

「石田…留美さん?」

「ああ。あいつなら俺と話せるからな。ま、なんにせよ次の世界樹発光…文化祭だったかな。それまでお別れだ。ネギ、それまでにもう少し強くなれよ。」

「お父さん…?」

気づくと、ナギの身体が透けてきていた。ネギは焦る。もっと話したい事があったのに…。しかし、それをグッとこらえて、ネギは笑顔を作った。

「お父さん、お元気で。見ていて下さい、きっとお父さんを驚かせるくらいに強くなってみせます!」

「おう!そん時ゃ俺がぶちのめしてやるよ!」

なんというドメスティックバイオレンス。しかしネギはひるまず頷いた。それを、満足そうに見つめるナギ。いつしか光に包まれて、ナギはそのまま夢の世界から姿を消して行った。

…廊下に、静寂が戻る。

そこには先ほどの女性も父の姿も無く、ただ暗闇だけがあった。

ネギは顔に張り付いた笑顔を解くと…

「ぅ…ぅう…お父さん…！」

ただ、一人で涙を流し始めた。

夢が覚めるまで、ネギはただひたすら父の温もりを思い出して泣き続けるのだった。

第四十五話　アリアの従者とネギの勉強

夢から覚めると、そこは間違いなくエヴァンジェリンの寝室だった。ネギは慌てて飛び起きると周囲を確認する。夢と同じく誰も居なかったが、大きな窓からは陽が差し込み部屋は明るかった。

ネギは頬をつねる。うん、痛い。間違いなく現実だ。

ベッドから出て、身体を動かす。身体は至って快調、むしろかなりスッキリしている。何でだろう?ただ魔力だけはかなり減っているようで、あれがただの夢でない事は明らかだった。

「お父さんと、会えた…。」

ネギがつぶやく。その表情は明るかった。泣いてしまったけど、この麻帆良に父がいる事が分かったのだ。きっと、あれは夢だけど夢じゃない。約束通り、文化祭には会えるだろう。ならば、うじうじ悩んだりなんかしていられない。

よし、頑張るぞ!

気合いを入れてドアまで行くと、ドアは勝手に勢いよく開いた。

ガッ!

「あぶぁっ!?」

尻餅をつく。

「あ、ネギ先生。すみません、寝ているものかと。」

開けたのは、茶々丸だった。出鼻をくじかれ涙目のネギ。おでこ

を抑えながら立ち上がると、茶々丸に挨拶をした。

「おはようございます、茶々丸さん。」

「おはようございます、ネギ先生。朝食の準備が出来ています、こちらへどうぞ。」

朝食？今は何時だろう、と不思議な顔をする。そして、思い出した…ここは時間の流れが緩やかなのだ。まだ休日は続いている。

「なんだか、連休みたいで楽しいですね。」

ネギが言うと、茶々丸は微笑んだ。

「毎日続くと、癖になりそうですけどね。」

「？？？」

言ってる意味が分からず戸惑うネギの手を引いて、茶々丸はダイニングルームへと向かった。

「はぁ？ナギに会っただと？」

「はい、夢の中ですけど。」

広いダイニングルームで朝食をとっている時。ネギは皆に夢の話

をした。アリアは不思議そうな顔を、エヴァンジェリンは訝しむ顔を。茶々丸は無表情で、石田は…なんとも渋い顔をしていた。

「それは寝覚めの悪い夢だったな。私も何度か奴の夢を見たが、毎回散々な目に遭って飛び起きるんだ。」

少しムカムカしながら言う。

「不思議な夢でした。世界樹の中にいるとか、次に発光する時は外に出れるとか…あ、石田さんなら自分と話せるとも言ってました。変ですよね。」

そう言ってネギは笑うが、内心怯えている。ここで石田に否定されたら、さすがにへこむだろう。しかし石田は事も無げに返した。

「それは、世界樹の精霊ですね。確かに何度か話しましたよ。ナギって名前でしたね、そう言えば。」

カチャ…

アリアとエヴァンジェリンのフォークが止まる。今日は典型的な洋風の朝食だが、アリアはハムを、エヴァンジェリンは目玉焼きを皿に落とした。

「な、な、何だと…?」

「石田さん、今の…本当ですか?」

「ええ。しかしあれがネギ先生の父親とは…。葱の父親が世界樹とか、生物学的にどうなってるんでしょうね。」

プチッ…

何かが、切れた。

「どうなってるのかは、お前の頭の話だボケェェェ！」

「何でもっと早く教えてくれないんですかあぁぁぁぁっ！」

これは石田に怒っても仕方のない事だ。勿論石田は涼しい顔で反論する。

「ネギ先生の関係者だなんて知りませんでしたし、そもそも私にはどうでもいい事ですから忘れてました。」

火に油を注ぐ発言。アリアたちは怒っているが、石田は全く気にせずネギを見た。

「あの精霊は滅多に人前に出ないし、私でもテレパスを繋げられる確率は低いです。けど、もし繋げられたら何か伝えましょうか。伝えたい事、ありますか？」

ネギは少し迷ったが、首を横に振った。

「いつも見ているって、言ってくれましたからいいです。お父さん、忙しいみたいだから…心配させたくないし、負担になるのはイヤなんです。」

なんと健気な子なんだろう。石田は、ネギを見直していた。少なくとも…

「会ったらぶっ飛ばすと伝えて下さい！」

「えっと、えっと、…足を舐めろ！そして私のものになれと伝えろ！」

…この二人よりも、大人だ。石田はため息をつくと、二人の怒声をBGMに、優雅に紅茶を飲み干すのだった。

朝食を終え、アリアとエヴァンジェリンが落ち着くと、早速今後の事に関する打ち合わせが始まる。アリアは今の身体に慣れる為に、ネギは修行の為にしばらく別荘に泊まる事になった。

「で、ネギの修行だがな…。魔力容量はかなりのものだが、出力に欠ける。しばらく、魔力を扱う基礎を重点的に鍛えるぞ。」

原作であれば、ここでは戦い方のタイプなどを説明する所だ。が、エヴァンジェリンはそれ以前の段階のトレーニングの話をする。それには理由があった。

「お前の戦い方は、とにかく動きまくり逃げまくり、隙をついて攻撃するようにすればいい。決して、真っ向勝負を挑むなよ。お前には相手の攻撃を受けきる体力も無いし、成長期に身体を壊したら一生響くからな。」

何気に、ちゃんとネギの身体の事を考えていた。過保護かもしれないが、これが普通なのだ。原作のネギが、異常なのである。

「そこで…まずは魔力出力を上げる修行だ。茶々丸、あれを持って来い。」

「はい、マスター。」

それまでそばに控えていた茶々丸が、少し離れた棚へと向かう。ガラス戸を開けて、中から透明なねじ巻きを取り出しエヴァンジェリンに手渡した。

「これは、茶々丸の動力となるゼンマイを巻くねじ巻きだが…魔力を伝えにくい材質で出来ている。お前には朝昼晩の三回、これで茶々丸に魔力を送ってもらおう。」

「ねじ巻き…？」

透明なねじ巻きを渡されて、戸惑うネギ。試しに魔力を通してみるが、確かに通りが悪い。

「何だか魔力が少ないな…。後で、エーテル薬を飲ませてやろう。とりあえず、昼からはその訓練だ。それまでは、ゆっくり休んでいろ。」

エヴァンジェリンはそう言ってから、次にアリアを見る。

「アリアは私の魔力に身体を適応させる訓練だ。体質自体を変えるからかなり辛いと思うが、それを乗り越えれば普通に魔法を使えるようになる。…覚悟はいいか？」

「ええ。私も、守られてばかりはイヤですから。簡単には死なないですから、大丈夫です。」

自信満々のアリア。現在アリアのマナはＭＡＸである。やる気に満ちていた。

「じゃあ、これから外でアリアは特訓に入る。石田も手伝え。茶々丸はネギにエーテル薬を飲ませて、昼になったらネジを巻かせろ。」

「了解です。」

そう言って微笑む茶々丸。なんだか、少し嬉しそうなのは気のせいだろうか。

…とにかく、こうして今後の方針は決まった。エヴァンジェリンはアリアと石田を連れて外へと出て行き、ネギは後片付けを終えた茶々丸と共に部屋へと戻る。その際、茶々丸はネギに向かって提案をした。

「どうでしょう。昼まで時間がありますから、少しお勉強などしてみては。知識を強化するのも、魔法使いとしての修行の一つですから。」

「茶々丸さん…そうですね。僕も勉強は好きですから、そうします。」

ネギは喜んでその申し出を受け入れる。茶々丸はにこやかな笑顔を浮かべていたが、目には不気味に光るものをたたえていた。これは…危険だ。

茶々丸の思惑にも気づかず、ネギは手を引かれるままに部屋へと入って行った。彼の人生における、大きな転機が訪れようとしていた…。

【石田留美】

ふふふふふ…言ってしまいました、世界樹の秘密。マスター、ごめんなさい。そう言えばあなたにも言ってませんでしたね、コレ。教えたらどんな顔するのでしょう。今から想像してますが楽しくて仕方がありませんね。

「さて、アリア。これから魔力をお前に通すが…お前はマナを外に放出しろ。」

あら、始まってました。いけないいけない、私は私で仕事をしなくては。エヴァンジェリンさんの信頼を得てうまく取り入るのが今の私の任務なのですから。

「私、マナを外に出す方法なんて知りませんよ?石田さん、どうすればいいんですか?」

ああ、そんなの簡単です。文珠を精製するか、劣化覚悟で魔法を使うかすればいいんです。魔力耐性をつけたいのなら、魔法を使う事をオススメしますが。ヒーリングなら私が担当しましょう。

「そうだな。アリア、魔法を使え。空に向かって魔法の射手でも放てばいいだろう。」

「分かりました。」

表情が少し固いですね。きっと、身体の劣化が怖いのでしょう。仕方のない事かもしれません。

…訓練は、連続で二時間続きました。

アリア先生の精神力は、もしかしたら人間のレベルを超えているのかもしれません。体内のマナを、毒である魔力に変換して身体を削って放出して、また体内に毒を取り込む…自動的に魔力をマナとして取り込み身体を回復させたら、また魔力に変換して放つ…気がふれてもおかしくありません。

毒を、神経の集中している指先から放出するのです。痛みはまず指先から始まり、そこから全身の神経を蝕みます。そうですね、虫歯の痛みが全身に駆け巡るようなものです。拷問ですよ、ほとんど。

そして、二時間後。アリア先生は全身から滝のような汗を流しながら、笑顔を浮かべて言いました。

「もう、痛くなくなりました。これで、魔力は平気になったんですよね？」

化け物ですね。半端じゃないです。言ってみれば、身体を壊して作り直したようなものなのに。人間で言えば、細胞を再生し続けて古いものから新しいものへと入れ替えるような、そんな乱暴な特訓だったのに。

「はい、アリア先生。今からヒーリングをしますから、横になって下さい。」

そう言って、私は彼女にヒーリングを施します。小さな身体で、よく耐えたものです。私が、何故こんな無茶が出来るのですか、と聞いたら彼女はこう返しました。

「私だってネギと一緒で担任ですからね。私にも、皆を守りたい気持ちはありますよ。」

そう言えば、この人も自己犠牲の精神が結構強い人でしたね。エヴァさんも苦々しい顔でアリア先生を見ていました。

「なあアリア。頑張るのはいいが、私達の見ている所だけにしておけよ？心配で仕方ないんだからな…」

ふふふ。やはりエヴァさんはアリア先生には甘いんですね。しかし、確かに無茶する所は直りそうにないですし…せめて緊急時に念話か何か出来たら良いのですが。

…あれ？

そう言えば、忘れてました。

私とエヴァさんは、アリア先生と仮契約したんですよね。カード、出ませんでした？

「あ、そうだ！アリア、お前カードは持ってないのか？私の手元には無いから、お前が持っているハズだ。」

言われて初めてアリア先生も気づいたようです。ゴソゴソとスカートのポケットに手を入れると、そこには二枚のカードが。

『永劫を生きる魔術師　エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』

『世界を渡る金星の女神　イシュタル』

…あれ？

「ど…どういう事だ！私が従者だと！？それに…石田、お前は何者だ！？」

「石田さん…世界を渡るって何ですか？イシュタルって…」

オウ、シット。バレテーラー。

なんというか…
こんな事もあるんですね。

私は二人に詰め寄られながら、遠くの空にマスターの顔を思い浮かべていました。マスター、ごめんなさい。抜けている所は私も同じなようです…

ちょっと、涙がこぼれました。

石田が窮地に立たされている時。ネギと茶々丸は二人で仲良く勉強をしていた。茶々丸はとてもご機嫌なようで、いつもより笑顔が輝いている。ネギは…何故か顔を真っ赤にしていた。

「では、以上を踏まえてこれから動画を流しますので、ネギ先生は

しっかりと見ていて下さいね。」

「ううう…これ、本当に魔法使いの勉強なんですか？」

もじもじしながら言うものの、茶々丸はそれに答えずノートパソコンを操作する。モニターに映し出されたのは…

「あれ、僕？」

浴室、そしてネギだった。身体を洗っているのはエヴァンジェリン。ネギの身体を丁寧にスポンジで撫でていた。すると…

「え、何を…？」

ゆっくりと、覆い被さる。お腹の辺りに顔がくるような体勢。湯気でよく見えないが、何かやっている。…まさか。

「わ、エヴァンジェリンさん、ダメです！そんな所…！」

「これは昨日行われた事です。もう、純粋だったあの頃には戻れないんですよ、先生。」

「うわーん！僕、先生なのにー！」

涙目でモニターを見るネギの表情を見ながら、茶々丸は背中にゾクゾクと何かが走るのを感じていた。

第四十六話　ネジ巻きネギ

その日…超鈴音は、葉加瀬達に給料を支払った後に麻帆良学園を散歩していた。勿論ただの散歩ではなく、監視カメラや警備ロボットたちのチェックや転生者の有無を確かめていたのだ。これはもう日課になっており、忘れると少しソワソワするくらいになっていた。

「ふむふむ、佐藤さんタイプは順調ネ。けど、冬はやっぱり動きが鈍るかラ田中さんタイプも改良しなくちゃならないかナ？」

今は、図書館島の周りで警備をしていた佐藤さんタイプを見ていた。駆動系の消耗が無い為長期の運用が可能という優秀な機体だが、寒さに弱いという欠点を持つ。小鳥や猫に懐かれたり、中々温厚な性格をしている。

「ん？」

不意に佐藤さんタイプが超の後方に目を向ける。超もつられてそちらを見た。

「超さーん！」

「やっと見つけましたわー！」

図書館島へ続く長い橋を、魔力強化した身体で疾走する明日菜とあやかが、こちらに声をかけてきた。…というか、魔法の秘匿とかいいのだろうか。

「どうしたネ、そんなに必死になっテ…」

肩で息をする二人に、少し訝しんで声をかける。何の用があると

いうのか…。

「ハァ、ハァ…あのね、私たちを、鍛えて欲しいの…。」
「明日菜さんが、狙われてると知ったら…弱いままではいられませんわ。ハァ、ハァ…」

どうやら、この間の戦闘がよほど堪えたらしい。確かに、相手が式鬼になった途端に押されていた。純粋な肉弾戦ではやはり負ける事があるのだ。

…超は考える。何故、私なのかと。しかしそれは直ぐに分かった。魔法無効化出来る二人には、魔法使いとの戦いは怖くない。故に、今は魔法使いよりも格闘家に教えを請う方が良いのだろう。しかし…

「二人とも、武器を使う戦い方を教えて欲しいのかナ？なら、刹那や木乃香の方が向いてるヨ。」

「ううん、違うの。純粋に、格闘技を教えて。」
「いちいち変身しないと戦えないのは危険ですから、生身である程度戦えるようにしたいのです。私は柔術を嗜んでますし、明日菜さんもクー・フェイさんに武術を習った事があるらしいですし…」
「お願い、超さん！超さんなら戦い慣れてるし魔法も使える。戦い方もよく知ってるみたいだし、私たちを強くして欲しいの！せめて、また変な奴らが現れた時に自分の身を守れるくらいに…」

立て続けに言われて戸惑う超。なんだ、この情熱は。明日菜って、こんなに魔法関係に積極的だったかな…。そんな風に思ったが、ここまで必死な人間を無碍に扱うのも気がひける。仕方ない…。

「分かったヨ。クーと一緒で良かったラ、稽古つけてもいいヨ。」

「やったー！」
「ありがとうございます、超さん！」

元気に飛び跳ねる二人。やれやれ、何だか変な事になった…。超は苦笑いしながらも少し嬉しかった。こうして頼ってくれるというのは…やっぱり嬉しいものだ。

前は、秘密主義で何でも一人でやろうとしていた。分かってくれる人だけ傍に居てくれたらいい…そんな風に思っていた。しかし、沢山の仲間に囲まれるネギを羨ましく思ってもいたのだ。

龍宮に、報酬を支払おうとして断られた時に聞いた言葉…

「汚い事をしていたら、あの子に嫌われそうでね」

…あれは、やっぱり耳に痛かった。心から信頼しあえて、利害抜きにつながりあえる仲間に憧れていた。別れの時になって、やっとクーや葉加瀬、五月たちがそうした仲間だと気づけたが…もっと早く気づいていたら、と悔やんだものだ。

今度は…皆と手を取り合えるのかな。超は、明日菜たちの喜ぶ姿を見ながらそう思っていた。

【アリア・スプリングフィールド】

ふんふんふんふんふーん♪
私は…私はマスターです！ご主人様なのです！

バキッ！

痛いです、やめて下さい反省してますから。エヴァさんもたまにはいいじゃないですか、誰かの従者になるのも。

「い、や、だ！命令するのは好きだが命令されるのは大嫌いだからな！」

そんな事自慢気に言わないで下さい。
…エヴァさん、ちゅーしたいからほっぺ出してください。

「え、あ、うん。」

思いっきり言う事聞いてるじゃないですか。まあ、しますけど。
ん…。

しかし、とんでもない話もあったものですね。平行世界の女神様が私の従者とか。あれ、石田さん？なんで泣いてるんですか？

「いえ、なんだかもうどうでも良くなってきました。麻帆良爆発させてやろうかなー、とか。」

やめて下さい、なんだか分からないけど謝りますから！…別にいいじゃないですか、他言はしませんし。この世界に来た理由も、悪い事とは思えませんから。

「まあ、どうでも良くなったので立ち直りますが。」

早いですね。そんなに切り替え早いとか嘘泣きでしたね？

「石田…。お前の話が本当なら、その危険な転生者とやらを全員倒せば、この世界を守る事が出来るのか？」

「いえ。それだったら簡単だったんですけどね。馬鹿な神族がまだこの世界に何人かいるらしいですし、マスターの話ではその神を利用して動いている連中もいたり…先はまだ見えませんよ。」

むう…耳が痛いですね。私も、その神様の口車に乗ってこの世界に来てしまった存在ですから。

「アリア、お前は皆から好かれているからいいんだ。問題は、この世界でムチャする馬鹿どもだからな。お前と会えた事だけは、その神とやらに感謝してやる。」

エヴァさん…ちょっと、泣かせないで下さいよ。

「どの道、転生者に関してはほとんど始末しましたから、これからは神と妙な団体ですね。気をつけないといけないのは。そして…」

ネギが会ったという女の人ですか。

「何なんだ、その女は。世界樹の中にいるとか言ったな。あのジジイ締め上げて吐かせるか。」

何でそう暴力的なんですか！…でも、本音を言えばそうしてやりたいです。あのネギの話が本当なら、馬鹿親父が居ない理由を知っ

てて黙ってるという事でしょう。ネギや、家族の皆の気持ちを何だと思ってるのかしら。

「そこら辺は、まだ触れなくて良いでしょう。ネギ先生の話では、ナギさんは文化祭には世界樹から出てくるらしいですから。その時に詳細を聞き出せばいいのです。」

そうですね。コンタクトの取れる相手ですから、そっちは後回しにしましょう。

「待て」

待ちません。

「待てと言っている！」

ギリギリギリギリ…
いひゃひゃひゃひゃ…！ほっふぇひっはらないで！

「奴を引きずり出して聞けばいい話だろう！今すぐ世界樹叩き切って中から…」

ガスッ！

「落ち着いて下さい、エヴァさん。」

「おま、魔法障壁まで無効化するのか！二人して突っ込みに特化してるな！？」

エヴァさんはボケに特化してきてますよね。脳は不老ではないの

でしょうか。
…コホン。
とりあえず、今やらなくていい事は後回しです。それより、その怪しい団体の襲撃に備えて迎撃体制を整える事の方が先ですね。神様は、こちらの能力を無効化してくるんですよね？

「はい。神が付与した能力だけですが。ただ、アリア先生の能力は付与というよりマスターが貸した能力ですから、マスターしか取り除けません。同じく私の能力も取り除けるものではないです。アリア先生は、神々と対抗出来る戦力としては最強クラスでしょう。」

…なんと。この間までのひ弱な私は何処へ…。

「フン、アリアには最強の魔法使いの私の魔力を与えてるんだ。同じく最強なのは当たり前だろ。」

もう、拗ねないで下さいよ。抱っこしてあげますから。

「そうですね…。今やるべき事は、付与能力に頼らず戦えるように、麻帆良ガーディアンエンジェルズの実力の底上げでしょう。幸い、このクラスには有能な人間が集中してますので、この別荘を使って鍛え上げていけばよろしいかと。」

ううむ…つまり、クラスの生徒たちを放課後に別荘を使って鍛える…部活みたいなものですね。

「私はまだ許可してないんだが…。」

撫でます。

「う…うむ、まあ良いけどな。場所を貸すだけなら構わん。もっと撫でろ。」

「とりあえずは、その方向で良いでしょう。超さんにも言っておきますから、参加できる人間は前もって調べてエヴァさんに伝えます。…そう言えば。」

はい？

「もう昼すぎですが、ネギ先生は？」

そうですね、お腹もすいてきましたから呼びに行きますか。ほら、エヴァさんも「はにゃ～」とか言ってないで行きますよ。

「ハッ！お花畑は？川の向こうに誰かが見えたんだが…」

危ない所でした。

私はエヴァさんを抱えながら、ネギのもとへと向かう事にしました。さてさて、ネギはうまくやってるのかしら？

ネギのいる部屋へと向かうと、石田は不穏な雰囲気を感じて立ち止まる。訝しげに見るアリアとエヴァンジェリンを制して、耳を澄ませると、中からネギと茶々丸の会話が聞こえてきた。

「茶々丸さん、もう、ダメです…僕、僕…」

「はぁ…ん…ネギ先生、まだ…全然足りませんよ…ほら、もっと…」

「ああっ、茶々丸さん動かないで！僕、もうダメです！」

「あ、あぁっ！…ダメって言ったのに……っ！」

ぷるぷると震えるアリア。堪えきれず、ドアを蹴破り中に入る。

「何やってんのアンタたちはあぁぁぁぁぁっ！？」

「わあ、お姉ちゃん！？」

「あふっ！？沢山！？」

驚いてネジを思いっきり回すネギ。突然勢い良く魔力を注入されて、茶々丸は身体をビクビクと痙攣させてベッドに倒れ込んだ。これは…ネジ巻き？

「凄いじゃないか、ネギ。まさか茶々丸のエネルギーを満たすとはな。」

「え…？」

そこで、やっと冷静になってアリアはネギたちを見る。ベッドの上の二人は別に着衣の乱れも無く、ネギはネジ巻きを持って固まっている。茶々丸は気持ち良さそうな表情で倒れているが、これはエッチな事じゃなくて…

「ああ、エネルギーの補充をしてたんですか。」

「紛らわしいわぁぁぁぁぁっ！！」

石田の言葉に、アリアが吠えた。怯えるネギの手からネジ巻きを取り上げて、アリアは思いっきり茶々丸の後頭部の鍵穴にねじ込む。

「んあっ！？アリア先生、何を！？」

「うちのネギに悪い事教えないで下さい！代わりに私が今日の分を巻きます！」

ありったけの魔力を放出して、アリアはネジ巻きを回した。

「アアァァァァ〝ァァッ！？…ァアッ、アァァァッ！」

「くぬっ、くぬっ！どんどん行きますよ！」

「ひあぁぁっ！？あ、あふぁっ、はあぁん！」

ベッドの上をのた打ち回る茶々丸、責め立てるアリア。それを見ながら、石田とエヴァンジェリンは思うのだ。

…一番エロいのは、アリアじゃないか、と。

「お、お姉ちゃん、それくらいで許してあげてよ！茶々丸さん、死んじゃうよ！」

「ふぅん、あふっ、ネギ…先生…たす…け、ァアアッ！？」

「いいですか！ここがいいんですか！まだ満足できませんか！」

「お姉ちゃーん！？」

阿鼻叫喚。

結局アリアが冷静を取り戻したのは、それから３０分後の事だった。後に茶々丸は語る。快楽も度を過ぎると苦痛にしかならない、と。そして、その限界を超えた先には新しい世界が待っている、と……。

第四十七話　ネギが何かに目覚めました

麻帆良学園に勤める教師の住まいは大きく二種類に分けられる。独身寮と、家族で入る社宅だ。芦優太郎は初めこそ独身寮に住んでいたが、あまりにも盗聴されやすい為寮を出た。今は社宅に移り住んでいるが…

パキッ

「やれやれ、また隠しカメラか。他にやる事はないのかね。」

部屋の中に小型のカメラを見つけ、すぐさま潰す。今や学園側に徹底マークをされている芦。今日はコンビニで買い物をしただけだったのだが、その短い間にカメラを三台仕掛けられていた。そして…

「警察沙汰にされたいらしいな。芦財閥を舐めないで欲しいものだ。」

そうつぶやいてから、コンセントの差込口のカバーを取る。中からは緑色の基板が現れた。盗聴機だ。超鈴音の持っているものに比べればオモチャのようなものだが、やはり気分は悪い。社宅も…同じようにザルなのだ。

これは、いっそ麻帆良の教師陣を軒並みリタイアさせてからゆっくり麻帆良の深部を探るか…などと考えてしまう。とりあえず、芦は携帯電話でこの世界の実家へと連絡をする。出てきた執事にこう告げた。

『麻帆良学園の近くの芦グレートガーデンホテルの一室を、私専用

の部屋にしてくれ。やはりこれからはそちらに泊まろうと思う。』

この世界の芦も、財閥の御曹司という設定なのでこのくらいの我が儘は利く。社宅を借りたまま、明日からはホテルに泊まろうとしていた。いい加減、パイプ製の簡易ベッドで寝るのも疲れてきていた、というのも大きな理由だ。

（さて…そろそろか。）

時計は夜の１０時。約束の時間だ。芦は律儀に木乃葉たちとの約束を守っていた。

（アシュ様、今大丈夫？もしもししてええ？）

…早速、木乃葉から念話が入った。

（ああ、構わない。声が聞けて嬉しいよ。）

こうしたセリフをさらっと言えるのが、芦の芦たる所以なのだろう。

（嬉しいわあ…いやいや、浸っとる場合やなかった。あんな、今日うちらの所にあのデスメガネ来よったんよ。アシュ様の事とか色々調べとったけど消さんで良かったんかなぁ。）

高畑…学園長の仕事というのは芦の身辺捜査らしい。

（放って置いて構わないさ。聡明な君の事だ、私の不利になるような事は言わなかっただろう？それでいいんだ。わざわざあの男を攻撃しなくてもいい。）

（そう言ってもらえて、ほんまに嬉しい…。うち、なんも言ってへんよ。あんたに話す事なんか無いわ、って突っぱねといたから。）

（いや…そこら辺はやんわりかわしてくれれば良いんだ。何も喧嘩腰にならなくていい。）

木乃葉の従順な所は非常に気に入っているのだが、敵と判断すると容赦ない所が少し怖かった。しかし…

（月詠。そろそろ話しかけてもいいか？）

芦が言うと、悩ましげな声が聞こえて来る。

（な、なんで分かってまうん？ハァ…ぅん、もう少ししたら済むから、気にせんと話しといて…）

（気にするやろ、ふつー！昼間あんなけ果ててたのにまだするか！？）

呆れる木乃葉と芦。仕方なく、芦は遠く離れた月詠に魔力を注ぎ込んだ。

（ひゃ、ひゃあぁぁぁっ！？）

（え、何々？どないしたん、月詠！）

混乱する木乃葉。芦は木乃葉に説明した。

（魔力を送って、発散させてあげたのだよ。さすがにずっとハアハア言われるのは気味が悪いだろう？）

（う…まぁそらそうやけど…。アシュ様、今の…）
少し、遠慮しながら言う。
（うちにも、してもらえる？）

墓穴を掘った…

その後、芦は毎晩のように魔力トレーニングをするようになったという。これは…色々と間違った方向に進んでないか。芦は嘆きながら、遠く離れた二人に魔力を注ぎ続けるのだった。

【石田留美】

介入者たちのよく言うセリフに、『チート野郎』という物があります。この言葉…そっくりそのままネギ先生に送ってあげたいですね。彼は…酷いチート野郎です。

あれから3日たちました。外時間で三時間。アリア先生達が来たのは朝9時ですから丁度正午。後18日は別荘に居られる計算になりますが…そんなに居たら化け物になりませんか、彼。

とにかく、物事の吸収スピードと理解力が半端じゃありません。単純な魔力コントロールを2日繰り返しただけで、ほぼ完璧な魔力制御を可能としました。そして、今使える魔法を無詠唱で唱えられるようにする特訓では…半日で中級魔法までを無詠唱で唱えられるまでになりました。アリア先生などは、一つも無詠唱で唱えられな

いんですが…

主人公補正、というヤツなのでしょうか。今でこうなんだから、物語の終わりにはどれだけ強くなってしまうんでしょうね。ネギ先生の存在そのものが、原作ブレイクな気がして来ました。まったく、私もその『ネギま』とかいう漫画を読んでおくべきでしたよ。

…ん？そう言えばアリア先生は知っているハズですね。アリア先生？

「はい？」

『ネギま』という話ではこの後誰が攻めて来るとか書いてませんでしたか？

「まあ、あるにはあったんですが、あてにはなりませんよ。既に、歴史は滅茶苦茶になってますから。」

…おかしいですね。歴史をなぞっているハズなんですが。

「だって、ネギのパートナーが居ないという時点でおかしいですもん。原作では明日菜さんですけど、こっちでは一般人の雪広あやかさんと本契約とかしてるし…第一、貴女も私も出てこないでしょう。」

確かに。神族の介入している所も違うでしょう。そうなると…つまり、次の襲撃は読めないんですね。

これは結構厄介かもしれません。

その時、不意に、エヴァさんが怒鳴り声を上げました。

「馬鹿、私は魔法で飛んで逃げろと言ったのだ！誰が教えてもいない瞬動で逃げろと言った！」

「ごめんなさぁあい！」

瞬動…。なんですかソレ。

とりあえず、またネギ先生がとんでもない事をしたのは、分かりました。

マスター。順調ですが…順調過ぎるのもどうかと思いますね、私は。

ネギの特訓は、基礎的な事に始まり、今使える魔法を効率化する、といった内容に移っていた。その間何一つ新しい事はやらなかった。その必要が無いくらいネギの知識は豊富だったし、基礎の練習内容から応用的な事を勝手に編み出すのだ。これにはエヴァンジェリンも驚いていた。

「お前は…才能の塊だな。成長のスピードが尋常じゃない。非常識極まりないぞ。」

「僕、ダメじゃないですか？」

「ん？当たり前だろう。お前でダメなら、世の中の魔法使いの大半がダメになる。坊やは優秀だよ。」

エヴァンジェリンがそう言うと、ネギは…泣き出した。

「お、おい！どうしたんだ！何故泣く！？」

「ぐすっ…だって、だって僕、魔法を使ってまともに誉められた事ないんです…」

ポロポロと涙をこぼすネギ。近くで石田とマナの扱い方を練習していたアリアも何事かと駆け寄った。そして、エヴァンジェリンから事情を聞くと納得して頷く。ネギが誉められなかった理由はアリアもよく知っているのだ。

…ウェールズの魔法使いの間では、スプリングフィールド兄弟の評判は決して良いものではない。英雄の子息ではあるが、酷いトラブルメイカー。子供でありながら、女性へのセクハラと魔法使い達への挑発、暴行行為で迷惑な存在となっていた。そんな兄弟たちを叱りつけて抑えていたのがスタンという老人だったが、六年前の襲撃で石にされてしまう。重石の取れた兄弟たちは、高畑がウェールズに訪れて、彼に半殺しにされるまで悪行三昧の日々を送っていた。

魔法学校で、ネギとアリアは兄弟たち同様に避けられていた。いや、むしろまともにコミュニケーションが取れる分イジメの対象になっていた。アリアとアーニャが必死に抵抗してイジメは収まったが、いくらテストで点を取ろうが上手く魔法が使えようが誉められる事なんて無かったのだ。

スプリングフィールド兄弟なら魔法を使えて当たり前。

あのはた迷惑な奴らと比べたら、魔力の低い落ちこぼれ。

机にかじりついて勉強してる割にはそれほど凄くないよね。

いっそそのまま机にへばり付いていれば周りに迷惑かけなくて済むのに。

…酷い事を言われ続けた過去があるのだ。ネギは何も悪い事などしていなくても、周りは勝手にネギに嫉妬し、迷惑がり、敵視する。アリアも勿論攻撃対象となったが、こちらは直ぐにメルディナ学園長やネカネに相談したりするので面倒がられ無視された。

ネギは、ワケの分からない敵意を感じながら生きて来た。同時に、勝手な大人たちの期待もその身に受けて。やれて当然、やらなきゃダメだと言い聞かされてきたのだ。

「僕を、ただの僕として見てくれて…誉めてくれたのは、家族以外ではエヴァンジェリンさんだけなんです。だから、ちょっと嬉しくて…泣いてしまいました。ありがとうございます、エヴァンジェリンさん。僕、凄く嬉しいです。」

「ネギ…。」

アリアも、ネギの苦悩を見てきただけに言葉が出ない。いくら自分が「ネギは凄いんだ」と言っても素直に受け取らなかったのは、自分がいつも庇ってたからか…。その事にやっと気づいた。純粋な他者からの評価を求めていたのだろう。

ネギに感謝されたエヴァンジェリンは…震えていた。

「ぼ、ぼ、坊や！仮契約するぞ！お前も凄い強化してやる！」

「落ち着いて下さいエヴァさん。ネギ先生の身体に貴女の魔力はキツつぎます。」

「は、初めはキツいかもしれないが、慣れたらスムーズに入るようになるかもしれないじゃないか！」

「一体何入れるつもりですかエヴァさーん！」

目の前で大騒ぎする三人。ネギは呆然としながらも、どこか暖かい気持ちでそれを眺めていた。

そして、その日の夜。

寝室のベッドで、茶々丸がネギを迎える。もう、その顔にネギを子供扱いするような表情は無い。

「ネギ先生…お願いします。」　少し潤んだ瞳で、ネギを見上げた。

「はい！今日、魔力以外の不思議な力に気づいたんですけど、それと魔力を混ぜてみますね！これ、かなり凄いエネルギーなんです！」

ネジ巻きを手に、ニコニコ笑うネギ。その言葉に、茶々丸が固ま

る。不思議な力？混ぜる？まさか…気？

「ネギ先生、それはまず…んあっ！？」

「はい、行きますよー？」

ネギの身体が、輝き出す！キリキリと巻かれるネジ巻きに、膨大な量の魔力と気が流し込まれた。

ズオオォォォッ！

「ひゃあぁぁぁぁぁっ！？あふっ、ふぁ、ふわあぁぁぁっ！」

「茶々丸さんも、元気になって下さいね！」

残酷な善意。純粋なだけに、始末が悪い。茶々丸は全身に強烈な快感を感じながらネギ先生を止めようとする。

「ネ…ネギ先生ぇ…もう、あはっ…元気ですからあぁぁぁぁっ！あ、凄い……っ！」

「え、僕凄いですか！嬉しいです、もっと頑張りますね！」

グオォォォォッ！

「～～～～～っ！？」

身体をガクガクとさせる茶々丸。結局、その後失神するまで気と魔力を流し込まれた所でアリアに見つかり、解放された。意識を取り戻した茶々丸は、人知れずこうつぶやいていた。

「超さんと葉加瀬さんに、相談しなければ…。」

そのつぶやきに気づく者はいなかった。これが切欠となり茶々丸は飛躍的なバージョンアップを遂げるのだが、この時にそれを予見していた者は誰も居なかった。

麻帆良女子寮では、明日菜の部屋に超鈴音とクー、あやかと刹那を含めた六人が集まっていた。いや、その中心に居る人形を含めれば七人。チャチャゼロもいた。彼女は修学旅行から引き続き明日菜の護衛をしている。

「ゴ主人ノ別荘ナライクラデモ時間ハアルダロ。ダイ…アモン？魔法球トカイウ道具ガアッタハズダゼ。」

「ダイオラマ魔法球ネ。確かにそれがあれば時間の問題はクリア出来るヨ。」

超は、もうあのタイムマシンを持っていない。完全に、壊れてしまったのだ。だから時間を移動するような強行手段はとれない。

「じゃあ、エヴァちゃんに頼んで放課後に使わせてもらおうか。でも…使わせてくれるかな？」

「誠心誠意頼み込めば、きっと許してくれますわ。」

あやかの言葉に、笑い出すチャチャゼロ。

「ケケケケケ。ゴ主人ノ事ダ、ソンナ真面目ナ言イ方シタラ、カラカッテ来ルニキマッテルゼ。ヤメトケ。」

「じゃあどうするアルか？さすがに、この面子で修行するには場所の確保からして難しいアルよ。」

クーも困った顔をしている。自身の活動するサークルでさえ、活動場所を探すのに苦労しているのだ。特殊能力だらけのこの面子が一般人に迷惑かけずに修行出来る場所など…。

「別ニ無理トハ言ッテネエダロ。要ハ、頼ミ方ダ。ゴ主人ノ好ミニ合ワセタ頼ミ方ダナ。チナミニゴ主人ハ、ＳデＭデ、ショタコン。尚且ツレズダ。」

サーッと皆の顔から血の気が低く。

「これは…木乃香と刹那の出番ネ」

「な、何故そうなるのですか！私はお嬢様以外の方とは…！」

「そうやえ。うち、サドっ気入ると泣くまでやめんから…余計アカンと思うわ。」

さらに血の気が引いた。刹那も、ガクガク震えている。

「マ、マア冗談ダ。普通ニ頼メバ良イト思ウゼ。デ、明日カラ始メンノカヨ。」

チャチャゼロが怯えながら話を進めると、あやかがそれに答える。

「明日菜さんみたいにアルバイトをされてる方や部活で忙しい方も居るでしょう。あらかじめ空いてる時間を調べて表にまとめてからにしましょう。」

「そうだネ。学校生活やプライベートに悪影響が出ないようにした方がいいヨ。明後日以降に修行を始めるように調整するカラ、明日ハ許可だけ貰いに行くヨ。」

こうして、その日の話し合いは終わった。あくまで学業優先、修行は希望者の都合のいい時間だけ。麻帆良ガーディアンエンジェルズは、こんな部活のようなノリで活動を始めた。後々この活動が、麻帆良中の学生を巻き込む事になる。その事に気づいている者は…

（ふむ…これハ、ひょっとしたらアレを再現出来るかナ？）

超鈴音だったりする。

超は、頭の中で急いでシミュレーションしてみる。そして…

ニヤリと笑っていた。

第四十八話　主人公と転生者

エヴァンジェリンの別荘での特訓も１０日を過ぎた。外の時間では１９時くらいか。つくづく不思議な空間だとアリアは思っていた。

「でも…もっと不思議なのはネギかしら。」

「同感ですね。新しい事、何も教えてないんですよね、あれ。」

石田とアリアが見つめる先には、エヴァンジェリンの魔法から逃げ惑うネギの姿がある。しかし、その逃げ方がどうもおかしい。やけに足をばたつかせているのだ。

「何なんだ、その動きは！虚空瞬動じゃないのか、それは！？」

「これ、一回ダッシュすると曲がれないんですが、風の魔法を宿した身体で行うと、手足を振ったら何とか曲がれるんですよ！」

ネギは、向上心の塊だ。工夫する事を忘れない。ただ、機能的な所にばかり気が行って見た目を気にしないのが玉に瑕だったりする。

「ぅう…やめろ、その動き！なんかカサカサって、ゴキブリみたいだぞ！」

「そんな！いくら何でもそんな言い方って無いですよ！」

カサカサカサカサカサカサカサ…

「「「ひいいいいいいっ！？」」」

ムキになって動き回るネギ。もの凄い速さで手足をばたつかせ、もうホラー映画並の怖さだ。なんせ、速すぎて見えない。怖がるエヴァンジェリンが繰り出す魔法の射手を、次々とよけていった。

「ぼ、坊や、私の負けだ！悪かったから、その動きを止めろ！怖すぎるぞ！？」

上空に浮いているエヴァンジェリンから見たら、手足の見えないネギは頭だけが高速で動く化け物に見える。これを長時間見ているのは流石に辛い。

ネギは仕方なく、普通の動きに戻った。疲れたのか、肩で息をしているが…エヴァンジェリンに勝ったのが嬉しかったのか、その表情は明るい。

「やりました！ついに逃げ切りましたよ！」

「な、なあ…坊や。お前、何で魔法を使わないんだ？空を飛べと言ってただろう？」

「え？いや、流石に空を飛ぶには杖が無いと無理ですよ。」

え…？

そこで、初めて気づいた。

ネギは、杖を持っていない。ここに連れてくる時に、杖を持たせるのを忘れていたのだ。杖は今、エヴァンジェリン邸のダイニングルームの壁に立てかけられているだろう。

…つまり、ネギは発動体無しで攻撃魔法の練習をしていた事になる。

「発動体無しで魔法の練習するなんて、やっぱりエヴァンジェリン

さんの修行は厳しいなって思ったんですけど、空気中の魔力を取り込んで発動エネルギーに変えたらすんなり使えるようになりました。その時に、身体の中にある別のエネルギーに気づいたんです。さすがエヴァンジェリンさんですね！僕、この数日で能力の幅が一気に広がった気がします！」

「…そ、そーか！ハハハ、そうだろうそうだろう！何せ、最強の魔法使いの修行だからな！」

冷や汗をかきながら高笑いするエヴァンジェリン。何なんだコイツは…！？どんな環境にも適応する不思議生物じゃないか！純粋無垢な笑顔を向けてくるネギに、あのナギの姿を重ねる。確かにコイツは奴の子供だ。無茶苦茶にも程がある。

「しかし、流石に発動体は必要だろう。というか、使ってくれ頼むから！お前には、持ち運びしやすいコレをやろう。」

エヴァンジェリンがネギに向かって何かを投げる。キャッチしたネギは、それを見て顔を赤くした。

「エ、エ、エヴァンジェリンさん、コレは！？」

「指輪だ。発動体としてはかなり強力なものだぞ。多分、坊やの杖にも引けをとらんだろう。」

「でも、あの…僕はまだ子供だから、結婚は出来ません！のどかさんとお付き合いも始めましたから…」

ポカンとする一同。結婚？

「な、何を言ってる馬鹿が！それは単なる発動体で…というかのどかだと？宮崎のどかと付き合ってるだと！？」

これはヤバい。アリアと石田はすぐさまエヴァンジェリンを羽交い締めにして動きを封じた。

「ええい離せ！こら坊や、貴様は私のものだ！他の女と付き合うなど許さん！」

「落ち着いて下さいエヴァさん！貴女は元々ナギ・スプリングフィールドの事が好きだったんでしょう！」

「二人とも手に入れて何が悪い！なんの為に前と後ろに…」

パコーンッ！

アリアの革靴が炸裂した。

「ネギに余計な事吹き込まないでくれますか？ちょっとエヴァさんには教育的指導が必要なようですね。」

ギリギリギリ…

「うあああ、痛い痛い！うめぼしは…うめぼしはヤメろぉぉぉ！」

大騒ぎする三人。ネギはちょっとビクつきながらそこから離れると、渡された指輪をはめてみた。丁度、右手の人差し指にぴったりと収まるサイズ。試しに魔力を通してみると、思いの他通りが良い。確かにこれなら、あの杖が手元に無くても大丈夫だろう。

ネギは、魔法で風を起こして身にまとう。その状態で気をコント

ロールして、走り出した。

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ！

「「「きゃあああああああっ！！」」」

ネギの頭が、猛スピードで飛び回る。広い修行場を縦横無尽に走り回るネギの姿は、もはや妖怪である。石田はネギの姿に怯えながら、通じない念話を送った。

（マスター、GSを…GSを呼んで下さい！あれは退治されるべき存在です！）

「わぁい！凄いスピードがでますよ、エヴァンジェリンさぁぁぁんっ！」

「もういい！もういいから！交際は認めてやるから走るなあぁぁぁっ！」

泡を吹いて倒れるアリアを抱きかかえながら、エヴァンジェリンは懇願する。結局、何事かと様子を見にきた茶々丸に捕まえられるまで、ネギはそこら中を走り続けるのだった。

魔法世界のとある宮殿では、仮面の男とツンツンと尖った金髪の

男がモニターを見て呆然としていた。

「あの…あれが、ネギなのか？なんか別の生き物だろ？」

「いや、ネギ・スプリングフィールドのハズだ。お前には、奴と戦ってもらう。」

「イヤだよ、あんな気持ち悪いの。あれで主役はるとか、どういう世界だよ。少なくとも、俺はお化けとかとは戦いたくない。」

嫌そうな顔でモニターの中のネギを見るツンツン頭。その澄んだ碧眼は涙で潤んでいた。確かにあれはお化けだ。夜中に道で遭遇したら…漏らすだろう。

「君は神から力を授かったのだろう？金も払ってるんだ、ちゃんと仕事はしてもらうぞ。」

「へいへい、分かりましたよー。やりますよーだ。ふんっ。」

何ともやる気の無い男だ。本当にコイツは、あのボブカット・レイやジャック・ラカンと引き分けた猛者なのか。疑いの目線を向けると、ツンツン頭はニヤリと笑った。

「そんなに不審そうな目で見るなよ、ちゃんと戦うって。少なくとも、給料分はな。けどさ、神とか関係ねえって。結局俺、アイツらから貰った能力使ってねーもん。」

「…なんだと？」

仮面の下で驚愕の表情を浮かべる。つまり、コイツは…神に汚染

されていないのか、と。闘争本能や破壊衝動を刺激されてないのに、ここまで強くなった目の前の男に半ば畏怖に近い感情を抱いた。

「最初からレベルマックスとか嫌いなんだよ、俺。どっちかってーと、低レベルクリアとか縛りプレイしたい方だからさ。で、試しに特殊能力抜きでやってきたわけよ。簡単なもんだよ、これならメタルギア・ソリッドの方が難しいくらいだ。」

飄々と語る男。なるほど、この男なら奴らと戦えると推薦されるわけだ。少なくとも、あの魔法人形たちよりは頼りになる。全く、最初からこの男に頼っておけば無駄金使わずに済んだというのに…。

「分かった、信頼しよう。ただ、麻帆良に向かう時はチームで行ってもらう。フェイト・アーウェルンクスは知ってるだろう？彼と、上位悪魔のヘルマン、そして君の三人だ。作戦決行日が決まり次第、連絡を入れる。」

「いいよ。その二人でさっさと片付けてもらえたらベストだけどな。子供殺す趣味はねーし。」

「ふむ…なら、別に生け捕りでもいいさ。」

仮面の男の声に、狂気じみた色が混じる。

「魂を研究するのは中々に楽しいものだ。転生者ばかりでは飽きるのでね。是非ともこの世界の魂を扱ってみたいものだ。」

「……ケッ、悪趣味な奴。」

そう吐き捨てるようにつぶやくと、ツンツン頭はさっさと部屋を出ようとする。モニターを操作していた少女が抗議の言葉をあげるも、それを無視して扉を開けた。その際に、少しだけ振り向いて仮

面の男に声をかけた。

「前金、まだ半額しか受け取ってねえからな。ちゃんと振り込まないなら、途中で抜けるぜ？」

「わ、分かっている。月末には振り込むようにはする。」

「…フンッ。」

パタンっと扉を閉めて、ツンツン頭は出て行った。

「デュナミス様、本当にあんな奴に全額払うんですか？難癖つけて幾らか引いてもいいような気もしますが。」

「言うな。敵に回らないようにするだけでも払う価値はある。」

そう言いつつも、仮面の下では汗だくになっていた。元老院からの資金援助が滞っていなければ、こんな心配しなくても良かったものを…。スプリングフィールド兄弟作成の失敗は、やはりかなりの痛手だった。それを実感しながら、男はツンツン頭の出て行った扉を見つめるのだった。

宮殿を出たツンツン頭は、停めてあったバイクに跨がるとキーを差し込む。捻った途端に勢い良くエンジンが動き出し、男の苛立った心を慰めた。やはり、俺にはコイツが居ればそれでいい。愛おし

そうに車体を撫でていると、懐に入れた携帯電話に通信が入った。

「うい、山下デリバリーサービスですが…んぁ？レイか。どうした？…ぇえ、またレスキューかよ。分かった、行くよ。行きゃあ良いんでしょ、行きゃあ！」

面倒臭そうに電話を切ると、山下と名乗った男はゴーグルを付けてエンジンをふかした。

「行くぜ、フェンリル。お客さんがお待ちかねだ。」

爆音と共に猛スピードで走り出す、山下。フェンリルは砂塵を巻き上げて爆走する。先ほどまでのダルそうな表情はどこへやら、口元は狂嬉に歪んでいた。

「ヒャーッホォォゥイッ！」

全身に風を受けながら、山下は雄叫びをあげる。尋常でない魔力を注ぎ込まれたフェンリルは、時速２００ｋｍで荒野を走りぬけた。

山下・Ｋ・ストライフ。

自らの実力だけで高みへと至った、最強の転生者であった。

第四十九話　新たなる日常

芦優太郎の朝は早い。

元々が魔神であり魂の強さに身体も引っ張られているので、睡眠時間も少しで足りる。故に朝４時には起床してその日の仕事に備えたり、早朝ジョギングなどをしていたりする。まるで老人だ。

その日は、ジョギングを選択した。

これは、ある種嫌がらせでもある。自分を監視している人間は、このジョギングにつき合わなければならないのだ。それも、今日から芦は社宅に戻ったらホテルへと転移する。しばらくは混乱が続くだろう。

ジャージ姿でまだ人気の無い街を走る。早朝の澄んだ空気は心地良かった。芦は気分良くスピードを上げる。これはかなり早いペースだ。後方で魔法を使ったような波動を感じた。やれやれ、この程度で魔力に頼るとは…。呆れていると、前方にどこかで見たような顔が。

「おや、神楽坂君か。おはよう、アルバイトかな？」

「あ、おはようございます芦先生。はい、ご覧の通り新聞配達です。」

新聞配達なら自転車やバイクを使うのが普通だろう。しかし明日菜は普通に走って新聞を配っていた。知らず知らず、気と魔力で身体強化を行っているらしい。こんな事を日頃から苦もなく行っているとは…芦は少し驚いていた。これだけ下地が出来ていたら、本来

の歴史のようにネギのパートナーとなっていてもおかしくは無い。

「あの、芦先生。少し聞きたい事があるんですが、良いですか？」

「ん？いいけど、まずは新聞を配り終えた方がいいだろう。私も手伝うよ。」

「いえそんな、悪いですから…」

いつもの勝ち気な性格はどこへやら。明日菜は強引に新聞を奪う芦にドギマギしている。普段、男性にこんな風に接せられる事など無かったのだ。

芦はそんな明日菜から地図を借りると配達先をチェックする。一瞬でそれを覚えると、明日菜に言った。

「そっちの方向から走ってきたのなら、地図で言えばここまで終わっているんだね？なら、僕はこちらを担当しよう。君は、通りの西側を配りたまえ。」

「…はい、分かりました。」

そう言うと二人は配達へと向かう。芦は恐ろしい速さで駆けると次々と新聞を郵便受けに入れてゆく。身体強化した明日菜の二倍近いスピードだ。あまりの速さに、それを目撃した散歩中の犬たちは吠えまくった。

…それを、遠くから監視しているのは、瀬流彦である。

教員の職を解かれた彼は、今では学園長の駒としていいように使われていた。給料はかなり良いのだが、その分無茶な指示ばかり受

けている。今回は芦優太郎の監視だった。

（確かに能力者じゃないと有り得ない動きだけど…そんな危険人物には見えないけどなあ。）

学園長の他にも、高畑から絶対に信用するなとも言われている。しかし今、その要注意人物は新聞配達の手伝いをしていた。危険…なのだろうか。

しばらくそれを眺めていると、配り終えたのか二人は近くの公園へと場所を移す。瀬流彦も気配を消して後をつけた。

「芦先生…。先生は、本当に悪い人なんですか？」

明日菜の質問は、かなりアバウトなものだった。芦も少し困ったようにしている。

「何を持って悪いとするのかは分からないが、教師としては良い人間であろうとは思っているよ。けど、君の聞きたい事はそういう事じゃないんだろうね。」

「はい。修学旅行の帰りに、高畑先生から聞かされたんです。芦先生が関係者で、何か企んでいるって…。信用出来ないから近づくなとも言われました。」

「ふむ…。」

あの高畑という男は何をしたいのだろうか。学園長はあくまで此方を探るだけだが、奴は明らかに敵対心を持って周囲に警戒を呼びかけている。

「明日菜君。君は、その話を聞いてどう思った?私が、彼の言う悪者に思えたかな。」

「え…いえ、それは…。」

明日菜は困った顔をする。高畑の事は信頼していた。が、以前ほど盲目的な信頼はおいていない。記憶が戻ってきて、自分の想いが恋愛とは違うものだと悟ってからは冷静に見る事が出来るようになっていた。

「分かりません。私は先生の事知らないし…普段真面目にやってるようにしか見えない先生の事を、いきなり注意しろと言われて困ってたんです。石田さんの婚約者何ですよね?」

「ああ、石田留美なら確かに婚約者だ。」

「石田さんは超さんやエヴァちゃんと一緒に私たちを助けてくれた。その石田さんの婚約者を警戒しなきゃいけないのって、何だか違う気がするんです。」

ふむ、この娘はあの男の言葉には踊らされないのか。少し感心する芦。

「簡単に言うと、私は魔法の存在を知ってるし特殊な力を持っている。が、彼ら魔法使いたちの仲間にはならない。この間誘われたから拒否したよ。その事で警戒してるだけだろう。仲間でなければ敵、とでも思ってるんじゃないかな。」

明日菜は奇妙な顔をした。

「芦先生は今まで普通に先生してましたよね。何故突然能力者だって分かった途端に仲間になれとか言われるんですか？それも、断ったら危険視されるとか…。今だって、監視されてるし。」

明日菜は、目線をずらして言った。その先は公園の茂みの中。瀬流彦が隠れている場所だ。

「仕方ないんだよ。彼らはヤクザやマフィアみたいな物でね、自分たちのテリトリーに能力を持った人間がいるととりあえず従わせたいのさ。私はただ、彼らに従わず一般人として教師を続けたい。それだけだ。」

茂みの中の瀬流彦がうめく。完全にこちらを意識した会話。仕方なく、急いでその場から離脱した。これ以上あそこに留まったら捕まる可能性が高いだろう。

「…とまぁ、こんな所だが。君が何を信じようともそれは自由だよ。だがね、石田から聞いたのだが君の担任であるネギ先生はこう言っている。『自分の目で見たモノを信じなさい』と。明日菜君が私を見て危険だと思うのなら、それでいいんだ。ただ、他人の言葉には惑わされないで欲しいな。」

「……。」

そう言われると、明日菜は困ってしまう。何故なら、今目の前にいる芦先生の方が高畑よりも信用できるような気がしていたからだ。本来信頼とは一日やそこらで得られるものではない。なのに、ほと

んど会話をした事の無い芦の方が高畑より信用できる…。なんだか、自分が軽い人間に思えてきてしまった。

「明日菜君、今はこのくらいにしておこう。しばらく時間を置いて、ゆっくり考えてみるんだ。私の事が知りたいなら、石田留美にでも聞いてみるといい。彼女と話すのなら、うっとおしい監視もつかないはずだ。」

ニッコリ笑うと、芦は明日菜に背を向ける。片手を上げて挨拶をした後、そのままジョギングへと戻って行った。その背中を、何だかぼんやりとした表情で見送る明日菜。惚れたわけではないが、何だか目が離せなかった。

「…芦先生が担任だったら、良かったのにな。」

思わずつぶやいてしまう。関係者とされる人間とは何人も会って来たが、芦だけはなんだか普通の人と話している感覚で話ができる。不思議な人だ。彼なら、気軽に普通の事も魔法の事も相談出来そうな気がした。

（そっか。魔法関係者なのに、一般人の立場から話をしてるんだ。だから、安心できるんだわ。）

明日菜は気づく。

そして、今まで出会った魔法関係者たちの異常性にも気づかされた。魔法関係の事になると、すぐに一般人の事を忘れ魔法使いの理屈を最優先する人物たちを、明日菜は良く知っている。

（こわっ…！何で今までおかしいと思わなかったんだろ…）

ブルッと少し身震いすると、明日菜は新聞入れのバッグを小脇に抱えてダッシュでその場を後にするのだった。

【アリア・スプリングフィールド】

エヴァさんの別荘ではイマイチ実感がわきませんでしたが、自分のベッドで目覚めるとその違いに驚きますね。身体が元気になると、とにかく寝起きが良い！素晴らしいですよ、本当に。今日は何でも出来そうな気分です。

…まあ、その後が大変でしたが。

私と同じく元気なネギと騒がしい朝食をとってから学校へと向かいましたが、とにかくネギが走りたがる。あの走りをされたら目撃者から七不思議の一つにされそうですからね。何とか学校まで抑えて登校しましたよ。

朝の職員会議は勿論修学旅行の発表会に関する事。朝にレポートを集めて昼にチェック、発表する班を決めて五時間目のロングホームルームで打ち合わせ、六時間目の発表会で発表…。まあ、雪広さんと明日菜さんの班になるでしょうけどね。あの子たち以外で真面目に班で回ったのって居ませんから。

朝、相変わらずのハイテンションな挨拶を経て久しぶりの授業に

入ります。ネギは別荘での訓練のおかげか心身共に充実してました。堂々と授業をしていて、質問にも的確に答えられていましたね。私のサポートも、以前よりも少なくなってきました。

そして…昼休み。職員室でネギと芦先生、しずな先生たちとレポートを読んでいると…

「あのー…、ネギせんせーはいらっしゃいますかー？」

「あ、はい！のどかさん！」

宮崎のどかさんが職員室にやってきました。これは…食事のお誘いでしょうか。仕方ありませんね。

「ネギ、作業は私がやるから宮崎さんと食べてらっしゃい。」

「え…悪いよ、お姉ちゃん。僕も…」

「ダメ！行って来なさい、お姉ちゃん命令です！」

「う、うん。じゃあ、行ってきます。」

バッグを持って、トトトトト…と小走りで宮崎さんの所へ向かいます。やれやれ、子供の癖に下手な気遣わないで欲しいわ。

「アリア先生、何だかお母さんみたいですね。」

…しずな先生、それ外見１０歳に言うセリフじゃないです。第一お母さんみたいなのはアナタでしょう。どことは言いませんが。

「ネギ先生がアリア先生の前でだけ子供に戻るから、そういう印象が強いんですよ。いつもしっかりした彼に年相応の振る舞いをさせてしまうほど、アリア先生が母性に満ちた人だという事じゃないでしょうか。」

…芦先生ってどうして直ぐそういうフォローできるんですか？日頃から気遣いしすぎてませんか。そこらへん、他の男性教師達にも見習って欲しいですよ。

「お二人のような人を親に持てる子供は、世界一幸せでしょうね。」

私がそう返すと、二人の動きが止まりました。顔を見ると、しずな先生は赤、芦先生は青です。え…信号ですか？私、黄色くなった方がいいですか？

「それは、ありがとうございます。アリア先生。」

「私は親には向かないんじゃないかな、なんて思ってますけどね、うん！」

あー…、ごめんなさい芦先生。捕食対象でしたか。別にお二人を両親に持ったらなんて言ってなかったんですけどね。

結局、作業スピードの落ちた二人のおかげで、レポートの選別が終わったのは昼休みの時間が終わるギリギリ。三人とも次に受け持ちのコマが無くて助かりましたよ、本当に。

校舎の裏手にある少し広い芝生の上で、ネギとのどかは昼食をとりながら話をしていた。それは、自然と京都の話題となる。ネギに頼まれた事を、上手く果たせなかったとのどかは頭を下げた。

「え？でも実際僕らの居た京都の本部にはクラスの皆さんは来ませんでしたし、旅館に居た皆さんも無事でした。のどかさんは充分すぎるくらい頑張ってくれましたよ。」

「でもー…。」

本音は違う。明日菜やあやかのように、戦ったり出来ない自分が悔しかったのだ。日頃から完璧超人な明日菜はともかく、魔法の事を前日まで知らなかったあやかが活躍するのを見て、半ば嫉妬に近い気持ちを抱いていた。

「私、皆みたいに戦えないから、ネギせんせーのそばにいたら邪魔になるかもー…。」

「そんな…考えすぎですよ、のどかさん。戦えなくても、僕はのどかさんが居てくれると嬉しいですよ？戦いなんて、本当は無いほうがいいんですから。」

ネギは、のどかに危険な真似をして欲しくなかった。戦えないと悪いだなんて思って欲しくもなかった。ネギはのどかにそんなモノ

を求めてはいないのだ。

「のどかさん。戦いよりも、僕はのどかさんに沢山教えて欲しい事があるんです。」

「え?教えて欲しい、事…?」

「はい。僕、図書館島って行った事無いんですよ。のどかさんは図書館探検の部活をしてるじゃありませんか。是非、今度一緒に図書館島へ行ってくれませんか?そこで、のどかさんのオススメの本とかを教えて欲しいんです。」

ネギが言うと、のどかは途端に顔を輝かせた。それなら、自分にも出来る!ある程度内部の造りは調べてるし、迷子にはならないだろう。そして、本の知識なら自信があるのだ。やっと、ネギ先生の役にたてる時が来た!

しかし、そこに邪魔が入る。

いや、本来なら邪魔に入るつもりではなかったのだが…のどかの話術によってとんでもない幸運が舞い込んで来た!と、いてもたってもいられない人間が居たのだ。

「よくやったです、のどか。」

「まさかアンタがそこまでやるとは思わなかったよ、のどか!」

「え、え、えええっ!?何でここにいるのー!?」

林の向こうから現れたのは綾瀬夕映と早乙女ハルナであった。何

故か、満面の笑みを浮かべている。

「「ネギ先生！」」

二人は、困惑するのどかを置いて、ネギに詰め寄った。

「次の日曜日、私たちの部活に付き合ってくんないかな！」

「それで、出来たら顧問になって欲しいです。」

「顧問…？」

あまりの衝撃に呆然としていたネギだったが、やっと我に返った。

「そーなんだよー。実はウチらの顧問って高畑先生なんだけどさー。いつも学園にいないから、サークル活動と変わんない状態なんだよねー。」

「近々顧問不在でサークル落ちになるかもしれないので、是非ともネギ先生には私たちの活動を見て興味を持って欲しいのです。」

いつもは軽いノリの早乙女まで、少し焦りながら言っている所を見ると、本当の事らしい。だったら、ここは担任として頷かない訳にはいかないだろう。

「分かりました。今度の日曜日ですね。」

「やったー！」「やったです！」

喜んで飛び跳ねる二人。その後ろで、少ししょんぼりとするのどか。ネギ先生とデート出来ると思ってたのに…。そんな風に考えていると、すぐそばにネギがやってきて小さな声で囁いた。

（じゃあ、別の日に二人で遊びに行きましょう。動物園とか水族館も、見たかったんです。）

（は、はいー！）

こちらの方が、よりデートらしい。のどかは本当に嬉しそうに、頷くのだった。

第五十話　舞台に立つ者たち

その日。午後の修学旅行発表会が行われる時間、超鈴音は一人だけ学園長室に呼び出されていた。これは近右衛門と超だけの密会であり、他の魔法先生たちには知られていない。ネギやアリアには、体調不良による早退と告げていた。

「すまんのう、わざわざ来てもろうて。」

「いやいや、構わないヨ。緊急の用事だと言うからラ、気になって来たんだけド、どうしたネ？」

超が不思議そうに尋ねると、近右衛門は少し言いにくそうにした。顎をなで、少し思案してから超に向き合う。

「超君も知ってると思うが、図書館島の警備は外部のみ超君の開発したロボットを使っておる。内部の警備は全て関係者に任せておるんじゃが、人手不足でのう。」

「ふむ…。内部警備にもロボットを使うカ？貴重な本とかを傷つけないようニ、少し調整しないといけないガ…」

侵入者排除の際に本を燃やしたりしたら目も当てられない。優先順位などのプログラムを書き換える必要があった。

「いや、それはいいんじゃがのう。困っとるのは、図書館探検部の事なんじゃ。あの子ら、今度の日曜日に図書館を探検するらしいんじゃよ。さっき孫娘から連絡があって知ったんじゃが。」

図書館探検部…。確かにそんな物があった。以前の世界と違う点

の一つだ。この図書館探検部と世界樹の観測をしているサークルは、やたらと規模が小さく活動を制限されている。代わりに多いのが図書委員。魔法生徒でガッチリ固められていた。

「そう言えば木乃香も図書館探検部ネ。…ん？木乃香に見張らせたらいいのでハ？」

「いや、それがのう…。刹那ちゃんと一緒に遊びに行くらしくて監視を断られたんじゃよ。」

木乃香も随分自由にやっているようだ。髪をバッサリ切ってから、なんだか活動的になって来てるような印象を受ける。

「しかし、私も日曜日は店に入らなければならないシ…。茶々丸に頼んで監視をさせてみようカ？」

超がそう言うと、近右衛門は嬉しそうに顔を輝かせた。少しキモい。

「そ、そうしてくれると助かるわい！いや、図書委員の連中は本を傷つけるような事をすると烈火のごとく怒る子ばかりでのう。そこら辺を注意してくれればそれでええんじゃ。」

「分かったヨ。茶々丸に伝えておくネ。」

そう答えながらも、超はその言葉の裏を読んでいた。ここまで活動を監視したり制限したりしているのは、世界樹関係と図書館関係。この二つには、何かある。何故、前の世界ではあれだけ派手に活動出来て、こちらでは出来ないのか…。それは、この二つに何かしら秘密が隠されているからだろう。

石田留美の話では、ナギ・スプリングフィールドが世界樹の精霊になっているらしい。これは魔法世界にとっても重大なニュースだ。隠したいというのも分かる。

また、芦優太郎の話では麻帆良学園の地下には病に冒された転生者が居るという。もしかしたら、図書館島はその転生者が眠っている場所なのかもしれない。

超は心の中でほくそ笑んだ。調査するには格好の機会だ。茶々丸なら記録を任せられるし、これほどお誂え向きのシチュエーションは無いだろう。

超はその後しばらく雑談を交わしてから、学園長室を後にした。どうやら、今のところ信頼はされているようだ。が、芦優太郎がコントロール下に入らない以上、繋がりのある自分や石田もそろそろ警戒対象にされる頃だ。気を引き締めて行かないといけない。

廊下を歩きながら、超は今後の立ち振る舞いの仕方を考えていた。

放課後。ロボット工学研究所にて、超と葉加瀬と茶々丸…と何故か芦優太郎までが話し合いに参加していた。今日は活動日ではないので大学生や高校生はいない。純粋に、超の関係者しかこの場所には居ないのだ。

「ふむ。それで君は図書館探検部の活動を監視するついでに調査をするというのか。要領がいいものだ。」

呆れる芦優太郎。何となく超がスパイみたいに思えてきていた。

「まあまあ、褒めても肉まんしか出ないヨ。…という事で茶々丸、調査に協力してくれるカ？してくれるなラ、それに適した装備に変えたいのだガ…。」

声をかけられた茶々丸は…少し迷っていた。いつもなら即答しているのに、今日は何だか困っている。いや、言いたい事があるのに言い出せないような雰囲気だ。

「どうしたネ、茶々丸？言いたい事があるなラ、遠慮しなくても良いヨ。」

「では、お願いしたいのですが…。私の身体を、もっと人間に近づける事は出来ないでしょうか。関節部分を見えなくして、一目ではガイノイドとは分からないように…」

茶々丸の願いは、超はともかく葉加瀬には意外なものだった。人間に憧れるようなプログラミングなど、していないのだ。

「ちゃ…茶々丸？何で人間に近づきたいの？デザイン的には完璧だと思ってたんだけど…。」

「はい。確かにガイノイドとしては充分だとは思います。」

そこまで言って、茶々丸は少し顔を赤らめる。

「ですが…ネギ先生に恩返しするには、この硬い身体では無理なのです。私は、人として彼に恩返しをしたい。」

話が怪しくなってきた。

「ネギ坊主？何故ネギ坊主の名前が出るネ？」

「ネギ先生は、私の快楽中枢に魔力を注ぎ込んで新しい気持ちを教えてくれました。しかし私には彼を悦ばせる事が出来ません。それが悲しかったのです。」

芦がコーヒーを噴いた。

葉加瀬は顔を真っ赤にし、超に至っては真っ白になっている。どうしたご先祖！なにガイノイドにセクハラかましてるんだ！？

その後も、茶々丸の恩返ししたい具体的な内容が語られたが、葉加瀬は耳を塞いで震えていた。超は顔をひきつらせ、どうリアクションを取っていいのか困っている。結局、まともに相手をしたのは芦だった。

「…君の気持ちは良く分かった。私も、君とは違う理由で改造には賛成だ。今後の事を考えたら、稼動部を露出したりするのは戦闘の際に危険だからな。調査などを行うにしても、見た目で人から離れていると面倒な場合もあるだろう。」

その言葉を聞いて、やっと葉加瀬が復活する。

「けど、今の技術ではこれが精一杯です。もしこれ以上人に近づけたら、兵装を犠牲にしなければなりません。それでは、戦闘に耐えられない。」

「うむ。だから、そこは君たちの知らない技術でカバーしよう。」

芦は笑った。その瞳は、何かを企んでいる子供のように生き生きとしている。

「魔科学、というのがあるのだよ。その技術で、茶々丸君の身体を魔族に近い身体に変えてみせる事が出来る。見た目はちゃんとした人間で、戦闘能力は恐ろしく跳ね上がるぞ。」

「「魔科学…？」」

超と葉加瀬がハモる。聞いた事の無い技術だ。魔法と何か関係があるのだろうか。

「変異魔法の応用的な使い方をしているから、魔法とも関係がある。要は、ロボットのような存在をそのまま生命体に変換してしまうんだ。鉄の塊すら、細胞で作られた存在にしてしまう。そうした魔法に加えて魔界で作られた臓器パーツを同化させる事によって人間そっくりに生まれ変わらせる事が出来るというわけだ。」

無茶苦茶だ。

しかしそれを当たり前のようにやれるのが魔族なのだ。カブトムシすら空中要塞にしてしまう魔科学に、不可能など無いのかもしれない。

茶々丸は目を輝かせていた。

「葉加瀬さん、超さん、お願いします。私を改良する許可を下さい。」

「ぅう…、理由が理由だけに考えてしまうけど…。でも私も魔科学に興味あるから、許可します。ちゃんと立ち会うからね。」

「私は芦先生を信じてるかラ構わないヨ。今まで使えていた機能がきえなければネ。録画や通信機能が消えてしまえば、調査に支障をきたすかラ。」

二人の反応に満足そうな表情をする芦。久しぶりに腕を振るえるので嬉しかったりする。かつて、虫を基礎として強力な魔族を生み出した経験がある芦は、既に人型の茶々丸ならかなり強力な魔族に出来ると踏んでいた。

「ガイノイドとして使えていた機能は勿論残しておこう。葉加瀬君の立ち会いも許可する。ただし、やるからには私も全力でやるからそのつもりでいてくれ。」

得意気に言い放つ芦。その表情を、超はどこかで見たような気がした。これは…葉加瀬だ。葉加瀬が改造に取りかかる時の表情に似ている！そして、そんな芦を見ながら葉加瀬も輝いている！何という事だ、この二人、実は似た者同士だった！

不気味にマッドな笑みを浮かべる二人、青ざめる超。そんな中、茶々丸だけは嬉しそうに微笑んでいた。

【石田留美】

まさか私が発表する事になるとは思いませんでしたよ。修学旅行

の発表会は、私たちの班と明日菜さんたちの班が発表する事になりました。まぁ、ちゃんと勉強になりそうな所を回っていた明日菜さんたちと、景観の良い風景と草木を中心に細かくデータを取っていた私たちは、確かに発表に向いています。他の班は遊びをメインにしたただの絵日記でしたから。知ってましたか?京都のとある地域にはまるで雑草のように紫蘇が生えまくっているんです。種飛ばしすぎですよ、まったく。人間なら捕まってます。

さて、その発表会が終わった後。私は超さんに頼まれていた事を実行していました。エヴァさんに修行の許可をもらう前に、まずは皆さんの意志の確認です。これから学園に脅威が迫った時、一緒に戦ってくれるのか。そして、それに備えての訓練を受けてくれるのか…。それぞれ自分の生活がありますからね。希望者は少なくなるだろうと見てましたが…

あの時のメンバーのほぼ全員が、訓練を望むとは。

あなた達いつからそんな熱血なノリに?いや、元からでしたっけ。妙にノリがいいのが、このクラスでした。その中でも、何故か戦闘の出来ない宮崎さんが一番ノリ気だったのが不思議でしたね。…ああ、ネギ先生の妾になったんでしたっけ?役に立ちたいという事でしょうか。

とにかく、参加希望者を確認したら次に向かうのは勿論エヴァさん。今日は茶々丸さんのメンテナンスの日らしく一人でしたから、私が護衛して家まで送る事になっています。

帰宅中、エヴァさんはリストを見ながら不思議そうにしてました。

「皆、指導するのが私だと知って希望したんだよな。…怖くは無い

のか？今までだって、私は話しかけられても愛想を良くした覚えもない。無視されて泣いてた奴もいるんだが。」

自覚してるなら改めたらどうですか。

希望者たちは多分、この間のエヴァさんのアジテーションに感動したのかもしれませんね。マスターの真似なんかするから、こういう事態に陥るんですよ。…って、どうしたんですか？何をニコニコしてるんですか。

「いや、こういうのも悪くないものだと思ってな。言霊を使って、友人を増やすのも悪くないかもしれないな。」

悪いでしょう。

イヤですよ、友達作るためにアジテーションするとか。洗脳したら友人とは言いません。

「冗談だ。しかし、メンバーに神楽坂明日菜が入っているのは複雑だよ。アイツは平和な暮らしを送っていればいいものを、何故表舞台に自分から上がろうとするんだろうな。役者なら、充分揃ってるんだが…」

明日菜さん？彼女がどうかしたんですか？

「…アイツは、魔法世界のお姫様だよ。戦争に利用され、たくさんの命を奪ってきた黄昏の姫巫女。せっかく平穏な生活を手に入れたというのに、自らそれを手放そうとしている。私には理解できん。」

サラッと凄い事言いましたね。明日菜さんが魔法世界のお姫様？確かに普段の佇まいには気品がありますけど、騒ぎ出したら普通の

女の子にしか見えません。

「それだけ、この麻帆良で心を癒やされたんだよ。私も長くアイツを見続けてきたが、初めの頃のアイツは誰とも口を聞こうとしなかった。雪広あやかくらいだよ、まともに相手をしていたのは。だから、今のアイツは幸せそうに見える。わざわざ棘の道に戻る事は無いんだがな。」

そこまで言うと、エヴァさんは何かを決心したかのように立ち止まりました。

「…アイツには、試験を受けてもらおう。アイツがどれだけ真剣なのか、見てみたい。」

また面倒な事思いつきますね。試験？ペーパーテストな訳ないですよね。実戦形式ですか？

「うむ…実戦と言えば実戦か。対戦相手に、一発でも打撃を入れられたら合格としてやろう。」

まさか…

「ああ。対戦相手はネギだ。」

ああ…　やっぱり。

無理でしょう、それは。というかエヴァさんだって当てられないのに。自分で出来ない事を他人にやらせないで下さいよ。

「そんな理由じゃない！…これは坊やにとっての試験でもある。生徒をただ守るのか、それとも手を取り合って戦うのか。最終的な坊

や の結論を知りたい。ここで簡単に明日菜を突き放すようなら、修行はお終いだ。」

なるほど。決してカサカサ動くネギ先生に怯える明日菜さんが見たい訳ではないんですね。

「魅力的ではあるがな。…で、場所は世界樹の下だ。あのバカにも、自分の息子の変わりようを見せつけて大いに後悔させてやる。このまま世界樹の中に引きこもっていたら、坊やはもっと節足動物に近づいて行くぞ、と脅しをかけるんだ。」

滅茶苦茶私的な理由じゃないですか。

ヤケに上機嫌になって歩き出したエヴァさんを追いながら、私は少し脱力します。けど、これは面白いかもしれません。明日菜さんの基本的なスペックを知る良い機会かもしれません。

私はすぐさま、超さんに念話を通してこの事を伝えようとしました。が、なにやら超さんの思考が混乱してますね。珍しい事もあったものです。どうしたんでしょうか？

（超さん？…超さん？）

（そんな…ネギ坊主に、そんな事をしたいのカ…？）

（…ん？）

（いや、それ以上はＲ１８になるヨ！ノクターン行きネ！）

（……。）

念話を切りました。

第五十一話　勝ち取らないと得られない物

修学旅行の発表会を終えたその日の夕方。宮崎のどかは、アリアとネギに呼ばれて二人の住む教員寮へと来ていた。夕食を一緒にとろうと、アリアが言い出したのだ。勿論そこには夕食だけでなく他の用件もあった。

今後、どのように魔法と関わっていくのか聞いておきたかったのだ。

あの京都の襲撃を経験した人間の中で、やはり朝倉和美は精神的に少し参っていたらしい。昨日は木乃香達と遊んで楽にはなっていたようだが、暗い所で一人になるのが怖いようで相談に来ていた。記憶を消す事はしなかったが、少し心を落ち着ける魔法をかけてあげた。

同じように、戦えない宮崎のどかの精神状態が心配だった。なまじネギと付き合う事になってしまい、もしかしたら危険な事に巻き込まれるかもしれない。今は良くても、後々辛くならないとは限らない。今から、気にかけてあげようと思っていた。

ネギと、少し緊張した面持ちののどか。小さなダイニングテーブルで向かい合う二人の前に、アリアは出来立ての料理を並べる。白身魚のホイール焼きには香草をふんだんに使い、故郷の味を再現してみせた。

「わぁ…美味しそうですー…。」

「お姉ちゃんの料理は、みんな美味しいんです！…って、お姉ちゃ

ん、またレモン入れてる。僕、いらないよ。」

魚の身の上のレモンの輪切りを見てネギが言う。そんなネギのおでこをアリアは軽く叩く。

「こらっ！彼氏なんだから男らしくしなさい！」

「え、えっと…レモンを乗せるな！」

デコぴんが炸裂した。

「好き嫌いしなさんな、って事よ。宮崎さんは食べれない物とかある？あなたはお客様だから好き嫌い言っていいわ。」

「え、いえ、無いですー…。」

今の光景を見て言えるワケが無い。あぶぶぶぶ、とうめくネギのおでこを撫でながら、首を振った。

「そう、なら助かるわ。私達の故郷の味だから癖があると思うけど、食べてみてくれる？」

そう言って料理を並べ終えるとアリアは席につき、手を合わせる。のどかとネギも、それにならった。

「「「いただきます」」」

郷に入っては郷に従えという言葉通り、ここ日本においては食事の作法は日本に合わせている。物覚えの良いネギは、箸の使い方すら完全にマスターしていた。が…

「ネ、ネギ…？あんた何に挑戦してるの？」

「え？何が？」

物凄いスピードで魚を解体してゆく！身だけを綺麗に取り尽くし、骨だけがそこに残る。カサカサ禁止で溜まったフラストレーションをここで発散したのだ。

「ごめんなさいね、宮崎さん。こんなネギだけど、宜しくお願いします…」

「は、はい、分かりましたー…。」

顔を赤らめてモジモジするのどか。照れ隠しなのか手元の箸が高速で動き始め…

！？

ネギと同じく魚を解体してゆく！これは速い！京都で身についた鮭の身ほぐしの箸のスピードは、未だ健在であった。ネギは純粋に「わぁ、凄いや…」と感心していた。

（この子達は…。嫌な所で似た者同士かもね。）

この二人は上手く行く。アリアは直感的にそう思った。

食事は、何の問題も無く行われた。ウェールズ…というかイギリスの料理は基本的にあまり手を加えないシンプルな料理だ。素材が良くて調味料や香草の使い方を間違えなければ変な味にはならない。のどかは美味しそうに食べていたし、ネギも懐かしそうに目を潤ませていた。ホームシック気味なのかもしれない。

そして、食事も終わってしばらくした後。アリアはのどかに本題を切り出した。

「宮崎さん。京都での騒動を知ってる貴女に言うのも今更なんだけど、ネギと一緒に居たいというのは、危険が伴うというのも分かってないといけないの。貴女は、それでもネギと一緒に居たい？」

本当に今更だとは思う。放課後、エヴァンジェリンの特訓希望者を募った際にのどかは一番に志願していたと、石田から伝え聞いている。ただ、のどかの口から聞きたかったのだ。

「はい、それでも一緒に居たいです。」

「のどかさん…。」

ネギは感動していた。誰かに好きと言ってもらえて、ここまで想ってもらえるなんて、思ってなかったのだ。

「うーん…。なら、危険に対処出来るようにならないとね。せめて、危険を察知して助けを求められるくらいにはなってもらうわ。」

やはり、彼女の決意は固い。だったら問題ないかな、とアリアは判断した。教師としては甚だ問題有りなのだが、仕方ない。

アリアは、呪文を唱え始めた。ネギ、のどかの周りを囲むように魔方陣が形成される。

「お姉ちゃん、まさかこれは！？」

「そ。仮契約の魔方陣よ。のどかさん、今からネギと契約を結んでもらうわ。そうしたら、テレパシーを使えたり心の結びつきも強くなるから。いいわね？」

少し強引に話を進める。のどかはすぐに頷いた。

「じゃあ、魔方陣の中央でネギと向かい合って、キスして下さい。」

「はい…。…え？」

固まる。

「キスが、契約の方法なの。出来る？」

ボッ、と顔が真っ赤に茹で上がる。キス！ネギせんせーとキス！こんな形で夢が叶うなんて！

「お姉ちゃん、やっぱりそれは可哀想だよ。契約なら血液でも出来るハズだよ。」

「ネギはこう言ってるけど、宮崎さんはどうする？キス、やめる？」

のどかは、首をぶんぶんと振った。

「ネ、ネギせんせーとキス、したいですー…」

もはや契約ではなくキスがメインになっていた。恥ずかしそうに

言うのどかに、ネギも覚悟を決めた。奥ゆかしい日本の女性にここまで言わせては、英国紳士として失格ではないか、と。

「分かりました、のどかさん。では、目を閉じて下さい。」

「はい…。」

魔方陣の上で膝立ちしたのどかは、ネギの言うままに目蓋を閉じる。そののどかの頬に手を添えて、ネギは唇をそっと重ねた。

シュワァァ…

光が、二人を包み込む。その光景を、アリアは羨ましそうに眺めていた。

（やっぱり、こういうのが契約よね。石田さんやエヴァさんの契約なんて、インモラル過ぎるもの）

出来る事ならやり直したい。そう思っていた。

魔方陣が解けて、のどかの目の前に一枚のカードが舞い降りて来た。それは仮契約のカード。本を手にした宮崎のどかの姿が描かれていた。

ああ、そう言えばこの子のアーティファクトって極悪だったわね。

アリアは原作を思い出して焦っていた。相手の心を読んでしまうアイテムだったハズだ。

「宮崎さん。そのカードを持って、『アデアット』って言ってみてくれる？」

「は、はい！…アデアット！」

途端に、手元に本が現れる。分厚く、立派な本だった。間違いない、『イドの絵日記』だ。名前を言って本を開くと、その名前の人の心の中をのぞき込める禁断のアイテム。使いようによっては非常に危険なアーティファクトだ。

アリアは、使い方をのどかに説明する。試しに、自分の名前を言って本を開かせた。

「み、宮崎のどか…。開きます…。」

恐る恐る、本を開くのどか。アリアとネギには、見せないようにしていた。そして、その内容を見て…

「……っ！？」

またもや、茹で蛸に。いや、先ほどまでとは比べものにならない位の赤さだ。急いで、本を閉じた。

「一体、何を考えてたのかしらね。まぁ、いいわ。これで、私が危険だと言った理由が分かったでしょ？『アベアット』と言えばカードに戻るから、戻しとくといいわ。」

「あ、アベアット！」

慌ててカードに戻す。冷や汗をかいていた。本当に、何を考えていたのだろうか。ネギも不思議な顔をしていた。

「そのカードを額につけて念じると、契約者とテレパスを繋げる事が出来るの。もし身の危険を感じたら、すぐにネギに連絡しなさい。ネギも、宮崎さんから呼びかけがあったら、しっかり聞いてあげるのよ？」

「うん、お姉ちゃん！」

元気よく返事をするネギ。のどかの方を向いて、話しかけた。

「のどかさん、何かあったら、すぐに駆けつけます。だから、安心してくれていいですからね。」

「は、はいー…」

罪悪感で一杯になりながら、のどかは返事をする。ああ、無意識で自分は何て事を…。ネギせんせーごめんなさい、と心の中で何度も謝っていた。

こうして、宮崎のどかは自ら進んで魔法使いの世界に足を踏み入れる事となった。この時点では、ただ本とネギが好きなだけの女の子。原作と、何ら変わりもない本屋ちゃん。しかし運命の歯車は、どうやら狂っていたらしい。

少女は、不思議少女にクラスチェンジする事になる。

そして、そのキッカケを作ったのは、間違いなくこの日のネギと

アリアであった。

【神楽坂明日菜】

エヴァちゃんの家に、訓練の件で相談に行ったんだけど…。参ったわ。まさか、普通に頼んだら普通に「テストする」って言われちゃった。確かに見込みの無い人に物を教えたくないのは分かるけど、エヴァちゃんも同じクラスメートなんだからちょっとはサービスしてくれてもいいじゃない。

何よ、『ネギに一発入れてみろ』って。アイツ、魔法使いでしょ！飛ぶでしょ！第一、先生を殴れるワケないのに！…いや、私殴ってるわ。結構前の話だけど。

とにかく、無理だって言ったら怒られた。そんな甘い奴に教えてやれる事は無いって。けど、皆を代表して私がテストを受ける話になってたからなんとかすがりついたけどね。分かった、殴るから教えてって。このセリフ、聞きようによっては強盗みたいよね。どうでもいいけど。

で、日時は明後日だって。土曜日の、夜。世界樹の根元とか…果たし合いみたいでイヤなんだけど。私の後ろでは、何だかわくわくしながらクーと長瀬さんが私を見ている。アンタら、自分が戦いたいんでしょ。代わってあげたいけど、エヴァちゃんのご指名だから…

参加メンバーでここにいるのは、今日はあやかと長瀬さんとクーだけ。他のメンバーは用事があるから来れなかったけど、木乃香と刹那さんは剣技を見てくれる先生として訓練に参加してくれるっぽい。本屋ちゃんは今日は用事で来れなかったけど、基本的に訓練に前向きみたい。後は、多分格闘面の指導を超さんがしてくれるかな？他にも美空とかもいるけど皆忙しいから一度に揃う事は無いと思う。

今朝芦先生と話した後、私はずっと考えていた。このまま、普通の人として生きようとして、本当にそのまま普通に生きていけるのかなって。答えは、ＮＯ。京都に行っただけでアレだもん。無理よ。なら、強くなって襲って来る連中を退けるしかない。火の粉を振り払う手を持つしかないもの。それに、逃げてるのって私らしくないしね。

ごめんなさい、ガトーさん。私は戦う道を選びます。私の幸せは、多分勝ち取らないと得られない物だから…。

土曜日。

神楽坂明日菜は、緊張の面持ちで世界樹の根元にやってくる。リュックの中には護衛のチャチャゼロが入っているが、今回は護衛というより見物だ。頭をひょこっと出して、エヴァンジェリンに挨拶をした。

「ヨウ、久シブリジャネエカ。調子ハドウダヨ、ゴ主人。」

「お前か。調子だと？すこぶる悪いわ。茶々丸がまだ戻らんからな。」

今日のエヴァンジェリンは少しイライラしている。茶々丸がバージョンアップの為に、ラボに入りっ放しなのだ。身の回りの事を自分でやらなければならない。二日目にして、限界が来ていた。隣についている石田は、今日から茶々丸の代わりに家事を手伝う事になっているらしい。

「…一緒ニ世界中逃ゲ回ッタ時ハモウチョット逞シカッタケドナ。」

「いうな。自覚はしている。…では、テストを始めるぞ。そっちの準備はいいか？」

明日菜は、ついて来たあやか達を少し離れた場所に待機させ、エヴァンジェリンに向かって頷いた。

「よし。じゃあ、そこでイチャついてる淫行教師もこっちに来い。」

「い…？意味がわかりませんが、行きます。では、のどかさん。のどかさんはのどかさんの好きなようにして下さい。」

「はい、ごめんなさいです…」

エヴァンジェリンの後方ではアリア、ネギ、のどかが何やら話をしていたが、エヴァンジェリンに言われてネギがやって来た。

「心の整理はついたか？始めるぞ？」

「はい、いつでも大丈夫です。」

ネギには、今回のテストの結果次第では次のステップに進むと言ってある。攻撃を避けきれば、とは言っていない。その意味に気づかなければ修行は終了となる。

「よし。じゃあ、二人とも広場の中央に立て。私の合図と共にテストを始める。」

「「はい。」」

二人は、言われた通りに広場の中央に立った。その間、互いに言葉は交わさない。ただ、しっかりと目を合わせていた。

皆が、固唾を飲んでそれを見つめている。張り詰めた空気、緊張感がピークに達した時…エヴァンジェリンが口を開いた。

「始め！」

第五十二話　見上げた先にあるもの

日も暮れて、街灯に明かりが灯る頃。世界樹の下では神楽坂明日菜とネギ・スプリングフィールドによる一騎打ちが繰り広げられていた。と言っても、ネギは避けるだけ。制限時間３０分のうちに一発でも明日菜がネギに攻撃を加えたら、そこで終了となる。

この試験において、ネギはエヴァンジェリンに次のような説明を受けていた。

「明日菜の攻撃を避けきったら、坊やは次のステップに進める。明日菜には、坊やに一撃でも加えられたら修行を引き受けると伝えている。自分の修行と明日菜の修行…どちらを優先するかは坊や次第だ。」

意地悪な試験だ。ネギは自分のステップアップを優先したかったが、だからと言って明日菜の成長の芽を摘むのはためらわれる。どうにか、うまい落とし所はないのだろうか…そう考えていたが、いい案は思いつかなかった。

考えがまとまらないまま、ネギは明日菜の前に立った。しかしどちらにせよ、試験であるなら全力でやろう。わざと当たってあげても、それでは明日菜の為にはならない。ネギは深く考えずに、エヴァンジェリンの号令を聞いた。

「くっ…！　ネギ、待ちなさい！」

「嫌です！　明らかに当たると痛そうです！」

試験開始と同時に、明日菜は魔力で身体強化をしてネギに詰め寄る。そして、ジャブと蹴りのコンビネーションでネギを追い詰めるが、ネギも素早い動きでそれをかわす。まだカサカサとは動いていないが、それでも恐ろしく速かった。

それを、ギャラリーの生徒たちは呆気に取られて眺めていた。メンバーは、あやか、長瀬、クー、のどか。アリアと石田は予想通りの展開だったので驚く事は無い。見物に来ていた木乃香と刹那は、ネギの成長に驚いているようだった。

「どちらを応援していいのか迷いますわ…。明日菜さんに勝って欲しいですけど、ネギ先生に怪我をされても困りますし…」

「いや、今は明日菜を応援するでござるよ。合格してもらわねば修行を受けられないでござる。」

明日菜と結ばれても、やはりショタコンのあやかはネギの心配もしてしまう。少し呆れながら長瀬が突っ込むが、聞いていなかった。

「んー、これなら私がやりたかったアルよ。ネギ坊主、いい動きしてるアル。魔法使いより武術家目指した方が成功しそうアルね。」

長瀬とクーは、何気に明日菜が羨ましかった。試験を受けたかったが、明日菜がエヴァンジェリンに指名されていたので諦めるしかなかったのだ。本来ならば格闘に抜きん出た二人の独壇場となる試験だったのだが…

「ううっ！　ちょこまか避けるなぁ！！」

「避けないと僕が死んじゃいますよ！」

なりふり構っていられない。明日菜は鋭い蹴りを何発も繰り出すが、ネギはそれをしゃがんだり仰け反ったりして避ける。その度にスカートがめくりあがって思いっきり見えてしまいネギは恥ずかしがったが、目をそらしては隙が出来るのでそらせなかった。決して、喜んで見ている訳ではない。多分。

その光景を、宮崎のどかは複雑な様子で見ていた。ネギに勝ってほしい。けど、それでは修行が出来なくなる。修行が受けられないなら、自分は足手まといなままじゃないか、と。腕時計を見ると、もう１０分が経過していた。

そこに、声をかける者が一人。やけに低い所から聞こえてくるその声は、あのチャチャゼロのものだった。

「イイコトヲ教エテヤロウカ」

「良いこと、ですかー…？」

「アア。ゴ主人ハ、手伝ッチャイケネエナンテ一言モ言ッテネエダロ？　オマエノ持ッテル仮契約カードガドンナ物カ知ラネエガ、手伝エルナラ手伝ッテイインジャネエカ？」

先ほどからのどかが手に持って胸に抱いている仮契約カードを見ながら、チャチャゼロが言う。のどかは自身の持つアーティファクトを思い出し、ハッとした。心を読む事で、明日菜をサポート出来

ないだろうか。

「アリアせんせー、あの、私…」

「いいわよ。始まる前にネギに言われたでしょ。あなたは、あなたの好きなようにやりなさいって。こういう展開になるのは、あの子も分かってたわ」

そう、この試験が始まる直前に、のどかは明日菜を応援していいかネギに聞いていた。自分も、守られてばかりは嫌だと。修行に参加して、自分の身を自分で守れるようになりたい、と言っていた。その為には、このテストでは明日菜に勝って欲しい。のどかはそれを正直にネギに伝え、ネギもそれを受け入れていた。

のどかは、アーティファクトを使う事に決めた。心の中でネギにごめんなさいと謝り、カードを掲げる。

「アデアット！　ネギ・スプリングフィールドせんせーの、心を覗かせて下さい！」

パアァァァ、とカードが光を放ち本へとその形状を変える。のどかはそれを開いて…驚いた。興味津々なアリアとチャチャゼロも、後ろからそれを覗いて固まっている。

イドの絵日記には、デカデカとパンツが描かれていた。

「あ、あうぅ…ネギせんせー、えっちです…」

「ケケケ、ガキガ色気ヅキヤガッテ。イイ根性シテルジャネーカ」

「こらネギー！　あんた試験中になんて事考えてんのよー！」

アリアの叫びに、ネギが動揺する。あれ、考えてる事？　ちらりと横目で見てみると、のどかの手に絵日記が見えた。

「わ、わ、考えてる事が読まれてる！」

「へー、本屋ちゃんのアーティファクトなんだ、アレ。で、あんた何考えてたのよ」

「い、いえ何も考えてません！　明日菜さんがクマパンだとか、どんどん食い込んで来てるとか…」

「ほほう…」

バキバキと指を鳴らす。もう容赦は要らないだろう。目の前のコイツは敵だ。子供だからって、やっていい事と悪い事がある。そして、乙女の下着をガン見するのはどう考えたってアウトだ。

「このエロネギ！　テストとか関係無くぶっ叩く！」

「うわぁぁん！　助けてー！」

そこから、壮絶な追いかけっこが始まった。ネギはカサカサを解禁し、全力で走り回る。明日菜はその動きに面食らいながらも、必死にネギを追いかけ回した。もう、異常すぎる光景である。ギャラリーの多くは絶句して固まり、のどかは失神していた。アリアは頭を抱え、エヴァンジェリンは心底嫌そうな顔をしている。チャチャゼロは爆笑していた。

そんな中、木乃香と刹那だけは笑わずに興味深くそれを見ている。

「せっちゃん。明日菜、使ってるの魔力だけやないな？」

「ええ。気も同時に使って身体強化してますね。ネギ先生も同様です。短期間に、ここまで成長するなんて恐ろしいですね」

実は二人はエヴァンジェリンからネギの訓練の手伝いを頼まれていた。今回見物に来たのは、ネギの実力を見る為であった。

「…どうだ？　指導してみる気はあるか？」

二人のもとへやってきたエヴァンジェリンが、声をかけてくる。

二人は振り返ると、複雑な顔をした。

「ウチらは、成るべく魔法使い関係に関わりたくないんやけどな。確かにネギ君は頑張っとるし応援はしてあげたいけど、なんでウチらが鍛えなアカンのか分からん。ネギ君、剣より体術向きやん」

「言い方は冷たくなってしまいますが、私も同意見です。気を操る術を教える事は出来ますが、それ以上は力になれそうにありません。…不思議だったのですが、何故私たちに声をかけたのですか？　魔法使いの訓練ならエヴァンジェリンさん一人で充分過ぎるでしょう」

この反応は、予想していたのだろう。エヴァンジェリンは、怒る事なくただ黙って聞いていた。刹那の問いにも、しばらく言葉を探すように黙り込んでから答える。

「…お前たちは、幸せを勝ち取る為に戦って来ただろう。京都での姿を見て、その強さは本物だと思ったよ。…お前たちにはネギに戦

い方を教えて欲しかった。一人ではなく、協力して戦う事でどれだけ強くなれるかを見せてやりたくてな。アイツは、下手をすると自分で何でも背負い込んでしまうから。」

そこで一呼吸置く。エヴァンジェリンは少し疲れたような表情で言った。

「私にはそこら辺を教えてやる事は出来ん。今まで生きてきて、基本的に誰かに助けを求めたり、手を取り合う事などなかったからな。お前たちなら適任だと思ったんだが…無理なら、それで構わん。手間を取らせてすまなかったな」

普段、高慢とも取れる態度を取っているエヴァンジェリンとは思えない言葉に二人は驚いた。何故彼女がそこまでネギに肩入れするのか分からないが、何だか断るのも悪いかな、とも思えてくる。木乃香と刹那は、顔を見合わせてどうしようか考えた。

（しばらく暇やし、付きおうたる？このままサイナラも可哀想やし）

（そうですね。純粋に、私もネギ先生の成長を見届けてみたいという気持ちもありますから）

頷きあって、二人はエヴァンジェリンの方へ向き直した。木乃香が、口を開く。

「ええよ。時間ある時は、ウチらがネギ君見たるわ」

「本当か！　それは、助かる！　すまないな、木乃香、刹那。お前たちが協力してくれるなら、アイツもまともに成長するだろう。少なくとも…」

チラッと、世界樹の幹を見上げる。そこには、手足をバタつかせながら不思議な動きで木を登るネギの姿があった。

「…人には戻してくれると期待している」

「せやな。ウチらも虫の相手は御免やから」

「同感です。高い所に登るとますますGに似てきて嫌ですね」

三人は、まさに虫を見るような目でネギを見上げるのだった。

世界樹の枝の上を、ネギと明日菜が飛び回る。時間は２０分を経過、明日菜は焦っていた。

「止まりなさいって言ってんでしょ、バカネギー！」

「バカって言う方がバカなんですよ、明日菜さん！　だから明日菜さんの方がバカなんです！」

「何よ、セクハラ教師！　本屋ちゃんがカード持ってるって事は、あんたキスしたんでしょ！　淫行教師じゃない！　私のパンツも見るし！」

「パンツは明日菜さんから見せて来たんじゃないですか！　僕知っ

てます！　そういうの、痴女って言うんです！」

「くぉのガキャーっ！」

子供の喧嘩である。二人は夢中で追いかけっこしているので気づかないが、もう既に二人とも魔力と気を使った身体強化は完全にモノにしていた。まさに天狗と言っていいような滅茶苦茶な動きで枝を飛び交って行く。ネギの方がスピードは速いが、明日菜は先読みと小回りの良さで肉薄していた。

そして、世界樹のかなり上まで来た時。そこでネギは自分がどれだけ高い所にいるのかを知った。ビュウ、と夜の冷たい風が吹き、ネギは身震いをする。下から迫って来ていた明日菜に向かって、久しぶりに大きなくしゃみを放った。

「ふえっくしょん！」

バシュウゥゥウッ！

武装解除魔法が放たれ、明日菜はまともにそれを受けながら、そのままネギの隣を通過する。魔力の暴走。最近では滅多になかった現象が、よりにもよってこのシチュエーションで起こってしまうとは。明日菜は服を剥がされながら真っ直ぐ上空へと放り出され…

世界樹のてっぺんに、裸の女が降り立つ。

そこに、何故か世界樹の発光が重なった。ライトアップされた明日菜はあまりの事に固まってしまう。そして、そこにネギは追い討ちをかけた。足元で、明日菜を見上げながら楽しそうに言う。

「あ、明日菜さんってまだ子供だったんですね。この間、茶々丸さんに教わりました。こういうの、パイパ…」

バキィッ！

「きゃあぁぁぁぁぁっ！？」

明日菜の蹴りが、炸裂した。

時間にして２６分。明日菜はこうして、エヴァンジェリンの試験に合格した。…心に、小さくはない傷を残して。

「エヴァンジェリンさん…」

「今更、さっきの無しとか言うなよ！？　頼むから、言わないでくれよ！？」

「ちょっと、考えてまうなあ、これは…」

地上の三人は、何だか脱力しながら宙を舞うネギを見つめていた。

第五十三話　新しい道

麻帆良ロボット工学部の研究室では、今まさに茶々丸の改造が終了した所だった。芦優太郎の姿は整備士というよりも外科医であり、オペを終えたばかり、という感じの外見をしている。

「芦先生…私達は、何をしたんでしょう？　命を作ったんですか？」

「まさか。魂は既にあったからね。ただ、器を作っただけさ。と言っても、魂だなんて科学的じゃないから信じてもらえないかな？」

問いかけられた葉加瀬は、疲労困憊の顔で首を振る。この数日、学校が終わってから夜中まで茶々丸の改造に立ち会ったが、目の前で繰り広げられる未知の技術のオンパレードに頭がついて行かなくなっていた。魔法を使われるより、この改造の方がよほど魔法に見えていた。

茶々丸は、見た目は完璧に人間の女性になっていた。だが、その身体を構成する細胞は全て受肉した魔族のものと同じらしい。魔族と機械のハーフ…と言ったところだろうか。

寝台に移されていた茶々丸が、目を覚ます。もはや、起動という言葉が似合わないくらいの自然な動きで、茶々丸はゆっくりと起き上がった。

「…おはようございます、芦優太郎先生、葉加瀬さん」

素肌にかけられた薄い布に手をかけた。自分の身体が一体どうなったのか知りたかったのだ。その布をめくると、茶々丸は言葉を無

くす。
継ぎ目の無い、美しい身体。触ると、ちゃんと感覚があり柔らかかった。

「あの…これは、本当に私の身体なのでしょうか。とても…信じられません」

「茶々丸、信じられないのは私も一緒だよ。けど、間違いなく貴女の身体だから安心して」

葉加瀬が言うと、茶々丸はそれでも信じられないのか芦の顔を見る。丁度、芦はコーヒーを煎れている所だった。茶々丸の方を向いて、ニッコリ微笑む。

「その身体で目覚めて初めてのコーヒーだ。飲んでみてくれないか」

茶々丸は差し出されたコーヒーを、戸惑いながら受け取る。恐る恐る口をつけると、ゆっくりと口に含んだ。

「……苦いです。けど、後から甘味が感じられます」
「うむ、ちゃんと味が分かるようだね。感覚は正常だよ。おめでとう、茶々丸君。君は、生まれ変わった」

祝福の言葉を受けて…ようやく、茶々丸は夢が叶った事を知る。人と同じ肉体、感覚。もう、ガイノイドだからと皆から一歩引いた態度を取らなくても良いのだ。ネギ先生の隣にいても…変な風に見られる事もないだろう。そう思うと、自然と涙がこぼれ落ちた。レンズの洗浄液ではない、本物の涙が。

「良かったね、茶々丸。超さんもすぐに来るから、新しい姿を見せ

てあげて。超さん、今は仕事で超包子にいるけどさっき連絡入れたらすぐに来るって」

「超君は忙しい身だが、仕事の合間を縫って様子を見に来ていたよ。今日も、クー・フェイ君が居ない穴を埋める為に店に入っていたが、早めに店を閉めて君に会いに来るそうだ。元気な姿を見せて、安心させてやってくれ」

「はい…」

涙を拭いながら、茶々丸は答えた。自分の我が儘の為に、皆がここまで頑張ってくれるとは思わなかったのだ。申し訳ない気持ちと、嬉しい気持ちでどうにかなってしまいそうだった。

…と、そこへバタバタと大きな音を立ててやってくる人影が。超である。

「はぁ、はぁ、茶々丸は!?　茶々丸は何処ネ!?」

「ここです、超さん!」

声のする方へ向くと、そこにはシーツのような布をはだけさせ、涙に濡れる茶々丸。傍らには、芦がいた。

「何してるカ、アシュタロスー!」

バキッ!

「ぷろばっ!?」

芦が吹っ飛んだ。

「だ、大丈夫カ、茶々丸！　何か変な事をされてないカ！？」
駆け寄る超。完全に勘違いしている。

「え、ええ。何も…ぁあ、この身体で初めてある液体（コーヒー）を飲まされましたが、それくらいです」

「なっ…！？」
超が真っ赤になる。代わりに芦の顔は青ざめた。

「口にふくまされ、味はどうだと聞かれましたから、苦いけれど甘味もあると答えました。そうしたら、感覚は正常だと言われて…」

「茶々丸君、それは酷いぞ！？　分かって言ってるだろう！」

「アシュタロスゥゥ……」

ゆらぁ…、と倒れている芦へ近づいて行く超。そこへ、茶々丸は澄ました顔で礼を言った。

「コーヒー、御馳走様でした。とても美味しかったです」

「よくモ茶々丸にコーヒーなんカ飲ま…って、エッ？　コーヒー？」

「目覚めのコーヒーを振る舞っただけだ。味覚が正常に働くかどうか試してみたのだよ。」

アゴをさすりながら立ち上がる芦。少しキツく睨みつけると、超は誤魔化すように笑った。

「アハハハハ、信じてたヨ、アシュタロス！」

「殴ってから言うセリフかね、それは！」

ポカっと軽く小突くだけで許す芦は、大人である。

超は芦に謝ってから、再度茶々丸のそばに来て身体を確かめた。

「今までのよう二、自分のスペックを確認して見るといいヨ。設計には私も関わったからラ、なるべく今までと同じように動けるようになってるハズだヨ」

言われるがまま、茶々丸は自分のスペックを確認する。そして、驚いた。演算能力や通信機能などはそのままに、人としての能力も兼ね備え、尚且つ魔族としての絶大なパワーをも内包している。兵装は魔力によって亜空間にしまってあり、普段は軽装で済む。軽装の状態で既に以前の十倍近い力を得ていた。

そして、何よりこの身体は…子供を作る事が出来た。命を、育む事が出来るのだ。

「超さん、これは…！」

「茶々丸なラ、いいお母さんになれると思うヨ。生みの親の私たちが、保証するネ」

後ろにいた葉加瀬も、少し顔を赤らめながら頷いた。正直言って、最初は葉加瀬も難色を示していたが、茶々丸の夢なら叶えてあげたいと納得したのだ。

「茶々丸が誰の子を生みたいのかは敢えて聞かないけど。年齢的な所はちゃんとクリアしてからにしてね」

そこら辺は、譲れない。葉加瀬が言うと、茶々丸は笑顔で頷いた。
…本当に分かっているのだろうか。

「そう言えば、ネギ先生は今どこに居るのでしょう。確か、マスターの試験が近々行われるハズですが…」

「ん…？　ああ、クーの言ってたテストってその事ネ！？　それなら、今やってるハズだヨ。葉加瀬、モニターに映せるかナ？」
超は失念していた。クーが外せないテストと言ってたからてっきり課題を出されたのかと思っていたのだが、明日菜とネギのテストの事だったらしい。葉加瀬は世界樹の監視カメラの映像を、研究室のモニターに映し出した。そこには、世界樹を飛び回るネギと明日菜の姿が。しかし、暗くて良く見えなかった。

「ううむ、良く見えないネ。」

「石田が居るハズだ。世界樹に、発光してもらえるか頼んでもらおうか」
芦は、念話を石田留美に通す。直ぐに念話は繋がり、石田が応答した。

（どうしましたか、マスター。こちらは酷い事になってますが）

（私たちも監視カメラで見てるんだが、暗くてよく見えないのだよ。世界樹に発光してもらえないか聞いてみてくれるか）

（良いですけど…明日、龍宮さんと甘味処に行くんですが金銭面での援助をお願いします）

（わかったわかった、好きなだけ食べるといい。だから、交渉頼んだぞ）

そう伝えて、念話を切った。

切ってしまった。

芦は知らない。龍宮一人でも厳しいのに石田はそれ以上の甘党だったりするのだ。明日1日だけで消費する金額は…大変な事になってしまうだろう。知らない方が、幸せなのかもしれない。

「今頼んだから、じきにライトアップされるだろう」

「助かるネ。茶々丸は見えるだろうけド、私たちは見えないからネ」

頬を染めてモニターを見つめる茶々丸を見ながら、超が言う。茶々丸はなんの助けも必要とせず、モニター越しでも暗闇を解析して見通す事が出来る。いくら強靭な肉体を得ても、自分たちは暗闇では魔法に頼らざるを得ない。そこらへんは、やはり羨ましかった。茶々丸の目は、一体何を見ているのだろうか。

しばらくして、世界樹に明かりが灯る。超、葉加瀬、芦はモニターを見て…

固まった。

そこには、裸の明日菜の姿が。その下には、ネギがいる。明日菜を見上げて何か言うと、思いっきり蹴り飛ばされた。

「ネギ先生…そんな目立つ所で露出させるなんて、私好みの鬼畜に

成長したようですね。私の教えた保健体育の知識が無駄にならずに良かった…」

「一体何を教えたネ…」

「知りたいですか？」

「いや、言わなくていイ…」

一体、どこで間違ったのだろうか。立派に変態している茶々丸を見ながら、超は頭を抱える。育て方を間違えたか…。いや、一番近くにいるのはエヴァンジェリンだ。彼女の影響がダイレクトに出ただけだろう。超は心の中で茶々丸に謝った。そして、ネギにも。

（すまないネギ坊主！　きっと茶々丸はどんな手を使ってもネギ坊主の子供を作ろうとするヨ。ある程度はこっちで抑えるけド…多分、無理ネ）

夜空を舞うネギを見ながら、超はこの世界に生まれる自分はどんな存在なのだろうと思った。ネギと茶々丸の子孫だったら…かなり怖い。超は慌てて頭を振って、嫌な妄想を頭の外へと追いやるのだった。

テストは明日菜の合格と言う形で終わった。喜ぶクーや長瀬、ど

こから取り出したのか明日菜にすぐ服を着せるあやか。明日菜自身は喜ぶどころかネギを睨みつけて威嚇していたが、この世の終わりかというような顔をしているネギを見て、困惑していた。

「ハハハハハ、坊やは残念だったな！　これで私の修行はお終いだ」

「ぅうう……分かってます。僕は、もう駄目人間です…。死んだ方がマシです…」

「いや、何もそこまで落ち込まんでもいいだろうに…」

エヴァンジェリンにいじられ、本気で鬱モードに入るネギ。感情の振り幅が激し過ぎる。それを心配そうに見つめるのは宮崎のどかだが、エヴァンジェリンが怖いのどかは声をかけづらかった。

そうした空気を気にせず声をかけられるのは、やはり明日菜だ。

「…ねえ、エヴァちゃん。修行終わりっていうのは可哀想じゃない？　コイツだってスケベだけど目的意識があってやってるんだろうし…」

あれだけ恥ずかしい目に遭わされてネギを気遣える明日菜は大人だ。エヴァンジェリンは内心感心していた。が、だからと言って約束を違える真似はしない。

「約束は約束だ。私の修行は終わり。ネギ、お前には別の人間が指導にあたる。木乃香、刹那。頼んだぞ」

「え…？」

俯いて涙を滲ませていたネギが、顔を上げる。そこには木乃香と刹那の姿があった。木乃香は短い髪の毛を弄って遊んでいて、刹那は腕を組んでつまらなさそうに佇んでいる。…なんだか、乗り気ではなさそうだ。

「ネギ先生。次からは私が中心となって身体面と気の扱い方を徹底的に仕込みます。お嬢様には手合わせを担当してもらいますが、そのレベルに達していないと私が判断したら、手合わせはさせません」

「ウチら、あんまりご立派な魔法使いとは関わりあいたくないんよ。それに、素質無い子に何か教えるとか無駄な事もしたくないし。アカンと思ったらそこでシマイにするから、そのつもりでやってもらうえ」

二人の視線は、氷のように冷たかった。明日菜は木乃香と刹那の厳しさを知っているが、あやかやクーたちは思わず固まってしまう。エヴァンジェリンでさえ、二人の視線に殺気のようなものを感じて驚いていた。

これは、原作と違い二人がネギを認めてないから、というのも理由の一つである。確かに京都では人形相手に効果的なダメージを与える事が出来たし、将来を考えてみても有望だ。が、ネギはあくまで魔法使い。祖父である腹黒ジジイたちの仲間じゃないか、と木乃香は思っていた。刹那も子供の相手をするなら、木乃香と遊びに行った方が何万倍も楽しいだろう。が、二人はエヴァンジェリンの事を考えてネギの修行を引き受ける事にしたのだ。

ネギの可能性には興味があるが、ネギの人生には興味はない。必要以上に関わりたくもない。そこらへんは、かなりドライであった。

「刹那さんと木乃香さんが、僕の指導を…？」

「そうだ。元々私が教えるのは魔法の基礎のみにする予定だった。第一、坊やとは得意な属性も違うし。闇の魔法を教えようとも思ったが早すぎるしな」

ネギはよく分かっていなかった。ただ強くなれればそれで良かったので、何も考えずに頷く。

「ハイ！　宜しくお願いします！」

それは、ネギにとってかなり厳しい修行となるのだが、結果的には最良の修行であった。剣技については完全に素人なネギは、ここでみっちりと剣の基礎を叩き込まれる事となる。それが、後々麻帆良を襲撃してくる山下・K・ストライフとの戦いで活かされるのだが、この時点でそれを予測している者はだれもいない。

原作でいう所の魔法剣士への道を、ネギは知らないうちに歩き始めていた。

第五十四話　図書館島殺人事件～ドラゴンは見た～

図書館に関わる人間には二種類いる。魔法関係者とそうでない者。多数派なのは圧倒的に関係者の方である。そんな魔法関係者の中にも、大きく分けて二種類のタイプがある。

そこに何があるのか、知っている者と知らない者だ。

こちらは、知らない者が圧倒的多数だ。学園側は、魔法生徒や魔法先生たちに「貴重な魔法書や道具、文献が保管されている」とだけ伝えてある。それだけ伝えておけば、魔法の秘匿を守らなければならないという事で自然と気をつけるようになる。実際、メルキセデクの書などの貴重な魔法書は多く貯蔵されていた。それが目くらましに使われている等とは、誰も思わないだろう。

図書館島探検部は、部と言いながらもサークル活動に毛の生えた規模の集まりである。本来、図書館に関わる活動には厳しい制限がつく。こんな、探検などやらかす人間は普通排除されるのだが、そこは「学園長が特別に作り上げたクラスの生徒の活動だから」と認められた。勿論、高畑という監視つきではある。が、その待遇は特別な物であり、一部の人間の反感を買っていた。

そんな図書館探検部であるが、この活動に宮崎のどかが参加しているというのは大きな意味がある。のどかは元々図書委員であり、この図書館での活動を前々から行っていた。一般人という立場ではあるが、図書館の魔法生徒たちとは顔見知りであり、多少仲も良い。のどかという緩衝材のおかげで、綾瀬や早乙女も図書館である程度羽目を外しても大目に見て貰えていた。勿論、木乃香という存在が所属するからこそ直接手を出せないという理由もある。以前、手を

出そうとした魔法生徒が木乃香の手によって狂わされかけてからは、表立って批判する者はいなくなっていた。

図書館探検部は、そんな微妙な立ち位置にある集まりだった。

そんな探検部のメンバー、綾瀬と早乙女、のどかが休日の図書館に来たら…やはり、多少の警戒はされる。案の定、図書館の司書の女性の一人が声をかけてきた。

「おはようございます、のどかさん。今日は休日で貸し出し出来ませんが大丈夫ですか？」

「あ、はいー。今日は、ネギ先生に図書館の中をご案内しようと思って来ましたー…」

司書が目を移すと、のどかの隣で興味深そうにキョロキョロと周りを見渡す少年が。大戦の英雄、ナギ・スプリングフィールドの息子だ。

「そうですか。教員の方なら貸し出し出来ますから、もし必要があれば受け付けまで連絡下さい」

「あ、ハイ！　ありがとうございます！」

女性は安心して、その場を後にする。魔法関係者のネギであれば、無闇に魔法書を見たりバラしたりしないだろう。本も、丁寧に扱ってくれるハズだ、と。

「…さすがネギ先生です。あの口うるさいおばさんがすんなり退くとは…」

「だよねー。さすが先生、信頼されてるわ」

綾瀬と早乙女は感心したふうに言ってるが、内心は悔しかったりする。長く図書館に居て何も問題を起こしていない自分たちは何時までも警戒されているのに、と。なんだか、納得行かなかった。

「先生ですけど、初めて来たから分からない事だらけですよ。多分、ここに詳しい皆さんが居るから安心して仕事に戻って行ったんじゃないでしょうか」

必死にフォローするネギ。二人はそんなネギを見て、機嫌を直した。こんな子供に気を遣わせてどうする。今日は、ネギを楽しませる為に来たというのに。

「あはは、ネギ先生うまいね。そう言う事言ってると、将来ホストになるかもね！」

「１０歳でのどかを堕とすくらいですから、末恐ろしいのです」

聞いていたのどかは、「あうぅー…」と言って顔を赤くしていた。

休日の図書館島探索。

前日にエヴァンジェリンのテストに付き合って疲れてはいたもの

の、ネギは約束通りのどかたちと図書館島へとやって来ていた。元々本の虫と言われていたネギ。楽しみではあったのだ。アリアには身体を休めた方がいいんじゃないかと言われたが、約束を守る方が大切だと言って家を出てきていた。

その選択は、正解だった。

図書館の中は、恐ろしく広かった。こんな大きな図書館なんて、見た事が無かった。ネギは目を輝かせて周囲を見渡す。そんなネギを見て、早乙女は得意気に言うのだ。

「今日は、さらに凄い物を見せてあげるよ！」

「凄い…物？　図書館ですから、本でしょうか」

ピンと来ない。ビックリさせるとしたら、飛び出す絵本かな？ネギは頭の中で色々と考える。

「ネギせんせー、本じゃないです。本棚が、凄いんです」

「本棚？」

しばらく歩いて行くと、言ってる意味が分かった。通路がいつの間にか本棚の上になっているのだ。ネギ達は、本棚の上を歩いていた。そして、眼下には信じられない光景が。

「うわっ、高い！？　それに、水浸しじゃないですか！」

通路の下は崖のようになっていて、五メートル程下に水面があった。つまり、下は湖なのだ。いくら何でも、これはおかしい！

「驚いたでしょ、ネギ先生！　私達も最初は目を疑ったよねー」と、早乙女。

「しかし、目の前の光景は現実です。私達はこの不思議な図書館の構造を解明して、まだ見ぬ貴重な書物にたどり着こうという活動をしているのです」

綾瀬もニヤリと笑って得意気に言う。

そう、これが図書館探検部の活動の目的である。実は、図書委員の魔法生徒たちすらこの建物の構造を把握しきれていない。探検部は煙たがられてはいるものの、活動報告のレポートや地図は注目を集めていた。

「凄いですね！　何だか宝探ししてるみたいですよ」

ネギも興奮している。やはりネギも男の子。こういう冒険は嫌いではない。

「そう言ってくれると思ってたよ、ネギ先生！　じゃあ、ちょっとこれ見てよ！」

そう興奮気味に言って、早乙女は一枚の地図を取り出して広げた。

「これは、図書館探検部の皆でマッピングして作った地図なんだけどさ。この奥にまだ手をつけてない場所があるから、今日はそこに行こうと思うんだ。」

「前に夜中に忍び込んでから、この一帯の構造が激しく変化したのです。あまりに謎が多い場所です」

綾瀬の言葉に、ハッとするネギ。夜中に忍び込む？　そう言えば、修学旅行前にそんな騒動があった。あの時問題になったのは…頭が良くなる魔法の本があるという噂だ。そして、魔法先生の間でその騒動が問題になっていた。という事は、頭の良くなる本とは魔導書の類ではないか…。

今になって、やっとネギはこの部活の危うさに気づいた。魔法の秘匿を重視する魔法使いたちにとって、この部活は危険過ぎる。だから、タカミチが顧問していたのか、とネギは納得した。これは、自分がついてちゃんと見守ってあげないと危険だ。

「あ、あの、あまり知らない所に行くと危険じゃないですか？　足場も危ないし、そこにあるエレベーターを使った方がいいんじゃ…」

「「エレベーター？」」

ネギが指差した方向には、確かにエレベーターがあった。少し物陰になっていたが、見ればすぐにエレベーターだと分かる。

…しかし、綾瀬たちは絶句していた。

「ゆ…ゆえゆえー…、あんな所にエレベーターなんて、あったかなー…」

「い、いえ、のどか。ここはマッピング済みで、エレベーターなんて無かったハズです」

「気づかないワケ無いもんね、ウチらが…」

ネギも、驚く。この三人が気づかない？　なら、もしかして認識

阻害の魔法が施されていたのだろうか。何にせよ、もう遅い。エレベーターは、見つかってしまった。ネギは、あのエレベーターが魔法関係の物では無い事を祈った。

「でかしたよ、ネギ先生！　もしかしたら、こういう才能あるかもね！」

「活用するとしたら犯罪以外にしてほしい才能です。しかし、これで新たなる道が開けました。ありがとうございます、ネギ先生」

勿論、二人は行く気満々だ。先を行く二人の後を、心配そうについて行く。歩きながら、ネギはのどかに耳打ちした。

（もしかしたら、魔法関係かもしれません。エレベーターを使って行った先からは僕が先頭に行きますので、のどかさんは危険を感じたらすぐに二人を連れて戻れるようにしていて下さい。罠が仕掛けられてるかもしれませんから）

（わ、分かりましたー…）

緊張しながら頷くのどか。こうして、真面目にしているネギはやっぱり格好いい。昨日の不可思議な動きが嘘のようだ。

四人は、それぞれの理由で胸を高鳴らせながらエレベーターに乗り込んで行った。

…そして、それを陰から見つめる人物が一人。エレベーターの稼動を確認すると、音も無くその場から消え去った。

【早乙女ハルナ】

いやもうニヨニヨが止まらないって。のどかとネギ先生のラブラブっぷりったら最高だね！　やっぱり二人をネタに一本同人誌出したいね！　のどかが攻め…というか言葉責めとか新しいかな！　ネギ先生が泣きながら、なんて良いかもしんない！

「落ち着くです、ハルナ。妄想がだだ漏れです」

おや、失敬。あー、ほらほらネギ先生も怖がらないでよ。フィクションフィクション。ちゃんと修正もいれるからさ。

しかし、このエレベーターも今までどこに隠れてたんだか。前々から変だと思ってたけどさ。この図書館、レイアウト変わりすぎだし罠もたまにシャレにならないのあるし、どう考えても普通じゃないよね。なのに、帰る頃にはおかしいと考えてないんだから気味が悪いよ。あれかな、ホラー。怪奇ものだね。昔なら、狸に化かされたって奴？

でもねー。そんな事だらだら考えてたらエレベーターが一番下まで着いちゃったんだけど、そこから出たら狸どころじゃ無かったんだよね。

エレベーター出るじゃない？　そしたら広い野っ原にでたのよ。

なんじゃこらって言ってたら…

ベタッ…

ボタッ…　ドロリ…

ネギ先生の後ろをついてった私達の頭に、なんかかかった。

ほら、アレよ。ねっとりとして白く濁ったやつ。もうね、ゆえとかヤバいわけ。のどかも糸引きまくって、アレしっかりスケッチしといたらかなり使えるネタになったんだけどなぁ…。何に使うかって？　それは秘密。

まあ、何にせよ見上げた瞬間にそんな考え吹き飛んだけどね。だって、そこには凄いファンタジーなやつが立ってたんだから。

ドラゴンってｗｗｗ

誰もが凍りついた。

目の前に立ちふさがるその巨体。十メートル近くはあるであろう、その姿は間違いなく伝説上の生き物、ドラゴンだった。

「のどかさん、二人と一緒に逃げて！」

しかし固まるのも一瞬のみ。即座にネギはドラゴンの前に立ちふさがった。のどかも、ある程度ハプニングが起こる事を覚悟していたからか身体が動いた。綾瀬と早乙女の手を引いて、ドラゴンから遠ざかる。ネギはそれを確認すると、首に下げていたヒモから指輪を外して装着した。

魔法の秘匿などと悠長な事は言ってられない。生きるか死ぬかの瀬戸際なのだ。

ネギは身体に魔力と気を流して強化する。このドラゴンが本物なら、今の自分には勝てないだろう。しかし、生徒を逃がす為の時間稼ぎくらいは出来るハズだ。

「僕の生徒に手出しはさせません」

ネギは気迫の籠もった目で、ドラゴンを睨みつけた。ドラゴンも、戦闘の意志があると判断したのかネギを見つめる。両者が睨み合い、動きを止めていると…

キュィィィィン！

上空で、およそ生き物の発する音とは思えない奇っ怪な音が鳴り響いた。

「只今より戦闘に入ります。ネギ先生、危ないですから下がってください」

「茶々丸さん！？」

そう、そこには茶々丸がいた。

天井の無い、不思議な空間を茶々丸が舞っている。継ぎ目の無い身体はきわどいラインの水着のような物に包まれており、その上に兵装らしき物を着ている。手甲からは、青い光を放つ刀身のような物が飛び出していた。

「アーティカル・ブレイド！」

かけ声と共に、茶々丸が急降下する。直感的に、ネギは悟った。この場所にいたら巻き込まれて死ぬ！　ネギはすぐさま瞬動でその場から離れると、後方に避難していた三人の前に立って防壁を張った。

ズガアァァァァァンッ！！

それは、凄まじい衝撃。

まばゆい光を発したかと思うと、まるで間近で爆弾が爆発したかのような大きな音が周囲に響く。ネギの防壁は音もある程度防ぐが、それでも皆耳なりがするくらいはダメージを受けた。

ドラゴンは、消し飛んでしまっていた。

「ちゃ…茶々丸さん…？」

「ネギ先生、まだです。あれは魔力で作られた番人です。手応えがありませんでしたから、術者によって身体を消されたようです」

茶々丸は緊張を解かない。宙を睨みつけると、ネギに指示をだした。

「ネギ先生、先ほどの防壁をもう一度張ってください。今度は、もっと強く」

「は、ハイ！」

よく分からないが、ここは従った方がいい。ネギはあらん限りの力で防壁を張る。茶々丸はそれを確認すると耳当てのような物からおびただしい量の魔力のような青白い光を出す。光は瞬く間にその場に広がって行き…

「ガアァァァッ！？」

空気中にまたドラゴンの姿を映し出した。魔力の霧のような状態になっていたドラゴンを、固定化したのだ。

「言うなれば、茶々丸エフェクトです。もう、逃げられませんよ」

ニヤリと微笑んだ。

「ネギ先生の敵は私の敵です。覚悟していただきましょう。簡単には殺しません」

邪悪だ。邪悪すぎる。

その殺気に、ドラゴンも震え上がった。彼は単なる番人役であり、少し怖がらせて追い返そうとしただけなのだが…。

このままでは消される！

そんなピンチに身をふるわせるドラゴンと、まさに襲いかかろうとする茶々丸。そんな二人に、声がかけられる。

『そこまでです。剣を収めてくれませんか、エヴァンジェリン・A・

K・マクダウェルの従者さん』

それは、震え上がるドラゴンの真後ろにある扉の向こうから聞こえてきた。落ち着いた、男性の声。エヴァンジェリンの名前を出され、茶々丸は動きを止める。

『番人をけしかけたのは謝ります。キチンと謝罪したいので、どうか剣を収めて入って来てくれませんか』

「名乗らない上に自分で出て来ずに呼びつける者は信用出来ません。死にたくなかったら大人しく出て来なさい」

茶々丸は冷たく言い放つ。もしかしたら、マスターであるエヴァンジェリンより性格がキツくなっているかもしれない。茶々丸は右手を扉に向けると、カウントダウンを始めた。

「十秒以内に出てきなさい。１０……９……８……」

『わ、分かりました、今行きます！　待って下さい！』

「７６５４３２１０」

ドガァァァァンッ！

呆気にとられるネギたちを後目に、茶々丸はエネルギー波を放つ。既にドラゴンは逃げていて無事だったが、扉は粉々に破壊された。もしかしなくても、中の人も吹き飛んだだろう。何せ、急いで出て

こようとしていたのだから。初めから殺すつもりだったとしか考えられない。

（ごめんなさい、知らない人…僕がエレベーターなんか見つけなければこんな事にはならなかったのに…）

半泣きになりながら扉の残骸を見つめるネギ。そんな姿を、茶々丸は少しうっとりした表情で見つめていた。

第五十五話　麻帆良の秘密

破壊された扉を見ながら、綾瀬夕映と早乙女ハルナは震えていた。目の前の出来事が、未だに理解出来ないでいる。

「のどか…これは夢ですか？」

「ゆ…ゆえー…。言いにくいけど、現実だよー…」

綾瀬の混乱は特に酷い。ドラゴン、魔法らしき物、そして茶々丸のエネルギー波。最後に恐らく殺人、と来たら頭はショートしかねないだろう。しかし、隣にいる早乙女だけは違った。

「うわ、こりゃいい資料になるわ！」

さっそく破壊された扉をスケッチし始める所はさすがだ。綾瀬もその姿に呆れ、平常心を取り戻した。

「ネギ先生。にわかには信じられませんが、あなたは魔法使いですか？　今目の前で起きた事を理解するには、そう考えたほうが妥当なようですが…」

「…はい。僕は、魔法使いです。バレたらいけないんですけどね…」

観念するしかない。思いっきり見られたのだ。言い逃れなど出来ないだろう。うなだれると、綾瀬はネギに頭を下げた。

「ありがとうです。ネギ先生は私たちを庇ってくれました。魔法使いである事を明かしてまで助けてくれたのです、先生を困らせるよ

うな事はしません」

「そうだよネギ先生。やっつけてくれたのは茶々丸さんだけどさ。ネギ先生も守ってくれたしね」

二人は、意外な言葉を発した。普段の二人を見ていれば、大発見だとハシャぎまくるところなのだが。さすがに命の危険を感じた後だけに、騒ぐ気になれないのだろう。ネギに守ってもらえた事で、ネギに対する評価も格段に上がっていた。

「ただ…のどか、知ってたでしょ」

「あうっ…！？」

思わず動揺するのどか。思いっきりバレた。

「やっぱりですか。のどかが全く動じていないのは不自然すぎるので怪しいとは思ってましたが…隠し事をされてたというのは寂しいのです」

二人に詰め寄られあたふたするのどか。勿論、二人とも本気で怒ってるわけではない。恋人付き合いを始めたなら、そうした秘密を打ち明けられるのも当然だからだ。むしろ、ちゃんと打ち明けたネギと、秘密を守っていたのどかを偉いとすら思っていた。

そこへ、茶々丸がやってきた。

「皆さん、怪我はありませんか？　もし無いのでしたら、地上に戻る事をオススメします」

「茶々丸さん…。その前に、扉の向こうにいた人は大丈夫でしょう

か」

やっと、頭の動き出したネギ。黙って帰るのは無理だ。もし殺してしまったなら、引率の先生として責任をとらなければならない。ネギは相当の処罰を覚悟していた。

「残念ですが、生きています。あのドラゴンが現界しているという事は、術者が生きているという事ですから」

そう言ってから、茶々丸は瓦礫の山となった扉の方へと声をかける。

「いい加減に出てきたらどうですか。死体のフリをするなら脈を止めるくらいはして欲しいものです。お手伝いさせていただいても宜しいですか？」

「い、いえ、結構ですよ」

瓦礫の中から、一人の男が立ち上がる。ローブを着た、物腰のやわらかそうな風貌の男。年の頃は二十代後半と言った所か。その姿を見た途端、のどか、綾瀬、早乙女は声をあげた。

「「「幻の司書さん！？」」」

「え…？」

幻の司書？　ネギが不思議な顔をすると、男は優しい声で答えた。

「何度か、彼女たちが立ち入り禁止区域に迷い込んできたので出口まで案内した事があったんですよ」

「そうそう！　いっつも良いところで邪魔が入るんだよねー！　お

兄さんの事、図書委員の人たちは誰も知らないっていうし」

「だから、私たちは幻の司書と呼んでいたのです。しかし、謎は解けました。魔法使いだったのですね。そして、おそらくは実質的なこの図書館の主なのでしょう。守らなければならない書物か何かがあり、番人としてあのドラゴンを置いていた、と」

綾瀬の言葉に、やれやれ、と頭を振る。

「さすが、近衛さんの目をかけたクラスの子だ。察しの良さは驚嘆に値します。良いでしょう、皆さんにはここの秘密をお教えします。知ったうえで、これからこの世界に関わるかどうか選んでいただきます」

そして、一呼吸置いてから男は自己紹介をした。その内容に、ネギは少なからぬ衝撃を受けた。

「私の名前は、アルビレオ・イマ。かつて、ナギ・スプリングフィールドと共に大戦を戦いました。今は、図書館島でのんびり余生を過ごしている所です」

【綾瀬夕映】

現実をつまらない物だと思っていた以前の自分が、今目の前で繰り広げられている光景を見たら…やはりつまらないと斬って捨てるのでしょうか。いや、無理でしょう。のどかたちとある程度滅茶苦茶な体験をして日常を楽しめるようになっている今の私ですらここまで興奮しているのです。あの頃の私ならショックで一週間は寝込む事になりそうです。

茶々丸さんによる殺人未遂の後、私たちは幻の司書…アルビレオ・イマさんの住んでいるという建物の中に入りました。中は広く、大理石の床とエンタシスを思わせる大きな柱が印象的でした。そんな空間の中、場違いなまでにオシャレな丸テーブルと椅子が並んでいます。私たちが席につくと、ポットやカップ類がカチャカチャと音を立てて空を飛んで来ました。

「ストレートで淹れますから、砂糖はお好みでどうぞ」

目の前で勝手に動くポットに、先日のどかと一緒に見たアニメ映画を思い出します。のどかやハルナも似たような事を考えてるのか「蝋燭立てとかでないかな」などと言ってました。出たところでどうするつもりなのでしょう。

私たちは、多分とても高い紅茶を飲みながらアルビレオさんの説明を聞きます。この世界には魔法使いがいて、独自の社会を形成している。麻帆良学園は魔法使いたちによって作られた学園であり、先生や生徒にも相当数の魔法使いがいるといいます。魔法をバラしてしまうと、かつてのように魔女狩りのような事がおきたり社会に大きな混乱をきたすので強く戒められている、と言うのです。

…その割にガードが甘いです。

思い返せば、この学園は不自然な事ばかりです。今まで気づかなかったのだって、不自然ですね。きっと、魔法でどうにかしていたのでしょう。そう言うと、アルビレオさんはにこやかに肯定しました。

「はい、そう言う魔法がかけられていますね。私はここで食っちゃ

寝してるだけなので学園全体に関しては分かりませんが、少なくとも図書館内のみで言えば私がそうした魔法をかけています」

さわやかに言う事ではないです。ネギ先生は申し訳なさそうな顔をしていますが、別にネギ先生が悪い訳ではないでしょう。最近来たばかりのネギ先生が気に病む事ではないです。

それより、気になる事が。

「あなた達は、この日本で何をしているのですか？　魔法使いの社会がある、それは分かりました。しかし何もここに学園を作らなくても良いと思うのですが」

そう。ただの友好関係を築く為だとか、融和の為と考えるには規模が大き過ぎます。その上、仲良くしたいのでしたら隠していては意味が無い。日本にいる魔法使いを保護したいなら、こんな賑やかな場所ではなく北海道みたいな所の方がトラブルも起きにくいでしょう。

「ふふふ。やはり、アナタは私が睨んだ通り賢い人だ。思えば、アナタはいつも直感ではなく建物の構造上の不自然さを察知して探索していましたね。認識阻害の魔法が効きにくくて苦労しましたよ」

ジロジロ見ていやがったですね。変態です。

「確かに、この日本に麻帆良学園があるのには理由があります。そして、その理由はあなた達の足の下にありますよ」

足の…下？

皆が、床を見ます。ネギ先生まで驚いているという事は彼も知らないのでしょう。

「この秘密を守る為に、私やあのドラゴンは居ます。今から教える秘密は学園長が命を賭しても隠し通そうとした秘密であり、この事を探ろうと侵入して来た人間たちの中には命を落とした者も少なくありません。知った後は記憶を消す事をオススメしますが、あえて関わると言うなら拷問に耐えうるだけの精神力か捕まらないだけの強さを身に付けていただきます」

それは…

待って欲しい、と言おうとしたのですが、アルビレオさんはにこやかな表情のまま続けました。それは、あまりにも衝撃的で…

いっそ夢ならば良かったのに、と思ってしまう内容でした。

「この世界とは別に、もう一つの世界があると言ったら、あなた達は信じるでしょうか。そして、実はもう一つどころか無数の世界がある、と言ったらどうですか。鼻で笑って済ますでしょうか」

アルビレオ・イマの話は、そんなとんでも無い問いかけから始ま

った。のどかや早乙女は何の事やら分からないが、綾瀬は観念的な意味で理解しようとする。ネギと茶々丸は、ただ黙って聞いていた。

この世界は、数ある世界の中の一つでしかない。そして、その異世界からの侵入者に…この世界は攻撃を受けている、とアルビレオは言った。それは元々存在する魔法使いの住む魔法世界と普通の世界の二つの世界とは違う、全くの異世界。神と呼ばれる存在によって凶悪な力を与えられた者たちが、既に何人も攻めて来ていたという。

「そして、その目的がこの地下に眠る少女…私たち魔法使いの祖であり、初めての異世界からの介入者。『創造主』と呼ばれる存在です」

「創造主…？」

ネギは、かつて忍び込んだ魔法学校の図書館でその単語を見たような気がした。が、思い出せない。

「不滅の身体を持ち、私たち魔法使いの世界を作った存在ですよ。今は…残念ながら植物人間のようになってしまい、意志の疎通も出来ない状態で地下に眠っています。彼女を手に入れ、その能力を奪う事が出来たら、魔法世界を自分の好きに出来る。そう考える介入者たちが、何人も麻帆良に侵入して来ました。最も、たどり着いた者はいませんし、いつの間にか皆無力化されたようですが」

サラッととんでもない事を言うアルビレオ。綾瀬たち三人はついていけてない。ネギも困惑している。魔法世界に敵勢力がいるとは聞いていたが、まさか異世界とは。そんな中、茶々丸だけは冷たい視線をアルビレオに向けたまま口を開いた。

「あなたはその情報をどこから入手したのですか？　食っちゃ寝してる割には事情通なようですが」

学園に張られた認識阻害の結界の主程度が分からない人間が、そんな情報をどこから手に入れられるのだろう。茶々丸は最初からアルビレオを信用していない。アルビレオは、笑顔を崩さずに茶々丸に答えた。

「この地下には、世界樹の根が張り巡らされている…と言ったら、ネギ君は分かるんじゃないですか」

まさか…

「と、父さんですか？　父さんが、麻帆良の情報をあなたに？」

ゆっくりと、アルビレオは頷いた。

「学園の広範囲に張られた結界は、ナギ・スプリングフィールドが世界樹と協力して張っている結界です。彼は創造主とエヴァンジェリン、神楽坂明日菜を外敵から守る為に学園長たちと協力していました。彼自身は創造主の暴走を抑える為に動けませんが、世界樹の結界を通して学園全体を見守っています。勿論、あなたの事も」

ネギは、その言葉に喜んでいた。やっぱり、あれは間違いなく父さんだ！　そして、言ってた事も本当だった。ちゃんと見守ってくれていたのだ。

「学園全体の認識阻害の結界も、恐らくは学園長かナギが張ってるとは思うのですが、もしかしたら世界樹自身が張っているのかも知れません。実際、麻帆良学園が出来るまで誰にも見つからずに生え

ていたらしいですからね」

アルビレオは頭を振った。本当に知らないようだ。茶々丸はそう判断して、次の質問に移る。

「次に、その創造主という存在は抑えないと危険なのですか？　先ほど暴走、と言っていましたが」

「…ええ。これは本当にトップシークレットなので出来れば話したくなかったのですけどね」

若干、暗い表情をするアルビレオ。創造主の存在だけでも明かしたくは無かったのだが、こうなったら全部話すしかないだろう。

「簡単に言うと、創造主は皆が楽しく暮らせる魔法世界を作りたかった。しかし、魔法世界を維持する魔力が枯渇し始めています。彼女は既に心を失い、半ば本能的に魔法世界を維持しようとして、無意識に魔力の補充を始めました。足りない魔力は、どこから調達してると思います？」

「……この、一般世界からというワケですか」

茶々丸の言葉が、冷たく響き渡る。ネギも、やっと話の構造を理解してきていた。魔法世界は創造主が魔力で作り出した箱庭世界であり、それを守ろうとしているのだ。一般世界から魔力を奪って、魔法世界へ送っているらしい。

「ナギは、過剰に学園から魔力を奪わないように創造主を抑え、尚且つ学園の結界を維持する為の魔力を世界樹の中で生成しています。…これで、一応この麻帆良の秘密は終わりです。ご満足いただけましたか？」

答えられるわけが無かった。ネギは勿論、綾瀬たちも呆然としている。茶々丸は相変わらず冷たい目でアルビレオを見ていたが、内心では動揺していた。以前、葉加瀬に教えてもらった事。自分の身体を、介入者という者が乗っ取り超鈴音を攻撃していたという話。あれは、この話に出てきた介入者だったのか、と気づいたのだ。舐めてかかれる相手ではない。

「ありがとうございました。此方から質問する事は、今のところありません。皆、頭の中で整理出来ていませんから」

「そのようですね。あなた達三人は、今日聞いた事を忘れる事が出来ますが、どうしますか？」

綾瀬たちは顔を見合わせる。こんな話、言ったって誰も信じない…とも言い切れない。魔法関係者がどこに居るのか分からないのだ。かと言って記憶を消されても、脅威がなくなるわけでもない。知らない内にトラブルに巻き込まれ死ぬより、日頃から危険を意識していた方が生き残る確率は高いだろう。

綾瀬と早乙女は、躊躇しながらも記憶を消さないと言った。のどかは勿論、既に魔法関係者となる事を決めているので二人と同じ答えだ。

「では、この秘密を守れるように、ある程度あなた達には強くなって貰いましょうか。宮崎のどかさん、あなたはエヴァンジェリンに教えを乞うようですが、合わないと思ったら何時でも私のところへ来て下さい」

そう言って、アルビレオは三人に銀色のカードを配る。そこには、

図書館のカードと同じデザインが施されており、右上部分に『レベル５』と書かれていた。

「最高レベルの権限を持つ図書館カードです。基本的に学園長以外に持っているのはあなた達三人だけです。訓練以外でも、もし身の危険を感じたり誰かに負われるような事があったらこのカードを使ってエレベーターに乗り込んで下さい。すぐにこのフロアに転移することが出来ます」

うおおお、とハシャぐ早乙女。心なしか綾瀬やのどかも嬉しそうだ。それは、日頃図書委員の人間に邪険にされてきた鬱憤があったからかもしれない。このカードがあれば、もう彼らにうるさく言われる事も無いだろう、と。

それを見ていたネギは、別の意味で心配だった。

いきなり特別な権限をもったら、学校内の魔法関係者に目をつけられ嫌な目にあわされたりしないか、と。かつて茶々丸を襲ってきた魔法先生のような連中が、まだ残っていないとも限らない。

（茶々丸さん。僕は僕で木乃香さん達に鍛えて貰わなければなりません。綾瀬さんたちについて行けない時は、代わりについてあげられませんか？）

（はい、そのつもりでした。この男は、信用出来ませんから）

茶々丸の抱いている警戒心は、ネギも同様に抱いていた。父の友人なのかもしれないが、だからと言って信じるかは別の話だ。何か、引っかかる。まだ、何か隠してはいないか。ネギはそんな事を考えながら、ハシャぐ三人を心配そうに見つめるのだった。

第五十六話　K

魔法世界のとある街のはずれに、パッと見ボロボロのマンションのような建物がある。そこは一応孤児院らしく、たくさんの子供が暮らしていた。

その、一階にある事務室のような部屋に、三人の大人が集まって何やら話し合いをしていた。

一人の男は、デスクでコーヒーを飲みながらジグソーパズルをしている。肩に乗った妖精のような小さな女性のアドバイスを受けながら、ちまちまとピースをはめ込んでいた。

もう一人の男は、ツンツンと尖った頭をボリボリ掻きながら頭を下げている。何やら謝っているらしく、済まなさそうな顔をしていた。

そして、最後に。青いショートヘアの少女は一番大きなデスクに腰掛けながら、ツンツン頭を叱り飛ばしている。結構本気で怒っているらしく、その可愛らしい顔は今や般若のようだ。

「だ・か・ら！　話が急過ぎるんだよ！　せめて一週間前に言えよ！」

「仕方ないだろ！？　文句ならフェイトに言えよ、アイツがいきなり『明日に決まった』って言うんだからよ！」

かれこれこのやり取りが一時間近く続いている。青い髪の少女は我慢出来ずに爆発した。

「分かった、好きにしろ！　周りに迷惑かけても平気なやつに、これ以上居られても迷惑だ！　好き勝手金儲けしてればいい！」

「ああ、そうさせて貰うぜ。一々こっちのやる事にギャーギャー口出されるのは迷惑だ」

椅子を蹴り飛ばして、ツンツン頭は事務室を出て行く。その際、パズルをしている男に振り返ると声をかけた。

「悪いな、リッパー。ユグドラシルの調査、もう参加出来ねえわ」

「構わねーよ。KにはKのやりたい事があるんだろうしな」

「…ああ。すまねえ」

頭を下げると、Kと呼ばれた男は事務室から出て行った。残された少女は、力無くうなだれていた。そこに妖精が、声をかける。

「もっと良い言い方があったんじゃない？　単なる喧嘩別れじゃない、あれじゃ」

「うるさいな。俺にはこういう言い方しか出来ないんだ」

拗ねたように横を向く。妖精はため息をついて男の方を向いた。何か言ってやれ、という目で見ている。リッパーは困ったような顔をした。

「止める権利無いしなぁ。アイツの入れた金って、今回の仕事の前金だろ？　子供たちの食費に当てちまったし、今更返せないしなあ」

そういう問題じゃないでしょ！　妖精が怒るも、リッパーは意見

を変えない。
「それに、アイツも分かってるよ、レイが言いたかった事。わざと喧嘩して、気兼ねなく出て行けるようにした事もな」
横を向いていたレイの顔が、赤くなる。耐えられなくなったのか、レイは席を立って部屋から出て行った。
ふぅ…と、またため息をつく妖精。
「とりあえず、しばらくは山下さんの穴を埋める為に働かなくちゃいけないでしょ。全然調査進まないじゃない！　いい加減、小竜姫様も怒るわよ!?」
「ま、まぁまぁ落ち着けって。場所は突き止めたから、後は鍵を見つけるだけなんだし。それに向こうにはアイツも居るんだし、直ぐにどうにかなるワケでもないだろ」
しかし、妖精は不安な顔のままつぶやいた。
「今や一番頼りにならないんだけどなぁ、アシュ様って…」
山下・K・ストライフは事務室を出ると、玄関先に止めてあったバイクにまたがる。ふと見上げると、子供たちが部屋の窓からこち

らを見下ろしていた。

「クラウド、行っちゃうのかよ」

「またお仕事ー？」

「今度はいつ帰ってくるんだ」

「お土産、買ってきてー！」

子供たちの言葉に、山下は苦笑いした。こいつら、俺を何だと思ってやがる。

「やかましいガキども！　今度は長えから覚悟しとけよ！　まあクマのぬいぐるみくらいは買って来てやる！」

キャー、という歓声を上げる少女。適わねえなあ、と山下も苦笑いする。愛車フェンリルのキーを回すと、爆音を立てた。

「「「行ってらっしゃーい！」」」

子供たちの声に背を向けたまま片手を上げて応えると、山下は猛スピードで孤児院を後にした。子供たちは、その姿が見えなくなるまで窓から身を乗り出して見送り続けるのだった。

山下・K・ストライフ。

本名は山下慶一である。転生者であるから正式な名前は別にあるが、それは触れなくて良いだろう。この世界では、山下慶一。ただそれだけだ。

彼は途中から憑依するのではなく、本当に初めから普通にこの世界に生まれ落ちた。転生の際に神族に望んだ事はただ一つ、『格好良く生きたい』という事だけ。神族はそれをルックスの良さとモテる力を望んでいると解釈し、彼に『魅了の魔眼』と生まれついてのルックスの良さを与えた。原作で速攻で負けながらもルックスの良さで目を引いた山下慶一の身体を与えたのも、その一環である。

しかし、彼の求める格好良さとは戦いの中にあった。女関係に何かを求める性格ではなかったのだ。むしろ、邪魔だったと言える。幼い頃から魔力を扱えた山下は、その魔眼を自ら封じ、ただ魔法が使えるだけの子供として生きる事を選んだ。

しかし、やはりそれでは物足りなかったらしい。

山下は魔法を隠して生きなければならないこの世界を窮屈に感じていた。そして、ここではないどこかにあるという魔法世界に憧れはじめていた。自分の居場所はここではない。もっと、伸び伸びと生きてみたい、と。

小学校に通い始めた頃からは、その思いが特に強くなった。そして、それは他の子供たちも敏感に感じとっていたらしい。自分たちに興味を抱かず、無視するような態度の山下を、皆はこぞって苛め始めた。

山下の日常が喧嘩で彩られ始めるのは、ちょうどこの頃である。

山下は強かった。日頃から鍛えていたというのもあるが、持って生まれた才能もあったのだろう。子供はおろか時には教師まで殴り飛ばした。噂を聞きつけた高校の不良たちも残らず叩き潰した時には、山下慶一の名前は恐怖と共に語られるようになっていた。

これって、カッコいいか？

山下が疑問に思い始めた頃、彼にとって衝撃的な事件が起きる。それは、たまたま不良たちが女の子を乱暴しようとしている現場を目撃した時の事だった。

その子は自分と同じ学年の女の子だった。年に合わない大人びた外見のその女の子は、学校でも有名だった。山下も、実は少し可愛いなと思っていた子だった。だから、助けに入る事になんの躊躇いもなかった。いい所を見せてやろう、とも思ってもいた。気づいたら山下は、不良たちを一人残らず気絶させていた。

大丈夫か、と手を差し伸べる山下。これでお近づきになれたかな、と思っていたら、その手は女の子に思い切り叩かれてしまった。

「あそこまで…あそこまでやること、ないじゃないですか！」

え、何で？

何で俺が怒られるんだよ？

山下には、訳が分からなかった。助けたのに、何で悪者にされるんだよ。これっておかしくないか。

心が急速に冷めて行くのを感じた。

女の子と別れたその日の夜。山下は家出をした。自分で編み出した気配を消す魔法を使って、麻帆良を抜け出した。きっと、彼には魔法の才能があったのだろう。気配を消した山下は本当に誰にも見つかる事無く、麻帆良学園から消え去った。そして、苦難の末に彼は憧れだった魔法世界にたどり着く。

魔法世界には、彼の求める戦いがあった。非力だった彼は最初こそモンスターに殺されかけたり奴隷に落とされたりしたものの、直ぐに恐ろしいまでに強くなり自由の身となった。闘技場での最後の試合、対ボブカット・レイ戦での死闘は歴代トップ3に入ると言われる名試合だったという。

自由の身となった彼に仕事を用意したのは、そのボブカット・レイだった。孤児院を営んでいたレイは、彼にデリバリーサービスという名の『なんでも屋』をさせた。丁度、リッパーという青年とその仕事を始めたばかりらしく、山下を含めて三人体制で仕事をする事になったのだ。そして、今に至る。

毎日が、楽しかった。

子供たちの笑顔に、充実感も感じていた。

しかし、今でもあの女の子の事を思い出すと胸がチクリと痛む。結局、俺にはあの女を笑わす事なんて出来ないんだろうな…。思えば、あれは俺にとっての初恋で…初めての失恋だったのかもしれない。

小高い丘にフェンリルを止めると、山下は巨大な剣を地面に突き刺す。太陽を反射してまばゆい光を放った瞬間、背後で誰かが声をかけてきた。

「早かったね、山下慶一。もっと揉めるかと思ったよ」

「んな事ねえよ。すんなり辞めて来たさ。…あと、俺を山下慶一と呼ぶな」

それは、今回の仕事のパートナーであるフェイト・アーウェルンクスだった。山下は振り返る事なく返事をした。そして、真上に視線を移す。

空を見上げると、先ほどまで顔を覗かせていた太陽は分厚い雲に隠れていた。

「クラウド。そう呼べって言っていただろ」

「失礼、忘れていたよ。迷いが晴れてるなら、必要ない名前かと思ってたんだけどね」

「馬鹿か、そんな意味じゃねーよ」

苦笑いする。

俺には、その顔を曇らせる事しか出来なかった人がいる…そんな理由だと知ったら、無愛想なこの男も笑うだろうか。

そんな事を考えながら、山下はフェイトへと振り返った。

「じゃあ、行くか。仕事の時間だ」

第五十七話　二人からの警告

図書館での出来事の後、のどか達と別れたネギは時間を惜しむようにエヴァンジェリンの別荘へと向かった。明日菜たちはこの日曜日を利用して別荘で修行を始めている。ネギも負けてはいられないとばかりに気合いを入れていた。

その背中を見送る茶々丸。

マスターであるエヴァンジェリンにはまだ顔を見せていない為、早く戻りたかったが他にやる事があった。それは、芦優太郎や超鈴音への報告である。

今回、遭遇したアルビレオ・イマ。その存在がどうも引っかかる。茶々丸は直感的に、あの魔法使いを敵と認定していた。『直感』という非科学的な判断材料を行動理由にするのは茶々丸らしくはないが、これも彼女の成長した部分なのかもしれない。

夕方の五時、ロボット工学研究所には超鈴音と葉加瀬が来ていた。芦はまだらしい。

「茶々丸、どうしたネ？　報告はメールでも良かったのニ」

「すみません、超さん。どうしても見ていただきたい映像がありましたので」

すぐさまモニターにコードを繋いで映像を映し出す。そこには、図書館の例の広間があらわれた。ドラゴンとの遭遇、そしてアルビレオ・イマとの会話が鮮明な映像で流れて行く。

「コイツは…クウネルサンダース！」

「なんですか、そのふざけた名前は」

超は以前、麻帆良武道会を主催した際に参加者としてあらわれたアルビレオを知っている。とは言っても、本名は知らなかったしどこに潜んでたのかも分からなかった。集音マイクや監視カメラからの情報で、ナギの関係者であるという推測は出来ていたが…

「アルビレオ・イマ。ナギ・スプリングフィールドの仲間だネ。やはり地下には秘密があっタ。茶々丸、いい仕事したヨ」

「ありがとうございます。ただ、この映像を解析した結果、奇妙な事が分かりました」

茶々丸が映像を切り替える。画面が青や赤の奇妙な色調の画面に変わる。これは…サーモグラフィだ。

「ここで振る舞われた紅茶を口にした時の温度変化なのですが、アルビレオ・イマだけは温度が変わりません」

「ふむ…確かにおかしいネ」

画面にはネギたちも映っているが、そちらは口元が黄色や赤に変わっていた。紅茶はそれなりに熱かったのだ。

「そして、こちらは図書館を出た後のネギ先生の言葉です」

茶々丸が映像を切り替える。図書館島から続く橋を歩くネギが、茶々丸に振り返って話しているシーンだった。

『あの人、不思議な感じがしました。何だか、そこにいるのに現実感が無いんです。まるで、テレビの映像みたいでした』

茶々丸が再生したネギの言葉には、彼にしては珍しく猜疑心の塊のような響きがあった。超と葉加瀬は、その普段との違いに驚いていた。すると、そこへ呑気な声をかけてくる人物が。

「ん？　何だ茶々丸じゃないか。やけに早かったな」

芦優太郎である。今日は早めに仕事が終わったらしい。お腹を手で押さえている所を見ると、空腹なようだ。真剣な顔でモニターを見つめている超たちを見て少し真面目な顔をするが、どうにも今は気が抜けていた。

「アシュタロス。茶々丸の映像かラ、図書館島の地下には転生者がいると判明したヨ」

「ああ、前に勝敏とかいう男になった神族から引き抜いた知識通りだな。で、それ以外は？」

茶々丸が映像を戻す。画面一杯にアルビレオ・イマがあらわれた。

「この男が図書館を管理しているようですが、どうにも違和感を感じます。ネギ先生も、警戒していました」

「ほう…」

ようやく芦の目に鋭さが宿る。しかし、その緊張感は長くは続かなかった。

「コイツは擬体か何かだろう。本体は別に居るか、もしくは死んでるかだ」

「「「え…！？」」」

死んでいる？　擬体？　超たちは混乱した。

「ネギ先生は中々良い勘をしている。コイツには警戒しておいた方がいい。話し合いを本体を出さずに行う不誠実な輩を、信用する理由は無いだろう」

面白く無さそうに言った。
それよりも今は空腹をどうにかしたかった。

「今日の用はこれくらいかな？　とりあえず私はホテルに戻るよ。こう腹が減っては頭が働かない」

確かに頭が働いていなかったのだろう。超包子の社長を目の前にそんな事を言うのだから。

「浮気ネ？　アシュタロス、他の店に浮気するつもりネ？」

「ん？…いやいや、そんな事は無い。ただ、今日は私のグループのホテルの食事を抜き打ちテストするのだよ。これも仕事でね。悪いとは思うのだが…」

「グループのホテル…？」

本当に頭が回っていないようだ。芦は自らホテルを所有する事を

バラしてしまった。厄介な相手に。

ガシッ！

慌てて去ろうとする芦の腕を、超が掴む。凄まじい握力で。

「それは是非とも私もご一緒したいネ！　味によっては私の店との提携を結んでもらいたいヨ！」

「ちょうど頭脳労働が続いたものですからお腹がすきました。ご一緒させて下さい」

「あ、あの…私もこの身体になってから食事に興味が出てきました。出来れば後学の為にも…」

墓穴を掘った。

何という事だ、学園の人間から離れる為に移ったというのに、よりにもよってコイツらにバレるとは！　確実に…確実におごらされ、カモにされる！　ただでさえ石田留美にＡＴＭ扱いされているというのに…

「ま、まぁ…好きにしたまえ…」

芦は、色々と諦めていた。

【アリア・スプリングフィールド】

いくら修行の為とは言え、こうも別荘に入り浸ってると考えてしまいます。だってこれ、一部の生徒を贔屓してる事にならないかしら。生徒の課外活動を監督してるって言えばそれまでかもしれないけど…

「そんな事言ったら、唇や肌を重ね合わせてるだろ。お前も立派な淫行教師だ」

奪われたんですけど！
無理矢理だったんですけど！

まぁ、良いでしょう。強く拒まなかった私も悪いんです。実際、あれで身体も良くなりましたし。

現在、私達は別荘にやってきた明日菜さんたちの修行のお世話をしてます。石田さんが検査中の茶々丸さんの代わりに料理をして、私はもっぱらエヴァさんのサポート。怪我した人には文珠で治療をしたり、結構忙しいです。これも能力のコントロールの修行になりますから私にとっても有意義ではあります。

けど、いいのかしら。
ここに入り浸るって、それだけ年を取るのが加速するって事よね？　私はいいけど明日菜さんたちは普通に老けるんじゃないかなぁ

そんな事を考えていると、別荘のゲートから二人の姿があらわれました。木乃香さんと刹那さんです。あれ、今日は遊園地で遊んで

くるんじゃなかったのかしら。不思議に思って聞いてみると…

「え？　行ったえ。けど、せっちゃんジェットコースターで何度も気ぃやってしもて疲れたから帰って来たんよ」

「こ、このちゃんがあんな事するからっ！」

何したんでしょうね。まあ、聞かない方が良さそうですから聞きませんけど。呆れていると、木乃香さんがエヴァさんに話しかけました。

「なーエヴァちゃんアリア先生借りてええ？」

「む？　まぁ今は怪我をするような事はしてないから構わないが…あまり激しいプレイはするなよ？」

おい。

「大丈夫やえ。ちょっと色々みせてもらうだけやから。あんな所やこんな所…」

何ですかそれ。思いっきり逃げたくなって来たんですけど。

ガシッ

「観念して下さい。お嬢様の言うとおりにしていただかないと、とばっちりは私に来ますので」

刹那さん…理由としてはとんでもなく格好悪いですが分かりました。大人しくしましょう。しかし、一体私に何の用なんでしょうね？

エヴァンジェリンの別荘には大きな広間があり、現在神楽坂明日菜と雪広あやかがエヴァンジェリンの魔法攻撃をはじく練習をしている。クー・フェイと長瀬楓はチャチャゼロと手合わせ。怪我をさせないように、刃の無いナイフにチョークの粉を塗りつけた物で戦っていた。斬りつけられたら、服に白いラインがつく仕組みだ。エヴァンジェリンが「怪我はしない」と言ったのはこうした工夫をしていたからだったりする。

そんな皆とは別に、少し離れた場所に行く木乃香たち。修行をする皆から２００メートルほど離れると、木乃香は足を止めた。

「こんだけ離れてたら大丈夫やろ。アリア先生にちょっと聞きたい事あってんねんけどな」

「…え？　何でしょう、他の人には聞かせられない事でしょうか」

シリアスな顔の木乃香に少し驚くアリア。何か気に障る事を言ってしまっただろうか、と心配になる。木乃香は刹那の方を向いて、小さく頷いた。

「アリア先生。私と木乃香お嬢様は学園長の許可を得て、これからは魔法使いたちと関わらずに生きて行く事になりました。警備の仕

事はすぐには抜けませんが、超さんのロボット警備員が増え次第辞める事になります」

「ウチら、もう魔法使いの人らに振り回されんのは嫌なんよ。だから、普通に生きて行く為に自分の身を自分で守れるようになった。明日菜たちも同じ気持ちでエヴァちゃんの所に来とる。だから、手伝うのは問題無いんやけどな…」

そこまで言われれば、何が言いたいのか分かってくる。アリアは少しため息をついた。嫌われたものだ、と。

「今回ネギの修行を見るのはその考えから逆行するという事ね。大丈夫、アナタ達を面倒事に巻き込むような真似はしないわ。魔法使いの起こしたトラブルは、魔法使いできちんと処理します」

「いえ…そうではないのです」

少し複雑な顔をする刹那。

「以前、ネギ先生の修行を誰が見るかで学園の魔法使いたちが揉めた事がありました。エヴァンジェリンさんに反感を持つ人間が反乱を起こしたりもしましたが、その多くが学園の外に追いやられました。しかし、今も少数ですがエヴァンジェリンさんに敵意を持つ人間がいて、修行の手伝いをする人たちにもその敵意を向けています」

「ウチらも、もうターゲットにされとる。これは、仕方ない事やから諦めとるよ。問題は、ネギ君や」

木乃香は顔を少し険しくする。

「あの子なら大丈夫やと思うんやけど、アホな魔法使いみたく正義とかそういう理屈を振り回して、他人を巻き込む人間がウチらは嫌

いや。手伝って当然とか、麻帆良を守る為なら戦って当然とか、そう言う事言い始めたら叩き斬るからそのつもりで居て欲しいんよ」

「なっ…」

アリアは絶句する。

気持ちは分かるが、何故こうも「斬る」と簡単に言えるのか。

「木乃香さん、言い過ぎです。相手は子供なのよ？　叩き斬るだなんて…」

「お嬢様は子供に石にされ砕かれました。　もう私達には、大人子供と分けて考えるなど不可能です」

「第一、ウチが初めて殺されたんは１０歳の頃やから今のネギ君と変わらんえ。ホンマに強うなりたいんやったらここらで死ぬ目にあってみるのもええかもな」

アリアの背筋が凍りついた。この二人は、余りに歪んでいる。原作は朧気には覚えているが、ここまで殺伐とした雰囲気ではなかったハズだ。

「ウチらがアリア先生に言いたいのは、ただ一つだけや。ネギ君が壊れる覚悟はしといて欲しい。怪我はウチのヒーリングでいくらでも治すけど、心は無理やから」

木乃香の言葉に、アリアもカッとなる。

「なら、あなたも覚悟して下さい。ネギを壊したら、問答無用で殺してあげる」

明確な殺気を木乃香に向けると、木乃香は微笑んだ。

「教師の言葉とは思えんけど、ええよ。殺せるもんなら殺してみるとええわ」

「それくらいの緊張感を持って修行に望んでくれると嬉しいですね。ザッと見ただけですが、ここは指導する方もされる方も腑抜けている」

木乃香と刹那は楽しそうに笑った。アリアには、二人が全く理解出来ない。何故、二人はこんなにドライで冷たいのか。何故、あんなに真剣にやっている皆を腑抜けなどと言えるのか。

そして、そんなアリアの困惑をよそに、心配の原因が別荘にあらわれてしまった。

「すみませーん、遅くなりましたー！」

ゲートが開き、ネギがやってきた。脳天気なニコニコとした笑顔で。木乃香と刹那は、顔を見合わせて目で合図する。端から見ていたアリアは、不安な表情でそれを見つめていた。

（頑張って、ネギ！　何かあったら、私が守るから…）

第五十八話　神鳴流剣士への道

のどか達と図書館島に行ったその日の夕方、ネギは職員寮には戻らずにエヴァンジェリンの別荘へと向かった。今日から、暇さえあれば別荘へ行って修行の毎日を送るのだ。アリアも修行の手伝いで別荘に入り浸るらしいので、食事も自然と別荘でとる事になる。

「明日菜さんたちも居るんだよね。ちゃんと謝っておかないと…」

先日怒られているので、ここら辺はキチンとしておこうと思っていた。あの時は気が動転していてまともに謝れなかったのだ。

エヴァンジェリン邸へとつくと、ネギは前もって渡されていたＩＤカードを木製っぽい模様の扉の木目に差し込む。ピッという音が鳴り、茶々丸っぽい音声が流れた。

『ＩＤを確認しました。いらっしゃいませ、ネギ先生。合い言葉をどうぞ』

「あ、合い言葉!?」

どうしよう、そんなの聞いていないのに！

『ヒントをあげましょう。上のネジは後頭部。では下のネジはどこでしょうか』

「……下のネジ…?」

どういう事だろう？　ネジ穴は後ろ頭にしかなかったような。

『第２のヒントです。神楽坂明日菜さんの毛の生えてない部分で、

とてもデリケートな場所はどこでしょう？』

！！！

これは酷い。セクハラも良い所だ。ネギは顔を真っ赤にする。確か、茶々丸は保健体育の時なんと言っていたか…

「あの…女の子の扉…ですよね」

『…まぁいいでしょう。正解です。さあネギ先生、目の前の女の子の扉をこじ開けて下さい！』

「ぅわあん、いちいち妖しい言い方しないで下さい！」

まぁ確かに女の子の『声のする』扉ではある。ドアノブを握ると「ふぅんっ…」という音がし、少し重い扉を開けると「ぁあああっ！？」と嬌声をあげる。バタンと閉めると、「ふぁあぁぁんっ！！」と大きな音を発てたのでネギは思わず耳を塞いだ。

顔を真っ赤にするネギ。とにかく今は別荘へ向かわないと。ネギは気を取り直して別荘の置いてある部屋へと向かう。熱くなってる顔をペタペタ叩いてから、部屋へと入った。

エヴァンジェリンの別荘は大きなガラス玉の中にある。見た目ボトルシップのような感じの別荘を見ると、小さくアリアやエヴァンジェリンの姿が見えた。明日菜やあやか達の姿も見える。模擬戦の真っ最中らしく、皆は必死に戦っていた。自分も負けていられないや、とネギは気合いを入れて別荘のゲートを発動させた。

ネギが別荘につくと、外から見ていた以上に皆はボロボロだった。
エヴァンジェリンのそばには倒れて荒く息をする明日菜とあやか。
チャチャゼロの周りには気を失ったクーと長瀬の姿がある。こんな状態では明日菜に謝ろうとしても無理だろう。きっと、聞く元気がない。

「あ、あの…エヴァンジェリンさん。皆さん大丈夫なんでしょうか。何だか凄い事になってますけど…」

「ん？　ああ、こいつらなら大丈夫だ。肉体的にはバテてるだけで傷とかは無いからな。さすがに肌に傷をつけるのは可哀想だからな」

何気に優しいエヴァンジェリン。ネギもホッとする。

「いや、お前も安心している場合ではないだろう。向こうを見ろ、お前の先生が待ってるぞ」

「え…？」

見ると、別荘の少し離れた場所に木乃香と刹那、アリアが居た。
なにやら話し合いをしていたようだ。こちらに気づいたのか、皆ネギの方を見ていた。

「わ、待たせちゃってましたか！　僕、行って来ます！」

「ああ、頑張ってこい」

慌ててパタパタと走って行くネギを見送ると、エヴァンジェリン

は興味深そうに木乃香たちを眺めた。さあ、あの二人はネギをどう育てようとするのか。あのムチャクチャで気持ちの悪い動きをするネギを、どうやって人間らしくするのか。かなり気になっていた。

「すみませーん、遅くなりましたー！」

ネギが謝りながら駆け寄ると、木乃香と刹那は笑顔でネギを迎えた。

「ええよ、そんなん。別に約束してたワケやないし」

「互いの都合がついた時に、という話でしたし。ただでさえネギ先生は教師ですからね」

良かった、二人とも怒ってない。そう思っていると、姉の心配そうな顔が目に入った。何故、そんな顔をするのだろう。不思議に思ったが、今は聞かないでおいた。まずは二人の話に集中しなければ。

刹那の説明は、至ってシンプルだった。まず、基本的な気の使い方と、剣の基礎を叩き込む。そしてある程度覚えたら戦い方を教える、という。

「ネギ先生は動きに無駄が多すぎる上に非効率的なのです。そこを改善するには、やはり基礎訓練は欠かせません」

無駄、という言葉が重い。自分の動きは、あのエヴァンジェリンさんでさえ捕らえられなかったというのに…

「あー、あんま理解でけへんみたいやな。せっちゃん、鬼ごっこしたったら？」

「そうですね…」

刹那がため息をついて頷いた。

「ネギ先生。今から私が軽く攻撃しますから、逃げて見てください。好きなように」

「え…はい、分かりました」

ネギだって男の子である。理由も分からず無駄とか言われるのは嫌だ。ネギは身体に風の魔力を宿して、瞬動の姿勢に入った。そして、全力で走り出す！

カサカサカサカサカサカサ！

「やはり…見て気持ちいい物ではないですね」

「うん。あの手足バタつかせる所とかソックリやもん…」

二人はウンザリした顔をする。やはり、まずはこれを止めさせよう。そう思いながら、刹那はネギを目で追う。獲物を狙うような目つきに変わると、その瞳が赤く変色した。そして…

バサッ！

背中に、真っ白な翼が現れる。遠くで明日菜やあやかが驚くのを後目に、刹那はその翼をはためかせ空に舞った。

空中を旋回し、ネギを狙う刹那。ネギは刹那の攻撃を警戒し、瞬動を強引にねじ曲げて細かくフェイントを入れる。が、そのムチャクチャな動きにあらわれるスキを、刹那は見逃さなかった。

ヒュッ…

刹那の身体が、まるで弾丸のような速さでネギに迫る！　無理矢理方向転換をはかろうとしたネギの、少しよろけた足に蹴りを入れると、空中に浮いたネギの襟首を掴むと地面に叩き伏せた。

「ぐぇっ！」

苦しそうな声をあげるネギ。飛び出そうとしたアリアは、木乃香に羽交い締めにされた。

「ネギ先生…何故、簡単にやられたか分かりましたか？」

「ゲホッ、ゲホッ…。はい、刹那さんの方が速くて、僕の動きも全然小回りきかなくて…読みやすいんですね」

「そうです。元々、直線的な動きの瞬動をねじ曲げる時点で無理があります。不自然な動きはスキを生む。下手に器用に組み合わせてしまえるから、こんな事になるんです」

そう言いつつも、刹那は少し驚いていた。あの短時間で、よく自分で弱点に気づけたものだ、と。この少年は、やはり馬鹿ではないようだ。

「ネギ先生。とりあえず、以後その動きは禁止します。普通に細かなステップワークと瞬動の組み合わせだけで、今以上の動きは可能

なのですから」

「はい、分かりました…」

自分で編み出した中ではかなり自信のあった技だったのだが、こうまで簡単に破られては従うしかない。残念だったが、仕方なかった。

「それでは、これから気と剣の基礎を徹底的に叩き込みます。弱音を吐いたらその時点で修行は終わりですから、そのつもりで」

「ハイ！」

こうして、ネギの修行が本格的に始まった。原作ではあくまで魔法だけの修行だったが、この世界のネギは剣の修行も行う事になる。

ネギを不安そうに見つめるアリアは、朧気な記憶を手繰り寄せて必死に原作を思い出していた。この変化が、一体ネギに何をもたらすのだろう。この後に、確か大きな事件が起きたハズなんだけど…。アリアは何とか思い出そうとしたが、まるでその記憶に霞がかかったように思い出せないでいた。

「まあ、心配なのは分かるけどネギ君も男の子やし。あんまり過保護にすんのもどうかと思うえ」

そんな木乃香の言葉も聞こえないくらい、アリアは不安にかられていた。

ネギの修行は、まず魔力を一切使わず気だけで身体強化する事から始まった。その為に、わざわざ鉄芯の入った木刀を用意したのだ。重量は１０キロ、それを気で強化した身体で振り回す。素振り５００回という子供にはただの拷問か虐待というレベルの修行をネギに課し、ネギも身体を壊しながら必死で食らいついて行った。

勿論、明日菜やあやか達は黙ってはいない。幾ら何でもやり過ぎだ、と刹那に噛みついたが、それを制したのはネギだった。

「すみませんが、これは僕が望んだ事です。刹那さんを悪く言わないでください」

ボロボロになってる本人から言われたのでは、庇いようがない。釈然としないまま、皆は引き下がるしかなかった。木乃香の治療を受けながら、ネギは刹那に謝る。僕がこの程度でへばってたから、皆が心配して刹那さんを非難してしまう。もっとちゃんとしないとダメですよね、と。

（せっちゃん、結構根性あるなぁネギ君…）

（ええ。気を扱うコツも覚えたようですし、異様に上達も早い。もしかしたら、神鳴流の剣も覚えられるかもしれませんね）

刹那は、かつて同じような驚きを経験している。少し教えただけで恐ろしく上達した人物。近衛木乃香に初めて剣を教えた時の事を思い出していた。ネギに、あの日の木乃香と同じものを感じていた

のだ。

修行は素振りに始まり足捌きや体術、基本動作の反復練習をしつこいくらいにやった。勿論、絶えず気で身体を強化しながら。ネギの吸収力は恐ろしく、刹那が設定したハードルを次々とクリアし、誰の目から見てもその動きはかつてのネギのものと全く違ってきていた。

これは、別荘における三日間。外時間にして三時間足らずの時間での成長なのだ。ネギの規格外の上達ぶりが分かるだろう。ネギは今や、刹那自身が手合わせしても良いと思えるくらいの実力を持つまでになっていた。

「ネギ先生、それでは次のステップに進みます。これから私が受け手に回りますから、ネギ先生は自由に攻撃して私の武器を叩き折って下さい」

四日目に突入した日の朝。刹那はそう言って髪を止めていたリボンをほどく。気を流して強化すると、一本の細い棒のようにしてみせた。

「あの…この木刀で、そのリボンをですか？」

「はい。神鳴流は得物を選びません。実際の戦いに、強化された鉛筆や割り箸が使われた事もあります。敵の中には強化した氷を使って暗殺するのを得意としていた者も居ましたし、こんなリボンでも気で強化すれば侮れないんですよ」

にわかには信じられない。が、実際に目の前でビュンビュンと空を切る音を立てられると信じざるを得なかった。ネギは気を引き締

めて刹那と向かいあう。自分には、相手を侮る余裕などないのだ。

ネギは刹那に言われるがままに、木刀に気を通して刹那に斬りかかった。しかし、刹那はそれをリボンで軽く弾き返す。ネギは何度も斬りつけるが、その都度刹那は少し木刀をはじいて方向をそらして避けてみせた。

「相手の動きをしっかり見て、インパクトの瞬間に力を向ける方向を意識して下さい」

「は、はい！」

ネギは必死に攻撃するが、中々リボンに衝撃を与えられない。何故だろう、とネギは考えた。力の方向を簡単に逸らされてしまう。刹那のリボンは、ビクともしないというのに…

しかし、直ぐにネギは刹那と自分の違いに気づいた。身体は気で強化した。木刀も気で強化した。しかし、その二つは一体化していない。刹那は武器も身体も一体化して、全てに等しく気を循環させている。対する自分は、身体と木刀を別々に強化して動いているだけだ。

ネギは一旦刹那から離れると、全身の気を練り直した。今度は、木刀と身体を一緒に強化する。木刀が身体の一部となったようにイメージしてから、極限まで強化してみせた。そして…

「うわあぁぁぁぁぁっ！」

渾身の力を振り絞って、刹那のリボンに向かって木刀を振り下ろす。リボンを真横に構えた刹那は、ニヤリと笑ってそれを受け止め

た。

ガキィィンッ！

リボンとは思えない金属的な音を立てると、空中で木刀を受けきったリボンはへし折れてしまった。気の強化が解けて、元の柔らかいリボンに戻る。これは、うまくいったのだろうか。ネギが恐る恐る刹那の顔色を伺うと…

「おめでとうございます、ネギ先生。今のは、神鳴流の奥義の一つ『斬岩剣』に至る初歩の技です。これを極限まで高め、気そのもので岩を断つ程になれば『斬岩剣』の完成です」

「え…？　神鳴流の、奥義…？」

キョトンとするネギ。京都でリョウメンスクナに神鳴流剣士達が放っていた技は、今でも覚えている。あの技を、自分も放てるようになる…？　試しに刹那に聞いてみると、刹那はニッコリ微笑んだ。

「はい、ネギ先生。アナタには神鳴流剣士としての才能があります。しっかり努力し続ければ、私以上の使い手になる可能性もありますよ」

その言葉を聞いた時…。

ネギの瞳から、ポロポロと大粒の涙がこぼれ落ちた。ずっと厳しい視線を向けていた刹那が微笑んでるのを見て、何故だか泣けてきたのだ。思えば、こんなに厳しく指導されるのは生まれて初めてだった。

今まで誰かに何かを教わろうとしても、ろくに相手をしてもらえなかったネギ。兄たちには無視され、スタン爺には自分で考えろと言われた。エヴァンジェリンはちゃんと教えてくれたが、ネギが子供だからか、かなり気を遣って優しく教えてくれた。刹那だけなのだ、子供だとか大人だとか関係なく厳しい指導をしてくれたのは。そんな刹那に誉めてもらえて、嬉しくないハズは無いだろう。

「僕、頑張れば強くなれますか？　刹那さんみたいに、強く…」

「はい。私も最初はネギ先生に剣の才能は無いと思ったんですが、それは間違いでしたね。ネギ先生には間違い無く剣の才能があります。本格的に剣の道を進むべきだと思いますね、私は」

刹那の言葉に嘘は無い。刀身に気を乗せて放つだけでも半年はかかるのに、ネギは四日でものにした。末恐ろしい上達ぶりなのだ。刹那がそう言うと、ネギは本当に嬉しそうに笑った。

それを、遠巻きに複雑な顔で眺めるアリアたち。

「あんなに厳しくされてるのに、何でネギは嬉しそうなのかしら…。私には、理解できない」

「そら、真綿で優しく包んでた人間には理解でけへんよ。ネギ君は、それとは正反対の世界で頑張っとる。理解なんてする必要ない、ただ応援してあげるだけでええと思うえ」

木乃香の言葉に反発したいが、ネギの笑顔を見ると、それが事実であると思い知らされる。自分のやり方は間違っていたのかな…。

アリアは悲しそうにつぶやくと、ネギの姿を眺め続ける。

その横で、木乃香は身体の関節をほぐし始めていた。

そろそろ、自分が直接手合わせしなければいけないだろう。あの明るいネギの顔を絶望で曇らせるかもしれないと思うと多少気がひけるが…これもネギに現実を見せる為、仕方がない。

普段の柔和な目つきが嘘のように、木乃香の目は鋭さを増して行くのだった。

第五十九話　軋轢

宮崎のどかは図書館島から帰った後、着替えなどをバッグにつめてから部屋を出た。綾瀬達は今日の事が余程衝撃的だったのか部屋に戻ってからも色々騒いでいたようだった。部屋に泊まりに来ていた早乙女と、ルームメイトの綾瀬が寝付くのを待ってから、のどかは見つからないようにバッグを持って寮の屋上へと出る。ギィッ…と多少開きの悪いドアを開けると、そこには茶々丸と超鈴音が待っていた。

「お待たせしましたー、あれ、超さんも…？」

「今晩は、宮崎のどか。私も今夜別荘でクーたちの指導をする事になってるヨ」

「別荘で指導にあたるのはマスターですが、木乃香さんたちや超さん、姉さんも時間が空いた時に指導にあたる事になってます」

茶々丸の言う通り、別荘での指導はエヴァンジェリンが基本的に全て見る事になっている。ネギには今木乃香たちがついているが、これは時間がある時だけだ。超鈴音は自分の仕事後に指導を行うので他の指導者たちと比べると圧倒的に時間は少なくなる。

「のどかの事もちゃんと見てあげるかラ、安心するといいヨ」

「あ、ありがとうございますー…」

そう言いながら、少し信頼出来ないのどか。何故なら、二人とも少し赤ら顔で妙に機嫌が良さそうなのだ。酒臭くはないのだが…

「じゃあ、茶々丸。お空をとんじゃうヨー！」

「了解です。のどかさん、少し掴まっていて下さい」

「え、わっ、ひゃあぁぁぁっ！？」

あっという間に身体を抱き上げられるのどか。茶々丸と超鈴音は一瞬で夜空に舞うと、別荘目指して空を翔けた。その際…

「あのデザートのケーキ、ブランデー強すぎネ。後からクるヨ」

「同感です。子供が注文出来ない理由がわかりましたね」

とんでもない事を言った。のどかは青ざめて、泣きそうな顔で叫ぶのだった。

「飲んだら、飛ばないでくださーい！？」

別荘ではネギの修行が続けられていた。四日目の昼である。今では実戦形式の修行に移っており、刹那とネギの激しい剣戟が周囲の人間の目を奪っていた。

「エヴァちゃん、あれネギ？　何か印象全然違うんだけど…」

「ああ、化けたな。しかし、まだまだ足りない部分がある。それを教えるには早いとは思うが、まあ木乃香なら教えるんだろうな」

明日菜の言葉に、少し暗い顔で返すエヴァンジェリン。アリアと仲良くなってしまっている以上、自分には教え辛い所なのだ。木乃香に汚れ役をやらせるのは気がひけた。

「足りない部分とは、何ですの？　私には、充分強いように見えるのですが…」

「今に分かる。見てみろ」

エヴァンジェリンに促され、あやかが指さされた方向を見ると…そこには、木刀を片手に歩いて行く木乃香の姿があった。

「ネギ君、そろそろウチとも手合わせしてみよか」

「お、お嬢様!?」

ネギよりも、まず刹那が反応した。早い。早すぎる。確かにネギは強くなったが、手合わせにはまだ早い。

「ネギ君も、早よう強くなりたいやろ？　ウチとやり合ったら、一気に強うなるよ」

「本当ですか！　なら、手合わせしてみたいです！」

無邪気に答えるネギ。刹那は狼狽えるが、木乃香の鋭い視線に貫

かれ沈黙する。こうなった木乃香は、絶対に折れない。
刹那は仕方なく、ネギを木乃香に預ける。沈痛な面もちで、その場を離れた。

先ほどまでネギ達が戦っていた場所で、木乃香とネギは向かい合う。

「ネギ君、気ぃ抜いたら即死やから。全身の神経張り詰めとかなアカンえ」

「はい、木乃香さん！」

と言いつつも、ネギはこの時少し油断していた。こちらも強くなっている。刹那相手に持ちこたえられるようになっているんだし、即死は無いだろう、と。

しかし、木乃香の言葉に嘘はなかった。

構えてから刹那の号令が発せられた瞬間。踏み出したネギの死角に一瞬で入り込んだ木乃香は、木刀をネギの首に打ち込むと地面に叩きつける。ゴキッという音を立てた後、ネギは…

動かなくなった。

首を、不自然な方向へと曲げて。

「ネギィィィィ！」

絶叫は誰のものだったろうか。駆け寄ってきた影はネギのそばに駆け寄ろうとして…

バキィッ！

刹那に腹部を蹴られて吹っ飛んだ。それは…アリアだ。物理的な攻撃には弱いアリアは、軽々と宙を舞う。地面に叩きつけられる前に刹那に抱き止められ、そのまま首に当て身を食らい気絶した。

それは、一瞬の出来事。

エヴァンジェリンでさえ、理解できずに固まっていた。

「…しゃーないなぁ、ネギ君。そない簡単に死にかけたらアカンよ…」

呆れた顔の木乃香。右手に魔力を集めると、素早く呪文を唱える。木乃香は剣士としても規格外だが、日本最高クラスのヒーラーでもある。回復の魔法をネギに施すと、血の気の失せていたネギの頬に赤みが戻ってきた。そして…

「あ…あれ？　僕は…」

ネギは完全に回復して、目を覚ました。

「木乃香さん…？　僕は、どうなったんですか？」

「ネギ君は、首の骨を折られて死ぬ寸前やったよ。ウチが治してあげてん」

死ぬ寸前…

そう言われて、ネギも思い出した。確かに自分は攻撃を受けた。
強い衝撃を受けた後、じんわり身体が痺れて、目の前が真っ暗になってゆく…。嫌な汗が噴き出したような感覚と共に、意識を失った。
あれが、死というものだったのだろうか。

初めて死を意識したネギは、全身をガタガタと震わせた。

「ネギ君はな、修行やからって危機感もってないやろ。麻帆良に攻めて来てる連中はこっちを殺す気で来とるのに、そんな気持ちでいたらいつまでたっても殺され易いままや。強くならんでも、せめて殺されにくくならんとアカンよ」
木乃香は容赦なくネギを叱りつけた。
「せめて、ウチの殺気くらいは感じとらなアカン。次に、攻撃を避ける事や。これからは、ウチが徹底的にネギ君を殺して治すからな？　今みたいな死に方しとったら何の修行にもならんから、もっと真剣にやりや」

ネギの目から、涙がこぼれる。生まれて初めて感じた恐怖に、心が壊れそうだった。しかし…
ネギは自分の身体を抱きしめるようにして震えを止めると、必死に声を絞り出す。

「分かり、ました…。よろしく、お願いします！」

木乃香は、少し目を見開いた後。
「ほな、頑張ろな」
少し微笑んで、ネギの頭を撫でるのだった。

少し離れた所で刹那はアリアを抱えながら事の成り行きを見守っていた。ネギはあれだけ惨めにやられても前に進もうとする。その精神的な強さはどこから来るのだろうと不思議に思っていると…

案の定、殺気に溢れた目で近づいてくる者が。

「おい貴様、指導を頼むとは言ったがアリアに手を出せとは言っていないぞ」

「修行の邪魔をする者は誰であろうが排除しますが？　それを了承済みだと思ったからこそ手を貸していたんですけどね」

エヴァンジェリンである。アリアを殴り飛ばされたのが我慢出来なかったらしい。刹那に向かって、恐ろしいまでの怒気をはらんだ声で怒鳴りつけた。

「お前は指導する私を腑抜けとも言っていたな！　あの時は聞き流してやったが、もう我慢できん！　今ここで叩きのめしてやる！」

これは本気だ。エヴァンジェリンは、我を忘れたかのように怒り狂っている。さすがに周りもエヴァンジェリンの異変に気づき、止めに入ろうとするが…怖くて近寄れなかった。唯一平気な顔をしていた木乃香は、刹那に向かって笑顔を向けている。これは…やってしまえという意味だろう。

刹那は、ため息をついた。

「アリア先生を殴った事に関しては、アリア先生本人に謝りましょう。あなたを腑抜けと言ったのは私の素朴な感想ですから気にしないでください」

「ふざけるな！　私を馬鹿にした事を後悔させてやる！」

エヴァンジェリンは、目にも留まらぬ速さで殴りかかる。それを、刹那は難なくかわしてエヴァンジェリンの腹部に強烈なアッパーを叩き込んだ。

「ガッ…！？」

少し空中を浮くエヴァンジェリン。刹那はそこにありったけの気を込めた蹴りを入れた。

バキッ！

エヴァンジェリンが空高く舞う。空中で体勢を立て直したエヴァンジェリンは、鬼のような形相で刹那を睨みつけた。

「殺す！　殺してやるぞ！　お前だけは許さん！」

これは、もう周囲を気にする余裕も無いようだ。刹那はそう判断し、翼を広げる。自分も空に行けば、少なくとも明日菜たちがとばっちりを食らう事も無いだろう。

空に舞う刹那。それを木乃香は見つめながら、ネギに話しかけた。

「見とき、ネギ君。相手がどんだけ強くても、避けるの極めたら勝てるって事、せっちゃんが証明してくれるから」

不安そうに見上げるネギ。本当に、あの最強の魔法使いに勝てるのだろうか？

空に舞った刹那は、エヴァンジェリンに問いかける。「あなたは今、幸せですか」と。その、戦いに似つかわしく無い言葉にエヴァンジェリンはいきり立つばかりだ。

「馬鹿にしてるのか！　お前みたいな小娘に生意気な口を聞かれて幸せなワケが無いだろう！」

「そうですか…。吸血鬼として修羅の道を歩んできたという割には、最近アリア先生や石田さんに囲まれて随分幸せそうですけどね」

ピクッと、エヴァンジェリンが反応する。

「貴様…何がいいたい」

「言いたい事は言ったんですけどね」

腑抜け。

それが刹那の言いたい事だった。

「あえて付け加えるならば、そろそろ甘やかすのはやめたらどうで

すか？　今のアナタは嫌われるのを恐れてワザと厳しい修行を避けているようにしか見えません。そんな事では、せっかく仲良くなれた人たちを失ってしまいますよ？　あなたの指導不足で明日菜さんたちが殺されてしまうとは考えた事ありませんか？」

「う…うるさい！　そんな事、お前に指摘される事ではない！」

思わず声を荒げるのは、図星だからだ。確かに、エヴァンジェリンは周りに人がいる事に慣れはじめていた。人の温もりを知り、そこに居心地の良さを感じ始めていたのだ。そのせいで、嫌われるのが怖くなっていた。

「まあ、あなたがそれで構わないんでしたらいいんですけどね。その程度の人物に協力しようと思った私が愚かだったんでしょう」

刹那の瞳の色が変わる。

黒から、赤へと。

そして、その髪の色にも変化があらわれた。黒から、白へ。純白な翼と同様の色に変わって行く。

それは、本来の刹那の姿。

烏族、桜咲刹那の真の姿であった。そして…

「アデアット！」

刹那の背中が光を放つ。

「き、貴様！　その姿は！？」

「これが私のアーティファクト『熾天使の翼』です」

刹那の背中には、元々の翼の他に幾つもの翼があらわれていた。
そして、その翼から一枚の羽を引き抜くと、刹那は気を通して強化する。それは、刹那の愛刀だった夕凪と同じ長さの刀へと変化した。

熾天使の翼。飛行と攻撃、さらには守りと、様々な面で力を発揮する万能型アーティファクトである。京都の帰り、明日菜とあやかが正式契約を交わしたと聞いて試しに木乃香と契約してみて、手に入れたものだ。残念ながら木乃香の意向もあって仮契約止まりだったが、仮契約でこれだけ強力なアイテムが出るのは珍しい。ちなみに、正式契約を結ばなかった理由は「言葉責め」や「放置プレイ」が出来なくなるかもしれないから、らしい…

「フン！　今更羽が何枚生えようと、貴様に勝ち目は無い！」
「無ければ作る、それが戦術というものです」

二人はそう言葉を交わすと、強烈なエネルギーを発して空中でぶつかった。

何やら、騒がしい。
目蓋を開いたアリアがまず見たのは、自分を抱きかかえるネギの姿だった。

ネギ。　ネギが生きている。

「あ…ネギ、良かったわ。ちゃんと、生きてるのね…」

「お姉ちゃん、起きたんだね。うん、僕は大丈夫だよ」

そう言いながらも、ネギはどこか落ち着かない。時折空を見上げては、ハラハラした表情をしていた。そこへ、木乃香が声をかける。

「ごめんなぁ、アリア先生。せっちゃんが乱暴してしもて。あの状態のウチ、近づく人間を片っ端に斬ってしまうから。せっちゃんはアリア先生を助けようとした思うわ」

「え…ぁあ、そう言えば私、殴られたんでしたっけ」

記憶が定かではないアリア。突然記憶が途切れたような気がしていた。

「木乃香さん…教えてくれませんか。何故、あなた達はそんなに殺伐としてるの？」

「ん？　それは…そっか、アリア先生は知らんのやね。なら、その疑問は当然や。てっきりお父様かおじいちゃんに聞いとると思っとった」

木乃香は、アリアに掻い摘んで説明した。幼い頃に家を勘当された後の事。政争の道具にされたり、殺されたりした事を。そんな経験をしていた為に、西の連中に顔の知られた人たちが悠長に修行ごっこをしているのが信じられなかった。ネギに厳しくしていたのは、単純に死んで欲しくなかったからだ。自分と違って、他の人間は一度死んだらお終い。教え子に死なれるのは、やはり嫌だった。

「そんな事が…。なら、木乃香さんたちの言い方も分かるけど…他の人に、自分たちと同じ感覚を求めても無理よ。人それぞれ、努力の仕方やペースは違うもの」

「うん。…ネギ君が思った以上に頑張るから、ウチらも調子に乗ってたかもしらん。ネギ君は、どうする？　あれはさすがに怖いから止めるか？」

木乃香が聞くと、ネギは首を横に振った。

「お姉ちゃんが言ったように、努力の仕方はそれぞれだと思います。そして、僕には木乃香さんの厳しさが必要なんです。止めるだなんて、言わないで下さい！」

これには、木乃香も驚いた。さっきはただの強がりかもしれないと思っていたが、これは本物かもしれない。アリアも、驚くと同時に諦める。ネギは止まらない。きっと、この子は父の背中を追った原作のネギのように…誰にも到達出来ない所へと登りつめるのではないか。そんな気がしていた。

「木乃香さん。ネギを、よろしくお願いします。やはり、ネギにはあなたが必要みたいですね」

「そんな、畏まらんでもええよ。ウチも、教えられる事はちゃんと教えてネギ君を一人前の剣士にしてみせるから」

二人の間に、今までのような険悪な雰囲気は無い。ネギはホッとしていた。これなら、刹那と姉も仲直り出来るかもしれない。

「そう言えば、ネギ。刹那さんは、どこ？」

アリアが問いかける。ネギと木乃香は、少し言いにくそうに顔を見合わせた。

「それがね、お姉ちゃん…」

「アリア先生倒されたん見て怒ったエヴァちゃんと、絶賛格闘中や」

指差した先は空。

アリアが見上げると、天使の姿をした刹那と、黒いマントを翻してたエヴァンジェリンが壮絶な戦いを繰り広げていた。

第六十話　喧嘩両成敗

空を舞うのは、白い天使と黒い悪魔。アーティファクト『熾天使の翼』でたくさんの翼を持った刹那と、怒りに我を忘れた吸血鬼エヴァンジェリンである。エヴァンジェリンは魔法の射手を連発して刹那を追い立てるが、刹那は巧みにそれをかわし続けた。

「ハハハ！　デカい口をきいて、避けるしか出来ないのか！　ほら、反撃してみせろ！」

「……。」

エヴァンジェリンの本気で放つ射手は速弾であると同時に追尾までする。刹那は空中でたくさんの翼を羽ばたかせ、細かく飛ぶ方向を変えた。まるで空中でステップワークをするかのような、華麗かつ複雑な動き。刹那を追っていた複数の射手は、空中で互いにぶつかり合いただの花火と化した。

刹那は、機械のような冷静さでエヴァンジェリンを分析していた。そして、下でこちらを見上げるネギたちを横目で確認する。どのような戦い方をしたら、ネギの修行のプラスになるのだろう。そんな事を考えていた。

それにしても…

周りに明日菜やあやか達が居るからか、エヴァンジェリンも大きな魔法が使えないようだ。逆上してるくせに、こういう所はしっか

り気を使っている。その余裕を消してやるのも、楽しそうだ。

刹那は口元を邪悪に歪ませていた。

二人の戦いを見つめているのはネギ達だけではない。休憩していた明日菜たちも、呆然と空を見上げていた。

そんな中、長瀬楓は心配そうにチャチャゼロに声をかける。

「止めなくていいでござるか？　エヴァンジェリン殿、かなり本気のようでござるが…」

「ン？　アンナモン、本気ジャネエヨ。本気ナンテ出シタラ、ココラヘン皆凍ッチマウゼ」

そう言いながら、チャチャゼロはノンビリと空を見上げていた。見上げながら、思う。

確かに、最近腑抜けている。

あの頃のご主人なら、簡単に始末出来るだろう…。そんな事を考えて、苦々しくも感じていた。刹那の言う事は、圧倒的に正しい。さっさとボコられてシャキッとしろよ。そんな事を、つぶやいてし

まう。

「遊ビミタイナ修行ヲシテタラ、イザトイウ時ニマトモニ動ケズ消サレチマウ。桜咲刹那モ甘チャンダガ、今ノゴ主人ハソレ以上ニ甘イカラナ。ココラデ目ヲ覚マスト良インダガ…」

チャチャゼロの言葉に、明日菜たちは血の気が失せるような気がしていた。今までのアレが、遊び!?　かなりキツかったのだが…

そんな視線を無視して、チャチャゼロはただ空の二人を見つめていた。

刹那は空を舞う。

迫り来る魔法の矢を避け、そらし、弾き飛ばし。最小限の動きで、エヴァンジェリンの攻撃をかわす。無駄に魔力を浪費したエヴァンジェリンは流石に疲れてきていた。

本来なら魔力を温存したい時は、細く硬い鋼糸を使って戦う所だが、空での戦いを選んでしまったので使い辛い。それでも何度か試してみたが、刹那は『熾天使の翼』で全て防いでみせた。

「羽を刀に変えたのを覚えていれば、そんな攻撃が効かないのは分かりきった事でしょう。私の身体に触れる前に切断されるに決まっています」

「グッ…反撃も出来ない癖に…」

一度も魔法攻撃を当てられず苛立ちがつのるエヴァンジェリン。
刹那はふわりふわりと空中を舞い、まるで疲れを見せていない。

「先ほどから反撃反撃と煩いですね。でしたらお望み通り反撃してみせましょう」

「何!?」

刹那が背中の翼を全て目一杯開くと、無数の羽が舞った。そして、その全てが小太刀に変わる。小太刀は刹那の前に綺麗に横並びとなり、切っ先をエヴァンジェリンへと向けた。

「一つ一つはそれほど硬くないのであなたの魔法の矢でも撃ち落とせるでしょう。しかし、この中に幾つか私自身の羽を強化した物を混ぜました。今見た限り、あなたの魔法では傷一つつけられないでしょう」

「ほう…面白い。ならば全て射抜いてやろうじゃないか。お前のその生意気な面を歪ませてやる!」

その会話を合図に、戦闘が再開された。無数の小太刀は一度天高く飛んで行くと、そこからエヴァンジェリン目掛けて襲いかかった。それは大したスピードではないが、その一つ一つが意志を持っているかのように独立した動きをしている。エヴァンジェリンの逃げ場を全てふさぐように回り込みながら、正確にエヴァンジェリンの心臓を狙って突っ込んでいた。

「うっ、うわっ、なんだこれは!?」

「しばらくその小太刀と遊んでいて下さい」

刹那はそう言うと、一人地上へと戻って行く。それを追おうとするエヴァンジェリンだが、無数の小太刀がそれを許さない。

「チッ…うっとおしい！　『闇の吹雪』！！」

イラついたエヴァンジェリンは、無詠唱で闇の吹雪を放ち一気に小太刀を殲滅しようとした。吹き飛ばされる小太刀。しかし、その吹雪をものともせずに突っ込んでくる小太刀があった。

ザッ…！

「くぁあっ！」

小太刀が、エヴァンジェリンの腕を掠める。無理やり上体をそらして避けたが、判断が遅れたら心臓を貫かれていた。

エヴァンジェリンは必死の形相で逃げ回り始めた。

「やれやれ、だから無理だと言ったのに…」

地上へと降り立った刹那は、呑気に自分のバッグの中からペットボトルを取り出して水分補給をしていた。中身は、急須で淹れたお茶に一番近い味がするというお茶である。京都出身の刹那は、結構

味にうるさい質らしい。

そうしてお茶を飲んで一息ついていると、木乃香が近づいて来た。

「せっちゃん、お疲れ。強なったなぁ」

「お嬢様…。いえ、あれはエヴァンジェリンさんが冷静でないから上手くハマっただけです。精霊を召喚されて複数で来られたら私でも厳しいですから」

だからこそ、挑発して興奮させたのだ。力を持った所で使う者が冷静でないと全く意味がない…その事をネギに見て欲しかったのだが、伝わっただろうか。

「ネギ君なら、向こうにおるよ。アリア先生と二人の戦いを見とった」

「なら、何かしら掴んでくれたでしょう。次の手合わせからは、動きも良くなるんじゃないですか」

ホッとした表情をする刹那。この戦いが無駄にならなくて良かった。そう思ってネギをみると、ネギは空を見て固まっていた。おや？

「もうキレたぞ！　刹那、お前を殺せばこの刀も消えるだろう！一瞬だが本気を出してやる！！」

刹那が見上げると、空を飛び回るエヴァンジェリンの身体に、恐ろしいまでの魔力が集まっている。もはや、地上にいる他の人間の

事を考える余裕すらないらしい。仕方ない、ここは『熾天使の翼』で魔法無効化体質の無いあやか達を守ろうか…そう考えていると、目の端に誰かの姿が見えた。あれは…誰だ？

「くたばれ刹那！　『エクスキューショナー・ソード』！！」

空を飛ぶエヴァンジェリンは、容赦なく魔法を放つ。『エクスキューショナー・ソード』とはエヴァンジェリンの放つ魔法の中でも上位の威力を持つ魔法だ。巨大な氷の剣を作り出して放つ。直撃すれば、この別荘にも影響を与えてしまうだろう。半壊近いダメージを与えてしまうかもしれない。明らかに、冷静さを欠いていた。

この時の刹那と木乃香の判断は速かった。刹那が明日菜たちのいる場所を守るように『熾天使の翼』を展開させ、木乃香が刹那とエヴァンジェリンの間に立つ。氷結属性の魔法で殺された経験を持つ木乃香には『エクスキューショナー・ソード』は効かないのだ。本来であれば、この二人のやろうとしている事は明日菜とあやかの方が適任なのだが、どちらも足を震わせて使い物にならなかった。

迫り来る、氷の剣。

それを迎え撃つ木乃香と刹那。

しかし、氷の剣が二人に直撃する事は無かった。木乃香の前に飛び込んで来た何者かが、その氷の剣を片手で止めたのだ。

「そこまでです、マスター」

それは、茶々丸だった。

そして、もう一人。空に浮かぶエヴァンジェリンの背後をとると、羽交い締めにして動きを封じる。

「ハイハイそこまでネ、エヴァンジェリン」

「き、貴様は超鈴音!?　は、離せ！　小太刀が…」

「大丈夫、それなら全て叩き落としたヨ。少し落ち着いて冷静になるといいネ」

突然現れた超に戸惑うエヴァンジェリン。言われた通りに周りを見ると、確かに小太刀は一本も見当たらない。あの小太刀は全て、超によって叩き落とされていた。気で強化された小太刀だが、気を扱う事に関してはエキスパートである川神百代の身体能力を得ている超には、小太刀など蚊よりも簡単に仕留められる相手である。

「貴様ら、なんのつもりか知らんが…というか茶々丸！　サラッとマスターを裏切るんじゃない！　それと私の魔法を片手で止めるってどんなメンテナンス受けたんだ!?」

「マスター、別荘を壊すような真似はやめてもらいましょう。ここには私の趣味で集めたコレクションが保管されています。それを傷つける存在は、たとえマスターであろうと許しません。断食の刑です」

「だ、断食だと!?　それは困る！」

シリアスがいきなり崩れた。

「エヴァ、一体どうしたネ？　何があったか、説明して欲しイ」

「うっ…、それは…」

言葉につまる。刹那の挑発に乗って別荘を吹っ飛ばそうとしたなどと言ったら、茶々丸に怒られて断食させられてしまう。せっかくメンテナンスから戻ってきて以前と同じ暮らしが出来ると思ったのに、これではまた辛い生活に戻ってしまうではないか。

しかし、エヴァンジェリンは観念した。下手に言い訳しても、茶々丸には通用しないだろう。他にも目撃者がいるのだ、取り繕うのは無理だ。地上を見ると、ネギのそばには宮崎のどかがいた。何やら話をしており、きっと今の出来事の説明を受けているのだろう。確か、アイツのアーティファクトは心を読むモノだったハズだ。生きた嘘発見器がいては益々嘘はつけない。

「分かった、説明するから離せ。とりあえず、下に降りるぞ」

超が離すと、エヴァンジェリンは大人しく地上へと降り立つ。刹那、木乃香、茶々丸、超鈴音を集めて事の経緯を話した。

「なるほど、分かりました。ただの喧嘩ですね」

「刹那の方が修行に利用している分、質悪いネ」

話を聞き終えた茶々丸と超は口々に言う。エヴァンジェリンの説明だけでなく、刹那の言い分も聞いた。その上で出た結論は…

「刹那が悪いヨ。正しい事を言っていても、それを伝える方法が間違っていタ」

「その挑発に軽々しく乗るマスターも情けない。最強の魔法使いならば、王者の余裕を見せるべきでしょう」

二人に怒られて、シュンとする刹那とエヴァンジェリン。特に納得いかない刹那は少しイラだっていた。そんな表情を見た茶々丸は、少し考えて言った。

「しかし、このままではお互いにスッキリしないでしょう。そこで、お二人には私の提案する方法で勝負をしてもらいます」

「「勝負？」」

声を揃えて聞き返す二人。

「はい。これは勝負であると同時に仲直りにもなりますし、相互理解を深めるには最上の方法でもあります。詳しい説明は別荘内の私の部屋で行いますから、お二人はついて来てください」

「お、おい茶々丸？」

エヴァンジェリンが声をかけると、茶々丸はギロッと睨みつけた。やるよな、という脅迫めいた視線だ。

（せ、刹那、言うとおりにするんだ！　受けなければ、殺される！）

（はい、尋常ではない魔力を感じます。私ですら足が震えていますから）

二人は共通の恐怖を前に心を一つにしていた。そこに、脳天気な声をかけてくる人物が。

「なー茶々丸ちゃん、ウチも見学してええかな？」

（お嬢様！？）

自ら死地へ赴く女が一人。木乃香である。茶々丸はニッコリ微笑んだ。「勿論です。見学だけではなく、参加して頂いても結構ですよ？　超さんはどうしますか？」

「わ、私はクーたちの指導をするからヲ、遠慮するヨ」

「そうですか…残念ですが、仕方ないですね。では木乃香さんもついて来て下さい」

「うん♪　エヴァちゃん、せっちゃん、ほな行こか」

なにやら楽しそうな木乃香に背中を押され、二人は青ざめた顔をしながら茶々丸の後をついて行くのだった。

【石田留美】

お久しぶりです。石田留美です。別荘に居るのに全く出番の無い私。実は家事全般を任されているので大変だったりします。

沢山の人が集まって生活する。それも修行となると、洗濯と食事はかなりの大仕事となります。幸いこの別荘では物が腐らない上に買い置きが沢山あるので食材には困らないのですが、問題は洗濯。家事能力の無い人間ばかりが来ているので、アリア先生が外にいる今は私一人が家事を取り仕切る事となります。厳しい。

洗濯とは、衣服だけでは無いんです。布団やシーツだって替えますし洗います。これが、非常に大変なんです。茶々丸さんは凄いですね、これをずっと一人でこなしてきたんですから…

さて、今日も皆が外に居る間に洗濯を…と、ある部屋の前に来ると何やら話し声が。おかしいですね、修行に出ているのではないのでしょうか？　体調を崩して、休んでいるのかもしれません。私は、訓練していた心眼を発動しました。心眼ですよ、心眼。私の能力の一つです。覚えている人はいるのでしょうかね。

とりあえず。

心眼を発動した私の脳裏に浮かんできた映像は、非常に言いにくい状況でした。何故こんな事に。指導している人間がここに居てはいけないでしょう。というか茶々丸さんが戻って来ている！　だったら家事変わって欲しい。こんな所で秘蔵のコレクションを手に弄んで…いや、遊んでいる場合では無いハズです。

しかし…また洗濯物が増えますね。明日菜さんとあやかさんだけでもウンザリしていると言うのに…。私はため息をついて、部屋を後にしました。

まあ、茶々丸さんが戻って来てるなら負担は減りますから構いま

せんが。別荘を出たら、やけ食いでもしてやりましょうか。ああ、そう言えば龍宮さんと食べに行く約束をしていました。これはもう餡蜜でも何でもガツガツいかないと気が晴れませんね。

覚悟して下さいね、マスター。ひょっとしたら、サラリーマンのひと月分の給料くらいは消えると思いますよ…

数時間後。

皆の前に姿を表した刹那たちは、何故か顔を赤らめていた。手を繋いで、見ようによっては恋人のように仲むつまじく見えた。

「刹那。その…すまなかったな。確かに私も甘すぎた。これからはお前たちにも意見を聞いて、修行の方針を決めていきたい。協力してもらえるか？」

「勿論です。私も偉そうな事を言っていましたね。これからはイジメられた者同士、仲良くしていきましょう」

刹那の言葉に、身体がまた少し熱くなるエヴァンジェリン。潤んだ瞳で「馬鹿…」とつぶやく表情は、反則的なまでに可愛らしかった。

「なら、今度は茶々丸ちゃんの裏コレクション使おうか。見せてもらったけど、かなりいい感じやったえ。」

木乃香が言うと、今度は刹那が顔を赤らめる。木乃香の容赦の無さは、特定のシチュエーションでは洒落にならないからだ。刹那とエヴァンジェリンは、固く手を結ぶ。これはどちらかというと恐怖心からだ。

そんな二人の様子を端から眺めていた皆は、その変わりように唖然としていたが、雰囲気は良くなったのでまぁいいかと喜んでいた。あんなスケールのデカい喧嘩など、もう見たくはない。

「お姉ちゃん、刹那さんたちが仲直り出来て良かったね」

「…そうね。教師としては止めなくちゃならない所だけど、見逃しましょう」

「…？」

ネギはともかく、だいたい見当がついたアリアは顔を真っ赤にする。まさかこんな事になるなんて…仲直りというか仲良くなりすぎじゃないか、と頭を抱えていた。

そこから少し離れた所では、一人の少女がうずくまっている。

「あぅ〜、凄すぎますー…」

手にはイドの絵日記。刹那たちの『勝負』を覗き見たのどかは、
鼻血を流しながらその場に倒れるのだった。

第六十一話　修行風景

エヴァンジェリンと刹那たちの和解を経て、ネギと明日菜たちの修行はその内容を大きく変化させた。

一、個人の能力とレベルに合わせてメニューを細かく作り直し、超鈴音、エヴァンジェリン、刹那、木乃香、チャチャゼロが密着指導する。

二、ネギの指導に関しては木乃香に一任するが、なるべく意識を失うまで追い詰めない。修行にはアリアが立ち会い、すぐに文珠での回復に当たれるようにする。

三、その日の終わりに、指導者が集まって話し合いをする。その中で、今後の修行内容について意見を交わす。

以上の三つが、変更点…というより新しく取り決められたルールだ。以前は、指導する人間個人のフィーリングに頼る所があった。指導者会議を開く事になれば、行き過ぎた訓練内容にはならないだろう。また、過保護すぎたら批判意見も出るはずだ。超は特に、介入者に殺された経験を持つ為に厳しめの意見を出す傾向にある。

急ぎすぎてもいけないが、危機感を持たずにダラダラ時間を過ごすのはもっといけない。それが、指導にあたる人間の共通認識となっていた。

ネギが参加して五日目以降は、明日菜たちにとっては特にハードな日々となった。外時間では夜の１０時。朝の5時に外に戻って解散する予定なので、後一週間は修行が出来る。明日菜はアルバイト

の関係上1日早く帰らなければならないが、それでも6日は修行に集中出来るのだ。別荘様々である。

さて、新体制になりそれぞれのメンバーが個別に指導を受けるようになった。木乃香は引き続きネギを担当するが、明日菜とあやかの担当は刹那に移った。二人セットなのは、連携して戦う訓練を行う為だ。超が担当するのは勿論クー。チャチャゼロは暗器を使った戦い方を極めさせる為長瀬の指導に当たった。そしてエヴァンジェリンはと言うと…。

「つくづくお前は戦闘向きじゃないな…」

「あうー…」

宮崎のどかを担当する事になった。別に、残りものをつかまされたワケではない。これにはちゃんとした理由があった。

「お前はまだ自分の立場という物を理解してないな…。今、麻帆良の魔法使いの中でお前の知名度はうなぎ上りなんだぞ?」

「わ、私がですか…?」

そう、宮崎のどかの名前は現在麻帆良の魔法使いの中で注目を集めている。それは、修学旅行での告白騒動がきっかけだった。あの告白のシーンは、実は同じように奈良を訪れていた別のクラスの魔法生徒に目撃されていたのだ。有名な英雄の息子の彼女。そんなのどかが、注目を集めないワケがなかった。

「さすがに仮契約までしているとは思ってないだろうが、バレるのも時間の問題だろう。そしてマズい事に、お前のアーティファクト

は危険すぎる。もしその存在が知れたら狙われるだろうな。麻帆良の魔法使い共も、狙ってくるだろう」

エヴァンジェリンの言葉に急に怖くなるのどか。確かにあの本は危険だ。それは分かる。が、麻帆良中の注目を浴びている事や麻帆良内の魔法使いに狙われるかもしれないという事は考えていなかった。

「少なくとも、お前のアーティファクトは誰にも見せない事だ。これから私は、お前にアーティファクトに頼らず自分の力だけで身を守る術を教える」

「で…出来るのかな…」

不安げなのどかに、エヴァンジェリンは笑いかけた。確かに現時点では無理だろう。しかし、コイツは嵐山旅館での言葉を忘れたのか？　エヴァンジェリンはもう一度説明する。「前にも言ったが、私達のクラスには素質のある人間が集められている。それはお前も例外じゃない。お前には確実に魔力に対する適性があるし、素質も充分ある。でなきゃ、あんなアーティファクトは出ないだろう」

そして、一呼吸置いてのどかを見据えて言った。

「石田に心眼を使ってお前を調べてもらって分かったんだがな。お前は私と同じ氷の魔法と相性がいいらしい。喜べ、のどか。最強の魔法使いが直々にお前を鍛えてやる！　得意分野の、氷の魔法をな！」

エヴァンジェリンがのどかを選んだ理由。それは、自分と同じ氷の分野で肩を並べられる存在を作り上げてみたい、という思いがあ

ったからだ。木乃香ほどではないが、身体の奥に眠る膨大な魔力の存在はエヴァンジェリンにも感じとれる。すぐには無理だが、将来的に優れた魔法使いになる可能性は充分にあった。

戸惑うのどかに、燃えるエヴァンジェリン。この奇妙な師弟関係は、意外にも長く続く事になるのだが、その事を予想する人間など居はしない。付き合いの長いチャチャゼロでさえ、またゴ主人の気まぐれが始まった、としか思っていなかった。

のどかとエヴァンジェリン。二人の魔女は、こうして共に歩き始めるのだった。

一方、明日菜とあやかは刹那の指導に音を上げつつも必死で食らいついていた。

「明日菜さん、あやかさんへの魔力供給を維持して下さい！　あやかさんはまだ魔力も気も自分で操れないんです、あなたが供給を止めたらそこでアウトなんですよ！」

「わ、分かってるわよ！」

「ごめんなさい、明日菜さん…」

明日菜とあやかをセットで鍛える理由の一つが、これである。あやかは、明日菜とパスを繋いでいる時意外は一般人と変わらない。今から鍛えるにしても『気』と『魔力』においてそれほど高い素質

を持っていない為、時間がかかる。それなら明日菜のいる時はコンビネーションを高める訓練をして、一人の時に基礎的なメニューを組む事になった。

そして、もう一つの理由。それは魔法無効化のアーティファクトは強力なのだが、肉弾戦を仕掛けてくる相手には意味がない。二人には早急に体術、剣術の基礎を身につけてもらう必要があった。

パスを繋いだ二人に、ネギに課していた練習メニューを行わせる。その後に、手合わせをする…。この繰り返しを、朝から晩まで行っていた。

「明日菜さん、もう、ダメです…」

「しっかりして、あやか！　ネギだって同じメニューをこなしてたのよ！」

「ネ…ネギ先生と同じ…これは、何かが漲ってきますわー！」

「……それはそれで、どうかと思うけど」

何気にショタ好きは変わらないようだ。鼻血を流しながら復活するあやかを、明日菜と刹那は微妙な表情で見つめていた。

長瀬楓を担当するのは、引き続きチャチャゼロである。長瀬はクーよりも避けるのがうまく、何より武器を扱う事に長けていた。チ

ヤチャゼロの好みの戦い方をしていた為、その方向で鍛える事にしたのだ。

「コレカラハ本物ノナイフデ攻撃スルカラナ」

「け、怪我したら誰が治してくれるのでござるか？」

チャチャゼロは、小さな球を出した。アリアの作った文珠だ。

「三ツアル。三回マデナラ回復出来ルガ、余程大怪我シネエト使ッテヤラネエカラナ」

「それは厳しいでござるな…」

クーと長瀬がチャチャゼロと戦っていた時。チョークの筋が急所に付かなかったのは長瀬の方だった。クーはクセなのか、肉を切らせて骨を断つという戦い方をしてしまう。クーを担当していたら、文珠がいくつあっても足りないだろうと、チャチャゼロは考えていた。もっとも、二人とも『瞬間回復能力』を持っているのでそれほど使う機会は無さそうだが。

「暗器ノ扱イナラ俺ノ得意分野ダカラナ。ミッチリ仕込ンデヤルゼ」

「響きがどことなくイヤらしいのは気のせいでござろうか…さすがエヴァンジェリン殿の従者でござるな」

「俺ヲアンナ変態ト一緒ニスルンジャネエ！」

自分の主を変態呼ばわりするチャチャゼロ。勿論エヴァンジェリンはしっかり聞いていた。のどかを指導する傍ら、どんな罰を与え

てやろうかと考えていた。そんな事になってるとは知らないチャチャゼロは、ナイフを振り回し長瀬を追いか回すのだった。

超の指導するのはクーである。以前からずっと行ってきた二人での修行。しかし、超の顔には何時もの明るさは無い。厳しい顔で、クーを見ていた。

「昨日、洗濯前の服を見せて貰ったヨ。チャチャゼロに大分やられたみたいネ」

「ぁ、ぁうぅ…」

「一番マズいのは、あばらと腹にチョークをつけられた事だヨ。いくら強い身体だとしても、急所に刃物を入れられたらお終いネ。避ける事、軽視するクセを直さないといつまでたっても一緒には戦えないヨ」

クーの顔が青ざめる。必死でやって来たのは、超と共に戦いたいからだ。それが無理だと言われるのは何よりも辛い。

「クーには、避ける事を極めてもらうヨ。その上で、解散前の6日後にテストを受けてもらう」

「テスト？」

筆記テストならパスしたい、などと思ったクーは少し警戒して聞き直す。超は意地悪そうな顔をしていた。

「五分間、私の攻撃を避け続けるというテストネ。もしクリア出来たら、ご褒美をあげるヨ。もしダメだったラ…」

ゴクリと唾を飲むクー。

「バイトの衣装、かなりキワドイ物に変えるネ」

「師匠ーっ！？」

これはヤバい！　今でさえ、思いきり見えてしまっているのにこれ以上となるといろんな法律に引っかかりそうだ！　下手したら、捕まってしまう！

「私自身も逮捕されて大変な事になるかもしれないヨ…」

「そこまで身体はる必要無いアルよ！」

「身体はるのはクーだヨ。少しズレると即アウト的デザインを模索中だからラ、期待してるといいヨ」

「ァィヤアァァッ！？」

クーは思った。やるしかない。結果を出して超のふざけた悪戯を止めさせないと下手したらバイト先が無くなってしまう。超にも会えなくなる。

クーの目に、やっと緊張感が宿ってきていた。

そして、最後に。
木乃香はネギの指導を続けている。傍らにはアリアが控えており、いつでも回復出来るように準備していた。

「行くえ、ネギ君。次はもっと保たせてや？」

「はい、木乃香さん！」

やはり、ネギの成長スピードは異常である。父に強くなった自分を見てもらう、という目的が成長スピードを加速させているのかも知れない。最初は一瞬で終わっていた手合わせも、今では5分ほど保つようになっていた。もっとも…

「遅い！」

「がっ…！？」

逃げる事に徹してコレである。今は動きを読まれ足払いを受け、浮いた所に蹴りを食らった。…顔面に。

メガネと鼻がつぶれる。アリアは急いで文珠で治癒した。メガネも直るのだからとんでもない効果だ。

「ネギ君身体強化してコレやからなあ。スタミナあっても、潰されて動けんようになったらシマイや。もっと、ウチの攻撃を怖がって警戒せなあかんよ」

「すみません、何だか反撃出来そうな気がして動きを変えたら、いつもやられちゃうんです」

うーん、とうなる木乃香。勝機を見いだそうとする姿勢は大切だが、無謀な攻撃は寿命を縮めるだけだ。

「せやなあ、それが勘違いやと分からせるには、やっぱり実際やってみせんとアカンかなあ」

「え？」

そう言うと、木乃香はネギから少し離れると木刀を構えた。

「ネギ君、好きなように攻撃してみるとええよ。どんな攻撃しても、ウチには届かんから」

流石に、ネギにも負けず嫌いな面はある。今の言葉にムカッときたネギも木乃香に向かって木刀を構えた。

「行きます！」

「ええよ～」

ネギはあらん限りの力で木刀を振るう。しかし、その全てが木乃香の木刀にはじかれてしまった。

「なら、これはどうですか！」

それは神鳴流の太刀筋。斬岩剣の初歩の剣だった。二回目にして、かなり完成型に近づいてるが…

カンッ…

軽い音を立ててはじかれた。

「そんなん、せっちゃんと稽古しとるウチに届くわけないやん。せっちゃんでさえ、ウチに当てた事ないのに」

「ぅうう～…」

涙目になるネギ。悔しいが、まるで当たる気がしない。まるで、壁に阻まれているような錯覚を覚えた。

「結局、体勢の崩れてないウチにはネギ君の剣は当たらん。逃げてバランス崩してる状態のネギ君なら、なおさら当たらんよ。ネギ君がウチに勝つ方法は、ただ一つや」

「な、何ですか、その方法って！」

知りたい。難攻不落の要塞のような木乃香の守りを崩せるのなら、何だってやってみせる！　ギラギラした目で木乃香を見つめるネギだが…

「逃げて逃げて逃げまくって、ウチが忘れた頃に後ろからサクッといくぐらいやな」

「汚いにもほどがあるじゃないですか！」

脱力した。実は京都でその汚い方法で戦ったのだが、覚えていないらしい。

「でもなあ…それ以外やと、ウチのガード破るくらいの技放つくらいしか方法無い思うんやけど」

「じゃ、じゃあ、僕が編み出してみせます！」

ネギがとんでもない事を言った。それまで黙って見守っていたアリアも、思わず驚いて声をかけた。

「ネ、ネギ？　流石にそれはムチャなんじゃない？」

「いいえ、お姉ちゃん。僕は諦めたくないんです。やってみなくちゃ分かりませんし、やっぱり一度も驚かせる事が出来ないのは悔しいんです！」

驚いて欲しいなら木乃香は充分に驚いている。何故、ネギは折れないのだろう。普通なら流石に挫折すると思っていたのだが…

木乃香は呆れながら、ネギの修行を続けた。結局その日、ネギは一度もいい所を見せる事無く叩きのめされてしまったが、何かを探るような目で木乃香の動きを見続けていた。木乃香はその視線に、言いようのない居心地の悪さを感じる。それは、何だか得体の知れない怪物に狙われているような感覚。知らず知らず力が入ってしまい、ネギの腕を何度か砕いてアリアに怒られてしまった。

その日の夜。

ネギはアリアと一緒の部屋に寝泊まりしているが、アリアの横で

ネギは怪しい笑みを浮かべていた。何やら木刀を見つめているようだが…

「ねえ、ネギ。不気味なんだけど…闇討ちとか考えてないわよね？」

「な、何言ってるのお姉ちゃん！　そんなんじゃないよ。いいこと考えてたんだ♪」

ニコニコしているネギ。アリアはその表情が不気味でならない。また何かひらめいた…今度はカサカサみたいな変なのじゃないといいけど…。

木刀を見つめてウフフフと笑うネギを見ながら、アリアは少し震えていた。

第六十二話　スーパー野菜人

エヴァンジェリンの別荘には二つの時計が設置されている。一つは外時間を表す時計。もう一つは、別荘内の時間を表す時計だ。その両方の時計が午前零時を知らせる音を鳴らした時…なかなか寝付けなかった超鈴音は部屋の外のベランダへと出て、夜空を眺めていた。

空に浮かぶ星ぼしは本物ではない。だが、見ていると不思議と心が落ち着いた。海の音も、冷たい夜風も肌に心地よかった。しばらく目を閉じてたたずみながら、超はこれまでの事を振り返っていた。

介入者によって破壊された自分のいた世界。その敵討ちと仲間の強化の為に自分はここにきた。介入者たちは殆ど無力化し、仲間たちも強くなってきている。アシュタロスに任された仕事に関しては今の所うまくいっていると言えよう。

しかし…

介入者たちを倒して、神々を始末したところで、自分のいた世界が元に戻る事は無い。あの世界の仲間たちは…慰み者にされたり殺されたりして、崩壊する世界と共に消えてしまった。

自分は、この世界だけでも守る為に…ここにいる。

しかしこの世界を崩壊から救う事が出来たなら。その後、自分はどこに帰ればいいのだろう。結局、戻る所は無いのだ。この世界に留まってもいいのだろうか。それとも、アシュタロスたちについて行けばいいのだろうか…

漠然とそんな事を考えていると、少し離れた所からドアの開く音が聞こえた。音の主は、エヴァンジェリンと茶々丸だった。茶々丸の手には細やかな切り子細工の施されたグラスを乗せた御盆がある。エヴァンジェリン自身は日本酒の一升瓶を手にしていた。

「眠れないなら、少し付き合ってくれないか」

「エヴァ…一応、中学生なのニ悪い人だネ」

そう言うと、エヴァンジェリンは愉快そうに笑った。互いに、実年齢はとうに過ぎてるだろう、と。確かに体感時間なら超も大人である。それもそうネ、と微笑んで、超はベランダに備え付けてあるウッドチェアに腰をかける。丸いテーブルを挟んでエヴァンジェリンと向かい合った。

京都で買ったというグラスは、確かに日本酒を注ぐには雰囲気が合っていた。イミテーションであるハズの月の光でさえ、酒の上を踊ると美しく思える。超は少しの間、その光に見入っていた。

「何に乾杯したい気分なんだ？　今日は特別にお前に決めさせてやる」

「…ありがとう、エヴァ。なら、少し暗いかもしれないけど」

目蓋を閉じて、言った。

「『失われた者たち』へ。今はもう会えない人たちニ、乾杯しよウ」

それを聞いたエヴァンジェリンは静かに頷いた。詳しくは聞かない。気軽に聞いていいような話では無いだろう。茶々丸もグラスに

酒を注ぎ終わると頷いて、エヴァンジェリンと声を揃えた。

「「「『失われた者たち』へ」」」

カンッ…と、小さくグラスが音を立てる。皆、それ以上言葉を交わさずに静かにグラスに口をつけていた。

不思議なものだ。

前の世界では、超はエヴァンジェリンとそれほど親しくしてはいなかった。こんな風に酒を酌み交わす事なんて、まず無かったのだ。

しかし、悪くは無い。

こんな風に誰かと優しい時間を過ごせるのなら…この世界で生きて行くのも悪くないな、と超は思っていた。エヴァンジェリンと茶々丸は、そんな超をただ静かに見守るのだった。

別荘での修行は外時間の五時に一旦解散する事になっている。だが、実質四時が終了時間として設定されていた。それは明日菜の新聞配達の事だけでなく、ラスト一日は身体を休めようという提案が出た為だった。

それはまあ、正解だった。

のどか、あやかの二人は一般人と変わらない体力なので、疲労が溜まりやすいのだ。せめて一日置いて身体を休めないと学校生活に支障を来す。そうでなくても、のどかはエヴァンジェリンの指導を受けて毎日ヘロヘロだった。

最終の訓練日となる今日まで、のどかは毎日氷作りをしていた。適性のある氷属性の魔法の基礎を、ただひたすら繰り返す。そしてこの訓練にはノルマというものが存在した。この修行で作られた氷が皆の休憩時間のドリンクに使われるのだ。もしのどかが少ししか氷を作れなかったら、皆は温い飲み物しか飲めない。心優しいのどかは、皆の為に必死で魔法を使い続けた。

勿論、これはのどかの性格を利用した意地悪なやり方だ。エヴァンジェリンも最初は可哀想かと思ったが、思いのほかのどかが頑張るので止められずにいた。もっとも、休憩中に長瀬たちが「カキ氷も頼めるでござるか？」と言い出した時はさすがに止めたが。

まだ初歩の段階ではあるが、のどかは短期間のうちに魔法を使えるようになっていた。

のどかを始めとした麻帆良ガーディアンの面々は、地味ではあるが基礎面において確実な成長を遂げていた。が、ネギだけはそれと

比較にならない速さで成長…というより進化していた。

あれから毎日のように木乃香の鋭い攻撃にさらされ続けたネギは、殺気や死の気配に敏感になり、異様なまでに危険察知と回避能力に特化していた。木乃香が一歩踏み出した瞬間には、もう攻撃を予測し終わって逃げる所、という状態なのだ。今回の修行の最終日となる今日に至っては、その進化は行き着く所まで行ったかのようだった。木乃香はまるで、どこまでも逃げて行く逃げ水を相手にしているような錯覚に陥っていたのだ。

「ネ、ネギ君。保たせろとは言ったけど、それはどうやろう。逃げてばっかやん」

「でも、刹那さんの指定した条件ではこれが精一杯なんです。気のコントロールだけでは、まだまだ木乃香さんの動きにはついていけないんです」

おや？　木乃香はネギの言葉が引っかかった。

「ちょっと待って、ネギ君。もしかして、今まで一回も魔力使わんと…？」

「はい。刹那さんに禁止されてましたから」

木乃香は驚愕していた。

確かに刹那はネギに魔法を使うのを禁止した。しかし、手合わせの時は別である。最近扱い慣れてきたばかりの気だけで、ネギは刹那や木乃香と手合わせをしてきた。ハッキリ言ってムチャだ。

「何度も死にかけたのに、律儀に守って来てたん？　いくら何でも、

うちら相手にしてる時は魔力も使って全力で来なアカンよ」

「え…いいんですか？」

ネギの顔が、明るくなる。

「僕、魔力使っても良いんですか？」

「うん。いくら何でも、気に関してはネギ君素人やもん。ちゃんと全力出して訓練せな」

ネギは…ガッツポーズをした。

これなら、アレが出来る。いつか木乃香を驚かせようと思っていたアレが！

「分かりました。では木乃香さん、これから魔力も使って僕の全力をお見せします」

そう言うと、ネギは木刀を構えて木乃香と向かい合う。木乃香も、その只ならぬ雰囲気に真剣な顔で迎撃体勢をとる。ネギに、今まで感じた事のない威圧感を感じていた。これは…何か仕掛けてくる。それも、とんでもなく危険なワザを…

ネギは、全身を魔力と気の両方で強化すると、手にした木刀を振り上げた。木刀は強烈な魔力を帯びている。これは、まるでネギが魔法を発動する時の杖のようだ。

そう…

ネギは、木刀を魔法の発動体に変えていたのだ。夜な夜な、木刀の内部にある鉄芯に魔力を込めて、自分の魔力が馴染みやすいようにしていた。つまり、この木刀は物理的な攻撃にも魔法攻撃にも使える武器に変化しているのだ。

「行きます！　『白い雷』！」

ネギが無詠唱で雷撃系の中位魔法を唱えると、木刀に雷が宿る。刀身部分は木の部分が炭となり崩れ落ち、鉄の芯が剥き出しになっていた。そして、恐ろしいまでに激しい放電現象を引き起こしている。

ネギは、そのまま全身の気と魔力を込めて刀を振るった。

「『斬岩剣』！！」

「い、いやそれ斬岩剣ちゃうから！？」

ズガアァァァンッ！！

ネギの放った雷撃が、木乃香に直撃する。まるで、真横に雷が走ったかのようだ。ネギと木乃香の手合わせは、アリアは勿論、休憩中の明日菜たちも見物に来ていた。が、今の衝撃で皆その場にひっくり返ってしまっていた。

雷が直撃した場所には、砂煙がもうもうと立ち込めていた。これは、木乃香の防壁とぶつかり合って出来た魔力の残滓だ。直撃を受けた木乃香の姿は、全く見えない。見ていた皆は焦り始めるが、刹那だけは冷静にその光景を見つめて…

「アカン、このちゃん！」

皆とは別の意味で焦り、声を上げた。煙の中から飛び出して奇襲を仕掛けた木乃香だったが、ネギはそれを完全に読んでいたのだ。

「速弾　風雷の射手１２５矢！」

鉄芯から、今度は魔法の矢が飛び出す。それも、ただ矢を放つのではなくネギ自身も攻撃に打って出た。

「うおぉぉぉぉっ！！」

ガンッ！　ギィン！　ガガガガッ！

出来損ないの斬岩剣もどきとは言え、魔力をも込めたものとなると、それなりの威力がある。それに加えて魔法の矢。木乃香は初めてネギの攻撃に恐怖していた。

これは、完全にこちらの動きを予測していた攻撃だ。直線的な動きで突っ込んで来た自分に対して、逃げ道を塞ぐかのような全方向からの攻撃。以前暗殺剣として使った気の針金の剣を、守りの為だけに使ってなんとか弾き返す木乃香。こんな事は、初めてだ。

全ての矢を斬りとばしてネギの攻撃も弾き飛ばすと、さすがの木乃香も肩で息をしていた。だが…凌ぎきった。

「残念やな、ネギ君。これがウチを驚かせる奥の手やったん？」

「いいえ、これはその一段階前の技です。本番はこれからですから」

内心、嘘だろと木乃香は思った。実の所、今ので充分驚いている。雷を放った技は、神鳴流でいう『雷鳴剣』であり、威力だけなら既に『雷光剣』に達していた。次に矢を放つ剣だが、さすがにアレは初めて見る。ネギオリジナルの技だろう。そしてさらに今から新しい技を見せるという。

「今のは、刀に魔法を宿しました。次は、僕自身に宿してみます」

「は…？」

魔法を身体に宿す？

ポカンとする木乃香だが、次の瞬間言っている意味を理解した。こいつは、狂っている！

「『白い雷』！！」

そう叫んだネギの身体が、まばゆい光を放つ。尋常ではない魔力の爆発。先ほどの雷撃が霞むくらいの気と魔力の渦がネギの身体から発っせられる。髪の毛からつま先まで、全てが激しく輝いていた。

「短時間ですが、これが僕の全力です！　ぅおあぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ネギが、雄叫びを上げ木乃香へと突進する！　いや、もはや瞬間移動に近い。雷の力を得たネギは一瞬で木乃香との距離をつめると、一心不乱に刀を振り下ろす。それは未熟な太刀筋ではあったものの、普通の人間には視認出来ないくらいのスピード。木乃香も限界まで力を振り絞ってネギの攻撃を弾き飛ばしていた。

ガガガガガガガガガガガガ！

まるでハイになって狂いかけてるキツツキか、薬でおかしくなったハチドリ。全身を痙攣させているみたいに、残像でぼやけるくらいの速さで打ち合う二人。バチバチと火花が散る。

ギャラリーは、もうついて行けなくなっていた。刹那でさえ、軽く眩暈を覚えていた。これは…これは一体なんなんだ？

エヴァンジェリンの狼狽は、それ以上だった。ネギが見せた、奥の手。あれは、かつて自分も使っていた手なのだ。『闇の魔法』と呼んでいた、闇に生きる者の戦い方。魔法を身体に宿して戦うという、常人には無理なこの戦い方を、ネギは自分のやり方でモノにしてみせた。ネギにはまだ早いと教えていなかったのに、ネギは勝手にたどり着いてしまう。滅茶苦茶なのは親ゆずりだな、とため息をついていた。

「どどどどどうですかかかか木乃香ささささんんん！」

「いや、もうええから！　充分驚いたから、止まってネギ君！」

さすがに木乃香も悲鳴をあげた。どう見てもネギ自身が感電しておかしくなっている。自分も、もう限界だった。実は雷撃攻撃を受けた事がない木乃香。ネギの刀に込められた雷を受けて、かなりのダメージを受けていた。驚くどころか、久しぶりに死の恐怖を感じていた。

「でででも止まらないいいんでででですす！」

「ああん、何でこんな事に！？」

制御不能になっているハズなのに的確に急所を狙ってくるネギの攻撃を弾きながら、木乃香は泣きそうな顔になる。どうやったら、怪我をさせないようにネギをとめられるのか。必死に考えていると、目の端に誰かの影が。誰だ？

「いい加減にしなさい、このお馬鹿ー！」

それは…アリアだった。

背後からネギの身体に飛びつくと、石田から貰った能力でネギの魔力を吸い取る。身体に宿した雷撃魔法も、全て。身体中の魔力を一気に失ったネギは、まるで当て身を受けたかのように意識を失いその場に倒れた。…アリアを巻き添えにして。

「ぷきゅっ！？」

押しつぶされたアリアは可愛い声を上げる。しかしすぐさまネギの下から這い出ると、木乃香の方を見て言った。

「ネギは滅茶苦茶だから、これからは普通の稽古だけにしてちょうだい。最後のアレ、ゴキブリ以上に気持ち悪かったから」

「う…うん。ウチも反省しとる」

間近で見ていた自分が一番気持ちが悪かった。小さい子が見たらトラウマになるだろう。人間に戻すハズが、真逆の方向に進化させてしまったようだ。

「まぁ、強くなった事には変わりないから木乃香さんは悪くないわ。

悪いのは、いつも想像の斜め上を行くネギだから」

「……。」

どう言っていいのか言葉につまる木乃香。

こうして、ネギと木乃香の手合わせはネギの驚異的な進化を促して一旦終了となった。戦った木乃香だけでなく、見ていた人間にまで疲労感を植え付けさせて…

さて、その頃広場の反対側では、こちらも地味に熾烈な戦いが繰り広げられていた。

「ほらほら、ちゃんと避けないとあの下着つけて店に出てもらうヨ？」

「イヤある！　肝心な場所が開く下着とか意味分からないアル！」

「にょほほほほ、それが大人というモノあるヨ～！」

涙目で必死に逃げるクーと、危ない下着を手に追いかけ回す超。二人の追いかけっこは、気づいたアリアの教育的指導を受けるまで延々と続けられるのだった。

第六十三話　曇り後雨、所により山下

うっそうとした夜の森の中を、男達は歩く。明かりは無く、足元すらおぼつかないハズの闇の中を、まるで歩きなれた道のように何の不自由もなく歩き続けていた。先頭を行くのは、白髪の少年フェイト・アーウェルンクス。その後に、山下・K・ストライフと黒いコートに身を包んだ男が続く。

「フェイト、本当にこの先にゲートがあるのか。人の行き来するような場所じゃねえぞ。もうちょっとマシな行き方あるんじゃねえのかよ」

「うるさいね。君がただの人間だからこんな面倒な事になってるんだろう。文句があるなら影の中に潜って転移してくれ」

「こっちは前金すら半分しか払ってもらってない立場なんだけどなー。何でそんな偉そうなのかなー」

いくら物音たてずに歩こうが、こんな言い合いをしていたら台無しである。後ろを歩いていたコートの紳士が見かねて仲裁に入った。

「まぁまぁ君たち。ここはひとまず私の小粋なジョークでも聞いて落ち着きたまえ」

「「黙れヒゲじじい！」」

「ヒゲ…」

撃沈した。鍔の広い帽子を深く被って、悲しそうにうつむくヒゲ。

そもそも、今回肉体を持つ山下の為にゲートを見つけて来たのはヒゲである。魔法世界から正規のルートで出て行けない山下は、こうした密行ルートを使うしかない。頑張って見つけて来たのにこの扱いである。やるせない。

「しかし、君もおかしな人だね。孤児院をやめたなら、もう彼らの為にお金を稼ぐ必要なんてないだろう？」

フェイトが不思議そうに言う。調べ上げた資料には、山下の個人資産の項目もあった。ほとんどが慈善事業にあてられていたが、それなりの生活費は残してあったのだ。普通の生活をしていれば、しばらく働かなくても平気なくらいはあるハズだが…

「あ？　別にいいだろ、ちょっと派手な暮らしがしたいだけだ。女をはべらせて高い酒頼みまくって、おねーちゃん今晩五枚でどないや、とか言いたいわけ」

少し楽しそうに答える。最低だ。

「…？？？」

益々理解出来ずに困惑するフェイト。分からないと言うと、山下は「分かる必要はない」とだけ答えて憮然とした表情に戻った。確かに、こんな事に詳しいフェイトというのはおかしすぎる。

「さあ、お二人とも話はそれくらいにしてもらおう。ゲートはすぐそこだ」

山下が、女を両脇に抱えて高笑いするフェイトを想像して微妙な顔をしていると、不意にヒゲが声をかけてきた。それまで狭苦しい木々の間を縫って歩いて来た三人の目の前に、突然ぽっかりと開け

た場所が現れる。大きな石を積み重ねて出来たモニュメントのような物がその中央にあり、手前には石版が置かれていた。

「これまた…アナクロな装置だな。デケェ漬け物石かと思ったぜ」

「いっぺん君の脳みそを漬けてやりたいよ。この全てが純度の高い魔鉱石なんだ。手付かずで放置されてるのは奇跡に近い」

結局また言い合いを始める二人。ヒゲはもう諦めて石版の操作を始めた。指先で表面の文字をなぞると、装置は淡い光を放ち始めた。ゲートはまだちゃんと使えるようだ。ヒゲは次に座標設定を目的地である麻帆良の森に設定する。

「ふむ…麻帆良学園か。ん？　時刻設定？　速達？　なんの事だ…」

石版に浮かび上がる文字には、『郵送方法を指定してください』とあった。ヒゲは適当に速達を選ぶ。時刻も適当だ。設定し終えると装置の中心が光りはじめた。

「フェイト君、ゲートを起動させたから彼を装置の真ん中に立たせてくれたまえ」

「わかった」

頷くと、フェイトは力いっぱい山下を蹴り飛ばした。

ドカッ！

「いってぇ！　何しやがる！」

装置の真ん中に蹴り飛ばされた山下は抗議しようと起き上がろうとする。が、中途半端な体勢で動きが止まった。

「な、なんだ!?　動けねえぞ!」

金縛りにあったかのように、身動きがとれなかった。光が中腰の山下を包み、少しずつ浮き始める。そして…上空へ勢い良く飛ばされた!

バヒュウウウウンッ!

「うわあぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

それはまるでミサイル。物騒な速達である。フェイトとヒゲは唖然としながらそれを見送る。しばらくたってから、二人は顔を見合わせた。

「ヘルマン、僕らは普通に行こう」

「勿論。こんなよく分からない物を使うなんて、彼も勇気がある事だ」

酷い事を言いながら、ヘルマンと呼ばれたヒゲは微笑んだ。自分がこのゲートを使おうと提案した事は完全に忘れているらしい。

二人は頷きあってから、暗闇の中に溶けていった。

修学旅行明けの休みを終え、ネギたちはまたいつもの生活に戻っていた。

京都から帰ってきてから、体感時間では二週間ほど修行の日々を送ったが、外の時間はたったの一日しかたっていない。非常に便利だと皆は喜んでいたが、エヴァンジェリンの一言がグサリと胸に突き刺さった。

「あんまり使うと、老けるぞ。だいぶ前にタカミチを別荘で鍛えてやったが、結果、あの老け顔だ。あれでまだ○○歳なんだから、女のお前らや育ち盛りのネギにはもっと大きな影響を与えるだろう」

その言葉の威力は絶大だった。青ざめた皆は、別荘を使う時間を制限する事に決めた。強くなりたいけど、老けるのはイヤ。そんな価値観で修行時間を減らす事を躊躇わない所は、女子学生らしい所と言える。ネギは毎日通いたがっていたが、アリアに怒られた。教師の仕事だってやらなきゃならないのだ。

結局、休日前の放課後から別荘で一週間分の時間を修行に使う事で話は落ち着いた。土曜日が休みなら、金曜日の放課後に七時間別荘で過ごす、という風に。あまり寮を抜け出すのも、良くないからだ。寮母や学園にはアリアの方から課外活動という形で報告し、門限等で融通してもらう事には成功していたが。

端から見れば週一回のお泊まり会。それを不審に思う人間は、魔法関係者以外にはいなかった。

【芦優太郎】

昨日は酷い目にあった。

ホテルで優雅にディナーを楽しもうとしたら超鈴音たちまで一緒となり、本当に料理の抜き打ちテストとなってしまったのだ。美味い美味いと勢い良く食べるのは構わないのだが、ブランデーケーキごときで酔っ払い、陽気に笑い出した時はゾッとしたものだ。全く、気苦労はふえるばかりだな。

その後超たちを見送ってからは京都に居る木乃葉と月詠を念話などで満足させてから就寝。疲れたので良く眠れたが、何故か朝5時に今まで連絡のとれなかった石田からとんでもないモーニングコールが。

（マスター、すみません。アリア先生とエヴァンジェリンさんに正体がバレました）

朝から泣かせてくれる。まぁ私もアリア先生にはだいぶ素性を悟られているから怒るに怒れないが…。エヴァンジェリンに知られたのは厄介かもしれない。あの手のタイプは弱みを握ると無茶な要求をしかねないからな。

詳しく話を聞くとアリア先生を救う為に仮契約をして、出たカードのせいでバレたそうだ。それなら仕方ない。二人とも他言しないと誓ってくれたから安心していいと言ってるが…。誓ったのは神に対してだろうか悪魔に対してだろうか。今度会ったら直接聞いてみよう。

朝、そんな事を考えながらホテルの朝食を食べて、それから社宅へと転移して盗聴器を探す。今日は三つ。瀬流彦君も好きでこんな事をしてるのではないだろうから可哀想だとは思うが、こうも続くとこちらもイライラしてくる。学園長に苦情を言っておくか。そもそも、これは本当に学園長の指示なのか。少し調べてみる必要がありそうだ。

社宅から学園へ向かう道を歩きながら、私は考えを巡らせていた。何にせよ、今日からはまた学園での教師生活に戻る。本業を疎かにしないように気をつけねばならない。手始めに、今夜あたり瀬流彦君を尋問してみるか…。こうした事は早めに処理しておくに限るからな。

京都での騒動が嘘のように、３－Ａの生徒達はいつもの学園生活に戻っていた。明るく騒がしく、無駄に高いテンションで周囲を引っ掻き回しかねないパワーは相変わらずだ。ただ、一つだけ大きく変わった事がある。それは…

「はい！　皆さん静かにしないと抜き打ち小テストしますよ！」

ネギだ。修学旅行前は一緒になって騒いでいたが、今では強い意

志でそれを諫めるようになっていた。

「えー、横暴だよー！」

「ネギ君ひどーい！」

生徒の中には反発する者もいるが、そこはアリアがフォローする。

「いいですか。前回のテストで学年トップに立ったこのクラスは、今や学年で一番注目を集めているクラスです。もし今いつもの調子で騒いで他のクラスに迷惑かけたら、以前より風当たりはキツいんですからね。ほどほどにしておかないと、本当に嫌われますよ」

「楽しく勉強するのはいい事ですけど、騒いだり遊んだりするのは休み時間にしましょう。こんな事言ってる僕も遊びたくて仕方ないんですが、我慢してるんです。１０歳の僕らが我慢出来るんだから、お姉さんの皆さんも大丈夫ですよね？」

そう言われると、黙るしかない。嫌われる、というのはこの年頃の子供には本当に大変な事なのだ。それに、年下よりガキっぽいとは思われたくない。ネギとアリアは、高畑とは違った形でクラスをコントロールしていた。それを、超鈴音は優しく見守っている。

（サポートが優秀だと、こうまで先生らしくなるものカ。私の知ってるネギ坊主より、よほど言葉の選び方が上手いヨ。大人だネ）

なんだか頼もしく、立派に先生に見えた。これなら、この世界が救われた後…未来を託すのに躊躇する事もないだろう。何より、不思議と皆を惹きつけるオーラを放っていた。前の世界以上に…。

（超さん、惚れましたか？）

（ブッ…！？　る、留美！　いきなり念話通して何言うカ！）

石田がほくそ笑みながら超を見ている。悪戯好きは相変わらずだ。

（ネギ坊主は私の先祖ネ！　冗談にしてもおぞましいヨ！）

（そうですか？　茶々丸さん主催の秘蔵映像鑑賞会の時の超さんは、ネギ先生の裸体に釘付けだったような…）

（わ、忘れるネ、それは！）

音を立てていないとは言え、やってる事は３－Ａの生徒らしい無駄話。超も石田も、立派にこのクラスの一員だった。

その日の午後。

いつも通り授業が終わり、皆が部活に行ったり帰宅し始める中。

一人の女子生徒が教室の窓から外を眺めていた。

「あれ、ちづ姉どうしたの？」

「…え？　ああ、夏美。何でもないの。ただ、ちょっと雲がたくさんだから雨が降るかなって」

声をかけたのは、そばかすが可愛らしい子犬なような少女、村上

夏美。答えたのは大人びた雰囲気と泣き黒子が印象的な那波千鶴だ。二人は寮でのルームメイトであり、仲が良い。

「あ、そっか。ちづ姉天文部だもんね。今日はまた屋内活動なの？」

「ううん、今日は休みだって連絡があったわ。お夕飯の買い物して帰るから、食べたい物あったら聞かせて」

「うーん…、ハンバーグ！」

村上が元気良く言うと、那波はニコニコと笑って頷いた。

「じゃあ、楽しみにしててね。部活、頑張って」

「うん！　行ってきまーす！」

パタパタと駆けて行く村上。それを見ていたクラスの生徒たちは、まるで親子だなと思う。勿論、口には出さないで。那波が怒るからだ。

村上を見送った那波は、校舎を出てスーパーへと向かった。ハンバーグの材料と、牛乳や卵といったよく使う食料をまとめて買った。今日は部活も保育園の手伝いも無いので久しぶりに時間をかけて買い物が出来た。

その帰り、那波は買い物袋を手に、どんよりした空を見上げてため息をついた。

あの日も…こんな、今にも泣きそうな空だった。

小学生の頃、年上の男たちに乱暴されそうになった時…まるで、出来すぎたヒーロー物のテレビ番組のように、さっそうと現れて助けてくれた同級生。そして、その同級生にありがとうと言えずに「やりすぎだ」と怒ってしまった事…。同級生はその日の嵐の夜に、忽然と姿を消してしまい、行方不明となった。捜索活動は行われたが、見つからず…死亡扱いとなっている。

何よりも後悔。

ちゃんと「ありがとう」と伝えられたら、彼も消える事はなかったのではないか。

もしあの頃に戻れたら…。そんな事を、この空を見ていると思ってしまう。

ポツ…　ポツ…

頬に当たる水滴に、那波は我に返った。ああいけない、降ってきた。鞄から折り畳みの傘を取り出して開いた時…どこかで、誰かの叫ぶ声を聞いた。それは、なんだか頭の上から聞こえて来る。

「ぅぉぁあああっ！　焼ける燃える焦げる落ちる多分死ねるぅぅぅうううっ！？」

見上げると、流れ星のように火の玉がこちらに向かって落ちて来る。唖然としている那波の手間数十メートルほどの地面に向かって、火の玉は猛スピードで突っ込んで来た。そして…

ドガアァァァァンッ！

「きゃあぁぁぁぁっ！？」

地面に激突した。

爆風に煽られて、那波は尻餅をつく。隕石が落ちて来たのだろうか。いや、声が聞こえてたから人？　まさか…

もうもうと立ち込める煙。

那波は、口元を抑えて恐る恐る衝突した場所へと近づく。小さくクレーターのようになっている道路の真ん中に、何やら人らしき影が。

煙が晴れて、視界が回復するとそこには…

あの日消えてしまった少年によく似た、一人の男が倒れていた。

第六十四話　記憶喪失の男

那波千鶴は焦っていた。

目の前の男は、空から降ってきた。それだけではなく、背中に大きな剣を背負っている。堅気の人間でないのは一目瞭然だ。

本来なら、然るべき場所へ通報すべき。だが、その男の顔を見た那波は愕然とした。

「山下…君？」

小さい頃…誰よりも勝ち気で暴れん坊だった同級生。自分を助けて、傷ついて、消えてしまった少年がそのまま大人になったかのような外見だったのだ。

「ど…どうしたらいいのかしら」

道路にはクレーター。そろそろ野次馬が来る頃だ。今見つかったら、絶対に彼は捕まるだろう。銃刀法違反で…

那波は、何とか山下を担ぎ上げようとする。すると、山下は目蓋をゆっくりと開けた。

「ここ…は…？」

「山下君、大丈夫？　とりあえず今は立って歩いて！」

促されるまま、山下は立ち上がり歩き出す。あまりの衝撃に意識が朦朧とする中、那波に手を引かれその場から離れた。

那波は山下をとりあえず寮まで案内する。が、そこで止まった。何故、ここに連れて来てしまったのだろう。ここには寮母がいる。男子は確実にシャットアウトされるし、尚且つ山下は剣を持った限りなく怪しい人物だ。どうしよう…と、自分の部屋を見上げる。小雨が降る中、自分の部屋の窓は…少し開いていた。

「あら、夏美ったら閉め忘れてるわ」

そんな事をつぶやくと、山下はぼんやりとした口調で聞いた。

「あそこが、あんたの部屋か」

「ええ。けど、ここ女子寮だからあなたを連れて入れないの。何とかかくまってあげたいんだけど…」

その言葉を聞いて、山下は回らない頭で考えた。何だか知らないがこの女は俺を部屋に匿いたいらしい。が、玄関からは入れない。窓は開いている。なら、結論は一つだ。

「なら、あそこから入ろう」

「え、三階よ、あの部屋…きゃっ！？」

山下は返事を待たず、買い物袋を持ったままの那波を片手で抱きかかえると、その場から跳躍をした！　一瞬で三階の高さまで飛び上がり、窓を開けて中へと入る。まるで天狗である。

「これでいいのか？」

「え、ええ…。靴を脱いでもらえたら、完璧だわ」

そう言えばブーツのままだな、と山下は急いで履いてる物を脱ぐ。那波に渡されたビニール袋に入れると、部屋の隅に置いた。そして、先ほどから疑問に思っていた事を口にする。

「なあ…一体ここは何処なんだ？　何であんたは俺を助けたんだよ」

「え…」

少し、驚く那波。私の事、覚えてないのか…と、少し残念に思った。

「ここは、麻帆良よ。あなたが子供の頃住んでた街。私はあなたの同級生の那波千鶴…思い出した？」

山下は首を横に振る。そして次に発した言葉で、那波を完全に固まらせた。

「というか…俺、誰なんだ？　全く思い出せないんだが…」

…。

……。

……記憶喪失？

「あの、何も思い出せないの？」

「ああ…。俺、何であんな所に倒れてたんだ？　それに…これ、剣だろ。明らかに持ってちゃいけない物じゃねーか。何でこんなん持ってるんだ？」

それはこっちが聞きたい。

那波はくらくらと眩暈を起こして倒れそうになるのを必死でこらえながら、何とか口を開いた。

「分かったわ…それじゃ、今は落ち着くまでここで休んでいて。私はとりあえず、夕飯の準備をするから」

言いながら、さて同居人の夏美とあやかにどう説明しようかしら、と那波は頭を抱えるのだった。

雪広あやかにとって久しぶりの学校は、苦行以外の何物でもなかった。何故なら、明日菜をはじめとした修行組の中で体力の無い方に入るのに、ネギと同じメニューに取り組んでいたのだ。身体中の筋肉は痛みに悲鳴を上げていた。

文珠による回復は、筋肉の成長を止めて以前の肉体に戻してしまう為、使えない。これはアリアがまだ文珠を使いこなせないからだが、あやか自身もせっかく鍛えたのにそれが無駄になってしまうのは嫌だったので筋肉痛に耐えるしかなかった。

「湿布を貼らないのは…乙女としての最後のプライドです！」

そんな事を言いながら登校したは良いものの、騒がしい教室をネギやアリアと共にまとめるのは骨が折れた。心配する明日菜には強がってみせたが、双子に体当たりをかまされたりした時などはマジ泣きしかけていた。

しかし今は既に学校も終わり、その苦しみから解放されている。早く部屋に戻ってリラックスしたい。お風呂に入って入念にマッサージしなくては、と思って部屋のドアノブに手をかけた。すると…

ガチャッ

ドガッ！

「あ痛っ！？」

突然ドアが開いてあやかの額にヒットする。何事かと思って見ると、そこには…

女子寮には居るはずの無い、男の姿。あやかは思わず固まったが、直ぐに変質者と断定して大声を上げようとして…

「そこまでよ、あやか」

「むにゅっ！？」

男の後ろから伸びてきた手に口を塞がれた。手の主である那波は、あやかを部屋に引き込むとすぐさまドアを閉める。

「こら、ここは女子寮だって言ったでしょう？　不用意に出ようとしないの」

「わ、悪い…。なんか気配したから確かめたくて…」

恐ろしい力で口を塞がれているあやかは、身動き一つ取れずに二人の会話を聞いていた。そして、驚愕する。何なんだ、この和気あいあいとした雰囲気は！　まさか、那波ともあろう人が男を連れ込んで不純異性交友！？　混乱するあやかに、那波はニコニコと笑いながら言った。

「ねえあやか。騒いだりしないでちゃんと話を聞いてくれるなら、手を話して説明するわ。それが出来ないなら…」　キュピーンッ！

那波の目が光る！　身体をガタガタと震わせて、あやかは何度も頷いた。怖い。鍛えて強くなったはずなのに、那波にだけは逆らえなかった。

そして、間が悪い事に。

ガチャッ

「たっだいまー…って、うわぁっ！？」

夏美が帰って来た。那波が山下に目配せすると、山下は夏美の口を封じて拘束した。…山下も、逆らうのが怖かったのだ。

結局、あやかと夏美は那波による「お願い」という名の脅しによって、他言しない事を誓わされるのだった。

食卓には、四人分の食事が並んでいる。普段と違って、男が一人居るという事で並んだ料理の量はかなり多かった。テーブルについて「いただきます」と言うと、山下は勢い良く食べ始める。それを、那波は楽しそうに眺めている。夏美とあやかは、男性と同席という事で緊張していた。

「う…美味い！　俺、覚えてねえけど多分こんなに美味いもん初めて食ったと思う！」

「おおげさよ。スーパーに売ってる物で普通に作っただけだもの」

褒められて満更ではないのか、那波はとても嬉しそうだ。とりあえず那波の機嫌がいいので夏美とあやかはホッとする。

「でも…こんな形でかつてのクラスメートと再開するとは思いませんでしたわ」

那波は、二人に山下の事を説明していた。勿論、作り話だが…あやかは那波と一緒の学校だったので彼の事を知っている。行方不明になって、当時はあやかもショックを受けていた。

那波は、山下を嵐の夜に家出して災害に巻き込まれ、記憶喪失になったと説明していた。遠くで別の生活をしていたが、最近蘇ってきた記憶を辿っていたら麻帆良にたどり着いた、という物語だ。実際山下の両親はあの後麻帆良を離れて余所で暮らしている。すぐには確認がとれない嘘だから、しばらくはごまかせられる。

「俺、ここでどんな暮らしをしてたんだ？　二人がクラスメートなら、楽しそうだけど」

山下の言葉に、二人は困った顔をする。言えないだろう、この近辺では有名な不良だったとは。夏美は中学から麻帆良に来たので山下の事は知らなかった。

「そうですね…。元気な方でしたわ。残念ながら、あなたは男子とばかり遊んでたので私たちとはあまりお話出来ませんでしたけど」

あやかは、山下を傷つけないように言葉を選んで言った。嘘はついていない。男子とかなり荒々しくあそんでいて、女子は声をかけられなかった。あやかは当時から委員長をしていたので時折注意していたが、山下は自分から騒ぎを起こすタイプではないのでそんなにキツい言い方はしていない。せいぜい、暴れるなら余所でやれ、と言ったくらいだ。

「そうか…。勿体無いな、こんなにいい人たちなのに」

山下は、素直な気持ちを口にした。その、どこか子供っぽさの残る笑顔で。

！！

三人の胸が、激しく鼓動する。ヤバい、これは反則だ。心の奥底をダイレクトに震わせられた。

「で、でも今こうしてお話ししてるわ」

「そうだな。皆との思い出が無いのは寂しいけど…今からまた作っていけばいいんだもんな」

そう言って笑う山下の顔は、あの戦いの日々を走り抜けた戦士の物ではなかった。年相応の、少年の顔だ。那波は、記憶が戻らないならそれでもいいのではないかと思い始めていた。

ここからやり直せるなら…。

そんな事を考えてしまう自分が嫌になっていたが、それが本音だ。

四人での夕食は、和やかに進んだ。山下は確かに怪しかったが、那波の前の彼はとても悪人には見えない。夏美は「何で小学校から一緒じゃなかったのー！」と悔やんですらいた。そんな中…あやかだけは山下に対して警戒心を緩めてはいなかった。

男性に対して壁を作りがちな自分を、一瞬でも魅了し胸をときめかせた。壁に立てかけてあった布に巻かれた板のような物からは、微かに魔力がにじみ出ている。何より…青い瞳に漲る魔力は隠しようがない。

魔法関係者。

それも、魅了の魔眼を持った危険極まりない魔法使いだ。

山下である事は確かだが、記憶喪失は本当かどうか分からない。ここはエヴァンジェリンに報告した方が良いのではないか。そう思ったあやかは、山下に声をかけた。

「ところで山下君は今晩どうなさるんですか？」

それは、当然の疑問である。
「あやか…今日だけ、泊めて上げられないかしら」
「それは無理ですよ。この時間に寮母さんに黙って寮に上げているだけでも大問題なのですから」
困った顔をする那波。自分が無茶を言ってるのは分かっている。しかし、山下を見捨てるなんて出来なかった。
「あの…俺の事なら心配しないでいいよ。どうにかして帰るし…」
それもダメなのだ。あやかは山下を自由にするつもりは無かった。もし敵なら、手元に置いて監視しておきたい。そこで、あやかは一つ提案をした。
「エヴァンジェリンさんに頼みましょう。彼女は学園長と親しいですし、大きな自宅に住んでますから。部屋を借りるくらいは出来ると思います」
「エヴァンジェリンさん、が…？」
那波は突然出てきた名前に驚いた。クラスでは孤立していて、誰ともまともに話そうとしないクラスメート。最近、石田や超と話す所は見ていたが…いつの間に仲良くなったのだろう。
「頼んで、大丈夫なのかしら」
「今、確認をとってみますわ」
そう言ってあやかは携帯電話をかける。あやかが電話で説明して

いる間、那波は山下に優しく声をかけていた。

「記憶が無くて不安かもしれないけど、大丈夫よ。この学園はいい人ばかりだから、あなたを傷つける人なんて居ないわ」

「そうですよ！　特にルックスのいい人は寮の皆が放っておかな…ゲフンゲフン！」

那波に睨まれ咳き込む夏美。下手にライバル増やすような真似をしたら殺される！

それを見ながら…山下は、プッと吹き出した。

自分が何者なのかは分からない。分からないのは不安だが、こんな楽しい奴らに囲まれてたらそんな不安も吹き飛んでしまうな…そんな事を考えていた。

そして。

「了解を得ましたわ。山下君、今日はエヴァンジェリンさんの家に泊めてもらいましょう」

あやかの言葉に、山下は安心したような顔で頷いた。

麻帆良学園の上空を、二人の影が飛んでいる。白髪の少年フェイトと、ヒゲじじいヘルマンだ。二人は地表を眺めては首をひねっていた。

「ヘルマン、操作を間違えたなんて事はないのかい？　速達なら、もうついていてもいいハズだが」

「ううむ…そもそもが人を運ぶ物ではなかったのかも知れない…。いや、魔力の残滓は感じたからついてはいると思うのだが…」

山下の姿が見えない。

やっちまったかな、とヘルマンは焦っていた。

「別に死んだなら死んだでいいんだけどね。契約金の支払いしなくて良くなるから、デュナミスには朗報だろう」

「やれやれ、世知辛いものだ。まぁもっとも、敵に回りさえしなければ、何処で何をしていようが私も構わないが」

そんな事を言いながら、二人は地上を見て回っていたが、フェイトはその作業に飽きたのかヘルマンの方を向いて言った。

「僕は、僕の仕事に戻るよ。君は君のやり方で彼を見つけて適当に遊んでいてくれ」

「…君も、ネギ少年を殺したがっていると聞いたが…」

ピクッと、こめかみが動く。

「まぁね。けど、今回は別に目的があるから。個人的な目的が、ね。君はデュナミスの期待通りネギと遊んでいればいい」

そう言うと、フェイトは世界樹の方を向き…

「じゃあ、頼んだよヘルマン。せいぜい派手に立ち回って、目くらましになってくれ」

勢い良く飛び去って行った。

残されたヘルマンは、そんなフェイトを見送りながらため息をつく。

「全く、彼も好き勝手言ってくれる。誰か礼儀を教えてやった方がいいんじゃないか…。まぁこっちも、やりたいようにやらせてもらおう。悪魔らしいやり方でね…」

そうほくそ笑むヘルマン。

懐から、小さな瓶を取り出して…その蓋を外した。

第六十五話　ＧＯ－ＧＯ－スライム娘

麻帆良から少し離れたとある街の路地裏で、一人の男が倒れている。スーツには吐血した際の大きな赤い染みがついており、もし通行人に目撃されたなら通報間違いなしといった所だ。しかし…

彼が、誰かに見つかる事など無いだろう。

何故なら、目の前の男によって強烈な人払いと認識阻害の結界が張られているからだ。リョウメンスクナの断末魔でさえ隠し通した結界である。男一人くらい、どうとでもなるのだ。

「君は随分間抜けらしい。女の残り香ならともかく、神族の臭いをさせて私の尾行などするのだからな。見つけてくれと言っているようなものだぞ」

「うっ…」

悔しそうな顔で相手を睨みつけるのは瀬流彦。立ち上がろうにも、身体中の関節を外され身動きがとれなかった。そして、それをただ冷たい目で見下ろすのは芦優太郎。その瞳は冷酷な魔神そのものだ。

この日。

仕事を終え久しぶりに隣の街まで飲みに出ようとした芦は下手な尾行を受けて苛立った。以前から執拗にマークされていたが、今日はやたらとしつこい。社宅に一旦帰宅した際にもまた盗聴器を撤去したし、これは一度お灸を据えてやろうか。そう思って瀬流彦を路地裏に誘い出し捕まえたのだが…

神族の気配を察知して、少しエキサイトしてしまった。

それまでのストレスもあって、結構拷問チックに痛めつけてしまったのだ。

「瀬流彦君。君が何故私をつけ回すのか理由を知りたいのだが、教えてくれるかね」

「……」

瀬流彦はただ睨みつけるだけだ。それが、彼に出来る唯一の抵抗だった。

「そうか。…なら、直接記憶を貰おうか」

芦はため息をついてから、ゆっくりと瀬流彦に歩み寄る。なんとか逃げようとする瀬流彦。それはまるで芋虫のようだった。身をくねらせ、補食されるのを待つだけの悲しい存在。そんな瀬流彦の頭を鷲掴みにすると、芦はもう片方の手の指先を瀬流彦の額に沿わせ…

ズブッと突き刺した。

「う、うわあぁぁぁぁっ!?」

「あまり動かない方がいいぞ。脳というのはデリケートな器官なんだ。前頭葉をソテーにされた人物の出る小説を読んだ事があるかね？　なかなかに楽しい事になるようだぞ」

外傷はつけないように半分霊体にして突き刺しているのだが、瀬

流彦には良い脅しになったようだ。震えながらも、必死に身体を動かさないようにしていた。

「いいだろう。ふむ…ふむふむ…。なるほど」

指先から得られる情報には、瀬流彦に指示をした人物と瀬流彦の心情、そして残り香の元になった神族の情報があった。その神族は、意外な形で瀬流彦に接触をとっていたようだ。

「なかなかにあの女も女狐なようだ。いや…女郎蜘蛛か。瀬流彦君は彼女に色香にやられたという所かな？　いや、違うな…復讐、か。子供相手に復讐とは、情けない男だ」

「くっ…あなたのような悪魔には分からないだろう！　真面目にやってきて、マニュアル通りに対応しただけなのに犯罪者扱いされて！　普通に暮らしたかっただけなのに厄介事に巻き込まれるようにもなった！　それというのも全部…」

「石田留美…我が分身であり娘イシュタルのせいであると言いたいのか」

瀬流彦は答えない。沈黙で、肯定した。

「魔法使いのルールやマニュアルなど、この世界において何の価値も持たないのだがな。貴様がやったのは女子生徒を追いかけまわし怪我をさせた事…問題になるのは当たり前だろう」

瀬流彦の額から指を抜き取る。もう、この小者からはこれ以上有益な情報は得られないだろう。そう思って、芦は瀬流彦を解放した。勿論、関節をワザと痛むようにはめ直してから。

「君には選択肢が二つある。一つはこのまま私の敵として散る。もう一つは私に従う事だ。従うならば命の保証と、今後安全な生活を送る事が出来るよう手を貸してやろう」

「あ…安全？」

「そうだ。君の願望は見せてもらったからな。安定した生活、綺麗で優しい恋人、平穏無事な日常を送りたいと思っていただろう。リスクを負って神楽坂明日菜や私たちの身辺調査などしたくないだろうし、高畑のような物騒な人間に使われるのも勘弁してほしい…そう思っているのではないかね？」

否定など出来るわけない。自分の事は、全て知られてしまったのだ。瀬流彦は、ただ頷くより他なかった。もう、これ以上学園長や高畑、そして…あの女の言いなりにはなりたくはない。

「…こんな生活から解放してくれるなら、なんだっていい。犯罪者と陰口を叩かれ、さげずまれるのはもう沢山だ」

芦は、笑った。

悪魔の笑みだ。

「よかろう。なら、ここに契約を結ぶのだ。いでよ、ミトラ」

芦がそう言うと、足元に大きな魔方陣があらわれる。その中央から、ニョキニョキと何かが生えてきた。いや、これは悪魔を呼び出したのだ。獅子の頭を持ち、背中に禍々しい黒い翼を広げたゾロアスター教の魔神、契約神ミトラである。

「ミトラだよー」

凄くフランクである。

「ミトラ、ここにこの男に絶対服従を誓わせる契約書がある。今からこの男に書かせるから、契約を履行してもらいたい」

「うーん、分かったー。おにーさん、ペン持ってるー？」

「え？　ああ、サインペンならあるけど…」

戸惑いながらペンを取り出す瀬流彦。それを見たミトラは、親指を立ててサムズアップをした。

「いいね、いいね。じゃあ早く書いちゃいなYO」

「あ、うん…」

その緊張感の無いノリに戸惑いながらも、瀬流彦は手渡された紙にサインをする。自分の人生を決めてしまう契約なのだが、脱力した瀬流彦は流されるままサインをしていた。事の重大さに気づいたのはサインを終えた後だったが、どの道サインをしなければ殺されるだろう。そう思って、諦めた。

「はい、確かにー。これで君はこの人に絶対服従だからねー。拒絶しようとしたらペナルティーあるから注意するんだよー」

契約書を受け取ったミトラは、楽しそうにそう言うと魔方陣の中へと消えていった。残されたの瀬流彦はただただ呆然とするばかり

だ。

悪魔と契約を交わしてしまった。

それも、絶対服従。

一体何をされるのかと不安になる瀬流彦。殺された方がマシだったかもしれないと後悔していた。

「さて…これで君は私に絶対服従となったかわりに庇護対象となった。平穏で安定した生活、誰からもさげずまれない、幸せな日々を送らせてあげようではないか」

瀬流彦にそう言う芦だが、目は笑っていた。これは、何か企んでいる！　瀬流彦は身構えた。そして案の定、芦は瀬流彦に向かって何かを仕掛けてきた。

「もっとも、姿は変わるがな」

「え…ぅわあぁぁぁぁぁぁっ！？」

芦から放たれる魔力の光を全身に受け、瀬流彦は絶叫した。身体を焼き尽くすような強烈な熱さを感じたのだ。それは五秒ほどではあったが、心が折れそうな程キツいものであった。

焼けるような熱さを全身に感じ苦しみ悶える瀬流彦。意識を失いかける程の激痛に耐えきった彼は、その姿を以前とは全く違うものに変えていた。

それは、可愛らしい小動物。

一匹のオコジョがそこにいた。

宮崎のどかは大変困っている。

それは親友に黙って魔法の修行を行い既に使えるようになっている事がバレた事が理由ではない。ネギとキスをして手に入れたアーティファクトを見られた事でもない。

その理由は、魔法発動体としてエヴァンジェリンから貰った、ネギとお揃いの指輪を見られたからだった。

風呂に入ろうとした時に、首から紐にかけていたのを騒がしい連中に見られてしまったのだ。

「あー、本屋ちゃんそれ何ー？」

「お、すっげ！　指輪じゃん！　あたしにも見せて」

それからは案の定指輪追走劇が開始される。双子や明石、早乙女らによって指輪は次々にパスされのどかから離れて行く。

「あ、あうーっ！　返して下さいー！」

「ハルナ、やめるです！　本当に嫌がる事をするのはただのイジメ

です！」

半泣きののどかと、怒る綾瀬。流石に早乙女は多少悪いかと思って動きを止めるが、他の連中は面白がって指輪を返そうとしない。

そんな騒ぎを、物陰からこっそり覗き見る者たちがいた。

「…リストにあった関係者ですネ。宮崎のどか…京都でターゲットのパートナーとなっていると報告を受けてマス」

「あの指輪の持ち主なら魔法使いダナ。どさくさに紛れてさらっちまうカ」

「…水の中から行ク」

小さい、人形のような少女たち。身体は半透明で、一目で人間ではないと分かる。彼女たちはヘルマンの使い魔、スライムであった。

ターゲットであるネギ・スプリングフィールドをおびき出す人質を集める為、ネギのクラスの魔法関係者を調べていたのだ。三人は、まずはのどかに狙いを定めていた。

指輪追走劇は、いつしか争奪戦の様相を呈していた。最初はふざけていた早乙女ものどかの泣き顔を見て悪いと思い、追う側へと回る。半ば意地になってるのは双子や明石だった。

その騒動が３０分ほど続いた頃。

後から入ってきた長身のクラスメート、大河内アキラの手によって騒動は鎮圧された。

魔法関係者でも無いのに、途中からふざけて参加した春日美空の瞬足に追いついたり、なんとなく参加したザジ・レイニーデイの動きを読んで先回りしたり…結局、ものの数分で指輪を取り戻してしまった。

「はい、宮崎さん。大切な物なら部屋の机にしまっておいた方がいいよ。それが貴金属なら、なおさら」

「あ、ありがとうですー…」

のどかに指輪を渡して、微笑むアキラ。周囲の人間はその圧倒的な身体能力に驚きを隠せないでいた。まぁもっとも、中には「ちぇっ、もうちょっと楽しみたかったなー」という者もいたが。

のどかは指輪をすぐさま指にはめて、取られないようにする。騒動はこれで終わり…そう思っていたのだが。

どうも、新しい騒ぎが起きていたらしい。

湯船に浸かっていた数人の生徒から、悲鳴が聞こえてきたのだ。いや、悲鳴というには若干妖しい響きがある。やや艶めかしい声すら聞こえていた。

「や、シャレなんねえって！　んぁっ！？」

「や、これヤバい！　クセになりそう！」

「うわっ、ぬるぬるが、ぬるぬるが中に!?」

それは初め浴槽の一角で起きていたが、段々と広がりのどかと綾瀬のいる方向へと近づいてきた。身の危険を感じるのどか。綾瀬は若干別の意味で危険を感じていた。

「のどか、上がりましょう。ここは明日菜さんのような同性愛者の坩堝のようです」

「ゆえゆえ、それは違うと思うけど…でも、のぼせちゃうからもう上がろうかな」

二人は、騒動に巻き込まれないように脱衣場へと移動して行った。

脱衣場に出て身体を拭いている時。のどかは不意に誰かの視線を感じて振り返った。いつもなら気のせいで済ます所だが、魔力を多少扱えるようになったのどかはこの視線が気のせい等ではないと確信していた。

「ゆえゆえ…気をつけて」

「え？　何を気をつけるですか？」

呑気に髪の毛を拭きながら尋ねる。しかし次の瞬間、その呑気な顔が驚愕に固まる。のどかの後ろに、水の壁のような物があらわれ、

今にものどかを飲み込もうとしていたのだ。

「のどか、あぶな…！？」

「えっ！？」

遅かった。水の壁は更に広がり、二人を包むように覆い被さってくる。のどかは瞬時にそれを敵だと判断し、エヴァンジェリンに習った魔法を発動させる。…ちょっと、照れながら。

「好き好き大好きネギせんせー！」

「なんですかいきなり！？」

それはのどかのコモンスペル。ネギやエヴァンジェリンのように語呂のいい発動呪文はないものかと悩んでいる時に、冗談でエヴァンジェリンが提案したものだった。のどかは顔を真っ赤にしながら「それにしますー…」と言ってエヴァンジェリンを驚かせていたが…綾瀬も思いっきり驚いたようだ。

そして、更に驚く事に…

のどかの手から放たれた小さな吹雪は、小さいながらそれなりに強力だったらしく水の壁をコンマ何秒かで完全に凍りつかせていた。

「の、のどか、これは…」

「エヴァンジェリンさんに教えて貰ったのー…。これで、やっつけたのかな…？」

二人を包み込む寸前で固まった水の壁…今は氷の壁は、綾瀬が試しに叩いてみると簡単に割れて崩れ落ちた。これは…やっつけたのだろう。もしかしたら溶けたら復活するかもしれない。どうしようかと二人は悩み…

トイレに流す事にした。

幸い、薄く伸びた所を凍らせたので簡単に細かく砕く事が出来たのだ。二人はトイレから出てくると、晴れ晴れとした表情をしていた。麻帆良を襲う化け物を、自分たちで退治した。それが、ちょっと嬉しかったのだ。

「ゆえゆえ、私これからネギせんせーに連絡するね」

「はい、のどか。私たちの勝利と伝えて下さい。…ああ、そう言えばのどか、ちょっと待つです」

「え？　何ー？」

「のどか、気を悪くしたら申し訳ないのですが、あの呪文は止めた方が良いと思うのです」

その言葉に、少なからぬショックを受けるのどか。ゆえゆえなら…ゆえゆえなら分かってくれると思ったのに！　そんな思いが、顔に出る。半泣きだ。

「落ち着いて考えるです、のどか。もしあのセリフをネギ先生に言ったらどうなるですか」

「え？……あっ」

凍る。

気持ちを伝えた途端に…

「そうだね…別の、考えてみる…。ありがとう、ゆえゆえ」

「分かってもらえて、良かったです」

そう言って、胸を撫で下ろす綾瀬。良かった、これで友人を殺人犯にしないで済む。

小走りで駆けて行くのどかを見送りながら、綾瀬は安堵の溜め息をつくのだった。

スライム娘三姉妹のうち、比較的寡黙な少女は焦っていた。

やられた。

資料には魔法が使えない一般人とあった。だからあの指輪を見ても、飾りか、使えても初歩的な魔法だけだろうと踏んでいたのだ。

確かに、使われた魔法は初歩的な氷結魔法。しかし、込められた魔力はかなりのものだった。

風呂場であそんで仕事を忘れたバカはともかく、それなりに実力のある勝ち気なリーダーが凍らされ…トイレに流されてしまったのだ。

「あの氷結魔法は我々にとって脅威デス。ならば、魔法を使えない人間を選ばないと…」

ヘルマンの命令は絶対だ。逆らえば、身体にコーヒーの粉を混ぜられ茶色にされてしまう。トイレよりはマシだが、やはり嫌だった。

「コーヒーは嫌デス…カフェイン中毒にナリマスシ…あっ！」

いた！

ターゲット発見！　廊下を歩いているのは桜咲刹那だ。資料によれば、近衛木乃香に対してはガードが甘くなるという。ならば、得意の変身能力で簡単に捕まえられるだろう。

すぐさま姿を木乃香に変える。そして、さも今見つけたかのように偶然を装って刹那に声をかけた。

「あ、せっちゃんや。せっちゃーん！」

「このちゃん？　わあ、このちゃんやぁ。このちゃーん！」

満面の笑みを浮かべて走り寄る刹那。内心ニヤリとほくそ笑む。その距離が一メートルほどになった所で…

姿を水に変えて、刹那を包み込んだ。

「わあ、このちゃんぷかぷか浮いとるよー？」

楽しそうに笑う刹那。そのまま水の檻の中で亜空間に沈められて

いった。

「ふん、他愛ない。所詮中学生なのデス。これで人質は一人確保出来ました、ヘルマン様に報告しないと」

そう呟いて、スライム娘は満足そうな笑みを浮かべてその場から転移していった。彼女は知らない、先ほど飲み込んだ刹那が、亜空間の中でただの紙切れになっているという事を…

さて、その頃本物の刹那はと言うと。

「このちゃん、こっちの方が似合いますよ」

「えー、こんな透け透けしたん、恥ずかしいわぁ」

寮を抜け出して、街で買い物を楽しんでいた。どんな店なのかは、とりあえず触れないでおこう…

第六十六話　麻帆良の夜

麻帆良女子寮でスライム娘がトイレに流されていた同時刻。森林公園区域の夜道を行く二人の姿があった。布で巻いた大剣を背負った男と、白のフリルブラウスに身を包んだ女の子…山下とあやかである。先頭を行くあやかの後ろを、山下は不安そうな顔でついて歩いていた。

「もう少しでつきますわ」

「あ、ああ…分かった」

なんだか、警戒されてるな…。山下は、あやかの声に固さを感じていた。寮を出た時から、ずっとだ。何か警戒されるような事をしてしまったのだろうか。機嫌を損ねるような事を言ってしまったのだろうか。

しばらく、無言で歩く。

約３０分ほど歩くと、森の中にログハウスのような建物が見えてきた。エヴァンジェリンの家だ。あやかは山下の方を振り返ると、建物を指差して声をかけた。

「あの家が、今晩あなたを泊めて下さるエヴァンジェリンさんの家ですわ。少し気難しい方ですが根は親切で優しい方です。」

「そうか…。案内してくれて、ありがとう。助かったよ」

礼を言う山下。あやかはそんな山下をジッと見つめてから、少し

躊躇しながら口を開いた。

「あの…あなたが何の為に麻帆良に戻って来たのかは聞きませんが…一つだけ、お願いしたい事があります」

「え？…お願い？」

「はい。那波さんを…千鶴さんをもう悲しませないで下さい。あの人は、あなたが失踪してから…あなたの失踪を自分のせいだと思い込んで、しばらく気落ちし続けていたのです。それ以来、千鶴さんは中々本当の気持ちを表に出さなくなりましたわ」

あやかは、そこで一呼吸置くと、少し笑顔になる。

「でも、今日の千鶴さんは久しぶりに素顔を見せてくれました。本当に、心から楽しそうにしてましたわ。…あなたが、私たちの知る山下君なのかは分かりませんが…どうか、千鶴さんを傷つける事だけはしないで下さい」

そう言って、あやかは山下に頭を下げた。その姿に、山下も戸惑ってしまう。戸惑ってしまうが、山下は真面目な顔をしてあやかに言った。

「分かった。俺も、あんなに親切にしてくれた人を裏切るような真似はしたくないしな」

「…その言葉を聞けて、ホッとしましたわ」

今は、これだけで充分だ。あやかは満足した表情で顔を上げた。そしてもう一度山下に頭を下げると、あやかは来た道を戻って行っ

た。山下は、ただそれを呆然と見送る。

あれ…一緒に来てくれないのか？　少し困った顔をする山下。しかし次の瞬間、こちらを警戒するかのような鋭い視線を感じて振り返った。

なるほど、もう案内は必要ない。

どうやらログハウスの住人らしい、背の高い女性がこちらを見つめていたのだ。玄関の手間で、出迎えに出てくれているらしい。非常に美しい女性だ。手にマシンガンさえ持ってなければ、喜んで挨拶をしていた所なのだが。

「あの…連絡行ってると思うんだけど。今夜お世話になる山下…です。銃、下ろしてくんない？」

確か自分の名前は山下と言ったハズだ。この名前で連絡が行ってるハズだが…不安そうに女を見ると、女はしばらく無言で山下を見つめた後、銃口を下げた。

「失礼しました。板を所持していると聞いていたのですが、スキャンした結果剣だと分かったので警戒してしまいました」

「ああ、これなあ…」

どこからどう見ても剣だった。一応、人目についても騒がれないように大きな布…那波の布団のシーツを巻きつけてあるが、見る人が見ればすぐに分かるだろう。

「記憶ないから俺にも分からんのよ。多分、愛用してたと思うんだ

が…。もし気になるなら、渡そうか？　そっちで管理するならそれでもいいし」

山下の言葉に、少し驚く女。　見たところ男の持っている唯一の武器が、その剣なのだ。それを自分から渡すとは…本当に危険は無いのかもしれない。

「分かりました、それではその剣はこちらで預からせていただきましょう」

「ああ。でも、これかなり重いぞ？　一人で持てないだろ」

「お気遣い無用です」

そう言って、女は剣を受け取ると軽々と片手で持ち上げる。呆気にとられる山下に、女はニコリと笑って言った。

「自己紹介が遅れました。私はこの家の主、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルに仕える従者、絡繰茶々丸と申します。宜しくお願いします」

「で？　お前は本当に記憶喪失なのか？」

茶々丸に連れられて家に入ると、金髪幼女は開口一番に山下に尋ねた。あやかの話では、無自覚なのか魔眼を使っていたという。茶々丸の持ってきた剣も魔力を帯びているし、どう見ても関係者。それも、危険な侵入者だ。

「名前だって思い出せないくらい記憶喪失ですよー。この名前だって、那波さんて人がそう呼ぶから名乗ってるだけだし。山下って呼ぶから、山下として振る舞ってただけだ」

いきなり詰問口調で来たので、少し拗ねる。記憶を失っても、こういう所は変わらないらしい。あまりに子供っぽいリアクションに、エヴァンジェリンも呆れた。

「…とりあえず、他に所持品はあるか？　財布や、パスポートがあれば分かりそうだが」

「あっ…！」

そうだ。流され続けて忘れていたが、所持品は剣だけではない。ズボンのポケットに何か入っていたはずだ。山下は急いでポケットに入っているものを取り出す。上着の胸ポケットや、とにかく全て取り出してエヴァンジェリンに渡した。

「お前な…。子供じゃないんだから、まず自分で見てから渡したらどうだ？」

「記憶ねーんだから、見ても分かんねーよ」

こいつは…

頭を抱えながら、それでもエヴァンジェリンは山下の所持品を一

つ一つ調べて行く。そして…眉をひそめた。

財布の中に、魔法世界で使われている紙幣が入っていたのだ。そして、パスポートは無い。この男は魔法世界の住人だ。が、正規ルートで来た人間ではないようだ。これは…ジジイに報告した方がいいか。そう思っていると、茶々丸が茶色い封筒をエヴァンジェリンに手渡した。

「これも所持品ですが、こちらにも紙幣が入っていました」

「ん？　これは…日本の金じゃないか。封筒にも何か書いてあるな」

見ると、しわしわになっている封筒に汚い文字で、『お土産、ぬいぐるみ』と書いてあった。中には…三千円が入っている。三千円。ぬいぐるみ用の代金だとしたら、少ないにも程があるだろう。

「あっ！」

その時、山下が茶封筒に反応した。

「ダメだ、それは！　よく分かんねえけど、それは大事な物だったハズだ！」

慌てて取り上げようとするが、それを茶々丸が羽交い締めして止めた。

「何もしないから安心しろ。…どうも、お前はぬいぐるみを買いに来たらしいな。確かにこの麻帆良には世界最高のぬいぐるみ師がいるが…三千円では買えないぞ？」

エヴァンジェリンがそう言うと…山下は、何とも悲しい顔をした。買えない。それは、何だかとても悲しい事なような気がしたのだ。それを見たエヴァンジェリンと茶々丸は顔を見合わせ、困ったような表情をする。こいつ、本当にぬいぐるみを買いに来ただけなのか？

エヴァンジェリンは、考える。

正規ルートで出国出来ない事、所持金が少ない事…最近円高とは言え、これしか用意出来なかったのは物価を知らないだけでは無いだろう。

もしかしたら、貧しい所の出身なのかもしれない。剣を持っているが、きっと軍人ではなく賞金稼ぎだろう。子供の為に、はるばる麻帆良に来たのだとしたら…。必死で貯金をかき集めて、ぬいぐるみを買いに来たのだとしたら…。

記憶を無くしてなお、ぬいぐるみだけは買おうとしている目の前の男の姿に、エヴァンジェリンは目頭を熱くする。

今、エヴァンジェリンの中では全米が号泣するくらいの感動の物語が繰り広げられていた。

「な、なあ…。どうしちゃったんだ？　なんか泣いてるぞ」

「きっと、今親子が再会している所ですね。パパという言葉に、記憶が戻ったようです」

なんじゃそら。

山下が微妙な顔をしていると、ツカツカとエヴァンジェリンが近づいて来て、ガシッと肩を掴んだ。顔は…涙と鼻水で凄い事になっ

ている。

「うぐっ…お前は、私が何とかしてやる！　グスッ…、だから、臓器なんて売らなくていいんだからな！」

「ちょ、お前の中で俺どうなってんだよ！」

「不覚でした。金融道経由黙示録行きな展開でしたか…」

相変わらず、エヴァンジェリンはぶっ飛んでるらしい。しばらく勝手に盛り上がって、山下を困惑させ続けるのだった。

麻帆良図書館島のある湖に、一人の男と不定形生物が佇んでいる。男は湖面に波紋を立てながらゆっくりと歩くと、苛立ちの混じった声でスライム娘たちに話しかけた。

「それで…捕らえたのは紙切れ一枚と。どう釈明するつもりだね」

「えっと、それは、捕らえた時は確かに人の…」

「言い訳するでない！」

メメタァッ！

得意の悪魔チョップがスライム娘に炸裂する。スライム娘は奇妙

な形に歪んで湖に叩きつけられた。

「ぷぎゅっ…痛いでスる～」

「全く、他の妹たちはどうしたのだ。姿が見えないが」

自分で理由を聞いて言い訳するなと滅茶苦茶を言ったヘルマンだが、スライム娘の抗議の目を無視して言った。涙目で身体を元に戻しながら答えるスライム娘。少し可哀想ではある。

「あめこは排水口に流されて、すらむぃはトイレに流されまシタ」

「…消滅してないだけマシか。二人にはよく身体を洗浄してから帰れと言っておくのだ。そのまま帰ってきても臭いだけだからな」

ヘルマンはため息をついた。使えない奴らだ、と。こうなったら自ら出て行くしかあるまい。

「しかし、あの男から受け取ったレポートは情報が古いらしいな。宮崎のどかが中級レベルの魔法使いになっているとは…。まさか、裏切ったのではあるまいな」

「えっと、セルヒコとかいう男は麻帆良から居なくなってマス」

…またイレギュラーだ。

山下に加え、スパイである瀬流彦も消えた。計画は狂いっぱなしである。

ヘルマンはとりあえず情報収集をするべきだと考えた。仕掛ける

には、まだ早い。まずは、ネギ・スプリングフィールドの関係者の戦力分析をしなくては。

「今日の所は、君はこの湖で眠っていたまえ。要が出来たら呼ぶ」

「はいデス」

出来れば、呼ぶのを忘れてくれないものかと思うスライム娘だった。

さて、そのスパイ瀬流彦はその頃芦優太郎のホテルで優雅な一時を過ごしていた。

小さい身体で得する事…それは、人間にとっては少量の食事で充分楽しめる事だろう。

「だからと言って、食べ過ぎじゃないのかね。思いっきり口の周りが粒だらけではないか」

「モグモグ…一度でいいからキャビアを口いっぱい頬張ってみたかったんです」

ここには、好青年然とした瀬流彦はいない。ただの食欲魔人…いや、魔オコジョだ。先ほどから、チーズやフォアグラ、キャビアを

片っ端から食べ散らかしている。芦は呆れながらワイングラスを傾けていた。

「しかし君も難儀な性分だな。平穏を望みながら、学園長の駒、高畑君の使いパシリに完全なる世界のスパイ…私が拾ってやらなかったら、いい死に方しなかったぞ？」

「モグモグ…。悪魔と契約した今が一番危ないような気もするんですけどね」

瀬流彦の言葉に、芦は笑う。確かに、普通はそう思うだろう。

「安心したまえ。私は近くこの世界を去る。この世界に潜む神族を始末した後にな。その時は、君を元の姿に戻してあげよう。勿論、多少なりとも私の力を授ける。君は君の思う平穏無事な生活を送る事だけ考えていればいい」

「はぁ…。まぁ、期待しないで待っときます。ぷはぁっ」

「ん？……ああっ！　君な、このワイン高いんだぞ！　飲むならもう少しゆっくり味わいたまえ！　というか君、随分オコジョを堪能しているな！？」

「アハハハハ！　オコジョ最高です！」

夜も更けたホテルの一室に、小動物の笑い声と男の嘆きの声が響いていた。

第六十七話　山下と雑貨屋の男の娘

山下慶一は困惑していた。

昨日、エヴァンジェリンの家に泊めて貰った際に、「しばらく家に泊まって麻帆良を見て回ったらどうだ。記憶を取り戻すかもしれん。ぬいぐるみを売ってる店も、紹介してやる」と言われた。それは助かるのだが、麻帆良を見て回れと言われても困るのだ。ここは、あまりに広すぎる。

「ぬいぐるみ屋の場所の地図書いて貰ったけど、そこくらいしか行けないな…。下手に別の場所に行ったら確実に迷子だろ」

とりあえず、先に自分の用事を済ませてしまおう。エヴァンジェリンからは、当面の生活費とぬいぐるみの代金をもらっていた。何故ここまで親切にしてくれるのか分からないが、山下はせっかくだからとエヴァンジェリンの好意に甘える事にした。

「まずは…家の前の道を右手に…箸を持つ方の手の方向に歩く。…馬鹿にしとんのか？」

地図には、妙に子供向けの解説が書かれていた。道には他にも『熊が出る。ジョセフィーヌ、ロウソクが好き』との書き込みが。

「いや、熊って。こんな所に出てたまるかよ…って、本当にいた！？」

見ると、前方には熊の後ろ姿が。網かごに沢山の花を入れて歩いていた。

「あ、侮れねーな麻帆良学園…。ジョセフィーヌって、メスか？ロウソクって…熊のＳＭとか恐怖以外の何物でもないな」

ちゃんと地図を読んでおこう。山下は気を引き締めて地図を見直した。森林公園区域の中央に、件のぬいぐるみ屋…雑貨屋『ほのぼの』はある。今日は学校のある日なので、道は閑散としていた。

地図には、親切にも目印になる物まで書いてある。これは、かつて散々手間をかけさせた芦優太郎という天性の方向音痴の存在があった為だ。あの一件以来、エヴァンジェリンは地図を書く時は馬鹿でも分かるように書くようになったのだ。

「しかしやけに細かいな。生えてる花の種類とか目印にされても俺には分からんぞ？　まあいいか、基本は一本道だから」

山下は地図を折りたたんでポケットに入れると、周囲の風景を楽しみながら歩いて行った。ここに自分は昔住んでいたらしい。見覚えなんて全然ないから眉唾だが、ちょっとした拍子で記憶が戻ってこないとも限らない。山下は楽しみながらも注意深く景色に目をやっていた。

雑貨屋『ほのぼの』は、エヴァンジェリンの家から徒歩１５分程度の所にあった。分かりやすく、店の入り口にデカデカと『ほのぼの』と書かれている。しっかりとした毛筆で書かれており、字面だけ見たら全くほのぼの出来そうになかった。

カランカラン、とベルのついた木戸を開けると、決して広いとは言えない店内には恰幅のいいオバサンと美しい女性が談笑していた。

「あ、いらっしゃい！　何かお探しかい？」

山下に気づいたオバサンが、話しかけてくる。その声の大きさに少しビビりながら、山下は口を開いた。

「あの…ここでぬいぐるみを扱ってるって聞いたんだが」

オバサンと綺麗な女性は顔を見合わせた。

「ああ、ウチの売りだからね。どんなぬいぐるみをご希望だい？」

「希望、って言われると困るんだが…」

山下は、ポケットから茶封筒を取り出した。

「えーと、熊のぬいぐるみらしい。土産に買いたいんだが」

山下の答えは、奇妙だった。オバサンと女性も、不思議そうな顔をする。誰かに頼まれたのだろうか。まるで他人事のように聞こえる。

「横から失礼しますが…ぬいぐるみは、どなたかから頼まれたのでしょうか。もし希望がありましたらサイズや服装を調整できますけど」

「いや…どうなんだろうな…」

山下も困った顔をした。分からないのだ。自分が何故ぬいぐるみを買おうとしていたのか…

「もし良かったら、事情を聞かせてもらって構わないかい？」

オバサンの言葉に、山下は頷いた。一から説明した方が良さそう

だ。確かに今の自分の発言を振り返ってみると不審すぎる客だろう。カウンター奥の部屋に通された山下は、二人に事情を説明した。記憶を失っている事、茶封筒に残された文字。説明しているうちに、オバサンはみるみる目に涙を溜めてきた。これは…昨日のエヴァンジェリンと同じ？

「あんたも、大変なんだねぇ…。よし、だったらとっておきのを用意してやるよ！　ジュマル、麻帆良祭の景品用に作ってたやつがあったろう？　一つ、この子に回そう！」

「そうですね。クマならすぐに仕上げられますから」

ジュマルと呼ばれた女性はそう言うと、席を立ってカーテンで仕切られた隣の部屋の前に立つ。仕種がやけに柔らかく優雅で、山下は少し見とれてしまった。

「山下さん、こちらに来てください。幾つか候補がありますので、選んでもらいます」

「あ、ああ…」

我に返って、山下も席を立つ。カズエはニヤニヤしながら、そんな山下に声をかけた。

「じゃあ私は店番続けるからゆっくりしていきな！…ただね、言っとくけど、ウチの子が綺麗だからって手ぇ出したら後悔するよ？」

「出さねーよ！」

「…カズエさん、からかうのは止して下さい」

ジュマルが少しジト目で言うと、カズエは「はいはい」と言ってレジの方へと歩いて行った。

「まったくもう…。じゃあ、こちらへどうぞ」

「おう。」

少し顔を赤くしながら、山下は隣の部屋へと移動する。カーテンの向こうには、驚くべき光景が広がっていた。

一面、ぬいぐるみだらけ。

部屋の中央の作業台の上こそミシン等以外には何も置いていないが沢山の棚に囲まれており、そこには綺麗にぬいぐるみが並んでいた。良く見ると、それぞれ注文書とセットで置いてあり、特注品だという事がわかる。

「すげえな…これ、全部ここで作ってんのか？」

「はい。この部屋にあるのは全てオーダーメイドですね。材料の納入待ちの物が幾つかあって作業が止まってる物もありますけど、ここにある八割は完成していて、来週中に引き渡し出来る物です。店頭に出す分はみんな出しちゃいました」

小さいウサギや猫に始まり大きい物では牛や象までである。そしてそのどれもが細部に渡って丁寧に作られていた。

「で、そのクマのぬいぐるみってのは？」

「それは、こちらです」

ジュマルの指差す方向を見ると、棚に入らない程デカいクマが大きな網籠に入れてあった。外見はテディベアっぽいが、子供の身長ほどもある大きさに山下は若干退いた。

「すげえ…けど、これはもう完成してるだろ？　何をどう仕上げるんだ？」

「ああ、それは服ですね。どんな物を着せたらよいか迷ってたんです。サイズ以外に特別な指示がなくて、ただ何でもいいから服を着せてくれと言われてたので。山下さんは、どんな服がいいですか？　僕の方で決めた方がいいですか？」

ああ、そっちで決めてくれたら助かる。そう言おうとして、山下は固まった。いや待て、今何か凄くおかしな事を言わなかったか、この女。

「…僕？」

「え？　ええ、僕の方で決めてもいいんでしたら…」

「僕？　僕って言ったか！？」

「え、ええ…何ですか？」

そんなバカな。そんな訳は無い。そんな事、あってはならない！

「お前…男？」

「…はい。男ですけど…」

その時、山下の中で何かが壊れた。

雑貨屋『ほのぼの』から奇妙な叫び声が周囲に響き渡ったのは、それからほんの数秒後の事であった。

麻帆良学園にて。

昼休み、エヴァンジェリンは学園長室で近衛近右衛門と昼食をとっていた。本来であれば昼休みは高音たちと過ごす所だが、そちらは理由を言ってキャンセルさせて貰っていた。

「ふむ、記憶喪失の男、か…。麻帆良の結界に引っかからずに入り込むとは、驚きじゃのう。危険はないのじゃろうか」

「危険か否かで言えば、危険だろうよ。嘘みたいに馬鹿デカい剣を持っていて、魔眼まで使う。記憶が戻った時の奴がどんな人物なのかは分からんのだからな」

サンドイッチを食べながら、エヴァンジェリンはサラッと言う。
近右衛門は冷や汗を流していた。

「頭が痛いのう…。今月は色々起こりすぎて手が回らんわい」

「色々…？」

本気で困っている近右衛門は珍しい。エヴァンジェリンは興味本位で尋ねてみた。

「一体何があった。言ってみろ」

「うむ…。実はのう、高畑君と瀬流彦君が行方不明なのじゃよ」

「はぁっ！？」

有り得ない。瀬流彦はともかく、高畑が行方不明になるとは…

「二人は一緒だったのか？」

「いや、高畑君には婿殿の手伝いを頼んでいたんじゃが突然姿を消してしまってのう。瀬流彦君には麻帆良の巡回員を任せておったが、これも突然消えてしまったんじゃよ」

一体、何が起きているというのか。山下がやってきた事と、何か関係があるのだろうか。

「何にせよ、その山下という男の事まで手が回らんのが現状じゃ。のうエヴァよ、すまんがしばらくその男を任せても良いかのう…」

「ああ、かまわん。しかしタカミチめ、京都の時といい腑抜けてい

るにもほどがある！」

そう言って、エヴァンジェリンは海老カツサンドを大口で頬張った。全く、今度会ったらまた稽古をつけてやらないといけないな！　別荘に閉じ込めてもっと老けさせてやろうか！　邪悪に染まって行くエヴァンジェリンの顔に、近右衛門は怯えながら茶を啜るのだった…。

【超鈴音】

今日はなんだか眠いネ。授業もダルいヨ。サボれるならサボりたいけど多分ネギ坊主が許さないだロウ。ネギ坊主、自分に自信をつけたのか最近やけに元気ネ。頑張るネギ坊主もいいけど、たまには落ち込んでウジウジしてる姿も見たいと思うのは私だけだろうカ…

（超さん、少しいいですか）

おや？　留美から念話が。

（どうしタ？　昼休みに普通に話しかけられないという事は厄介事カ？）

（はい。非常に申し訳ないのですが、私のミスで侵入者を許してしまいました）

（はい！？）

侵入者！？　それはマズいヨ！

（昨日の夕方から夜にかけて、三名の侵入者があったようです。同時刻、私は龍宮さんと麻帆良を離れてケーキバイキングに行っていました。スミマセン）

（いや、それを言うなら私も超包子の仕事で忙しかったカラ同罪ネ。留美一人が悪い訳では無いヨ。しかし…その三名は今どうしてるか分かるカ？）

（二名は人間で無いらしく、姿を消しているようです。が、残りの一名は確認がとれました。現在、森林公園区域の雑貨屋にいるようです）

雑貨屋…？

よく分からないが、一般人に手を出そうというなラこうしては居られなイ。早退して直ぐに無力化を…

そんな事を考えていたラ、背中をチョンチョンとつつかれた。一体誰ネ、真剣に考え事をしてる時に…！　そう思って振り返ってみると、そこには…

「はろー。無力化とか、怖い事考えてちゃ駄目ですよー」

アリア先生が立っていた。

超鈴音は混乱している。何故、念話が聞かれたのか。いつの間にか、声に出していたのだろうか。しかし答えは実に簡単だった。

「私、石田さんと仮契約しちゃってるから念話聞こえちゃうんですよ。知りませんでした？」

「あ、そう言えばそうでしたね。超さん、そういう事で筒抜けです」

聞いてない！　そんな事、聞かされてない！

「まぁまぁ落ち込むのは後にしましょう。今は侵入者の話です。今教室には関係者以外いないから、普通に話してもいいですよ」

確かに見渡すと、お弁当を食べてるあやかと明日菜、あやとりをして遊んでいる木乃香と刹那、そして『特製魔力スプレー』という怪しげな物を後頭部に差して悶えている茶々丸とそれを写真に収めている朝倉。魔法の存在を知っている人間しかいなかった。

「確認がとれたのは、雑貨屋にいる男だけです。昨日の夕方、火の玉のような状態で麻帆良の結界を破って侵入しました。現在はエヴァさんの所に身を寄せているようです」

「エヴァンジェリンの家…？」

思わず茶々丸の方を見る超とアリア。茶々丸は…

「ぁふ…。もう、溢れちゃ…ぅ…」

「茶々丸さぁ、流石に教室でするのはマズいって…」

ビクンビクンと身体を痙攣させて、朝倉を困らせていた。これは酷い。

「色情狂には、後で私がたっぷり魔力責めしてあげます。その男には、私が接触をしてみますから二人は早退なんてしないようにして下さいね」

「えっ、アリア先生が？　いくら強くなったからって、危なくないカ？」

アリアは確かに魔力に対しては無敵となっている。しかし、文珠を使わなければ肉弾戦では弱いままなのだ。奇襲攻撃を受けたら、死ぬことは無いが簡単に無力化されてしまうだろう。

行かせてよいものか超が迷っていると、話を聞いていた明日菜が近寄ってきた。

「あの…ごめん、話聞いちゃった。もし良かったら、チャチャゼロ連れてく？」

手には、バッグ。その開け口からチャチャゼロが顔を覗かせた。

『オウ、面白ソウジャネーカ。俺モツレテケ』

明日菜の護衛、チャチャゼロ。明日菜自身が強くなったので、最近はかなり暇していた。

「そうですね。じゃあ明日菜さん、チャチャゼロさんを借りて行きますね」

「はい。アリア先生も気をつけて下さい」

アリアは、チャチャゼロの入ったバッグを受け取ると超たちに振り向いて「ちゃんと授業受けなさいね」とだけ言ってさっさと出て行く。超と石田は、顔を見合わせて困った表情をした。

「任せて大丈夫カ…？」

「普通の侵入者なら敵ではないでしょうが、もし介入者なら危ないですね…」

アリアの出て行ったドアを眺めながら、二人は心配そうにつぶやくのだった。

第六十八話　アリアと山下の邂逅

ふんふんふん、と鼻歌を歌うアリア。午後、受け持ちの授業が無いアリアは初めての外の巡回に上機嫌だった。出歩く人の少ない麻帆良学園は、本当に綺麗で過ごしやすい公園のよう。仕事というより散歩気分であった。

「巡回っていいですねー。私も高畑先生みたいに巡回専門になろうかしら」

『オイ、ソレハソレデ問題発言ダロ』

アリアの頭に抱きついているチャチャゼロが、軽くツッコミを入れる。けど、そんなチャチャゼロにしたって明日菜について教室でジッとしているより外にいた方が楽しい。機嫌は良かった。

「でも、侵入者って何者かしらね。エヴァさんにお世話になってるなら、そっちに話を聞いてからでも良かったかしら」

『ジジイニ話ガアルトカ言ッテタカラ、ドノミチ捕マンネェヨ。コッチデ確認シタホウガ早イダロ』

チャチャゼロは基本的に明日菜の部屋に住んでいる為山下の件は知らない。だからこそ、アリアについて行って見てみようと思っていた。

二人は、なんとも呑気な様子で雑貨屋を目指していた。

雑貨屋『ほのぼの』についたのは、大体二十分ほど経った頃だった。アリアはいつも仕事帰りに寄っていたが、最近やけにぬいぐるみコーナーが大きくなってきており、それが気になっていた。ぬいぐるみは好きだが、タオルやティッシュといった他の商品がその分少なくなってきている。この時間なら客も少ないだろうから、少し話してもいいだろうか。せめて日用品のコーナーは縮小しないでくれ、と。

カランカランとベルを鳴らして、店のドアを開けるアリア。入り口近くのレジに座っていたカズエが、いち早く気づいて声をかけた。

「おや、いらっしゃいアリアちゃん。今日は特売日じゃないよ？」

「ひ、酷いですね！　別に特売日じゃないと来ないわけじゃないでしょ！」

からかわれた。実際には、特売日皆勤賞なだけだ。そして、特売日以外の日に極端に買い物の量が減る。なんとも分かりやすいキャラクターである。

「あの、今日、見かけないお客さんいませんでしたか？　エヴァンジェリンさんの家に世話になっている方みたいですが、彼女から伝言を頼まれているんです。こちらに居ると教えてもらったんですが……」

思いっきり嘘だ。しかしカズエは信じたようだった。アリアがエヴァンジェリンと仲がいいのは魔法関係者の間では知られている。それに先ほど学園長に連絡をしたら山下の件はエヴァンジェリンに

一任しているという。なら、アリアを山下と引き合わせても大丈夫だろう。

「ちょっと待ってな。今、奥で注文とってんのよ」

注文…。ぬいぐるみの？

思わずチャチャゼロと顔を見合わせる。チャチャゼロも怪訝な顔をしていた。

少し待った後。奥の部屋のカーテンが開かれて、件の侵入者が現れた。金髪のツンツン頭に、青い瞳。服の上からでも分かる位に引き締まった身体には、不思議なオーラがあった。

「どうも。山下ですがエヴァさんの伝言って何？」

「え、あ…あの、すみません、山下さんだけにお伝えしたいのでちょっとお時間いいですか！？」

アリアは、テンパった。山下と名乗る男の容姿に、驚きを隠せないでいる。何せ、大好きだったゲームのキャラクターそっくりなのだ。

「え？…あー、まぁいいよ。用は済んだから。ジュマル、さっき話したので構わないから」

「はい、かしこまりました」

山下が振り返って言うと、ジュマルはにこやかに会釈をした。が…アリアの頭の上を見て、固まる。

「チャチャゼロ…さん？」

『ア？　ナンダヨ。テメーハ誰ダ？』

ジュマルの目が、何だか潤んできた。なんだ？

「何故…何故、僕が作ったドレスを着てくれないんですか？　あれ、結構自信作だったのに！」

『ア…アー、テメーカ、アノ気味ノ悪イヒラヒラシタドレス作ッタノハ！』

ギラリ、とジュマルの目が光った。途端に、室内の温度が下がる。これは…ヤバい！

「とりあえず、アリアだったか。話があるなら、外で聞こう。行くぞ」

「はい、そうしましょう。チャチャゼロさんは、ジュマルさんとちゃんと話し合って下さいね」

『エ、オイ待テ置イテクナヨ！　護衛ハ！？』

「今がその時です！」

『テメー！』

ガシッ！

アリアたちが出て行った方向へと動き出した途端、掴まれる身体。

ジュマルは涙を流しながら、チャチャゼロを抱きしめる。

「わかりました、今度はチャチャゼロさんが満足出来るようにもっと可愛いのを作りますから！　また、寸法を計らせて下さい！」

『ウオアァァァッ、ヤメロ離セー！　可愛イノガ嫌ナンダヨ、バカヤロー！』

いつもは非力なジュマルも、何故かこの時ばかりは恐ろしい力でチャチャゼロを拘束していた。チャチャゼロはわめきながら、少し涙まじりの悲鳴をあげて、ジュマルの作業場へと引きずり込まれていった。

森林公園区域には、中心となる広場以外には殆ど建物が無い。時折移動式のクレープ屋の屋台を見かける程度で、他はひたすら自然ばかり。人工物が街灯とベンチだけという場所が多いのだ。

そのベンチの一つに腰をかけて、アリアは山下と二人で先ほど買ったクレープを食べていた。

「スタンダードにイチゴクリームがイケるんですよ、ここのクレープは」

「…すげー生クリームだな。俺のも散々だが」

山下の頼んだチョコバナナクレープも、ボリュームがありすぎて甘い物嫌いな人には罰ゲームにしか見えなかった。

しばらく、二人はモグモグと食べ続けた。山下は、アリアの意図が分からずに混乱しながら。アリアは、山下の外見を楽しみながら。

クラウドだ。クラウドがいる。

かつてクラウド×セフィロスの同人を買いあさったのはいい思い出である。ネギまを読んだ時には、山下慶一というキャラクターに一目惚れした。一発でやられた姿に涙し、あの時ばかりはエヴァンジェリンを憎んだものだ。

大好きなキャラクターと、デートをしている。それは、この世界に転生する時に夢見た事だった。ただ…

好きだからこそ、違うのだと分かる。

山下慶一は、麻帆良にずっと住んでいた一般人である。麻帆良に侵入者として現れるなんて事は絶対無い。という事は、どういう事か。

転生者。

それも、かなりの強さを誇る。近くにいるだけで、その強烈なオーラを感じるのだ。町中でライオンが歩いているのを見たら、あまりの威圧感と存在感の違いに驚くだろう。それと、一緒だった。

アリアはクレープを食べきると、少し緊張した面もちで話し始めた。

「あの、先に謝っておきます。さっきエヴァンジェリンさんから伝言があると言いましたが…」

「嘘なんだろ？」

未だ食べきれずに四苦八苦しながら、何でもないように山下は言った。

「気づいてたの？」

「ああ、緊張の仕方がおかしかったからな。眼球の動かし方や、ちょっとした仕草も気になった。多分、嘘ついてでも呼び出したい用事があるんだろうなって」

凄い。極力平常心を保とうとしていたのに、完全に見破られていた。

「けどさー、俺本当に記憶喪失だから答えられる事ないと思うぞ？」

「え、記憶喪失？」

これには、山下が驚いた。なんだ、聞かされてなかったのか？仕方なく、山下は事の経緯をアリアに説明する。聞きながら、アリアは脱力してゆくのを感じた。

「それじゃあ、何？　本当に、雑貨屋には買い物に行っただけだったの？」

「他に何しろってんだよ。今ん所、ぬいぐるみ買う予定だった事しか分からねえんだ、他にやる事なんて…」

そこまで言って、山下は気づいた。このアリアという人物は、この学園の教師らしい。なら、土地勘はあるだろう。案内を頼む事は出来ないだろうか。

「なあ、頼みがあるんだが聞いてくれるか？」

「え？…ええ、いいわよ。変に疑ったりしちゃったからね。お詫びに、私が出来る事なら…」

「だったら、この麻帆良を案内してくれねえか！　なんか俺、ここに住んでたらしいんだよ。もしかしたら、何かの拍子で思い出すかもしれねえ！」

キョトンとするアリア。案内？　それくらいなら出来るけど…あ、これってデートの続き？　アリアはそう思って少し上機嫌になった。

「分かったわ。二時間くらいなら付き合うわよ」

山下とアリアは、麻帆良をじっくりと歩いて回った。途中、長い距離を移動する時は山下がアリアを抱えて凄まじい勢いで走った。アリアは喜んでいたが、植物を通して見ていた石田は慌てて認識阻

害の植物結界を張った。なんという無防備。ちょっと気を抜きすぎだ、と頭を抱えた。

麻帆良探索によって、山下の記憶が戻る事は無かった。しかし、アリアにとっては至福の時間を過ごせて嬉しかったし、山下も麻帆良を見て回れて楽しかったようだ。

雑貨屋の前まで戻ってきた頃には、約束の時間は終わろうとしていた。

「ありがとよ、アリア。これだけ回って迷子にならなかったのは奇跡だ。助かったよ」

「私も、格好いい人とデート出来て嬉しかったわ。大人になったら、また誘ってね」

冗談めかして言うと、山下も笑う。片手を上げて「じゃあな」と去って行く姿は、とても足取りが軽く楽しそうだった。そんな山下の背中を見えなくなるまで見送ってから、アリアは雑貨屋のドアを開ける。

「チャチャゼロさーん、迎えに来まし…わあぁぁぁぁっ！？」

『アリア、ド畜生ー！　落トシ前ツケロヤァァァ！』

飛び交ってくるチャチャゼロ。その姿は…

ウサギの着ぐるみだった。

「可愛いー！　凄ーい！　どうしたんですかコレー！？」
尋常でない力でキャッチされる。
『ワプッ！？　テメー、何抱キシメテヤガル！　俺ハ怒ッテ…』
「フフフ…似合ってますよ、チャチャゼロさん」
背後で微笑むジュマルを睨みつけるも、チャチャゼロはアリアにスリスリされて身動きがとれなかった。半端じゃない力。何故コイツらはこういう時に理不尽な力を発揮するんだ！そして何故、こんな事に！？
チャチャゼロの瞳から、一滴の涙がこぼれ落ちた。

日が暮れて来た頃。
世界樹の根元に、一人の少年がうずくまっていた。焦りの表情を浮かべて、幹を殴りつける。
「クソッ、入り口すら分からないなんて…一体、扉はどこにあるんだ！　この霊核さえあればたどり着けるんじゃなかったのか！？」
少年は、フェイト・アーウェルンクス。リョウメンスクナから奪

いとった力を使って、世界樹の内部に侵入するつもりだったのだが…どうにも、入り口が見つからない。

「頼む、時間が無い！　デュナミスに隠れて行動するのも、後2日が限界なんだ！」

焦りで冷静さを失っていたのだろう。

フェイトは、背後に忍び寄る人物に気づかなかった。人払いの魔法をかけている事で、安心していたのかもしれない。

カツッ、カツッ…

固いヒールの音が、世界樹広場に響く。その音に驚いたフェイトは、慌てて飛び退いた。

「だ…誰だ、君は…」

『さあ？　名前なんて知らないわ。私はコレクションの一人でしかないもの』

それは、女性だった。

フェイトは、見た事の無い女性の登場に困惑する。記憶にある魔法関係者リストを、急いで検索した。そして、該当人物のデータにたどり着くが…

「君が何故結界を破ってここにたどり着ける！？　君にはそんな力など無いハズだ！」

そう、魔法関係者ではあるが、戦闘能力は皆無だったハズ。なのに、何故…

幾つものクエスチョンが、フェイトの頭を支配する。しかし、思考に没頭出来たのはそこまでだった。

『もう、そんなに悩まなくていいのよボウヤ。あなたも私と同じコレクションになれば…苦しみから解放されて、楽になれるわ』

女は、かけていた眼鏡を外すとフェイトを睨みつける。途端に、フェイトの身体が硬直を始めた。それは、石化や麻痺などではない…魂自体を縛り付ける魔眼。フェイトは、生まれて初めて身体の自由を奪われて混乱するばかりだ。

「これはっ…うう、動けな…」

そして、さらに。

自分の身体から、力が抜けて行く。次第に、何も考えられなくなって行き…

「…ぁ、ぁあ……僕、は…」

ガクッとくの字に折れ曲がり、地面に倒れ込んだ。女はただ、憐れみをまじえた視線を送っている。

『可哀想に。その執念さえ利用されてるとは知らずに、最後まで踊り続けるしかないボウヤ。ここで救われた事を、幸運に思いなさい』

そう言って、女は眼鏡をかけ直した。それまで鋭かった目つきは、

いつもの柔和なものに戻っている。女は軽々とフェイトの身体を持ち上げると、そのまま広場を後にした。

カツッ、カツッと音を立てて去って行く女。世界樹の上に立つ男だけがその姿を見つめていた。

「ふむ、コレクションか。…どうやら、あの女も本人ではないな。なんとも悪趣味な能力だ」

芦優太郎はそうつぶやくと、霞のように身体を霧散させてその場から消え去るのだった。

第六十九話　脅迫者

「最近この辺りに不審者が出没しているそうです。皆さんも、知らない人について行かないようにして下さいね！」

その日最後のホームルームで、ネギは生徒たちにそう話した。これは昨日宮崎のどかにスライム娘撃退の件を聞いたからだ。麻帆良に侵入者ありという報告を学園長にした結果、教師たちは各クラスで注意を促すようにと指示を受けていた。

「不審者だって！　コート広げて見せちゃうやつ？」

「知らない人についてくなって、子供じゃないんだから…」

生徒たちは大して気にしていないようだった。が、そんな中一部の生徒たちには緊張が走っている。それは山下を知る人物たちであった。

ホームルーム終了後、エヴァンジェリンはネギに探りを入れる。

「おいネギ、さっきの不審者というのは何だ？　どんな目撃情報が入ってるんだ？」

「え？…ああ、小さい子供みたいな外見らしいですよ」

子供？

「あの、関係者以外には言えない事なのでこっちに来てくれますか」

ネギはエヴァンジェリンを連れて教室を出る。連れて来たのは、

少し離れた視聴覚室だった。

「ここなら誰にも聞かれないかなー…って、エヴァンジェリンさん、何でパンツを脱ごうとしてるんですかーっ！？」

見ると、エヴァンジェリンは恥ずかしそうにスカートの下に手を入れている。スルスルと紐パンの結び目をほどいた。

「え？　いや、するんだろ？　坊やもその歳でシチュエーションに凝り出すとは侮れないな。私も少し驚いたぞ」

「何の話ですか！？　いや、不審者ですよ不審者！　むしろこの場合エヴァンジェリンさんが不審者です！」

「い、言うじゃないか…」

ネギの鋭い突っ込みにたじろぐエヴァンジェリン。いろんな意味で成長したんだなと感じていた。

「のどかさんが言うには、子供の姿をした化け物で水のようなものに変身したそうです。魔法で凍らせて、トイレに流したそうですが…」

「…トイレか。容赦ないな」

初めて敵と遭遇して魔法で撃退出来るのは素晴らしい。が、トイレに流してもトドメを刺した事にはならないだろう。むしろ、逃走を助けた事になる。精神的にはかなりダメージは受けただろうが…

「念のため、茶々丸にも捜索させよう」

「ありがとうございます。僕も今日からしばらく夜の警備に参加する事になりましたから、一緒の担当になったら宜しくお願いします

！」

ネギはそう言うと、話を切り上げて部屋を出て行こうとする。エヴァンジェリンは慌てて声をかけた。

「ああ、ネギ！　一つ言っておく事がある！」

「え？　何ですか？」

「今、私の家に山下という男が滞在しているが、そいつを不審者と間違えるのは止めてくれ。学園長に許可を得て私が世話している男だ」

エヴァンジェリンは山下の外見的特徴をネギに伝える。金髪、碧眼、そこそこ長身で色白の男。

「へー、日本人でそういう外見の人は珍しいですね。分かりました、覚えておきます！」

ネギはそう言うと、今度こそ部屋を出て行った。エヴァンジェリンはホッとしたような表情をする。

「これであのバカが絡まれる事はないだろう。やれやれ、世話が焼ける」

そう言ってから、エヴァンジェリンも視聴覚室を後にした。歩きながら、

（しかしシチュエーション的には学校内というのも燃えるな。今度本気で襲ってみるか）

…と良からぬ事を考えていた。

その日の夕食。
エヴァンジェリン邸には珍しく、那波千鶴が訪れていた。勿論、山下に会いに来たのだ。エヴァンジェリンの許可を得て、食事を作りに来たのだった。

「いいのかしら、私が夕飯を作っちゃって…」

「構わん。今日は茶々丸が学園の用事で居なくてな。超に出前でも頼もうかと思ってた所なんだ。作ってもらえるなら、助かる」

那波はエヴァンジェリンの言葉に驚いていた。いつもの威圧的な口調ではなく、非常に柔らかい言葉使いだったからだ。こんなに話易い人だったかと、戸惑った。

那波は、言われた通りキッチンで夕飯を作った。ダイニングでは山下が「ハラ減った」とばかりに鼻をヒクつかせてこちらを見ている。目の端でそれを見ながら、那波は嬉しそうに料理をしていた。今日は得意のビーフシチュー、喜んでもらえるかしら。そんな事を考えながらキッチンに立つ那波は、まだ中学生のハズなのに新妻の雰囲気を醸し出していた。

「アレだな。男ならば、裸にエプロンとか着せてみたい所なんだろうな」

「俺はむしろ中途半端に脱がせて…って、おい！　何言わせやがる！」

那波を眺める二人の視線は、幾分卑猥だった。

夕飯は賑やかに行われた。

那波の作ったビーフシチューは、得意としているだけあってかなりの味だった。普段茶々丸の完璧な料理を食べているエヴァンジェリンだったが、家庭的な那波の料理をかなり気に入ったらしい。おかわりの勢いが半端じゃなかった。それは山下も同様で、二人が争うように早食いする姿を、那波は幸せそうに眺めていた。

そんな幸せな食事の時間が過ぎた後。那波は、寮へと戻る。

「なら、俺が送っていくよ。ここらの地理は完璧に覚えたからな」

山下が言うと、那波は照れながら「ありがとう」と言う。一方エヴァンジェリンは、ニヤリと笑って拳を突き出した。ん？

よく見ると人差し指と中指の間から、親指が少し顔をだしている。

これは…

（しっぽりヤってこい！）

（オッサンかテメーは！）

不思議そうにする那波の背中を押して、山下は急いで家を出るのだった。

外は、小雨が降っていた。山下は傘をさして那波を傘に入れる。その姿は本当に恋人同士のようだ。互いにまんざらでもないのだろう、その顔は幸せそのものだった。

だから、気づかなかった。

背後から近づいて来る、悪魔の気配に。

ドガッ！

「ぐあぁっ！？」

山下が背中を蹴られて前方にふっ飛ばされる。あまりに唐突な攻撃だった為、受け身すら取れず顔面から草むらに突っ込んだ。

「山下君！？　だいじょ…ぅ……」

背後から口を塞がれた那波は、そのまま意識を失った。昏睡させる魔法を使われたのだ。山下はすぐさま飛び起きると、戦闘体勢に

入る。そして、目の前の男を見て…

固まった。

「お前…は…」

「どこで道草を食っていると思ったら、女性と一時のアバンチュールかね。君も隅に置けないな」

それは紳士を自称する悪魔、ヘルマンだった。山下の頭に、失われていた記憶が蘇る。ああ、忘れるワケがない。コイツは確かフェイトの連れていた上位悪魔。女子供すら嬉々として石に変えて殺して来たクソ野郎だ。仕事だから我慢していたが、孤児院の奴らを「生きのいいニエ」と口走ったのを忘れはしない。

「てめぇ…その女は関係ねえだろ！　ターゲットはネギとかいうガキだけだろうが！」

「はっはっは、それがそうでも無いのだよ」

ヘルマンは愉快そうに笑った。

「この娘はターゲットの教え子なのだよ。つまり、関係は、ある。悲しいくらいにな。この娘をエサに誘き出せばあの少年も来ざるを得まい」

「ふざけるな！　今回の仕事は魔法関係者以外を巻き込まないようにしろって、デュナミスの野郎に言われていただろう！」

「それは、君たちだけだろう？　私には関係ないな。少なくとも、契約書にはそんな事は書かれていなかった」

ヘルマンは愉快でならない。怒り、苦しみ、悲しみ、そんな感情を見るのが何よりも好きだった。山下の怒りは格別だった。次は、どんな極上の表情をしてくれるだろう。

「ちなみにこの娘には別の使用法があってな。君がもし私に従わない場合、この娘は生きたまま徐々に石にされ、砕かれながら死ぬ事になる」

「んだとコラァ！　卑怯にも程があるだろう！」

「嫌なら黙って指示に従うのだ。これより一時間後、中央広場にてネギ少年との戦いに参加してもらう。そうだな、ついでに姉のアリアも呼び出そうか。昼間、楽しそうにしていたではないか」

「クッ……このゲスが…」

既に監視されていたのか。山下は悔しそうな顔でヘルマンを睨みつけた。ヘルマンは、その苛立ちとやるせなさに満ちた目を見て恍惚に浸る。ああ、いい。もっと苦しむがいい。ヘルマンのテンションは上がりっぱなしだ。

「武器を預けてあるのだろう？　今から取り戻して、広場に来るのだな。遅刻した場合は、この娘の命は無い…いや、三分の一程無くなっていると思え。ハハハハハハ！」

従うしかない。山下は苦み走った表情で頷くしかなかった。那波を抱えたヘルマンは、高笑いをしながら空へと飛び立つ。それを悔しそうに睨みつけた後、山下はエヴァンジェリンの家へと走った。

チクショウ…

チクショウ、チクショウ、チクショウ！

俺は一体何をやってるんだ！

山下の叫びが、夜の森に響き渡った。

芦グレート・ガーデン・ホテルの一室では、相変わらず瀬流彦オコジョが良い気分でチーズをパクついていた。仕事から帰ったばかりの芦優太郎を労う事もせず、ただひたすら食欲を満たしていた。

「君な、いい加減にしないと太るぞ。いざ人間に戻った時に困るのは君だぞ？」

「太くても結婚して子供のいる先生もいますし、平気ですよ！　デブ専の女性も結構多いらしいですから！」

いやな方向でポジティブである。芦は頭を抱えた。ここは、話題を変えた方がいい。

「今日、君に仕事を依頼していた少年がやられた。例の女だ。良かったな、彼じゃなかったら今頃君がコレクションにされていたぞ」

ピタッと瀬流彦オコジョが止まる。身体から、嫌な汗を噴き出していた。

「いやぁ…それは芦先生様々です…」

「それで、だが。私はあの能力者を調べる為に動かねばならん。その間、君の世話を任せる人物を呼んでおいた。……入りたまえ」

嫌な予感がする。

瀬流彦オコジョは、ドアを開けて入ってきた人物を見る。そこには、忘れたくても忘れられない人物が。

「お久しぶりです、変態教師」

それは自分を教師の道から引きずり下ろした張本人。

石田留美の姿がそこにあった。

第七十話　誘われた者たち

その日、雪広あやかはルームメイトの那波千鶴の帰りが遅い事に多少の苛立ちを抱いていた。村上夏美も、普段キチンとした生活をしている那波が珍しく連絡も無く門限を破っているので、心配になっていた。

「ま、まさかちづ姉、山下さんとあんな事やこんな事を…！？」

「ありえません！　品行方正な千鶴さんがそんな事するわけがありませんわ！」

しかしあの二人が良い雰囲気だったのは確かだ。那波が長年山下の事を引きずっていたのも事実。きっかけはどうであれ、長年の想いが恋に変わって燃え上がる事も可能性としてはあり得るだろう。そう考えると、夏美の懸念も現実味を帯びてくる。

「とりあえず、エヴァンジェリンさんの家に行って確かめてきます。寮母さんに許可をもらってきますわ」

あやかはそう言って、部屋を出た。

あやかはクラス委員長をしている上に両親の学園での影響力もあって多少の無理を通す事が出来る。勿論、それを悪用しないあやかの人柄もあるが、外出許可はあっさりと降りた。もっとも最近不審者が出ているので、早く帰ってくるようにと忠告は受けたが。

寮を出るあやか。エヴァンジェリンの家へと走る。そして物の数分としないうちに、向こうから駆けてくる山下の姿を見つけた。山下は背中に大きな剣を背負っている。

「や、山下君？　何故こんな所に…」

「あやかか！　馬鹿、早く戻れ！　今夜は外に出るんじゃねえ！」

凄い剣幕で言う山下。あやかは、すぐに何かが起きた事を察する。

「那波さんが…那波さんが、帰って来ないんです！　山下君は何か知ってますか！？」

「それは……」

言わないわけにはいかないだろう。山下は正直に那波がさらわれた事を話す。これから、一人で戦わないといけない事も…

あやかは驚いた後、思いっきり山下を殴った。

「那波さんを…那波さんを危ない目に合わせてあなたは…！」

「だから、これから助けに行くんだ！　安心しろ、約束は守る。命に代えてもアイツは俺が助ける！」

「……」

睨み合う二人。しばらくしてから、あやかは納得したように道をあけた。

「お願いします。必ず、那波さんを助けて下さい」

「ああ。行ってくる」

山下はそう言葉を残して走り去って行った。ボソッと、「ここの女はよく殴るな」とぼやきながら。先ほどもエヴァンジェリンに殴られたのだ。

ヘルマンに襲撃された後、山下はエヴァンジェリンの所に行って事情を説明した。那波を助けたいから、剣を返してほしいと。エヴァンジェリンはとりあえず一発殴ってから、山下に剣を渡した。

「まぁ、こんなに近くで戦って私が気づかないのだから余程強力な人払いをかけたのだろう。私にも、気づかなかったという落ち度はある」

だったら殴るなと言いかけて、我慢する山下。

「他者の介入が那波の身の危険に繋がるなら私は手を出せんな。相手の実力も分からん。山下、本当に任せて大丈夫なんだな？」

「ああ。絶対那波は取り返す」

山下は、力強く頷いた。

「なら、お前はお前の好きなようにやるがいい。私は遠くから見物していよう」

「すまねえ、エヴァ。あ、すまねえついでに一つ頼みがある」

山下は、思い出したかのように言った。

「万一の事があったら、ぬいぐるみはお前が受け取ってくれ」

ギリッ、と歯が鳴った。

「ふざけるな、絶対生き残れ。那波も助けろ。ネギやアリアを傷つけずに、ヘルマンとやらだけを始末しろ。これは命令だ」

「あ、ああ…分かった」

山下は少したじろいで返事をする。しかし、エヴァンジェリンは何かを思いついたような表情をすると山下へと振り返った。

「一つ、撤回だ。ネギには、本気を出していい」

「は？　それだとネギとかいうガキは死んじまうだろ」

ふふん、と笑うエヴァンジェリン。

「いや、アイツは簡単には倒されん。丁度真剣勝負の相手が出来る奴を探していたが、お前なら丁度いいだろう。ヘルマンとやらの計画に乗るのはシャクだが、坊やの成長を見るにはいい機会だ」

「なんだよ、それ…知らねえぞ、死んじまっても…」

山下も、流石に舐められては面白くない。エヴァンジェリンはそんな山下を見てニヤリと笑ってから、出入り口の扉を指差した。

「さあ、もう行け。早くしないと那波が危ないんだろう」

「チッ…、本当に知らねえからな！」

山下はもう一度エヴァンジェリンに忠告してから、中央広場へと走って行った。エヴァンジェリンは、そんな山下の背中を見送ると携帯電話を取り出して通話を始める。相手が出ると、エヴァンジェリンはすぐに用件を伝えた。

「予定を前倒しにしてくれ。出来れば、今日中に」

麻帆良学園の北部の巡回を任されていたネギとアリアは、一緒に巡回していた警備ロボット『田中さんタイプ』が居なくなった事に気づいて困っていた。

「どこ行ったんだろう…。田中さん、迷子になっちゃったのかな」

「んなワケないでしょ！　ＧＰＳ機能付きだし、ここの警備は長くやってたんだから。きっと、異変を察知して向かったのよ」

警備ロボットは皆超鈴音が基本設計を担当し、ロボット工学研究所で作り上げられた。迷子になどなるわけがないし、戦闘力も高いので中途半端な実力の侵入者相手に遅れをとる事はない。

アリアは、嫌な予感を覚えた。

手にした文珠に『捜』と入れる。田中さんタイプをイメージして発動させると、頭の中に地図があらわれ、無数の赤点が点滅した。

「あ、田中さんってたくさん居るんだったわ。えーと、一番近くにいるのは…」

アリアの顔色が変わる。

「ネギ、後ろ！」

「ええっ！？」

慌てて振り返るネギ。道からそれた茂みの奥、暗闇の中に田中さんの顔があらわれた。

「あ、田中さん！　どこに行ってたんですか、探したんですよ～」

「待ちなさいネギ！　様子がおかしい！」

すぐさまネギの前に出て止める。アリアは、暗闇の中の田中さんタイプを緊張しながら見つめた。田中さんタイプは、ゆっくりとした口調で話し始める。

『那波千鶴ハ預カッタ。返シテ欲シクバ中央広場マデ、二人ダケデ

来イ』

那波…千鶴？　那波さんが！？

ネギは驚いて声を上げようとするが、次の瞬間目を見開いて固まった。

田中さんは、浮いていた。

暗闇の中、頭だけで。

ドカアァァァンッ！

突然爆発する田中さんの頭。アリアは文珠で『防』壁を作ってそれをしのぐ。ネギは未だにショックで固まっていたが…

「そうか、これが…木乃香さんの言っていた戦いなんだ…」

そうつぶやくと、怒りに目を燃え上がらせる。

「ネギ？」

ネギは別荘で木乃香にいろんな話を聞いていた。汚い手を使ってくる敵、どんな方法で攻めて来たか、など…。身の毛もよだつ恐ろしい話に、ネギは何度も耳を塞ぎたくなった。しかし、それは現実なのだ。麻帆良を守り生徒を守るという事は、そうした現実と向き合わなければならないという事である。

「行こう、お姉ちゃん。那波さんを助けなきゃ」

「ええ。そして、侵入者を懲らしめてあげましょ」

二人は頷きあってから、中央広場へと駆けて行った。

麻帆良学園の中央にある広場は、ヘルマンによって強烈な結界が張られていた。しかも器用に、ネギとアリア、山下だけは入れるという特殊な結界。その広場の真ん中に、水で出来た牢が作られている。スライム三姉妹で唯一生存確認されている無愛想な少女、プリンが変化した水牢だ。

「ヘルマンさま、私はこの女を閉じ込めるだけでいいんデスか？」

「ああ、そうだ。君に戦闘は期待してないからな」

プリンは自分の中にいる那波を見てため息をついた。この女も不憫だな、と思ったのだ。マスターは容赦しない。きっと、戦う過程で殺されるだろう。寮で大人しくしていれば良かったものを、と憐れみの表情を浮かべていた。

しばらくして、最初にたどり着いたのは山下だった。言われた通

り背中に大剣を担いで走ってきていた。

「はぁ、はぁ…来てやったぜクソ野郎。那波に手ぇ出してねえだろうな！」

「はっはっは、当たり前だろう。私は紳士だ、約束は守る」

笑って言うヘルマンを苦々しく顔を歪め睨みつける山下。しかし今はまだ我慢だ。なんとかして那波を助け出してからだ、ぶっ飛ばすのは。山下はなんとかこらえて那波の捕らえられている水牢のそばへと歩いて行く。表面に、プリンの顔が浮かび上がった。

「それ以上近づいたら窒息死させマスヨ」

「チッ…」

山下は立ち止まった。まぁ、そう簡単にはいかないだろう。諦めて大人しくネギたちが現れるのを待つ事にした。

それから１０分ほどたった頃。

ネギとアリアが、中央広場へとあらわれる。

「お望み通り、来てあげたわよ」

「那波さんを返して下さい！」

二人はヘルマンを睨みつける。その時同時に山下を見たアリアは驚愕の表情を浮かべた。

「山下さん！？」

「……」

山下は目を合わせられない。一緒にいて楽しかっただけに、申し訳なく思っていた。

「ヘルマン、さっさと始めるぞ。ネギを殺りゃあいいんだよな」

「ん？　そうだな…」

顎に手を当てる。そして、口元を歪めて言った。

「気が変わった。君はアリア・スプリングフィールドの相手をしたまえ。私はネギ少年に話がある」

「…っ！　テメェ！」

いきり立つ山下。ヘルマンはすぐさま手を那波に向ける。もし従わないなら…無言で山下を見つめると、山下は悔しそうに呻いた。

「そうだ、それでいい。…では、ネギ君。君は私と戦ってもらおう」

「勝てば…那波さんを返してくれるんですね？」

「ああ、約束しよう。君が私に勝ったら、彼女は返そうじゃないか」

ヘルマンが言うと、ネギはアリアから離れてヘルマンの前に立つ。

一方のアリアも、ネギから離れて山下の前に立った。

「…事情があるのは、今のやりとりで分かりました。けど私は容赦しませんからね。大切な教え子を救うためなら、私は鬼になります」

「ああ…。それでいい」

山下も背中に背負っていた剣を手に構える。現状を打破する手が思い浮かばないのだ。今は言うことを聞いて、チャンスを待たねば…

中央広場に緊張が走る。戦いのゴングを鳴らしたのは、やはりヘルマンだった。

「さあ行くぞネギ君！　私を楽しませてくれたまえ！」

「この学園の生徒に手を出した事、後悔させてあげます！」

啖呵を切ってから一気に空へと舞う二人。アリアたちも、それを合図に走り出した。

開始と同時にアリアは文珠を発動させる。入れた文字は『爆』。すぐさま山下の手前に投げると自分は身体強化の魔法『戦いの歌』

を唱えた。

ドガアァァンッ！

「うわっ！　魔法かよコレ！？」

凶悪な爆発に吹っ飛ぶ山下。一旦距離をとって、その異常な視力と記憶力で今の場面を思い出し、アリアのやった事を分析する。

手にあらわれた球、あらわれる文字。魔力を使わずにこれだけの威力の爆発を起こす…。それは、生前に読んでいた漫画に出てきた能力だ。

「お前、転生者か！」

「ええ、アナタと一緒よ！」

距離を置いたハズなのに異様なスピードで突っ込んでくるアリア。山下は慌てて身を翻すと振り向きざまに大剣を振り回した。が…

ガキィィンッ！

文珠の『壁』に阻まれてしまう。

「文珠使いかよ、チートの中でも一番悪質じゃねえか！」

「知りませんよ、私が望んだ力じゃないんですから！」

言いながら、アリアはすぐに次の文珠を発動させる。『柔』の文珠を大剣に投げつけると、大剣はフニャフニャになってしまった。

「うおおぉっ！？　俺の…俺の剣が！」

驚く山下。なんとかバックステップで距離をとると、左腕につけたリストバンドにはめた石に念を送る。
「マテリア『ほのお』、ファイガ！！」

ボアァァァッ！

巨大な火柱が、アリアのいる場所に立ち上る。それは凄まじい威力。熱風が巻き起こった。死んでしまったのではないか…と山下は焦ったが、炎の中に立つアリアを見て目を見開いた。

燃え盛る炎の中、アリアはゆっくりと山下を見据えると、静かに歩きだす。口元が小さく動いていた。呪文の詠唱だ。

「リリス・リリ・アス・リリシズム　目醒め現れよ、燃え出づる火蜥蜴、火を以ってして敵を覆わん」

「なっ…効いてねえ！？」

「『紫炎の捕らえ手』（カプトゥス・フランメウス）！！」

ゴオォォォォッ！

アリアが呪文を唱えると、山下の周囲にも同じように火柱が立ち上る。しかしそれは直接攻撃するものではなく、山下を取り囲む円筒状の炎の檻であった。

「チッ…窒息狙いか。なら、これでどうだ！マテリア『れいき』、ブリザガ！」

腕の石が光を放つ。山下を取り囲む炎は、氷の刃に引き裂かれ散り散りとなっていった。山下は続けてマテリアを入れ替える。それは、多種多様な技を発動させる『てきのわざ』という名前の石だ。魔力コストは高いが、余裕をかましている場合ではない。アリアを甘く見ていた、と山下は後悔していた。

武器はフニャフニャのまま。こうなったら、しばらく魔法戦しかないか。しかし炎は効いていなかったし、それ以外に何が効くんだろう。山下は焦りながらも魔法を唱える。

「トライン！」

山下が腕を突き出すと、雷属性の巨大な三角錐があらわれる。しかしアリアはその電気のピラミッドの中を突っ走って来た！

「嘘だろ！？　アクアブレス！」

次にあらわれたのは巨大な水の塊。魔力のこもった水の大砲の乱れ撃ちである。しかし、これもアリアは物ともしない。避ける素振りすら見せず突っ走った。

「わーっ！？　お前、人間やめてねーか！？」

青ざめる山下の目前まで迫ったアリアは、手に持った三つの文珠を発動させる。それは、知ってる人が見れば最悪な文字だっただろう。

『波』『動』『砲』

ズオォォォォォォォッ！

光が、放たれる。

周囲が白く染め上げられた。

アリアから発せられた光の帯はゼロ距離に近い位置から山下に発射された。一瞬で光は山下を飲み込み、そのまま結界へとぶち当たる。本来の威力であれば、そんな結界なんて消し飛ばしてしまう所だったが…

結界は消えなかった。

「ど、どうして！？　今ので警備員に合図をしようと思ったのに！」

「…そりゃ、お前の力不足ってやつだろ」

！！

背後から声が。それは山下の声だった。驚くアリアに次の行動は取らせまいと、山下はアリアに軽く蹴りを放つ。アリアは先ほどまでの無敵ぶりが嘘のように簡単に宙を舞った。

ドサッ…

「げほっ…！　ど、どうしてかわせたの!?」

「いや、そりゃかわせるよ。お前、多分波動砲を詳しく知らねえだろ？　ありゃ形だけそっくりの光の帯でしかねえ。文珠ってさ、しっかりイメージしないと効果が発揮されないんだけど知らなかったか？」

アリアはしまった、という顔をする。波動砲が何なのか、実は知らないのだ。ただ、若い頃やってたゲームの武器として出てきて、やたらと強かった記憶があっただけだ。宇宙戦艦のアニメなどリアルタイムで見ていた訳ではないので、イメージなんてわかなかった。

「それに…やっぱりお前物理攻撃に弱いのな。初めに武器を柔らかくした時に変だと思ったんだ。魔法無効化、物理攻撃に弱い…って所か」

山下は大剣を持って振り回す。強度は元に戻り、ブンブンと派手な音を立てて風を切った。「諦めな。せめて気絶くらいで止めておくから、大人しくしていてくれ」

山下の言葉には、哀願するような響きがあった。しかし、アリアは首を縦に振らない。空で戦うネギを見てから、山下に言った。

「弟が戦ってるのに、簡単に戦いを放り投げる姉がいるもんですか。私は、諦めません」

ああ、そう言うだろうな。山下はアリアの返事に驚かなかった。アリアの目は、まだ闘志を失ってはいない。山下は内心の焦りを隠しながらつぶやいた。

「だったら…仕方ねえな」
山下は大剣を構えた。
「行くぜ。ここからが本番だ」

「分かりました。私も、全力で行きます」

二人はそんな言葉を交わして向かいあう。転生者ＶＳ転生者。その本気の戦いが、今始まろうとしていた。

第七十一話　戦う者たち

ヘルマンは非常にハイだった。ネギ・スプリングフィールドの抹殺と同時に、極秘裏に受けていた山下の抹殺。この二つの依頼をこなす為に様々な計画を練って来たが、思わぬ幸運の連続でその依頼はクリアされようとしている。そして、個人的に気になっていた少女アリアも手に入れられるかもしれない。デュナミスの実験体の中で唯一生き残った出来損ない。しかしその能力には利用価値の高いものが多かった。捕獲して、洗脳してしまえば良い従者になると考えていた。

「しかし私は君にも興味があるのだよ、ネギ・スプリングフィールド君」

「貴方の好奇心を満たす為にここに居るんじゃないんですけどね」

ネギは無詠唱で風雷の射手を放つ。５０本の矢は飛び回るヘルマンを自動追尾して、恐ろしいスピードで直撃した。

ガガガガガガッ！

「ぬっ…、これは中々…」

ヘルマンが顔をしかめる。ネギは間髪入れずに次の魔法を放った。

『白い雷×１５！』

「なにっ！？」

ズガアァァァンッ！

ネギの手から放たれた雷がヘルマンに直撃した。さすがに焦ったヘルマンはネギから距離を取る。聞いていた話と違う。ここまで強くなってはいないはずだ、と困惑していた。こうなったら、心理戦を仕掛けるしかない。

「ははははは、見事だネギ君。君はあの頃からだいぶ成長したようだね」

「あの頃？　一体なんの話ですか」

「あの頃だよ、あの頃。よもや忘れたわけではあるまい、あの焼け野原となった村の光景を…」

ヘルマンはそう言うと、被っていた帽子を取る。それまでの老紳士の姿は消え、およそ人とは思えない顔があらわれた。

真っ白い仮面のような凹凸の無い顔。奇妙に曲がった角を二本生やしている。その姿に、ネギは見覚えがあった。６年前のあの襲撃。村の皆を石化させた悪魔と全く同じ外見だった。

「貴方は…」

「そうだ、ネギ君。私は君の村を襲い、君の家族や友人たちを石に変えた張本人だよ。お久しぶり、と言っておいた方が良いかな？」

ヘルマンは、その感情の無い顔を向けて愉快そうに笑う。内心で、これでネギは冷静な判断力を失ったと確信していた。しかし…

「だからどうしたと言うんですか？」

「ハハハハ…ハ……なんだと？」

耳を疑った。

「所詮、使役されて動くだけの使い魔じゃないですか。人の命の重さも知らず、言われた事を実行するだけの貴方に一々腹を立てても仕方ないですからね」

ネギは顔色一つ変えずに言った。

「貴方が壊した警備ロボットの田中さんは、関係ない人を巻き込まないようにいつも注意を払ってくれていました。侵入者を排除する際にも周辺の草木を傷つけないようにしていたようです。僕に言わせれば、貴方なんか田中さんの足元にも及ばない。田中さんの方がよほど紳士ですし、人間として素晴らしいと思います」

そして、トドメの一言。

「僕は貴方に何の価値も見いだせない。そんな人の言う事に気を取られている程、僕は暇じゃないんです。さっさと終わらせていいですか？」

「ぬぬぬぬぬ、いい加減口の聞き方に気をつけたまえ！」

頭に来たヘルマンはネギに向かって猛然と突っ込んだ。それは得意の悪魔パンチ。全力の右ストレートだ。

対するネギは、杖にまたがったままヘルマンに向かって飛んで行く。まるで自殺行為。これではただの的だ。ヘルマンはニヤリと笑って…

驚愕した。

ネギの飛んで来るスピードが、異常なのだ。５０メートルは離れていたハズなのに、今はもう目の前。完全に目測を誤った。そして二人の身体は空中で交錯し…

ズバッ！

「ぬあぁぁぁぁぁっ！？」

ヘルマンの右腕が斬り飛ばされた。

「な、何故だ！　君は武器など持っていなかったハズだ！」

そう、ネギは指輪以外に手には何も持っていない。杖は飛行の為に持っているだけだ。戸惑いながらヘルマンはネギを睨みつける。そして、その理由に気づいた。

ネギは杖にまたがってはいない。空中に立ったまま浮いており、腰の位置に杖を持って前屈みになっている。それはまるで、刀を持っているかのよう。抜刀する直前の構えに良く似ていた。そしてその杖を良く見ると、キラリと光を放っている。

仕込み刀。

光は、僅かに顔をのぞかせる刀身に月明かりが反射した光だった。ネギは杖ではなく指輪を飛行魔法の発動体として使用していた。杖は、攻撃魔法用。木乃香との戦いで武器を発動体にする利便性に気づいたネギは、父の形見の杖を容赦なく改造していたのだ。

それを見た世界樹は悲しそうに光っていたりするのだが、それに気づいた者はいなかった。

「グゥゥ…私を怒らせたようだね…悪いがこれからの私は」

「今度はこちらから行きます」

最後まで言わせない。ネギは相手の話を無視して攻撃を開始した。

「ひ、人の話は最後まで聞きたまえ！」

「日本では男は拳で語り合うものらしいですよ！」

「どう見ても刀だろう、それは！」

「ええ、サムライブレード。日本の文化って素晴らしいですよね！」

無茶苦茶な事を言いながら、ネギは猛烈な勢いで刀を振るう。その速さは尋常ではなかった。次から次へと繰り出される剣撃はかまいたちを発生させ、ヘルマンの身体に無数の刀傷をつけた。

「まだまだ行きますよ！」

「ぐあぁぁっ！？　速い、速すぎる！　何かやったな！？」

これは、普通の状態で出来る芸当ではない。それは分かっているのだが、いつ身体強化を図ったのか分からなかった。ヘルマンは目の前の少年の得体の知れなさにゾッとしていた。

ネギが異常に速く動ける理由。それは、雷の魔法を身体に宿したからだ。

先ほどヘルマンに使った『白い雷×１５』。実際にヘルマンに放ったのは3本であり、残りの１２本分は自分の身体に宿していたのだ。武器を隠したり、こっそり身体強化を計ったり。相手を欺く事を、この世界のネギは躊躇わなかった。

ネギの放つかまいたちに、雷の力が宿る。日頃風雷の射手を放っているネギは、この戦いの最中にも新しい技を生み出していた。

「神鳴流奥義、『雷鳴剣』！」

かつて木乃香に「それ雷鳴剣ちゃう」と呼ばれたパチモン雷鳴剣を放つ。それは無数の雷とかまいたちを放ち、もはや原型を留めていなかった。

「ぐおぉぁぁぁっ！　ちょ、調子に乗らないでもらおうか！」

言いながらも、ヘルマンは反撃のタイミングが掴めない。そもそもが速すぎるのだ。それに、相性が悪すぎる。魔法使いだろうと思っていたら、完全に剣士として戦っている。これなら普通に山下に戦わせていれば良かったと後悔していた。

「こうなったら仕方ない、バトンタッチさせてもらおうか」

ヘルマンはそう言うと、逃げるようにネギから離れて山下のもとへと飛んで行った。

ネギとヘルマンが空で戦っていた頃。アリアと山下も地上で壮絶な戦いを繰り広げていた。

「な、何でお前が剣術で俺と五分るんだよ！？」

「何でででしょうねー」

ギィンッ、ギィンッ、という音と共に火花が散る。山下の手にはあの大剣、アリアの手には緑色に光るビームサーベルがあった。それは、文珠で作り出した『剣』。大好きなＳＦ映画をイメージして作られた剣だった。そして、その剣術はというと。同じく文珠で『再』『現』したものだった。あの、小さく偉大な騎士の動きを…

「はぁあぁぁぁっ！」

アリアが、凄い勢いで空中をクルクルと回る。ビームサーベルはその動きと連動するかのように回転して、山下へと襲いかかった。

ギィンッ、ガィンッ、ギイィンッ！

「いや、それ実際に目の当たりにすると結構不気味な動きなんだけど！？」

「失礼な、フォースの暗黒面に堕としますよ？」

「堕とすとか、そういうもんだっけ！？」

そんな馬鹿馬鹿しい会話を交わしている割に、二人は真剣に打ち合っていた。アリアの重力を無視した動きには、流石の山下も手を焼いていたのだ。アリアは次々と信じられない角度から山下を斬りつける。山下は持ち前の反射神経と勘でそれを全て避けきっていた。

スタミナを削れば、なんとか無傷で仕留められるだろう。当て身か何かで気絶させられるハズだ。そう考えていたのだが…

「はいっ！　ほいっ！　へいっ！」

ギンッ、ガンッ、ガィンッ！

「ばけもんか、お前は！？」

全くスタミナが落ちないのだ。それもそのはず、アリアにはエヴァンジェリンから絶えず魔力の供給がなされている。また、山下が先ほど放った魔法は全て吸収していた。今のアリアは恐ろしい程のエネルギーを内包しているのだ。

「だが、物理攻撃に弱いのは変わらない！」

山下は、剣技だけでなく格闘技も交えて攻撃を繰り返す。時には剣をおとりに使った攻撃をしてアリアを翻弄した。そして…

バキッ！

素早い蹴りがアリアの腕を直撃する。ビームサーベルはアリアの

手元から弾き飛ばされた。
「あうっ…いったぁ……」

「悪いな。俺も遊んでる場合じゃないんだ。さっさと終わらせてもらうぜ」

そう言って近づいてくる山下。アリアはそんな山下を見て…

笑った。

「ほいっ！」

「なにっ！？」

アリアのかけ声と共に、先ほど弾き飛ばされたビームサーベルが飛んでくる。山下は慌ててそれを避けると、アリアのそばから飛び退いた。

「ま、まだやんのかよ！　しつこいな！？」

「私って結構一途だから。遊び半分で手を出したら火傷するわよ？」

そう言ってビームサーベルを構えるアリア。山下は覚悟を決めた。多少、傷ついてもいいから全力で止めよう。これ以上はこっちも手加減出来る自信がない。

…その時。

空から、悪魔が降って来た。

アリアと山下の間に割り込むと、ヘルマンは山下の襟首を掴む。
「悪いが選手交代だ。君はネギ少年の相手を頼む」

「な、なんだと?…って、うわぁぁぁぁぁっ!?」

空に向かって、勢い良く放り投げられる山下。上空に目を向けると、そこには猛然と突っ込んで来るネギの姿があった。ネギは、山下の姿を見て一瞬躊躇したが…

狙いを定めて、抜刀した。

「たぁぁぁぁっ!」

キィィンッ!

空中で、山下の大剣とぶつかり合う。山下は忌々しそうな表情をしてネギを睨みつけた。

「問答無用かよ、主人公。いい性格してるじゃねえか」

「女性に刃を向けるような人には、僕は容赦しません。例えそれが、エヴァンジェリンさんの知り合いだったとしても」

山下は笑った。
コイツには全力を出せる。久しぶりに楽しめそうだった。
山下はマテリアと呼ばれる石に念を込めると、「レビテト」と唱える。身体が重力の束縛から解放された。

「悪いが、お前には本気を出させて貰う。覚悟しろよ?」

山下の身体から、闘気が溢れ出した。それは感情の爆発と同時に強烈な必殺技を繰り出す事の出来る状態、リミットブレイク。直感的にその凶悪さを察したネギは、山下に言い放った。

「いやです！」

「はい？」

いやです？　何が？

山下が戸惑った次の瞬間。ネギは山下に背を向けて凄まじい速さで上空へと飛んで行った。

え？

いや、…え？

取り残され、ポツンと宙に浮いている山下。まさか、そんな。主人公なんだろ？　誰か嘘だと言ってくれ…

ネギは、逃げ出した。

図書館島のある湖では、小さな女の子が二人、身体を必死に洗っていた。あのスライム姉妹の二人である。

「汚いのデス…まだ、臭いがとれないような気がしマス…」

「お前なんか全然マシダロ！　こっちは完全汚物まみれダゼ、泣けてクル！」

もう一日中身体を洗っている。とっくに綺麗になっているのだが、トラウマになっているのかずっと身体を洗い続けていた。

その時…空を飛ぶ男の姿を二人は目撃する。その白髪の少年には見覚えがあった。

「あ、フェイト様ー？」

「は？…ああ、フェイト様…じゃねーダロあれは」

勝ち気な少女は言った。

「良く似てるけど、本物はもっと水分多いゼ。ありゃ、幻か偽物ダ。そんなのどうでもいいカラ身体洗おうゼ」

「はーい。にゅ～る、にゅ～る…」

二人はそう言うと、また身体を洗う作業に戻るのだった。

第七十二話　さらに戦う者たち

アリアはヘルマン襲撃を単行本で読んで知っていた。が、既に原作と大きく変わってしまったこの世界で同じような襲撃事件が起こるとは限らない。だから様子見をしていたのだが、今回の襲撃は自分がエヴァンジェリンや石田に前もって原作知識を伝えていれば防げたのではないか、と後悔していた。

ただ、それとは別に。

アリアにはヘルマンと会っておかなければならない用事がある。こうして直接戦えるのは不幸中の幸いかもしれないとも思っていた。

「アリア君。君はここでの生活に満足しているかね？」

ヘルマンは、開口一番アリアにそう問いかけた。

「君は他の多くの転生者と違い、ただネギ少年の世話ばかりして時間を過ごしているようだ。もっと自由にこの世界を生きてみたいとは思わないかね？」

「あら、私は自由気ままに生きてますよ？　ネギの成長を見守るのは私の一番の楽しみですからね」

アリアはにこやかに答えた。これは、本音だ。ちゃんと大人が面倒を見てあげたら、ネギは原作よりも子供らしい幸せを掴めるのではないかと考えていた。結局ネギ自身の願いによって逞しく成長してしまったが、これからもネギの成長を見届けたいという願いは変わらない。

「ふむ…。むしろ弟ばなれが出来ないようだね。君も歪だ」

「それでいいんです。大体、フィクションの世界に転生を望む人間が歪んでないわけないでしょう」

アリアは交渉のテーブルにつかない。ヘルマンはつまらなさそうに溜め息をついた。

「君は、つまらない。大きな翼を持っているのに、飛び立とうとしない。そんな翼はここで折ってしまった方がいいだろう」

ヘルマンはその奇妙なマスクの口を開いた。狙いはアリア、真っ正面に見据えてその口から勢いよく真っ白な煙を吐き出した。

ブォォォォォッ！

「……っ！」

とっさに身を翻すアリア。ヘルマンの放ったのは石化ブレス。先ほど山下との戦いを盗み見た際に魔法を無効化していた為、石化魔法ではなくブレスという形で攻撃したのだ。そして、その選択は当たった。

「うっ…右手が…！？」

「ハハハハハ、避けきれなかったようだねアリア君。村の連中と同じように、君も石になるといい」

アリアは右手を石化されていた。そしてそれは、徐々に範囲を広げて行く。

「アリア君、私に従うならば石化を解いてやってもいいのだぞ？」

勝ち誇ったような笑みを浮かべるヘルマン。さあアリア、私の軍

門に下るのだ！　ヘルマンはアリアの返事を待つが…

アリアは、笑っていた。

「ふふふ、こんなに上手く行くなんて思わなかった。貴方、結構間抜けなのね」

「なんだと？」

「私の能力を前もって調べてあるなら…私に解析能力があるのに気づいてるでしょうに」

アリアはこの世界に渡る際に神族から二つの能力を与えられている。それは、『解析』と『理解』。そしてその能力はこの時の為に望んだものだった。

「あなたの『石化』、身をもって理解したわ。これで村の皆を助けられる！」

アリアはすぐさまヘルマンという悪魔の系譜を遡り、その力の源となる宗教と信仰形態を突き止める。そしてその力に合った解呪の古代魔法を唱えた。

石化していたアリアの腕は元の華奢で細い腕に戻る。それはヘルマンが呆気にとられる程簡単に治ってしまっていた。

「この為に、ネギみたいに私も図書館に忍び込んでいろんな魔法書を読みあさったわ。苦労が報われたわね。さあヘルマンさん、覚悟はいいかしら？　そろそろ終わらせましょう、帰ってシャワー浴びたいんです」

「くっ…、姉弟揃って小憎たらしいガキ共だ！」

ビームサーベルを構えるアリア、斬り飛ばされた腕を再生してファイティング・ポーズを取り直すヘルマン。両者は睨み合うと、同時にダッシュで相手に襲いかかった。

「死にたまえ、アリア君！」

猛スピードで右ストレートを繰り出す。これはタイミングばっちり、もらった！　ヘルマンがニヤリと笑ったその時。アリアは信じられない軌道を描いて宙を舞う。

ぎゅいんっ！

「なに！？」

「ほにゃあぁぁぁぁぁっ！！」

不思議なかけ声をあげてコマのように横回転するアリア、水平に振り抜かれるライトセイバー。それは緑色の残像を残してヘルマンの身体をすり抜けた。

スローモーションになる時間。交錯したアリアとヘルマンはゆっくりとすれ違い離れて行き…

「ぐあぁっ！？」

再生したばかりの腕を、ヘルマンはまたしても斬り飛ばされてしまうのだった。

その頃空では、壮絶な追いかけっこが繰り広げられていた。追うのは山下、逃げるのはネギ。それは恐ろしいスピードであり、常人には目視すら難しい。

「てめえ、卑怯だぞ！　男なら正々堂々戦え！」

「大の大人が子供を追いかけ回して言う言葉じゃないですよ、それ！」

ネギは逃げた。

とにかく、逃げた。

相手の力量は一度剣を受け止められた時に悟った。この男には、まず適わない。だったら、適うようにしなければ。ネギはワザと逃げて相手を追いかけさせ、その動きを単調化させていた。

別荘で木乃香を相手にしていた時から、ネギは不思議に思っていた。剣の腕に自信がある人間ほど、いざこちらが逃げると直線的に追いかけて来る傾向にあるのだ。木乃香しかり、刹那しかり。技を放つ動きにしても、向かい合って戦う時は変化をつけてくるクセに、追撃時にはなんの捻りも無い単調な動きに変わる。何故こんな事になるのだろう…。

しかし、これを利用しない手は無かった。相手の動きが単調になるという事は読み易いという事である。ネギは逃げながら、山下の

動きを分析していた。

「ちょこまかうっとおしいガキだな！　仕方ねえ、早めに使っちまうか！」

山下が真っ赤なオーラに包まれる。大剣を振りかぶると、ネギに向けて一気に剣撃を放った。

『メテオレイン！』

山下の放った剣撃は何故か隕石を呼び出し、ネギに向かって飛んで行く。全く持って意味不明な現象に戸惑うネギ。しかしネギも負けてはいない。

「千の雷！！」

ネギの身体がまばゆい光に包まれる。異常に膨らんだ魔力、強化された身体。ネギはスーパー野菜人となり、飛んで来た隕石の雨をかいくぐる。隕石は自動追尾するが、ネギを追う段階で次々と隕石同士ぶつかり合い、自滅して行った。

「お前、本当に転生者じゃないのかよ！　どう見ても孫悟空のパクリじゃねーか！」

「なんの事か分かりません！」

ネギはそう言うと、先ほどまでとは打って変わって攻めに転じた。山下の身体から立ち上っていた異様な闘気が、今は感じられない。今がチャンスだとばかりに仕込み刀を振り抜いた。

「神鳴流奥義、『斬岩剣』！」

ガガガガガガガガガッ！

「うあああああ、なんじゃこらーっ！？」

ネギは今、あの感電したような暴走モードに近い。まるで痙攣したかのように身体を小刻みに動かしながら小さな斬岩剣を連発した。それはさながら削岩機。本家斬岩剣よりも殺傷力の高い凶悪な技へと進化していた。

「へっ！　でもな、俺もそれくらいの速さは慣れてるんだよ！」

山下はそれを、大剣一本で全て弾き飛ばす。かつて奴隷として闘技場で戦っていた時はもっと動きの速い奴と対戦していたのだ。この程度なら、捌ききれる。

しかしそれは、油断。

山下はやはり、ネギを甘く見ていた。

だから未だに気づいていないのだ。ネギが先ほどから、片腕しか使ってない事に。仕込み刀の鞘部分を持った手は、未だに背後に隠し持ったまま。そこには、尋常でない魔力が流し込まれていた。

キィンッ！　キィンッ！　キィンッ！

「どうしたネギ、速度が落ちて来たぞ！　子供にゃこれくらいが限界だろ、大人しく気絶しな！」

山下が大剣の向きを変えてネギに切りかかる。それは、峰打ち。

当たれば死なないまでも戦闘不能は間違い無しと思ったが…

ギィィンッ！

ネギは渾身の力で仕込み刀を振るい、大剣の勢いを殺す。

「何っ！？」

そして、左手に持っていた鞘を山下に向かって振り抜いた。

「やあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ゴオォォォォォォォッ！

大量の魔力と共に凄まじい剣圧が放たれる。山下は必死に大剣でそれを受け止めるが、そのエネルギーは予想を遥か越えていた。それはまるで…

「どっからどう見てもアバン・ストラッシュじゃねーか！」

大好きだった漫画の必殺技。山下は涙目になりながらエネルギー波に飲み込まれ、地上へと落ちて行った。

地上では、ヘルマンが満身創痍の状態で佇んでいる。アリアの攻

撃に晒された身体は所々欠け、立っているのもやっとだ。ヘルマンは忌々しそうにアリアを睨みつける。

「情報に無い能力だ…。その力、誰に授かった？　まだこの世界には異世界の神が居るのか？」

「さあ。通販番組で手に入れた能力ですからねぇ…。私も良く分かっていません」

アシュタロス高田。今思い返しても意味不明な番組だった。聞いてるヘルマンはもっと意味不明だろう。案の定、混乱していた。

…すると、その時。

結界をすり抜けて一人の少年が歩いて来た。白髪が特徴的な少年…フェイトである。

「ヘルマン、用事は終わった。そろそろ終わらせろ」

「な、なんだね？　年上にはもう少し言葉使いを…」

言いかけて、止まる。

用事は終わった、と言った。そしてこの邪悪な気配。ああ、フェイト・アーウェルンクスはコレクションにされたのか。ならば後はスプリングフィールド姉弟と山下の始末を済ませれば仕事は終了だ。このフェイトとなら、三人を簡単に始末出来るだろう。

「ならば新しいフェイト君。三人を殺すのを、手伝ってくれたまえ。私一人では残念ながら力不足らしい」

「ああ、分かってる」

フェイトは頷くと、アリアに向かって歩き出した。流石にアリアも、突然の侵入者に驚きを隠せない。嘘でしょ、なんでこのタイミングでコイツがここに!?　そう思って固まっていると…

何か、おかしい。

白髪の少年の足下に、黒い影が。それはゆっくりと膨らんで…

ズズズズズ…、と影は少女の姿に変わる。その手には、膨大な魔力がみなぎっていた。

「私のアリアに何をするつもりだ？　悪いがおイタする奴は去勢させてもらうぞ」

ぎゅっ！

フェイトの股間を掴んだ。そして…

『エクスキューショナー・ソード!!』

ズバァァァァァァンッ！
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

アリアは両手で顔を覆う。何という事を。余りの残酷な行為に鳥肌がたった。

それはヘルマンも同じで、思わず股間を押さえて震え上がる。フェイトは氷の巨大な刃に下半身を吹っ飛ばされ、空中に舞った。そこへ…

「ぬわあぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

山下が落下して来た。山下とフェイトは空中でぶつかり合い、そのまま地面へと墜落する。

ドガァァァァンッ！

「ぐ…ぅあぁぁ、痛え…。ケツが割れた…」
激痛に呻く山下。そして自分の下敷きになったフェイトを見て…
「ぎゃあぁぁぁぁっ！」
叫んだ。そこには、真っ赤な血溜まりが。

山下のケツに押しつぶされた、フェイトの頭部があった。

「エヴァンジェリン君…何故、君がここに入れるのだ？　いくら強力な魔族とは言え、この結界を破る力は君には無いハズだ」

先ほどのあんまりな展開に固まっていたヘルマンだったが、気を取り直してエヴァンジェリンへと尋ねる。エヴァンジェリンは、フッと鼻で笑って答えた。

「あの小僧の影に潜って入り込んだだけだ。確かに結界自体は良く出来ていたが、特定の人物を無条件で招き入れてしまうのはいただけないな。今回のようなやり方で、簡単に突破出来る」

「なるほど、それは盲点だった」

まさかこんな手で突破されるとはな…。ヘルマンは自分の詰めの甘さを嘆いた。もう、これでマトモに勝てなくなったのだ。ヘルマンは落胆のため息をついて…

瞬間移動した。

！？

その余りのスピードにギョッとするアリアたち。ヘルマンは人質のいる水牢の真上の空に移動していた。

「残念だ。非常に残念だよ。私にはもう勝ち目は無いらしい。しかしこのままやられるのもシャクなんでね。君たちの心に多少なりとも傷を残して、私は舞台を降りよう」

そしてヘルマンは一本の長い刀を出現させる。そこには禍々しい魔力がみなぎっていた。

「おい、まさか！」
「やめて下さい、話が違いますよ！」
「てめえ、約束を破るつもりか！！」

口々に非難の声を上げる。そんな中、那波を閉じ込めているプリンは震える声でヘルマンに尋ねた。

「わ、私…私は、どうなるデスカ…。そんな魔力、私耐えられまセンシ…」

ヘルマンは笑う。
「最期くらい、役に立ってくれたまえ」

「ヒッ……！？」

ヘルマンの腕が、振るわれる。その瞬間、駆け出す山下。しかしそんな山下よりも速く動き出している人物がいた。それは、遥か上空より突っ込んで来る。

「うおおおあぁぁぁぁぁ！」

ズガアァァァァァンッ！

それは、ネギ。

フルパワーの雷鳴剣をヘルマンの頭に叩きつけた。頭は砕け散り、そこには首の無い身体が残る。爵位級の悪魔の頭部を一撃で木っ端微塵にしたネギの雷鳴剣は、確実にヘルマンの息の根を止めた…ハズだった。しかし…

「残念だったな、ネギ君」

ヘルマンは生きていた。失われた首から頭部が新しく生える。そして今度こそ腕が振るわれ、刀は那波へと一直線に落下して行った。

「那波さあぁぁぁぁんっ！」

「はっはっは、その絶望の顔が見たかったのだよ！」

刀は、真っ直ぐに猛スピードで落ちて行く。アリアが文珠を投げるよりも、エヴァンジェリンが魔法を唱えるよりも速く…那波へ向かって飛んで行く。もう間に合わない、誰もがそう思った時。

グサッ…！

「ぐうっ…ぁあ……」

刀は那波の手前で止まる。そこには一人の男が。

刀に貫かれた、山下がいた。

第七十三話　天気雨

顔に鮮血がかかった。

スライム娘のプリンは、目の前の光景に呆然とする。もう死ぬしかないと固まっていた所に突然飛び込んで来た男。迫り来る刀を身体を張って止めてくれたのだ。恐怖と混乱でワケの分からなくなっていたプリンは、思わず水牢を解いてしまう。元の少女の身体へと戻って、その場にへたり込んだ。

解放され、そのまま地面へと投げ出される那波。その衝撃で意識を取り戻す。そして…見てしまった。

目の前で血まみれとなった山下の姿を。

「キャアァァァッ！」

思わず悲鳴をあげる。それを見た山下は「しまった」という顔をした。那波を、こちらの世界に巻き込みたくなかったのだ。彼女はまだ自分が麻帆良で一般人として生きていた頃の思い出の人。殺伐とした世界に巻き込んで傷つけたくはなかった。

（いや、まだ間に合う！）

山下はすぐさま那波に駆け寄ると那波の顔を正面に見据え魔眼を解放する。本来であれば魅了するだけの魔眼だが、こうして至近距離で使うと無条件で相手を眠らせる事が出来る。神族が性犯罪をさせる為に付属した能力だったが、山下はそれを那波の心を守る為に使ったのだ。

ガクッと力を抜いて山下に倒れかかる那波。山下はその身体を地面へと横たえる。血に濡れた手で触ってしまった為に服を汚してしまった。山下は悲しい顔をして那波につぶやく。

「ごめんな。俺はお前を泣かせたり、汚してしまう事しか出来ねえみたいだ」

そして、上空を見上げ睨みつける。そこには薄笑いを浮かべるヘルマンがいた。アイツだけは許さねえ！　山下は怒りに燃えた。身体がまた真っ赤なオーラに包まれる。刀を捨て、自分の大剣を構えると、勢い良く地面を蹴って上空へと飛び立った。

地上から飛び立った赤い彗星は、真っ直ぐにヘルマンへと向かって行く。しかしそれはヘルマンにとって格好の的だった。いくら山下が強くても、所詮魔眼が使えるだけの人間。アリアのような抗魔力があるわけではない。ならば、簡単に石に出来るだろう。

「ネギ君、邪魔だから消えてもらえるかね」

バキッ

「あぐぅっ！？」

那波を見て呆けていたネギを蹴り飛ばすと、ヘルマンは山下の方

を向いて口を大きく開ける。そこから、おびただしい量の石化ガスが噴出された。

ブオォォォォォォォッ！

直線的に突っ込んで来る山下に、それを避けるすべはない。ヘルマンはそのまま、地上にいる那波たちまで石化させるくらいの量のガスを吐いていた。

「ハハハハハ、奴隷上がりの賞金稼ぎ風情が！　身の程を知るといい！」

勝利を確信したヘルマン。山下だけでも殺して、退却する予定だった。しかし。

その表情は凍りつく。

巨大なガスの塊の中で、恐ろしいまでの闘気が膨らんできたのだ。そして、その闘気は山下の叫び声と共に爆発した。

『超究武神羅斬！！』

光が周囲を照らす。輝いているのは山下の身体である。その身体は重力や物理の法則を無視して、有り得ない速さで大剣を振り回す。

まるで小さな竜巻のように、斬れないハズの石化ガスまで斬り飛ばしてヘルマンへと突き進んだ。

「オラアアアアッ！」

もはや視認すら出来ない程の速さ。ガスを全て吹き飛ばすと大剣はヘルマンの身体を捕らえた。そして、そこから一方的な剣戟ショーが始まる。まるでミキサーにかけられたかのように、ヘルマンはその身を高速で削られて行った。

ザシュ！、ザシュ！、ザシュザシュザシュ！、ザシュザシュザシュ

ドガアアアアアンッ！！

ヘルマンの身体が、大爆発を引き起こす。山下は爆風をモロに受けると、そのまま地面へと落下して行った。薄れゆく意識の中…ああ、女を救って死ぬとか格好良いじゃねえか、などと考えていた。この世界にやってきた理由。それは格好良く生きてみたいという願いがあったからだ。小さな頃に憧れたヒーローに…なれただろうか。

石化ガスに侵食された身体がパキパキと音を立てるのを聞きながら、山下はそっと目蓋を閉じた。

地上ではアリアとエヴァンジェリン、ネギの三人が落下地点へと走っている。しかしそれよりも早く駆けつけたのはスライム娘のプリンだった。

「助けてくれた恩は、返すのデス！」

人質を助ける為だったのは分かっている。自分の事など、眼中に

無いだろう。しかし結果として救ってくれたのは事実なのだ。プリンは有らん限りの力を振り絞って身体を変形させた。

「変身！　うぉーたぁべっどぉ！！」

もよよ～ん、という気の抜けた音と共に巨大なベッドに変身した。しかしこれでは強度が足りない…。焦るプリン。そこに、はるか遠くから凄い勢いで水の塊が飛んで来た。

「プリンーっ！　助けるゼー！」

「合体にゅるにゅるデス～」

それは下水処理されたと思っていた姉妹たちだった。一体今までどこに…しかし今はそんな事どうでもいい。三姉妹揃ったら、出来ない事は無いのだ。多分。

「合体！　やけに弾力性に富んだ妖しいホテルのベッドォ！」

…それはどうだろう。

しかし救助には問題無かったらしく、落下してきた山下をしっかり受け止めると優しく包み込む。そしてその姿を水牢に変えると大きな声で叫んだ。

「「「うぉーたぁ・ひーる！」」」

山下の身体につけられた傷が、みるみるうちに治って行く。あの刀が貫いた腹部の傷も、完全に塞がっていた。しかし…石化までは治らない。

「うわ、これヘルマン様にやられたンカヨ！　無理じゃネ？」

「ねとねとしても、治んないデス…」

「それは、アリア・スプリングフィールドに頼みまショウ」

見ると、向こうからアリアたちが駆け寄ってくる。あの戦いで石化を解けるようになったアリアなら、山下を救えるだろう。プリンはホッと安堵の表情を浮かべるのだった。

山下が意識を取り戻したのは、アリアが文珠で石化を解いてすぐの事だった。目の前にはアリア、エヴァンジェリン、ネギ、スライム三姉妹。少し離れた所に眠っている那波とそれを抱きかかえる茶々丸がいた。

「俺は…まだ、生きてるのか」

あの高さから落下したら、砕けて死ぬとばかり思っていた。

「このスライムさんたちに感謝して下さいね。あと、石化を解いた私にも」

スライム？　山下が視線を移すとそこにはぷよぷよと身体を揺らす少女たちが。確かヘルマンの使い魔だったハズだ。
「お前ら…俺はヘルマンと敵対したんだけど、いいのか？」
「いいんデス。あなたは命の恩人だカラ」
「それに俺たちはもうヘルマン様の下部じゃないカラナ」
勝ち気な少女、すらむぃは茶々丸を指差した。
「新しい雇い主。茶々丸様の命令で助けたンダ」
得意気に笑うのは、茶々丸。山下たちにその経緯を説明した。

茶々丸はエヴァンジェリンの命令で、麻帆良に侵入したスライム三姉妹の探索をしていた。麻帆良学園内の監視カメラのデータを調べてその存在を突き止め、図書館島のある湖で必死に身体を洗っている姉妹を見つけ出していた。

茶々丸は姉妹を茶々丸エフェクトで固定化すると身柄を拘束する。その時、殺すなら殺せとヤケを起こしたすらむぃの態度が気になって事情を聞いたのだ。姉妹は、ヘルマンにこき使われる事に疲れていた。ろくに美味しい思いも出来ず、ただ罵倒されたりイヤミを言われたり。この麻帆良では下水に流されるハメにあった。もう死にたい、と言って来たのだ。そこで、茶々丸は一つの提案をする。

「私の使い魔になりませんか。そうすれば、一日中お風呂で遊べますよ」

その誘いに頷かないワケがない。

こうして姉妹はアッサリヘルマンを裏切って茶々丸の下へと身を寄せる事となったのだ。

「なぁ、茶々丸…。別にいいのだが、私の許可を得ないで風呂を貸したりしないで貰えるか…」

話を聞いて複雑そうな顔をするエヴァンジェリン。主人として、そこは少し面白く無かった。

「しかしマスター。彼女たちがいれば浴場の掃除を任せられますし…」

茶々丸はエヴァンジェリンに耳打ちをする。

「……な事も出来るのです」

「ぬっ、それは…」

エヴァンジェリンの顔が真っ赤になる。興奮して、息が荒くなっていた。

「許可しよう！　ウチの浴場は別荘も含め使い放題だ！」

わーい、と喜ぶ姉妹。アリアだけはジトッとした目でそれを見ていた。流石に何をしようとしたか分かったのだ。どこまでそっち方向に奔放なんだ、とため息をつく。

「ところで、山下さん」

これでは話が進まないと思ったアリアは、気を取り直して山下に

話しかけた。
「これからどうしますか？　記憶も戻ったし、麻帆良を出て帰りますか？」
　山下はヘルマンたちと一緒に来た。つまり、ヘルマンを雇った連中…恐らくは魔法世界の仮面の男たちの仲間なのだろうとアリアは見ていた。
「ああ…、俺は帰る。帰って、こんな仕事をやらせた野郎をぶっ飛ばしてやる。そして、もうお前らを狙うなって言ってきてやるさ」
　そう言ってから、山下は茶々丸に抱えられた那波を見た。
「悪いけどそいつの記憶消しといてくれないか。あんな光景、トラウマにしかならないから。俺の事は、忘れてもらった方がいい」
　その言葉に、エヴァンジェリンは渋い顔をする。那波が楽しそうに料理をする姿を見ていたからだ。あの那波の笑顔は、見ていて本当に幸せそうだった。
「危険から遠ざけたい、という事か。気に入らんがお前の気持ちも理解出来る。分かった、そこは私が処理しておこう」
　エヴァンジェリンはそう言うと、しゃがみ込んで自分の影に手を入れる。そこから、大きな紙袋を取り出して山下に手渡した。
「これは？」
「お前が注文していたぬいぐるみだ。ジュマルに無理を言ってさっき仕上げさせた。帰りを待っている奴がいるのだろう？　持っていけ」
　確かに、袋の中にはクマのぬいぐるみが入っていた。あの雑貨屋

で見た立派なぬいぐるみ。孤児院で待つ子供たちの顔が蘇ってくる。

「ありがとう。アイツらも喜ぶよ」

山下はエヴァンジェリンに礼を言うと、皆に背を向けて歩き出す。リストバンドにはめられたマテリアを高く掲げるとその一つを発動させる。灰色のマテリアは鈍色に光ると、夜空に魔方陣を展開させる。そこから、一匹の狼があらわれると山下の元へと走り寄ってきた。

「ありがとう、皆。俺はこれから魔法世界に戻って落とし前をつけに行く。もうアイツらに悪さをさせないようにな」

「ちょ、ちょっと待て！　一体どうやって帰るつもりだ！？」

エヴァンジェリンが慌てる。この麻帆良の結界を破るにしても、今日は警備が厳重だ。そうでなくても密航してきたような人間。魔法世界に行くのはかなり難しいハズだが…

「ああ、それなら平気だ。フェンリル！」

『ウォンッ！』

返事をする狼。身体を光らせると、その姿を大きなバイクに変える。呆気にとられる皆をよそに、山下はフェンリルにまたがるとゴーグルを装着する。

そこに、今まで黙っていたネギが声をかけた。

「山下さん！」

「ん？」

「僕、もっと強くなって…今度こそ山下さんを本気にさせてみせます！　だから、その時まで絶対死なないで下さい！」

その言葉に、山下は苦笑いする。これから魔法世界に戻ってデュナミスと戦うつもりだった。恐らくは適わないだろう。死を覚悟してでも止めないといけないと思っていたのだ。そんな気持ちを、ネギは山下の言葉のニュアンスから察知していた。さすが主人公、妙な所で鋭いものだ。

「ああ、分かった。今度また戦ってやるよ。その時にゃ、ボコボコにしてやるから覚悟しておけよ！」

ニカッと笑う山下。ネギも笑顔を見せた。

グオォォォォォンッ！

バイクが、まるで獣の咆哮のような音を上げる。山下は最後に皆に手をふると、思いっきりアクセルを回して急発進した。バイクは爆音を立てて麻帆良の石畳を疾走する。そしてある一定の速度に達した時…

ズガアァァァァンッ！

まばゆい光と共に雷の落ちたような音を立てて、山下は麻帆良から姿を消した。残るのはバイクの走ったタイヤ跡に沿って燃える炎だけ。それは、某タイムトラベル映画を思わせた。

「山下、か…。無茶苦茶な奴だったな…」

「ええ本当に。それにネギの言う通り、最初から最後まで手加減されちゃってたし。悔しいけど、今の私じゃ彼には勝てない」

暗闇に向かって一直線に伸びる炎の帯を見ながら、エヴァンジェリンとアリアは消えた転生者に想いを馳せるのだった。

山下の消えた翌日。

いつも通りの日常が麻帆良には戻っていた。生徒たちは今日も元気にやかましく、ネギやアリアもコントロールに手を焼いたりして

いた。

そして、無事に授業も終わり…皆は家路につく。一人、また一人と教室を出て行く中、那波千鶴だけはぼんやりと窓の外を眺めていた。

「あれ、ちづ姉まだ帰んないの？　部活無いんでしょ？」

声をかけたのは村上夏美。これもいつもの光景だ。那波は窓の外を眺めながら、夏美に答える。

「ええ、今日は雨みたいだから。部活は無いと思うわ」

あれ、雨？　こんなに夕陽が綺麗なのに？　そう思って不思議そうに窓の外を眺める夏美。降りそうにないよ、と言おうとして那波に振り返って…言葉を失う。

ああ、雨だ。

那波の頬には、確かに雨が伝っている。

何も言えない夏美は、ただ肩を震わせる那波を見守る事しか出来なかった。

外伝４　運命を切り裂く者

とある世界の神界の一室にて、神族調査官のヒャクメは目の下に大きなクマを作ってぐったりとしていた。テーブルの上には愛用のＰＣの他に大量のファイル、飲み干された空の栄養ドリンク剤の小瓶が転がっている。

「もう…ウンザリなのね～…これだけ探しても見つからないなんて有り得ないのね…」

主犯格の過激派神族の残党を探し始めてかれこれ２ヶ月。ヒャクメは寝る間も惜しんで探し続けたが神族たちは一向に見つからなかった。既に捕まえた神族たちから聞き出せたのは、残りはあと二人。そのうち一人はアシュタロスがその消滅を確認したので実質あと一人となっている。

モニターを見るだけで吐き気がする、とテーブルに突っ伏したヒャクメに、同室で作業をしている土倶羅は声をかけた。

「もしかしたら…アシュタロス様のように人間になっているのかもしれんな。これを見るのじゃ」

土偶羅は三十畳ほどの部屋の大半を埋め尽くす奇妙な機械の液晶モニターをつけた。そこには、京都で散った神族田崎勝敏の顔が映っている。

「転生追跡捜査鬼『見つけた君改』で確認した神族じゃが、発見時刻は死亡する直前…つまり人間の身体を捨て神族に戻った時。どうも人間の身体を隠れ蓑にしている時は見つからないらしい」

「それじゃあ、転生追跡の意味無いのねー！」
ガックリとうなだれるヒャクメ。そんな方法で隠れられたらどうしようも無い。これまでの苦労は何だったのか、と思っていた。

しかし、土偶羅は意外にもそれ程落胆はしていなかった。
「だからこそ、奴を宇宙の卵の中に送ったのだろう。奴の強運とジョーカーとしての働きに期待して…」

「それはそうだけど…」
ヒャクメは微妙な顔をする。
「仕事そっちのけで遊んでるような気がするのね～…」

モニターに映る魔法世界の孤児院を見ながら、ヒャクメは溜め息をつくのだった。

「うわーははははは！　これで暫く左団扇の生活で豪遊三昧やー！」

魔法世界のボブカット・レイの事務所で、リッパーは大金を入れた麻袋をレイのデスクに乗せる。ドスンと凄い音を立てた袋からは、大量の金貨や紙幣がのぞいていた。

「リッパー。犯罪は良くない」

「何で犯罪になるんだー！　ちゃんと普通に稼いで来たわい！」

信用出来ないレイは、リッパーの肩に乗っている妖精に尋ねた。

「本当か、ルシオラ。これ、ただの護衛や宅配だけで稼げる金額じゃないだろう？」

「それが、護衛だけじゃ無かったのよ」

苦笑いする小さなルシオラ。リッパーの肩から降りると、元の大きさに戻って事の経緯を説明した。

山下が抜けた後、リッパーたちはユグドラシルという場所の調査を一旦切り上げ、孤児院の資金稼ぎを始めた。普段は小さいルシオラもこの時ばかりは元の大きさに戻って三人で手分けして仕事をしていたのだが…

ある日突然飛び込んで来た、とある国からの護衛の依頼。国際的な会議に出席する要人の警護にリッパーが名指しで選ばれたのだ。依頼主はその国の王女であり、大層な美人らしい。それまで数多くの護衛を成功させてきたボブカット・レイ事務所の職員たちの中でも、特に仕事ぶりが良いと評判のリッパーに白羽の矢を立てたのだった。

ルシオラはリッパーの監視として無理矢理ついて行く事にした。依頼主が女。一人にしたら、また妙なフラグを立てかねないからだ。

その予感は半分的中、半分外れる事となる。

その会議はとある浮遊大陸で行われたが、謎の魔法生物の集団の襲撃を受ける事となった。そこでリッパーは、ルシオラと共にその強大な力を見せつける事となる。ルシオラは霊波砲でドラゴンたちを撃墜し、リッパーは文珠を駆使した攻撃で化け物の大軍を一気に吹き飛ばす。それは一騎当千という言葉でも表現出来ない凄まじい力。余りにも一方的な戦いによって、襲撃者たちはものの二十分で片付けられてしまった。

二人の存在は、魔法世界に知れ渡ってしまった。そしてさらにマズい事に、一緒に警護に当たっていた一人の男に目をつけられてしまう。それはかつてナギ・スプリングフィールドと共に英雄と呼ばれた男、ジャック・ラカンであった。

「お前ら面白えな。ちょうどいい、追加で金払うからもう一働きしねえか？」

フラグは立った。嫌な方向に。

ジャック・ラカンは自らが主催する格闘大会にゲストとして二人を招いた。提示された金額は驚くような額だった為、リッパーは二つ返事でその依頼を受けてしまう。そして…

「私達で参加者全員をたおしちゃったのよ。主催者のラカンさんも含めてね。で、依頼料金プラス賞金の一割をもらって帰って来たってわけ」

「俺は全額貰って来たかったんだけどさ。ルシオラが貰い過ぎは良くないって言うから我慢した」

こいつらは…

ここ数日、やたらと物騒な依頼が増えたのはこの二人のせいだったのだ。レイは恨めしそうな顔で二人に言った。

「責任とって、今来ている依頼を処理する事。断ってもいいし受けてもいいけど、今回ばかりは俺もフォロー出来ないからな」

「「ええー…」」

やりすぎたのだ。今やボブカット・レイの事務所は警備会社か傭兵派遣会社と勘違いされていた。

結局二人は依頼を断って回る事となり、ユグドラシルの調査を再開させるのに二週間もの時間をロスする事となってしまうのだった。

そして、調査の再開を迎えた朝。リッパーの通信鬼に連絡が入る。
それは、よく知る顔馴染みからの連絡だった。

『横島さん、起きてますか！　横島さん！！』

仮住まいとしている小さなボロアパートの一室に、女性の少し慌てた声が響きわたった。リッパーは寝ぼけ眼でそれに反応すると、大あくびをかいて通信鬼を見る。顔についた小さなモニターには小竜姫の顔が映っていた。

「おはようございます…あれ、どうしたんだ小竜姫？」

『横島さん大変なんです…って、きゃっ！？』

顔を赤くする小竜姫。リッパーは裸だったのだ。それも、いたる所にキスマークをつけていた。

「あー…ごめんなさい。服着た方がいいよな」

『い、いえ、お気になさらずに…』

微妙に目をらんらんとさせる小竜姫に若干ビビりながらも、横島は急いで服を着た。以前のように裸踊りでもかましてやりたい所だが、何だか目で犯されそうだったのだ。それにベッドにはルシオラもいるし騒いで起こすのは悪い。

『えっと、手短に言いますね。ユグドラシルなんですが、ヒャクメがその中心部に強大な魔力を感知しました。どうやら人間らしいのですが、出来れば早めに調査を再開して欲しいのですが…』

「ああ、今日から本格的に再開するよ。魔力？　とりあえず中心部

に行けばいいんだよな」

『はい、時空の歪みも感知されています。恐らくは、ゲートキーパーかそれに準じた存在かと…』

リッパーは唸る。過激派神族の捜索もそうだが、自分たちに貸せられたもう一つの依頼、「とある転生者の救出」に繋がる情報も途絶えている。今回の捜索がそのどちらにも掠っていなかったら、またも時間の無駄になってしまうが…。

「OK、何とか今日中にでも接触してみるよ」

今は兎に角動くしかない。リッパーは小竜姫の言う通りにする事にした。そして軽く挨拶をしてモニターを切ろうとすると…

『あ、横島さん！』

「え？」

慌てて声をかける小竜姫。なんだろう？　そう思って不思議そうな顔をすると、小竜姫は顔を真っ赤にしたままリッパーに言った。

『わ、私も寂しいですから！　はやく帰って来て、私にも構って下さいね！』

そしてすぐに切れる通信。よほど恥ずかしかったのだろう。リッパーは鼻の頭をポリポリ掻きながら苦笑いをした。

「…やっぱり小竜姫も連れて来た方が良かったかな。そうすれば三人で…」

「三人で？」

ギクッとリッパーが固まる。ベッドで寝ていたルシオラは、いつの間にか背後に立ってリッパーに微笑みかけていた。額に、青筋を立てて。

「さすがヨコシマね、昨日あれだけ頑張ってまだそんな事言っちゃうんだ♪」

「いえ、あの、この世界ではリッパーという名前で…」

「んっふっふ～♪」

ガシッと肩を掴まれる。これは、詰んだ。

「じゃあ、私はアナタの男としてのプライドをズタズタに切り裂いてあげるわ♪」

「いぃいやあぁぁぁぁぁぁっ！？」

ルシオラに担がれてベッドに押し倒されるリッパー。結局その日は朝早くから過激な運動を繰り返し、ユグドラシルの調査に乗り出したのは昼過ぎからとなってしまった。

ユグドラシルとは、魔法世界における世界樹のような存在であるが、その姿を見た者はいないという。強烈な認識阻害の魔法がかけられている上に、膨大な魔力の嵐を防壁として纏っている為に近づ

く事すら難しいのだ。リッパーとルシオラは魔科学で作り上げたサーチスコープと文珠の力でユグドラシルを探し当て、内部に侵入する事に成功した。内部はまるで迷路のようになっており、人によって手が加えられた場所である事が見てとれる。

「ねえヨコシマ。毎回ここの構造変わるのってやっぱり中心部にいる人間の仕業なのかしら」

「どうだろうなー…そもそも、この樹とどう言う関係かすら分からないし」

中にいるからと言って、そいつがコントロールしているとは限らない。リッパーたちは迷いながらも警戒を怠る事無く、確実に中心部へと進んで行った。

そして。

その中心部と思われる巨大な空間にたどり着いた時。リッパーたちは不思議な光景を目にする。フロアの真ん中、たくさんのツタによって出来た柱の中に巨大なクリスタルがある。そのクリスタルの中に、一人の女性が祈るような姿勢で閉じ込められていた。

「おー、こりゃ綺麗な人だなー…」

「もう、奥さん隣にして言うセリフじゃないでしょ！　それに良く見て。この人、歴史博物館で見た事あるわ。確か…」

「災厄の女王、て奴か」

リッパーは即答した。凛として気の強そうな顔立ち、美しいプロ

ポーション。どことなく雰囲気が以前の上司に似ていたので覚えていた。歴史によれば、戦争犯罪人。本来なら助けるべき人物ではないのだが…

「どうするの、ヨコシマ」

「決まってるだろ？」

リッパーの笑顔に、ルシオラも笑う。そう、決まっているのだ。無類の女好きにして、どんな運命をも切り裂いてきた彼だから。答えなんて決まっている。

グオォォォォォォッ！

全身の霊気を練り上げ、リッパーはその右腕に巨大な霊波刀を作る。クリスタルと向かい合うと、真剣な眼差しでそれを構えた。そして…

かつて、大地の楔から少女を解き放ったように。

リッパーはクリスタルへと勢い良く霊波刀を突き刺した。

外伝４　運命を切り裂く者（後書き）

この横島は、ＧＳ和樹極楽大作戦における「悲しい世界」を経験した横島です。だから、小竜姫とも既に深い仲だったりします。読んで無い方は、とりあえずハーレム作って幸せになった横島だと、考えてくれたらよろしいかと。

第七十四話　麻帆良を守る人

スプリングフィールド姉弟による侵入者撃退のニュースは、麻帆良だけではなく魔法世界にもすぐさま発信された。発信者は学園長である近衛近右衛門。本国にネギの成長をアピールすると共に麻帆良に敵対する勢力への牽制をも狙ったものだった。その映像情報等をまとめたのは超鈴音。学園長室で二人は今回の事件について話し合っていた。

「ネギ君の成長には目を見張るばかりじゃわい。宮崎のどか君も魔法を使えると言うし、この調子ならワシが安心して隠居する日も近いかもしれんのう」

「……学園長、一つ聞きたい事があるヨ」

超が、真面目な顔で言う。

「何が目的であのクラスを作ッタ？　今の口振りだと、魔法世界に宮崎たちが率先して関わって欲しイと言ってるみたいヨ」

超は前の世界でも学園長の真意を計りかねていた。不自然に集められた魔法関係者と才能を秘めた者たち。ネギ・スプリングフィールドの従者候補として、という理由だけで集めたとは考えにくい。魔法バレを起こして歴史を変える事にしか頭が回らなかったあの頃は深く考えなかったが、今は非常に気になっていた。

「ふぅむ…。今は他に誰も居ないから、超君にはここで教えておこうかのう」

少し顎を撫でて思案してから、近右衛門はそう言って人払いの結界を張った。ゴクリと唾を飲み込む超。そんな緊張した超に鋭い視

線を送りながら、近右衛門は言葉を選びながら話し始めた。

麻帆良の学園都市は日本における魔法使い達の活動拠点である。それは世界中の魔法使いたちの共通認識であるが、実際は世界樹の力を使って一般社会から迫害されていた魔法使いたちを保護する、という目的で作られたのが始まりだった。いわゆる隠れ里であり、本国メガロメセンブリアの支援を受けて現在のような学園都市となるにまで発展を遂げた。

麻帆良のような学園都市は世界各地にある。有名なのはイギリスだが、他にもスペイン、イタリア、フランスといった欧州諸国、アメリカ、カナダ、ブラジル等数多くの国で魔法使いは自分たちのコミュニティーを形成していた。中でも日本は世界樹の恩恵を受けて都市全体を認識阻害の魔法で覆う事が出来る為、世界有数の安全な学園都市として有名となった。関西呪術協会からの妨害や攻撃はあるものの、他の都市と比べたら圧倒的に平和だったのだ。

そんな麻帆良学園だが、近衛近右衛門が学園長に就任してからは、ある活動を活発化させている。それは、簡単に言えば人助け。この世界の魔法使いだけでなく、魔法世界で迫害を受けて居場所を無くした人間の受け皿にもなろうとしたのだ。その活動は初めこそ難航したが、ナギ・スプリングフィールドら多くの賛同者を得て活動を軌道に乗せる事に成功した。麻帆良学園には魔法世界からも多くの人間がやってきて、世界でも最大級の学園都市となって行った。

麻帆良学園には様々な人間がやってきた。その中にはワケありの人物も多く、有名な所で言えば闇の福音エヴァンジェリン。黄昏の巫女神楽坂明日菜に、西の殺戮姫近衛木乃香もいる。それぞれ命を狙われるような事情を抱えた人物であるが、近右衛門は彼女たちを守る為に走り回った。不穏な動きを見せる教師たちを宥め、時には牽制し、本国とは危険な駆け引きを続けた。どんな手を使っても彼女たちを守る…それは己の信念であると同時に、自ら命を投げ打って麻帆良を守っている友ナギ・スプリングフィールドとの約束でもあった。

近右衛門が明日菜たちを一つのクラスに纏めようとしたのは、そうした考えから生まれたアイデアである。近く研修にやってくるナギの息子、ネギ・スプリングフィールド。彼の受け持ちのクラスならば本国の連中も手だしは出来ない。また、ネギが成長して魔法世界で大きな力を持つようになれば彼女たちの立場も良くなるだろう。そんな期待を込めて、あのクラスは作られた。魔法の素質のある一般生徒も、出来ればネギの下で力に目覚め自らの意志で魔法社会で生きて行けるようになって欲しい。素質だけあるという一般人は最悪さらわれて、悪い魔法関係者によって奴隷にされたり生け贄にされかねないのだ。

「ワシの狙いはのう、超君。利用出来るものは英雄の息子だろうと利用して、この麻帆良で生きて行く人間を守る事じゃよ。その為に学園長の座に上り詰めた。ワシはワシの信念を貫く為に、これからも色んな人間を巻き込むじゃろう。それは超鈴音君、君も例外ではないじゃろうな」

そこまで言うと、近右衛門はすっかり冷えた茶を飲み干す。話しながら少しテンションが上がりすぎたのだろう、額の汗を拭うと一

息ついてから言った。

「これが、ワシという人間じゃ。ロクな死に方はせんじゃろうが、今更生き方を変える歳でもないからの。悪人は悪人らしく、最後までこのやり方は貫き通すじゃろう」

「ふふふ。それが悪と言うなら、世の中悪人だらけネ」

超は笑った。笑いながら、目の前の老人が好きになりかけていた。耳障りの良い言葉を並べるだけの人間など信頼出来ない。こうした毒のある人間の方が好感が持てた。しかし…

超はこの事を聞かざるを得ない。信頼出来るかは、その答えを聞くまで判断出来ないのだ。

「学園長、芦先生に学園の地下に居る人物について聞いたんだガ。その事については、話せるカ？」

「……っ！？」

近右衛門の表情が固まる。

額には、また汗が噴き出していた。

「あ、芦君か…。彼も超君を信頼しておるのじゃろうな。この事は滅多な事では口に出来ないんじゃが…今更隠しても意味が無いから言ってしまってもいいじゃろう」

コホン、と一つ咳をする。

「超君、これは本当に極秘事項じゃ。信頼出来る人間以外には…芦優太郎君以外には他言は絶対にしないと誓って貰えるかのう」

「…分かった、誓うヨ」

近右衛門の眼差しの鋭さは、先ほどまでの比ではない。超は姿勢を正して聞く体制に入る。それを確認してから、近右衛門は麻帆良に眠る人物…創造主について話し始めた。

芦・グレート・ガーデンホテルの一室では、芦優太郎に加えて石田留美、そして瀬流彦オコジョがルームサービスで頼んだ食事を楽しみながら話をしていた。

「マスター、それでは補足しきれなかった転生者がその創造主という存在なのですか？」

「ああ。勝敏の記憶を信じるならば、な。確かに、世界の始まりを告げるビッグバンと同時に介入されたら時空震など観測出来ない。ただ、やり方としては強引な上に残酷過ぎるがな。途方も無い時間を不滅のまま過ごし、精神はとっくに死んでいるだろう。麻帆良の地下に眠るのは、生きているだけの存在だ」

芦は忌々しそうな顔をしている。怒りで喉を通らないのか、食事のペースは落ちていた。そこへ、全くペースの落ちない瀬流彦オコジョが質問する。

「けど、その創造主という人は何故麻帆良にいるんですかね。始まりの魔法使いなら僕も高畑先生に聞いて知ってますが、ナギさんに倒されたんですよね？魔法世界で…」

そう、創造主はナギ・スプリングフィールドによって倒され世界には平和が訪れる。それが英雄の物語のハズなのだが…

「倒したのは乗り移っていた神族、それもトドメを刺せていない。そして不滅の肉体は二度と悪用されない為に麻帆良の地下に。…というか、世界樹の中だな。世界樹が魔法世界と繋がっているのは知っていたかね？」

瀬流彦オコジョが固まった。

魔法世界が世界樹で繋がっている？

「まぁ、知らないだろうな。魔法世界のユグドラシルという世界樹と、この麻帆良の世界樹は繋がっているのだよ。ナギ・スプリングフィールドは世界樹の中に創造主を封じて、また神族に憑依されないように創造主の身体に自分の魂を入れ蓋をしている状態だ」

もはや愕然とするしかない瀬流彦オコジョ。それでもチュルチュルとパスタを食べ続けるのはさすがだ。

「マスター、質問です」

そこへ石田が問いかける。

「創造主がわざわざ封印されたのは悪用されるからだけですか？世界樹に封印されたというのも必然性が見えません。封印するならば他にも良い場所があるのではないでしょうか」

「それは、な。順番が違うのだよ。封印する為に世界樹に行ったのではなく、創造主が世界樹にいたからやむなく世界樹を使って封印したのだ」

ワインに軽く口をつけてから、芦が答える。

「創造主は、神族が身体を離れた後に世界樹を使って何かをしようとしていた。殆ど本能的にな。それを命を張って止めたのがナギであり、その妻アリカだったのだよ。勝敏の記憶にはここら辺りの知識が少ないから何をしようとしていたのかは分からないがな」

世界樹、創造主、英雄による封印。石田は分からない事だらけで混乱し始める。そして混乱しながらも、次に何を成すべきか考えていた。

「マスター。そこら辺の事は次の世界樹発光の際にナギさんに直接聞いて確かめたいと思います。私は、能力者の調査を続けるという事で宜しいでしょうか」

「そうだな…。ああ、そうだ忘れていた。彼の世話を、忘れないでくれよ。私は私でやらなければならない事がある」

指をさす芦。その先には、テーブルの上で酔いつぶれて寝ている瀬流彦オコジョの姿が。石田は思いっきり冷めた目でそれを見つめた。

「…捨てて来ていいですか」

「堪えろ、イシュタル。私だって我慢しているのだ、娘のお前が出来なくてどうする」

つらそうな芦を見ながら、石田はため息をつく。まったく、面倒

な事になった。まぁ、これからもこの小動物が同じような舐めた態度でいるようなら、玩具代わりに弄り倒してやろうか。石田の顔に、何やら邪悪な影がさしていた。

学園長室を出た超鈴音は、どっと疲れたような表情で校舎を出る。まさか麻帆良の地下にあんな秘密があったとは。驚愕の連続で久しぶりに頭がいっぱいだった。出来る事ならこのままさっさと帰って眠りたいが…

「ああ、今日は別荘に行く日ネ。ならお風呂や食事も別荘で済まそうかナ」

もうすぐクー達に武術を指導する時間がやってくる。少し早めに行って風呂だけでも済ませたかった。超は、少し急いで別荘へと走って行った。

予定時刻よりかなり早めに別荘へとやってきた超は、早速浴場へと直行する。広場には誰もいなかったから、皆も食事をしているか風呂に入っているかどちらかだろう。そう考えながら歩いていると、前方からネギが歩いて来た。あの騒動からそんなに時間は経っていないのにもう修行。やる気あるな、と思っていると…

「超さん…超さんは、時間を遡る事が出来たらって思った事ありませんか」

疲れた顔をして、妙な事を聞いて来た。これは、なんだ？　タイムマシンを必要とするイベントはまだ先のハズだが…

「どうしたネ、ネギ坊主？　悩みなら、相談に乗るヨ」

「いえ、いいんです…。言ってみただけですから。ただ、もう戻れないのかなって…そう思っただけですから」

フラフラと歩いて行くネギ。呆然と見送る超にもう一度振り返ると、小さな声で言った。

「超さんも、お風呂に入るなら気をつけて下さい。僕は…こらえきれませんでした」

一体何が起きているのか。超は一抹の不安を抱きながら浴場へと向かった。そして、脱衣場で服を脱いでガラッと浴場の扉を開いた時。ネギの言葉の意味を理解した。理解、してしまった…。

「にゅーる、にゅーる…中までしっかり洗うデス～」

「や、や、止めるでござるよ！　拙者、まだそういう冒険は…ぁあっ！？」

「ホラホラ、へばってないでもっと泡まみれになろうゼ！」

「あぅ…もう…もう駄目アルよ…私、お嫁に行けないアル…」

「これ以上は洗わない方がいいと思うデス。流石に痛いと思いマスシ…」

「いや、まだだ…この先に、この先に新しい世界が待ってる…んんーーーーっ！？」

浴場には、異様な光景が広がっていた。スライム娘たちが、長瀬やクー達の身体にまとわりついている。泡だらけになりながら、妖しい声を発していた。視線をずらすと、既に洗われた人たちが床に横たわっている。時折、身体を震わせていた。

（これは…逃げるしかナイ！）

気づかれないように扉を閉める超。しかし背後から残酷なまでに凛とした声が聞こえて来た。

「超さん、アナタもお風呂でしたか」

「ちゃ、茶々丸…いや、その、今日は止めておこうかなー、なんて…」

「遠慮はなさらないで下さい。今日は日頃の感謝も込めて私がお背中を流しますから」

「い、いやそれは…ちょ、茶々丸！？　担ぐ必要ないヨ、自分で歩

け…」

問答無用で連行される超。ガラガラと閉められた扉の向こうで、超の艶めかしい悲鳴がしばらく響き続けるのだった。

第七十五話　這い寄る魔の手

麻帆良学園の魔法先生たちは、その多くが仕事を終えると直ぐに家路につく。家庭を持っている者は勿論、ローテーションで警備に当たっている者も多い為、休める時は休みたいという人間が大半なのだ。だから寄り道などしている余裕は皆無。残業なんて誰もやりたいなどとは思わない。

侵入者騒動から一週間ほど過ぎたその日、魔法先生であるガンドルフィーニもまた早く帰りたい人間の一人だった。家には妻と娘が待っている。さっさと帰って家族の顔を見て、疲れを癒やしたかった。

「ふう…やっと、終わりか。大き過ぎる部活も色々大変だな」

受け持ちのテニス部の備品の注文書を整理しながら、ため息をついた。隣のデスクでは、同じように作業を終えて一段落した源しずな先生が。互いに目が合うと、笑い会った。

「この時期は大変ですね。そちらは学園祭の準備ですか？」

「ええ、学園長のスケジュール調整も平行してますから時間が足りなくて…。今日はさすがにこれで終わりにしますけど」

しずな先生の言う通り、外はもう暗くなって来ている。職員室には宿直以外の先生は殆ど居ない。いい加減帰らないと怒られそうだ。

「源先生は職員寮にお住まいですよね。最近不審者騒ぎもありましたし、途中までで宜しかったらお送りしますよ」

「あら、ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせていただこうかしら」

ガンドルフィーニの申し出を、快く受けるしずな先生。確かにこれだけ暗くなったら女性一人で歩くのは物騒である。しずな先生はガンドルフィーニに礼を言うと、荷物をまとめて出勤名簿の退社欄にサインを入れた。

学園を出て、大通りを歩く。この道を真っ直ぐ歩いて行けば中央広場へ出て、そこから分岐する道を森林公園区域方面へ行けば住宅街はすぐである。二人は話をしながら、夜道を歩いていた。

「しかしガンドルフィーニ先生がその事でお悩みだとは気づきませんでした」

「まぁ…あまり職場で話せる話題ではありませんからね」

今話しているのは、エヴァンジェリンの事である。彼女がネギ・スプリングフィールドの指導を行う事に賛成したガンドルフィーニは、侵入者を撃退するまでにネギを成長させるなど順調に結果を出しているエヴァンジェリンに色々考えさせられていた。

エヴァンジェリンを悪だと決めつけて反対していたら今のネギの成長は無かった。魔法社会の彼女に対する評価がどれだけ現実とかけ離れているかを実感する。彼女は危険ではない。むしろ、殺気立った魔法先生たちの方が危険だった。その殆どは本国へと送り帰さ

れたが、未だに魔法先生の中にはエヴァンジェリンへ不信感を募らせているものが多いのだ。

「最近、魔法先生たちの間でも考え方の違いで喧嘩沙汰になる場合が多いのですよ。麻帆良を守る、ただそれだけの為にすら結束出来ない人たちを見ていると本当に教師なのかと思ってしまう。…ああ、私がこんな事を言ったというのは内緒にして下さい。またトラブルが起きますので」

「分かりました。…でも、ガンドルフィーニ先生も気苦労が絶えませんね。私で良かったら、いつでも相談に乗りますわ。話をお聞きするくらいしか出来ませんけど…」

しずな先生がそう言うと、ガンドルフィーニは慌てて手を振った。

「いえ、そこまで迷惑をかけるわけには…」

言いながら、この人は罪な人だと思う。先ほどから少し距離が近い。これでは勘違いしてしまう男が出て来るだろう。

しかし、それは勘違いではなかったようだ。

「私では力になれませんか？」

眼鏡の奥、潤んだ瞳で見つめてくるしずな先生に、ガンドルフィーニは困惑する。何故自分に？　それよりも、この凶悪なまでの愛らしさは何だ？　ガンドルフィーニはその瞳に吸い込まれそうな錯覚に陥り…

瞳の奥の殺気に気づいた。

シュッ！

「うわっ！？」

しずな先生の手刀を、のけぞって間一髪でかわすガンドルフィーニ。

「あら、意外ですね。完全に捕らえたと思ったんですけど…」

「…君は、何者だ！　源先生じゃないな！」

しずな先生と思われた女性は確かに外見だけならしずな先生だった。しかしその目は柔和なしずな先生のものではない。獲物を捕らえるだけのハンターの目に変わっていた。

「私は源しずなよ。今はまだ上手く再現出来ないけど、そのうち完璧にやって見せるわ」

「ど…どういう意味だ！？」

言いながら、ガンドルフィーニの背に冷や汗が流れる。いつの間にか、この一帯に人払いの結界が張られている。これは、もしかしなくても誘き出されたのだろう。罠に、嵌ってしまっていた。

「知る必要無いわ。だってあなたも、私と同じようにコレクションに加えられるんだから」

女は目をギラつかせながらガンドルフィーニへと歩み寄る。その手は先ほどまでと違って異様に爪が伸びており、まるで刃物のように月明かりを反射する。ガンドルフィーニは後ずさりするが、あまりの殺気にあてられ動きが鈍っていた。

「さよなら、ガンドルフィーニ先生。新しいあなたとは、仲良くさせてもらうわ」

ヒュッと風を切る音がなる。

女の爪がガンドルフィーニの喉を捕らえたと思われた次の瞬間…

パンッ！

女の頭部が弾け飛んだ。

首から上には何も残らず、突きだした腕を力無く垂らすとその場に崩れ去る。

「なっ…なにが…？」

殺されると思った瞬間、女の頭が弾けた。どこから攻撃が？　ガンドルフィーニは周囲を見渡す。すると、自分の背後５０メートルほどに同僚の教師が立っていた。

「芦…君、か…？」

「不用意だな、ガンドルフィーニ君。私が居なければ、二度と家族に会えなくなる所だったぞ」

それは、芦優太郎。

学園長から手出し無用と通達がなされている、一般人の能力者であった。

同時刻。超鈴音は石田留美と共に麻帆良の地下下水道フロアを歩いていた。広大な迷路を思わせるこの巨大な下水道は、かつて超鈴音が秘密のアジトを作っていた場所でもある。

「こっちだよ、僕が連れ込まれた部屋は」

二人を案内するのは瀬流彦オコジョ。石田の胸ポケットに入れられていた。決して小さくない石田の胸の感触を、背中に感じて幸せだったりする。

「連れ込まれたって、どういう事ネ。スパイ行為をしてただけじゃなかったのカ？　情報交換に使ってた部屋なのかナ？」

「察して下さい、超さん。情報というなら情報でしょう。主に遺伝子的な」

ジトーッとした目で瀬流彦オコジョを見る。瀬流彦オコジョは少し拗ねながら言った。

「僕だって男だから女性の誘惑には弱いんです。まぁ、変態教師ですからねー」

仕方ない、多少機嫌をなおしてもらおうか。石田が瀬流彦オコジョの身体の一部を爪で、カリカリと服の上から擦る。瀬流彦オコジョは「悔しい、でも感じちゃう！」と言ってビクンビクンと身体を痙攣させた。

「さ…最低ネ。とりあえず、この先の部屋に行けばいいのかナ」

超はおかしな小動物を放っておくと、先を急いだ。以前は自分が地下の隠し部屋を作ったが、今回は別の人間が作っている。迷わないように注意しなければ、と気を引き締めた。

およそ十分ほど歩いた先に、その部屋はあった。コンクリートの壁に、場違いな木製の扉がはめ込まれている。魔法で作った扉だった。

超が魔法でロックを外す。慎重に中へと入ると、その部屋の内装に戸惑った。部屋の壁は全て本棚で埋められており、他にはベッドと机しか無い。居住空間ではあるが、長期に渡って身を隠す事は無理そうだった。

「おかしいな…。前来た時は確かに、もう少し広くて棺桶がいくつかあったのに」

瀬流彦オコジョが首を捻る。源しずなに誘惑されてホイホイついて行った時。確かにそこには棺桶があったハズだ。これに入れられたくなければ言う事を聞けと脅されたのだが…

「超さん、この本棚の後ろです」

その時、石田が本棚の一つを指差して言った。そして無理やり、本棚を移動させる。ガガガガガ、と凄い音を立てて本棚をズラすと、

その向こうには隠し部屋があった。そして、そこには…

「これは…フェイト・アーウェルンクスか？」

白髪の少年が、透明な棺桶に入れられて眠っていたのだった。

【石田留美】

この所まともに睡眠時間をとっていません。いや寝なくても平気なんですが、一日中動き続けるのも疲れるんですよね。だから甘い物で体力を回復させるんですが、連日甘い物を食べ続けていたら甘い物好き仲間の龍宮さんが「悪いが胸焼けが…うぷっ」と言って逃げるようになりました。あの人の甘い物好きはエセだったようですね。実に残念です。

私がマスターに任されている仕事は二つあります。一つは最近活動を活発化させている能力者によってさらわれた人間の探索&救出。もう一つは小動物の世話です。

能力者。マスターの話では、さらった人間のコピーを作ったりできるそうですが、まだ詳しい能力は分かってないらしいです。ただ、

さらわれた人は麻帆良内で生きて存在しているそうなので助け出す事が出来るそうですね。…なんでそう言い切れるのかは分かりませんが。今度理由を聞いてみましょうか。

もう一つの仕事、小動物の世話ですが、こっちはどうでもいいです。適当にお菓子や総菜パンをあげたら文句を言いながらも食べますからね。試しに言葉責めして踏んであげたら思いの他喜んだので、機嫌を損ねたら踏んであげるようにしています。は？　何を履いているか、と？　黒いストッキングが一番リアクションが大きかったのでそれにしてますけど。

さてそのさらわれた人の救出作戦ですが、小動物が能力者と接触した事があるとマスターに聞いていましたから、彼にも協力を要請して参加してもらう事にしました。報酬は私の履いているストッキングが良いとの事。変態に益々磨きがかかってますね。超さんも瀬流彦先生の余りの変わりっぷりに目が点になっていました。

…そして、先ほどのシーンに至るワケです。

地下下水道の秘密部屋で見たものは、透明な棺桶。その中にはさらわれた一人、フェイト・アーウェルンクスが閉じ込められていました。

「これは…確か完全なる世界のメンバーだったハズだヨ。何故ここニ？」

「彼も被害者らしいですね。とりあえず起こして聞いてみましょうか」

棺桶の蓋を開けると、中からまばゆい光が。少年はゆっくりと目蓋を開きました。

「ここ…は…？」

「麻帆良学園地下下水道にある秘密部屋です。あなたはフェイト・アーウェルンクスでよろしいですね？」

私が尋ねると、彼はキッと私を睨みつけます。一体何者だ、という目つきで私を見ていますが…ちょっと身の程をわきまえて無いですね。少し頭を冷やしてもらいましょうか。

彼の身体に一粒の種をぶつけます。種は肌に突き刺さると素早く根を生やし彼の身体を侵食し始めました。

「なっ、これは、魔力が吸われる…！？」

「私に従うならば助けましょう。どうしますか？」

しばらく根性で我慢していたみたいですが、あまりの痛みに降参しました。「分かった、言う事をきくから止めてくれ！」と懇願してきたんです。ふふふ、この瞬間が一番気持ちがいいですね。彼のようなショタが悔しさに身を震わせる姿はなんというかそそります。…話がそれました。

彼は、源しずな先生に倒されたようです。さらわれた人リストにのっている人ですから、そのしずな先生も偽物である可能性が高いですね。これは…中々厄介かもしれません。確かフェイト・アーウェルンクスってエヴァンジェリンさんに聞いた話では結構気をつけなければならない人物だったハズ。そんな彼を倒す能力者ですから。強敵なようですね。

超さんが詳しい話を聞いてる中、私はここには居ないマスターの事を思っていました。マスター、もしこの能力者が私の想像通りの人物なら…私たちも、ひょっとしたら危険かもしれません。早く始末しないと、手遅れになるかもしれませんよ。

【石田留美視点終了】

図書館島の一室で、男は忌々しく燃え尽きた本を眺めていた。

源しずな、フェイト・アーウェルンクス。何とか手に入れたコレクションだったのに、簡単に倒されてしまった。フェイトのオリジナルは解放された。源しずなのオリジナルの救出も時間の問題だろう。

まだコレクションのストックはあるが、この二人はこれから使いまくってやろうかと思っていた矢先の出来事だっただけに悔しい思いをしていた。

まあ、いい。

近々新しいコレクションが増える予定だ。特にその中の一人は強力なアーティファクトを持っている。是非とも手に入れたい人物であり、今はそちらを手に入れる事を優先するべきだ、と考えていた。

男は乱暴に、背表紙しか残っていない本の燃えカスを湖へと投げ捨てる。そして新しく三冊の本を手にすると、まだ何も書かれていない本の表紙に何やら文字を刻み込んだ。そこには…

図書館探検部のメンバーの名前が記されていた。

第七十六話　アシュ様の良い仕事

面倒な事になった、と芦優太郎はため息をつく。ガンドルフィーニと言えば保守的な魔法使いの一人であり、頭の固い男としても有名だった。芦は普段、彼とは職場で最低限のコミュニケーションしか取っていない。この手のタイプは苦手だった。

「芦君、これは…」

頭を消し飛ばされた女の身体を見て声を震わせるガンドルフィーニ。女は首から大量の血液のようなものを撒き散らしていたが、次第に身体全体が霞のように形を失い、その全てを霧に変えてその場から消失した。

「ふむ…身体は魔力で編まれただけか。これなら、ネギ少年ならば簡単に撃退出来るな」

一人納得したように頷く芦。ガンドルフィーニは訳が分からず声を荒げた。

「これは一体なんだ、芦君！　彼女は源先生ではなかったのか！？」

「ん？　ああ、偽物らしいな。私も調査中でね、詳しくは分からん。君はとりあえず、今日の所は家に帰りたまえ」

芦は面倒くさそうに言うと、ガンドルフィーニに背を向ける。苛立ったガンドルフィーニは芦の肩に手をかけようとしたが、その瞬間、強烈な殺気がガンドルフィーニを襲った。

「…っ！？」

「忠告は聞く事だ。せっかく拾った命、無駄にするのは止した方がいいぞ。これは非常に危険な厄介事だ、下手に関わればまたその身を危険にさらす事になる。…今日は家に帰って家族の顔を見る事だ。そして、これ以上関わるかどうかゆっくり考えるといい」

もっともらしい事を言ってはいるが、実際はさっさと帰って欲しいだけだ。これから行こうとする場所について来られては面倒なだけだからだ。無駄に威厳のある声で言うと、ガンドルフィーニは何やら感じる所があったようで神妙に頷いた。

「…分かった。それ相応の覚悟が必要と言う事なら、今日は帰って考えさせてもらう。しかし、決心つき次第事情を説明してもらうから忘れないでくれ」

「いいだろう。では、また明日学園で会おう」

そう言って、芦は今度こそその場を後にする。背中に視線を感じない程度まで離れると、また深いため息をついた。

(面倒な男を助けてしまった。いっそ死んでもらっても良かった…わけは無いか。アリア先生たちは悲しむだろうからな)

この世界では芦は、神族や介入者以外の人間を殺さないようにしていた。だからガンドルフィーニも当然のように助けたが、芦は後々この日の事を思い返して後悔する事になる。

というのも、芦はまた無意識の内に言霊を使ってしまっていたのだ。ガンドルフィーニは、芦の言葉を全てポジティブに受け入れていた。自分の事を助けて、家族の事まで気にかける…。その事にガンドルフィーニは感動し、それが後々芦優太郎へ心酔してゆくキッ

カケとなったのだが、この時の芦は全く気づいていなかった。

広場にかけられた結界を解いてから、芦は本来の目的を果たす為に気配を消し、道からはずれて森の闇に溶けて行った。近々文化祭があるという事で、ただでさえ中々時間が取れなくなってきている。今日の内に目的を達したいのだが…

（マスター。今話しかけても大丈夫ですか？）

（ん？　イシュタルか、どうした）

突然、石田からの念話が。芦は少し驚いて交信した。

（地下下水道の調査で行方不明者のフェイト・アーウェルンクスを発見しました。現在無力化して確保していますが、どうしましょうか）

（何、フェイト・アーウェルンクスだと!?　早いな、もう発見したのか！）

しずな先生を救出してからになるかと思っていた芦は、その報告に驚いていた。予定よりだいぶ早かったのだ。

（分かった、ならばホテルの方に連れて行ってくれ。私の名刺を見せたらお前でも部屋を取れるハズだから、私の部屋の隣にでも部屋を取って、そこで待機していて欲しい）

（了解です）

念話が切れると、芦は満足そうな顔をして頷いた。素晴らしいタイミングだ。さすが我が分身、と自画自賛する。そして気を取り直して感覚を研ぎ澄ませた。

さあ、どこだ。

私の霊気の欠片は…

語りかけるように念じていると、そこから西へ五百メートルほど行った所に、反応を見つけ出した。そこは、職員寮だった。

「何とも捻りの無い隠し場所だが…ああ、まだ完璧には再現出来ないと言っていたな。監視と学習を兼ねていたのか」

反応は源しずな先生の部屋だ。芦は自らの姿を透明に変えると、急いでそこへ向かって走っていった。霊気の欠片は死んでいない。ならば、無事に生きているハズだった。その霊気の欠片というのは…

源しずなの身体に宿っているモノだ。

京都でしずな先生に、半ば無理矢理関係を求められた芦は結局彼女と深い関係となる。その際、芦は自らの霊気をしずな先生に分け与えていた。それはお腹の中に宿っており、芦と共鳴しあっていたのだ。そのおかげで、しずな先生の無事と居場所を把握する事が出来ていた。

しずな先生の部屋は職員寮最上階にあたる七階の角にあった。芦はそこまで跳躍すると、窓を魔法で開けて中へと侵入する。薄い黄色のカーテンを開けたその部屋には、魔法の鎖に繋がれたしずな先生がうずくまっていた。

「……っ！？」

しずな先生は、芦の姿を見て目を見開く。何か叫ぼうとしたらしいが、声が出ない。

「すまないな、源先生。救出に手間取ってしまった。今声を戻すが大きな声を出さないでもらえるかな」

芦はそう言うと、まず鎖を魔法で消し去った。そして、しずな先生の喉もとに指を這わせるとそこに赤く光る文字が浮かび上がった。

『封印解除』

言葉を発した途端、部屋の中にパキィィィン！…という音が鳴り響く。しずな先生が恐る恐る声を出すと、いつもの優しい声がその口から発せられた。

「芦…先生…私、私！」

「ああ、もう大丈夫だ。君の偽物はもう居ない。またいつもの日常に戻れるんだ」

感極まったしずな先生は、芦にしがみついて泣きじゃくる。そんなしずな先生を、芦は優しく抱きしめるのだった。

しばらくしてしずな先生が落ち着きを取り戻すと、芦は早速彼女にそれまでの経緯を聞いた。大体は予想していた通りだったが、監禁されていた間のエピソードは予想を少し外れていた。

「偽物は…君になりたかったワケではなかったと？」

「はい。上手く入れ替わって用事が済んだら、私はお払い箱だと言っていました。真似をする必要が無くなるし、ちゃんとした身体も造ってもらえるって…」

一体どう言う事だ。芦は手に入れた情報をつなぎ合わせながら考える。それを見ていたしずな先生は、迷いながらも芦に話しかけた。

「芦先生は、関係者なのですか？　いえ、関係者だから私を救ってくれたのでしょうけど…」

「ん？…いや、それは君も知っていただろう？　修学旅行で私をマークしていたのは学園長の指示だったハズだ」

そう返されて、しずな先生は表情に影を落とす。バレていた。学園長の指示で、しずな先生は芦優太郎の調査を任されていた。しかしそれはあくまで調査だけ。抱かれたのは惹かれたからなのだが…

「芦先生、私は本当にあなたの事が…」

言いかけて、言葉を遮られる。口元に、指を当てられたのだ。

「しずな先生、理由など今はどうでもいい。君が私を裏切ろうが利用しようが、私は君を見捨てて去ったりはしない。危険な目に遭えば助けるし、求められれば応えるだろう。私はな、しずな先生。愛した女は大切にする主義なのだよ」

その言葉に、胸が震えた。

ずっと芦に対して後ろめたい想いをしていたしずな先生は、その瞬間全てを許されたような気持ちになっていた。ああ、この人はなんて大きいんだ。しずな先生は、芦優太郎という人物に全てを委ねたくなっていた。

「しずな先生。君を狙った人物は、まだ君を諦めていないかもしれない。不便をさせてしまうが、私の滞在するホテルに来て貰って良いだろうか」

「はい…。芦先生と一緒に居られるなら、どこでも構いません…」

だから、こんな急な申し出も喜んで受けてしまう。今はもう、狙われている事や怖い目にあった事など忘れて芦の事で頭が一杯だった。そんなしずな先生を見ながら、芦は少し心配になる。

もし、妊娠していると知れたら。

感激の余り心臓発作を起こしはしまいか、と…。

一足先に芦・グレート・ガーデンホテルに戻っていた超鈴音達は、芦の指示通りに新しく部屋をとってから、そこでフェイト・アーウェルンクスに詳しい事情を聞いていた。石田に頭の上がらないフェイトは、質問に渋々答えていた。

「僕も覚えていないんだ、本当に。しずなという女の形をした奴に魔眼で眠らされて…次に目覚めた時には君たちがいた。ヘルマンとスプリングフィールド姉弟の戦いになんて参加出来るわけがないだろう」

「…嘘は、ついていないようですね」

石田が、フェイトの身体に埋め込んだ種を通して脈拍などを調べる。嘘発見器の役割をしていた。

「しかし、それなラあの監視カメラの映像に映ったフェイトは何者かナ。しずな先生みたク偽物なのかナ？」

超が難しい顔をすると、肩に乗っていた瀬流彦オコジョが同じように難しい顔をして言う。

「コレクションという奴じゃないですか。超さんの言う通りフェイト君の偽物を作って参戦させたと考えるのが自然でしょう」

「そう…なんだろうな。僕に対しても、コレクションに加えるとか言っていたし。それに多分僕は、コレクションを集めてる奴と関わ

っているであろう人物を知っている。確証は無くて、あくまで想像なんだが…」

「構わなイ、話して貰えないカ」

少し深呼吸するフェイト。人物を捕らえ、その姿形や人生を書き記した本を作り出しコレクションとする能力者。その人物が送って来たコレクションに、人形の身体を与えていた人物と言えば一人しか居ない。

「彼の名前は…」

その時。

フェイトの身体に、ある異変が起きる。

「グッ…!?　ゥ、ゥァアアアアッ!!」

「ど、どうしたネ、フェイト!?　留美、何かしたカ!?」

「い、いえ何もしていません!　これは…魔力が無くなって行く?」

フェイトの身体から、急速に魔力が抜けて行く。このままでは、魔力切れを起こして動けなくなってしまう!　フェイトは忌々しそうに宙空を睨みつけて、この場に居ない男の名前を叫んだ。

「デュナミス!　やはりお前は僕を消して作り変えるつもりだったんだな!」

悔しそうにギリギリと歯噛みをする。身体はどんどん力を失い、

フェイトの瞳から精気が無くなって行く…

「る、留美！　どうにか出来ないカ！　アシュタロスは！？」

「い、今呼び出します！　アシュ様、アシュ様ぁ！！」

石田が魔力を流し込んでやればいいのだが、珍しく気が動転していた。とにかく無我夢中で芦に念話を繋げようとする。しかし念話を繋ぐ前に、開かれたドアから聞きたかった声が聞こえて来た。慌てて振り向くと…

「久しぶりにその名で呼んだな、イシュタル」

「アシュ様！」「アシュタロス！」

芦優太郎の姿。傍らにしずな先生を従えて入って来た。

「いざ来てみればまたトラブルとはな。ふむ、フェイト・アーウェルンクスか。どうやら魔力が無いと動けなくなる身体らしいな」

呑気に観察する芦。ぼんやりと力を無くすフェイトの瞳を見ながら、語りかける。

「その厄介な身体を捨てて自由になりたいか？　世界樹の広場で見ていたが、君には何か目的があったのだろう。その身体を捨てて、自立して生きてみたいと思わないか」

フェイトの瞳に力が戻る。一体何を言ってるんだ、という表情で

芦を見上げた。

「私なら、君を別の身体に作り変える事が出来るぞ。全く別の身体になって、目的を果たしたいか？」

その声には、逆らい難い響きがあった。抗えない力があった。フェイトは思わず頷いてしまう。この不自由な身体から解き放たれるのなら…何だって構わない。助けてくれ！　フェイトは必死の形相で芦に頷いた。すると…

芦の手が、まばゆい光を放つ。そばで見ていた瀬流彦オコジョは、手を合わせた。可哀想に、またここに被害者が。せめてオコジョの先輩として優しく接してあげようか、などと思っていた。

しかし、瀬流彦オコジョの予想は大きく外れる事となった。

決して小さくない悲鳴と共に煙につつまれるフェイト。その煙がはれて視界が元に戻るとそこには…

「う…ぁあ、僕は…僕は、どうなったんだ？」

銀髪の小柄な美少女が。

鈴を転がしたような可憐な声で、戸惑いの言葉を発していた。

第七十七話　フェイトと始まりの転生者

ふわふわと柔らかなウェーブを描く銀色の長い髪。無愛想だった表情も、今ではオドオドとした小動物のようだ。部屋にいた人間は皆、その愛らしさに見とれていた。フェイト・アーウェルンクスは今、誰もが抱きしめたくなるような萌キャラになってしまっている。

「…鏡になるような物は無いのかな。なんだか声もおかしくなっているみたいだ」

周囲の人間のリアクションが変過ぎるので不安になるフェイト。立ち上がって窓を見ると、夜景の手前に映し出された姿に絶句する。

「…フィオナ？　これは、フィオナの身体？」

ぺたぺた、と身体を触る。人形の身体だった今までと違い、感覚がクリアで新鮮だった。間違いない、この身体は自分が会いたいと夢見た女の子の身体だった。

「アシュタロス、と言ったね。どうして彼女の身体を選んだ？　僕と彼女の関係を何故知っている？」

「ん？　いや、別に外見は指定しなかったぞ。とりあえず、君は近衛木乃香を始めとした麻帆良の一部生徒たちに敵視されている。だから、性別から変えてやろうとしたのだ。君の外見は、君が理想としている女性を再現したものだろう」

理想。それを聞いて、フェイトは納得した。それなら分かる。自分にとって、フィオナは全てだからだ。

芦の説明を聞いてホッとしたのは、フェイトだけではない。そばで聞いていた石田やしずな先生たちも同様だ。「もしかしてロリコンなのでは」という懸念が沸き起こったが、それは杞憂だった。もしロリコンなら、自分たちは圧倒的に不利ではないかと考えていた。

「さて、本題に入るぞ」

そんな妙な空気を読まずに芦はフェイトに話しかける。

「まず君の目的だが、麻帆良の地下に眠る人物の解放だという事は何となく分かる。分からないのは、君とその人物との関係だ。話してもらえるかな」

「……こうして自由にしてくれたんだ、質問には全て答えるよ。ただ、少し長くなるけどいいかな」

「構わない」

「分かった」

フェイトは覚悟を決めた。どうせ、一人では限界があったのだ。ここで全て話して、協力を仰いだ方が現実的だろう。

「これから話す事は俄には信じ難い事かもしれないけど…事実だと思って聞いて欲しい」

そして、フェイトは語り出す。長く、悲しい物語を…

【フェイト・アーウェルンクス】

僕は知っての通り、人工的に作られた魔法人形だった。製作者は創造主と呼ばれた人物で、魔法関係者なら誰でも知っているだろう。そう、魔法世界の争乱を招いた人物として知られているライフメイカーさ。けど実際は違う。彼女は争乱なんか起こしたくなかったんだ。

彼女の事は、僕自身全てを把握してるわけじゃない。ただ異世界からやってきて、気の遠くなる時間を生きてきたという事。そして、自分の夢見た理想の世界を作ろうとしていたという事だけだ。魔法世界は、彼女によって作られた。そして、彼女はそれを遠くから眺めていたんだ。

彼女は異世界ではずっと一人ぼっちだったと言っていた。一人ぼっちで本を読むだけの日々を送っていたらしい。魔法世界は、そんな彼女のお気に入りの世界を模倣して作られた。でも彼女は、その世界で生きて行こうだなんて思ってなかったらしい。幸せな人たちを遠くで眺めるだけで満足していたんだ。ただ、それでも寂しい気持ちは積み重なって行った。話し相手として僕を作ったのも、自然の成り行きだったのさ。

僕は彼女を魔法世界へと誘い出した。せっかく理想の世界を作り上げたのに、それをただ見ているなんて勿体無いと思ったのさ。友達が欲しい、と彼女は言っていた。なら、一緒に友達を沢山作りに行こう。当時の僕は、ただ無邪気にそう言って強引に彼女の手を引いて魔法世界へと連れ出してしまったんだ。…それが、奴らの狙い

だと気づかずにね。

魔法世界に入った途端、彼女は意識を失った。僕は混乱したよ。何故なら、次に目覚めた時の彼女はまるで別人のようになっていたからだ。

「ご苦労だったな、木偶人形。私も流石に隠れ続けるのが辛くなってきていた所だったのだ。やっとこの娘が舞台に上がってくれて安心したよ」

それは、彼女をこの世界に連れてきた神だった。友達が欲しい。健康な身体が欲しい。自分に優しい世界で生きてみたい…と願った彼女に、能力を与えた神。けれど奴は彼女を利用したかっただけだった。

神は、彼女の想像力と願い続ける力に目をつけた。そして、彼女が最初に願った事をねじ曲げて叶えた。友達が欲しい、という願いは同じような転生者を集める力に。健康な身体は、ただ死なないというだけの身体に。自分に優しい世界という願いだけは世界創造という能力として叶えたけど、それも結局、自由に作れるけど絶えず監視していないといけなかった。世界がどう変化するかなんて、作った方だって分からなかったんだ。彼女は世界が間違った方向に進まないように、世界の外から監視し続けないといけなかった。

結局、僕が魔法世界へ連れ出してしまった為に、彼女は先に魔法世界に介入して身を潜めていた神に身体を乗っ取られてしまった。そして彼女を人質にとられた僕は神に良いようにこき使われる事になったのさ。そう、魔法世界で起きた大きな戦い。あれは神の意志で引き起こされたんだ。

でも、彼女は強かったよ。身体を乗っ取られても、その能力に自ら封印をかけて神に力を殆ど使わせなかった。神は自分の力を他の転成者たちに分け与え過ぎて殆ど無力になっていたらしく、彼女の封印を解く事が出来なくなっていた。

神は、デュナミスを始めとした連中を配下につけて世界を混乱に導いた。魔法世界の魔力を魔法戦争で枯渇させ、このままでは世界を形成する魔力が無くなると脅しをかけて引き込んだのさ。その多くが魔法世界の為に戦ったけど、デュナミスたちは事実を知った上で協力関係になった。結局彼らは戦争を利用して勢力拡大を狙ったギャングにすぎなかったんだ。けど、それもナギ・スプリングフィールドたちによって倒される事になる。

神は倒された。けど、最悪な置き土産を残していった。彼女の身体で悪行の限りを尽くしたおかげで、彼女の心はズタズタになっていた。ただでさえ死ねない身体で気の遠くなるような年月を生きてきた彼女には、耐えられなかったんだよ。彼女は壊れた。そんな彼女に、神は言ったのさ。

「このままでは、魔法世界は崩壊するぞ。魔力が無くなって、皆死に絶えるだろう。君の友達も、動かなくなってしまうぞ」

彼女は、暴走した。

正常な思考が出来なくなっていた。

魔力が足りない…早くなんとかしないと、と思ったんだろう。世界樹を使って旧世界から魔法世界へと魔力を引っ張って来ようとしたのさ。このままでは旧世界…地球は、完全に生き物の死に絶えた世界へと変わってしまう。魔力の源はマナ。それごと引っ張ってきてしまうという事は、自然の生命力を奪い取る事になるからね。そ

の事に気づいたナギたちは、自らを楔にして彼女を封印した。これが、あの戦いの真実だよ。

彼女は世界樹に封印され…僕は一人になった。

僕は、魔力の枯渇した魔法世界を再生させる手段を見つけようと世界中を旅して回った。彼女の作った世界だからね、どうしても崩壊して欲しくなかったんだ。でも、一向に手段は見つからない。デュナミスに誘われたのは、八方塞がりでどうしようもなくなって途方に暮れていた頃だった。別の神族と組んだ、ソイツなら彼女の封印が解けるし、心を直す事も出来る。彼女を元に戻したら、世界創造の力で魔法世界を直せばいい…。そんな言葉に惹かれてしまうくらい、僕は疲れきっていた。体内の魔力も底をつきかけていたからね。デュナミスの誘いに乗るしか道はなかったんだ。

そこからは、知っての通りさ。件の神族には彼女を救う気なんか全然なくて、それはデュナミスも同様だった。だから僕は一人で彼女の封印を解いて、何とか彼女の心を治したいと思ったんだけど…ダメだったよ。おかしな能力を持つ人物にやられ、このザマさ。結局僕は、ただの道化でしかなかったみたいだね。

【フェイト視点終了】

フェイトは一気に語り終えると、疲れたのか部屋のベッドに腰をかけた。話している最中に泣いてしまったらしく、目元は濡れていた。

誰も、口を聞けない。

余りにも辛い話だった。芦にとっては、自分が見逃した過激派神族によって引き起こされた不幸。超にとっては自分のいた時代の戦争の引き金となったエピソード。それぞれ心中は穏やかではない。

そんな中、やはり最初に口を開くのは芦だった。

「なるほどな。ありがとう、フェイト君。辛い話をさせて済まなかった」

そう言って、頭を下げる芦。フェイトはまさか謝られるとは思っていなかったので目を丸くして驚いた。

「礼として君には、しばらくこの部屋に滞在する事を許そう。生活費も勿論用意する。しかし…世界樹の封印を解くなら、それはしばらく待って欲しい」

「なっ…何故だ！　こんなに近くに来たのに、何も出来ないなんて…」

「落ち着け。何も協力しないとは言っていない。ただ、先に君を倒した能力者を突き止めて始末しない事には、封印は解けないだろう。今聞いた話から推測するに、能力者の狙いはその創造主である可能性が高いからだ。それに、ナギ・スプリングフィールドの封印は強固だ。無理矢理解除しようとしたら何が起きるか分からんな。本人は文化祭が始まれば外に出ると言っているし、それまで待った方が無難だろう」

そう言われては、従うしかない。確かに得体の知れない敵がいる中、また世界樹に近づくのは自殺行為だ。

「じゃあ、僕は何をしていればいいのかな。文化祭というのはまだ始まらないのだろう？」

「ああ、来月中旬からだからな。君には、それまでの間その身体に慣れて貰おう。…しずな先生、ちょっといいかな」

「え、はい。何でしょう」

突然呼ばれてドキッとする。一体何を？　そう思っていると…

「彼…いや、彼女の事は君に任せるよ。私には女性の身体の事は分からないからな。君に頼むのが一番良いと思ったが…どうだろうか」

「…ええっ！？　わ、私がですか！」

しずな先生は戸惑った。しかし、これは自然な成り行きなのだ。石田は人間じゃないし、超は特殊な身体をしている上に忙しい。こうした事で頼れる女性はしずな先生しかいなかった。

「フェイト君、彼女とこの部屋に同居する事になって構わないかね？　彼女の偽物にやられた事で精神的に辛いなら無理にとは言わないが」

芦の言葉に、少し迷うフェイト。しかししずな先生の方へと向くと、頭を下げた。

「僕は、人の身体で生きた事が無い。あなたが助けてくれるなら、ありがたい」

上目使いで少しすがるような表情。それは反則的なまでに可愛かった。

「わ、分かりました。私で良ければお手伝いします」

そう言うしかないだろう。しずな先生は覚悟を決めた。悪名高い「完全なる世界」という組織にいた人物を助けるのは、もしかしたら麻帆良に対する背信行為かもしれない。しかし、それよりも好きな人である芦やフェイトの可愛さの方が優先順位は上である。しずな先生はフェイトを支えてあげようと心に決めた。…本音を言えば、男から女に変わったフェイトに興味を抱いたというのもある。

（いけない事も、教えちゃおうかしら…）

しずな先生の瞳が妖しい光を放った。フェイトはその視線に気づかず安心したような表情をしている。それを見ていた石田と超は、フェイトの身の安全を祈るしかなかった。

しずな先生とフェイトを残して部屋を出る三人と一匹。芦は廊下を歩きながら、石田に声をかけた。

「気づいたか、先ほどの話。転生者を引き寄せるとか…」

「はい。引き寄せる能力と言っていましたよね」

「ああ。勝敏の言葉の意味がやっと分かったよ。転生者をひとまとめにしたと思っていたのは私だけで、実は私も彼女の力でおびき寄せられていたとはな」

フェイトがフィオナと呼んでいた転生者の力は規格外らしい。魔神すら呼び寄せるのだから、それだけ強力な能力を保有するだけのポテンシャルがあったと言うことなのだろう。芦は石田と話しながらある仮説を頭の中で組み立てていた。

能力者が言いなりになるコレクションを増やそうとするのであれば、確かにライフメイカーは最高のターゲットだ。しかし現在の麻帆良では無理だろう。世界樹にはナギたちによる封印が施されてある。フィオナには誰も手を出せないハズだ。しかし…。

文化祭でナギは世界樹を離れるらしい。その時封印はどうなるのか。もしや解かれるのではないか。自分たちには、まだまだ分からない事が多すぎる。

「イシュタル、どの道文化祭まではフィオナという女性には誰も手出しは出来ない。我々は先に能力者の確定と無力化を優先しよう」

「分かりました。今の所、図書館島の主が最有力候補ですが接触を試みますか？」

「いや…大戦の英雄とされる人物に不用意に近づくのはよそう。学園長も私と奴のどちらの言うことを信じるかと言うと奴だろうからな。しっかりとした情報や証拠を見つけてからだ。…超、君は石田と一緒に生徒たちの強化を続けて欲しい。油断していると、気づい

たらクラスメイトがコレクションだらけになっている、という事にもなりかねん」

「分かったヨ。そっちも、教師連中を注意して見ていて欲しイ」

「当然だ。幸い、協力者が増えそうなのでね。これから監視体制を整えて行くつもりだ」

そう言って、芦は笑った。しずな先生に加え、明日にはガンドルフィーニが協力者になってくれるだろう。彼らと連携を取れば、教師たちに異変が起きれば直ぐに察知出来る。

（今はまだ守りに入る事しか出来ないが…準備が出来次第攻勢に出る。覚悟している事だな、まだ見ぬ能力者よ…）

芦はそう心の中で呟きながら、邪悪な笑みを浮かべるのだった。

その頃、京都では。

（ハァハァ…アシュ様エロカッコイイ…はふっ…）

（いやいや月詠、今の所にエロ要素ないから。妄想の翼羽ばたかせ

過ぎや）

木乃葉と月詠が念話を繋いでいた。いつものように芦と交信をしようとしたら、何だかとんでもない話が飛び込んで来たのだ。二人は、芦たちの話を盗み聞きしてしまった。

（しかし何か面白い事なってるやん。ウチも麻帆良行ってみよかな？）

（ぁ、ぁ、ウチもイく！　イきたいぃっ！）

（いろんな意味で遠慮したい所やけど、安心し。行く時は一緒やから）

（～～～～～～っ！？）

何やら感極まって悶絶する月詠。呆れて念話を切ろうとすると、タイミングが良いのか悪いのか芦からの通信が。

（すまない、今日は少し遅れた。…ん？　月詠はどうした？）

（あ、アシュ様！　月詠なら気ぃやってしもたよ）

（早いな！　いきなりか！）

（…なぁ、アシュ様。ウチ、一つだけお願いあんのやけどええやろか）

木乃葉は、出来るだけ可愛らしい声で芦に話しかける。芦は優しく応えた。

（どうした？　大抵の事は叶えてやるぞ）

（…あんな、ウチそろそろ麻帆良に遊びに行こうかな思うてん。その時は、ちょっとだけでええから会ってくれへんやろか…）

控えめに、しかし情に訴えるような気持ちを込めたメッセージ。

芦は深く考えずに承諾してしまった。

（勿論歓迎だ。宿泊施設は此方で用意しよう。日取りが決まり次第、知らせてくれたまえ）

（ホンマに!?　アシュ様、ありがとう！　ほんなら、今度の日曜日そっち行くから！　ホンマありがとう、アシュ様！）

（え？　いや、今度の日曜日？）

（ほな、ウチ早めに寝て明日早速新幹線予約するわ！　お休み、アシュ様！　大好きや！）

（いやいや、ちょっ…）

念話は、一方的に切れてしまった。

カレンダーを見ると、今日は木曜日。芦は頭を抱えてその場にうずくまるのだった。

外伝5　フェイトの休日（1）

カーテンの隙間から差し込む光が、少女の目元を照らす。眩しそうな顔をして布団を被るものの、セットされたアラームの耳障りな電子音に無理矢理意識を引き戻された。

「ふにゃ」

新しい身体はまだ睡眠を欲しているようだ。しかし、同室の女性は二度寝を許してくれなかった。

「起きて、フェイトちゃん。着替えて朝食をとらないと」

「にゅ」

何だか分からない声を出して起き上がる少女。これがあの凶悪な石化魔法を操る魔法使いフェイト・アーウェルンクスだと言われて信じる人間など存在しないだろう。美しくしなやかなハズの銀の髪は寝癖で膨らんでしまっている。不思議なマスコットキャラとなっていた。

「ほら、こっち向いて。髪の毛を解かしてあげるわ」

「むにゅ…ぅう？」

しずな先生の言われるがままに、髪をブラシで整えてもらう。ぼんやりとした意識の中、フェイトは昨日起きた事を思い出していた。何故、自分はここにいるのか。確か芦優太郎に身体を作り替えてもらって、フィオナの外見になった。その後、人間として生きていく

為の知識を教えてもらって…女の子の事を教えてもらった。誰に？
目の前の女性に。どうやって？　それは手取り足取り…

「……っ！？」　ボッと顔が赤くなる。

「目が覚めた？　…どうしたの、顔真っ赤よ」

「い、いいいや何でもななな…」
慌ててベッドから飛び起きる。昨日の事を思い出して、まともにしずな先生の顔が見れなくなっていた。しずな先生はそんなフェイトを見てクスッと笑いながら言った。

「さあ、目覚めたなら着替えましょう。服の着方は覚えてるかしら？」

力一杯頷くフェイト。また昨日のように着せ替え人形にされてはたまらない。何とか一人で着替えなくては、と急いでクローゼットを開けて服を取り出す。しずな先生に見守られながら、フェイトは恐るべき速さで着替えを終えた。

ホテルのレストランに入ると、既にテーブルには芦の姿があった。先に来て注文をとってくれていたらしく、テーブルには三人分の食事が用意されていた。典型的なトーストとハムエッグ、サラダといった洋風の朝食だ。

「おはよう、しずな先生、フェイト君。昨日はよく眠れたかね？」

「おはようございます、芦先生。おかげさまで、久しぶりに安心して眠る事が出来ました」

「…まぁ、眠れはしたけど」

しずな先生のオモチャとなって、気がついたら寝ていたという感じだ。フェイトは複雑な顔で答えた。

「ふむ。とりあえず朝食をとりたまえ。そうすれば、元気も出るだろう」

フェイトの態度を、単に元気が出ないだけと捉えた芦はそう言って、二人にテーブルにつくよう促す。ちゃんと椅子を引いて座るのを手伝うあたりは、さすが芦優太郎といった所だ。

芦がフェイトにむけた言葉は、間違いではなかったらしい。

「はぐっ、はぐっ、んぐっ、んぐっ！」

フェイトは一口目にバターを塗ったパンをかじった後、目を見開いて凄い勢いで食事を始めたのだ。しずな先生は唖然とし、芦も戸惑って声をかけた。

「どうした、そんなに腹がすいていたのか？」

「んぐっ…んんっ！　はぁ…いや、この身体になって感覚がクリアになってるせいか、味がよく分かるんだ。美味しくて、つい夢中になってしまった。すまない」

「ああ、なるほど。人形の身体はよほど上等な物でも五感を再現しきれないらしいからな。君にはある程度のお金を渡すから、今日は麻帆良の街を歩いて色々と食べ歩きでもするといい」

フェイトの顔は相変わらず無愛想だったが、頬が少し赤くなり、瞳はキラキラ輝いている。これは多分、相当嬉しいのだろう。

「芦先生、よろしいんですか？」

しずな先生が尋ねる。

「狙われる可能性はありませんか？　あの能力者だけでなく、こんなに可愛いとおかしな男性に…」

そう言われればそうか、と芦は気づく。姿形を変えたから大丈夫だとは思うが、単に目にとまったからという理由で襲われる可能性も無いとは言えない。一般人相手だとしても、慣れない身体では実力を発揮しきれないまま怪我を負わされる可能性がある。どうしたものか、と考えていた。

「手っ取り早いのは仮契約なのだが…」

「あ・し・先・生…？」

なんか黒いオーラが噴出した。これは怖い。

「わ、わ、分かっている！　想い人のいる者の唇を奪う程私は鬼畜ではない！　単純に、血を飲んで貰おうかと思ったのだよ。私の血には力を倍増させる効果があるからな。魔眼などに対する耐性もつく」

そう言って、芦はフェイトの食器を見た。既に食べ終えたようで、

全て空になっている。これなら、いいだろう。

「フェイト君。食後に後味が悪くなって申し訳ないのだが、私の血を飲んでもらって良いかな。君の能力を高めて、二度と能力者にやられないようにしたいのだ」

「え？…ああ、いいよ。僕ももう負けたくはないからね」

フェイトは快く承諾する。特に今はフィオナの身体となっているのだ、また負けてこの身体に傷などつけられたくはなかった。フェイトが頷くのを確認した芦は、フォークを自身の人差し指に軽く突き刺す。プツッと血が出て、赤い球を作った。

「少し待ってくれ。スプーンに移して…」

「いや、その必要はないよ」

そう言うと、芦の向かいに座っていたフェイトは立ち上がり、芦のすぐそばまでやってきた。そして、芦の左手を取るとその人差し指に口を近づけ…

「はむっ…」

！！

くわえてしまった。

「な、な、なにを！？　フェイト君、それは…」

「あ・し・先・生～！」

「いやいやいやいや、しずな先生これは…」

言いながら辺りを見渡す芦。幸い、端のテーブルな上にまだ人もまばらな早い時間帯だったおかげで周囲に気づかれてはいない。それでもこれは…

「んちゅ…ちゅ…れろ…」

まずくないか。いや、確実にまずい。

「ちゅぱ…ちゅう…あむ、あむ…おいひい…」

「フェイト君、もう充分だ！　それだけ吸えば効果はバッチリだろう！」

半ば強引に抜き取ると、フェイトは名残惜しそうに口元についた唾液をその細い指ですくい、丁寧に舐めとった。コクン、と軽い音を立てて飲み干すと、その白い喉が小さく震える。清楚で可憐な少女の姿も、何だか今では違って見えた。

「とりあえず、それで基礎的な身体能力は上がったハズだ。君は元々魔法使いとしてはかなりの実力があるらしいから、それで大抵の相手に後れをとる事はないだろう」

指を拭きながら、芦が説明する。フェイトはまるで酒でものんだかのように上気した顔をしてそれを聞いていた。いや、聞いていたのだろうか。その表情はぼんやりとしている。隣のしずな先生は、変わらず黒いオーラを出しながら芦を見ていた。

結局芦はその後食事が喉を通らず、フェイトに半分以上食べられてしまう。食事の最中、隣でしずな先生が「血…体液なら何でもいいのかしら。それなら…」と不穏な事を口にしていたのが芦には気になった。もう、戻れないかもしれない。芦は人知れず、そっと涙を拭うのだった。

芦としずな先生が学園へ向かった後。一人になったフェイトは部屋でのんびりとくつろいでいた。芦からはお金を貰っているし、しずな先生からは麻帆良のオススメのお店のリストを貰っていた。どうせ部屋にいてもやる事は無い。ならば、言われた通り外に出るか…。フェイトは、早速出掛ける準備に取りかかった。

今は、本当に可愛らしいフリルだらけのドレスみたいな服を着ている。しかしこんな格好でいるのはさすがにフェイトだって恥ずかしい。だからと言って男の服装になるのも変だ。どうしようかと迷った末に、フェイトはある服を思い出していた。ああ、あの服なら間違いない。麻帆良の女性の多くが着ていたあの服なら、問題は無いだろう。そう思ったフェイトは服を脱ぎ捨て、魔法で思い描いた服を作り上げて身にまとった。

鏡の前で、クルリと回ってみるフェイト。

「うん、何も問題はない。完璧だ」

満足そうに微笑んだ。確かに、それは反則なまでに似合っていた

し、事実可愛いかった。休日ならば何の問題も無かっただろう。

フェイトは麻帆良女子中学校の制服のスカートをひるがえして、意気揚々とホテルの部屋を出て行った。

世界最大の学園都市、麻帆良学園。世界中を旅したフェイトだが、旧世界でこれだけ大規模な魔法使いの街を見たのは初めてだった。任務で来た時は気にも止めていなかったものの、こうしてジックリ見るとやはり驚いてしまう。

「建物の様式は旧世界のものだが、配置や細かい所はメガロメセンブリアの影響が見受けられるな。よくここまで人を集められたものだよ、向こうだってこんなにたくさんの生徒はいないんじゃないかな」

自分を追い越して行く、同じ格好の人間たち。「遅刻、遅刻ー！」という声を上げて走って行った。大きな人の波はそのまま通り過ぎて行った。が…

こちらを振り返る、一人の女の子。

「ちょっと、何ポーッとしてるの！　このままだと遅刻よ！？」

「え？　いや、僕は…」

戸惑うフェイト。そうか、この格好では同じ生徒と思われて学校に行かないといけないのか。気づいたのが遅かった。返答に戸惑っていると、痺れをきらした女の子はフェイトの腕を強引に取って一気に走り出す。

「ほら、急ぐわよ！」

「わ、いや、あれ！？　わあぁぁぁぁぁっ！」

恐ろしいまでの力で、フェイトは無理矢理中学校へと連れ去られてしまった。

キーンコーンカーンコーン…

麻帆良女子中学校のチャイムが鳴る。これは始業前のチャイムである。フェイトはそれを、女の子と共に校舎玄関の中で聞いた。

「間に合った～！　あんた結構足早いのね。何年生？　クラス、ど

こ？」

「え？　あー…二年で、Ｆ組」

適当に言った。すると、女の子はニコっと笑う。

「私は３－Ａだから。じゃあ、私先に行くわ。また会えたら、お話しましょ！」

そう言って、女の子は走り去って行く。その背中を眺めながら、フェイトは頭の中で女の子の外見と３－Ａ組という情報を検索して…

「神楽坂明日菜、か…」

女の子を特定した。今となってはターゲットでも何でも無いが、一時期は彼女も賞金がかけられる対象だった。一度デュナミスの配下が狙って、麻帆良の警備に阻まれ拉致を断念したが、今になってこうも簡単に近づけるとはなんとも皮肉なものだ。

「まぁ、どうでもいいけどね」

フェイトはそう言って、気配を遮断すると屋上へと向かった。玄関前には既に魔法関係者と思われる教師が立っている。ならば、屋上から出た方がリスクは少ないと考えたのだ。

人気の無い階段を選び、カツカツと音を立てて屋上へと向かう。途中、ホームルームをしていると思われる教室から「ええーっ！？」という声が聞こえて来る。元気で騒がしい世界だ。だが、楽しそうでもある。もしフィオナがこの学校に来れたら…。フェイトはそんな叶わない夢を思い描きながら、階段を上った。

麻帆良中等部の校舎の屋上は、スポーツも出来る多目的スペースとなっている。フェイトは初め、その光景に呆れていた。

「こんな所で球技なんてしたら、危なくないのかな」

柵は大体三メートル弱、地面に転がる薄汚れたバレーボールや備え付けられたバスケットのゴールを見るからに、少なくともこの二つのスポーツは日頃から行われているのだろう。ボールが外へ落ちたら大変だ。

フェイトはとりあえず、姿を見られないように給水塔のある一角へと向かった。そして、その裏手へと回ると魔法を解いて服を消す。さあ、どんな服にしようかと迷った所で、足元にあるものに気づいた。

それは、一冊の雑誌だった。どうもここはサボり魔の隠れ場所らしく、空き缶やお菓子の空き箱がチラホラと捨ててあった。この雑誌も、そうした生徒の持ち物なのだろう。

「ファッションに差をつける、使えるカジュアルボトム？　ヘビロテ間違いないなし？…良く分からないけど、これならまあ恥ずかしくないかな」

それはファッション雑誌だった。フェイトはそこに載っている写真の組み合わせをそのままコピーして服を作り上げた。ドット柄の薄い紫のチュニックに、短いボトムの簡単な組み合わせ。靴も革靴

からスニーカーに変えた。これなら動きやすいし変な奴に絡まれても逃げやすいだろう。

「さて、じゃあ校舎の外に出ようか。やれやれ、やっと食べ歩きが出来る…」

朝あれだけ食べてもう空腹感を覚えていた。フェイトは跳躍して柵を飛び越える。その時、見えない何かを破ったような感触があった。

「やば…」

それは、結界。ボールが飛び出ないように張られた防護結界だった。良く考えれば当たり前だ、何の対策も無くこんな場所で球技なんかさせるわけが無い。

ザッ…

フェイトが屋上から校舎の隣の芝生へと降り立つ。その時、職員室から鋭い視線が向けられるのを感じた。ガラッと窓が開いて、一人の女性が飛び出して来る。

「あなた、この学園の生徒じゃありませんね！」

空中を物凄いスピードで抜刀しながら飛んでくる女性。それはこの学園の教師であり魔法関係者でもある葛葉刀子であった。

ビュンッ！

かまいたちが放たれる。

素早くそれをかわすと、フェイトは飛び退いて臨戦態勢に入る。
刀子はそれを見てニヤリと笑った。

「やはり関係者ですか…屋上から飛び降りて無事な所を見て、多分そうじゃないかと思ったんです」

「多分で殺す気満々っておかしくないかな」

確実に首を狙っていた。避けなかったら死んでいた所だ。

「…その格好が、いけないんです」

「はい？」

「その格好！　彼を奪いとった泥棒猫と同じ格好が！　私を狂わせるんです！」

「……」

とんだとばっちりだ。
仕方ない、ここは無力化してしまおうか。そう思った時、頭上から知ってる男の声がした。

「すまない、葛葉先生！　その娘は私の知り合いなんだ！」

見上げると、職員室の窓から此方を見る芦優太郎が。

何だか疲れたような顔をしていた。

外伝5　フェイトの休日（2）

学園長室にて。
フェイトは芦優太郎と共に近右衛門と面会を行っていた。近右衛門のそばにはしずな先生、そして葛葉刀子が控えている。

「ふむ、石田君の親戚という事じゃったか。確かに銀色の髪の毛といい良く似ておる。ホテルで一人でいるのも寂しかったのじゃろう、無断で学校に入ったのは大目に見ようかの」

「学園長！　この子は私の攻撃を避ける事が出来た実力者です！野放しにして良い人物ではありません！」
抗議するのは葛葉刀子。警戒心の塊のような人物だった。

「失礼だが…」
そこで言葉を挟んだのは芦だった。
「部外者だからと刃物を振るうのは犯罪だ。得物を手にしている時点で、本来君はこの社会からはじき出されるべき存在なのだがね。今回の件、教育委員会に働きかけても構わないのだが？」

芦の言葉に、刀子は青筋を立てて怒る。しかしそんな彼女の思いもしない所から追撃が。

「この娘は私の知り合いでもあるんです。彼女を傷つけるつもりなら、今までの行き過ぎた生徒指導を全て暴露しますよ」

それは、しずな先生だった。

「なっ…！？　あなたまで、何を！」

「刀子さん、刃物を振るうのは止めて下さいと今まで再三お願いしてきましたよね。トラウマに苦しんでいる生徒がいると言った時、あなたは『記憶を消せばいい』と言っていましたが、今でもそうお考えですか？」

しずな先生は少し強い口調で問い詰める。完全に旗色が悪くなったのは刀子だ。風向きが変わった。話を聞いた芦も、殺意を込めた視線を刀子に送る。常識的に考えて、最低な人間だと思ったのだ。

「葛葉君。流石にワシもそれは初耳じゃぞい。侵入者以外の生徒に刃物を向けるというのは厳に戒めておったハズじゃが」

「い、いえ、それは…」

完全に詰んだ。刀子は顔を青ざめさせて目を泳がせる。

「芦君。今回、君の知人が不法侵入した件は不問にするが…この葛葉君の事も許してやってくれんかのう。ワシの方で、ちゃんと指導しておくから…どうじゃろう」

「ああ、それで構わない。最初に迷惑をかけたのはこちらだからな。ただ、葛葉先生のような人間こそ野放しにしてはならない。指導は徹底しておいた方が良いと思う」

「うむ、分かっておる」

顎髭を撫でながら、近右衛門は頷いた。

「フィオナちゃん、と言ったかの。怖い目に合わせて済まなかったのう。もう、この麻帆良を自由に歩いても良いから安心して良いからの」

「…ありがとうございます」

フェイトは礼儀正しく頭を下げる。そして、芦に促されるまま学園長室を後にした。

学園長室を出ると、芦は大きくため息をついた。

「どうして学校に来たのだ？　私に用があったのかね？」

ふるふる、とフェイトは首をふる。少し困ったように眉を下げて、今までの経緯を話した。服を制服に変えた為に学校に連れて来られた事。抜け出そうとして刀子に見つかった事…。

「なるほど。確かに用意させた服は元男性が着るには抵抗がある物ばかりだったかもしれない。今夜にも別の服を用意しておくよ」

「…すまない。僕は、どうも浮かれ過ぎてたようだ。大人しくこのまま帰るよ」

シュンとするフェイト。そんなフェイトの頭を、芦は優しく撫でた。

「何を言うんだ。せっかく学園長の許可を得たんだ、麻帆良を自由に歩いてみるといい。帰ったら、どんな所を回ったか聞かせてもらえるかな。実は仕事ばかりで私もあまり回った事が無いんだよ」

芦の言葉に、フェイトの表情は心なしか明るくなった。芦に頼まれたのなら…麻帆良を回るのもいいかなと思ったのだ。また、芦が怒らなかったのも嬉しかった。何故だか分からないが、芦に怒られるのはとても嫌だったのだ。

「じゃあ…行って来てもいいかな」

「ああ。気をつけて、行って来なさい」

フェイトは、少し照れながら行ってきますと言って階段を下りて行った。それを見送る芦。それは何だか娘を見送る父のような表情だった。そこへ…

ギイッ…

ドアを開けてしずな先生が出てくる。

「あら、フィオ…フェイトちゃんは行きました?」

「ああ。しずな先生、ありがとう。君の援護のお陰で助かった。見た所学園長と葛葉先生の姿が見えないが別室で説教でもしているのかな?」

学園長室の手間からは学園長室の一部しか見えないが、二人の気配がしなかった。

「ええ。葛葉先生は前から色々問題がありましたから、これをきっ

かけに態度を改善してもらえればいいかなって…。それより先生、あのフィオナという名前は？」

「それは勿論彼女の想い人の名前さ。フェイトという名前は『完全なる世界』で有名だから、石田フィオナという名前で紹介したのだ。君がすぐ話を合わせてくれて助かったよ。しずな先生は結構アドリブがきくのだね」

「ふふふ…」

にこやかに笑う。確かにアドリブはきく方かもしれない。

「芦先生。少し時間ありますし、お願い聞いて貰っていいですか？」

「ん？　ああ、私も二時限目からだから構わないが」

キョトンとする芦に耳打ちをするしずな先生。ごにょごにょと言葉を連ねると、芦の顔は見る見るうちに真っ赤になって行く。

「いや、あのそれは…」

「うふふ…。一教師が朝から少女に指をくわえさせてたなんて、大っぴらに出来ませんよね？　私にもちゃんと甘えさせてくれたら、秘密にしますよ」

それは、脅迫。京都の時も石田との婚約問題を盾に関係を迫った前科がある。優しい顔をして、したたかかつ狡猾な女なのだ。

芦は涙を流しながら、頷くしかなかった…。

一方、校舎を出たフェイトは足取りも軽く道を歩いていた。一時はどうなる事かと思っていたが、芦のお陰で自由になれた。これで麻帆良を散策出来る。

「しかしこれは少し広すぎないかな。空を飛びたいけど流石にマズいだろうし…」

現在フェイトは森の中を通る一本道を歩いている。通行人は誰も居ない。果たしてこの道はどこに続いているのか…そう思ってしばらく歩いていると、少し開けた場所に出た。お店が立ち並び、屋台なども出ている。とりあえずここら辺で食事をとろう、とフェイトはオープンカフェのある喫茶店に入った。

「いらっしゃいませー！」

元気な店員の声に少々驚きながらも、フェイトはカウンターのメニュー表を見る。ここは主にコーヒーを扱う店らしい。以前は味覚より嗅覚の方が鮮明だったので香り重視だったが、今回は味覚もしっかりしている。ならば、今まで敬遠していたカフェラテにチャレンジしてみてもいいだろう。

「カフェラテ、トールで。ドーナツを一つ…いや、二つつけてもらえるかな」

「かしこまりました」

店員が用意する間に財布の中身を確認する。紙幣がかなりあるので問題ない。店内に流れる音楽を聞きながら待っていると、店員がトレイにカフェラテとドーナツを乗せてやってきた。フェイトは代金を払ってそれを受け取ると、表にあるテーブルへと移動する。丁度木陰になっている席が空いていたので、そこに腰を下ろした。

「さて。これはどんな味がするかな…」

カフェラテに口をつける。途端に、口一杯に衝撃が走った。

「……ぉ、おいしい…」

香りしか楽しめなかった頃は分からなかったミルクの味。こんなにも合うものかと感動する。次にドーナツを手に取りかじり付くと、これも信じられない程美味しかった。

「……ぐすっ、ぉいしぃよ…」

終いには泣き出す始末。瞳を潤ませてもしょもしょと食べる姿は、少し異様だった。平日の昼前という事で周りには老人や主婦しか居なかったが、そうした人たちの注目を一身に浴びていた。そこに、小さな客が訪れる。

「にゃー」

「ん？　猫？」

気づくとフェイトの座る椅子のすぐ近くに、一匹の猫が。何やら熱い視線を向けてきている。

「にゃうにゃうわうあ」

「う…すまない、猫の言語は僕には分からないんだ」

これにはフェイトも困った顔をする。明らかに何らかの意志を持って、この猫は声を発していた。どうにか応えてあげたい所だが、何を言っているのかさっぱり分からない。

「誰か、猫の言葉の分かる人はいないかな」

キョロキョロと見渡すフェイト。そんな様子を、少し遠巻きに見ていた少年が笑いながら近づいてきた。

「あははは、ねーちゃん面白いな！　ソイツ、腹減ってるだけだぜ」

「え…？」

振り返ると、そこには小学生高学年くらいの少年が立っていた。ジーンズにTシャツという地味な格好ではあるが、整った顔つきと凛とした眼差しが印象的である。少年はフェイトのカフェラテを指差して言った。

「それ、ちょっと貰ってもいいか？」

「これ？　いいけど何を…」

少年はフェイトの返事を待たずカフェラテを手にすると、片手の手のひらで器を作った。そこに、少しだけカフェラテを移して猫の前に差し出す。猫は馴れたようにその手の中の液体をペロペロと舐め始めた。

「コイツ最近、ここの飲み物飲みたがるんだよ。チャイラテだっけ？　あれのミルク多めのとかお気に入りなんだぜ」

「…カフェインとか口にして大丈夫なのかな」

得意気に言う少年に疑問を呈すると、少年は何でもないように答えた。

「大丈夫じゃないかな、こないだウチのクラスの女子がコーヒーゼリーあげたら普通に食べてたし。それで今でもこうして元気だから」

そういうものなのだろうか。フェイトは複雑な表情をして少年の手を舐める猫を見つめた。そして、特殊能力である「解析能力」を使って猫を調べてみた。

カシャ、カシャ、カシャ…

フェイトの瞳が猫を細かく分析してゆく。そして、猫の中に別の生命反応を見つけ出した。

「この猫…子供がいるのか。だから、栄養をつけようと必死だったんだ」

「え？　そりゃそうだ、こんだけ腹デカけりゃすぐ分かるだろ」

言われてみれば。猫は一目で妊娠していると分かるくらいお腹が大きかった。流石にフェイトも自分のうかつさに赤面する。穴があったら入りたい、いやむしろ穴を掘って周囲を沈めてやりたい。両手で顔を隠すと、少年はケラケラと笑った。

「お前、おもしろい奴だなぁ。良かったら一緒に猫缶買いに行くか

？」

「猫…缶？　猫の…？」

猫の缶詰め。猫が缶詰め？　猫…

「それは共食いにならないかな」

「あはははは、ならねえよう。猫の『エサ』の缶詰め、だから。お前、天然なのな」

楽しそうに笑う。そして、少年はハンカチで手を拭くと猫を抱きかかえた。

「俺、雪広ともきってんだ。お前は？」

「え…と、石田。石田、フィオナ…」

とっさに出た名前は、芦が用意した名前だった。

雪広ともきは学園内の小学校に通っていた。今日は、前日まで行っていた林間学校の次の日という事で、休みになっていたらしい。友人が風邪をひいてしまい遊び相手が居なかったので、何となく散歩していたと言う。

「いつもは、茶々丸って奴が猫の世話してるんだ。たまに俺とかが餌やったりしてるけど」

「お金とか、大丈夫なのかな。僕、ある程度持ってるから出そうか？」

そう言うと、とももきは少しつまらなさそうな顔をした。

「うんにゃ、ウチ金持ちだから。俺も結構持ってんだよ。歩く身の代金とか言われてんだ」

学校では、そう陰口を叩かれている。雪広財閥はこの麻帆良においてかなり有名だったりするのだ。そのせいでやっかみを受ける事に馴れていた。

「それは…」

「いいって。ほら、それより猫缶買おうぜ」

とももきに促されるまま、雑貨屋に入る。そこで、猫缶を三つ程買うととももきはカードで会計をすませた。

先ほどの広場へ戻ると、フェイトたちは缶を開けて猫に食べさせる。それをどこから見ていたのか、近くの草むらから他の猫たちが何匹かあらわれた。とももきは馴れた手つきで残りの缶を開けると、猫たちの前に差し出す。猫たちは喧嘩一つせず、静かに餌を食べて

いた。

「不思議だね。なんだか、君と猫たちは分かり合えてるみたいだ」

「まさか。俺はコイツらみたいに与えられてるだけで満足するような生き方なんて分かりたくないね」

フェイトは、おや、と首を傾げる。先ほどもだが、ともきは時々子供とは思えない顔をする時があるのだ。それが、少し気になった。

「それよりさ。俺、今日暇なんだ。良かったら一緒に遊ばないか。お前、なんか見ない顔だし麻帆良に来たばっかりなんだろ？　俺が、案内してやるよ」

「……うん。僕も、暇だったから助かるよ」

フェイトは、その申し出を受ける事にした。確かに麻帆良に来たばかりだし、何も分からずウロウロするよりも誰かに案内して貰ったほうが効率も良いだろう。

こうして、フェイトはその日、雪広ともきに連れられて麻帆良を見て回る事になった。小学校のあるエリアから始まり、主に子供が遊ぶ場所が中心だが目一杯遊びながら麻帆良を歩き回った。アスレチック広場では二人で綱渡りをしたりハンモックのような遊具に絡まったり、動物のいる公園では何故か花を持ったクマに追いかけられたりした。慌ただしくも楽しい時間は、あっという間に過ぎ去って行く。

二人とも疲れてヘトヘトになって…最後にやって来たのは、とあ

るハイキングコースから逸れた裏山だった。草むら、茂みを抜けた先にあったものは…

「これは…世界樹？」

「ああ。でっかいだろ」

そびえ立つ世界樹。いつも見ていた方向とは逆の、裏側から見た世界樹の姿だった。ともきはフェイトの手を引くと、その世界樹の根や幹の凹凸を器用に足場にして登って行く。そうして、かなりの高さまで登ると一つの立派な枝へとたどり着いた。

視界が開ける。そこからは、夕陽に真っ赤に染まった麻帆良の街並みが一望出来た。

「俺のとっておき…って言いたいけど、姉貴のクラスの奴らに教えて貰ったんだ、ここ。結構綺麗だろ」

ともきはそう言って、フェイトの顔を見る。オレンジ色に照らされたフェイトの顔は…何だか、思い詰めたような表情だった。

（フィオナ…君は、この景色をずっと一人で眺めていたのかな。僕は君を…助けてあげられないのかな。ごめんね、フィオナ。僕にはこうして、ここで一緒にこの景色を眺める事しか今は出来ないんだ）

フェイトは、溢れ出そうな涙をこらえながら、ただ景色を眺めていた。そんなフェイトに、ともきは少し寂しそうに声をかける。

「やっぱお前…オトナなんだな」

「…え？」

「一緒に遊んでた時は、俺のクラスの奴らと変わんないかなって思ったけどさ。やっぱ、違うんだな」

そして、少しため息をつく。

「俺もそのうち、馬鹿やったり出来なくなるんだろうな。色んな大変な目にあって、ねーちゃんみたいに難しい顔するようになるんだろうな」

「ともき君…」

なんと言っていいか、分からなかった。彼は人間の子供。自分とは違う。しばらくフェイトが困っていると、ともきは何かを思いついたように顔を明るくした。

「そうだ、ねーちゃんに良いものをやるよ！」

そう言って、手提げカバンから取り出したのは一冊のスケッチブック。今日、散歩途中に買ったものだった。ともきは、自信満々にその真新しいスケッチブックの最初のページを開ける。サインペンを取り出すと、下書きも無しにいきなりペンを走らせた。

「見てな、俺は一回見たものなら何でも描けるんだ！」

「え、何も見ないで？」

一心不乱にペンを走らせるともき。そのスケッチブックを後ろから覗き込むと、およそサインペンで描かれたとは思えない精巧さで一人の女性の姿が描かれてゆく。

「これは…」

「でーきたっ！！」

ジャン、と言ってスケッチブックを見せるともき。そこには、フェイトの姿が。とても楽しそうに笑うフェイトの姿があった。

「…僕？　僕、こんなに笑ってたかな」

「ああ！　ジャングルジムでさ、俺がひっくり返った時に笑ってた。一番いい顔してたな！」

フェイトの顔が、恥ずかしくて真っ赤になる。ともきはそんなフェイトに、スケッチブックのページを切り離して渡した。

「俺が見た、お前。もっとオトナになって、笑えなくなったりしたら…これ見て思い出せよ。出来ればそん時、ついでに俺も思い出してくれると嬉しい」

「ともき君…。ありがとう、大切にするよ」

フェイトはそのページを受け取りながらともきに礼を言う。その表情は、描かれた笑顔のように柔らかいものであった。

その後、二人は枝の上で日が落ちるまで語り合った。もっぱら話していたのはともきだったが、フェイトはそれを楽しそうに聞いていた。未来に対する希望と不安。それは、悲しい未来しか想像して来なかったフェイトにとってとても眩しいものだったのだ。

帰りしな。

ともきは、フェイトに少し照れながら言った。

「馬鹿ねーちゃん達が言ってた事だから、本当かわかんねーけどさ。この世界樹で、片想いの人に告白すると想いが叶うんだって。だから…」

ともきは、フェイトの顔を見る。そこで想いを口にしようとして…

「だから…ねーちゃんも、大切な人と、またここに来るといいよ。きっと、うまく行くから！　じゃあな！」

出来なかった。

分かっているのだ、自分とすむ世界が違う事を。最後に見せた、あの泣きそうな顔…。きっと、子供の自分には超えられない壁があの表情の向こうにある。だから…言えなかった。

ともきは、泣きそうになるのを必死にこらえながら並木道を走り去って行く。フェイトはその背中に…

「ありがとう、ともき君！」

手を振って、声をかける。ともきは振り返らないまま、右手を乱暴に振るとそのまま道の向こうへと消えて行った。

その日の夜。

ホテルの一室でフェイトがくつろいでいると、しずな先生がテーブルの上に置かれた額を手にとる。中にはあの笑顔のフェイトがあった。

「あら凄い。上手な絵ね」

「うん。今日、僕を連れて麻帆良を案内してくれた人に描いて貰ったんだ」

しずな先生は絵を手にとってじっくりと見る。そして、フェイトに向かってこんな事を言った。

「これ描いたの、男の子でしょう」

「…どうして分かるんだい？」

ふふふ、と笑うしずな先生。不思議そうに首を傾げるフェイト。でもそれは、見る人が見れば一目瞭然だったかもしれない。

その絵には、ただ無邪気に人を好きになれた頃の空気が封じ込められていた。そして、そこに佇むフェイトの表情は…

誰もが体験した初恋を思い出させるような、とても愛らしい笑顔だったのだ。

第七十八話　アリアの帰国、ネギの新生活

少し時は遡り、ヘルマン襲撃の翌朝。
アリア・スプリングフィールドはネギを伴い、学園長室へと赴いた。既に事の顛末は昨晩報告をしている。今回は、それとは別件だった。

「ふむ。石化を解く術を得た、と。そういう事ならば、反対する理由は無いのう。よいじゃろう、アリアちゃんの帰国を認めよう」

「ありがとうございます！　きっと、村の皆を元に戻して帰ってきます！」

アリアの帰国。その許可を得る為にやって来たのだった。ヘルマンの石化攻撃を完全に解析して解呪出来るようになったアリアは、早く故郷の皆を助けたくて仕方無かったのだ。これは、アリアが転生した時に一番願っていた事だった。

「…お姉ちゃん、僕…」

「ネギ、私が居ない間３－Ａをお願いね」

そう言われてしまっては、頷くしかない。ネギは寂しそうな顔で「うん」と答えた。

「ネギ君、アリアちゃんが居ない間は寂しいじゃろうが、これも立派な魔法使いに…いや、立派な大人になる為の試練みたいなものじゃよ。頑張れるかの」

「…はい。僕もお姉ちゃんに助けて貰ってばかりじゃダメですから」

頭では分かっている。アーニャだって、一人で頑張ってるのだ。自分だって、一人で頑張らないと。拳を握りしめ決意するネギを、アリアと近右衛門は優しく見守っていた。

それからアリアが帰国するまでの一週間と少しの間。ネギは一人で暮らす為に生活の知恵をアリアに学んだ。食事に関してはキッチンを使うのは危ないので外食を許可したが、アリアはなるべく掃除洗濯は自分でさせようと考えていた。スーツはクリーニングに出すしかないが、靴下やシャツといったものくらいは洗濯機を使って洗えるくらいになって欲しかった。

「後はこのボタンを押すだけ。簡単でしょ？」

「うん。これなら僕でも出来るよ」

全自動洗濯機万歳である。後は毎月どういった消耗品を買っていたかメモ書きを残して…ああ、ゴミの出し方も教えなきゃ。アリアがせわしなく考え事をしていると、隣に立っていたネギが悲しい顔をして俯いた。

「グスッ…」

「それから新聞代が三千五百六十円で…って、ネギ？　どうしたの？」

「…もう少しでお姉ちゃんが居なくなると思ったら、なんか悲しくて…」

ポロポロと、涙が溢れ出た。

学園長の前では強がっていたが、ネギはまだ子供。やはり一人ぼっちになるのは寂しいのだ。特に物心ついた頃からずっと一緒だったアリアと離れるのは、考えられなかった。

アリアの偽物と対峙した時や、姉の魔法人形マリと戦った時。別荘での木乃香や、山下やヘルマンと戦った時に、あれだけ強気でいられたのはアリアがいたからなのだ。アリアがそばにいる、もしくは直ぐに駆けつけてくれるという安心感が、ネギを動かしていた面が大きい。それ故に、今回のアリアの帰国はネギに取って大きな不安となっていた。

「仕方ないわねぇ…」

アリアは苦笑いをしてネギを抱き寄せた。頭を撫でながら、優しく囁く。

「皆を元に戻したら、直ぐに戻ってくるわ。そうね、文化祭に間に合うようならネカネさん連れて来てもいいわね」

「えっ、ネカネお姉ちゃんを!?」

パッと顔を明るくするネギ。アリアの次に懐いてたのがネカネだ

った。

「ええ。だから、ネギもそれまで元気で頑張んなさい。いざネカネさんが麻帆良に来て、メソメソ泣いてるネギ見たらすっごい悲しんじゃうでしょ？　そうならない為にも、今から笑顔の練習よ。ほれ、コチョコチョコチョコチョコチョコチョ！」

「わ、あはははは！　やめてよお姉ちゃん、あはははは！」

くすぐられて笑い転げるネギ。不思議と、それまでの不安や寂しさは消えていた。それはまるで魔法のよう。ネギは、アリアの言葉や行動こそが魔法なんじゃないかと思っていた。

「よし！　じゃあ次はお風呂で一人で頭を洗えるようになるわよー！」

「え、あ、シャンプーハットは使っていいんでしょ！？」

「ダメー」

「ぅわあぁぁん！」

アリアに引きずられ、風呂場へと連れて行かれるネギ。結局その日はシャンプーを目に沁みさせ泣きながら頭を洗う事となった。

そして…

アリア帰国の日がやってきた。ガンドルフィーニが偽者のしずな先生に襲われた翌日、フェイトが麻帆良を散策した日である。

教室でネギが姉の帰国を生徒たちに告げていた頃。アリアは成田空港のロビーで茶々丸とエヴァンジェリンと別れを惜しんでいた。

「本来なら、サボり魔さんには注意しなきゃならない所ですけどね。今日だけは特別です」

「フン。校則なんぞに縛られる私ではない。そうしたのはお前だぞ、アリア」

ニヤリと笑うエヴァンジェリン。アリアが呪いを解いてくれたから、こうして見送りに来れるのだ。

「くれぐれもお気をつけ下さい、アリア先生」

そう言葉をかけるのは、最近表情が豊かな茶々丸。今も心底心配そうな顔をしていた。

「マスターの魔力供給は、１００ｋｍ以上離れると生命を維持する最低限の供給しかなされなくなります。敵に襲われるような事がありましたら、まず逃げる事を考えて下さい」

「分かってます。私だって死にたくありませんからね。いざという時はカードで直接呼んじゃいますから」

エヴァンジェリンは、当然だという顔をする。本来ならばついて行きたいが、それはアリアが固辞した。ならば仮契約の恩恵である転移能力で呼び出せと言ったのだった。

「まぁ、今のアリアなら山下クラスの化け物相手でなければ遅れをとる事は無いたろう。クラスの事はネギに任せて、思う存分治療してくると良い」

「ええ。エヴァさんの事もちゃんと話して来るわ。エヴァさんは悪の福音なんかじゃない、とても優しい人なんだって」

「む？　いや、それはやめ…」

その時、アリアの搭乗予定の便の準備が整った事を知らせるアナウンスが。

「あ、じゃあ私行きますね。エヴァさん、茶々丸さん、お元気で！」

「こら待てアリア！　よせと言うに！」

「お気をつけて行ってらっしゃいませ、アリア先生」

二人に見送られながら、アリアは搭乗口へと続く廊下を歩いて行った。

その頃。

３－Ａ教室では、少し気落ちしているネギを元気付けようと生徒たちが騒いでいた。今日は来るべき麻帆良の巨大な文化祭…麻帆良祭のクラス出し物を決める日だったのだ。

メイド喫茶、コスプレ喫茶。挙げ句の果てにノーパン喫茶を企画しようとするあたりは前の世界と一緒の展開。アリアが居なくなった途端に大騒ぎするのは如何なものか、と超鈴音は頬杖をついてそれを眺めていた。そんな中…

石田は、珍しい相手と話していた。白髪に近い髪の毛をした褐色の女の子。ルームメイトのザジ・レイニーデイである。

「今日は私が食事を与えます。そちらの使い魔さんたちは本当にドッグフードでいいんですか？」

「……（コクン）」

話しているのは、瀬流彦オコジョとザジの使い魔の事だ。

同じ部屋に住む以上、瀬流彦オコジョの事はザジに伝えなければならない。ザジが３－Ａにワケアリで入って来ている事を調べていた石田は、自分の素性を話してザジを味方につける事に成功していた。ザジは魔族とのハーフ。自分も半魔である事を告げたら仲良くしてくれるようになった。今では夜中に麻帆良調査をする時に、窓の鍵を開けて門限破りに協力してくれるまでになっている。

「安上がりでいいですね。いっその事、あの小動物にもドッグフード食べさせましょうか」

「…それは可哀想」

そんな二人の会話を、いつの間にかクラスメイトたちは驚愕を持って眺めていた。ザジさんが喋った！　まるで天変地異でも起きたかのようなどよめきだ。例によってその騒ぎは他の教室にも伝わり、芦優太郎によって諫められる事となった。

そんな騒動が一段落した昼休み。芦は誰も使っていない空き教室を使って昼食をとっていた。メンバーは他にガンドルフィーニとしずな先生だ。教室には人払いと強力な認識阻害魔法がかけられている。

「食べながらでいい。時間は惜しいからな。ガンドルフィーニ君は次のコマは？」

「いや、何も入っていないから時間は大丈夫だよ」

「私も大丈夫です」

しずな先生もにこやかに答える。偽者とはいえ殺されかけた経験のあるガンドルフィーニは少しビクついていた。

「ならゆっくり説明してもいいな。まず始めに先日の件だが…この

麻帆良にはどうやら侵入者が潜伏している。能力は完全には把握出来ていないが、捕らえた人間から情報を抜き取り複製、魔力でその人物そっくりな操り人形を創作出来るようだ。その精巧さは、君が体験した通りだよ」

「…ああ。恐ろしいくらいにそっくりだった」

思い出しただけでも身震いする。あの時は完全に油断しきっていたのだ。殺されていても不思議ではなかった。

「特殊な力を持った人物。その気になれば麻帆良の魔法使いを人知れず攫って、操り人形とすり返る事くらいしそうだな」

「私のコピーも、入れ替わって学園長のそばに居たようです」

しずな先生は監禁されている間に偽者からある程度情報を聞き出している。

「でも時期が来れば新しい身体を作って貰って、自由になれると言っていました。私も用済みだと」

「時期…」

時期とは何だろうか。一体彼らは何を狙っているのだろう。それは、芦にも分からなかった。ただ、どちらにせよ目的は麻帆良の地下に眠る人物だ。

「ガンドルフィーニ君は、麻帆良の地下に眠る人物について話を聞いた事があるかね？」

「地下…？　いや、初耳だ。学園長からは、世界樹の重要性と麻帆良に身を寄せる要人の事くらいしか聞いていない」

秘書のしずな先生にも話していなかった。つまりはこの学園の教師たちには話していないのだろう。知っている人間は恐らく高畑とアルビレオ・イマ。あの大戦の英雄くらいだろう。やれやれ、これは説明に時間がかかりそうだ。芦は内心うんざりしながらも説明を始める。

ガンドルフィーニが事態を把握するまでに、説明はたっぷり一時間にも及んだ。

「…つまり、学園長は危険極まりない存在を封印しているという事を我々に黙っていたという事か…」

説明を聞き終える頃には、ガンドルフィーニは怒りを露わにしていた。それはそうだろう。世界をひっくり返しかねない爆弾の上で平穏な生活を送れるはずがない。家庭を持つ身としては、冗談ではない話だった。

「しかしな。闇の福音程度でヒステリックに喚き立てる連中のいるこの麻帆良で、そんな事をバラしたら大騒動になるのは目に見えているだろう。話せなかった、というのが正しい認識だ。逆に、この件を盾に魔法世界と政治的な駆け引きをしている点では賢いと言えるかもしれん」

そこまで言うと、芦は目を細める。声に苛立ちが混じった。

「だが、狙われ続けるというリスクを軽く見ていたようだ。既に麻帆良には侵入者が居り、被害も出ている。それも、私が気づかなかったら完全にやられていただろう。そして未だにその事に学園長は

気づかないままだ」

そう。そこが問題だった。近右衛門は舵取りは出来るが現状把握のスピードが遅すぎる。気づいたら遅かった、という場合が多いのだ。

「だから、ガンドルフィーニ君。ヒステリックにならずに冷静でいられる人物が麻帆良を守る必要がある。地下の人物を秘密にしつつ、侵入者の排除を行う…。私のように魔法世界の常識や利害関係に左右されない能力者がやらざるを得ない状況なのだ」

話し疲れてペットボトルのお茶を飲み干す芦。複雑な顔をして考え込むガンドルフィーニを見ながら、買っていた新しいお茶の蓋を開ける。

「…我々魔法使いは、信用出来ないか…仕方ない事だが」

それが残念だった。

「ただ、私たち魔法使いの中にも純粋に麻帆良を守りたい者はいる。どうだろう、地下の人物の件は秘密のままで、侵入者の件は魔法先生たちに協力を仰ぐというのは。芦君だけでは限界があるだろう？」

相手が既に何人もコピーを作っていたら一人では対処しきれないのではないか。そう思ったガンドルフィーニは芦にそう提案するが、芦は首を縦に振らなかった。

「下手に手を出しても捕らえられてコピーされるだけだ。私が望むのはただ一つだけ。襲われたら逃げるくらいはしてほしい、という事くらいだ」

多少冷たく響くが、これくらい言わないと分からないだろう。普

通の魔法使いに勝てる相手ではない。しかし、それでもガンドルフィーニ食い下がった。

「分かった。なら、私一人でも探し出して捕まえてみせる。どの道一度狙われてしまったんだ、危険なのは変わりない。妻と娘の為にも、私はこの麻帆良の平和を脅かす存在を捕まえてみせる」

ああ、やっぱり面倒な事に。

だからガンドルフィーニを関わらせるのは嫌だったんだ、と頭を抱える。それを隣で見ていたしずな先生は、にこやかな表情のまま芦に言った。

「芦先生。信頼出来る人に協力してもらうのは悪い事ではないですよ。ガンドルフィーニ先生なら、きっと変な人に協力を仰ぐような事はしません」

そうだろうか。

義憤なのかただ鼻息が荒いだけなのか分からないガンドルフィーニの引き締まった表情を見ながら、芦は迷う。迷ったあげく、折れた。

「分かった、ガンドルフィーニ君。君が信頼出来る人間には、今の話をしてもいいだろう。ただ、その影響力を考えて話して欲しい。もし迂闊に真相を話したら、下手したら学園長の解任運動にも発展しかねない事だからな」

「分かっている！　無用な混乱は起こさないようにするから、安心して欲しい！」

活き活きとした顔で答えるガンドルフィーニを見ながら、芦は新しいお茶も一気に飲み干した。飲まなきゃやってられない。勤務中でなかったら、度の強い酒でも煽っていただろう。

しかしまぁ、これはこれで悪くない展開かもしれない。

芦は無理矢理そう思い込んで自分を納得させていた。

その日の放課後。

手際良く仕事を終えたネギは、一人で夕陽に照らされた世界樹を見上げていた。

姉が帰って、一人となった。

寂しいネギは、父が居るという世界樹の根元まで来てみたのだ。意志の疎通は出来ないけど、ここなら寂しくないかも…と思った。すると、そんなネギを見かけた生徒が声をかけてくる。

「…なにしょんぼりしてんのよ。やっぱり皆の前では無理してたのね」

「え…あ、明日菜さん」

それは、神楽坂明日菜だった。

「ガキが無理してんじゃないわよ。昼間、アンタの事みんな心配してたのよ？　本屋ちゃんとか、オロオロしてたんだから」

「ガ、ガキとか言わないで下さい！　でも、そんなに皆に心配かけてたなんて…。分からなかった僕は、やっぱりガキなんでしょうね…」

久しぶりのネガティブ思考だ。明日菜は苦笑いする。自分の事を未熟者だとか子供だとか認められる人間は、ガキなんかじゃない。少なくとも、自分の嫌いなガキの範疇には入らなかった。だから、予定通りにしてあげよう。

「ネギ。良かったら、私の部屋に泊まる？」

「ふぇ？」

いきなり言われて、変な声を出してしまった。部屋に泊まる？明日菜さんの？

「木乃香と話してたんだけどね。あんた一人ぼっちにしたらきっと寂しくて泣いたりするだろうから、アリア先生が帰ってくるまで泊めてあげようかなって」

「でも、生徒さんの部屋に泊めて貰うなんて…。それに女子寮じゃないですか」

ネギがそう言うと、明日菜は得意気な顔をする。

「それなら、木乃香が学園長に許可を貰ったわよ。孫娘って立場を生かしてね」

「木乃香さん…」

相変わらず自分のやりたいようにやっているようだ。

「あの、いいんですか？　僕、明日菜さんに嫌な思いさせちゃってちゃんと謝る事も出来てなくて…」

「あー…、試験のアレ？　いいわよ、そんなの。というか、それ以上にエヴァちゃんの別荘で恥ずかしい所見せちゃってるしね。お互い様と言えばお互い様だし…」

顔を真っ赤にする二人。

別荘でのお風呂タイムで、スライムまみれになっている姿をお互い見てしまっている。今更だった。

「じゃあ…お言葉に甘えてもいいですか？　僕、本当は凄く心細かったんです」

「勿論よ！　アンタまだ１０歳なんだから、甘えていいの」

そう言ってニッコリ笑う明日菜。世界樹の裏に向かって、声をかけた。

「みんな、寮に来るってー！」

「「「「やったーーーっ！！」」」」

「え、えええっ！？」

驚いて振り向くネギ。そこには、別荘の修行メンバーたちが皆集まっていた。超、クー、長瀬、木乃香、刹那、石田、あやか。そこにくっついて来た鳴滝姉妹や佐々木といったメンツ。皆、ネギが寮にやってくるのを歓迎していた。

「やったー、ネギ先生が寮に来るー！」

「また背中を流しあうでござるよ」

「朝のジョギングは今から予約していいアルか？」

「あ、ズルいよくーふぇー！」

「とりあえず歓迎会開くなら超包子で開くといいヨ」

「こんな事も商売に繋げますか超さん」

「皆さんいい加減になさい！　ネギ先生が困ってらっしゃるでしょう！」

主役であるネギを放っておいて、はしゃぎまくる生徒たち。あやかの言うとおり多少面食らっていたのは確かだったが、ネギはすぐ

に笑顔になった。

「ありがとうございます！　これから、ちょっとの間ですけどよろしくお願いしますね！」

オオーッ！と言う声と共に皆が腕を突き上げる。何だか元気の塊みたいな人たちだな、とネギは思った。そして、自分はなんて幸せなんだとも思うのだ。元気をなくしても、こうしてそばに来て気遣ってくれたり元気づけてくれる人がいる。

（お姉ちゃん、これなら僕も頑張れそうだよ）

本来の目的でもある一人暮らしの練習にはなんにもならないのだが、ネギは嬉しそうにここには居ない姉を想いながらそう呟くのだった。

第七十九話　騒がしい夜に紛れて

超包子は移動式店舗として有名だが、夕方以降は森林公園区域での営業で統一している。特にこれから麻帆良祭という事もあり、遅くまで学園で活動する人間が多いとなると中等部や高等部、大学方面とも距離の近い森林公園区域に店を構えるようになるのは、自然の成り行きであった。

以前の世界では中々許可を得る事が出来なかったが、今回は学園長と協力関係にあるのでなんの遠慮もなく営業出来る。超鈴音だけではなく、四葉五月やクーもいつも以上に張り切っていた。

「超ちゃーん、小籠包こっちにもー！」

「餃子三人前追加してー！　メンバー増えたからー！」

「私は炒飯食べたいなー」

特に今日はネギの入寮歓迎会。いつの間にか３－Ａの殆どのメンバーが参加する事となった為、超とクーだけでなく石田と空港から帰って来た茶々丸もヘルプで入る事となった。

「超さん。どう見てもミニスカどころの騒ぎじゃない格好なんですけど。捕まりませんか、これ」

「アハハハハハ、認識阻害で見えない事になってるからヲ大丈夫ヨ」

今、石田は京都でヘルプをした時のメイド服をさらにきわどく改造した不思議なコスチュームに身を包んでいる。クーや茶々丸も同

様だ。それはまるで昼間にクラスで盛り上がったコスプレ喫茶のようであった。いっそこのまま超包子と３－Ａでコラボしちゃえ、などと言う声も聞こえて来る。

そんな呑気な言葉が飛び交う中、超と石田はどこか緊張感を伴った顔をしていた。

（とりあえず今は仕事をしながら周囲を観察するヨ。何だか奇妙な気配を感じル）

（そうですね。気配…というか視線を感じます。もしかしたら、件の能力者かもしれません）

二人は念話で確認しあってから頷きあう。

気配。

どこか品定めするかのような視線を感じていた。それは、集まった３－Ａの生徒たち全員に向けられているようだ。アシュタロスの加護を受けている超や石田だから感じとれる程の小さな気配。あの刹那でさえ気づいていない。

もしや、神族か？

石田は表情には出さず、心の中で警戒心を強めていた。

ネギの歓迎会は、賑やかに行われた。このメンツが集まって暗くなるというのが無理な話で、教室でのいつもの騒動の三倍くらいのやかましさで周囲の注目を集めていた。言ってみれば傍迷惑なのだが、麻帆良祭の準備期間という事で大目に見てもらえている。主に大学生を中心に、結束を強める為の飲み会などが頻繁に行われる時期でもあるからだ。

３－Ａの生徒たちは、アルコールが無くても盛り上がる。ネギも普段ならオドオドするばかりだが、今日は一緒になって騒いでいた。その一団から少し離れた所に席を取ったのは、麻帆良の教師たち。新田先生、しずな先生、そして芦優太郎である。

「ほう、あれは３－Ａですか。ネギ先生にはキツく怒ってしまいましたが、もう立ち直ってますな」

「彼は強いですよ。お姉さんが帰国してもちゃんと仕事を出来ていますから。子供とは思えませんね」

新田先生と芦はそう言ってネギを眺めていた。そして同時に、芦は念話を超たちに繋げる。

（能力者だ。気配を殺しているが、察知できたか？）

（場所までは特定出来ないヨ）

（私の心眼でも無理です。異様に高度な気配遮断能力ですね）

誰かに見られている。しかし、姿が補足出来ない。芦も新田先生

と話をしながら周囲を警戒するが、上手く気配を辿れない。魔神アシュタロスの力をもってしても追跡出来ないとなると、相手は限られてくるだろう。

神族。もしくは、それに近い能力を保持する者。

（イシュタル。能力を奪う事は出来たか？）

（いえ。植物を使ってもこの一帯に怪しい能力者の存在は確認出来ませんでした）

これでは仕方ない。仕掛けてくる様子も無いし、ここは気づいていないフリをしておこう。芦がそう判断して新田先生と話をしていると、それまでにこやかに隣に座っていたしずな先生が席を立った。

「どうしました？」

「いえ、ちょっと…御手洗いに」

恥ずかしそうに言う。芦が慌てて謝ると、しずな先生は小走りにテーブルを離れて行った。

超包子は広場にテーブルを並べて営業している。つまり、トイレ

はそのつど近くの公衆トイレを利用する事になる。
しずな先生は広場から少し離れたトイレへと向かったが、途中でコースを変えた。

本当はトイレへ行きたかったのではない。見知った人影を見かけたので確認したかったのだ。それは、最近行方不明となっていた人物であり、見つけ次第学園長に報告せよと命じられていた…

「高畑先生！」

高畑・T・タカミチであった。

「君は…しずな先生じゃないですか。どうしたんですか、そんなに慌てて」

「ど、どうしたんですかじゃありません！　連絡も無しに居なくなったから学園長は心配していたんですよ！」

「え…ああ、そういう事ですか。連絡してたと思ってたんですが、行き違いがあったんでしょう」

悪びれもしない。しずな先生はその態度に少しイラついたが、すぐに違和感に気づいた。おかしい。目の前の人物は本当に高畑先生なのだろうか。しずな先生は、奇妙な寒気を感じて固まる。そして、少し後退りを始めた。

「ん？　どうしました、しずな先生？」

「あなたは…あなたは高畑先生じゃありませんね？　一体、誰なんですか！」

おや、という顔をする高畑。不思議そうにしずな先生を見て、歩み寄る。

「どうしたんですか、しずな先生。僕が高畑でなければ一体何だって言うんですか」

「来ないで下さい！　あなたは…あなたは…」

キッと睨みつける。

「高畑先生の偽物です！　コレクションの一人でしょう！」

思わぬ言葉に固まる高畑。しずな先生の目は真剣だ。適当な言葉では引き下がりそうにない。高畑は小さくため息をつくと…しずな先生を見て、ニタァッと笑った。

「フ…フフフハハハハ！　なんで分かるかなぁ、こんなにそっくりなのに！　そうだ、俺はコレクションの一人だよ。しかしおかしいなあ、本当になんで分かったんだろ？　後学の為に聞かせてくんねーかな」

いきなり笑い出したと思ったら、およそ高畑の言いそうにない口調でまくし立てる。そのあまりの変わりように呆気にとられたしずな先生だが、すぐに気を取り直して答えた。

「ニオイです」

「ニオイ？」

「高畑先生は、少し離れていても煙草のニオイがしました。けど、あなたからは何のニオイもしない。私に対する態度も少し変でした

ね」

あちゃー、という顔をする偽物。頭をバリバリと掻いて悔しがった。

「あー、煙草なあ。俺苦手なんだよなー。つーか高畑臭かったのかよ！　五感が効かねえってのは不便だな、こんな事すら気づかねえ」

そう言ってから、イヤらしく口元を歪めてしずな先生を眺めた。

「まあ、どの道ここでお前をまた捕まえちまえばいいか。今度は逃げようなんて思えないように身体に覚えさせてやるさ」

「……っ！！」

周囲に人払いの結界が張られる。しずな先生はその時、初めておびき出された事に気づいた。芦や石田が気づかず自分だけ気づくなんて、不自然だ。方法は分からないが、自分にだけ気づくように仕向けておびき出した…そう考えた方が自然だ。

「さあ、しずな先生。またこちら側へ来てもらおうか」

ゆっくりと近づいてくる偽物。しずな先生は距離を保とうと後退りするが、すぐに結界の壁に背をぶつける。もう、逃げられない…そう思った次の瞬間、不思議な光景が目に飛び込んできた。

頭上から、蔓草が伸びてくる。

よく見ると、地面にもツタが伸びていた。

それは次第に量を増やすと、一斉に偽物目掛けて飛びかかった！

「な、何っ！？」

それは瞬く間に偽物の身体を雁字搦めにしてみせた。動けず、慌てる偽物。しずな先生も何が起きているのか分かっていなかった。

「惨めですね、高畑先生。いや、偽物でしたか。どちらでも構いませんが」

「あなたは…石田さん！」

しずな先生が振り返ると、そこには石田留美の姿があった。

「帰りが遅いのでマスターから迎えに行けと言われたのです。来てみてビックリですよ。よく私やマスターの索敵能力をかわしたものですね」

「…お前は、イレギュラーじゃねえか。どこの世界から転生した？」

ツタまみれになりながらも強気の態度を崩さない。よほど自分の能力に自信があるのだろうか。石田は試しに偽物の能力を封印しようとしたが…

バチッ…！

偽物の身体の表面に火花のような物が散って、はじかれた。ロックがかかっている。

「お前…それが出来るって事は、神族と同じ存在…いや、違うな。アシュタロスの関係者か」

殆ど正体はバレてしまったようだ。石田は小さく舌打ちをして偽

物を睨みつける。

「とりあえず貴方には死んでもらいましょう。ただでさえ嫌いな高畑先生の、品性下劣なコピーとかゾッとします」

「あはははは、やってみせろよ」

偽物が動き出す。身体中に力を込めると身体にまとわりついているツタ類を全て燃やしつくした。

「…魔法!?」

これにはしずな先生が驚く。高畑は魔法を使えない。しかし今目の前で展開されたのは魔法だ。本当にコピーするだけなら、魔法など使えないハズなのだが…

「魔法も封印出来ない…よほど問題の神族と繋がりが強いのでしょうね」

言いながら、構える石田。戦闘は得意ではないが、本人そのもののコピーでないなら問題は無いだろう。本物の高畑は魔法ではなく「気」を使って攻撃してくる。石田の苦手とするタイプだった。

向かい合う石田と高畑の偽物。両者ともファイティングポーズをとったまま睨み合う。どちらかが動けば壮絶な打ち合いが始まる…そんな一触即発の雰囲気の中、意外な人物の意外な発言が二人を驚かせた。

「アデアット!」

「「は?」」

ショアンショアーン、と変な音を立てて、しずな先生の右手にスプレー缶が現れる。アーティファクト。一体、しずな先生が誰と？疑問符だらけになって固まる偽物に向かって、しずな先生は思いっきりスプレーを吹きかけた。

「えいっ！」

シュー！

「うっ、ぷわっ！　何しやがる！？」

手で振り払うが、もう遅い。偽物は全身に謎のミストを浴びてしまった。そこに、一陣の風が吹く。

ヒュウゥゥゥゥ…

「ひょおおおおおっ！？」

偽物が悶えた。キモい。

「…何ですか、それ。というか仮契約しやがりましたね、マスターと」

「はい、私だって芦先生が好きですから。石田さんには負けませんよ」

ニッコリ微笑む。

「今のは、身体中の感覚を鋭敏にしちゃうアーティファクトです。あの人、今全身が敏感過ぎる状態なのでまともに戦えない状態ですよ」

なんとエロ恐ろしい。

特にあの偽物は今まで五感が鈍かったらしいから、効果はてきめんだろう。石田は最初憐れみの眼差しを偽物に向けていたが、すぐにサディスティックな光をその瞳に宿した。

「では…お仕置きの時間です。じっくりたっぷり、ねぶりあげるように痛めつけてあげましょう」

「私もスプレーかけるしか出来ませんけど、お手伝いします」

ジリジリ、と歩み寄る二人。先ほどとは全く逆の展開に偽物は涙目になる。逃げようとしたが、すぐに植物にからめとられて動けなくなった。

「は、は、離せ！　悪かった、悪かったから離してくれ！」

「「却下です」」

「イヤアァァァァァァァッ！！」

麻帆良に汚いオッサンの悲鳴が響いたが、その声に気づくものはいなかった。

同時刻。

図書館島の地下で、アルビレオ・イマは手にした本が燃え始めたのを見て驚きを隠せなかった。慌てて本を投げると、本は激しく燃えながら水面へと落ちて行く。

それを見ていた早乙女ハルナはケタケタと笑い、綾瀬夕映は呆れた顔をする。

「あはははは、カッコわるー！」

「魔法の先生が魔法書を燃やすとか、有り得ないのです」

二人の言葉に、アルビレオは困ったように頭を掻いて照れ笑いをした。

「いや、お恥ずかしい。このように、熟練した者でも間違って魔法を失敗する事はあるんです。だから、皆さんも真面目に修行しましょうね」

「苦しい！　その理屈は苦しいよイマさん！」

「イマイチどころかイマ3、今ならイマ5くらい行ってますね」

容赦ない口撃にタジタジのアルビレオ。それを遠くから見ているのは宮崎のどか。今、ここでは魔法の修行の真っ最中だったりする。

学校が終わったら、魔法の修行をする。それは以前ここに来た時に決めた事だった。特に今は麻帆良祭に向けて皆が活動をしている

時期。多少遅くなっても不信がられないし、図書館探検部としての活動も兼ねて、こうして図書館島で過ごしているのだ。今は丁度初歩的な魔法の練習をしている所。のどかは既に中級魔法を唱えられるので、見学だけにしていた。

「しかし、悔しいのです。早くのどかに追いついて大きな魔法を使ってみたいのですよ」

「そーだねー。いつの間にか、差がついちゃってたからなー」

「あ、あの、ごめんなさい…」

すまなさそうに俯くのどか。二人は謝る必要ないと言うが、内心少し嫉妬していた。友人と思っていたのどかが魔法の事を秘密にしていたのも面白くないが、魔法の修行を主にエヴァンジェリンたちと行っているのが嫌だったのだ。綾瀬にとっては、友人を神楽坂明日菜にとられたような気がしていた。

二人はのどかから離れてまた魔法の修行に戻る。魔法の杖を振って必死に呪文を唱えていた。

「あのー…、アルビレオさん。お手洗い、行ってもいいですかー…？」

少しいたたまれなくなったのどかは、アルビレオに話しかける。アルビレオはにこやかに頷いた。

「はい。そこを出てすぐ右手にありますよ」

「ありがとうですー…」

パタパタと小走りで去って行くのどか。それを見て、アルビレオはほくそ笑んだ。いいタイミングだ。今なら、引っかかるだろう。

アルビレオは、二人に声をかける。二人がのどかに嫉妬しているのは端から見ていてすぐ分かった。ならば、こう切り出せばいい。

「では、次のステップに移りましょうか。これは、一気にあなた達のレベルを上げる極秘の練習方法です。宮崎さんには、内緒ですよ？」

トイレの個室に入ったのどかは、胸を押さえてバクバクとなる鼓動を抑えようとした。燃えた本を投げ捨てたアルビレオの顔…一瞬だが、恐ろしい表情をしていたのだ。怖い。あの優しそうな顔の向こうには、何が隠れているんだろう…。そこまで考えたのどかは、ある事に気づく。そうだ、自分にはアレがある。

「ア…アデアット！」

手元に光と共に一冊の本が現れる。指定した人の心を読むアーティファクト、「イドの絵日記」であった。アリアから乱用を避けるように言われていたが、今は使っていいような気がしたのだ。

「あ、アルビレオ・イマさんの心の中を覗かせて下さいー…」

そう言ってから、本を開ける。彼は一体何を考えているのだろう。何か良からぬ事を考えていたらどうしよう。そんな事を考えながら中を覗き込んだのどかは、その意外な光景に驚愕した。

「あれ、あれー…！？」

そこには、何も書かれていない真っ白なページが。

彼がアルビレオ・イマではないという事を表した白紙のページがあるだけだった。

第八十話　とらわれた者たち

薄暗いトイレの個室で、宮崎のどかは震えていた。アルビレオ・イマと名乗っていたあの男は何者なのだろう。ネギの父親の友人だったと聞いていたからなんとか信用していたのに、その本人ではないと「イドの絵日記」は示している。

「あうー…、どうしよう…」

もはや信用出来ないあの男から、二人を引き離さないと。そう思っていたのどかはこれからどうしたらいいか考える。二人ともあの男を信用しきっているし、最近のどかに対して少し冷たい所がある。素直に言う事を聞いてくれるかどうか分からない。

悩んだ末、とりあえず今日はこのまま魔法の修行を最後まで見届けて、寮に帰ってから説得しようという結論に達した。まずは、ここから無事に出る事が先決だ。そう思って個室のドアに手をかけると…

キィッ…

トイレの入り口の方から音が。

「……っ！？」

のどかの身体が固まる。足音が、違う！　あの二人の靴の音ではない！　背中に嫌な汗が流れる。まさか…

「大丈夫ですか、宮崎のどかさん」

「…っ！！」

アルビレオ・イマ。

いや、アルビレオ・イマを名乗る何者かの声だった。思わず息を飲むのどか。怖い。何故女子トイレに…

「帰りが遅かったので心配になったのですよ。体調がおかしいようなら薬を用意しますが」

「い…いえ、大丈夫、です…」

クスッと、ドアの向こうで笑う声が。

「やはり体調が優れないようですね。声が震えてます。ここを開けて下さい、宮崎のどかさん」

トントン、とドアを叩く。

もう、のどかは足をガクガクと震わせるしかできなかった。怖い。自分はどうなってしまうんだろう…。

（助けて…助けて、ネギせんせー！）

のどかは胸にイドの絵日記を抱きしめながら、ここには居ないネギに助けを求めた。

その頃。ネギは絶好調に盛り上がっている歓迎会の中で、のどかの助けを求める声を聞いた。アーティファクトを通じて送られた念を、仮契約主であるネギが受け取ったのだ。

（のどかさん!?　どうしたんですか、のどかさん!）

慌てて聞き返すが、のどかは平常心を保てていないのか念話がつながらない。どうしようと焦った時、すぐそばにいた明日菜が声をかけた。

「ネギ、どうしたの怖い顔して?」

「あ、明日菜さん!　実は…」

ネギは小声で明日菜に今起きた事を伝える。念話でのどかの助けを求める声を聞いたが、繋がりが途切れてしまったという事を。明日菜はすぐに緊急事態である事を察知した。

「強制的に呼び出して!」

「で、でもここで呼び出したら皆に…」

魔法バレしてしまう。ここにはかなりの人数がいるので、ごまかしようが無いのでは、と思ったのだ。それを聞いた明日菜は、すぐさま皆に声をかけた。

「みんな、これからネギが芸をするわよ!」

「あ、明日菜さん!?」

一体何を言い出すのか。明日菜は皆の注目を集めると、超包子の店から雨天用のビニールシートを一枚借りて来た。それを広げて円筒状に丸めると、ネギにウインクした。

「ネギのイリュージョンよ！　今から、この中からある人物が現れます！」

皆の顔が輝き出す。なるほど、これなら呼び出してもおかしいとは思われない。

ネギは、ありったけの念を込めてカードを発動させる。

「のどかさん、宮崎のどかさん！　僕の呼び出しに答えて下さい！」

カードが光を放つ。皆が「おおぉっ！」と声をあげる中、ネギはのどかを強制召喚する魔法を唱えた。そして…

シュワアァァァァン…

光が、シートの中で収束してゆく。明日菜はシートの中を確認してから、それを皆の前でバサッと開いてみせた。

そこには、身体を硬直させ、目蓋をぎゅっと閉じた宮崎のどかが。

「「「おおぉっ！」」」

皆が歓声をあげる。何もない所からいきなり現れたのどかを見て、

驚きの声をあげていた。そして、当ののどかは。

「えっ？　あれ、ここはー…？」

まったく理解していなかった。ただ、当たりをキョロキョロと見渡し。ネギの姿を見つけて、気が抜けたのかその場にへたり込んだ。

図書館島のアルビレオは、もぬけの空となったトイレの個室を見て苛立ちの声をあげた。怒りに震わせた拳を、ドアに叩きつける。粉々に粉砕されたドアの欠片を蹴り飛ばすと、トイレを後にした。

「まあ、いい。新しいコマは出来た」

そう言って、また修行を行っていたフロアに戻る。そこには、意識を失い横になっている綾瀬夕映と早乙女ハルナの姿があった。

アルビレオはまずハルナを抱きかかえると、何時もはお茶を飲む時に使っている少し大きめのテーブルの上に、その身体を横たえる。次に何も書かれていない本を開くと、右手に万年筆を持った。そして…

開いた左手を、ハルナの身体に這わせる。感触を楽しむかのように暫く身体の上を泳ぐと、ある場所でその手を止めた。

「君は、ここが良いようですね」

そう言ってニヤリと笑う。指先に力を入れると、左手はズブズブとハルナの下腹部へと沈んで行った。意識を失っているハルナは、全くの無抵抗だ。ただ、感触は伝わっているのか苦悶の表情を浮かべていた。

「ふふふ、すぐ終わりますよ。じきに楽になります」

左手を妖しく蠢かせる。血は一滴も出ていなかった。アルビレオはその左手をハルナの身体の中で動かしながら、魔法を唱えていた。左手から流れ込んで来るのは、ハルナのパーソナル情報。単純な身体の情報から、今まで送ってきた人生、今抱いている気持ちまで全て。それを、右手の万年筆で白紙のページに書き込んで行く。みるみるうちにハルナの情報で埋め尽くされてゆく本。そして、充分に情報を書き写すとアルビレオは左手をハルナから抜き取った。

「中々面白い人生でしたよ。素質も充分。良いコマになってくれそうだ」

満足そうに言うと、アルビレオは呪文を唱えた。ハルナは空中に浮くと、どこからともなく現れた棺桶に入れられる。そして、アルビレオが乱暴に腕を振るうとその棺桶は湖の底へと落ちて行った。

ザッパーン、と大きな水しぶきをあげるのを確認した後。アルビレオは次に、横たわる綾瀬の方へと歩いて行った。

「逃さないですよ、宮崎のどか。知られたからには、必ず捕まえてみせます」

ニヤリと笑いながら、アルビレオはつぶやくのだった。

【石田留美】

高畑モドキは簡単に始末出来ました。本来ならもっと苦戦する所だったのでしょうけど、しずな先生のアーティファクトのおかげで楽勝でした。恐ろしいアイテムですよ、本当に。恍惚の表情で分解されてゆくオッサンはホラー以外の何物でもありません。

今回戦ってハッキリした事。それは敵が神族の加護を受けており、能力だけでなく魔法も封じる事が出来ないという事。そして、マスターの事をある程度知っている介入者であるという事です。であるなら、やはり神族と組んでいるというのは間違い無く、マスターが神族の気配を感じた事がある事からも、問題の神族もこの麻帆良に居ると考えた方が無難でしょう。まったく、今まで良く隠れてこれたものですよ。

高畑モドキを始末した後。私はしずな先生にホテルに帰るように促しました。さっきの今でまた襲われる事は無いでしょうけど、私も仕事に戻らなければいけません。もしこれ以上何かあったら助けられないかもしれませんから。それに、フェイトさんももうホテル

に戻っている頃。彼女の世話をしていて欲しい、と伝えた所、しずな先生は大人しく引き下がってくれました。

「そうですね。私には戦う力は無いですから。足手まといにならないように、今日はもう帰ります」

…少し、意地悪でしたでしょうか。暗い顔をしているしずな先生を見ると、何だか私の方が悪いような気がしてきます。仕方ありませんね、ここは敵に塩を送るとしますか。

「しずな先生。あなたには、簡単に傷ついてはいけない理由があります。だから、早くホテルに戻ってもらわなければならないのです」

「え…？　理由？」

「はい。現在、あなたの中にマスターの霊気を感じます。場所からして、恐らく妊娠しているんでしょうね。だから、なるべく危険な目にあって欲しくは無いのです」

そう言うと、案の定しずな先生の顔が輝き出します。ああそうですか幸せですか良かったですね。しずな先生は嬉しそうにお腹を撫でながら、軽い足取りで帰って行きました。

一人、道の真ん中で、私は空を見上げます。もうすっかり日も落ちて、夜空には大きな三日月が浮かんでいました。

「…しょせん、私は娘だから」

マスターの子供なんて、作れない。まず、恋愛の対象として見てもらえない。マスターは私をただの娘として見ているし、それ以外

の見方をしようだなんて思わないでしょう。分かってはいましたが、やはり悲しいですね。

…何を考えてるんだか。

馬鹿らしい。こんな気持ちは、必要ないでしょう。今は敵を如何にして仕留めるかだけを考えなければ。私は気を取り直して、超包子へと戻る事にしました。

【石田留美視点終了】

ネギの歓迎会は、7時を過ぎたあたりでお開きとなった。これ以上遅くなっては門限に響く。騒ぎ足りない人たちもいたが、仕方なく寮へと帰っていった。

今、ここに居るのは明日菜を始めとした魔法関係者の生徒のみ。ネギは辺りを確認してから、のどかから事情を聞いた。

「…それじゃあ、綾瀬さんと早乙女さんはアルビレオさんに?」

「はいー…。私、怖くて何も出来なくて…」

涙を滲ませるのどか。見捨てて逃げてしまった、と自己嫌悪していた。

「本屋ちゃんは悪くないわよ。悪いのはそのアルビレオって人でしょ」

「そうですわ。今考えるべき事は、綾瀬さん達を救い出す事です」

明日菜とあやかの言葉に、周囲の人間も頷く。のどかは寧ろ良くやった方だろう。ネギに連絡を取り、逃げる事に成功した。そしてこうして敵の情報を掴んで来たのだ。

「でも、アルビレオ・イマという人は英雄なのでござろう？　一体何故、英雄ともあろう人がそんな事をするでござるか？」

長瀬が、疑問を口にする。それには、のどかが代わりに答えた。

「あの人は、アルビレオさんじゃないみたいですー…。私のアーティファクトで、それは確認出来ました…」

アルビレオ・イマではない。

では、誰だと言うのか。

頭がこんがらがって来た頃、皆に声をかけて来る者がいた。

「宮崎のどか君。それは確かかね？」

それは、芦優太郎。先ほどまで飲んでいたのだが、一緒に飲んでいた新田先生を魔法で眠らせてから此方に来たのだった。

「私もあの男の事は警戒していた。良かったら、彼を偽物だと判断した理由を聞かせてもらえないかな」

のどかは迷う。芦が魔法関係者というのはネギやアリアに聞いて

知っているが、このアーティファクトの事を教えていいものだろうか、と。それだけこのアーティファクトは危険だし、無闇やたらに口外するものではないとアリアから言われていたのだ。

「えっとー…」

困惑しながらネギを見る。ネギは、にっこり笑って言った。

「芦先生なら大丈夫ですよ。僕やお姉ちゃんは、いつも助けてもらってるから」

「そうね。私も、大丈夫だと思う。そこらの魔法先生より信用出来ると思うわ」

明日菜も同意した。この間のジョギングで話した時から、芦の事は信頼出来ると思っていたのだ。

二人に言われて、のどかも決心した。

「私のアーティファクトは、名前を言うとその人の心を読む事が出来るんです…。あの人の名前を呼んで、文字が浮かんでこなかったのでー…」

「なるほど。それなら信憑性があるな」

なんとも危険はアイテムだ、と思う。しかし、これで確証を得た。奴は敵だ。

「ありがとう、宮崎君。この件は学園長に報告しておこう。その時は、一緒に来てもらえるだろうか。そのアーティファクトがあれば、あの老人も信用するだろうからな」

あの人物が英雄でないという証拠さえあれば、学園長も対処せざるを得ないだろう。加えて今回生徒に被害者が出ているのだ。

「芦先生、そんな悠長な事をしていたら綾瀬さん達が危険ではありませんか!?　今すぐにでも助けに行かないと…」

聞いていたあやかが、少し怒りながら言った。今こうしてる間にも、綾瀬達が酷い目にあっているとしたら。そう思うといてもたってもいられなかった。

「落ち着きたまえ。私の知り合いも最近さらわれたが、無事に救出する事が出来た。敵は捕まえた人間を殺すような事はしないようだ」

「ほ、本当ですの？」

「ああ。だから、先ずは学園長に報告をして皆で連携をとってから助けに行こう。ネギ先生、こういう時こそ冷静に、確実に救出出来る手を考えてから行動するんだ」

「はい。麻帆良の皆で協力しあって包囲網を作れば、相手を逃がす事は無いと思います。あやかさん、大丈夫ですよ。必ず助け出してみせますから」

ネギが言うと、あやかも素直に引き下がった。ショタ補正ではなく、今のネギの言葉には子供とは思えない説得力があったのだ。

それを聞きながら芦もネギの言葉に頷いていたが、同時に気がかりな言葉が一つ。しずな先生がコピーから聞いた、「時期が来たら用済み」という言葉。おそらくその時期とは麻帆良祭だろう。

タイムリミットは麻帆良祭終了までか。

芦は図書館島の方を睨みつけながら、そうつぶやいた。

第八十一話　アリアの帰郷

麻帆良女子寮の一室、神楽坂明日菜と近衛木乃香の部屋に、ネギ・スプリングフィールドがやってくる。これは元々の世界と同じではあるが、明日菜も木乃香もこの世界では大分変わっている為、ネギに対する態度も大分違っていた。

「とりあえず今日は疲れたでしょ。布団は二段ベッドの上を使って」

「はい、ありがとうございます。…でも、それだと上を使ってる人は？」

「私だけど。別に一緒でもいいでしょ？」

その言葉を聞いてネギは慌てた。いくらなんでも、教師としてそれはマズい。そんな風に明日菜に告げると、明日菜はジトッとした目を向ける。

「今更でしょ。散々お互い恥ずかしい所見てきたじゃない。第一アンタ子供なんだから年上の言う事ききなさいよ」

「あうぅ…」

明日菜に言われて、顔を赤くして縮こまるネギ。そんなネギに木乃香は笑って言葉をかけた。

「ええんよネギ君、遠慮せんと。明日菜も気に入らん子と一緒に寝ようなんて思わんし、本音は一緒に寝たいんかもしらんえ」

「ちょ、木乃香何言ってんの！」

慌てる明日菜に、笑う木乃香。その軽いやりとりに、ネギは何だか心が軽くなったような気がした。

「分かりました。明日菜さん、木乃香さん。今日からしばらく宜しくお願いします。あと明日菜さん、一緒に寝てくれてありがとうございます」

「ぅ…あうぅ…」

今度は明日菜が赤くなる番だった。

その頃、桜咲刹那と龍宮真名の部屋には宮崎のどかがやって来ていた。手にした大きなバッグには着替えや勉強道具が詰まっている。

「話は聞いたよ。大変な事になってるみたいじゃないか」

龍宮がベッドの上で銃の手入れをしながら言った。物騒だ。

「期限は本物の綾瀬夕映、早乙女ハルナの救出までですね。私達は夜間警備の仕事をしている関係で二人揃って部屋に居る事がありません。今日は私が出る番ですから、私のベッドを使って下さい」

「は、はい、ありがとうですー…」

刹那にしても武器として使う小刀の手入れをしながら説明してい

る。まるで軍隊か何かの兵舎のようだ。のどかは怯えていた。

　のどかは綾瀬夕映と部屋を共にしている。綾瀬と早乙女が捕らえられた今、自分の部屋で一人で居るのは危険だという事で、刹那の薦めもあって二人の部屋に移る事にしたのだった。ここなら、戦闘に秀でた二人に守ってもらえる。

「しかし…ネギ先生と一緒の部屋にして貰った方が良かったでしょうか。あなたとネギ先生はお付き合いしてると聞きました」

「え…それは、あのー…」

　顔を真っ赤にして口ごもる。本音を言えば一緒がいいに決まっているが、それだと歯止めがかからなくなるかもしれない。奥手なようで何気にそっち方面の欲求は強かったりするのだ。

　そんなのどかを見ながら、龍宮は笑った。

「刹那の本音はね、君がネギ先生の所に行って、代わりに木乃香に此方の部屋に来て欲しいだけなんだよ。もっとも、明日菜だけでは君とネギを守れないから頭では納得しているんだろうが」

「ま、真名！　私はそんな事…」

　そうだった、この人は根っからの同性愛者だった！　でもって、真性のマゾヒスト…。のどかは龍宮と言い合う刹那を見ながら、ちょっとだけ身の危険を感じてしまった。まぁ、木乃香以外にそんな気起こさない…という事でもなかったか。エヴァンジェリンとの『話し合い』を盗み見たのどかは、この部屋に来た事を少し後悔していた。

さて二人がそんな新しい環境での生活をスタートさせていた頃、超鈴音は葉加瀬と茶々丸、エヴァンジェリンと共に麻帆良の工学研究所にいた。茶々丸に調べさせたデータの解析や、監視カメラ等から得られた情報を見ながら超は頭を悩ませていた。

「うーん、やっぱりおかしいネ。麻帆良の魔力の流れが外部からの影響を受けテ、不自然になっているヨ」

「これはゲートか何かですか？　以前、芦先生に見せてもらった異空間を繋げる道という物によく似ていますけど…」

モニターに映し出された麻帆良の地図。魔力濃度やその移り変わりを表した映像を見ると、所々に魔力が吸い込まれて行くような穴が現れている。それはまるで虫食い穴のようだった。以前茶々丸を魔科学で改造した際、芦が異空間から色々なパーツを取り出したが、その際繋げたゲートに非常に似ている。

「ゲート…か。そんな芸当を出来る奴などこちらの世界には居ないぞ。まさか魔法世界から繋いでいるのか？」

エヴァンジェリンが複雑な顔をする。山下との一件で、麻帆良が魔法世界の連中に目をつけられているのは知っていた。もしこの現象が魔法世界から引き起こされたとしたら、連中を止めると言っていた山下は…。エヴァンジェリンは嫌な想像を振り払うように頭を

振る。

「明日から時間を見つけてその場所を一つ一つ回り、可能なら穴を塞ごう。ジジイにも知らせておかないとな…」

「うむ、それは助かるヨ。学園長への連絡は私が行ウ。葉加瀬、世界樹の魔力放出量の移り変わりハ？」

「はい、グラフを出します」

そう言って画面を切り替えると、今度は折れ線グラフが。右の方へ緩やかにのぼり坂を描いていた。

「このグラフを見る限りでは、世界樹発光はよほどの事が無い限り文化祭最終日にピークを迎えますね」

「全ては世界樹発光に合わせて動いてる、カ…」

研究室の椅子に座ったまま、超は難しい顔をして思案に暮れる。前の世界ではこんな事は全く無かった。麻帆良の地下に気を留めた事もなかった。このイレギュラーはこの世界だけの現象なのだろうか。魔法世界からの干渉…相手の正体すらつかみきれていない。

とにかく今は目の前の事に対処していくしかないか…。超はモニターに映るグラフやゲートらしき穴を見ながら心の中でつぶやく。偽物の出現や地下の存在、色んな事を一度に解決する事など出来ないのだ。

さて、その頃日本を立ったアリアはというと、飛行機での長旅を終えロンドンのヒースロー空港へつき、そこから電車を乗り継いで現在は大型バスに乗ってウェールズへ向かっていた。時差の関係で此方は穏やかな昼下がり。バスも比較的空いてる時間帯で、アリアは空いてる席を二つ利用して荷物を開けていた。大きなバッグの中には日本から持って帰って来たお土産が沢山。その一つ一つをチェックしながら、アリアはネカネ達の喜ぶ顔を想像する。

「ふっふっふ、ちゃんとスタンお爺さんたちへのお土産も買ったし、石化解除に日本のお土産、今日は村が歓喜に包まれるに違いないわ」

そう言いながら、お土産の置物や小物を手に微笑む。これはネカネさんの分、アーニャはまだ修行だから居ないんだっけ？　まぁいいわ、お母さんの方に渡しておけば……そんな風にバスの中でくつろいでいると、バスは国境にかかる橋を越えてウェールズ南部のカーディフへと入っていた。見慣れた、緑がどこまでも続く景色が広がっている。アリアはそんな景色を見ながら複雑な顔をした。

「日本とウェールズ、どちらが故郷なのかしらね。なんだか、変な気持ちだわ。まぁ私の本当の故郷はどちらでもないんだけど…」

転生する前は…もう殆ど思い出せなくなってるけど、確か実家は静岡だった。あれ、でも私ってコピーだったっけ？　そこまで考えてアリアは頭を振った。やめよう。私はこの世界で生きていくと決めたのだから、故郷はウェールズなんだ。窓の外に広がる景色を見ながら、アリアはそうつぶやいた。

バスは終点のカーディフの街に入ると、大きなバスターミナルで乗客を降ろす。アリアはバスターミナルを出ると、次に予約を入れていたタクシーに乗りこんだ。魔法関係者の利用する特別なタクシーであり、このタクシーを使って魔法使いの住むコミュニティーへと向かうのだ。魔法使いのコミュニティーは特定の乗り物しか出入りを許可していないので、こうした手間が必要だった。

タクシーの中、白髪の初老の運転手がアリアに声をかける。

「お嬢ちゃん、メルディナの学生さんかい？」

「ええ、よく分かりましたね」

「ははは、その年頃で随分しっかりしてるからねぇ。魔法学校の試験で社会に触れたんだろう、と思ったんだよ。私の曾孫も修行から帰ってきて、随分大人びたもんさ」

「へえ…。そっか、修行終えて帰って来たら絶対タクシー使うし、卒業生なんて見慣れてますよね」

「種明かしすれば、どんな客かは前もって会社から知らされるからね。アリアちゃん、だろう？　村までの道はちゃんと知ってるから、安心して乗っていていいよ」

「なーんだ、お爺さんズルい！　本当に見極めたのかと思ったじゃない！」

アリアが頬を膨らませてそう言うと、お爺さんは「はっはっは」と笑う。何とものんびりした調子で、ああ帰ってきたんだなとアリアは思った。

そんな、長閑な一時。

つかの間の休息も、長くは続かなかった。

小一時間ほど走って、鬱蒼とした森の細道を抜けると、そこには懐かしい故郷が現れる。広い牧草地の真ん中にある小さな家々…しかし、その村を見た二人はあまりの光景に驚愕する。

「なっ、なんだこれは！」

「村が…っ！？」

まるで六年前の悪夢を再現するかのように、村が真っ赤な炎に包まれていたのだ。

「お爺さん、降ろして！　私、行くわ！」

「お、お嬢ちゃん無茶だ！」

しかしアリアは強引にドアを開けると車の外に飛び出した。持っていた文珠に『飛』と入れて、猛スピードで炎に包まれた村へと飛んで行った。

村は六年前の襲撃以降、周辺の町や村の援助によって復興をとげていた。破壊された家々も元通りに立て直し、焼き払われた草木も蘇った。後は村人たちの石化を解除出来ればまた明るい村に戻る事が出来る…そう思っていた矢先の出来事だった。

村にまた悪魔がやってきた。

その数およそ数百。六年前ほどではないが、それでも小さな村を襲うにしては数が多すぎた。村で戦える魔法使いは三十人にも満たない。これでは勝ち目など無かった。

何故、今になって悪魔が。

混乱しながらも、村人たちは懸命に防護結界を張る。とにかく村人を集めて結界を張って防御に撤しよう、そう考えて村の一カ所に集まっていた。しかし相手は悪魔である。そんな村人をあざ笑うかのように、悪魔たちは村を外側から焼き始めた。

燃えて行く村。逃げる事も出来ずに、村人たちは必死に立て直した建物が崩れ去って行くのを眺めていた。絶望、とはこの事を言うのだろう。泣き崩れる人々。そんな中、結界を張り続ける一人の女性が声をあげる。

「諦めないで！　きっと、きっと助けはくるから！」

必死にそう声をかけるのはネカネだった。村を守る為に必死になって覚えた結界魔法を展開しながら、ネカネは神に祈った。あの六年前のように…村を救ってくれる存在が現れるのを、強く願った。

そして、その願いに呼応するかのように、空が真っ白な光に包まれた。

「闇を掻き消す浄化の炎、夜を切り裂く光の裁き、我が手に宿りて敵を凪払え……

『白き爆炎』！！」

グオォォォォォォッ！

真っ白な、聖なる炎が空を埋め尽くした。空を飛んで高みの見物をしていた悪魔たちは、その殆どが炎に呑まれ爆発して行く。

ドカアァァァンッ！

ズガアァァァンッ！

ボガアァァァンッ！

「これは…」

呆気にとられて空を眺めるネカネたち。空を飛ぶ小さな影を見て、思わず声をあげた。

「アリア！？」

「ほにゃあぁぁぁぁっ！」

空には、アリア。

緑色の光を放つビームサーベルを手に、残った悪魔の大軍に向かって一直線に突っ込んで行った。

第八十二話　空を切り裂く

空を飛ぶ小さな魔法使いは、巨大な悪魔たちを次々とその光る剣で切り裂いて行く。恐るべきスピードと有り得ない軌道を描くその動きは悪魔よりも悪魔じみていた。

ドガアアアアアンッ！

また一つ、空を爆炎で彩る。

しかしその魔法使いの表情は、圧倒的な強さとは裏腹に焦りの色を帯びていた。

（多い、多すぎる！　なんでこんなに強い悪魔がたくさんいるのよ！）

現在、アリアはエヴァンジェリンからの魔力供給が殆ど無い状態にある。よって木々からマナを吸い上げてエネルギーに変える必要があるのだが、その植物たちも悪魔に焼き払われてしまった。空を飛び回りながら文珠で消火したものの、もはや村は焼け野原。これではマナを得る事が出来ない。

アリアは、本来なら石化解除に必要な魔力タンクとして持っていた文珠を、戦う魔力を得る為に消費せざるを得なかった。麻帆良にいる間に作った文珠は5つ。さすがにウェールズまで来ると芦優太郎の加護も薄れる為、新しい文珠を作る事は出来ない。

（今ある文珠で……何とか全滅させないと！）

それは、実はかなり無理のある戦いだった。元々接近戦を苦手とするアリア。よって飛翔と動作模倣、ビームサーベルに3つの文珠を使用して初めてまともに戦えるようになる。魔法を使って戦うにも、アリアは攻撃魔法をあまり覚えていない。元々転生したのはネギのサポートをしたいだけ、自分で戦うなんて考えてもいなかった。だから、中級以上の悪魔に効果のある魔法は先ほどの『白き爆炎』くらいのもの。無詠唱出来ないので、奇襲で使うのが精々だった。

そして何より、経験不足。

アリアはネギ達の修行に付き合ってはいたものの、それはあくまで回復役やサポート役としてだ。肉弾戦の修行などしていなかった。アリアは今更ながらに、その事を後悔していた。

（でも……私が頑張らないと！　村の皆を救う為に頑張って来たんだから……！）

巨大な悪魔たちの攻撃をかわし、また一体ビームサーベルで切り裂いた。爆風に煽られるアリア。小さい身体が、吹き飛ばされる。そんなアリアに、襲いかかる悪魔たち。

バキィッ！

「あぐっ…！」

とうとう悪魔の攻撃がヒットして、アリアは地上へと落下して行く。くるくると錐揉み回転をしながら、真っ直ぐ村へと落ちて行った。

「アリアァーーーーッ！」

空を見上げて叫ぶネカネ。その声に反応したのか、意識を失いかけていたアリアは目を見開く。

『飛』

文珠に今一度力を込める。アリアは地表に激突する寸前に浮力を取り戻して、また空へと舞い上がって行った。

「ああ、アリア……」

へたり込むネカネ。そんなネカネの後方で、村人たちは騒ぎ出す。

「あれが、あのアリア？」

「問題児だらけのスプリングフィールド兄弟の……？」

「何故戻ってきた？」

そして、そんな疑問は最悪な方向へと変質して行く。

「あいつが来たから、悪魔が襲って来たんじゃないのか」

「そうだ、災厄の王女の娘だからな！」

「悪魔の狙いは、あの小娘なんだ！」

「あいつを差し出せば、悪魔たちは帰ってくれるんじゃないか」

滅茶苦茶である。しかし、今の村人たちに冷静な判断は出来ない。

「待って下さい、アリアは私たちを守って……」

「やかましい、アイツが悪魔を呼んだんだ！　そうに決まってる！」

「災厄の王女の娘が災厄を連れて来たんだ！」

ヒステリックに喚き立てる村人たち。ネカネは絶望する。何故、こんな事に？　昨日までは皆穏やかでいい人たちだったのに……。ネカネは悲しい気持ちで空を見上げる。

アリア……。

涙が、ネカネの頬を伝った。

「いい加減に、しなさい、よぉっ！」

ドガァンッ！

ズガァンッ！

ゴバァンッ！

アリアは戦う。消えかかったビームサーベルを、襲ってきた悪魔

の口の中に放り込んだ。そして、その文字を『剣』から『爆』へと変える。

ズガアアアアアンッ！！

「くっ……！」

頭部を破壊された悪魔。爆発して、またもやアリアを吹き飛ばした。

「もう一つ！　『剣』！」

新たなビームサーベルを作り出した。そして、集団で襲いかかってきた悪魔たちに向かって叫ぶ。

「うにゃあぁぁぁぁぁっ！」

四方八方から群がる悪魔、アリアはその群れに瞬く間に飲み込まれる。しかし次の瞬間……

ザクザクザクザクザクザクザクッ！

ドガアアアアアンッ！！

動作模倣で山下の『超究武新羅斬』を模倣して放った。悪魔たちは一気に吹き飛ばされる。しかし……

「文珠、が……」

動作模倣に使っていた文珠が消失した。飛行に使っている文珠も、

そろそろ切れる。悪魔はあと約１００体、文珠のストックは、あと……一つ。

（スタンお爺さん、村の皆、ごめんなさい。石化の解除は、ちょっと厳しいわ。もう少し待っててね）

アリアは最後の文珠を取り出す。ハッキリ言って、勝つのは無理だろうと思っていた。けれど、逃げない。何とか一体でも多く倒して、村のみんなを逃がす時間を稼がないと。アリアは疲労で薄れ行く意識を必死に繋ぎ止め、悪魔たちを睨みつけた。

しかし悪魔たちもアリアがとうに限界を迎えている事に気づいていた。集団で一気に攻めれば簡単に倒せる。ならばあちらの方を攻めてこの娘を絶望させてやろう。悪魔たちは標的をアリアではなく村人に移した。

村人の中に、一人だけ結界の外にはじき出された女が見えた。まずはアレを食ってやろうか。悪魔たちは女目掛けて急降下してゆく。アリアはその光景を目にして、絶叫した。

「ネカネさぁーーーーーーんっ!!」

その時、空が震えた。

アリアの絶叫に呼応するかのように、得体の知れない力が一本の光の線となり空を走った。

それは、まるでモーゼが海を割ったように……空を真っ二つに切り裂く。

『……！？』

『……！……！？』

困惑して動きを止める悪魔たち。アリア、ネカネ、村人たちも空を見上げて呆然としていた。あまりにも非現実的、あまりにも神秘的。まるで天界の扉が開いて神が降臨したかのような光景が繰り広げられる。

その、空の切れ目。

巨大な霊波刀が空間をこじ開け、中から二つの人影が飛び出して来る。そして、先頭を行く男が叫び声を上げた。

「おねーさぁぁぁぁぁぁんっ！」

……は？

その場にいた全員が固まった。しかし男は周囲の反応などお構いなしに猛スピードで地上に降り立つと倒れているネカネに走り寄った。

「こんにちは僕横島！時空を超えて今逢いに来ました！とりあえず喫茶店にでも入ってお茶でも飲みながら今後の人生設計でも語り合いましょうこんにちは！」

「え…？　あの、え…？」

「若い僕らには立ち止まってる時間なんて無いんです！　さあ僕と一緒に大人の階段…
バキィッ！　はぶっ！？」

「ヨ・コ・シ・マ～～！」
男の瞬間移動に追いついた女が頭を殴りつけた。ドクドクと流れ出す血。ネカネは呆然とする。

「こっちの世界じゃリッパーって言ってたじゃない！　私というものがありながら、ありながらー！」

「ま、まて、話せば、話せばぶっ！？」

ガス、ガス、と足蹴にする女。辺りには血だまり。これは酷い。

あまりの急展開についていけないのはネカネだけではない。悪魔

たちも同様だった。とりあえず女に近づいて肩を叩く。

チョンチョン。

「うるさいわねっ！？」

ドガアアアアアアンッ！

霊波砲が放たれる。悪魔は一瞬で吹っ飛んだ。

「……って、あら？」

そこで、やっと女も周囲の状況に気づく。空を覆う悪魔たち、焼け野原となった村。倒れていた女性……。

「ヨコシマ、大変。ここ戦場よ」

「…は？」

むんず、と女は男の襟首を掴む。そして、何を思ったのか空を舞う悪魔たちの群れに向かって男を放り投げた。

「的、お願ーーい！」

「ま・た・かーーーーっ！？」

ひゅーーーん、と飛んで行く男。悪魔たちの群れの真ん中へと入った瞬間、女はそこに向かって巨大な霊波砲を放つ。

ドオォォォォンッ！

それはまるで、かつてアリアが再現し損ねた波動砲。異様に凝縮された霊気の塊である。その霊圧はおよそ５００００マイト、並の悪魔なら直撃を受けた瞬間塵一つ残らない。

真っ直ぐに霊波砲が突き進む、その先。男は手にした二つの双文珠に文字を入れる。それはもう阿吽の呼吸だった。

『拡散』『追尾』

そして、空が光に包まれる。霊波砲は文珠によって拡散ホーミングレーザーに変わり、唖然とする悪魔たちに襲いかかる。悪魔たちはなすすべも無く……

ズガアァァァァァンッ！

一瞬で消し飛んだ。

【アリア・スプリングフィールド】

もう、唖然として言葉が出ません。

あれだけ沢山いた悪魔が、一瞬で消滅。圧倒的にもほどがあるでしょ。それも、男の人と女の人どちらがやったのかは分かりませんが、私や地上にいた人たち全員に防護結界を張りながらの攻撃。強いにもほどがあります。

あの人たちも、転生者なんでしょうか。だってアレ、チラッと見えたけど文珠でしょ。芦先生からもらったのかしら。にしては私のと色も模様も違ったし……。

そこまで考えていたら、急に思い出しました。女の人は知りませんが、あの男の人。バンダナ巻いて、女の子に飛びかかって、血だらけでも死なない人……小学生の頃、弟が集めてた漫画で見た事あります！　確か、横島って言ってたような……

あれ、つまりあの人は漫画のキャラクターですか？　でもこれってネギまよね。転生者が外見だけ真似したのかしら。でも転生者って皆美形を選ぶわよね。……うーん、分からない。けど、助けてくれたのは確かだし感謝しないといけません。私は悪魔たちを消し飛ばして地上に降り立った横島さんの後を追いました。

村に降り立って、ネカネさんの所へ向かいます。横島さんと女の人は、既にネカネさんの所。ああ、はやく駆けつけてお礼を言わないと。そう思って走っていたんですが……

変な視線を感じました。

それは、沢山。

村の中央で固まっている、村のみんなの視線でした。

…何故？

何故、そんな目で私を見るの？

パキッ！

何かが、私の頭に当たりました。

「出ていけ！」

え……？

「この疫病神が！」

ガスッ！

痛い…。これは、石？

なんで……。

「もう災厄を連れて来るな！」

パキッ！

ああ……そういう事ですか。

ははは、そっか、私のせいだと思ったんだ。そっか、そっか……

ヒュン、ヒュン、と石が飛んで来ます。私にはそれを避ける気す

ら起きませんでした。だって、だって、こんなのって無い……。なんの為に、私は……

その時、一際大きな石が私目掛けて飛んで来ました。

（もういいや、なんでも…）

頭が砕けるのをただ黙って待ちます。けれど、その石が私の所に届く事はありませんでした。

ガシッ！

「女の子にひでー事するよな」

それは、とても大きな手。

飛んで来た石を受け止めたのは、とても逞しくて大きな横島さんの手でした。

第八十三話　横島の歩み

リッパー、横島忠夫。

彼がこの『ネギま』の世界にやって来た理由は、神界から請け負った仕事の依頼だけでは無かった。彼が現在身を寄せている空中要塞コスモプロセッサーの主である、アシュタロス……芦優太郎がいつまで経っても帰って来ない為、ルシオラと共に連れ戻しに来たのだった。その為には現在起きているトラブルを解決しなければならない。まず横島たちは「どうせ神族なら好き勝手暴れ回ってるだろう」と、今でも情勢が不安定で荒っぽい魔法世界へと向かった。

結論から言うと、神族は見つけられなかった。というよりも余りに情報が無さ過ぎた為に、まずこの世界で情報収集をする事にしたのだ。その時に会ったのがボブカット・レイ。孤児院経営の傍ら、当時はハンター兼情報屋として活動していた。

孤児院を活動拠点として、横島とルシオラはこの世界の歴史を学び、様々な仕事を請け負った。そんな生活の中で得られた神族らしき存在の情報は、既に終わった大戦の中で英雄ナギ・スプリングフィールドに倒されたという『ライフメイカー』だった。

馬鹿げた力を持つ者の多いこの魔法世界の中でも、あまりにも特異な能力を持つ存在。恐らくはこれが問題となっている神族だろうと当たりをつけた。そして、倒されたと言われていながらこの世界からアシュタロスが帰って来ない以上、未だにどこかに存在しているのだろうと確信していた。　横島たちはライフメイカーを追って情報収集を続けた。そうした活動の中で、大戦の結末を知るある人物と、横島たちは接触する事が出来た。それは大戦の英雄の一人とされ、記録上は死んだとされていた男だった。

酒場で会った男はくわえていたランバージャックを灰皿で揉み消してから「ジャック」と名乗る。それを受けて横島は「リッパー」と名乗った。横島がリッパーと名乗るようになったキッカケである。

男は、ウイスキーの入ったグラスを傾けながら言った。

「世界樹、だな」

カラン、と氷が音を立てた。

「世界樹？」

「ああ。そこにあるのに見えない樹。風をまとい、幻の向こうに存在すると言われる樹だ。ライフメイカーはその世界樹に封印されている。ユグドラシル、と言えば年寄りの中じゃ知ってるヤツもいるかもな」

そう言って男は目を伏せた。氷が溶けて形を変える様を、少し赤くなった眼差しで見つめていた。そしてしばらく黙り込んでから、もう話は終わりだとばかりに席を立つ。横島たちに背を向けたまま、去り際にこんな言葉を残して。

「俺と同じ名前で、腕に継ぎ目のある馬鹿野郎がいる。ライフメイカーの影を追うなら、いつか会うだろう。そいつなら、お前らの力になってくれるかもな」

「……あなたは？」

ルシオラが問いかける。

男は帽子を深く被りながら、苦笑いを浮かべた。そして何も言わずに手を軽く上げて、酒場を出て行くのだった。

男の予言は、その後現実のものとなった。とある仕事で出会ったジャック・ラカンという男こそ、あの男の言っていたもう一人のジャックだった。横島たちから男の話を聞いたラカンは、耳を押さえたくなるくらいの大きな声で馬鹿笑いをする。

「ハハハハハハ、生きてやがったか、アイツ！　いや、実際死んだ所は確認したから彷徨ってるだけか？　まぁいい、なんにせよ居るってんなら目出てえじゃねえか！」

そして、ユグドラシルの名を聞いて考え込む。しばらくウンウン唸ると、ラカンはキレた。

「場所は知らねえ！　俺がそんなもん覚えてるわけねえだろ！　けど確かお前らの雇い主が知ってるハズだぜ。レイちゃんが、な」

意外な名前が飛び出した。しかし、本人が言うには何百年と生きているらしい。ならば、知っている可能性はあるだろう。横島たちはその話を聞いた後、幾つかの仕事を済ませてからレイの元へと戻る。そこで聞いたのは、意外な程あっさりしたレイの肯定だった。

「ああ、知ってるよ。あそこでよくモンスター狩ってたから」

レイの話では、常に風が吹き荒れているユグドラシルの周囲には強力な翼竜が沢山現れるらしい。ハントに最適なんだ、とカラカラ笑うレイに、二人は脱力する。最初からレイに聞いていれば良かった、と。それから何度か調査を試みていたが、侵入する度に構造を変えたり場所そのものを変えるユグドラシルに戸惑っていた。

それでも……つい先日。ユグドラシル中心部へと二人は到達する。

そこにいたのは、英雄ナギの妻にして災厄の王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだった。

ユグドラシルに封じられたアリカ。横島はそこに封じられた理由など深く考えずにアリカを解放する。かつて氷漬けにされた仲間を蘇えらせたように、霊波刀をクリスタルに突き刺して、中にいたアリカを引きずり出した。そして目を覚ましたアリカは……

「この愚か者がぁぁぁぁっ！」

バチーーーンッ！

「何故だぁぁぁぁぁっ！？」

ビンタされた。

「何の為に妾がここに籠もってると思っておるのじゃ、余計な事をしてくれるでない！」

「す、すみましぇん……」

顔に真っ赤な手形を作り涙目の横島。そこにルシオラが額に青筋を立ててつかみかかる。

「偉そうに言ってくれるわね。こっちはライフメイカー探して必死なのに、あなたが余計な事してくれるから調査が滞っちゃってんのよ。これ以上邪魔するなら殺すわよ？」

「なっ……造物者を探す、じゃと！？　一体何を企んでおる！」

一触即発の雰囲気。そこに飛び込むのはやはり横島の仕事だ。素早く起き上がり、鼻面突き合わせて睨み合う二人の間に割り込んだ。

……おっぱいの間に。

「うわははは、つかの間のチチ祭りじゃーーーっ！」

「「真っ先に死ねーーーっ！」」

パキッ！

「おぱっ！？」

頭から血を噴き出してその場に倒れた。

横島のセクハラにより何故か気持ちの落ち着いたアリカとルシオラ。気を取り直してアリカの話を聞いた二人は、大戦の結末を知って唖然とした。

「その怪しげな異世界の神は逃げ出してしまった。ここに封じられた造物者は、操られて抜け殻となり、最後は発狂してしまった哀れな少女じゃ」

「そんな……逃げ出したなんて……」

情報は途切れた。ルシオラは落胆する。これで振り出しに戻った……と疲れた表情をして横島を見ると。何故か横島は生き生きとした表情をしていた。

「……ヨコシマ？」

「よっしゃ、これで大分真相に近づいた！　ルシオラ、これで芦優太郎の目的も分かったし調査も大詰めだな！」

は？

頭の中がハテナでいっぱいになる。何故これが進展している事になるのか。それにアシュ様の目的？

「要は、その女の子を救いたいんだろ。世界を救いたいだけならアイツの事だ、世界崩壊に関わりそうな転生者を皆殺しにすれば済むだろ。それをしないって事は、アイツなりに救いたいヤツがいるんだよ。俺は多分、そのライフメイカーって女の子だと思ってる。他にも、まともな転生者とかな」

「アシュ様……」

ルシオラはここにいない主を見直していた。自分の知ってるアシュタロスは、毎日遊んでるか空中要塞を留守にして旅行してるかのどちらかだ。意外とまともなんだ、と感心していた。

その時。二人の会話を聞いていたアリカが、不思議そうな顔をした。

「芦優太郎……そやつは麻帆良の教師じゃろう？　妾の夫となる男から何度か聞いておる」

「「はっ！？」」

固まる。どこにいるかと思えば……麻帆良？　それも教師？　ルシオラは何が何だか分からず混乱する。そしてそれ以上に横島も驚愕していた。

「人妻!?　こんなピチピチのねーちゃんが人妻!?　チクショー世の中間違ってるぅあああああ!」

「「やかましいっ!」」

ドカァッ!

「ぅう……癖になりそ、う…」　血飛沫が舞った。

「しかし、そやつなら従者を通して魔力供給を受けた事がある。やけに純度の高い魔力だったからよく覚えておるわ。少し探索してみるか?」

アリカはそう言って、自身を封印していたクリスタルのそばにある、巨大なモニターのような物に手をかざす。すると、そこに徐々に映像が現れた。しかしそこに映ったのは芦優太郎ではなく、全く同じ魔力を感じさせる一人の少女だった。

「ヨ、ヨコシマ、この娘!　アシュ様と同じ魔力……」

「うおおおおっ!　ムッチムチのねーちゃんがピンチに!?」

横島が見ていたのは、その画面の端に映るグラマラスな女性の姿。

またいきなり何を……ルシオラとアリカが怪訝な顔で横島を見た。

そして、唖然とする。

『空』『間』『転』『移』

「ま、まて、今ゲートを繋げる!」

「ヨコシマ落ち着いて!　無茶よ!」

「待ってて下さいバインバインのボインボイン！　今時空を越えて横島忠夫が異文化フィジカルコミュニケーションターーーイム！」

もうこうなったら止まらない。アリカの目の前で、有り得ない方法で二人はその場から転移して行った。

そして、横島たちは降り立つ。悪魔に焼き払われた、小さな村に。圧倒的な強さで悪魔たちをなぎはらい、倒れていた女性を助け……今、横島は一人の少女を庇って村人たちの前に立ちはだかった。

困惑する村人。その背を見上げた少女は声を震わせながら口を開く。

「横島…さん……？」

「ちょっと待ってろよ、今なんとかする」

そう言って横島はルシオラを呼んだ。ルシオラは、ああアレをするんだ、と何かを察して駆け寄ってくる。横島の傍まで来ると、その手を背中に添えた。途端に横島の身体の中の魔力が膨らみだす。

これは、かつて横島が命を落としかけた時の事。死の淵にあった

横島を、ルシオラはその魂を分け与える事で救った。その関係で、ルシオラが触れると横島の中の魔力が増幅されるようになっているのだ。

ルシオラによって強化された横島は、自身の霊気と魔力を収束させてテニスボールほどの球を作り出す。淡い紫色のその球に『復元』と入れると、眩い光とともにその力を解放した。

シュワァァァァッ……

周囲の景色が光とともに変化する。焼き払われた家々や木々、その一つ一つがまるで何事もなかったかのように復元されて行く。村人は信じられない、といったふうにその光景を唖然としながら眺めていた。そして……。

「じゃあ、行くか」

「えっ!?　ちょっと、ヨコシマ!?」

あっさりと、その場を去ると言う横島。アリアの手を引いて、村人に背を向ける。

「『復元』ってもさ、心まで直せるわけじゃないだろ。このまま居ても気まずいだけだし、少し時間を置かないとまともに話なんかならないさ」

そう、心はそう簡単には直せない。適度な距離をとって、互いに冷静になる時間というものが、こうしたトラブルには必要なのだ。

「じゃあ、一旦帰ろう。あっちのお姉さんにも芦優太郎との関係を聞かないといけないからな」

「……ヨコシマ？　アシュ様の魔力を発してたのはこの娘よ？」

「は……？」

固まった。

そして、泣き出した。

「ワイの……ワイの美人さんセンサーはおしまいや……女の事で間違えた事なんて無かったのに……」

もう放っておこう、とルシオラは軽く流して、横島の代わりにアリアの手を引く。そのまま、ネカネのもとへと歩いて行った。

その光景を、巨大なモニターで見ている者がいた。魔法世界のとある宮殿の一室。モニターを見上げるのはあの仮面の男デュナミスと、メガネを掛けた細面の青年だった。

「聞いていないぞ、村を襲撃するなんて。まさかこれを、大事の前の小事というんじゃないだろうな」

「……スプリングフィールドの名前を貶める事が出来て、そちらに

とっても溜飲が下がる思いではないのかな？　君は君で、ナギ・スプリングフィールドに恨みがあったと記憶しているが」

デュナミスの言葉に青年は黙り込む。確かに恨みは抱いた事がある。しかし今すべき事はこんな事ではないハズだ。

「世界の崩壊を止める為に、こんな茶番を見る事になるとは思わなかったよ。君には失望した。悪いがこれ以上の援助は期待しないでくれ」

そう言って踵を返してフロアを出ようとする青年。しかしその瞬間、青年の周囲に異変が起こる。

「「「「残念だよ、クルト・ゲーデル」」」」

「なっ……！？」

見ると、周りには黒い影が。白い仮面をつけた黒衣の男たちが青年を囲むように現れた。その姿は、どう見てもデュナミスにしか見えない。

「貴様、これは…！？」

「まさか今更協定を破棄しようとするとは思わなかったよ。やはり君にはクグツになって貰った方が良さそうだ」

デュナミスは仮面の向こうで笑う。本音を言えば、さっさと始末しようと思っていたのだ。計画は狂ったものの、幾らでも修正可能だ。デュナミスは片手を上げて、自分そっくりな姿をした者たちに号令を出す。

「殺れ」

「「「「ギャギャギャギャギャッ！」」」」

口にあたる部分が裂け、一斉に青年に襲いかかる。青年は腰の刀を抜いて迎撃しようとする。自分も英雄とされる近衛詠春の弟子、そう簡単にはやられない。得意技である『斬魔剣弐の太刀』を放とうとした、その時。

ガシャアアアアアンッ！

フロアの上方部にある大きなガラス窓を突き破って、一人の男が現れる。

「デュナミィィィスッ！」

それは狼に乗り、身の丈を遥かに越える巨大な剣を持った金色の剣士。

山下・K・ストライフであった。

第八十四話　悪魔の所業

山下・K・ストライフが魔法世界にやってきてから数日後。孤児院にこっそり舞い戻って来た山下は、お土産を待つ少女の寝室にぬいぐるみを置くと、黙ってそこから立ち去ろうとした。しかし当然ながら責任者であるボブカット・レイに見つかる事となる。不法侵入の罪で私刑、との判決が下り、山下はレイにタコ殴りにされた。

「今更どのツラ下げて戻って来やがった、テメーのせいでこっちは大変だったんだ！」

「ま、まて、戻って来たわけじゃねえ、いて、いてててて！」

半泣きだ。レイの打撃は実はかなり痛いのだ。

「戻って来ない、だと！？　……最後に言った事、気にしてるのか？　それなら……」

「いや、そうじゃねえ。これからデュナミスの野郎をぶっ飛ばしに行くからさ、先に土産を渡しに寄っただけだ」

そう言う山下の表情は、妙に大人びていて、どこか達観してるような気味悪さがあった。それを敏感に察したレイは、とりあえず殴った。

バキィッ！

「な、なんでだよ！？」

「良くない事、考えてるだろ。まるでこれから死にに行くみたいだ。そんなの絶対ゆるさねえからな」

今まで長い時を生きて来て、大戦の頃には散々見てきた表情だ。まさかこんな馬鹿がするとは、と驚いていたし、悲しかった。

「しかしな、相手が相手だけに……」

「だったら、味方を集めりゃいいだろ。ほら、行くぞ」

「あ？」

理解不能、という感じでポカンとする山下。レイは振り向いて、ニカッと笑った。

「闘技場だ。二人で参加者全員ぶちのめして家来にしてやろう」

滅茶苦茶だ。しかしこの滅茶苦茶さが、かつて山下が憧れた闘技場の英雄ボブカット・レイの姿だった。奴が帰って来た、と山下も震える。レイに応えるように、山下も笑った。

「おう、派手にぶちかましてやろうぜ！」

二人は交易都市グラニクスにある闘技場へと赴く。そして、タッ

グ戦で参加してほんの数十分で全ての試合を勝利で飾った。そしてこう叫ぶのだ。

「これからバトルロワイヤルを始める。どんな手を使っても構わない、最後に残ったやつにこの賞金を全部やろう」

その言葉に、会場にいた賞金稼ぎ達はエキサイトする。目の色を変えて襲いかかってくる数百の猛者を、二人は一人残らず叩きのめした。そしてそれは主催者であるジャック・ラカンも同様だ。山下もレイも、ラカンとは引き分けた事がある。今回はその二人がタッグを組んでいるのだ、勝てるわけがない。それも、まともに戦おうともしないのだ。

「俺がお前と戦ってる間、レイがこの闘技場を破壊する。長引けば長引くだけ、この闘技場が無くなっていくぜ？」

「テメエ、最初からまともに戦うつもりがねぇな！？」

当たり前なのだ。引き分けた事はあるが、正攻法で勝てる相手だとは思っていなかった。単純な力比べなら、完全に負けるだろう。どんな手を使っても勝つ。もし負けても手元の金が無くなるだけだ。痛くも痒くもない。

結果、二人は勝者となった。そして、倒した相手の中でまともに戦えそうな人間をピックアップして傭兵として雇う事にしたのだ。勿論、そこにはラカンも含む。

「お、俺もかよ！？」

「当たり前だろ、敗者。キリキリ働け」

レイに足蹴にされながらも、少し嬉しそうなラカン。思いっきりパンツが見えていたのだ。

レイと山下の率いる傭兵部隊はデュナミスの根城へとやって来る。無数の悪魔が出迎えたが、その殆どをラカンと傭兵たちが抑え込み、レイと山下は宮殿の中へと侵入して行った。

そして、そこで目にしたのは信じられない光景だった。

いたる所に安置された透明な棺桶。その一つ一つには、眠らされた人たちが入っている。遺体だと思わなかったのは、微かに息をしていたからだ。

「こんな部屋があったなんてな……前来た時は気づかなかった」

「ん？　知った顔だ。確か……フェイトの取り巻きの女の子じゃないか」

レイが見つけたのは、かつてフェイトと会った時に見かけた女の子の一人だった。肩まで伸びたウェービィヘアに大きなリボンが特徴的な、気弱そうな女の子。確か、栞と言ったハズだ。

「K、先に行ってくれ。俺はここの人間を元に戻してみる」

「……分かった。あんまり遅いと、デュナミスの野郎は俺一人で始末しちまうからな」

そう言って、山下はその場を後にする。難しい事は分からない、自分は馬鹿だから。とにかく今はデュナミスを潰す事が最優先なの

だ。

そして、とあるフロアにて。ついに山下はデュナミスの姿を見つける。まさに今、眼鏡の男を殺そうとしている瞬間だった。よくわからないが、攻撃をするなら今がチャンスとばかりに全身の闘気を爆発させる。

「デュナミィィィスッ！」

ガシャアァァァンッ！

フロア上部にあるガラス窓をぶち破って、山下は突入した。そして同時に巨大な剣を振りかぶり、ありったけの闘気をそこに乗せる。振り下ろした瞬間、その闘気は無数の隕石となってデュナミスとその分身に降り注いだ。

『メテオレイン！』

ドガァンッ！　ズガァンッ！　バコォンッ！

「なっ、何ぃ！？」

突然の乱入に戸惑うデュナミス。降り注ぐ隕石は分身たちを悉く押しつぶして行く。分身が黒い泥に変わるのを確認してから、山下はデュナミスとクルトの間に降り立った。

「久しぶりだなぁ、デュナミス。随分ふざけた仕事回してくれたじゃねえか、オマケに金もロクすっぽ払いやしねえ」

「き、貴様、裏切る気か！　金なら振り込みが少し遅れただけだろう！」

デュナミスにも、分かっている。ヘルマンが山下を仕留め損なった。つまり、こちらの企みはバレてしまっているのだ。もう味方にはならないだろう。

「死んでもらうぜ、デュナミス。お前らは前から気に食わなかった」

「クッ……調子に乗るなよ、転生者（よそもの）が！」

山下の大剣が風を切って唸る。デュナミスは紙一重でそれをかわすと、後方に跳躍した。そこに追撃しようとした時、山下は後方から何やら殺気を感じた。

「てめぇ、やんのか！？」

「避けなくていい！」

クルトが、刀を振るう。その太刀筋は紛れもなく神鳴流。奥義である、『斬魔剣弐の太刀』であった。

「はっ！？」

剣圧が、山下をすり抜ける。そしてそのままデュナミスに直撃した。

ズガアァァアンッ！
「ぐおあぁぁぁぁぁっ！」

左腕が千切れ飛ぶ。障害物をすり抜け、悪しき者にのみ斬撃を与える神鳴流奥義である。

「……すげぇな」

「君は好きに暴れて隙を作って下さい。私は後方から今の技を放ちます」

「了解、暴れるのなら任せろ！」

そこからは一方的だった。
全身の闘気を爆発させて必殺技を連発する山下と、的確な判断で動きを読んで弐の太刀を放つクルト。デュナミスは見る見るうちに身体を切り飛ばされて行く。ついに両腕片足を無くして身動きが取れなくなったデュナミスは、山下の大剣を腹に突き刺され壁に縫い付けられた。

「終わりだ、デュナミス。下らねえ事を企んでたみたいだが、もうそれも終わりだ」

「……ふふふ、下らない、か」
楽しそうに笑った。
「下らないのは君たち転生者だろう。自分の世界でまともに生きられず、神にすがって別の世界を食い物にして生きて行く。我々から見たら君たちはただの寄生虫だ」

「……あんだと？」

「知っているのだよ、山下君。……ああ、違うか。確か君の名前は藤岡雪絵と言ったな。イジメられて自殺か、下らない人生を送っていたみたいじゃないか」

「……っ！？」

山下は驚愕する。その名前は、かつて自分の生きた世界で名乗っていた名前だった。

「教師にもレイプされたようじゃないか。男だったら、こんな目に遭わずにすんだと思っていたんだろう？　だから強さを求めた。結局それも逃避、逃げるだけの人生なのだがな」

「……だまれ」

「男らしく振る舞って格好良く生きて。それで救われた気になっているとしたら幸せな事だな。貴様のような負け犬の遊び場にされるこの世界が哀れでならない。そんな世界を救おうとしている私を下らないと言うのか」

「だまれぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

ザシュッ！

山下の大剣が引き抜かれる。そしてそのまま、デュナミスの首を真横に斬り飛ばした。首は宙を舞い、大理石調の床の上に落ちる。そしてもう動かないハズの口が、微かに動いて音を発する。

「何っ！？」「避けろぉ！」

いち早く異変に気づいたクルトが山下を突き飛ばす。先ほどメテオレインで押し潰した分身の黒い泥が、まるで生きているように動き出した。その一つが山下を襲おうとした所を、クルトが庇ったのだ。クルトは素早く刀でそれをはじくと、臨戦態勢に入る。しかし……

目の前の光景に唖然とする。

そこには、巨大な黒い塊があった。先ほど斬り飛ばされた首を抱えた、泥の塊。それが徐々に収縮して行き、人の形へとその姿を変える。そこに現れたのは、銀の長髪を靡かせた一人の剣士だった。

「これが藤岡雪絵の記憶にあった最凶のイメージだ。思い出したかね？……クラウド」

「セフィロス！？　何故お前が……！」

クックック、とデュナミスだった男は笑う。

「転生者の魂を研究するうちに、どうしても試してみたくなったの

だよ。この世界の人間の魂も、改造して強化出来ないものか、と」

「まさか、お前……」

「ああ。私は自身の魂を作り替えた。そして増殖に増殖を重ね、今やこの世界に数千のコピーを作り上げた。今ここに居るのはその一部さ。そして私は、対山下・K・ストライフの為に作られた……セフィロスコピーだ」

あまりの衝撃に、固まってしまう山下とクルト。セフィロスコピーの浮かべる、その狂気に満ちた笑みに完全に圧倒されていた。

「さあ……行くぞクラウド」

そう口にして、剣士は一振りの刀を構える。上段に構えられたその異様に長い刀は、真っ直ぐに山下へと向けられていた。

「フェイトが殺された?」

棺桶の間で、ボブカット・レイは眉をひそめる。『死』という概念から一番外れた存在であるフェイトが死ぬ、というのは考えられなかった。救出した栞を始めとした何人かの少女たちから受けた説明だったが、俄には信じ難い。

「本当なんです。フェイト様は魔力の供給が成されないと直ぐに動けなくなるんです」
「それなのに、デュナミス様が供給を止めちまったんだ！」
「敵の手に落ちたフェイト様はもはや用済みと判断したようです。そして、それに抗議した私たちも……」
答えたのは栞を始めとしたフェイトの取り巻き。獣人や竜人の少女たちだった。
「なるほど。で、デュナミスって奴は自分の分身が沢山いるから人手不足にはならないと。君たちはリストラされちゃったんだね」
「フン、フェイト様を見捨てる時点でこっちから願い下げだ！」
猫耳の少女が憤る。横で、竜人の少女も頷いていた。
「OK、事情は分かった。けどもう一つだけ質問だ。あそこに並んでる、馬鹿でかい水槽みたいなのは何だ？　殆ど空っぽだけど、幾つか中に石みたいなのが入ってるけど……」
レイの言葉に、少女たちの顔に緊張が走る。それは外部に漏らしてはいけないトップシークレット。しかしもう、守備義務は存在しないだろうと、少女たちは判断した。その中の、ツインテールの少女が口を開いた。
「……転生者たちの、遺体です」

「……は？」

レイは聞き返す。まさか、そんな。信じられなかった。

「神が回収していた、転生者の遺体です。そこに封じられた魂を複製して、私兵を作るというのがデュナミス様の当初の目的でした」

「それが全然上手く行かなくて、ヤケになって自分を改造したんだ。で、アメーバみたいに増えてった。実験に使ってた遺体はもういらないからって、麻帆良の地下にいる協力者に殆どあげちゃったってさ」

転生者の遺体。

それをコピーして私兵を作る。

あまりにもおぞましい計画に、鳥肌が立った。そして、同時に冷や汗が流れる。自分は……自分の遺体は、どうなっているんだろう。

「俺の遺体はどうなってる？　三宅祐一って名前なんだが、ここで回収されてなかったか？」

その質問に、首を捻る少女たち。

「回収された遺体は全部で十三でした。その中に、三宅という名前はありませんでしたよ」

竜人の少女の言葉に、ホッとするレイ。とりあえず、こんな所に放っておくのはマズいと水槽に近づく。どうやら魔法か何かで石化しているらしく、水槽の中に浮かんだ少女はまるで出来の良い彫刻のようだった。水槽のプレートには、その娘の名前らしきものが刻

まれている。

「……藤岡雪絵ちゃんか。可哀想に、ちゃんと安らかに眠れるようにしてあげるからな」

水槽から取り出した石像を大切に抱きかかえて、レイはそう呟いた。

第八十五話　ヒーロー

藤岡雪絵。名前だけは覚えていた。しかし、その身に何が起きたのかは、山下は覚えていない……いや、記憶を封印していたのだ。固く封印して、二度と思い出さないようにしていた。しかし先ほどのデュナミスの言葉で完全に記憶を取り戻してしまった山下。それまでの自分の人格が、かつて憧れていたヒーローやこの世界で出会った人間たちの模倣で成り立っている事に気づいた。

クラウドは、テレビゲームのキャラクター。乱暴な口調や態度は、小さい頃に会った不良たちの影響。男らしさなんて具体的に知らなかったから、とりあえず目についた人を真似した。奇声を上げて滅茶苦茶な戦い方をするのは闘技場のスター、ボブカット・レイの真似。圧倒的な強さに憧れた。そんな借り物のイメージ、継ぎ接ぎだらけの自分に山下は情けなくなっていた。神から与えられた魔眼を使えなかったのだって、自分自身が被害者だったから。別に理性が強かったわけではないのだ。

下らない。確かに、自分は下らない。簡単に自殺して親を悲しませ、その世界から逃げ出した。そして今こうして余所の世界で生きている。寄生虫と言われても仕方がないのではないか。

キィンッ！

「危ない！」

呆けている山下を突き飛ばし、クルトがセフィロスの刀を受ける。尋常ではない力で、クルトははじき飛ばされた。

「ぐあっ！」

「お、おい！」
ハッと我に返る山下。そこに、セフィロスが声をかける。
「余所見とは余裕だなクラウド。さあ、構えるんだ。私を葬った力をもう一度見せてみろ」
「お、俺は……クラウドなんかじゃない！」
ギィンッ！
セフィロスの刀を、大剣でなぎ払う。セフィロスは口元を歪ませて後方に跳んだ。
「自分すらまともに分からない者が私に勝てると思うのか？　脆弱な自我では魔晄に飲み込まれてしまうぞ」
「うるせえっ、そんなもんはこの世界には無い！」
必死に大剣を振り回す山下。しかし簡単に避けられてしまう。隙だらけの状態をセフィロスが狙わないワケは無く、その長い刀を一気に山下の腹に突き立て……
『斬魔剣弐の太刀！！』
ガアァァンッ！
クルトに再度阻まれる。
「クルト・ゲーデル。君はつくづく私の邪魔をしたいようだな。世界を効率良く救うには私に協力しなければならないと、理解していたのでは無かったのかね？」

「貴様は危険すぎる……やはりあの日、殺しておくべきだった！」
苦味走った表情で睨みつけるクルト。過去に戻れるならば、甘言に惑わされず己の信念を貫くべきだったと後悔していた。しかし、時計の針は戻らない。進むしかないならば、目の前の障害は取り除くしかない。
「君！　何があったかは知りませんが、今は自分の身を守る事だけ考えなさい！　決して足手まといにはならないでくださいよ！」

クルトはそう叫ぶと、自ら接近戦を挑みセフィロスへとダッシュする。刀を振り抜いた時、無数の剣圧がセフィロスを襲った。

『百花繚乱！！』

ガガガガガガガガッ！

それはまるでマシンガンのようにセフィロスへと放たれる極めて重く速い剣撃。それを涼しい顔で捌く銀色の剣士。辺りに散る火花すら凍りつかせるその冷徹な瞳は、クルトの動きを完全に見切っていた。クルトが大振りになった瞬間を逃さず、がら空きになった腹部に強烈な蹴りを放つ。

ドガッ！

「がふっ！？」

吹っ飛ぶクルト。壁に叩きつけられて崩れ落ちる。カラン、と床に刀が転がった。

「他愛も無い……。ただのイメージにすら勝てない、か。神鳴流と

やらも私の敵ではないようだ」
　フン、とつまらなさそうに息をつく。そして、固まって震える山下に歩み寄って行く。
「さあクラウド、見せてくれ」
「ぅ…ああ……」
「あの焼け付くような魂の炎を。この身を切り裂いた刃のような闘気を」
「く、来るな…来るな！」
「大切ではないものなんか無いと、言い放った心の強さを……それを奪う喜びを」
　ニヤリと笑った。
「私に、教えてくれないか」
　ザシュッ！
「くあぁぁぁぁっ！！」
　セフィロスの長い刀が、肩を貫く。素早くそれを引き抜くと、山下は必死に後方へと飛び退いた。
「クソ、来るなぁぁぁぁっ！」
　ブウゥンッ！

振り抜いた大剣はまたも空を切る。そこにセフィロスが畳み掛けるように攻撃を仕掛けた。

キィンッ　キィンッ　キィィンッ！

「ち、ちくしょう！」

完全に圧されている山下。ここまで実力差があったのかと驚いていた。一撃一撃が異様に重く、気を抜くと身体ごと吹っ飛ばされそうだった。

「どうした、クラウド。私をガッカリさせないでくれ」

「ぐ、ぐおおぉぁぉ！」

無我夢中で剣を振るう山下。もはやいつもの冷静さや体捌きを完全に忘れていた。セフィロスはしばらくそれをいなし続けていたが、つまらなさそうにため息をついて呟いた。

「やはりお前は人形だ。この上なく出来の悪い、な」

セフィロスが必殺の一撃を放つ。体勢を崩した山下はなすすべなくそれを受けるしかない。しかし、何故かセフィロスは途中で動きを止めた。

グサッ……

「……何…？」

見ると、胸から真紅の槍が突き出している。赤い血が、胸元から噴き出した。

ブシュウゥゥゥゥ……

「グッ……これは、これは一体……」

「俺の槍だよ、色男」

声はフロアの入り口から聞こえて来た。振り向く山下とセフィロス、そこに現れた人物たちを見て驚愕の表情を見せる。

「レ……レイ！」

「調、栞、焔、暦、環！！　お前たち、裏切ったのか！」

そこには、ボブカット・レイと五人の少女たちが立っていた。そして、それだけではない。その後ろには、背の少し高い女性と中学生くらいの少女が立っていた。

「お前たち、封印を解いたな！　オリジナルを目覚めさせた所で何にもならないだろう！　そんな事に貴重な神力を……」

セフィロスが忌々しそうに言う。その傍らで、山下は呆然と少女を見つめていた。

自分だ。自分がいる。何故、こんな所に？　何故生きているんだ？

「全部聞いたぜ、デュナミスさんよ。アンタ随分舐めた事してくれてたみてえじゃねえか」

ドスの利いた声で言うのはレイだ。その恐ろしいまでに殺気立った声は、もはや少女の声ではない。今にも襲いかからんとする獣の唸り声に近い。

「K、どいてな。今から俺が本気で戦うから、お前は後ろでこの子たちを守れ」

レイの言葉に、山下は少し震えながら頷く。倒れて気を失っているクルトを拾い上げると、素早く少女たちの元へと走って行った。それを、セフィロスが攻撃する事は無い。今や驚異はレイ一人と判断して、向かい合った。

「心臓を狙ったらしいが残念だったな。私には心臓など無いのだよ」

「知ってるよアメーバ野郎。下等生物は黙ってろ」

レイが呼び戻すと、赤い槍はセフィロスの胸元から一瞬でレイの元に戻る。そして霞のように消えたかと思うと、次に現れたのは奇妙な形をした剣。乖離剣エアだった。

「行くぜ、色男。人の魂を弄んだ報いを受けるがいい」

「フン、貴様こそ死者は死者らしく大人しく土塊に還るんだな」

二人が言葉を交わす。そして次の瞬間、フロアに凄まじい衝撃と共に火花が散った。

目の前の光景に圧倒される。山下は、初めてレイの本気を見て震えが止まらなかった。セフィロスと真っ正面からぶつかり合って、押される所か押している。円錐形の奇妙な形をした剣は刃こぼれ一つしない。ただ強烈に硬いらしく、セフィロスの刀をはじく音はおよそ金属の物とは思えなかった。

なんだ、俺って全然強くなかったのか。肩を並べるくらい強くなったと思ってたのに勘違いだったのか……と、山下は落胆していた。そんな横顔を、ただ見つめる少女。恐る恐る声をかける。

「あの……私、だよね」

「ん？　ああ、そうみたいだな」

そう答えると、少女はパッと顔を輝かせる。

「やっぱり！　私、夢でアナタをずっと見てたよ！」

「夢？」

「うん。私、ずっと石になって眠り続けてたから。夢の中で、アナタをずっと応援してたの。一度でいいからお話ししてみたかったんだ」

一体どうなってやがる、と山下は混乱する。それに答えたのは、調（しらべ）と呼ばれた少女だった。

「転生者のうち、自殺を選んだ人間は一際強い情念や怨念を抱いています。神はその力を利用する為に魂を石化させて保管していました。アナタの魂も石化され、表層の部分だけを切り取り転生させた

のです」

「な、なんだそりゃ。ハムじゃねえんだから、切り取りとかアリかよ」

滅茶苦茶だ。しかし、言われてみれば納得行く面もあった。いつも何かが欠けていたような感覚を抱いていた。物事に対する感情の動き方も、人とどこか違うように感じていた。漠然とした不安を胸に、どこに居ても何をしていても夢を見ているように感じていた。それは……そもそも魂が欠落していたからだったのだ。

「格好悪かっただろ、俺。悪いな、俺はヒーローにはなれなかった。クラウドみたいにはなれなかったよ」

悲しそうに、寂しそうに微笑みながら山下は少女に謝る。しかし、少女は首を横に振った。そして、うなだれる山下の頬に両手を添えて見つめる。

「アナタは格好良かったよ。沢山強い敵と戦って、負ける事もあったけどいつも最後には勝っていた。諦めない強さ、それは私が一番憧れたものだもの」

その言葉に、山下は涙が溢れるのを止められなかった。自分自身の言葉だから、その意味がよく分かるのだ。あの日世界に絶望していた自分が、夢に描いた強い自分の姿。死の間際、生まれ変わったらなってみたいと思った姿に、今の自分は成れている、と目の前の少女は言っている。

「俺は、そんなに強くないよ……」

「ううん、アナタは強い。それは、夢の中でアナタをずっと応援し

てた私が保証する。だから……自信を持って！　幾ら今、挫けそうになってもアナタはきっと乗り越えられるわ。だってアナタは私のヒーローなんだもの！」

何かが、胸の中に宿る。

それは熱く、全身を駆け巡った。そして同時に思い出すのだ。奴隷に落とされても、強敵に叩きのめされても諦めなかった心の強さ。それは、この生では後悔しないで生きたいという強い願いがあったからだ。格好良く生きたいという願いは、つまり諦めたり後悔したりしない生き方をしたいという事。それが自分にとってのヒーローの姿でもあった。山下は、今やっとその事に気づいたのだ。

そしてそれと同時に、少女と自分の身体が光っているのに山下は気づく。

「同調、始まりました！」

調が叫ぶ。他の少女たちも驚いて目を見張る。

「やはり封印が解けたら一つに戻るんですか！？」

「いや、これは……吸収！？」

形を無くして行くのは少女……藤岡雪絵の方だ。今や単なる表層部分ではなくなっている山下。魂の強さでは遥かに強くなっていた山下の方が、本来の姿である雪絵を吸収しようとしていた。

「私……私も、ヒーローになってみたい。アナタの中で、アナタと一緒に……」

「ああ、お前は俺だからな。これからは夢なんて見てないで、一緒に暴れまわろうぜ」

「うん……うん、ありがとう！　私も、この世界で生きてみたかった！」

光が二人を包む。それは辺りを強烈に照らし、世界を白一色に変える。慌てる少女たちの後ろで、もう一人の転生者はただ静かにその光景を見つめていた。良かった、と。これで本当に、彼女は転生を果たす事が出来たのだ。

光の中から、金色の剣士が現れる。その姿は先ほどまでのオドオドした青年の姿ではなかった。その蒼い瞳に宿る力強い光は、間違いなくヒーローのもの。一人の少女が憧れた最強の剣士の姿がそこにあった。

「おめでとう、雪絵さん。いえ、もう山下君ね」

「美沙子さん……」

山下は、声をかけて来た女性に振り向く。自分と同じように、モルモットにされてしまった女性。石になっても、隣の水槽からずっと見守ってくれていた。思念を飛ばして、心が折れないように応援してくれた人。今なら、それが誰なのかも分かる。

「また、いつか一緒に麻帆良を回ろう。今度は俺が、クレープを奢るよ」

「ふふふ。その時はまた、苺のクレープがいいな」

優しい笑顔で微笑み返す。３０代始めといった年齢の、長い黒髪と柔和そうな表情が特徴的な女性……まるで外見が違うが、彼女こ

そ山下が麻帆良で一緒にデートを楽しんだ女性。

アリア・スプリングフィールドの前世、本条美沙子であった。

「じゃあ、ちょっくら行ってくるわ。ありゃ俺の臆病風が生み出した負の遺産だから責任持って始末してくるよ。テメェのケツはテメェで拭けなきゃ、格好悪いからな」

山下は大剣を手に取ると、勢い良くブンブンと振り回す。漲る闘気は、かつてヘルマンと対峙した時の比ではない。今なら地球を破壊しようとする隕石すらデコピンで粉砕出来そうだ。

「行ってらっしゃい。本当のアナタを、見せてちょうだい」

「おう！　しっかり目に焼き付けておけよ！」

全身から、魔力の高ぶりがまるで竜巻のような流れを作る。フロアで斬り合う二人も、今は手を止めて山下の姿を見ていた。余りにも、規格外。余りにも滅茶苦茶なエネルギーの塊。ガラス窓は空震に耐えきれず次々と割れて行く。

そして、窓が全て吹き飛んだ時。フロアには山下の馬鹿デカい雄叫びが響き渡った。

「ィイイヤッホォオオオォウ！！」

第八十六話　ぱんちゅ

その時、一体何が起きたのか。それを理解出来た人間はきっと一人として居なかっただろう。フロアに雄叫びが響き渡り、山下が何やら目映い光を放つと同時に、それまでレイとセフィロスが戦っていたそばの壁が一瞬で消えていた。反射的に避けたレイと違い、セフィロスは呆然と立っていたままだった。つまり山下の放った何かの直撃を受けてしまっていた。

セフィロスは今、宙を舞っていた。破壊された壁と共に。

「け、K!?　一体今、何をしたんだ!?」

「説明は面倒くさいからパスだ。これからは俺が戦う。レイは美沙子さんたちを頼んだ」

それだけ言うと、山下はフロアの外へと飛び出す。そこは地上百メートル程の高さがあったが、今の山下にとっては何でもない高さだった。落下するセフィロスに向かって、山下は叫ぶ。

「どうだ、それが俺の受けたダメージだ!」

「グッ……貴様、何をした!?」

山下が行ったのはマテリアでの攻撃だ。「てきのわざ」のマテリアにある特殊攻撃、「???」。これは受けたダメージをそのまま返す技であり、どんな技なのかは放った本人にも分からない。

「記憶が全部戻って来たからな！　使える技は全て思い出したし、

セフィロスの倒し方も完全に思い出した！　今の俺にとってはお前なんて雑魚中の雑魚だぜ！」

「クッ……、いい気になるなよ！」

セフィロスの背中に、黒い片翼が現れる。空中で止まると、追いかけてくる山下を迎え撃った。長い刀を振り抜いて、真空波を飛ばす。しかしそれが山下に届く事は無かった。

ブゥゥンッ……

見えない壁のような物に遮られる。

「何っ！？」

「ただでさえ本領発揮した俺がマイティガードだ、届くわけねえだろ？」

そう言いながら、山下はまたもマテリアを発動させる。ニヤリと笑ってつぶやいた。

「よくも俺を馬鹿にしてくれたな。お前にゃとんでもなくマヌケな最期を迎えてもらうぜっ！！」

セフィロスが目を見開く。それは山下の姿に驚いたからではない。あまりにもその場に合わない存在が現れた事に、愕然としていたのだ。分からない、まるで意味が分からない！

「セフィロスさんよ。逃げてばかりの俺の人生の重み、たっぷり味わえ」

「う、うわあぁぁぁぁぁぁっ！？」

空から、デブチョコボが落ちて来た。

ドスーーーーーーン……

……。

それは「チョコボックル」。逃げた回数が増えればそれだけ威力を増す、防御力無視の無属性魔法だ。藤岡雪絵は、この技を使って凶悪なボスにトドメを刺すのが好きだった。なんだか、和むのだ。

しかしやられた方は堪らない。

デブチョコボが消える。地面には、ギャグ漫画のようにめり込んだセフィロス。何とか身体を起こそうとして、バランスを崩す。

「ガッ……身体、が、崩れル……！？」

余りのダメージに、身体が制御不能になっていたのだ。セフィロスの顔は仮面に戻り、身体はどんどん肥大してゆく。そこに、急降

下してきた山下が技を放った。

『真・超究武新羅斬』

「ぅおらあああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ザシュッザッ！！！！

「ガアァァァァァッ！？」

肥大したデュナミスは、その身体をなすすべなく切り刻まれてゆく。もはやそれは視認出来る速さでは無い。人間ミキサーと化した山下の攻撃に、四肢は千切れ飛んで行った。そして、技の発動時間が終わり山下が後方にジャンプして距離を取ると、デュナミスはもはや人の形をしていなかった。ただ、それでも生きているらしく、仮面の口部分が動いている。

「オ…オォ……ァ、ァアア……」

スライムのように、崩れた身体が動いている。その黒いタールのような身体が、にわかに膨らみだした。なんだか、熱を帯びて来ている。まさか……自爆か？　山下はもう一度闘気を練って爆発させようとした。その時……

「チッ、まぁだここにも悪魔がいやがった。どけ、山下ぁっ！！」

反射的に飛び退いた。ヤバい、この気配は本当にヤバい！　多分あの馬鹿はどかなかったら俺まで一緒に吹き飛ばす！　空中で身をひるがえした山下の見たものは、巨大な筋肉ダルマが今まさに凄まじいエネルギー波を放たんとする瞬間だった。

「エターナル・レイ・フィーバー！（今日も白かった）」

ズオオォォォォォォォォッ！

「……っ！？」

巨大な人型……では無く、巨大なパンティが飛んでゆく。パンティはデュナミスを包み込むとそのまま空へと舞い上がった。そして、一定の高さまで昇るて光を放つ。

ドオォォォォンッ！

それはデュナミスの自爆なのか、元々そういう技だったのか。空で大爆発を起こした巨大パンティは、無数の小さなパンティとなって風に乗って彼方へと飛んで行った。それはどことなく、渡り鳥の飛ぶ姿にも似ていた。

「……なんか、深夜アニメでこんなの見た事ある」

その奇妙な光景に脱力しながら、山下はそうつぶやいていた。

そして、宮殿のフロアでは。

「レイはあんなパンツ履いてるのかにゃ？」

「……今日は、小さなリボン付きだ。これでも多少は頑張ってるんだ、馬鹿にするな」

獣人少女の問いかけに、レイが顔を真っ赤にして答えていた。

その頃、ウェールズの片田舎の道を、一台のタクシーが走っていた。運転する老人は助手席に座る男の顔をチラリと見る。バンダナを巻いた二十歳くらいの男。その人の良さそうな顔に、先ほどまでの鬼神の如き威圧感は全く無い。

「しっかし、長閑やな～。じいさん、この辺りに可愛いお姉ちゃんの沢山居るお店とかって無いんスかね」

「はっはっは！　これだけ綺麗所を揃えておいて、罪な男だな」

ミラーを見る。後部座席には短めの黒髪の女性と金髪の柔和な表

情の女性、そして最初の客であった少女がいる。皆、とても美しかった。

「そうよ、ヨコシマ。放っておいたってアナタには女性の知り合いが増え続けるんだから、自分から増やそうとしないの！」

「わ、分かってる！　ただ見たり聞いたり触ったりしたいだけで……」

「触る必要ないでしょっ！」

後ろから首を絞められて、横島は「ぐえっ」と言う。しかし老人はその女性の腕に力が入ってないのを見て分かった。ああ、これはただのじゃれあいだ。和やかな雰囲気に、老人はホッとしていた。

後部座席では、同じように横島とルシオラのやり取りを見て落ち着きを取り戻していたアリアがネカネに話しかけていた。

「ネカネさん、本当にいいの？　あのまま村を出たら、もう戻れないんじゃ……」

「うん、いいの。元々あのお家で一人暮らしだったし、あんな雰囲気なら前みたいに村の人たちと仲良く接するなんて無理だもの。あの人たちにとっても、私の存在は苦痛でしょうから、ね」

そう言ってから、ネカネはアリアが泣きそうな顔をしているのに気づく。ああ、いけない。ネカネは直ぐに元気な顔をして見せた。

「でも今はアリアが居るわ。横島さんやルシオラさんも居るし、それに村の外に出たのって久しぶりだからワクワクしてるの。辛い事なんて全然無いわ。だから、そんな悲しそうな顔しないでね」

「ネカネ、さん……」
アリアは、キュッとネカネに抱きつく。懐かしい匂い、優しい温もり。そっと抱き寄せられると、こらえきれなかった涙がネカネの胸元を濡らした。ネカネは優しい、その優しさが変わらないのは嬉しいけれど、本当に辛いのはネカネ自身のハズなのだ。その優しさを自分に向けてもいいハズなのに……アリアは、そんな変わらないネカネが悲しくも思えていた。何とかネカネに喜んでもらいたい。アリアはそう思っていた。

「……運転手さん、今メルディアナに向かってるんですよね」

「ん？……ああ、さっき本社に連絡したら、そっちに避難するように言われたからね。メルディアナの学園長さんも、アリアちゃんの事を心配していたよ」

良かった、麻帆良の学園長の話では、メルディアナに石化された人たちが保管されていると言う。ならば、石化を解いてあげればネカネも喜ぶ。アリアは次に、ルシオラへと振り返った。

「ルシオラさん、私の身体に魔力を通す事は出来ますか？　村を復元した時に、横島さんにやったみたいに」

「うーん、本当は無理なんだけど、アリアちゃんには出来ちゃうみたいね」
ルシオラが複雑な顔をする。
「ヨコシマに魔力を流し込めたのは、私の魂とヨコシマの魂が同質だからなの。これは昔色々あったからなんだけど、本来であれば有り得ない方法なのね。けど、アリアちゃんはアシュ様の力を貰った上にイシュタルとの契約までしてるし、身体自体が魔族化してる。殆ど私たちと同じ存在になっちゃってるから、魔力供給はいくらで

も出来るのよ」

は……？

アリアは固まる。ネカネも同様だ。

「魔族……？　私、魔族になっちゃってるの？」

「ええ。かなり乱暴な方法でなっちゃったみたいね。だって、魔力で身体を変質させてる感じよ。心当たり無いの？」

心当たり。

確かにあった。魔力に馴れる身体を作ると言って、無理やり耐性をつける修行をしていた。イシュタル……石田留美の話では、細胞を作り直すような無茶な方法だったらしい。という事は、その時に魔族化してしまったのだろうか。そう聞くと、ルシオラは頷いた。

「古代、人が神に近づこうとして使った秘術ね。結局ただの下級魔族になっただけだったんだけど、アリアちゃんの場合はサポートしたメンバーが全員魔族だったから中級以上の力を持った魔族になったみたいね。まだ未熟みたいだけど、これからどんどん強くなるわよ」

それを静かに聞いていた横島は、中級魔族という言葉を聞いて目を見開いた。かつて自分が死闘を繰り広げた魔族。ある時は女盗賊、またある時は美人スパイ、恋人だった事もあったかしら？……いや、ないな。とにかく様々な場面で敵対し、そのムチムチな身体、時にはコギャル姿のパンチラでこちらを翻弄してくれた魔族の姿を思い出す！　はぐれ竜神族のメドーサ、あんなムチムチバディにそこの少女が成るというのか！　横島は静かにアリアの方を振り向いた。

「きっと、立派に成長するぞ。期待してる」

「……なんだろう。なんか、とってもイヤな感じがしたわ」

「そうね、私も同感」

アリアとルシオラのジト目を向けられながらも、横島は爽やかな笑顔を崩す事は無かった。鼻血は流していたけれど。

タクシーは走る。横島たちを乗せて。途中何も無い道を延々と走る間、横島とルシオラの漫才のような掛け合いに大笑いしながら、一行は実に和やかにメルディアナへと向かっていた。そして、少し深い霧を抜けた先に現れる大きな街。レンガ造りの建物が建ち並ぶ街を見て、アリアは感慨深げに頷いた。

とうとう帰って来た。

かつてネギと共に勉学に励み、色んな辛い出来事を乗り越えてきた街、メルディアナ。その街の入り口に立つ見張りの人が、タクシーへと近づいて来た。

「モーリス爺さん、大丈夫だったかい。遅かったから、心配してい

たんだ」

「すまんすまん、ちょっと村でトラブルがあっての」

どうやら話はしっかり伝えられているようだ。しかし、見張りの人は少し言いにくそうに言った。

「実は確認の使い魔や警備員を派遣したんだけどなぁ。村の連中、悪魔なんか来なかったの一点張りだったぞ」

「なぬ？」

「いや、モーリス爺さんの報告が正しいのは確認とれてんだよ。けどな、どんだけ証拠があってもあそこの連中は認めなかったみたいだ。無かった事にしたいみたいだな」

後部座席で、ネカネが崩れた。「そんな……」と呟いて背もたれに倒れる。それをアリアが支えた。

「ネカネさん、大丈夫だから。横島さんが言ってたみたいに、時間が解決してくれるわ。皆を石から戻したら、スタンさんに叱ってもらいましょ」

アリアに励まされて、なんとかネカネも立ち直る。それを見ていたモーリスと見張りも、何ともやるせない顔をした。

「気の毒だと思うが、今は戻れないだろうな。モーリス爺さん、このチケットを皆に渡しといてくれ。美味いもんでも食って、元気を付けてもらわないとな」

「ふむ。……一枚多いぞ？」

「そりゃ、爺さんの分さ」
そう言ってから、見張りは中にいるアリアたちに声をかけた。
「ようこそメルディアナへ。この街は君たちを歓迎するよ」

ニカッと笑って敬礼する見張り。それまで強張っていたアリアやネカネも、表情を緩める。横島とルシオラは、飛び込みでやってきた自分たちをも受け入れるこの街に、少し驚いていた。旧世界の魔法使いの街は、警戒態勢が強いと聞いていたからだ。そんな二人に、モーリスは笑いかける。

「仲間の村を救った恩人を、受け入れない馬鹿はこの街には居ないよ。じゃあ、行こうか。先ずはメルディアナ一美味い物を食わせる店にでも案内しよう。学園長に顔見せする前に、しっかり食って元気をつけないとなぁ」

モーリスはそう言って、アクセルを踏む。タクシーは綺麗なレンガの道を、ゆっくりと走って行った。

第八十七話　切り取られた光景

イギリスに美味い物は無いという。それはあくまで国外の人の感想で、食文化の違いと味覚の差でそう感じるのだと言う人もいる。ただ、訪れる者の大抵が落胆する事から、その言葉はある程度真実を突いているのだろう。イギリスと地続きのウェールズ。基本的な食文化は似ているのだが、このメルディアナでは少し違うようだ。

魔法使いのコミュニティーとなると、その食文化は変わってくる。近隣諸国の魔法使いたちが身を寄せているので多様な文化が入り混じる上、魔法世界とのゲートがあるという事もあり、魔法世界の文化もこちらの世界へと入って来た。ウェールズの片田舎にありながら、このメルディアナは独自な文化的融合、進化を遂げていたのだ。それは特に食において顕著だったらしく……。

「こら美味い！　こら美味いぞ！？」

「ヨコシマ、みっともないから落ち着きなさい！」

今一人の日本人男性がその虜となっていた。もっとも、極貧時代にお湯で薄めたカップ麺で凌いで来た人間に味のこだわりなぞ無いだろうが。

現在、一行はメルディアナで一番美味しいと言われている古びた佇まいのレストランで食事をとっていた。時刻は丁度夕食時、辺りは暗くなってきている。店内はどちらかと言うと高齢の品のある客が多数派であり、横島はかなり浮いていた。同席するルシオラは勿論、アリアも恥ずかしくて堪らない。

前菜の地鶏のテリーヌから容赦なくガッツき、牛肉の赤ワイン煮

を一口で頬張り、そのスープまで飲み干してしまう男は本来ならば店から追い出されてもおかしくはない。そうならない理由は、横島たちが悪魔の大群を退けた話が既にメルディアナに広まっているからだろう。周囲の客たちは、微笑ましいというような表情で横島たちを見つめていた。

「いやー、久しぶりに美味いもん食べるなー。最近パンとハムとチーズしか口にしてなかったからなー」

やっと少し落ち着いたのか、横島はそんな事を言う。その口元をナプキンで拭いてあげながら、ルシオラも同意するように言った。

「私はいざとなれば砂糖水だけで生きて行けるけど、人間は同じ食べ物ばかりだと飽きるから不便よね」

「はっはっは、そいつは気の毒だったな。ここの料理はとびきり上等だから、腹も舌も驚いてる事だろう」

モーリスも笑いながら言う。その隣で、アリアとネカネも静かに食事をしていた。

確かに美味しいし、横島たちのやりとりも楽しい。けれどアリアはそれ以上にネカネの事やこれからの事で頭がいっぱいだった。ネカネは村の事で心が落ち込んでいる。出来れば早く祖父に会って石化した人たちを元に戻す許可を得たい。胸の中の焦燥は中々抑えられなかった。

「今は、ちゃんと食べてね」

そんなアリアの気持ちに気づいたのか、ルシオラが声をかけてくる。

「幾ら私たちがサポートすると言っても、頑張るのはアナタなんだから。ちゃんと食べて体力つけてね」

「そうそう。俺たちが無理やり石化の解除をしてもいいけど、アリアちゃんの目標だったんだろ？　なら、モリモリ食って気合い入れないと」

横島も白身魚のパイ包み焼きを食べながら言った。その言葉に、アリアもハッとする。そうだ、自分の目標だった村人の石化解除が出来るのだ。それも、最高のサポートを得て。ネカネも喜ばせる事が出来るし、ここで気落ちしたり焦ってる場合ではない。

「そうですね。じゃあたくさん食べます！　横島さんのお魚を私に下さい！」

「なんでじゃーっ！　これはワイのもんやーーーっ！」

また大騒ぎになる。それを、ネカネは微笑みながら眺めていた。

賑やかに食事を終えた一行は、レストランを出るといよいよ魔法学校へと向かう。タクシーは人通りの少なくなってきた大通りを走ってゆく。家々の明かりが流れて行くのを、アリアは静かに見つめていた。

そして、学校の門の前に到着する。アリアたちがタクシーを降り

ると、モーリスは別れ際に声をかけた。

「頑張れよ、アリアちゃん。幸運を祈ってるよ」

「ありがとう、お爺さん。明日はきっと街中がお祭り騒ぎになるわ、期待しててね」

可愛らしくウィンクをすると、モーリスも笑う。そして軽く手を振ってから、アクセルを踏んで通りを走り去って行った。

「……さあ、行くわよ。ちょちょいのちょいで、みんなを救っちゃうんだから！」

胸の前でパシンと手のひらに拳を打つと、アリアは気合いを入れる。先頭を意気揚々と歩いて行くアリア。その後ろを横島たちも気を引き締めてついて行った。

魔法学校へは事前に知らせが行っていたらしく、玄関にあたるフロアにやってくると数人の人影が現れた。一人は物語に出てきそうなヒゲのお爺さん。その横にダンディな無精髭とメガネが特徴的な中年男性、そして間に挟まれてツインテールの勝ち気そうな女の子だった。その姿を見て、横島、アリア、ネカネが同時に驚きの声をあげる。

「ジャック！？」
「おじいちゃん！？」
「アーニャ！」

その声に一番早く反応したのは、アーニャと呼ばれた少女だった。アーニャは怒った表情で走り出すと、アリアに掴みかかった。

「こ・の・遅刻魔ーーーっ！　なに悠長にご飯なんて食べて来てんのよ、こっちはずっと待ってたんだからねーーーっ！」

「ふにゃにゃにゃにゃにゃっ！？　ア、アーニャ！？　なんでアナタがここに！」

ガクンガクンと首を揺らされて目を回すアリア。慌ててネカネが止めた。

「アリアが石化を解くって知らせが入ったから、急いで帰って来たのよ！　ジャックさんとおじいちゃんと一緒に待ってたんだからね！」

「おじいちゃん……」

その声に、メルディアナ魔法学校の学園長が答える。長いヒゲを撫でながら、にこやかに。

「よく無事に戻って来たな。見違えたぞ、アリアよ」

「……おじいちゃん！！」

アリアは感極まって抱きついた。この学校に通っていた頃、周りが敵だらけだった時に唯一助けてくれた人。その姿を見た時、思わず張り詰めていたものが解けてしまったのだ。

「フン、いつもは大人ぶってる癖にこういう時はガキなんだから」

「仕方ないわ、アリアも大変だったから」

アーニャとネカネが言葉を交わす。その後ろで、横島はジャックに話かけていた。ジトッとした目で睨みつけてくる横島を、ジャックは面倒くさそうにあしらっている。

「どこに消えたと思ったらロリっ子と二人旅か、警察に捕まんぞ？」

「お前こそユグドラシルはどうした。見つからずに旧世界に探しに来たか？」

そんな二人をなだめるのはルシオラだ。この二人の会話は、いつもこんな調子らしい。

「ヨコシマ落ち着いて！　ねえジャックさん、ここに居るのは、以前言ってたアナタの用事と関係あるのかしら。私たちと会ったのは、偶然？」

「ああ。成り行きでそこの嬢ちゃんと一緒になったんだけどな。故郷の村人が石化から治ると聞いて急遽帰って来たのさ。俺は護衛だ」

そう言ってから、ジャックはくわえていたタバコを口から離して煙を吐き出した。

「リッパー。お前はどうなんだ。ユグドラシルにはたどり着けたのか」

「ああ。中のねーちゃん助け出してから、空間転移でこっちに来た。アリアちゃんがピンチだったからな」

これには流石に唖然とするジャック。タバコを携帯灰皿で揉み消すと、深くため息をついた。

「一々予想の斜め上を行く奴だな。なら、アリアがその女の子供だって事は知ってるか？」

「は？」

横島はキョトンとする。そして、苦笑いして言った。

「そりゃ嘘だ。あのねーちゃん、処女……

バキッ！　　はぶっ！？」

「ヨ・コ・シ・マ～～～！」

ルシオラの鉄拳が飛んだ。慌てて謝る横島、デリカシーの無い発言するなと怒るルシオラ。しかしジャックが横島の発言に驚く事は無かった。

二人が騒いでいる中、学園長に抱きついて泣いているアリアを、ジャックはただ黙って見つめている。その眼鏡の奥の瞳には、憐憫の情に近い感情がたたえられていた。

アリアが落ち着いてから、早速学園長はアリアたちを地下室へと案内をする。長い螺旋階段を下りながら、学園長が口を開いた。

「あの戦いの後、石化された者たちはこの先の部屋に安置されておる。あの時から、その姿は変わっておらん。恐怖に顔を歪めた者、泣き出しておる者……それを見るのは辛いかもしれんが、気を確かに持つのだぞ」

「私なんか、たまに来て掃除させてもらってるから慣れてるけどね。泣き虫アリアには辛いんじゃないかしら」

ワザと挑発的な言葉をかけるアーニャ。でもそれを言葉通り受け取るほどアリアも子供ではない。これは、分かりにくいけど応援だ。それに度々帰ってきて掃除をしていると言った。それはきっと、掃除だけが目的ではない。アーニャはアーニャで、あの過去と向き合い戦ってきたのだ。

「大丈夫よ。それを笑顔に変える為に、私は帰って来たんだもの」

アリアはしっかりした声で言い放った。それを頼もしそうに見つめるネカネたち。本当に、アリアは強くなっていた。病的なまでにネギを過保護に扱い、逆にネギに依存して周りが見えていなかった、かつてのアリアはもう居ない。それが何より、嬉しかった。

階段を下りきって、巨大な扉の前に立つ。学園長が呪文を唱えると、扉はギギギと音を立てて開いていった。

そして。

そこに広がる光景に息を飲む。暗闇に浮かび上がる人影。フロアはまるであの襲撃事件の光景を切り取ったかのようだった。震える身体を両手で抱きしめるようにして、アリアは動揺を抑える。

「ルシオラさん、あの時横島さんに流した量の魔力って今でも出せますか？」

「ええ。あれで１００分の１も出してないから大丈夫よ」

もはや桁が違う。アリアは苦笑いするも、目を輝かせた。ならば、解除には何も問題はない。

「じゃあ、この場にいるのはルシオラさんとネカネさんと、アーニャだけでいいわ。おじいちゃんたち男性陣は出てって下さい」

「え、なんで？」

横島が聞くと、ルシオラが叩いた。

「バカね、私が魔力を流すとしたら背中でしょ。ヨコシマほど繋がりが無い人には、服を脱いでもらって直接触れないといけないのよ。これ以上言わせると気味の悪い幻覚見続けてもらうわよ？」

「わ、悪かった！」

慌てて部屋を出て行く横島。よく分からないが、ルシオラの言う幻覚とは悪魔の大群をなぎ払った男すら怯えさせるものらしい。ジャックと学園長も、大人しく横島の後に続いた。

部屋の外に出る男性陣。螺旋階段に腰をかけると、ジャックは学園長に話かけた。

「なあ、少し前の話の続きだが。あのバカはゲートを使ってはいないんだな？」

「うむ。管理局にも問い合わせたが、そもそも日本を出た記録も無いらしい。こちらでも探してはみるが、やはり日本で探した方がいいじゃろうな」

「チッ……面倒な野郎だ」

苦々しく舌打ちするジャック。それを不思議そうな顔で横島が見つめる。

「なあ、なんの話だよ。困ってんのか？」

「ん？　ああ、こっちの話だ。お前には関係ない。それより、お前がさっき言っていた事の方が気になるな。アリアがあの女の子供じゃないと、何故思った？」

そのセリフに反応したのは横島だけではない。学園長も、目を見開いていた。

「いや、そりゃそうだろ。最後の戦いの後に木の中に入ったなら、子供なんて作れない。まさか木の股から生まれたワケじゃあるまいし、第一あのねーちゃんの匂いは確実に処女だ」

ニオイで分かるのか、この男は。ジャックは呆れる。そんな理由でスプリングフィールド兄弟の秘密にたどり着く人間なんてまず居ないだろう。気が気でないのは学園長だ。今まで秘密にしてきた事を、フラッとやってきた男が明かしてしまう。

「じゃあ、アリアはあの女の娘ではない。なら何だと思う？」

「いや、娘なんだだろ？　実の子供じゃなくてもさ」

横島はキッパリ言った。こちらに転移する前に、巨大モニターにアリアが映った時のアリカの顔を思い出す。確かにあの顔は、我が子を想う母の顔だった。

「出生の秘密なんか興味無えよ。だけどさ、母親に会えないのは可哀想だったろうなって思う。あ、そうだ！　これ終わったら魔法世界に連れて行って、母親に会わせてやろうか。せっかく復活させたんだし」

ジャックは笑った。

言ってる事は、至極当たり前の事だ。母親と離れ離れなら、一緒にさせてやろう。しかしそれが今まで極めて困難だったという事を、この男はまるで知らない。知らないうちに、可能にしてしまったのだ。この男の無茶苦茶さには、かつて共に戦った英雄と同じものを感じていた。それは、話を聞いていた学園長も同じだったのかもしれない。「出生の秘密なんかには興味無い、ただ母親に会わせてやりたい」と言った横島の言葉に、心を揺さぶられた。

「学園長、コイツなら本当に実現させちまうぜ。事情、話してもい

いんじゃねえか」

「うむ……何も知らぬまま、関わり続けるのも問題だろう。恐らく彼ならアリアの強い味方になってくれるじゃろうし」

なんの話だ、と訝しげな表情をする横島。学園長はそんな横島を見据えてから、静かに口を開いた。

「お主が、アリアを大切にしてくれてくれると願って……いや信じて、今から彼女の秘密を話そうと思う。いや、これは懺悔じゃな。ワシら身勝手な魔法使いたちの懺悔を、聞いてもらいたい」

そして語られる、スプリングフィールド兄弟の秘密。それを聞く横島の表情は、時に怒り、時に悲しみ、様々な思いにその色を変える。アリアの石化治癒が終わるまでの間、横島はただ静かに学園長の言葉に耳を傾けていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9346s/

ネギまのたまご

2011年12月2日17時26分発行